ＩＳ//Ｇ．Ｕ．

ＴＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ／／Ｇ．Ｕ．

【Ｎコード】
Ｎ０７８３Ｓ

【作者名】
ＴＥ

【あらすじ】
女性にしか反応しない兵器『インフィニット・ストラトス』だが、突如、男なのにＩＳを起動できることができた織斑一夏。しかし、織斑一夏以外にもＩＳを起動させてしまった男がいた

その男は、ＩＳとは全く関係のない一般人・・・・
しかし、世界最大のオンラインネットゲーム『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』では有名人だった

誰にも予想できない物語が今、始まる

ＩＳと．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．のコラボ作品です。ほとんど、完璧に原作をそって書いています。これは、怒られても仕方ないかな？という覚悟で書かせてもらっています。どうか、よろしくお願いします！！

第1話

春の新学期
高校三年生１８才、高校最後の学校生活に期待を胸に・・・の筈が期待どころか不安と理不尽を背中にズシンとのしかかっている状態だ

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ初めますよー」

おかしい
それは廊下の窓から水平線が見えるからではない

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いします」

おかしい
それは副担が教室に入って行ったときに何もない場所で転ぶのんびりした女だからではない

俺はちらっとクラスのプレートを見る

一年一組

そう、今年三年生になるはずの俺が違う学校に、しかも、一年を最初からやり直すという理不尽に対面していることだ

「えっと・・・こ、これから自己紹介をしてもらいますが、その前に皆さんのもう1人のクラスメートを紹介します。どうぞ、入って下さーい」

俺はドアに手をかけてその格好で止まる
正直、ドアを開けずにそのまま帰りたい

「あ、あれ?三崎くーん、三崎亮くーん!」

ヤバい
あの副担の声からして涙目で俺を呼んでいるのがわかる
逝くしかない（誤字にあらず）
俺は手にかけていたドアを開ける

「あっ、三崎くん!良かった、ちゃんと聞こえてたんですね」

俺が入って来たことで、ほっと安堵している副担

だが、突き刺さるように感じる視線を浴びている俺に副担を気にする余裕はない

「それじゃあ三崎くん。自己紹介お願いしますね」

そんな俺の状態を気にせず（気づいていない）副担はそう言ってくる

「‥三崎亮です‥‥よろしく」

‥‥何だ？
回りの空気がおかしい
それだけじゃなく、あんぐりと口をだらしなく開けている奴もいる

「お、男‥‥？」

「は、はい。あっ！それと三崎亮くんは今年で１８才の年上ですが、気にせず話しかけて下さいね」

おい、副担
それは、あんたが言うことではねえぞ？

「先生」

「あっ、はい！何ですか？」

「外に表示されたクラス分け表や配られたプリントにもその人の名前は書かれてなかったんですけど」

１人の女子が手を上げながら質問する

「それはですね。三崎くんはつい最近、二週間もしない日にＩＳを使えることが発覚し、ここ『ＩＳ学園』に転入が決まったのが約三日前です。だから、既に仕上がっていたそれらを直すことができなかったんです」

なんか知らんが、かなり迷惑をかけたらしい
どうでもいいことだが

「では三崎くん。あそこの空いている席に座って下さい」

副担の言う通り空いている席に向かう
おっ、どうやら窓側の、しかも一番後ろと言う良い席だ

「えっと、では出席番号順で自己紹介をお願いしますね」

席に着いた俺は自己紹介をしている人と逆の方向、窓の方向へと視線を向ける

おかしい
何でこんなことになった？

何で俺が女性しかいない学園『ＩＳ学園』に転入するはめになったのか

俺は二週間前のことを思い出すことにした

「ここが『ＣＣ社』か・・」

三月の春
学生は春休みと言う新学年になる前の短い休みを満喫している
そんな俺、三崎亮も知り合いに会うために『ＣＣ社』に来た

入り口で待ち合わせになっている筈だが、まだ来ていないようだな

「三崎亮君」

不意に呼ばれ、振り向くと、スーツをびしっと着こなした女性がいる

「ども」

「待たせてしまったかしら？」

この女性の名前は『佐伯令子』
ある場所で知り合った人だ

「いいえ、今来たところっすよ」

「そう、早速行きましょうか」

俺は令子さんの後について行くようにＣＣ社に入る
令子さんはここの社員でかなり上の人らしく度々すれ違う社員の人に挨拶されていた

「令子さん、あいつはもう来てんの？」

「ええ、彼もあなたに会えることを楽しみにしているわ」

「まあ、確かにリアルで会うのは久しぶりですが：」

「ふふ♪そうね、あそこでは毎日と言って良いほどあってるわね」

令子さんは笑って言っているが、正直良いものではない
会う度に命令されるからこっちはたまったものじゃない
乗っていたエレベーターから降り、沢山ある部屋の一室まで案内される

「ここよ、さあ入って」

部屋に入ると、そこには高そうなソファーやテーブルなどが置いてある
どうやら客室らしい
そのソファーに俺と同い年くらいの少年がいた

「やあ、亮。久しぶりだな」

「はっ！よく言うよ、拓海」

こいつは『火野拓海』
令子さんみたいにある場所で知り合った
何故、こんな客室で堂々といるのかと言うと、こいつはＣＣ社のお得意様らしく、結構足を運んでいるからしい

「そうだな、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』では先日、話したばっかりだったな」

『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』
それは、ここＣＣ社が作成・開発した世界規模のネットオンラインゲームのことだ
そこで、俺と拓海と令子さんは知り合った

ちなみに拓海は、その『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』のシステム管理者紛いなことをしている
令子さんはその補佐だ
何で、俺みたいな一般プレイヤーがこんな2人と知り合いなのかは置いておくとして

「それで？俺をここに呼んだ理由は何なんだ？ただ、顔合わせするためじゃねえだんろ？」

「ふっ、それも理由の一つだが亮に見て欲しいものがあるんだ」

「何をだよ？」

「それは……いや、実際に見てもらった方が早いな」

んだよ…何、もったいぶってんだよ？
だが、拓海がここまで言うってことはそうとう凄いものなのだろう

「それじゃあ、早速案内してくれよ」

「ああ、令子さん。例のものがある場所に」

「はい」

再び、俺は令子さんの後について行く

「これは……」

「ふっ、どうだい？驚いてくれたかな？」

令子さんの後について行った俺はエレベーターが地下に入ってから
ある程度予想はしていた
だが、俺は目の前にある予想以上の光景を見て唖然としてしまう
だが、それも仕方ないのかもしれない

「『ＩＳ』……」

『ＩＳ（アイエス）』

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ
なのだが、宇宙進行はせず、今ではスポーツとして使われることが
多い

「実際に見るのは初めてだな…」

殆どはテレビでぐらいしか、見られる機会がないしな

「最近、私達ＣＣ社もＩＳを加入するようにしたのよ」

「でも、ＣＣ社はネット関係の会社ですよね？何に使うんだ？」

「そうね。主に内蔵されるプログラムを担当しているわ」

なるほど、その分野ならＣＣ社でも対応出来るな

「ＩＳと言えば、知っているかい？世界で唯一ＩＳを使える男の事を」

当たり前だ
ニュースで必ずと言って良いほど出されていたからな

「織斑一夏だろ？あの織斑千冬の弟の」

「ほう、あの第一回ＩＳ世界大会の優勝者の弟なのか」

「よく知っているわね？そんな話、ニュースでは言っていなかったのに」

まあ、ちょっとした顔見知りぐらいだが

「つうか、何で男がＩＳを使えるんだ？」

そう、ＩＳは女性にしか使えない筈なのだが、あいつ（織斑一夏）は何故か使える
明らかにおかしい

「理由はわからないが、何か裏があることは間違いないだろう」

「“裏”ねぇ…」

なんか意味深な言葉だな
まあ、俺には関係のない事だ
とはいえ、本当に何で女性と織斑一夏にしか使えないんだろうかいや、考えても仕方ないことだな

「せっかくだから触ってみる？」

「良いんですか？」

ＩＳっていったらかなりの値段だった気がする
それも一生かかっても払えないくらいだ

「ええ、傷がつかない程度であれば問題ないわ」

逆に傷がつく触れ方とは、どんなものか教えてもらいたい
だが、こういった機会は滅多にないだろうからお言葉に甘えよう

「これが本物のＩＳ…」

なんつうか、凄いの一言だな
目の前にあるＩＳは量産機とはいえ、かなりの重圧を感じる

「……っ！？」

ブンッと頭にノイズが走る

その瞬間、触れたＩＳが光輝き出した
そして、いろいろな情報が俺の頭の中に無理矢理ねじ込まれるように入ってくる
何だよ、これ・・・
それにこの感覚、何かに似ている・・・何だ？

「亮！？」

「はっ！？」

拓海の声で我に帰った俺はすぐにＩＳから手を離す

「今、俺・・・」

「あ、ああ・・・」

「え、ええ・・ＩＳが反応した・・」

どうやら俺の勘違いではないらしい
拓海や令子さんもあまりのことに動揺を隠せていない
しかし、ＩＳが俺に反応した？
何でだ？何が起きてしまうんだ？
頭の中ではそんな考えしか思い浮かばず、ただ呆然と佇むことしか出来なかった

その後、ちょうど視察に来ていたＩＳ関係の人に俺がＩＳを起動させてしまった所を目撃され、ここ『ＩＳ学園』に強制的に転入させられたんだ

嫌なら君の身体をイジらせてもらうよ、と政府から言われ俺は渋々承諾

『イジらせて』ってふざけんな！

それで俺が一年生に戻ったのは、現在進行形で自己紹介をしているあいつ（織村一夏）がいるからだ

何かとその方が都合が良いんだろう

俺的にはふざけんなって話だが

それもそうだろう？

誰が好き好んで、一年からまた勉強し直ししなければならねえんだ

その事について尋ねたら『まあ、なんとかなるだろ？』だ

なんとかなんねえよ！？

適当過ぎんだろ！？

たくっ！政府は一体なにを考え「三崎く・・・三崎くん！？」

「ん？　うおっ！？」

「さっさと返事をせんか！バカたれ」

おい、なんか今、何かを投げつけて来やがったぞ？

後ろにはチョークが無惨にも粉々になっている

「全く、貴様は。その様子だと、私の話すら聞いていないようだな」

話どころか、あんたがいることすら気づかなかったよ、織斑千冬さん
でも、だからってチョークを投げるか普通
てめぇは昭和の鬼教師か「って、うおっ!?」

「‥‥今、失礼な事を考えてなかったか?」

「イエ、別ニ」

くっ!思わず片言に

「あ、あのね?次は三崎くんの番なの自己紹介。で、出来ればやって欲しいなって‥‥その‥」

今、この副担に睨みつければ『何でもないです!?』とか言いそうなくらいにビクビクしている
まあ、そんなことをしても仕方ないからさっさと済ませることにしよう

「‥‥ええっ、さっき副担の‥‥」

あれ?この副担の名前って‥「山田真耶です~」そうだ、確かそんな名前だった

「貴様は教師の名前さえ覚えておらんのか」

それは悪いと思っているが、だからってチョークを投げるな

「‥山田先生の紹介もありましたが、三崎亮です。よろしく」

‥‥‥おい、何だよ。そのそれだけか、て目は

山田先生や織斑千冬さん、ましてや織斑一夏までそんな目で見やがる

織斑千冬さんに至ってはもっと喋ろと目だけではなく、手に持って構えているチョークでそう語っている

「あ～、後、みんなより年上だけどそんな気にしないでくれ‥‥趣味は特にない‥‥‥以上だ」

「まあ、良いだろ」

良いならその期待外れだ、というを目止めてくれ

第1話（後書き）

どうも、こんにちは

ついつい、書いてしまいました

無性にこの組み合わせで書いてみたかったんです

本当にすみません

他の作品も頑張りますので温かい目で見守っていてください

第2話

ＳＨＲも終わり、早速授業だ
一時間目のＩＳ基礎理論が終わり休み時間
つうか、何だこの異様な空気は・・・

なんて言うか見せ物になっている感じに、じろじろと見られている

「あ、あの・・・」

「ん？　織斑か・」

「あの・・・三崎亮ってもしかして・あの？」

「どの三崎亮かは知らねえが、多分その三崎亮で合ってんじゃねえか」

「やっぱり、『亮兄』なのか！？」

さっきまで不安げに話しかけてきた表情とは打って変わって驚きの表情に変わる

「そうだよ・全くお前は相変わらずのようだな」

「逆に『亮兄』は変わったよな。面影はあるけど、それだけじゃわからなかったよ」

同じ事を千冬さんにも言われたよ
俺と一夏は小学生の頃に知り合ったのだが、ある事がきっかけで何

故か俺のことを『亮兄』と呼んで慣れ親しんでいた
ちなみに、先程まで一夏と話していた女もそのときに知り合ったが、
そこは置いておこう

聞き耳を立てている女子に聞かせたくないしな
特に俺の隣の席にいる金髪女子にはな
あからさまに耳を傾けて俺達の話を聞こうとしていやがる
一夏は気づいてないが

「それに亮兄、何も言わずに転校なんて」

「一夏：話は後だ……」

パァンッ！

「とっとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

一夏はしぶしぶ自分の席に戻った

「であるかして、ＩＳは――」

山田先生がすらすらと教科書を読んでいくが正直ギリギリでわかるくらいだ
一週間前に令子さんから貰ったこの分厚い参考書がなかったら大変な事になっていたな

「ほとんど全部わかりません！」

そう、今のあいつ（一夏）みたいになっていただろう

「ぜ、全部ですか？えっと今の段階でわからないと言う人はいますか？」

「「「……」」」

当然のごとく誰一人として手を挙げていない
そんな光景にあいつはキョロキョロと回りを確認
何故か俺の方を見ては信じられない、といった表情をしていやがる
俺が出来ちゃ悪いのかコラ

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬さんが一夏に訊くつか、あんたも何かしろよ

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パァンッ！と再び一夏の頭から良い音が響く

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。後で再発行してやるから一

週間以内に覚えろ」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

相変わらず、一夏は千冬さんに頭が上がらないようだ

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

千冬さんのその一言にビクッと動揺する
顔が引きつっているのが見なくてもわかる

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

こっちも相変わらず、厳しいな
でも、その言葉には深い意味が込められているのがわかる

「三崎はどうだ？今の状態に不満があるか？」

うわ……
とばっちりじゃねえか、仕方ねえ

「……ない…って言ったら嘘になりますが、何事も自分の思い通りにはならない、だから人は集団で生きている。それに、人は1人では生きていられないから、みんなと手を取り合って生きていくん

です。だから、俺はここにいる‥」

それは俺が『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』で知った一つの真実

「‥俺はそう思ってますから文句は言いませんよ‥‥」

脳内では言うがな

「「「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」」」

って、あれ？

正直に（チョークを投げられたくないから）答えたのに何の反応もない

千冬さんの顔を見てみれば唖然としている

そんな千冬さんの貴重な表情を確認した瞬間、おおーっ！とクラス全員が言う

「いや～！なんか今、グサッと来たね！」

「うんうん！なんか今の言葉一つ一つに哀愁がただよっているっていうか！」

「これが年上の魅力なの！？」

最後のは意味がわからんがどうやら俺の答えに満足してくれたようだ

「う、うむ・・では山田先生授業の続きを・・」

「・・・・・・・／／／／／」

「山田先生？」

「は、はひ！？しゅみましぇん！？・・・・・・舌噛みました～」

大丈夫、何だろうか・・・・この先生

「亮兄って本当に変わったよね」

二時間目の休み時間

今度は俺が一夏の席まで足を運んだが、いきなりそんなことを言い出す

「はあ？どこがだよ？」

「いや、昔はもっと好奇心盛んで、思ったことは千冬姉であろうとストレートに言っていたのに・・・その度に千冬姉に酷い目にあって

いたけど」

思い出させるな
あの時は本当に酷い目にあったから、思い出したくもない

「まあ、俺も大人になったって事かな」

「いや、と言うか・・・」

「？」

「大きな何かを乗り越えて大事な物を手に入れた主人公みたいな雰囲気が・・・」

・・・・こいつは相変わらず人の心をまるで見たかのように話してきやがるな

「まあ、いろいろあんだよ」

「・・・そっか」

深く聞かず相手が話すまで待つのも相変わらずだ
本当に一夏は変わっていない
そこがこいつの良いところだがな

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

いきなり俺らに声がかけられる
話しかけてきたのは、俺の隣の席に座っている女子

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……」

「何の用だよ…」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「「……」」

なんだ、この完全に上から目線な物言いは
そういえば、ＩＳを使えるだけで偉いと考えてる奴がいるらしいが、こいつはその典型的な奴だな

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

一応言って置くが、俺は席が隣だから名前くらいは覚えてる
セシリア・オルコット

やけに甲高い声で喋っていたことは覚えている

「代表候補生ってなんだ？」

この一夏の一言で聞き耳を立てていたクラスの女子がずっこける
セシリア・オルコットに至っては凄い剣幕で睨みつけている

「一夏。代表候補って言うのは『国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出された人』の事だ：簡単に言えばエリートな訳だ」

「なるほど。確かにそういわれれば単語から想像出来るな」

「そう！エリートなのですわ！どうやら、そちらの方が理解が良いみたいですわね！」

おいおい。人を指差しながら喋るなって親から教わらなかったか？

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡：：幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「：：：はぁ：：：」

俺は溜め息を吐いて呆れる
どちらに呆れてるかと言うなら両方だな

「：：：：馬鹿にしていますの？」

ギロッと睨みつけてくるセシリア・オルコット
特に俺の方をだ

「大体、あなた方ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

長い口舌ご苦労さん

「俺らに何かを期待されても困るんだが」

「ふん。・・・ま、まあでも?そちらの方は多少は見込みがありそうですが／／／／」

「そりゃあ、どうも」

何故か、ちらっと横目で俺の方を見ては頬を赤らめ口ごもる

「こほん。ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれたら教えてもよくってよ」

なんか、直観的にこいつは友達が少なそうだ

「何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

『唯一』って言葉を強調してやがる

「亮兄、入試ってＩＳを動かして戦うってやつ?」

「ああ。だろうな」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ?俺も倒したぞ、教官」

「は……?」

一夏の言葉が相当ショックなのか、目を見開いて驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

「女子ではってオチじゃないのか?」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた!あなたも教官を倒したって言うの!?」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶんって……そ、そちらはどうなのですか?」

また、とばっちりだよ

「俺は……負けたな」

「そ、そうですわよね!」

「2回やらされて、一勝一敗だ」

「……」

「亮兄、2回もやったの？」

「ああ。しかも、その一敗はお前の姉だ」

「ああ～……」

おい。その哀れんだ目を止めろ。確かに最悪だとは思ったよ
でも、ぶっちゃけ、一回目の奴もそれ以上に最悪だった
今のこいつ（セシリア・オルコット）以上に男を見下した奴だったが、実力はあった
けど何とか倒せたがな

「そ、そんな！わたくしだけと思っていましたのに！！」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーコーン

なんとまあ、ナイスタイミングで3時間目のチャイムがなったな

「……っ！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

よくないだろう・・・
セシリア・オルコットはまるでどっかの三下のように自分の席に戻っていった
一夏はそれを見てほっとしているが、俺はほっと出来ない
なぜなら
「むむむむっ・・・・」
「・・・・・・・・」
俺はセシリア・オルコットの隣の席だからだ

第2話（後書き）

連続投稿！！

その理由は前からストックを貯めていたからです

つか、問題は亮の言葉使い・・あってるか、わからない・・・・

第3話

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

重要なことは千冬さんが言うらしい
山田先生はノートを手に持ち準備をしている

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦か、そんなものがあるのか

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ」

なるほど、それで競争させ向上心を生ませるのか
よく考えてやがる

「そして、一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

つまりはクラスのまとめ役兼雑用係を一年間やらされるわけだ
絶対にやりたくないな

「ふふふっ。そのような重要な役割はわたわたくしのようなエリートでなければ務まりませんわ！」

そう、隣にいる奴みたいなのせやすい馬鹿にやらせるのが一番だ

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

どうやら一夏に白羽の矢が立ったようだ

「俺も織斑一夏が良いと思います」

「お、俺！？って何で亮兄まで、さり気なく推薦してんのさ！？」

いや、俺がならなければ誰でも良いし

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「だ、だったら俺は亮兄：三崎亮を推薦します」

これぞ、本当のとばっちり

「おいおい。ちょっと――」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

俺の話をバンッと机を叩く音が遮る

隣を見るとセシリア・オルコットがいきり立って立ち上がっていた

「そのような選出は認められません！大体、男が……クラス代表だなんていい恥曝しですわ！」

今、俺の方をちらっと見て少し口ごもったのは何故だ？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿とこの人にされては困ります！」

ん？一夏の扱いがかなり酷くないか？

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「ほう。なら三崎がなってもおかしくないって事だな？」

「……え？」

横から割り込んだ千冬さんがそんなことを言い出す

「お前のＩＳランクは『Ａ』だったな。三崎もＩＳランクは『Ａ』だ」

「「「おおーっ！！」」」

全員が口を揃えて声をあげる

『ＩＳランク』とは、ＩＳどれくらい扱えるか、て言うランクらしいがランクＡとはかなり上のランクみたいだな

「あ、あなたはわたくしと同じ実力（ランク）だと言うの！？」

「いや、別にランクなんて関係ないだろ？」

「その通りだ。ランクなど、ただの看板にすぎん。私からしたらどれも平等にひよっこだ」

ありがたいご高説どうも
さすがのセシリア・オルコットも反論出来ないだろう

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

何でそんな話になっちゃうんだよ
国は関係ないし、問題はクラス代表の話で――

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

あーあ、なに口走ってんだよ、あの馬鹿は

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

うん。今のは、一夏も悪いな
言い出したのは相手とはいえ、そんな風に言い返したら下手な挑発と変わらない

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

完全に気分は女王様だな

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

流れとはいえ勝負をすることになった一夏とセシリア・オルコット

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と三崎とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

「織斑先生……空耳でしょうか、俺の名前も呼ばれた気がしたのですが：」

「安心しろ。お前の耳は正常だ」

くっ、俺の推薦が流されたと思っていたのにこの空気の読めないＫＹ鬼――――

パキッ！

「それでは授業を始める」

本当に当たったら危ないからチョークを投げるのは止めてください

「うう……」

放課後、俺、織斑一夏は机の上でぐったりとうなだれている

「い、意味がわからん……なんでこんなにややこしいんだ……？」

今日の授業は何一つわからない

予習復習しないであの授業についていくのはまず、無理だ

「一夏、これを」

「え？おっと」

俺は目の前からあるものを受け取る

「これは、参考書？」

めちゃ重いと思ったらあの分厚い参考書だった
でもどうして？

「一応それに覚えるべき単語や事項などにマークを付けてある。そこを覚えればある程度はついていけるはずだ」

「りょ、亮兄・・・」

わざわざ俺のためにこんな事を・・・

「か、勘違いすんなよ！お前がヘマ扱いてると俺まで、そんな目で見られんだ。だからだよ！！」

うんうん、亮兄のその照れ隠しで怒鳴るのは変わってないな

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

振り向くと副担任の山田先生が書類を片手に立っていた

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処理として部屋割りを無理矢理変更したらしいです・・・・三崎くんはどうするんですか？」

確かにそれは俺も気になっていた

「俺は部屋が決まるまで近くのビジネスホテルに泊まることになってる」

び、ビジネスホテル！？家じゃないの？

「実家はここまで3時間かかるんだ。いちいち来たり帰ったりなんて出来ねえよ」

「そ、そうですが。金銭面的にかなり負担が・・・」

「そこは、まあ、あるところから支援してもらってるからな」

政府から支援してもらっているって事かな？

「・・・でも一人暮らしは何かと危ないですし・・」

「大丈夫ですよ。俺は今年で１８ですし」

「ですが・・・」

「でしたら、決まるまで山田先生の部屋に泊めてくれます？」

おっ？さすが亮兄

冗談で山田先生を混乱させて話を流すつもりだ

「・・・・なるほど・・その手がありましたか・・」

「え？」

あれ？ちょっと雲行きが怪しくなったぞ

「私、ちょっとその事について掛け合ってきます！」

「って、おい！？」

亮兄の呼びかけにも動せず、山田先生は教室から出て行った

数分後、千冬姉に引きずられた山田先生が帰ってきた

そして、亮兄を加えて千冬姉に説教されるのであった

第3話（後書き）

という訳で第3話でした

感想よろしくお願いします

第4話

「よお、オルコット……」

「ふんっ」

時刻は朝八時四十五分
俺は無事に登校したは良いが、隣の席に座るオルコットに挨拶したら見事に無視された
どうやら決闘が終わるまでは、この状態みたいだな
それ以降、どうなるかはわからないが

「…あら。あなたみたいな人でも予習復習をするのですね」

……俺が昨日、習って書き写したノートを見ていると、あっちから話しかけてきた
自分で話しかけるのは良いのかよ

「…ああ…つか、どういう意味だよ」

「わたくしが見ていた限りでは、あなたはかなり物覚えがよろしいようですので」

見ていた、て…まあ知っていたが

「オルコットはしないのか？」

「わたくしはエリートですから、今の段階での授業は完璧に覚えていますわ。ですので必要ありませんわ」

「へえ」

それは、凄いな

「……馬鹿にしてますの？」

「そんなつもりはないさ。お前がそう言い切れるって事は、それ程努力をしてきたってことだからな」

「…どうして努力したと言いきれるのですか？才能かもしれませんのに」

「人は才能があっても努力をしなければ、宝の持ち腐れだ。それに代表候補生なんて、ちょっと頑張ってなれるもんじゃない。それ（代表候補生）はお前の努力の証、誇りだ。だから、俺はお前を馬鹿にしたりなんてしない」

「……／／／／」

「ん？どうした？」

ぼけっとして俺の方を見るオルコット

「い、いえ！何でもありませんわ！」

ぷいっと顔を背けてしまう

何なんだ、一体？

「ううっ・・・」

亮の言葉にそっぽを向けたセシリアは俯いている

（反則、反則ですわ！）

なにが反則であるのかはセシリア自信よくわかってはいないが非常にそう思ってしまう

（それにこの人は今まで会ってきた男とは違いますわ）

今まで会ってきた男はセシリアの顔を見てはへらへらと笑いながら腰を曲げて人のご機嫌どり
しかし、隣にいる三崎亮は違った。どんな時でもまっすぐな目で自分の言いたいことをはっきり人の目を合わせて言う

（織斑先生の時もそうでしたが、今のお答えにも何か暖かいものを感じましたわ）

織斑一夏みたいに言い返してくる男もいたが、三崎亮みたいに言い返しても馬鹿にしたりはせず、自分のやって来たことを認める者などいなかった
代表候補生となってからは何でも出来て当たり前、そういった考え

をする者が多く誉めてくれる人は少なくなった

セシリア自信もそう思っているから何も感じてはいないが褒められるのは嫌いではない

だから、自分で自分は凄いということをアピールしている

そのせいで回りからは妬み・憎しみの目で見られ、影では馬鹿にされていたのも知っている。最初は辛かったが、今では馴れたものだ

（でも、この方みたいに面と向かって、しかも、わたくしの努力を認めて、馬鹿にしないとまで言ってくれました）

三崎亮の言葉をそう理解した瞬間、思わず、頬が緩み、にやけてしまいそうになる

しかし、仮にも、これからクラス代表をかけて争う相手にそんな顔は見せられない

だから、三崎亮から顔を背けたのだが・・・

「お、おい！どうした！？」

「え？」

「何で泣いてんだよ！？」

三崎亮の言っている事が理解出来なかった。そして、手で確かめてようやく理解した

泣いている

恐らく溜め込んできた悲しみのダムが三崎亮の言葉で決壊したのだ
自分の努力・苦しみ・悲しみを理解し、認めてくれた
セシリアの悲しみのダムはそんな三崎亮の優しさによって決壊した

そんな事態になっているなんて知る由もない三崎亮は急に涙を見せるセシリアに困惑している

「ああーっ！三崎っちがセシリアさんを泣かしてる～」

「なっ！？ちが――――」

「いーけないんだ、いけないんだ！せーんせに言っちゃおう！」

「小学生か！って違う、誤解だ！」

「亮兄、いくらムカつく相手だからって泣かせるのはどうかと思うよ」

「なっ！一夏まで！？」

（ふふふっ）

みんなから言い寄られて、あたふたしている三崎亮を見て、心からの笑みを浮かべるセシリア

（もっと、この人のいろいろな顔を見てみたい）

セシリアはそう心から思うのであった

「ねえねえ、織斑くんに三崎くんさあ！」
「はいはーい、質問しつもーん！」
「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

三時間目が終わり、俺は一夏の席に行って話をしようとしたのだが、
席に着いた途端に数人の女子が一斉に話しかけてくる

「いや、一度に聞かれても――」

一夏が何かに気づいたのか言葉を止める
見てみると、整理券を有料で配る女子を発見
おい、コラ。儲けの半分は寄越せ

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの？」

うーん。一回だけ、一夏の家で遊んだことがあったが、部屋を覗いてかなり失望したのを覚えている
そんな千冬さんの姿を見たら『お姉さま』なんて言えないだろう
実際、千冬さんの実体を知っている俺からすれば『千冬お姉さま』じゃなく『姉ｇ――

パアンッ！　パキッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

いつの間にか、一夏の背後にいる千冬さん
俺からすれば、目の前にいるのだが、それなのにもかかわらず、チョークを投げつけてきやがった

「いや、さすがにそれは無いだろ！？」

「ふん。避けといてよく言うよ」

自分でも、びっくりしてるよ

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

どうやら一夏は千冬さんが言っていることが理解出来ていないみたいだ
安心しろ。俺もよくわかっていなかったが、専用機と言った所で、大体は理解出来た

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府から支援が出てるってことで……」

女子が羨ましそうに一夏を見る

当然だな

「教科書六ページを音読しろ」

「え、えーと……ああ、あれか！」

ちょうど、そこは俺が貸した参考書にマークを付けていた所だからある程度理解したのだろう

でも、一応音読をすることにする一夏

要約すると

1．ＩＳは世界に４６７機しか存在しない

2．コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもう作っていない

3．割り振られたコアで研究・開発・訓練を行う

4．コアの取引は禁止

とこんな感じだ

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機を用意されることになった」

「それじゃあ亮兄は？」

「三崎にはそんな話は無い」

「ええっ！？」

千冬さんの返事に驚く一夏

「何でですか！状況が状況なら亮兄にも専用機があっても――」

「落ち着け、一夏」

千冬さんを問い詰める一夏を止める

「わかってんだろ？ＩＳのコアは４６７機しかない。だから、いきなり二人も一気に専用機を持たせるなんて出来ないんだ」

「それだったら、何で亮兄じゃなくて俺なんだよ？」

「冷静に考えればわかる。お前は世界優勝者、織斑先生の弟で俺は一般人。どちらのデータを収集すべきかなんてわかりきってる」

「でも・・・」

「もう、決まってるんだから仕方ねえよ。それにデータ収集なんて面倒事が回って来なくて、俺はほっとしてんだ」

「えー・・・何だよ、それ・」

「まあ、そういう訳だから頑張れよ」

俺は、一夏の肩をぽんぽんと叩いた後、自分の席に座った

第４話（後書き）

第４話読んでいただきありがとうございます

なんかすみません、と謝りたい気持ちです

感想お待ちしております

第5話

「あの野蛮人は本当に失礼しちゃいますわ！」

「・・・そう・・・・・・」

休み時間、いや昼休みか
俺はトイレに行って戻ってきたのだが、何故かオルコットが怒っていて、俺に愚痴を吐いている

「あの野蛮人は専用機がいかに重要なものなのか理解していませんわ！」

「それは仕方ないさ。いきなり、専用機がもらえると聞いても困惑するだけだし」

「ですが、あの野蛮人には緊張感、責任感というものが感じ取れません！」

「この学園の一年はみんなそう。だから、ここでそれを学ぶ。これからさ」

「・・・・亮さんは妙に野蛮人を庇いますのね・」

『亮さん』？
いつの間にか、名前で呼ばれている
まあ、いいか

「一応、友達だからな」

「『友達』だから庇うのですか？」

「そういう訳じゃないんだが：オルコットも何か困っていれば、俺はお前に手を差し伸べるさ」

「そ、そうですか：／／／／」

あれ？

なんか、俺、普通に恥ずかしいこと言ってないか？

やばい。意識したら身体が熱くなってきた

「と、ところで亮さん。お昼ご一緒しませんこと？」

「い、いや。悪いが、俺はコンビニで買って来てるから」

ほらっと、今日の朝、買ってきたコンビニの袋を見せる

「え？亮さんは学食で食事をされないのですか？」

「騒がしい場所は苦手だからな」

俺は買ってきた食べ物を机の上に置く

「：：：：：：：：」

何故かオルコットが、じーっと此方を見てくる

最初は買ったコーヒー牛乳を飲んでいたが、あまりにも物珍しそうに見てくるため無視できず

「・・・なに？」

「い、いえ。それは何なのかと・・・」

「何なのかと、ってカレーパンと焼きそばパンとコーヒー牛乳だけど・・・」

「まあ！それがそうですの！？」

初めて見たのかよ！？

驚愕した表情に心の中でツッコミを入れる

「わたくし、コンビニという場所に入ったこともありませんわ・・」

いや、そんな申し訳なさそうな表情をされても困るんだが

「・・・・・・食べてみる？」

とりあえず、焼きそばパンを渡してみる

「い、いえ。別にそんなつもりでは」

「・・・いらないなら、良いんだけど」

「・・・で、ですがせっかくのご厚意ですし、頂きますわ」

どっちなんだよ

「それじゃあ、ほら」

「い、頂きます」

緊張しているのか、ぷるぷると手を震わしながら焼きそばパンを口に入れる

「あら?結構美味しいですわね」

気に入ってくれたのか、ぱくぱくと焼きそばパンを口の中へと入れるつか、そんなに詰め込むように食べたら・・・

「んんっ!?」

予想通り、パンを喉に詰まらせてしまうオルコットは胸を、とんとんと叩くがそれでも通らない

「ほら、これを飲め」

オルコットは俺から受け取ったコーヒー牛乳を飲むと、なんとか呑み込むことに成功

「けほけほっ。ううっ、死ぬかと思いましたわ」

「馬鹿、あんな食べ方をするからだ」

「ううっ、なにも言い返せませんわ・」

オルコットは少し悔しそうな表情をしている

「・・・・・・!?///」

ん？いきなり顔が真っ赤になったぞ？

「けほけほっ。ううっ、死ぬかと思いましたわ」

わたくしとしたことがまさか、夢中になった挙げ句喉を詰まらせてしまうとは、一生の不覚ですわ

「馬鹿、あんな食べ方をするからだ」

「ううっ、なにも言い返せませんわ・・」

はしたない所を見せてしまいましたわ
亮さん、呆れていないでしょうか？

あっ！そうでした。亮さんから、頂いたお飲み物をお返ししないと・・・・

「・・・・・・・！？／／／／」

わたくし、必死のあまり気づきませんでしたが・・・・このお飲み物・・
確か、先に亮さんがお口にしていましたわ

と、言うことは、か、かかかかかかかかかか間接キスではありませんか！

ど、どどどどどどどどどどどどどうしましょう！わたくし、き、キスなんてお父様にもしたことなんて・・・

こほん！と、とりあえず、平然と構えてお返ししないと

「お、お飲み物！あ、ありがとうございますですわ！」

「お、おう・・・」

コーヒー牛乳を突き出すように返すオルコット
かなり動揺しているのがわかるが、何故？
まあ、良いか。気にせず昼食をとろう

「・・・っ／／／／」

「ん？」

俺がカレーパンを食べながら、コーヒー牛乳を飲むと、オルコットの様子が変なことに気づく

考えろ。何か重要なことを見逃している気がするコーヒー牛乳、顔が赤い・・・

「オルコット・・・」

「は、はい!?／／／／」

「飲むか?」

喉が渇いているんだろう
顔が赤いのは熱いからで、たがらコーヒー牛乳を見ていたんだな

「・・・・・・・・あ、ありがとうございます」

今の間は何だ?
違うのか?でも、オルコットはコーヒー牛乳を受け取って飲んでるし、あってるのか

「それ、全部飲んで良いから」

「・・・・・・・・・・／／／／」

オルコットはコーヒー牛乳を飲みながら、こくんと頷く

つか、さっきまでの怒りはどこに消えたんだ?
まあ、その方が一夏のためにもなるか

「おい、三崎」

「へ？」

パキッ！

「織斑先生。いきなり何でしょうか？」

もはや、チョークを投げて避けるのが千冬さんと俺の挨拶になっている気がする

「外から食べ物を買ってくるな、馬鹿者。校則違反だ」

チョークを投げるのは校則違反じゃねえのかよ

「俺、騒がしい場所と列ぶのが苦手なんです」

「だったら自分で作ってこい。それも苦手なら食うな」

そんな無茶な

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

時間は放課後、場所は剣道場、状況は一夏が篠ノ之箒と剣道の試合をしている

結果はボロ負け

「どうしてここまで弱くなっている」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

ちなみに俺もだ

帰宅部がな

「――なおす」

「はい？」

「鍛え直す！ＩＳ以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」

「良かったな。これで来週もなんとかなるな」

「なんないから!?つか、亮兄!どこに行くんだよ!」

一夏が俺の足を掴んで逃げないようにする
くそ!逃げられなかったか
そもそも、俺は何でここに連れて来られたんだ

「いや、箒が剣道場に行くって言うから嫌な予感がして」

「俺を巻き込むな」

「そんなつれないこと言わないでくれよ、亮兄」

馬鹿は休み休み言え、何で俺まで剣道に付き合わなければならねえんだ

「それに俺は剣道みたいな汗臭いのは苦手なんだ」

「あ」

「……あ」

ついつい、本音を言ってしまった
俺は恐る恐る篠ノ之箒を見る

「……貴様……」

うん。怒ってらっしゃる
なんか昔もこんな流れで酷い目にあったのを思い出す

「そこに直れ!その腐った性根を叩き直してやる!」

「ふざけんな！？」

「問答無用！」

スパァン！

「なっ！？」

「痛え……」

本当に竹刀を問答無用に振り下ろして来やがった
俺はなんとか下に落ちていた一夏の竹刀を拾い上げ、篠ノ之箒の一撃を防ぐ
たく、危ねえな。つか、手が痺れてるぜ

「くっ、このぉ！」

ひゅっ！すぱっ！パァン！

篠ノ之箒の猛攻を俺は必死に避けたり、受け止めたりしている
よく考えてみれば、俺防具とか着けてないし！

「お前、何かしていたのか？」

「なんも。つか、『お前』って……」

「な、何だ？」

「昔は一夏みたいに『亮兄』って呼んでたじゃねえか」

「なっ！？／／／／」

ん？篠ノ之箒の顔が赤くなったぞ

「う」

「う？」

「うるさあぁぁぁぁい！！」

さっき以上の猛攻が俺に襲いかかる。何故だ！？

「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私、篠ノ之箒はたるんだ一夏を昔の一夏に戻ってもらうために剣道場で鍛え直すつもりだったのだが、何故か今は、一夏が連れてきた三崎と打ち合っている

最初、見たときは誰かと思った
昔は、一夏がかなり親しくしていたが、私はどうも好きになれなかった
よくからかってきたり、嘘を吐いたり、私を怒らせることばかりしてきた

それでも、私は何故『亮兄』と呼んでいたか
それは、この人にも優しい一面があったからだ

……その話は置いておこう
今となっては、年上だからか一夏以上に大人びている。全くの別人そんな、この人に『亮兄』と呼ぶのはかなり照れくさい

はっ！一体、何を考えているんだ私は
今は、この人の動きについてだ
剣道は素人なのはわかるのだが、ことごとく避けられたり、防がれている
慢心しているわけではないが、私は剣道の有段者だ。その私の攻撃をこの人は対処している
経験者である一夏ですら出来ないのに、この人は出来ている

一体、会わなかった間にこの人は何をやっていたんだ

ん？荒々しかった攻撃が治まってきた。どうやら冷静になったみたいだな

それはそれで困る
荒々しかった攻撃の方が読みやすかったから、冷静になると一気にやりにくくなる

だから、決めるならここか！

「はあっ！」

パァン！

「くっ・・・」

「ちっ」

さすがは剣道有段者
思いっきり踏み込んだが防がれてしまった

一夏の話では全国大会で優勝するほどの実力者だ
そうそう当てられるとは思っていなかったが・・・

「さすがだな」

「ふん。タイミングは良かったが振りが遅い。それでは簡単に防が

れるぞ」

やっぱりか・・・

タイミングとかは、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』で磨いていたが、現実（リアル）では別だ。そもそも竹刀なんて初めて持った

「ここまでにしよう。亮の実力はよくわかった」

そう言って、竹刀をしまう篠ノ之箒

呼び方が『亮』と呼び捨てになっているが、まあ良いか

「織斑くんと三崎さんてさあ」

「結構弱い？」

「ＩＳほんとに動かせるのかなー」

勝手な事を言いやがる

「・・・・・・・トレーニング、再開するか」

どうやら、あの女子たちの言葉でやる気に火がついた一夏

「亮兄と一緒に」

「て、おい！俺を巻き込むな！」

「何だ？嫌なのか？」

ヤバい。竹刀片手に笑顔を浮かべてやがる

このときの篠ノ之箒は恐いし面倒くさい

「わかりました。やりますよ、篠ノ之さん」

「箒と呼べ」

「……はい」

第5話（後書き）

うーん・・

ちゃんと、セシリアと箒の喋り方があっているかが気になる

感想よろしくお願いいたします

第6話

「織斑先生」

「何だ？」

クラス代表決定戦まで残り三日
俺は現在、千冬さんにあるお願いをしにきた

「訓練機と第三アリーナの使用許可をもらいたいんですが」

「良いだろう。しかし、あまりやりすぎるなよ」

「はい」

あっさりと許可をもらったが、良いのか？良いのか

「その代わり山田先生が同行する。構わないな？」

「……はい」

やっぱり、何かあったか。山田先生か、まあ一人でやるより先生がいた方が何かと質問できる

「で、でででは早速始めましょうか」

「……」

何だろう、異様に頼りない

相変わらず山田先生の眼鏡のサイズがあってないのか少しズレている

「えっと、今回三崎くんに使ってもらうＩＳはこの『打鉄（うちがね）』です」

俺の目の前には鎧武者をイメージしたであろうＩＳ『打鉄』がある

純国産ＩＳとして定評のある第二世代の量産型だ

「クラス代表決定戦でも、これを使ってもらいますが大丈夫ですね？」

「はい」

「それでは装着して展開してみましょう」

俺は山田先生に言われた通りに打鉄を展開させる

「……うん」

良く馴染んでいる。久しぶりに使うから不安だったが、大丈夫そうだ

「今度は、打鉄の武器を展開してみましょう」

「はい」

刀型近接ブレードを展開

「それでは動いてみましょう」

「はい」

俺は自由にアリーナを飛び回る
なかなか気持ち良いものだ

「さすがですね。ではもっとやってみましょうか」

「お願いします」

俺は、アリーナの使用時間終了まで山田先生と一緒に練習をした

「本当に凄いですね、三崎くん」

「はい？」

いきなり誉めてくれる山田先生
何が凄いんだ？

「だって、ＩＳ稼働時間がまだ二時間くらいしかやっていないのに、あそこまで動けるなんて凄すぎます」

キラキラと目を輝かす山田先生

「何かコツでも掴んだのですか？」

「なんて言うか・・・似ているんですよ」

「似ている？」

「ゲームに・・・ですよ」

山田先生が呆然としている

「いやいや、三崎くん。ＩＳはゲームとは違いますよ！！」

山田先生が叱ってくる。まあ、ＩＳをゲームと比較されちゃあ怒るのも仕方ないか

でも・・・・似ている

憑神（アバター）に

似ていると言っても動く時の感覚ぐらいだ

全部ではない
でも、初めてＩＳを動かした時は憑神を発動させたような感触だった
気のせいだったのか、まあ今、その事についても考えても仕方ないな
俺は山田先生の説教を軽く受け流し、帰った

そして、翌週の月曜日
クラス代表決定戦が始まる
最初は、一夏対オルコットの試合だ

「あんな野蛮人なんてすぐに倒して、あなたと一戦を交えますわ！」

意気揚々に俺に話しかけてくるオルコット

「オルコット。いい加減、一夏と仲良くしたらどうだ？」

「いいえ！あの野蛮人はわたくしだけではなく、わたくしの祖国まで馬鹿にしたのですよ！」

「確かに、あれは一夏も悪かった。でも、お前も同じ事をしたんだぞ？」

「そ、それは…」

「それにオルコットを馬鹿にしているつもりはなかったんだ。ただ、知らなかったんだ。だからって悪くない訳じゃない。ちゃんと一夏が勉強してきていればこんな事にはならなかったと思う」

「では、悪いのはわたくしと野蛮人のどちらなのですか？」

「どちらも悪いし、どちらも悪くない。そんな事を気にするより、これからどうするかを考えろ」

「……」

黙り込んでしまうオルコット
まあ、いきなり考えろと言われても無理かもしれない

「まずは、これ（クラス代表決定戦）が終わったらゆっくり話し合って見ればいい。今まで見えなかったもんが見えるかもしれねえ」

「……そう、ですわね。そうしてみますわ」

オルコットはそう言いながら、自分の専用機『ブルー・ティアーズ』を展開させる
ほう！量産型とは違って、これは便利だ

「そうそう、オルコット」

「はい？」

「気をつけろよ？油断してるとやられるぞ」

「あら?亮さんはわたくしの味方をしてくれますの?」

「まあ、あっちには織斑先生や山田先生に箒がいるからな」

だからって、一夏の味方ではないという訳ではない。ただ、助言をするか、しないかの違いだけ

「あいつの真っ直ぐな目は何を起こすかわからない。箒との（ＩＳとは関係ない）特訓で頑張ってるしな」

もちろん。俺もそれに強制参加していた。何度か一夏を身代わりにして逃げたが

「あの・・・亮さん?」

「ん?」

「先ほどから『箒』と言っていますが、それは篠ノ之さんの名前・・・ですわよね?」

何だ?オルコットは笑顔なのに、何とも言えない重圧(プレッシャー)感を感じる

「どうして、わたくしは名字なのに篠ノ之さんは名前で呼ばれているのですか!!」

ええ～・・・・・

「いや、箒が呼べって・・・」

「で、でしたら！わたくしのことを『セシリア』とお呼びくださいな！！」

「いや、何で？」

「それは……その：／／／／」

何故か顔を赤くするオルコット

何だ、風邪か？

「亮さんこそ、何でわたくしの名前を呼びたがらないのですか！」

呼びたがらないわけじゃないのだが：

「では、わたくしが一夏さんに勝てば、わたくしのことを『セシリア』と呼んでいただけますか？」

いや、何でそうな：ん？今、一夏の名前を：

「むむむっ：」

じーっと、俺を睨みつけるオルコット

仕方ない。オルコットも俺のお願いを聞いてくれたからな

「わかった。頑張れよ」

「は、はい！頑張りますわ♪」

ぱあっと、嬉しさ・やる気全開、な表情をするオルコット

そこまで俺に名前を呼んで欲しかったのか？

「それでは行ってきますわ！」

オルコットは開放したゲートからアリーナ・ステージへと向かった

箒や千冬姉に見送られ、俺だけのＩＳ専用機『白式』を展開し、敵であるセシリアがいるアリーナ・ステージに到着したのだが

「・・・来ましたわね」

「お、おう？」

セシリアが待ち構えている・・・だけなら良かったんだが

「さあ、始めましょうか・容赦はしませんことよ・・」

おかしい！目が座っていらっしゃる！？

「わたくしが、あなたに勝てば、亮さんに・・」

「え？亮兄がどうしたんだ？」

「何でもありませんわ・あなたはわたくしとの勝負に集中――」

白式が敵（セシリア）の攻撃を察知
来る！

「していれば良いのですわ！！」

「うおっ！？」

閃光が俺の左肩を貫く

（くそっ、俺が白式の反応に追いつけていない！）

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！そして――」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ

「亮さんからご褒美を頂きますわ！」

「えっと、何でしょうか？『ご褒美』って‥」

「さ、さあ？」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がセシリアの発言に疑問をもつ
聞かれた箒も意味がわからず、首を傾げる

「本人から聞けば良かろう。おい、三崎」

千冬は反対サイドのピットにいる亮に通信を繋げる

「はい。何でしょうか？」

「お前、オルコットに何を言ったんだ？」

「‥‥特には何も」

「嘘をつくな。ご褒美を頂く、とか言っていたが」

「‥‥それは多分‥」

亮はセシリアとした約束を話した

「‥‥‥‥‥‥はあ‥」

「全く、貴様という奴はどうしてこう、人の気持ちを弄ぶような事を言うんだ」

「？？？」

箒は溜め息を吐き、千冬はこめかみを押さえながら言う。亮はよく意味がわかっていないみたいだ

「そういえば、貴様も一夏みたいに、そういうのは鈍かったな」

「確かに小学生の時、女子たちからの人気はありましたが、浮ついた話は聞いたことありません・・・」

亮の様子を見てそう呟く

「何で、亮はオルコットのことを名前で呼んであげないんだ？」

「いや、その・・・・・」

「何だ？はっきり言え」

箒の質問に口ごもる亮に千冬はさらに問いつめる

「・・・・女子の名前を呼ぶのって、なんか気恥ずかしいじゃねぇか・・」

「「・・・・・・・・・・・」」

亮のまさかの答えに黙り込んでしまう二人

昔の亮を知っている二人からしたら、この発現はかなり意外だ

昔の亮は、言いたいことがあれば、年上であろうと面と向かっては

っきりと言う子供だった

それが今では、頬を掻きながら恥ずかしそうにそう答えた
意外と思っても仕方ない

（亮もこんな表情をするのだな）

（ほほぅ、こいつにもピュアな一面があるとは・・・年月は人をここまで変えるか）

（三崎くん、可愛いです）

そんな感想をそれぞれ思いながら、一夏とセシリアの激戦は終局へと向かう

第6話（後書き）

感想お願いいたします

第7話

「一夏の調子が上がってきたか‥」

俺はリアルタイムモニターから一夏の動きを見てそう感想を述べる

「あの馬鹿者。浮かれているな」

反対サイドのピットと繋がっている通信から千冬さんがそう言う

「えっ?どうしてわかるんですか?」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へぇぇぇ‥‥。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

そうだな。俺も全くわからなかった

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな‥‥」

「あー、照れてるんですかー?照れてるんですねー?」

絶対照れてるな。それも、そうか。千冬さんは重度のブラコンという噂があるからな

「‥‥‥‥‥‥‥」

ぎりりりっ！
山田先生にヘッドロックが炸裂した
「いたたたたたっ！？」
「私はからかわれるのが嫌いだ」
「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し――あううっ！」
うわぁ、マジで容赦ないな…
「三崎…貴様にも後で同じ事をしてやるから、覚悟しておけ」
何故だ！声を出していないどころか場所も違うのに！？
俺は、改めて千冬さんの恐ろしさを実感したとき、試合は大きく動いた
――穫った！
セシリアの間合いに入った一夏がブルー・ティアーズのピット４を

吹き飛ばし、確実に一撃が入るタイミング

「――――かかりましたわ」

にやりと笑うセシリアを見て、一夏は悪寒を感じ取る

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー
その突起がはずれて動き始めた
一夏は急いで離れようとするが、さっきの『レーザー射撃』でなく
『弾道型（ミサイル）』であるため、避けてもついて来る

ドガァァァンッ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に一夏は包まれた

「一夏っ・・・・！」

ミサイルを喰らった一夏を見て思わず声を上げた箒の声が聞こえる

さっき俺に殺気を送っていた千冬さんや山田先生も、爆発の黒炎に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する

もし、ミサイルが直撃していればシールドエネルギーは0、一夏の負けだ

「――ふん」

千冬さんが鼻を鳴らす。顔は見えないが声には安堵感を感じる

「機体に救われたな、馬鹿者め」

千冬さんの言葉を聞いて、俺はモニターに目を向ける

画面中央には、かすかに漂っている煙
次の瞬間、弾けるように吹き飛ばされる
そしてその中心には、純白の機体があった

「これは……」

「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）!?あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」

セシリアの表情を驚愕の一色に染まっている
つまり、これからが一夏の本気だ

それに、一夏が装備している武器。あれは危険だ
直感でわかる。あれを直接喰らってはダメだ

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「……は？あなた、何を言って――」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

「だからさっきから何の話を……」

このとき、セシリアは亮の一言を思い出す

『あいつの真っ直ぐな目は何を起こすかわからない』

セシリアは納得した。一夏の今の目は真っ直ぐと何かを決めた目だ
自分の決めた想いを成し遂げるために覚悟を決めた目

（なるほど。亮さんは、この目を知っていたのですね）

だから、忠告をしてくれた

「――ですが。わたくしも負けられませんわ！！」

セシリアは弾頭を再装填したビットが二機、一夏に向かわせる

（見える……！）

ギンッ！

横一閃

ビットを両断した一夏は再びセシリアへと突撃する

「おおおおっ！」

一夏のＩＳ専用機『白式』の武器近接特化ブレード・《雪片弐型》の刀身が光を帯びる

（いける！）

誰もがそう思った瞬間だった

『試合終了。勝者――――セシリア・オルコット』

「あれ……？」

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わり、千冬さんに怒られている一夏
敗因が、武器の特性を考えずに使ってしまったからだ。怒られても仕方ない

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

――は？
千冬さんの言葉に一瞬、体が固まる
『今日はこれでおしまい』？
俺は？

「予想以上に長引いてしまったからな。三崎は明日、オルコットと試合をしてもらう。いいな」

「……はい」

なんだ、無くなる訳じゃないのか
それじゃあ、帰るか

「おっと、三崎。どこへ行く？お前にはまだ用があるのだが――」

指をパキポキと鳴らす千冬さん

「‥俺も用事が出来たんで‥‥‥サヨナラ！」

「逃がすか！」

俺と千冬さんのリアル鬼ごっこが始まった

第7話（後書き）

今回は短かったですが楽しんでいただけたでしょうか？

感想よろしくお願いいたします

第8話

「……」

ぽつんと、一人で控え室に座るセシリア

（あれは勝ったと言えるのでしょうか？）

今日の一夏との試合を振り返る

試合には勝った。だが、最後の一撃が当たっていたら、どうなっていたかはわからない

（ああ……）

セシリアは頭を抱える

（これでは、亮さんに名前で呼んで頂く資格なんてありませんわ！）

亮の約束通り、勝利はしたものの、あんな勝ち方では自分のプライドがそれを許せない

（ですが、どうしましょう…どうすれば、名前で呼んでもらえるのでしょうか）

頭を抱えながらそう考えていると――

がちゃ、ばたんっ！

扉が開き、閉じる音が響く

「はあ・・・はあ・・・」

「りょ、亮さん？」

そこには、背を扉に向けて座り込んでいる亮がいた

「りょ、亮さん？」

千冬さんとリアル鬼ごっこをして、隠れるために部屋に入ったが、そこにはオルコットがいた

「よ、よお・・・悪いが匿ってくれないか？」

「は、はあ・」

オルコットの了解を得て俺は、一回溜め息を吐いてから、近くにあった椅子に座る

「ど、どうしましたの？も、もしかして、わたくしに会いに――」

「ちょっと、鬼（千冬さん）に追いかけられててよ。逃げてたんだ」

しつこすぎんだよなぁ

仕舞いには凶器（チョーク）を使ってくるからたまったものじゃない

「そ、そうですか・・・」

気まずい・・・

いつも自分から話しかけてくるオルコットだが、一向に喋る気配がない

「あ、あのさオルコット」

「っ・・！・・・はい、何でしょうか・」

「・・・・・・・・・・・・」

今、俺は何かいけないことを言ってしまった気がする

「あ、あのさオルコット」

ズキッ！

「っ‥！」

痛い。心が痛いですわ
ただ、名字で呼ばれただけなのに

「‥‥はい、何でしょうか‥」

それほど、わたくしは亮さんに名前を呼んで欲しい
でも――――

「あのさ、今日の試合だけど‥‥その‥」

亮は頬を掻きながら話しかける

「かっこよかった‥‥ぞ」

「え？」

「だ、だから、かっこよかった！……女子に、そんなこと言うのはどうかと思うが、お前がブルー・ティアーズに乗って操縦する姿は素直にそう思った／／／／」

亮さんは、少し早口で目をそらしながらそう言ってくる
なんでしょう。いつものクールな亮さんが、こんな真っ赤に顔を染めて、とても可愛いですわ

「ふふふっ♪」

「な、何だよ…？」

「いいえ、何でもありませんわ♪」

亮さんと話していると悩み事なんて吹き飛んでしまいますわね
それほど、この人はわたくしにとって――

ばぁん！

「三崎！！」

「なっ！？」

扉が開くと同時に千冬が大声を上げて入ってくる

「ちっ、見つかったか」

「三崎、大人しくしていれば、一分で済ましてやる」

「ふざけんな！馬鹿力で、そんなにされたら頭が割れる！」

亮さんの言葉使いがかなり荒れています。これが素なのでしょうか？

「・・・よし、一分ではなく、十分にしてやろう。私の寛大な心に感謝するんだな」

「ちっ、感謝する要素が一つもねえ！」

亮さんは逃げる体勢に入ります。なんだが慣れていますわね

「それじゃあ、『セシリア』！またな！」

「えっ？」

「逃がすか、馬鹿者！」

亮と千冬はまるで嵐のように部屋から出て行った

（今、確かに亮さんはわたくしの名前を・・・）

それを理解した瞬間、わたくしの心が、ほわわんと暖まりました

プライドが納得しなくとも、やはり、好きな人から名前で呼ばれるのは、とても気持ち良いですわ

「ごきげんよう、亮さん♪」

火曜日
とうとう、オル・・・ではなく、セシリアとのクラス代表決定戦

「亮兄、勝算はあるの？」

「ん？ん～・・・」

俺が『打鉄』を調整していると、一夏が訪ねてくる
正直、かなり勝てる可能性は低いだろう
相手は、高性能な三世代専用機。俺は、平均的な量産機
普通に考えたら、勝てる見込みはない

「さあな」

「さあな、て・・・」

「大丈夫なのか？」

「なるようになるさ。んじゃ、行ってくるわ」

打鉄を展開した俺は、セシリアがいるであろうアリーナへと向かう

「大丈夫かな、亮兄」

「まさか、勝てないからわざと負けようと考えているのではないか？」

気持ちはわからなくないが、亮兄に限って‥‥

「確かにありえるな」

「千冬姉！？」

「昔のあいつだったら、嫌なことから、すぐに逃げ出す男だったからな。その可能性は充分にある」

そう言われると確かに、学年も違うのに掃除当番を押しつけられたりしていたけど

「‥だが、あいつは変わった。昔とは違う‥」

「‥‥どうしてわかるんですか？」

真耶がおもむろに尋ねる

「目を見ればわかる。あの目は逃げる者の目ではない。闘い勝ちに行く者の目だ」

「来ましたわね」

アリーナの中央にはセシリアとブルー・ティアーズが待ち構えている

「ああ」

「ふふふっ♪」

「んだよ？」

「いえ。なんでもありませんわ」

よくわからないが、やるからには勝つ！

「行くぞ！」

「勝負ですわ！」

俺とセシリアの試合が始まった

第8話（後書き）

はい、千冬さんのキャラが壊れてしまいましたね

そして次回はいよいよ亮が戦闘します。楽しみにしていてください

読者様の期待に添えるように頑張ります

第9話

「ほう」

「あれは・・・」

亮とセシリアの試合が始まって、千冬は関心し、一夏はあることに気づく

「私が教えた剣道の構え・・・」

箒は意外と言いたそうな顔で亮を見る

亮は刀型ブレードを両手に持ってセシリアが放つレーザー射撃を叩き斬っている

「なかなかどうして、様になっているじゃないか」

「正直、私も驚いてます」

「亮兄、なんだかんだ言ってても、箒の特訓に付き合っていたからな」

箒の特訓を思い出す一夏

箒の特訓に文句を言いながらも、しっかりやる亮の姿が思い浮かべる

「だが、守りが上手くても試合には勝てん」

「三崎が動くぞ」

千冬の言葉に一同リアルタイムモニターに目を向ける

「このブルー・ティアーズを初見で、耐えるだけではなく、捌ききるなんて初めてですわ」

セシリアは四つの自立機動兵器を亮の四方へと動かす

（来た！）

亮は肩の力を抜き、足に意識を集中する

「喰らいな――――」

「うおおおおおっ！！」

「なっ！？」

亮は打鉄が出せる全速力でセシリアに突貫

セシリアのビットは、操縦者の命令を送らなければ動かない

それを利用し、ある程度引き離して無防備になったセシリアに突貫

する。それが亮の策

「ですが、まだ――」

そう。４つのビットを引きつけても腰に付けたミサイルがある

「喰らえ！」

「なっ！？」

亮はセシリアがミサイルを放つ前に、刀型ブレードを投げつける

「なんて、無茶苦茶な――」

「このぉ！！」

亮の行動に驚いていると、その隙にセシリアの懐に入り込んだ亮は、そのままショルダータックルをかます

「きゃあっ！？」

ダメージはそんなに減らせないが、ある程度動きを鈍らせることは出来る

「こんのぉぉぉぉ！！」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

亮はセシリアの足を掴むと、地面に向けて思いっ切り投げつける

「くっ！」

しかし、そこは代表候補生。重力がかかりながらも途中で反転し、
地面すれすれの所で体勢を整える

「そこだぁぁぁぁ！」

亮は投げた筈の型ブレードを手にセシリアの背後から突撃する
下に投げつけたのは、地面に刺さっている刀型ブレードを回収する
インターバルを短縮するため

「くぅっ！？」

「ちっ！浅かったか」

「い、今のは危なかったですわ」

だが、今のでセシリアのシールドエネルギー残留は１１６。かなり
減らせることに成功した

（だが、こっちは２２０・今ので決められなかったのは痛いな）

「もう懐には入らせませんわ！」

「ちっ」

距離を取ったセシリアはビットを操り、亮を追い込んでいく

「亮兄…」

「あれで、決められなかったのは痛かったですね」

「ああ。また同じことをしても通用しないだろう」

亮の策を見て驚きはしたものの、相手は代表候補生。二度は通用しない

「それでは亮が勝てる可能性は？」

「限りなく、０に近いだろう」

「そ、そんな…」

「だが、あいつは諦めないだろうな」

おもむろに、千冬はモニターに映る亮を見る

「篠ノ之。ＩＳランクは何ランクあるか、知っているか？」

「えっ？あ、はい。上からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４ランクです」

「織斑。三崎のＩＳランクを覚えているか？」

「えっ？確か『Ａ』：でしたよね？」

「そうだ」

「あの、織斑先生？一体、何を……？」

何の意味があるのかわからない千冬の質問に困惑する真耶

「直々に試合した私だから言えるのだが、三崎のＩＳランクはそれ以上だと私は考えている」

「つまり、三崎くんは他の生徒達よりも、ＩＳの操作が超越していると？」

「そうだ。ランクを付けるなら、三崎のランクは『ＡＡＡ』だな」

千冬の称賛の言葉に驚く一夏達

「でも、だからって亮兄が不利なのは変わらないんじゃ……」

「そうだな。だが、三崎は追い込まれてから、さらに力を発揮する」

「どういうことです？」

「三崎は入学試験の時も、あのように追い詰められていたが、逆転した。今回もその可能性はある」

「でも、千冬姉には負けたって言っ――――」

パァン！

「ふっ、私に勝つなんて十年早い」

「さいですか」

一夏達は再び、モニターに目を向ける

「ちなみに、織斑先生にＩＳランクを付けるのであれば、何ランクですか？」

「……『Ｓ』だ」

「さいですか」

パァン！

「くっ、なんで当たりませんの！」

一方的に亮を攻撃し続けるセシリア
しかし、全く当たらず苛つきが高まる
セシリアとは逆に、集中力が高まっていく亮

（この感覚・・・懐かしい）

まるで、憑神を使っている感覚
最近、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにアクセスしてないな
今日、帰ったらアクセスするか

（だから、そろそろ）

亮は視線をセシリアに向ける

「終わらせる！！」

亮はレーザー射撃の嵐を掻い潜る

「やらせませんわ！」

セシリアは二つあるミサイルの内一つを放つ

「へっ！」

ドカァァンッ！

「なっ！？」

亮は急に上昇する
その瞬間、亮がさっきまでいた場所にレーザーが通り過ぎ、ミサイルに直撃し相殺する

亮は真っ直ぐにセシリアの方へと向かう
セシリアは亮を撃ち落とそうとレーザーライフルで反撃するが、亮は止まらない

「まだ、もう一発ありましてよ！」

「うおおおぉぉぉぉぉおおっ！！」

最後のミサイルを放つセシリアだが、亮はかまわず突貫。そして――

ドカァァンッ！

大きな爆発音が響きわたり、爆発と光が亮を包んだ

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

誰しもが、亮の敗北が決まったと思った瞬間
爆煙の中から亮が刀型ブレードを振り上げながらセシリアに突撃する

セシリアはレーザーライフルを楯にしようとするが、真っ二つにされる
亮は振り下ろした勢いのまま、一回転し、刀型ブレードは、再びセシリアへと振り下ろされた

そして、高々と決着を告げるブザーが鳴り響いた

『試合終了。勝者――――三崎亮』

「無茶をし過ぎだ。超大馬鹿者が」

何故だ?勝った筈なのに、千冬さんから説教を喰らっている

しかも、『超』大馬鹿者と、一夏以上に酷い扱いだ

「途中までは良かったものの、最後はなんだ?運良くシールドエネルギーが残りはしたが、ほとんど虫の息だ」

そう。俺がセシリアを倒した時のシールドエネルギー残量『１０』と奇跡にも近い数字だ

「でも、あそこで避けていたらジリ貧になって負けてましたよ」

「ふっ、訓練機であそこまで避けといてよく言う」

「そうですわ!どうして、あそこまで華麗に避けられたのですか!」

ぐわっ、と凄い勢いで聞いてくるセシリア

てか、『華麗』って・・・

「そんな大した理由ではないが・・・」

「はい!」

「セシリアが真面目だから避けられた」

「へっ・・・?」

セシリアが予想外な返事だからか唖然とした表情をしている

「簡略し過ぎだ。もっと詳しく説明しろ」

「えっと、ブルー・ティアーズのビットはセシリアの指示で動きますよね」

「ああ」

「無意識だと思いますが、セシリアはビットの指示を脳内でパターン化していたんです」

「パターン化……ですか？」

本当に無意識だったらしい。首を傾げ、俺の言葉をオウム返しする

「例えば、ビット１で敵の背後を狙い、２で避けた方向に追撃、３は注意劣る足下、最後に４で右斜め下４５。の位置でチェックメイト。これがセシリアがよく使うパターン……違うか？」

「い、いえ。あってますわ」

「す、凄い……」

「何でわかるんだよ、亮兄？」

「まあ、昨日の一夏との試合で見ていたし」

「み、見ていたからでそんな事が分かる訳が……」

どうも、信用してくれないな

「まあ、分析とかもやったし」

「ほう？どんな分析をしたんだ？」

「そんな大したもんじゃないですけど、一夏との試合で使ったパターンを全て頭に叩き込んで、どう避けるかを考える」

「め、滅茶苦茶だ・・・」

箒、そんな有り得ないものを見る目を止めてくれ

「それでも、出ていなかったパターンもあったと思うが、それはその時に対処したのだな」

「はい。叩き込んだパターン以外のやつが来たと考えれば、なんとかなりますから」

「ふっ、なるほどな」

少し嬉しそうに見える千冬さん。いや、気のせいだ。あの年中、しかめっ面の千冬さんがそうそう笑顔なんて――――

パキィンッ！

「今日はここまでだ。いいな、三崎？」

「……はい」

今のは、見えなかった……

わざと外してくれたようだが、日に日に鋭さを増している気がする

気を付けなければ……

第9話（後書き）

亮の初戦闘！！ですが・・・・不安だ

これで読者様が納得するかどうか・・・・

感想待ってます

第１０話（前書き）

とうとう１０話

原作とは違うお話・・・というよりも関係ないお話です

第１０話

ＩＳ学園の寮の部屋が決まるまで泊まるビジネスホテルに帰ってきた亮は、食事を取った後、すぐにパソコンの電源を入れた

そして、ゴーグルを付け、あるサイトにアクセスする

そのサイトはもちろん『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』

「おっ？ハセヲじゃんか！」

Δサーバー悠久の古都マク・アヌのカオスゲートに出た瞬間に声をかけられる

ちなみに『ハセヲ』というのは、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』内での亮の名前だ

「よう、久しぶりだな」

話しかけてきたのは、小豆女・・・ではなく、赤髪の女『揺光』だ

「本当に久しぶりじゃん！何やってたんだよ！」

「ちょっとな。学校で色々と忙しくてな」

「ハセヲも高三だから、進学とか大変だもんな」

違うんだが、俺がＩＳ学園に入っているのは秘密にしなければならない。適当に合わせよう

「まあな」

「そっか。それじゃあ、私とパーティー組んで冒険しようぜ！私、前に良いエリアを見つけたんだ！二人で行こうぜ！」

「わかった。だが、その前に装備やアイテムの確認がしたいから先に行っててくれ」

「了解！それじゃあ、エリアワードを渡すな」

揺光から
『Σサーバー　彷徨える　初陣の　占い師』
をもらった

「早く来いよな！」

「ああ」

揺光はカオスゲートにアクセスして先に向かった

（うん。必要なのは、あるし、大丈夫だろ）

確認し終わったハセヲはすぐに揺光を追いかけ――

「ハセヲさ～～ん！！」

――ようとしたが、遠くから大声でハセヲを呼ぶ声

「アトリ…」

振り向いて声をかけてきた人物の名前を呟くハセヲ

「お久しぶりです、ハセヲさん！お元気でしたか？」

笑顔でハセヲと向き合うアトリ。本当に嬉しそうだ

「まあな。お前は…？」

「はい！私は無病息災、元気一杯です！」

両手でガッツポーズをして元気をアピールするアトリ

「それでですね、ハセヲさん。私と冒険に行きませんか？」

「いや、悪いがもう先約がいるんだ」

「えええっ！？そんな～…せっかくハセヲさんにご紹介したいエリアがあるのに……」

お前もかよ、とツッコミを入れたくなったが抑える

「『Σサーバー　彷徨える　初陣の　占い師』ってエリアなんですけど・・・」

ふーん・・・・・

ん?そのエリアワードは確か・・・

「俺は今からそのエリアに行こうとしてるんだが・・・」

「そうなんですか?・・・・・・ちなみに、その先約は誰なんですか?」

何かに気づいたアトリはハセヲに尋ねた

「揺光だけど・・・」

「・・・やっぱり・・」

そう言った瞬間、アトリの背景に雷が落ちたような気がした

・・・・疲れてるのか?

「ハセヲさん!私も一緒に行っても良いですか?良いですよね!」

「えっ?」

「良・い・で・す・よ・ね!!」

重圧感(プレッシャー)のある笑顔で言い寄ってくるアトリ

「お、おう・・」

「では!行きましょう、ハセヲさん!」

さっきの重圧感（プレッシャー）が一気に消えさり、俺の手を引っ張るアトリ

（なんだろう、凄い嫌な予感がする）

俺はアトリとパーティーを組み、不安を胸に抱きながら、揺光が待っているエリアへと転送する

Σサーバー　彷徨える　初陣の　占い師

エリアタイプは神社
モンスターＬＶ１２５
そんな強くないな

「おっ？来た来た・・・って、え？」

エリアに着いた俺達を発見した瞬間、何故か揺光の動きが止まる

「お、おい！ハセヲ！ちょっと来て！」

「おわっ！？」

揺光はアトリから少し離れた場所にまで連れてくる

「なんで、アトリがいんだよ！二人で行こうって言ったじゃん！」

「いや、アトリもこのエリアを紹介したいって言っててよ。それで――」

「揺光さん♪」

「うわぁっ！？」

いきなり揺光の背後から現れたアトリ

アトリ、揺光の背後をとるとは・・・

「揺光さん。抜け駆けはダメですよ♪」

「ぐうぅぅぅぅっ！」

何だろう。今度は二人から火花が飛んだような・・・

重傷だ。今日は早めに落ちよう

「と、兎に角、奥に行こう。なっ！」

「はい♪」

「・・・・・・おう・・」

機嫌が正反対な二人を連れ、俺はエリアの奥へと進んだ

「それで、何でお前らは俺にこのエリアを紹介したがったんだ？」

モンスターが強い訳でも、特別景色が良いわけでもないのに

「はい。ここには黄金の『件』がいるんですよ！」

『件』というのは、ラッキーアニマルというエリア上に必ず、一匹はいて見つけて蹴ると利益をもたらしてくれる動物だ

「『黄金』？件が？」

「ああ。その黄金の件を蹴ると、そのプレイヤーの運勢を占ってくれるんだ！」

なんか、似たようなクエストをやったことがある気がするだが、クエストじゃないところから考えると期間限定のエリアなんだろう

「んじゃ、さっさと黄金の件を蹴って、占ってもらうか」

「見つかりませんね‥」

もう既に第三区間まで来ているのだが、黄金の件(くだん)が一向に見つからない

「おっかしいな。ここら辺にいるはずなんだけど」

「次で最後の部屋だ‥‥‥‥ビンゴ‥」

最後の部屋に入ると、黄金に輝く小さな牛、黄金の件(くだん)がいた

「頑張ってください、ハセヲさん！」

「さっさと終わらせなよ、ハセヲ」

「ああ！」

ハセヲは何事もなく、順調に件(くだん)を三回蹴り終えた

「ふぅ‥」

「お疲れ様です、ハセヲさん！」

「つか、ハセヲ。蹴る時、『死ね』とか言ってなんか憂さ晴らしし

てなかった？」

気のせいだ

『モウ～～、痛かったモウ～～。軽く殺気を感じたモウ～～』

「ほら」

気のせいだ

『では、そなたの今後の運勢を占ってあげるモウ～～。モモモモ、モ～～～～～ッ！！』

奇妙なダンスを踊った後、件から強烈な光を放つ

『モウ。結果が出たモウ。……お主はこれから様々な困難に遭遇し、お主の行く道の壁となるであろうモウ～～』

（様々な困難……）

それは、なんとなくＩＳに関係があるような気がするな

『お主の持つ力を信じ続けることが出来れば、その壁を乗り越えられるであろうモウ』

（俺の持つ力？）

何だ、それ？

現実（リアル）の俺にそんな特別な力はない。何を信じれば良いってんだ？

『後‥‥』

「ん？」

『女難の相がいつも以上に悪くなってるモウから気を付けるモウ～～』

「「！！」」

「はっ‥‥？」

今、何て言った？

『女難の相がいつも以上に悪くなっている』だと！？

つか、『いつも以上』って！？

「ハセヲさん」

「ハセヲ」

「‥‥‥‥‥‥」

何だろう。今度は悪寒を感じた。本格的にヤバいな

「俺、ちょっと用事思い出したから落ちるわ」

「ハセヲさん」

くっ！アトリに腕を掴まれて逃げられない

「私、他にも紹介したいエリアがあるので、早速行きましょう」

「私もだ。全部廻るまで帰さないからな」

否応無しに引きずられて連れてかれるハセヲ

（早速、当たったよ……女難：）

ハセヲは溜め息を吐きながらそう思うのであった

ちなみにその後、二人から紹介されたエリアの総数が軽く５０を超え、寝るのが深夜になった

学校は遅刻しなかったものの、寝不足で体調だけではなく精神的にも不安定に陥り、千冬の『閃光一閃　チョーク投げ』（亮、命名）が初めて決まり、保健室送りにされたのは余談である

第１０話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

G．U．ヒロイン達の登場です

ちょっとベタすぎたかなと反省してますが満足していただけたらいいなと思います

感想よろしくおねがいします

第１１話

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んで見ろ」

四月の下旬
今日も千冬さんの授業を真面目に聞く俺

千冬さんに呼ばれた一夏とセシリアは、すぐにＩＳ専用機を展開させる

一夏は白い機体が特徴な『白式（びゃくしき）』、セシリアは青い機体の『ブルー・ティアーズ』

そういえば、前回、戦ったときと武装が違って――というか、元に戻っていた
俺の時は、セシリアが無理して試作中のビットを付けていたらしいだから、一夏のときよりも反応が早くなっていたのかと納得した
試作中とは言え、性能は高くなっていたから苦労したな

言い忘れてたが、クラス代表は一夏に決定した
理由は、俺とセシリアが辞退したからだ
何で辞退したからと言うと、面倒だったからもあったが一夏にはもっと強くなって欲しいからだ。クラス代表ともなれば、ＩＳを動かす機会が増えるからな

セシリアは……わからない。理由を聞いても、顔を赤くして話を逸らしやがるし

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

セシリアが一気に急下降して、千冬さんの言った目標の位置辺りで停止する

「どうですか、亮さん！わたくしの操縦は！」

遠くからぶんぶんと手を振って訊いてくるセシリア

「あ、ああ。良かったよ」

「ふふふ♪ありがとうございますですわ♪」

俺は小さな声で言ったが、どうやら聞こえたらしい。ＩＳに声を拾う機能も付いているのだろうか

ギュンッ――――――――――――――――――――――――――ズドォォォンッ！！！

いきなり、爆弾が落ちてきた・・・のではなく、急下降をした一夏が
完全停止出来ずに地面に激突

怪我はないだろうが、クラスの女子からくすくすと笑われ、かなり
惨めに思える

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「・・・・・すみません」

姿勢を直し上昇する一夏
無傷であることから、ＩＳはかなり丈夫であることがわかるな

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

あの『ギュンッ！と逝って、ぐっと止まる』で教えたと言えるかど
うか
つか、『逝って』ダメだろ

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになった
だろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

一夏が怯えているのが、よくわかる
あんな千冬さんを見ても、みんなは千冬さんの事を『お姉様』と呼ぶのはどうしてなのか、俺は理解に苦し――――

パキィン！

「私は、お前に学習能力が無いことに理解が苦しむよ」

「……すみません」

千冬『閃光一閃　チョーク投げ』を避けながら謝る亮

（来い……！）

一夏の手のひらから光が放出され、収まった頃には《雪片弐型》が握られている

「遅い。０．５秒で出せるようになれ」

千冬さんの言葉にがくりと首を下に向ける一夏

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは、さっきの一夏よりも早く狙撃銃《スターライトｍｋ？》を展開する

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズを止めろ」

千冬さんが指摘したのは、左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す格好だ

「横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ？正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな？」

「――、……はい」

反論の余地なしか。仕方ない。千冬さんのあの人をも食らいそうな目に睨まれたらどうしようもない

昔の自分はあの目に反抗していたのか……若気の至りって訳か

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ？あ、はっ、はいっ！」

何かを考えていたのか、反応が鈍るセシリア
銃器を光の粒子に変換（『収納（クローズ）』）、そして新た近接用の武装を『展開（オープン）』する

「くっ……」

「まだか？」

だが、さっきの一夏みたいに中々形にならず、光が空中にさまよっている

「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

武器の名前を叫んで武器を展開する
ちなみに、これは教科書の頭の方に書かれている、いわゆる『初心者用』の手段だ
これは、代表候補生であるセシリアにとっては屈辱的だろう

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑と三崎との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

止めとけ、セシリア。今のままじゃ何も言い返せないぞ

そんな人事のようにセシリアを見ていると、その本人に睨まれた
なに？俺が悪いとでも言うのか？

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そう言って一夏以外のみんなが戻るかと思いきや、何故かセシリアが俺の方に来た

「あなたのせいですわよ！」

「はっ？」

いきなりそんな事を言ってくるセシリア

「あ、あなたが、わたくしに飛び込んでくるから・・・」

「いや、『打鉄（うちがね）』は近接用の武装しかねえから仕方ねえだろ」

「せ、責任をとっていただきますわ！」

「なんのだよ・・・」

「なんでもですわ！」

会話が成り立っていねえ

「それじゃあ、放課後に今日言われたことの練習をしよう。訓練機の許可は下りてるし」

「本当ですか！」

不機嫌顔が一気に上機嫌になるセシリア

「ああ」

「約束ですわよ！」

そう言うとセシリアは戻っていった

これで、セシリアの方は大丈夫。後は――

「一夏。片付け手伝ってやるよ」

「ありがとう、亮兄・・・」

第11話（後書き）

感想お待ちしております

第12話

「いやあ、亮兄のおかげで良い特訓になったよ！」

「そりゃ、良かった」

「「……」」

時刻は放課後
場所は第三アリーナ・ゲート前

俺は一夏と話しながら歩いているのだが、後ろの箒とセシリアがギロッと睨みつけている

どうしてこうなった？

俺は約束通り、セシリアと第三アリーナで訓練をしていたのだが、偶然に居合わせた一夏達と合流し、一夏のお願いもあり、一緒に訓練することにしたのだ

「ふん！なんだ、一夏の奴。私が特別に教えてやっているというのに！亮も亮だ。横から口出ししおって……」

「亮さん……有意義な訓練をしてもらいましたが、後半から一夏さんに付きっきり……一夏さん、許しませんわ……」

待ってくれ。俺からじゃなく、一夏が横からお願いをしてきたんだぞ

「亮兄、なんか寒気を感じるんだけど……」

そうだな。原因はお前なんだから当然だ

「ん？」

俺は視線を感じ、辺りを見回すが誰もいなかった
気のせいか？

「亮兄？」

「いや、何でもない」

俺はとりあえず、この状況をどうするかに思考を巡らした

ＩＳ学園・総合事務受付

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音（ファンイン）さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識に届かない
少女――鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だからお隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

鈴音は事務員の話を流しつつ、質問を続ける

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少しおかしなところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって――」

にっこりとした笑顔には、ばっちり血管マークがついていた

「という訳でっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう～！」

ぱん、ぱんぱーん！

クラッカーが乱射される
時刻は夕食後の自由時間
場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた
各自飲み物を手に主役（一夏）をよそに、やいのやいのと盛り上がっている

ちなみに亮はビジネスホテルから寮の小さな一人部屋に引っ越している
なので、パーティーに参加しているが、乗り気ではない

「あっ、ミッチ～！何やってんの？」

「別になんも。つか、その『ミッチ～』ってあだ名止めろ」

「え～！良いじゃ～ん！可愛いし」

のんびりした喋り方をする少女は『布仏本音（のほとけほんね）』
一夏は『のほほんさん』と呼んでいる

「ミッチ～は何で端っこに座ってるの？」

「……賑やかなのは苦手なんだ」

「そうなの～？嫌なら参加しなくても良かったのに～」

「『嫌』じゃねえ、『苦手』なだけだ」

「？？？」

亮の言いたいことがわからず、頭に？を浮かばせながら首を傾げる

「……俺はこうして、みんながああやって賑やかに楽しんでいるのを見るのが好きなんだよ…何だよ？」

亮がわかりやすく、説明していると、にやにやしながら見る本音

「ううん～。何でもないよ～。それじゃあ～私、楽しんでるから～、ミッチ～も楽しんでね～」

「ああ……って、何してる…」

てっきり、騒いでいる一夏たちの方に行くかと思いきや、何故か亮の腕に抱きついてくる本音

「うん～？楽しんでるんだよ～」

「楽しんでるって、おい――」

「何やってますの！？」

亮が本音を離れさせようとした瞬間、セシリアが登場

「え～？何が～？」

「何がではありませんわ！布仏さん！あなた、どうして亮さんに抱きついているのですか！」

「ミッチ～がみんなが楽しんでるところを見るのが好きだ～って言ってたから、私が楽しんでいるところを見せてあげているのだ～」

えっ？俺が原因なのか？

「だ、だからってそのような…は、破廉恥ですわ！／／／／」

「え～」

「いいから離れなさい！」

「うーん。だったら、せっしーも抱きつけば良いんだよ～」

何故そうなる！？

俺がそうツッコミを入れようとするが――

「それならば…／／／／」

良いんかい！

いや、ツッコミを入れている場合ではない

どうにかして、この状況を打破しないと――

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、三崎亮さんに特別インタビューを――――あらあら、お邪魔でした？」

今の俺の状態見て、にやにやする新聞部

「いや、邪魔じゃない。ほら、離れろ」

「ええ～」

「むぅ：」

その不機嫌顔を止めろ

「で、あんたは何者なんだ？」

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

新聞部だからって名刺は必要なのか？

「それじゃあ、何で織斑一夏くんに、クラス代表を譲ったのか教えて」

「やだ」

「即答！？いや、そんな事言わずに」

しつこい記者は嫌われるぞ

「そうだな。強いて言うなら面倒だから押しつけた」

「やっぱり、そうだったの！？」

遠くから一夏の声が聞こえるがスルー

「あはは♪面白いね、亮さんは」

「そりゃどうも」

「それじゃあ、とりあえず二人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

意外そうなセシリア。俺も何でこのタイミングに写真を撮るのかがわからない

「注目の専用機持ちと二人目の男子だからねー。ツーショットもらうよ。あ！握手とかしてると良いかもね」

「そ、そうですか……そう、ですわね／／／／」

何故かモジモジとし始めたセシリア。まあ、握手とか恥ずかしいしな

「あの撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛が俺とセシリアの手を引いてそのまま握手まで持って行く

「「……／／／／」」

頬を赤くして黙り込むセシリア。俺も女子と手を繋ぐなんてそうそう無いため緊張する

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「……７４．３７５」

「せいか～い」

緊張していても答えられた自分に驚く。逆にその方が答えられるのかもしれない

そして、デジカメのシャッターが切られたのだが…

「なんで全員入ってる…」

一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの周りに集結。その行動力に恐怖を感じたよ

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

苦虫を噛み潰したような顔をしているセシリア
逆にクラスのみんなはにやにやとした顔で眺めている

「つか、何で一夏まで？」

「いや、面白そうだったから」

さいですか…

結局、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた
別に疲れはしなかったが、布仏やセシリアが抱きつこうとしたのは本当に困った

第１２話（後書き）

鈴登場！！

そして亮が羨ましい！！！！！

感想お待ちしております

第13話

「織斑くんに三崎くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

朝

俺が一夏と他愛もない話をしているとクラスメイトがそんな事を言ってくる

ちなみに、前までは俺のことを『さん』付けだったが、今では『くん』付けになっている。まあ、別に構わない。それはクラスに馴染めている証拠だろう

「転校生?今の時期に?」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「代表候補生か…」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

直感的にそれはないと思う

でも、この時期に転入は確かに気になる

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう?騒ぐほどのことでもあるまい」

箒もそんな事言っているが、気になっているのだろう。窓側の席に

居たはずなのにいつの間にかここにいるからな

「……」

「亮さんも気になっていますの？」

「ん？…おう」

「……そうですか」

ヤバい

経験上、このパターンは面倒な目に会う

「まあ、箒の言う通り、他のクラス何だ。そんな事より、来月のクラス対抗戦がある。そっちに集中すべきだな」

「そ、その通りだ！お前に女子を気にしている余裕はない！クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をするぞ！」

「げっ！？何でそうなるんだよ！」

よし、これで話題は変わったな

セシリアの視線は変わらないが

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする！」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメイトが口々に一夏に言ってくる
ちなみに、何故クラスみんなが幸せになるかと言うと、クラス対抗戦で一位になると優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られる
女子ならではの商品だな

「織斑くん、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね」

「……亮兄」

なんか一夏が助けてと、ＳＯＳを送っている

「一夏。俺たちの代表なんだから不様な試合をするなよ」

「ぐはっ」

トドメの一言に一夏は机にうなだれる

「で、でも今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「――――その情報、古いよ」

ん？せっかく珍しく一夏を慰める言葉をもらっていたのに、誰だ？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？お前、鈴か？」

どうやら一夏の知り合いらしい

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？何てこと言うのよ、アンタは！」

一夏にからかわれ、動揺する凰鈴音

こいつが代表候補生。セシリア以外の候補生は初めてみたな

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！

凰鈴音に痛烈な出席簿打撃が入る

千冬さんの登場だ

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません・・・・」

さっきまでの態度はどこにいったのか、完全に怯えてしまっている

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

凰鈴音は二組へ向かって猛ダッシュ

とりあえず、俺は怒られる前に自分の席に戻った

「・・・・・・・・・・・・」

亮の隣の席であるセシリアがノートにシャーペンを走らせる。しか

し、書かれている字は全く読めない

（亮さん、さっきの代表候補生のことをじっと見ていましたわね……）

亮はただ、鈴音がどんな人物なのかを確認していただけなのだが、最悪な場面を思い描いてしまう

（もし、亮さんがさっきの方を好きになってしまったりしたら――）

どんどん、妄想がエスカレートしていく。しかも、悪い状況にだ

「――を読め、オルコット」

「へ？」

突然名前を呼ばれ変な声を出してしまう
しかも、前半の方は聞こえず内容が何なのかわからない

「……教科書の１５６ページの２０行目から音読」

ぼそりと、隣から亮の助け舟。セシリアはそのおかげでなんとかやり過ごすことに成功した

「…ありがとうございます」

「……おう」

セシリアの顔を見ず、小さな声で返事する亮

そんな亮を見て思わず笑ってしまう。亮のさり気ない優しさが嬉しいのだ

（亮さんは絶対に渡しませんわ！）

そんな事を考えていたら、結局千冬から出席簿打撃を喰らった

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、開口一番に箒とセシリアが一夏に文句を言っている

「なんでだよ……」

理不尽な言いがかりにそう呟く一夏

箒とセシリアは午前中に山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれていた

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず、学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「決まりだな。亮兄も行こうぜ」

本来なら断るんだが、前に同じことをしたら無理矢理連れて行かれたので承諾する

そのほかのクラスメイトも付いてきて、俺たちは大人数で学食に向かった

「待ってたわよ、一夏！」

ドーンと俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

一夏は冷静に対処しているな

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

そして、一夏たちは食券を食堂のおばちゃんに渡す

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ」

一夏の言い分はもっともだが、早く進んでやれよ。箒が恐い

空いているテーブルにつけるのはいいが、十人近い人数のスペースをよくもまあ見つけられたものだな

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

次々と会話に花が咲く二人

俺らは無視か？

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「ああ、悪い。鈴はただの幼なじみだ」

「……」

おい。凰鈴音がもの凄く睨んでるぞ

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返す箒。まあ、気持ちはわかるが

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小５の頭だよ」

なるほど。ちょうど入れ違いで引っ越してきたのか

ちなみに俺はその前には転校していた。理由は覚えてない

「で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

懐かしそうに呟く一夏

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

凰鈴音はじろじろと箒を見る。箒は箒で睨み返していたが、なんか恐い

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人だが、間には火花が散っている
見えないなら眼科に行け。いや、行くのは俺か？

「んんんっ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん」

「……誰？」

同じ代表候補生として、挨拶をしたが、その一言

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリア
しかし、本当に興味のない顔をしているな

「い、い、言っておきますくけど、わたくしあなたのような方にはまけませんわ」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

はったりではなさそうだ。その言葉には自信が満ち溢れているのがわかる
さすがは代表候補生ってことか？

「一夏。そこのイギリス代表候補生には興味ないけど、アンタの隣にいる奴は誰よ？男よね？」

鳳鈴音の視線が俺に向けられる

「この人が亮兄だよ。前に話した」

「ああ。アンタの目標としている人よね」

なんだ、その話は？初耳だ

「って、確かその人は年上じゃ……何で一年にいるのよ」

それは俺が聞きたい

「もしかして頭が悪くて留年とか？」

悪びれた顔もせず、さらっとそんな事を言ってくる

「違うよ。亮兄は政府に言われて無理矢理入れられたんだ」

「ふうん、そうなんだ」

また俺のことをじろじろと見る。見せ物じゃねえぞ

「三崎亮だ。よろしく、凰」

「よろしく、亮。それで一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……」

凰は注文したラーメンのスープをごくごくとどんぶりを持って飲む。

かなり豪快な奴だ

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

「そりゃ助か――――」

ダンッ！

テーブルが叩かれた音が目の前に起きる

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「…あなたは二組でしょう？敵の施しは受けませんわ」

怒りを露わにする箒に、静かに怒っているセシリア

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているだ」

実際に見ていないが本当に『どうしても』と頼んだのだろうか？

「まあ、いいや。そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね？久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

「あいにくだが、一夏は私と亮とのＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

ちょっと待て。さり気なく俺も教えることになっていないか？

「ちょっと待ってくださいませんか！どうして亮さんまで、一夏さんの特訓に参加するのです！亮さんは放課後、わたくしと『二人きり』で特訓をする予定ですのよ！」

「そっちの方が教えやすいのだから、仕方あるまい。良いだろ、亮」

箒の抽象的な表現の教えを具体的に俺が解釈して教える、教えやすいってこれでは俺が教えているのと変わらない気がする

「……わかった」

「亮さん！」

「そんな恐い顔をするな。ちゃんとセシリアの特訓にも付き合う。

だから、これ飲んで落ち着け」

「……／／／／」

最近わかったのだが、セシリアを大人しくさせるのには、コーヒー牛乳を渡すのが有効だとわかった
理由はわからないが

「あと、一夏。特訓が終わったら、凰と会ってやれよ。久しぶりの再会なんだから」

「そうだな。鈴、それで良いか？」

「う、うん。わかったわ。亮、アンタ結構言い奴じゃない」

凰が嬉しそうに言ってくる

「ちゃんと空けといてね。じゃあね、一夏！」

ラーメンのスープを飲み干して、凰は片付けに行ってしまった

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「……／／／／」

箒は一夏を睨みつけながらそう言い、セシリアは未だにコクコクとコーヒー牛乳のストローをくわえていた

第１３話（後書き）

連続投稿継続中

六時ごろに第１４話更新予定です

感想お待ちしています

第１４話

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「お、おう……」

「あ、ああ……」

ぜえぜえと息が切れている一夏に、一夏ほどではないが疲れが体にのしかかってくる俺に対して、セシリアと箒はけろりとしている

「ふん。鍛えていないからそうなるのだ」

無茶を言うな。一夏はともかく、俺は殆ど家で、勉強か『Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ』をやっていたから体力などついているわけがない

しかも、俺はセシリアの特訓と箒の教えの解釈をしたりと二重に疲れ、最後には男女で別れ、２対２のＩＳ戦をした

結果は惨敗

一夏のフォローをするのが、かなり大変だったと言っておこう

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるし、亮のフォローがないとダメなのだ。もっと自然体で制御できるようになれ」

「ううっ、ごめん亮兄」

「……気にすんな」

責めても仕方ないし、組み合わせが悪い
あっちは近中距離と揃っていたから役割分担ができるが、俺らは二人とも近距離だからどちらかがフォロー役に回るしかない

「ところで箒、ものは相談なんだが……」

「なんだ、行ってみろ」

「今日、先にシャワー使わせてくれよ」

そういえば、この二人は同じ部屋だったないろいろと大変そうだ

「一夏っ！」

バシュッとスライドドアが開き、凰が現れる

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「サンキュ。あー、生き返る……」

おい。親父臭いぞ、一夏

「変わってないね、一夏。若いくせに体のことばっかり気にしてるとこ」

「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんのだぞ。クセになるからな。あとで泣くのは自分と自分の家族だ」

それは偉いな。俺は多分手遅れだが

「ジジくさいよ」

「う、うっせーな……」

「一夏さぁ、やっぱ私がいないと寂しがった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくってさぁ」

やけに上機嫌な凰

久しぶりに一夏と話すのが嬉しいのだろう

「あー、ゴホンゴホン！」

いきなりわざとらしい咳払いで二人の会話を遮る箒

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていいぞ」

「おお、そりゃありがたい」

「では、また後でな。一夏」

『また後で』をやけに強調されていた気がする

波乱の予感だ

「一夏、今のどういうこと？」

「ん？いや、いつもは箒が先なんだが、今日は汗だくだから順番を変わってくれって頼んで――」

「しゃ、しゃ、シャワー！？『いつも』！？い、一夏、アンタあの子とどういう関係なのよ！？」

さっきまでの上機嫌はどこへやら。かなり不機嫌を通り越して怒っている

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ」

「……は？」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかったんだと。だから、今は普通にふたり部屋で――」

「ぞ、それってあの子と寝食を共にしてるってこと！？てか、何で亮と代わんないのよ！」

「いや、ちゃんと箒にも代わったほうが良くないかって聞いたら『嫌だ』の一言で」

「亮！アンタもアンタよ！」

仕方ないだろ？

もし、代わるって言ったら木刀で叩かれる勢いの表情だったんだぞ

「でもまあ、箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっちまうからな」

「……」

「うん？どうした？」

「……ったら、良いわけね……」

「？」

うつむき加減の凰が何と言ったのか聞き取れず、耳を傾ける一夏

俺からの角度から見えていたが、かなり顔が恐かった

「だから！幼なじみなら良いわけね！？」

「うおっ！？」

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

何がわかったんだろうか？

「一夏っ！」

「お、おう」

「幼なじみは二人いるってこと、覚えておきなさいよ」

「別に言われなくても忘れてないが……」

「じゃあ、後でね！」

そう言って凰はピットから飛び出していく

何がなんだがよくわからない

「うーん……」

「……先、行くぞ」

一夏もよくわかっていないようだ

とりあえず、俺は着替えて部屋に帰りたいからピットから出て行った

「最っっっ低！」

「！？」

俺は寮から離れた職員用のトイレを使い終え、自分の部屋に帰る途中だったのだが、いきなり大きな怒声が横の部屋から聞こえる

（『１０２５室』・・・確か、一夏の部屋だったような）

「女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

バタンッ！

「……」

「……」

その部屋からドアを蹴破らんばかりの勢いで出てきたのは凰だった
少し目を合わせて沈黙が広がった後、凰はダッシュで走っていってしまった

（今、泣いてたな…）

目を合わせたとき、凰の目に今にも零れ落ちそうな涙が溜まっていた
俺はなんとなくだが、ほおっておけなくなって走り出した

（一夏の馬鹿、一夏の馬鹿、一夏の馬鹿、一夏の馬鹿、一夏のバカ！）

鈴音は、夜中であろうと関係なしに走っていた

（バカバカバカバカバカバカバカ……一夏のバカ！どうしてあんな大切約束を忘れるなんて！）

一夏との約束それは『あたしの料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』と、日本で言う『毎日味噌汁を～』の中国版だ

一夏はそれを『おごってくれる』と勘違いをしてしまった

鈴音はそれがショックだった

覚悟して伝えた言葉がまさかそんな風に伝わっているなんて考えたくもなかった

「一夏のバカ……」

鈴音は一人悲しみに潰され――――

「……ここに…いた…か」

かけたときに一人の男が声をかけてきた。それは一夏ではなく、二人目のＩＳ操縦者だった

第１４話（後書き）

二話連続投稿！！

続きは明日公開予定

感想お待ちしております

第15話

「‥‥ここに‥いた‥か」

かなり速かったから追いつくのは無理かと思ったが、奥の階段の下で小さく体育座りをしている
まるで、誰かに追いかけて来るのを望んでいたかのように
望んだ相手は俺ではないかもしれないが知ったことではない

「‥‥‥‥‥‥‥」

凰は顔を上げようとはしない。泣いている顔を見られたくないのだろう

「‥‥‥とりあえず、ここじゃ風邪をひく。部屋まで送っていくが」

「‥‥いい‥‥‥帰りたくない‥‥ほっといてよ」

必死に声を絞り出して言う凰
はい、そうですか。という訳にはいかない

「それじゃあ俺の部屋に来い。何か飲み物でも飲んで――」

「ほっといてって言ってるでしょ!!」

凰は腕で顔をうずめながらも大きな声で、俺の言葉を遮る

「断る‥‥」

「何でよ！アンタには関係ないでしょ！！」

「関係ある。お前が泣いていたからだ」

「え……？」

鳳は少しだが顔を上げ、俺の見る
鳳の顔は目が赤く、鼻がぐしゃぐしゃ。さっきまでの自信満々な鳳
の顔は無くなっていた

「確かに俺と鳳はまだ会って1日も経っていない。でも、俺は泣い
ているお前をほっとくことはできない！」

「亮……」

俺は鳳に手を差し伸べる。

「一人で立ち上がれないなら俺が手を貸す。だから泣くな」

俺が『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』で一人になったときに手を差し伸べて
くれた仲間たちみたいに

「とりあえず、俺の部屋にくるか？タオルと飲み物なら出してやれ
るが……」

「うん……」

鳳は恐る恐るだが俺の手を掴み立ち上がった
そして、俺は下を向いた鳳を引っ張りながら部屋に戻った
一人の仲間の悩みを解決するために

「……つまり、一夏は凰との大切な約束を忘れていて。それで一夏と喧嘩をしたと？」

全く、あいつは何をやっているんだか……

「そうよ！本当にあのバカは本当に唐変木なんだから！」

ボリボリと俺が買い溜めしていたお菓子が食い荒らしていく凰

飲み物を出すと言っただけなんだが

でも、話を聞いてスッキリしたのかさっきよりも明るさを取り戻してきた

後は一夏との問題だけだな

「一夏にも悪気はないんだ……と言ってもこればかりは……」

一夏のフォローができない。悪意のない行動は逆に人の心を深く傷つける

「完全に一夏が悪いわ！それに一夏は飛び出したアタシを追いかけて来てくれなかった……」

うっ、そう言われるとなんだか追いかけてしまった俺に罪悪感が生まれる

「その、すまん……」

「え？あっ、べ、別に亮を責めてる訳じゃないわよ」

「でも鳳は一夏に追いかけて来て欲しかったんだろ？」

それに、もしかしたら一夏が今頃探しているかもしれない

「うん……でも、嬉しかった。亮が追って来てくれて、手を差し伸べてくれて……嬉しかった」

素直に思いを伝えてくる鳳。ぐっ、なんか凄く恥ずかしくなってくる

「……／／／／」

「……／／／／／」

なんだ、この居ずらい空間は！

今にも部屋から飛び出したい気分だが、生憎ここは俺の部屋だから無理だ

「あ、あのさぁ……」

「な、何だ？」

「もう夜遅いしさ。ここに泊まっちゃっていい？」

……は？

「いや、ダメだろ？」

「…アンタ、随分冷静に返すわね」

なんか、もう俺の精神がいろいろとダメージを喰らって逆に冷静になっちまったよ

「でも、凰。お前、着替えとかどうすんだよ？」

「あるわよ？全部ここに」

全部ってそのボストンバックにか？

そういえば、それだけで箒と部屋を代わってもらおうとしていた、と言ってたな

「でもここは一人部屋だぞ？」

「いいわよ。アタシは床で寝るから」

なんて逞しいヤツだ

「千冬さんにバレたら大変なことになるぞ？」

「……そこはまあ、なんとかなるわよ」

今、かなり揺らいだな。そんなに千冬さんが恐いんだな、よくわかる

「……わかった、止めとくわ。これ以上、迷惑かけたくないし」

そう言って凰はボストンバックを持ってドアに手をかける

「じゃあね、亮。楽しかったわ」

「凰。一応聞くが、ちゃんと自分の部屋に帰るんだろうな？」

「……」

返事がない。恐らく、また階段辺りで寝るつもりだ。床で寝れるんだから階段で寝るくらいどうってことない筈だ

「……待て、凰。今日は泊まってけ」

「えっ！」

予想外な俺の言葉にかなり驚いている凰

俺も自分がどうかしてるのはわかっている。だが、ここでを送り出して階段で寝ている凰が千冬さんに見つかり怒られでもしたら後味が悪い

「いいの？」

「ああ」

俺は軽く甘くなった自分を怨んだが、凰の嬉しそうな表情を見てどうでもよくなった

「着替え終わったか？」

「う、うん・・・」

鈴音は二人部屋より狭いシャワー室でパジャマに着替え出る

（アタシから言っといてなんだけど、かなり恥ずかしいわね）

成り行きとはいえ、亮の部屋で泊まるという事態に落ち着けない鈴音

「そ、それじゃ早く寝ないとね、明日早いし」

そそくさとボストンバックを枕に寝ようとする鈴音だが

「待てよ」

「あだぁ！？」

亮は鈴音が頭を乗せているボストンバックを抜き去ってしまう。そ

の際に頭の下が空間となってしまい重力に負け、床に頭をぶつけてしまう

「な、なにすんのよ！」

「お前はベッドで寝ろ。俺が床に寝る」

「え？」

またもや、亮の予想外の言葉に変な声を漏らす鈴音

「なんで……はっ！まさか、アンタ。そうやってベッドに誘い込んでアタシを襲う気じゃ――――」

パァンッ！

「なに変な妄想してやがる。このマセガキめ」

亮は机に置いてあったノートで千冬みたいに鈴音の頭へと振り下ろす

「今日だけだ。今度来たら問答無用に床で寝させるからな」

そう言って亮は腕を枕にして寝転がる

（『今度』か……）

鈴音は亮の言葉を繰り返す

『今度』と言うことはまた押し寄せても泊めてくれると言うことだ

今回みたいなケースであればの話だが

「ねえ、亮。起きてる？」

「……おう」

「アタシのことさ。『凰』じゃなくて『鈴（リン）』って呼んで欲しいんだけど、ダメかな？」

いつもなら呼びなさいと無理矢理言わせるのだが今回は口がそう回らなかった

「ああ、わかった」

亮は二つ返事で承諾

（優しいな……一夏とどっちが優しいんだろ？）

鈴音はベッドを背にして寝る亮を見てそう考える

「おやすみ、亮」

「ああ、おやすみ。鈴」

亮に名前で呼ばれたのは嬉しかったが、ベッドの暖かさに今日1日の疲れが襲いかかり鈴音はそのまま夢の中へとダイブした

翌日、早朝に鈴が部屋へと戻り、目が覚めてしまった俺は適当に散歩していると、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった

表題は『クラス対抗戦日程表』

一組の一回戦の相手は二組

つまり――――一夏の相手は鈴だった

第１５話（後書き）

連続投稿継続中！！

正直、やっちまった！！！って気分です。鈴のフラグは当初、立てる気はなかったんですけどね。なぜこうなった？

感想お待ちしております

第16話

五月

鈴が俺の部屋に……思い出すのは止めよう
まあ、それから数週間たったが、鈴は一夏と仲直りしていないらしい
一夏に仲直りするように説得してみるが――
「……いや、会おうとしても避けられてて…」
と、鈴が避けているらしい
だから、俺が鈴に一夏と話をするように言ってみるが――
「ふん！あっちから謝りに来なきゃ話さないわ！はあ？行っているけど、アタシが避けてる？ふざけんじゃないわよバカ！」
――と、何故か俺が馬鹿扱いされてしまう有様。さらに俺が鈴の呼び方が変わっていることにセシリアから怒らてしまう
踏んだり蹴ったりだ。特に最後が理不尽すぎる
それに何で俺がこんな仲介役になっているんだろうか。俺から進んでやっているから文句は言えないが
「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」
今日もまた一夏の特訓のため第三アリーナへと向かっている

「ＩＳ操縦もようやく様になってきたな。今度こそ――」

「まあ、わたくしと亮さんが訓練に付き合っているんですもの。このくらいはできて当然、できない方が不自然というものですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法（メソッド）が役に立つものか。まあ、確かに亮は役に立ってはいるが……だ、第一、一夏のＩＳには射撃装備がない」

その通り。一夏のＩＳ『白式』には射撃装備が一切ない
説明は省くが、結局のところ近接ブレード一本というのが一夏のＩＳのスペックだ
白式の装備『雪片弐型』は確かに強烈だが、かなり厳しいものがある

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう。ＩＳを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！剣の道はすなわち見（けん）という言葉を知らぬのか。見とはすべての基本においてな――」

「亮さん、今日の一夏さんの特訓は昨日の無反動旋回（ゼロリアクト ターン）のおさらいから始めましょう」

「ええい、このっ――聞け、一夏、亮！」

「俺は聞いてるって！」

「ついでに、俺まで被害に……とりあえず、落ち着け」

ここでまた喧嘩されても困るため、箒を落ち着かせる

「亮さん！この際ですから言ってやってください。剣術訓練は時間の無駄だと」

「な、なんだと！それなら、亮！こいつに射撃装備のない一夏に中距離射撃型の戦闘法（メソッド）は無意味だと」

状況を悪化させてしまっただけのようだ

二人は睨み合って、今にも乱闘になりそうだ

バシバシッ！

「とりあえず落ち着け」

俺は手刀で二人の頭を軽く叩いた

「しかし・・・」

「ですが・・・」

「結論から言うが、俺はどっちも時間の無駄とか、無意味だと思ってない。箒の剣術は一夏のＩＳ戦闘で応用できるし、さっき言っていた『見（けん）』は状況判断にも十二分に役立つと思ってる」

「ふっ」

「ううっ」

箒がどうだ、と得意げに薄ら笑いを浮かべセシリアを見る
セシリアは悔しそうに箒を睨む

「セシリアの中距離射撃型の戦闘法（メソッド）だって習っておいて損はない。知っていれば、相手の動きが見えてくるし、自分の動きを最適化できる。一石二鳥だ」

「ふふふっ」

「むっ」

今度は立場が逆になっている

「だから、俺はどっちも必要で大切だと思っているわかったか？」

「ああ……／／／／／」

「はい……／／／／／」

ん？何故か二人の顔が赤いような？

「亮兄、今の言い方じゃ勘違いされると思うんだけど」

よくわからんが、二人の口喧嘩を終わらせた俺たちは第三アリーナのAピットに入る

「待ってたわよ、一夏！」

おっ？何故か鈴ががいる。先回りでもしたのだろうか

それに、腕組みをしてふふんと不敵な笑みを浮かべている

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「はんっ、アタシは関係者よ。一夏と亮の関係者。だから問題なしね」

問題ないかもしれないが、何で俺の名前まで入ってる？

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗っ人猛々しいとはまさにこのことですわね！」

ヤバい

二人がキレた

「とりあえず、落ち着け」

なんだか俺、仲裁役が身についてきた気がする

「鈴、一夏に話があるんだろ？」

「う、うん：ありがとう、亮／／／／」

最近、会う度に鈴の顔が赤くなっている気がする。何故だ？

「……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！アタシを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

チラッと俺の方を見た後、そう言い放つ

「おう」

即答だった
おかしい。俺はちゃんと会いに行けよと言ったのだが

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！謝りなさいよ！」

雰囲気が悪くなってくる。なにか、言うべきなのかもしれないが二人のためにならないから黙っておこう

「だから、何でだよ！約束覚えてただろうが！」

「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

意味？そういえば約束ってなんだった？一応、聞かないでおいたが

やはり気になる

「くだらないこと考えてるでしょ！？」

びっくりした

今、俺のこと言われたのかと思ったら一夏の方だった

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

ますます約束の内容が気になってくる。いや、考えるのは止そう。

不謹慎だ

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

「せ、説明は、その……」

一夏を指差したままのポーズでボッと赤くなる鈴

そんなに説明しづらい約束なのだろうか？さらに気になる。あっ、

不謹慎だ

「なんだ？止めるなら止めてもいいぞ？」

「誰が止めるのよ！あんたこそ、アタシに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

なんかもう口喧嘩が小学生レベルに落ちている

そして、一夏は言ってはいけないことを言ってしまう

「うるさい、貧乳」

ドガァァァンッ！！！

いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋全体がかすかに揺れた
見ると、鈴の右腕はその指先から肩までがＩＳ装甲化していた
あれは部分展開と言って結構、難しいらしい
セシリアはできるが、一夏はまだ上手くできない

（しかし、今なにをしたんだ？）

ちらりと壁を見ると、直径三十センチほどのクレーターができている
普通のＩＳではそうそうこうならない

「い、言ったわね……言ってはならないことを、言ったわね！」

俺が考えてる間に話が続けられる
ぴじじっとＩＳアーマーに紫電が走る

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」

これは反論の余地はない

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で叩きのめしてあげる」

最後に、鋭い視線を一夏に送ってから、鈴はピットを出て行った

「……パワータイプですわね。それも一夏さんと同じ、近接格闘型……」

真剣な眼差しで壁の破壊痕を見つめるセシリア

しかし、俺はやらなければいけないことをすることに「一夏、言い過ぎだ」

「……うん、反省してる」

後悔した表情を見て、俺はそれ以上一夏を言い責めることはしなかった

第１６話（後書き）

連続投稿継続中！！

感想お待ちしております！！

第17話

一夏の特訓が終わった後、俺は教室に忘れ物をしたため校舎にいる

「おい、三崎。何をしている」

廊下を歩いていると千冬さんと遭遇した

「下校時間はとっくに過ぎているぞ。早く帰れ」

「いや、せめて理由を聞いてくれても良いじゃないですか」

「どうせ、忘れ物でもしたのだろ。明日にしろ」

何故わかるのだろう？

伊達に教師をやっていないからであろうか？

「わかりましたよ。でも……」

俺は千冬さんが持っているものに目を向ける

おそらく書類だと思うがかなり量があり重そうだ

「手伝いますよ」

「結構だ。早く帰れ」

二つ返事で断られた。しかも即答

「……」

「あっ、おい」

俺は引ったくるように大量の書類を持つ。結構、重いな

「人の厚意は黙って受け取れ。たまにはそんな日があっても良いだろ？」

「むっ・・・・」

俺の強い言い方に納得のいかない表情をしている千冬さん

この人はこのくらい強引じゃないと言うことを聞いてくれない

「では、後からくる山田先生の方を手伝え。私の方はいい」

溜め息混じりにそう言って、書類を取ろうとする

「この書類を運んだら山田先生のところに行くよ」

どうせ、あの人はトロいからそれでも間に合うだろ

「千冬さんも女の子なんだから、頼ることも覚えた方が良いぜ」

「・・・・・・・・ふっ・・私を『女の子』扱いか。良い度胸だ」

ヤバい。地雷を踏んだか？

「山田君はともかく、私に『女の子』なんて言葉は似合わんよ」

「んなことねえと思うけどな・・・・」

「ほう・・・どこがどう私は『女の子』なのか説明してもらおうか」

「先生。この書類はどこに運ぶんですか？」

「話をそらすな」

ぐっ、ダメか

「その・・・・・言わないとダメですか？」

「ダメだ」

また、即答かよ
正直、恥ずかしいんだぞ。そう思って不意に千冬さんの顔を見ると、ニヤケていやがる
俺が苦しんでいるところを見て楽しんでいるのか
そして、最終的に恥ずかしさで逃げ出す俺を待っていやがるな？この策士め
負けてなるものか！！

「千冬さんは、弟思いで優しいし、花壇で花を見て微笑んでいるところを山田先生に見られ慌てているところとか、可愛かったですし」

「・・・・・・見られていたのか・／／／／」

ええ。ばっちり

「そんな優しくて可愛い千冬さんは十分『女の子』ですよ／／／／」

ぐおぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおお！！！！！

言ってはみたが、なんだ、この羞恥プレイは！？
恥ずかしさのあまり死んじまうぞ！

「……／／／／」

あ、あれ？千冬さんがいきなり歩きだす

「こっちだ。早く来い」

顔を見せずそう言って歩きだす千冬さん
一瞬だが千冬さんの頬が赤くなっているのが見えた
恥ずかしいのやら、嬉しいのやら

「へいへい」

わからなかったが、俺は貴重な千冬さんの一面を見れたので、まあいいかと思った

パァンッ！

千冬さんに出席簿アタックを喰らったが……
終わった後、山田先生の書類を手伝ったら、とても喜ばれた

「……」

「……」

夜の九時

シャワーでも浴びようかと思っていたところに、ドアがノックされた

誰かと思い開けてみると、そこにはボストンバックを片手に持った

鈴がいた

「来ちゃった♪」

バタンッ！

よし、忘れよう

そう思った俺は鍵を閉めようとする

バタンッ！

「ちょっと！いきなり閉めるんじゃないわよ！」

おいコラ。ドアを蹴り開けるな

「いきなりそんな発言をされたら閉めたくもなる。それで、どうしたんだ？……って一夏の事か」

「う、うん……」

しょんぼりした表情で俯く鈴

「……わかった、入れ」

「ありがとう、亮」

部屋の前で話してもしょうがないから鈴を中に入れることにした

「で、相談にきたのはわかる。が、何でまたボストンバックを持ってきてんだ？」

「決まってるじゃない。亮の部屋に泊めてもらうためよ」

さらっと、また俺の買い溜めしたお菓子を食いながらそんなこと言いやがった

「はあっ……ダメって言っても聞かないんだろ？」

「ほぅへんひゃない（当然じゃない）」

「たく……ちょっと待ってろ」

「？」

数分後

「これで完成だ」

「完成って・・・」

鈴が呆然としている

鈴が寝る布団を敷いただけではなく、布団とベッドの間にしきりを建てたのだ

「あんたなんだかんだで泊める気満々じゃない」

「お前が相談ごとがあるっていうから特別に用意したんだぞ。見られたのが山田先生でなく千冬さんだったら大変な事になってたぞ」

ちなみに言い訳は、布団じゃないと寝れません、だ。正直、苦しい

「それって、あ、アタシのため？」

「・・・・・・まあ・な」

じゃないと、手配した意味がない

「そ、そうなんだ・・・・・り、亮にしては気がきくじゃない！」

「そりゃあどうも。鈴、ちょっとシャワーを浴びてくる」

「え?う、うん」

俺は鈴に一言言ってからシャワー室に入った

「なにやってんだろうな、アタシ・・」

一人、部屋で回りを見渡しながらそう呟く鈴音

(正直、断られると思っていたけど・・・)

亮はすんなりと泊まることを許した。それだけではなく、布団やしきりまで用意していた

「ほんと、優しいな・・・・・・ん?」

鈴音は呟いているとあるものを見つける

パソコンだ。大して高価でもないし最新でもないが目に入った

「ちょっとくらいなら・・・・・良いよね?」

鈴音はパソコンの電源を入れる

（『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』？）

画面に出てきたのは、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄのログイン画面だ

（聞いたことあるわ。確か……）

「……なにやってんだよ……」

「ひゃあっ！？」

シャワーをすませた亮に横から声をかけられ、変な声を上げてパソコンから離れる鈴音

「なに勝手にパソコン使ってんだよ」

「う、うるさいわね！別に良いじゃない！それとも、何か見られたくないものでも入ってんの？」

「入ってねえよ！たく、なんでそんな考えになるんだよ」

亮はこめかみに手を当てながら呟く

「う、うるさい！あんたが悪いんじゃない！」

鈴音は亮を睨みつけながら、そう言ってしまう自分が嫌になってくる

（悪いのは完全にアタシなのに……）

「はいはい」

亮はパソコンの電源を切ると、冷蔵庫から飲み物を取り出しベッドに座る

「試合を見たわ。亮、あんたって結構強いのね」

「そうか？」

「ええ。それなのに、どうしてあんたはそんなに謙虚なのよ」

鈴音が知っている一夏以外の男は、少し力がある、ちょっと年上、それだけで威張ってくる奴らが大嫌いだった

しかし、亮は違う。威張るどころか相手の意志を尊重している。だからといって言い成りになるわけでもない

「んなことねえよ。俺も昔はちょっと力を手に入れたら自慢したがるガキだったさ」

「それじゃあなんで？」

亮は飲み物を一口

「知ったからさ。力は自慢するもんじゃないって……」

「だったら、力って何なのよ？」

「さあな……自分で考えろ」

「なによ、もったいぶって」

「その答えは自分で探さないと駄目なんだ」

「何でよ？」

「人によって違うからさ。俺と鈴が違うように」

鈴は亮の目を見て感じた

（優しさ・・・ううん。こうして人を惹きつけるのが亮の力なのかもしれないな）

「私もう寝るわ」

「ん？相談ごとはいいのか？」

「ええ。もう大丈夫」

そう言って鈴音は布団の中へ潜り込んだ

「それでも、俺の部屋に泊まるのは止めないんだな」

「当然！」

ふぅと溜め息を吐いた亮はベッドに入る

「ねえ、亮」

「ん？」

「亮は女の子の胸は大きな方が好き、それとも小さな方が好き?」

「な、なに変なこと聞いてやがる!さっさと寝ろ!／／／／」

「はーい」

鈴音は布団で、亮の慌てふためいた顔を思い浮かべ、笑いながら眠りにつくのであった

第17話（後書き）

連続投稿継続中！！

とりあえず、一言申し訳ないと謝りたい

書いていてさすがの亮もここまでするか？と思いましたが大丈夫かなと思い投稿しました

千冬もちょっとは心開いてきましたし・・・・

感想お待ちしております

第１８話

試合当日、第二アリーナ第一試合
組み合わせは、一夏と鈴
噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員
それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされている
そして、俺はピットから箒、セシリアと一緒にリアルタイムモニター見て、二人の戦いを見守る
一夏と鈴は既にアリーナ中央で試合開始のときを静かに待っている
ちなみに白いＩＳが一夏で、赤いＩＳが鈴だ
鈴のＩＳは『甲龍（シェンロン）』
ブルー・ティアーズと同じ、非固定遊部位（アンロック　ユニット）が特徴的だ。俺はあれが目みたいで気色悪く感じた
『それでは両者、規定の位置まで移動してください』
アナウンスに促されて、一夏と鈴は空中で向かい合う
「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」
「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」
「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シー

ルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

つまり『殺さない程度にいたぶることは可能』ということだ

『それでは両者、試合を開始してください』

ガキィンッ!!

試合開始のブザーが鳴り終えた瞬間に二人が動いた
そして、一夏の《雪片弐型》と鈴の青龍刀の形をした《双天牙月》がぶつかり合う

「ふぅん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

鈴の双天牙月をバトンを扱うかのように回すと自在に角度を変えながら斬り込んでくる

「くっ・・・」

「――甘いっ」

「ぐあっ!?」

パカッと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った
瞬間、一夏が地表に打ち付けられた

「なんだあれは……？」

一緒に見ていた箒がそう呟く

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲撃化して撃ち出す。ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

箒は一夏が心配で聞いていないが、それは確かに厄介だ。一夏はどうやって対抗する？

「鈴」

そう思った俺だが一夏の目を見て安心する

「なによ？」

「本気で行くからな」

今の一夏の目は絶対に負けないと心に刻んだ目だ

「そんなこと、当たり前じゃない！格の違いってのを見せてあげる

わよ！」

鈴は双天牙月を構え直す
一夏は距離を詰めようと加速姿勢に入った
あれは、一週間、俺たちが協力して身につけた技能『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使う気だ
成功すれば代表候補生の鈴とはいえダメージを与えられる。失敗すれば、そこで終わりだ

「うおおおおっ！」

ズドオオオオオオオオンッ！！！

「！？」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走る
鈴の衝撃砲でもこんな威力はない

よく見るとステージ中央から煙が上がっている
さっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波のようだ

「なにが起きてんだ・・・」

俺は乱入してきたヤツを見た
姿からして異形なＩＳだった。深い灰色をしたそのＩＳは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている
そして、そのＩＳが『全身装甲（フルスキン）』であることだ

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

声を荒げている山田先生。どうやら一夏と鈴は突入隊がくるまで食い止めるようだ

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「・・・・あの、先生。それ塩ですけど・・」

「……」

ぴたっとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ…？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……」

「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミスを――」

「……」

気づけよ、山田先生。明らかにその言い方はヤバいだろ

「あ、あのですねっ――」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

「いただきます……」

「暑いので一気に飲むといい」

悪魔か！

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、――これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示されたのはこの第二アリーナのステータスチェックだった

遮断シールドがレベル４に設定、扉がすべてロック……あのＩＳの仕業か

一夏と鈴はそのＩＳと戦っている。もし、遮断シールドがなくなったとしても、専用機のない俺には何もできない

「くそっ……」

「三崎、どこへ行く」

舌打ちをし、扉に向かっていた俺の足が千冬さんにより止められる

「……避難ですよ。専用機のない俺がここにいても仕方ないので…」

「りょ、亮さん……」

「セシリア、一夏たちを頼む」

「亮さ――――」

「止めるな、オルコット。行かせてやれ」

俺を呼び止めようとするセシリアを千冬さんが止める

「で、ですが……」

「自分の状況を正確に判断した結果だ……奴の手を見ろ」

「えっ？……あっ！」

亮の手は、強く握られ真っ赤に染まっていた

「あいつも悔しいんだ。一夏たちを助けたくてもできないのが……」

「亮さん……」

俺は無力な自分を恨みながら部屋をあとにした

第１８話（後書き）

連続投稿継続中！！！

とうとう出ました。クラス対抗戦！

続きは明日に更新・・・・出来たらいいな

感想お待ちしております

第１９話

俺は走って避難する生徒達の後をたどりながら歩いている

（一夏たちは大丈夫だろうか）

歩きながらそれしか考えていない

廊下にあるモニターには千冬さん達が消したのだろう。何も映し出されていない

（今は信じるしかない・・・悔しいが）

信じることに決めた俺は避難所に向かおうと――

ピピピピピピッ！

――したとき、いきなり携帯電話が鳴り響いた

（何でだ？ここは圏外の筈・・・・・）

この第二アリーナもそうだが、このＩＳ学園の施設は盗聴防止のために電波を遮断している

それなのにも関わらず、メールが届いた

俺は、メールを確認することに

（送信元は不明、内容は……！？）

俺は内容を見た瞬間、驚愕する

内容は――――

《力が欲しいか？欲しいなら指示通りに動け》

――――だった

（これは怪しい……）

さっきの侵入者の仲間かもしれない

（添付ファイルに指示と地図が載ってる）

しかも、その地図は、ここ第二アリーナの全体図

罠の可能性は高い。でも、行かなくてはいけない気がした

「上等だ。行ってやるよ」

俺は地図を見ながら書かれた指示通りの道を走り出した

「……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「１８０ってところね」

乱入者と戦闘している一夏と鈴

一夏が何度も斬りかかるがかわされ、鈴音の衝撃砲は防がれてしまう

「ちょっと厳しいわね……現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止（ダウン）させるのは確率的に一桁台ってとこじゃない？」

「ゼロじゃなきゃいいさ」

「あっきれた。確率はデカイほどいいに決まってるじゃない。あんたって良くわかんないところで健康第一っていうかジジくさいけど、根本的には宝くじ買うタイプよね」

「うっせーな……」

鈴音の発言に軽く落ち込む一夏

「――で、どうすんの？」

「逃げたけりゃ逃げてもいいぜ」

「なっ！？馬鹿にしないでくれる！？あたしはこれでも代表候補生

よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならー――」

喋っている鈴音の横をビームがかすめる

一夏たちは再度集中力を高める

「……なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？」

「いや、なんつーか……機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

何言ってんのこいつ？死ぬの？みたいな表情をする鈴音

「そう言うんじゃなくてだな。えーと……あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？人が乗らなきゃＩＳは動かな――」

とそこまで言って鈴の言葉が止まる

「――そういえばあれ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

《雪片弐型》の威力は、恐ろしく高い。そのため訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが無人機なら最悪の事態を想定しなくても済むのだ

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましょうか」

一夏に一策があると知ってか、鈴音はにやりと不敵に笑った
これから一夏たちの反撃が始まる

「ここで最後か……」

突如として送られきた謎のメール
その指示通りに動いてたどり着いたのは、ある一室
亮は、そのドアに触れるとロックされている筈のドアが開く
これは、偶然ではなく、指示通りのルートにあったロックされてい

るドアの数々は全て亮が触れると解除されているようになっていた

（しかも、入った後は、再びロックされて戻ることはできない・・・）

戻る気はないが、一体なにを考えているのか全く理解出来なかった

（『力が欲しいか？』か・・・こいつらが誘導する場所に一体なにがある？）

亮は覚悟を決め、部屋の中へと入る

「ここは・・・」

亮が入った部屋はＢピット
あるのは一台の打鉄とモニターのみ

ピピピピピピッ！

「・・・・電話？」

メールではなく、今度は電話がかかってくる。番号は表示されなかった

「・・・・・・もしもし」

『やあ。どうやら無事、目的地に到着したようだね』

電話の先からとても甲高い声が聞こえる。変調機を使って声を変え

ているようだ

「……てめえらは何者だ？一体、何が目的だ」

『ははっ、私たちはただデータの収集が目的ですよ』

「収集？あのＩＳにか？」

『残念ながら違います。私たちはあの無人機ＩＳとは関係ありません』

「…それにしては詳しいな、あんた」

電話の相手はどうやら隠すつもりはないようでペラペラと話している

『お話が好きでね』

「そうか。だが、俺には話している暇なんてない。お前が言っていた『力』はどこにある」

『せっかちですね。まあいいか。ＩＳの隣のテーブルにディスクがあるよね？』

亮は確かめため打鉄の隣にあるテーブルを確かめる

そして、確かにディスクはあった

『その中のデータをパソコンを使って、ＩＳに組み込めばいいです。大丈夫、インストールはたったの一分ですから』

「…わかった」

亮は打鉄に繋がれているパソコンにディスクを入れ確認画面のＯＫを押した

『これで一分後に君は、巨大な力を手に入る。その間、これを見て下さい』

そう言うと、消えていたリアルタイムモニターが起動する
そこに映っていたのは、未だに無人機ＩＳと戦っている一夏と鈴の姿だった

「――――オオオッ！」

右手の《雪片弐型》が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成していた

（俺は千冬姉を、箒を、鈴を、亮兄を、関わる人すべてを――――守る！）

スバァンッ！と必殺の一撃は敵ＩＳの右腕を切り落としたしかし相手は無人機ＩＳ。それだけでは倒せない

無人機ＩＳは左手を一夏に向ける。ゼロ距離でビームを放つ気だ

「「一夏っ！」」

箒と鈴音の叫び声が響く

しかし、一夏の表情は余裕があった

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

刹那、客席からブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵ＩＳを打ち抜いた

ボンッ！と小さな爆発を起こし、敵ＩＳは地上に落下する

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアならやれると思っていたさ』

『当然ですわ！何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！それに……』

（亮さんに一夏さん達のことを頼まれたのですから）

セシリアは悔しさを纏った亮の背中と言葉を思い出していた

だから早く終わらせて亮を安心させたいと思ったのだ

「ふう。何にしてもこれで終わ――」

『終わりじゃねえ！！』

「えっ？この声は・・・亮兄？」

亮からの通信に唖然とする一夏
その亮の通信は一夏だけではなく、セシリア、鈴音にも届けられていた

「亮？何であんたＢピットにいるのよ？」

「亮さん？避難していたはずじゃ・・・？」

『いいから余所見を――』

――敵ＩＳ再起動確認！

「「「！？」」」

そこにいた一夏、セシリア、鈴音が一斉に敵ＩＳの方をを振り向く。
そして、驚愕した

バラバラになった敵ＩＳが立ち上がっていた。しかも、ボディが綺麗さっぱり直っていた

「な、なんなんだ！！」

「自動再生能力？・・・・・ですが、それはまだ理想論であって、まだ設計にすら手を出していない能力のはずですわ」

「ぼさっとしている暇なんてないわよ！来るわ！」

復活した敵ＩＳは一夏たちをロックした

第１９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！

フラグが立ちましたね

感想お待ちしております

第２０話

「なにが起こっている！」

「わ、わかりません！ただ、敵ＩＳが復活したとしか……」

「バラバラになったＩＳが再生して立ち上がったと？馬鹿げてる！」

さすがの千冬も慌てざるおえない。バラバラに破壊された敵ＩＳが復活し、再び一夏たちに襲いかかっているのだ。慌ててしまっても仕方ない

「突入隊はまだ来ないのか？」

「遮断シールドが復活して来れません！それに――」

ビービービービービー！！

「――なっ！？」

いきなり警報機が鳴り響く

「どうした！」

「ディスプレイが反応しません！？しかも他のシステムも全てロックされました！」

「なんだと?」

千冬は山田先生の後ろに立ち乗り出すようにモニターを見る

モニターは真っ黒に染まっていた。触れても何も反応が起きず、うんともすんとも言わない

「……」

千冬は見逃さなかった

画面に映る黒いなにかが、かすかに動いていたのを…

「おい!これはどうなってんだよ!」

『うーん…これは予測以上ですね』

ん?なんかさっきより声が…

『それではご武運を願っています』

「あっ!おい!……くそっ!」

切れやがった
そんなこと気にしている暇はない

「まだ終わらねえのか！？」

インストールまで残り３０秒
くそっ！３０秒がこんなに長く感じるのは初めてだ

（一夏、みんな。もう少し耐えてくれ）

俺は必死に戦っている一夏たち見ながら、ただそう願いながらモニターを見た

「ぐあっ！？」

「一夏っ！」

「一夏さん！このっ！」

敵ＩＳに吹き飛ばされる一夏
セシリアは

ライフルで射撃するが敵ＩＳは簡単に避けられる

「何なのよ、あいつは！さっきと全然、動きが違うじゃない！」

敵ＩＳはさっきまでの、決まった動きを繰り返すのではなく、状況に対応した動きを見せている

「それに、破壊してもまた再生しやがる。どこのチートだってんだよ！」

「愚痴ってる暇があったら動きなさい！」

鈴音は衝撃砲を連射で放つ

「ここだぁぁぁぁぁぁ！！」

一夏は追い込んだ敵ＩＳの懐にもぐり込み右腕を切り落としたが――

キュィィィィンッ！

「なっ！？」

――その切り落とした右腕からケーブルが飛び出て、落とした右肩に繋がりあり得ない早さでくっつく

再生した右腕をそのまま一夏に振り下ろした

一夏はあまりの光景に膠着し、もろに喰らってしまう

「ぐあぁぁぁぁっ！？」

「一夏！？」

「大変ですわ！一夏さんのＩＳが！？」

一夏のＩＳが光の粒子となって消えてしまう
シールドエネルギーがなくなったのだ

「くっ！」

敵ＩＳは追い討ちをかけるように左腕を一夏に向ける

「一夏っ！？」

箒の叫び声もむなしく、敵ＩＳの左腕からビームが発射された

ドガァァァン！

「うっ・・・」

「セシリアっ！？」

ビームの線上に割り込んだセシリアが一夏の身代わりになってビームを喰らってしまう

シュゥゥゥ・・・

セシリアのＩＳも光の粒子となって消えてしまった

「な、なんで！？」

「り、亮さんとの約束ですわ」

『セシリア、一夏たちを頼む』

「ですが、その約束は守れそうにありませんわ。ごめんなさい」

「謝る必要はないわ。だって――」

鈴音は一夏、セシリアの前に立つ
そして、双天牙月を構え直す

「――あたしが叩きのめすんだから！一夏！あんたはセシリアを連れて離れなさい！」

「なっ！そんなことできるわけが――」

「わかんないの！邪魔なのよ！」

「――くっ・・・」

鈴音の冷たい一言。でも、わかっている。自分には何もできないのが、このままいても鈴の邪魔になってしまうのが

「一夏さん。亮さんも同じ苦しみを味わって、今あそこにいます。何故かはわかりませんが、おそらく自分のやれることを見つけたのですわ。だから、一夏さんも今自分がなにをすべきなのか考えてください」

セシリアに言われ、不意に亮がいるＢピットに目を向ける一夏

「……わかった。鈴！気を付けろよ！」

「誰に言ってんの！任せなさいって！」

鈴音の返事を聞いた一夏はセシリアを連れて離れる

（って、かっこつけたわ良いものの。正直、キツいわ）

残りのシールドエネルギーはわずか。絶体絶命の状況だ

「でもやられる訳にはいかないわ。せめて――」

一夏たちが逃げるまでは！と続けて言おうとした瞬間、敵ＩＳが突撃してくる

「あたしに肉弾戦で挑もうなんて良い度胸じゃない！」

鈴音は敵ＩＳの拳を冷静に受け流し、確実攻撃を与える

「ぐっ……」

しかし、鈴音の攻撃を喰らっても動きを止めない敵ＩＳ。どんどん

と鈴音のシールドエネルギーが削られている

（このままじゃ・・・・）

ガギィン！

「あっ！？」

鈴音の双天牙月が弾き飛ばされる

「このっ――――」

鈴音は衝撃砲を放とうとするが――――

「キャアアァァァァァァッ！？」

敵ＩＳのビームの方が早く、鈴音は後方に吹き飛ばされてしまう

「う、ううっ・・・・」

「鈴っ！？」

鈴のＩＳも消失してしまう

「逃げろ、鈴！！」

「ううううっ・・・・」

鈴音は逃げたくてもビームの衝撃が体から抜けない
そんな状態にもかかわらず、敵ＩＳは無情にも無防備な鈴音に左腕を向ける。それを、さらに最大出力形態（バーストモード）に変形させている

（私、死んじゃうの・・・？）

力が入らない体を必死に起こして、目に入ったのは自分に狙いを定めている敵ＩＳ

（嫌だ、嫌だよ。誰か助けて・・・）

必死に願う鈴音
その瞬間、敵ＩＳのビームが発射される

（助けて・・・・・・亮！！）

「リィィィィィィィィィィン！！？？」

一夏の叫び声が響くと同時にビームが鈴音を包み込んだ

（あ、あれ？あたし、どうなったの？）

確か、あたしは正体不明の無人機ＩＳのビームをもろに喰らって……

（ああ。死ぬときは一瞬だって本当なんだ）

でも、気になることを思い出した

（なんで、一夏じゃなくて亮の名前を思ったんだろ？）

あたしは一夏が好き……のはずだ。それでも、亮の名前を思った

（でも、関係ないか。あたし、死んじゃったし）

「鈴！」

誰かの声が聞こえる
それは暖かい声
一夏とは違う暖かくて居心地の良い声

「起きろ、鈴！」

「えっ？」

目を開ける。地面だ
あたしは死んでないの？
声のした方を向いたらそこには、見たことのない黒いＩＳが背中を向けて立っていた
とてもトゲトゲしい装甲で巨大な鎌を片手に持っている

「大丈夫か、鈴?」

(ああ、そうか。好きになっちゃったんだ)

この三崎亮という男の子を

>i2024—1922<

(良かった。間に合った)

内心かなりほっとしている亮

しかし、視線は敵ISに向けられていた

「鈴、立てるか?」

「ごめん・・・ちょっと無理っぽい」

「そうか・・・なら!」

亮は左手を敵ISに向けると手のひらにある赤い部品からエネルギー弾を撃ち出す

「鈴！ちょっと揺れるぞ！」

「え？きゃっ！？」

敵ＩＳがエネルギー弾を避けている間に鈴を抱え上げる

「ち、ちょっと！なにすんのよ！／／／／」

「我慢しろ！奴が来る前にお前を一夏たちに引き渡す。舌噛まないように気を付けろよ！」

「ちょっ、きゃっ！？」

亮は、敵ＩＳが体勢を整う前に急いで鈴を運ぶ

「亮兄！！」

「一夏、鈴を頼む……鈴？」

「／／／／」

鈴音は顔を真っ赤にして黙り込んでいた

そして――

「……亮さん…」

「セシリア、良かった。無事――」

「無事ですわ！でもそんなことより何なんですの！」

セシリアが亮を指差しながら言う

「いや、このＩＳは――」

「違いますわ！その方の抱え方ですわ！」

「えっ！？そっち！」

セシリアが指摘したのは、亮が使っているＩＳ……ではなく、鈴の抱え方だった。そんなセシリアに一夏は思わずツッコむ

ちなみに、亮がしている鈴の抱え方は俗に言うお姫様抱っこだ

「いや、こっちの方が運びやすいから……」

「運びやすいからって、そんな羨ましい……ではなく破廉恥ですわ」

「そんなこと言ってる状況じゃねえだろ。一夏」

「おう」

亮は一夏に鈴を引き渡すと振り返り、敵ＩＳを見る

敵ＩＳは、ただこっちを見ているだけで何もしてこない

ただ亮のことをじっと見ている

「かかってこいってか？上等じゃねえか」

亮はぐっと大鎌を握る手に力が入る

「亮兄、そのＩＳは？」

「その話は後だ。セシリア」

「は、はい！」

「約束、守ってくれてありがとうな」

「い、いえ！／／／／」

亮の言葉に嬉しそうな表情をするセシリア

「勝てよ！亮兄！」

「ああ！」

亮は敵ＩＳの方へと飛んで行った

第２０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！

まあ今回も一言・・・・・・すみませんでした！！！！！

あれが自分の限界でした
亮の顔をあんな感じかなと思って描きました
気に入らなかったら本当にごめんなさい

感想をお待ちしております

第２１話

「うおぉぉぉぉ！！」

俺は敵ＩＳに何度となく大鎌を振り下ろしているのだが、全く効いていない

（奴の力の源は何だ？）

『もしもし！亮さん、聞こえますか？』

こんな時に通信が入りやがった。しかも、この声は

「なんだよ！こっちは立て込んでんだよ」

『わかってますよ。ちょっと助言をと思いまして』

「助言？」

『はい。あのままでは、あれには勝てませんよ。あれを破壊するには《スケィス》の単一使用能力（ワンオフ・アビリティ）《データドレイン》を使わなければならないです』

「てめぇ・・・」

何で知っていやがる

それはＣＣ社とその関係者しか知らないはずだ

『使い方は・・・・言わなくてもわかりますよね？それでは亮さん、

また会いましょう』

そう言って通信が切れた
奴は本当に何者なんだ？

「考えるのは後だ。まずは奴に『データドレイン』を当てる！」

俺はエネルギー弾を連射する
しかし威力が無いのか、敵ＩＳは当たりながらも俺に向かってくる

「が、それがてめぇの敗因だ」

そう呟いた瞬間、敵ＩＳの動きがぴたっと止まる
それも当然、『スケィス』のエネルギー弾はただのエネルギー弾ではない。何発か当たるとシステムを一時的に麻痺させることができる『スタンショット』なんだ

「だらっ！」

大鎌を一閃
敵ＩＳの胴を切り離す
これならば、自動再生能力があろうと復活に時間がかかる
だからそこを狙う

「うおぉぉぉぉぉっ！」

『スケィス』の大鎌が消える代わりに右腕が光り輝く砲台へと変形する
徐々に砲口に光り輝く粒子が集まり、巨大なエネルギー弾が生成された

「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ドオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！

巨大なエネルギー弾は当たると、敵ＩＳを覆うように膨れ上がり爆発する

そして雪のように散らばった光の粒子は俺の右腕に吸い込まれた

「はあっ……はあっ……」

非常に息苦しくなった俺は敵ＩＳを見る

通信してきた奴の言う通り、胴が離れた状態で『データドレイン』を喰らった敵ＩＳは自動再生能力が発動せず、完全に機能停止している

どうやら終わったようだ

「亮兄！」

ほっとしていると、一夏の弾んだ声が聞こえた

俺は振り向いて一言話そうとする

ドクンッ！

「ぐっ！？」

――――が、いきなり胸に激しい痛み、体中にも激しい疲労がのしかかる

「亮兄！？ち、千冬姉！亮兄が！？」

体に力が入らなくなった俺は倒れ、意識を手放した

俺が最後に見たのは慌てふためく一夏と後ろで泣きそうな表情をしているセシリアと鈴であった

「……ここは‥」

どうやら保健室のようだ。一回世話になったから覚えている
俺は保健室のベッドで寝ているようだ

「気がついたか」

カーテンがいきなり開かれたと思ったら、そこには千冬さんがいた

「体には致命的な損傷はないが、全身のあちこちに斬り傷と打撲がある。数日は地獄だろうが、まあ馴れろ。自業自得だ」

「……」

寝起きで怪我人の俺に厳しい言葉が送られる

「お前にはいろいろと聞かなければならないことがある。覚悟しておけよ」

そりゃそうだ。覚悟なんてとっくの昔に出来てるよ

「それより一夏や鈴たちは無事ですか？」

「安心しろ。お前よりかは軽傷だ」

「そうか……良かった」

本当に良かった。『また』間に合わなかったらどうしようかと思った

「お前は自分の事より一夏たちの方が心配なのか？」

「まあそうですね。俺は一夏たちを助けるために戦ったんですから」

「……三崎：その：」

いつもはっきり喋る千冬さんが口ごもる

「一夏や生徒たちを助けてくれてありがとう」

「……」

「……今のは忘れろ」

ギリギリギリッ！

「ぐあぁぁぁぁっ！？」

俺がなにかを思う前にアイアンクローを喰らわせる千冬さん

つか、俺怪我人!?
シャレにならねえから!

「す、すまん。つい」

ついで殺されたくないのだがな

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前は、今日は絶対安静だ。いいな」

それだけ言い残すと、千冬さんはすたすたと保健室を出て行った

その後、入れ違いに一夏と箒が入ってきていろいろ質問されたISや倒れた原因などを聞かれたが、疲れているからと理由を付けて帰らせることにした

「それじゃあ亮兄。俺たちは戻るよ」

「亮、しっかりと体を休めるのだぞ」

そう言われて俺はふと昔のことを思い出す

「二人とも、ちょっと待て」

「ん?なんだ?」
「どうしたのだ?」

なでなで

「見舞いに来てくれてサンキューな」
俺は二人の頭を撫でる
「な、何をするんだ!?／／／／」
ばっと早い身のこなしで離れる箒
「いや昔はこうやって撫でていただろ?」
「そう言われればそうだったな～。懐かしい」
「だからといって、いきなりそんなことをするな!」
うーん、さすがに恥ずかしかったか?そういえば箒は少し嫌がっていたような、一夏は逆に喜んでいたな
「なに言ってんだよ、箒。そのときお前、亮兄に撫でられた頭を触りながら嬉しそうにしてたじゃないか」
「なっ!そ、そんな訳ないだろ!／／／／」
「いやでも――」
「～～～っ!ほら、もう行くぞ!!」
「うわっ!?」
箒は一夏を引きずりながら出て行った

何故だ？

「……ん？」

「ひゃっ！？」

「……何してんだよ？」

なにもやることがなかったため寝ていたのだが、何か気配を感じ目を開けると隣に驚いた表情をした鈴がいた

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「今、起きた。何を焦ってんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

十分に焦ってんじゃねえか

「そういえば試合はどうなった？」

「無効よ。無効。まあ、あんなことあれば当然でしょうね」

言いながら、ベッド脇のイスに腰掛ける鈴

「それじゃあ一夏との約束については――」

「そのことなら、別にもういいわよ」

「なんで？」

「い、いいからいいのよ！」

ふむ、納得は出来ねえが本人がそう言うならいいか

「鈴」

「なによ」

「本当に無事で良かった。あの時、間に合わなくてお前に何かあったら、俺は……」

「な、なに暗くなってんのよ！アンタはちゃんと間に合ってアタシを助けてくれたじゃない」

「ああ。聞こえたからな」

「え？」

「お前が俺を呼ぶ声が聞こえたからな」

「ど、どういうことよ？」

「俺はあのＩＳに乗ったとき、お前の声が聞こえたんだよ」

それは俺がインストールが終わって打鉄に乗り込んだときだった

「急がねえと！」

リアルタイムモニターで敵ＩＳに吹き飛ばされた鈴を見た俺はすぐに打鉄を起動させた

ポーーーン

「！？」

その瞬間、俺の中に何かの音と湧き上がる力を感じた

ドクンッ！

それは俺が良く知っているものだった

「いいぜ」

ドクンッ！

「来い、来いよ！」

ドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッ！

どんどん脈動が激しくなっていく。そして打鉄の装甲が赤い紋様に包まれていく

「俺はここにいる！」

（助けて……亮！！）

俺の頭の中に確かに聞こえた
俺を呼ぶ鈴の声が
「スケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェィス！！」

「と、俺はお前の呼ぶ声が聞こえたんだ」
「そ、そうなんだ‥‥／／／／」
嬉し恥ずかしそうに目を横にする鈴
「あ、あのね、アタシね？アンタが助けに来てくれたとき、とても嬉し―――」

バーンッ！

「亮さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て―――あら？」
つかつかと部屋に入ってきたセシリアの足が、言葉が、止まる。べ

ッドの傍らにいた鈴を見つけたからだ

「どうしてあなたが……？亮さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「何言ってんの？あたしは『深い仲』なんだからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！って、なんですの？『深い仲』とは？」

うん。それは俺も気になった。しかも悪い方向で

「あたしは亮の部屋に泊めてもらうほどの仲なのよ。しかも、2回もね」

「って、おい！？」

なに言ってんだよ！嘘じゃないが、時と場合を考えやがれ！

「な、なななななっ！？ど、どういうことですの！」

「いや、それは鈴が――」

「あたしが『来ちゃった♪』って言ったら『わかった、入れ』って言ってくれたのよ」

「ちょっと待て！肝心な所が抜けてるから！」

止めてくれ！これ以上されたら俺は病院に行く羽目になる

「それに・・・亮のベッドに寝させてもらったし／／／／」

うおぉぉぉい！

もじもじと動きながら恥ずかしそうに言うな！

「亮さん！破廉恥ですわ！少女をベッドに誘い込んでお、襲うなんて！」

「お前の発想の方が破廉恥だろ！？」

そして俺はセシリアに事情を説明したが、結局セシリアを俺の部屋に招待することで話が収まった

なんだろう？ＩＳ戦以上に疲れた気がするよ

学園の地下五十メートル

そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった

機能停止したＩＳはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返

し見ている

「……」

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、真耶が映っていた

「どうぞ」

「あのＩＳの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは――――無人機です」

世界中で開発が進むＩＳの、そのまだ完成していない技術

「どのような方法で動いていたかは不明です」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ――――な」

そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す
映っているのは亮が敵ＩＳにデータドレインを喰らわせるシーンだった

「あと、三崎くんのことなんですが・・・」

「何かわかったか？」

「いえ、何もわかりませんでした」

真耶もディスプレイの映像に視線を向ける

「三崎くんの最後の攻撃。これで無人機の機能中枢が完全に使いものにならなくなってしまいました」

「装甲などは無傷に見えるが」

「問題はデータです。全てのデータが初期化され、得られる情報はありませんでした」

真耶はがっかりした表情をする

「三崎のあの黒いＩＳは」

「三崎くんが気絶した後、何故か打鉄になっていました」

ディスプレイに気絶して倒れた亮が映し出される。亮が付けているのは黒いＩＳではなく、『打鉄』だったが

「その打鉄は粉々になって解析は不可能」

何故か打鉄は役目を終えたかのように崩れ落ちたのだ

「ということは」

「はい。このディスクに秘密があると思います」

第二アリーナ・Ｂピットでパソコンに入っていたディスクを千冬に見せる

「解析は」

「解析中ですが今のところは何も……」

下を向いて俯いてしまう真耶

千冬はじっとディスプレイに映った亮を見る

（あの居なくなった間、お前に何があったんだ）

千冬はそう考えながら、映像を見つめ続けるのであった

第２１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！

亮の専用機初戦闘シーンはどうでしょうか？

感想お待ちしております

第２２話

六月頭、日曜日

のはずなのに俺は千冬さんに教室へ呼び出された

「今日、何で呼ばれたのかわかるな？」

「全くわかりません」

パキィンッ！

「クラス対抗戦のときの話だ、馬鹿者」

うん、わかってたけどさ

「俺は急に届いたメールの指示通りに動いただけですよ」

俺は携帯を千冬さんに見せる

「ふむ。ではその携帯を預かる」

「えっ！」

何でそうなるんだよ！

「このメールを解析する。何かわかるかもしれん」

「で、でも・・・」

「文句でもあるか？」

「いいえ、ないです」

くそっ、凶器（チョーク）を持ちながら言われたら何も言い返せない

「ではもう一つ。お前が乗っていたＩＳはなんだ？」

「・・・・・・・・・・」

どうする？言うべきか？

「黙りか？」

「・・・いいや、あれは『スケィス』。俺はそう呼んでいます」

「その『スケィス』とは何なんだ？」

「普通のＩＳ・・・・・って言っても信じてくれませんよね？」

「当然だ」

ですよね

「わかりました。話しますよ」

俺は全てを話すことにした

俺が『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』で培ってきた全ての物語を

「ふむ・・・」

全てを話した
千冬さんは腕を組みながら黙り込む

「まあ、信じられる話ではありませんが」

「確かにな。だが私は信じる」

「千冬さん・・・」

予想外だ。『真剣に話せ、馬鹿者』と一蹴されるかと思った

「お前の目を見ればわかる。――なるほどな」

「何がです？」

「お前と久しぶりに会ったとき見違えたのは、そんな物語（人生）を歩いていたからなのだな」

俺はそんなに変わったのか？自分ではよくわからない

「ありがとう、千冬さん。俺を信じてくれて」

「むっ……」

ん？何故か睨まれてしまう

「ふん。それでこのディスクだが、そのスケィスに関する何かが記録されていると言うことか」

「多分……結果はどうでしたか？」

「何もわからなかった。いや、そもそも解析することすら出来なかった」

やっぱり、なにやらプロテクトがかかっているようだな

「じゃあ、俺が預かっても良いですか？知り合いに詳しい奴を知ってるんで」

「わかった。お前に一任しよう。だが、スケィスを使うな」

「えっ？どうして？」

これがあれば俺にも専用機があるのと同じだ

「使う度にＩＳを壊されては困る。それにお前の怪我はスケィスが原因かもしれん」

「スケィスが……」

それは俺も思った。本来のＩＳなら絶対防御がある。だがスケィスにはない
防御する装備、システムがないのだ
それだけじゃなく何かが俺に負担をかけている。原因はわからない

「わかりました。スケィスを使うのは控えます」

無人機ＩＳみたいな異常（イリーガル）な奴が現れたら使うがな

「話は以上だ。帰っていいぞ」

「わかりました。で、携帯はいつ返してもらえますか？」

「そうだな。一週間はかかる。安心しろ、中身は見ない」

千冬さんの言葉にほっとする俺
別に見させたくないものがあると言う訳ではない

「わかりました。失礼しま――」

ピピピピピピッ！

いきなり俺の携帯が鳴り響く
メールか？電話か？
電話ならちょっと出させて欲しい
そう思って千冬さんに携帯を返して――

「はい。もしもし」

もらおうとしたが、何故か千冬さんが勝手に出てしまう

「って、おい！？」

「むっ？ああ、確かにこの携帯は三崎亮のものだ。ん？なんで私が出ているかって？それは私が預かっているからに決まっているだろう」

しかも、なんか話してるよ！？

「私か？そうだな……亮の幼なじみだ」

ちょっと待てエエエエエエエエエエエエエエ！？

「おい！マジで何やってんだよ！」

俺はすぐに千冬さんから携帯を奪い返す

「もしもし！」

『この声は……亮さんですか？』

この声はアトリ……のリアルのプレイヤー『日下千草』だ

『亮さん。今の《幼なじみ》と言っていた女性はあなたとどういった関係なんですか』

関係って幼なじみ……まあ、間違いではないんだが

「とにかく、千草。お前は勘違いをしている。千冬さんは俺の学校の担任の先生だ」

『《千冬さん》……名前で呼んでいるなんて仲が良いんですね…』

しまった。墓穴を掘った

『それに今日は日曜日ですよね？どうして先生と会っているのですか？』

ぐっ！千草が痛い所を突いてくる

「ちょっと呼び出されたんだ。授業中に携帯を使ってたのがバレて、それで携帯を没収されてたところなんだ」

『そうなんですか？ふーん……』

駄目だ、信じてくれない

千草の声がかなり恐い

「こ、今度、夏休み辺りに遊ぼう。だから機嫌を直せ」

『本当ですか！？』

「お、おう」

なんとか上手く誤魔化した

「日にちとかはお前に任せる。あと、俺の携帯一週間くらい没収さ

れっからかけるなよ」

『はい！わかりました！失礼します！』

「……ふぅ」

危なかった

下手したら俺がＩＳ学園にいることがバレてしまうところだった

「って、なんすか。千冬さん」

なんか目が恐いのですが

「ん？いや、人の目の前で彼女とデートの約束とは良いご身分だと思ってな」

「か、彼女！？」

「なんだ、違うのか？」

「ち、違えよ！千草は『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』で知り合った大切な仲間だ！」

思わず言葉使いが素に戻ってしまう

「…本人が聞いたら喜んでいいのかわからない台詞だな」

「つか、何で出てあんなこと言ったんですか！普通に俺に渡せば良いでしょう！」

「……ふむ…自分でも良くわからん」

「はぁ？」

なに言ってんの？

無意識にあんなこと言われたら俺の身が保たない

「とにかく、帰れ。この女誑しめ」

「なっ！？誰が――――」

パキィンッ！

「いいから帰れ」

「はい」

第２２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！

今回はいろいろなフラグが立ったのではないでしょうか？？？

しかも、スケィス使用禁止！！
これからどうなるのか、自分にもわかりません（笑）

今回は早くに投稿したので今日の１７時くらいにもう一話更新する予定でいます
お楽しみに

感想お待ちしております

第２３話

「ふぅ・・・」

部屋に帰ってきた俺は千冬さんに渡されたディスクを見ながらベッドに寝転がっていた

このディスクを拓海や令子さんに解析してもらえば何かがわかるかもしれない

だが、携帯がないため今すぐは無理だ

だから、パソコンでメールを送り返事を待っている

（そういえば、今月だったか？『学年別個人トーナメント』は・・・）

『学年別個人トーナメント』

文字通り学年別のＩＳ対決トーナメント戦。これを一週間かけて行う

正直やる気が起きない。それでも参加することになっている

なぜなら、全員強制参加だからだ

（やる気はねえが、やるからには勝つ）

ＩＳ対決トーナメント戦と言えば、先月のクラス対抗戦は例の襲撃事件でうやむやのまま中止され、そのことに関しては箝口令まで敷かれた

特に直接戦闘に関わった一夏、セシリア、鈴、そして俺とこの四人は誓約書まで書かされる

俺に至っては千冬さんに反省文を書かされた

（まあ、考えても仕方ねえ。拓海から返事が来る前に夕飯にするか）

「亮、いる？」

俺がベッドから立ち上がったところでノックと聞き慣れた声が聞こえる

「亮？」

「……」

思わず黙り込んでしまう
あの声は鈴だ
鈴が部屋に訪ねてきてろくな事にならない

「なんだ、いるじゃない」

居留守を使おうかと考えていたらガチャリとドアが開けられる

「おい、勝手に開けるな」

「あんたが出るのが遅いのがいけないんじゃない」

どういう理屈だ

「それで、なんの用だ？また部屋に泊めろなんて言うんじゃねえだろな？」

「それもいいんだけど……」

良くねえよ
そのせいでセシリアに酷い目にあったんだからな

「今回は一緒に夕飯に行かない？」

何故か『今回は』を強調する鈴

「いいぜ。俺もちょうど行こうかと思ってたんだ」

「そ、そうなんだ／／／／」

ん？何故か顔を赤く染める鈴。風邪か？

「そ、それじゃあ行きましょ」

すぐに戻った鈴は部屋から出て行く
俺もすぐに後をついて行った

「お。三崎君だ。ヤッホー」

「ええっ！？み、三崎君！？」

俺と鈴が一緒に歩いていると、俺を見つけてぶんぶんと手を振る布仏とお友達

「やー、ミッチ～」

「そのあだ名は止めろって言ってんだろ」

「やだよー。それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」

「そして抱きついてくるな」

こいつは何かと会う度に抱きついてくる
そして無理矢理引き剥がそうとすると、いやいやと泣きそうな表情を見せるから質が悪い
諦めると、すぐにいつもののほほん顔に戻るのだが

「残念、亮はあたしと夕飯するの」

「わー、りんりんだー。勇気が出そうだね～」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

布仏の呼び方に非常に反応する鈴

「え～。可愛いのに～。ね、ミッチ～」

「俺の呼び方よりは可愛いと思うぞ」

「えっ？そ、そう？……う、ううん！ダメダメ！やっぱりその呼び方はやだ！」

一瞬、なびかけたが、よっぽど嫌なみたいだ

「ところで、お前の友達どこかに行っちゃったぜ？」

「おわー。ほんとだーいないー」

先ほど、何故か自分の腕で体を抱くように隠しながら廊下の先へと走っていった

「あー……待って～」

そして布仏もどこかにぺたぺたと走っていく

つか、遅っ！

「……」

「何だ？」

「亮ってさあ、何？モテてんの？」

いきなり何を言い出すんだ

「んな訳ねえだろ？ただ、からかってくるだけだろ？」

「ふーん……ま、いいけどね」

良いんなら、そのジト目を止めろ

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と三崎君の話よ」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別個人トーナメントで――」

来る度に思うのだが、食堂はかなり騒がしい
特に奥の方で十数名がスクラムを組んでいる一団がうるさい

「あそこのテーブル。やけに騒がしいな」

「トランプでもやってんじゃないの？それか占いとかさ」

だからといってあそこまで騒がしくなるか？
こっからでも熱気を感じる

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！きゃー！どうしよう！」

もう無視しよう。とっとと食べて部屋に帰ろう
それとも持って帰るか？

「亮、こっちよ」

「・・・ああ」

鈴がすでに席に座って呼んでいるためそれはできなくなった。別にいいがな

「あ――――っ！三崎君だ！」

「えっ、うそ！？どこ！？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと――――もがっ！」

さっきの騒がしい連中が俺の存在に気づいた女子が雪崩込んでくる
そして、俺に話しかけてきた女子が何かを言い掛け、他の女子に取り押さえられた

怪しいな

「んだよ、噂って？」

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは・・・・・」

「――――バカ！秘密って言ったでしょうが！」

「いや、本人だし……」

一人が俺の前で大の字になって、後ろの小声で話す二人を隠している

「で、なんだよ？噂って？」

「う、うん！？なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね！」

違げえからな？

「な、何言ってるのよミヨは！四十九日だってば！」

それも違う

「なんか隠してるだろ？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ！？」

見事な連携技を決め手から即撤退

あまりの早さに何も出来なかった

「何なんだよ？」

「……」

意味がわからず溜め息を吐いていると鈴がまたジト目で俺を睨む

「あんたってやっぱりモテてんの？」

だから、それはないつーの

第２３話（後書き）

有言実行できて安心している自分がいます

ちょっと中途半端でしたでしょうか？

感想お待ちしております

第２４話

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

月曜日の朝
クラス中の女子が手にカタログを持って談笑している

「そういえば一夏のＩＳスーツも特注品か？」

「うん。どっかのラボが作ったらしい。えーともとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる。亮兄は？」

「俺か？よくわからん」

ＣＣ社から送られてくるからそれ関係なんだろうが、詳しいことは全くわからない

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに――」

すらすらと説明しながら現れた山田先生

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

入学（俺は転入だが）してから大体二ヶ月
山田先生には８つくらい愛称がつけられているのだが、教師にあだ名はどうかと思う

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っこだなぁ」

「ま、まーやんって……」

もはや、真面目っこではすまされないあだ名だな

「あれ？マヤマヤの方が良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれは止めてください！」

珍しく語尾を強くして山田先生が拒絶する。お前ら何をした？

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？わかりましたね？」

はーいとクラスの奴らは返事をしているが、返事だけだろう

「ねえねえ、三崎君。あのね――」

それが証拠に一人の女子が俺にあることを伝える

「――って言ってね」

「はあ？何で俺がんなことを言わなけゃ――」

「山田先生！三崎君が先生のあだ名を思いついたって！」

無視かよ！

つか、思いついてねえから！

「…言った矢先にですか？もう…仕方ありませんね」

何故だろう

仕方ないって言いながら、どこか嬉しそうに見えるんだが

「ほら三崎君。言っちゃいなよ！」

この野郎…いや、野郎じゃないか

そんなことはどうでもいい

「三崎君、早く言ってください。もうすぐ授業なんですから」

なんだかんだでこの人も楽しんでないか？
グルになって俺を嵌めようとしているのか？
いや、山田先生はそんなことする人ではない

「……」（純粋な目で亮を見ている）

くそっ！とりあえず、何でもいいから言わなくては

「ま、真耶っち先生？」

「……」

クラス中の温度が二度下がった。一夏までそれはないって目をしていやがる。悪かったな、ネーミングセンスなくて

「真耶っち…／／／／」

おっ？まんざらでもなさそうな顔をしているな

「ちょっと、三崎君！私が伝えたあだ名を何で言わないの！」

ふざけんな！
なんで、俺があんなこと言わなければならねえんだよ！

「えっ？それはどういうことですか？」

「ぜっっったい！山田先生が喜びそうなあだ名を三崎君に言ってもらおうとしたのに言ってくれなかったんですよ」

その俺が悪いという言い方を止めろ

「私が喜ぶ、ですか？」

「それはもう！」

「……」

山田先生。その呼んで欲しいなって表情で俺を見ないでください

「ほら三崎君。早く言っちゃいなよ！言えば楽になるよ」

俺は取り調べされている犯罪者か！

「諸君、おはよう」

ここで、千冬さんが登場する

「お、おはようございます！」

それまでざわざわしていた教室が静まり、女子達は自分の席へと座る

助かった。これで言わなくて済む。珍しく千冬さんに感謝を――――

「三崎は山田先生にあだ名を言ってから席に戻れ」

――――することが出来なかった

つうか、聞いてたんかい！

「どうした？早くしろ」

「いや、それは……ん？」

あれ？なんか違和感が……

「なんだ、三崎。私の服に何か付いているか？」

「い、いえ。もしかして織斑先生のスーツ、夏服に変えました？」

「むっ……何故わかった？」

「いえ、なんとなくです…まあ、毎日先生を見てますからね」

「むぅ……」

俺の言葉気に入らなかったのか睨みつけてくる千冬さん

なぜ、睨まれるんだ？

「まあいい。ほら、早く山田先生のあだ名を言ってみろ」

「……」（期待に満ちた目）

くっ！これは言わざるおえない

「えっと……」

「はい！」

「真耶…お姉ちゃん…….／／／／」

「…………」

ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

やっぱり言わなければ良かった！
つか、これあだ名じゃなくね？

「／／／／」

「や、山田先生？」

「……とりあえず、お前は席に戻れ。この女誑し」

最後の方は聞こえなかったが、俺はすぐに席へと戻った
ちなみに山田先生は千冬さんに叩かれまで、ぼーっと呆けていた
その際にセシリアが俺の方を睨みつけていたのだが…なぜだ？

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬さんが山田先生にバトンタッチ。つか最後までやらないのかよ

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「は・・・？」

「「「えええええっ！？」」」

いきなりの転校生紹介にクラクラス中が一気にざわつく
それも仕方ないだろう。この時期に、鈴のときだって騒がれたのに、また転校生だ
つか、何故二人も？分散させろよ

「失礼します」

「・・・・・・・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきが止まる
でも仕方ない
だって、そのうちの一人が――――男子だったんだから

第２４話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！

感想お待ちしております！！

第２５話

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノアがにこやかな顔でそう告げて一礼

あっけにとられたのは同じ男である俺や一夏を含めてクラス全員がそうだった

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

ふむ。見れば見るほどの好青年だな。つか、あの整った顔立ちは女子に見られてもおかしくねえな

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああああ――――っ！」

女子の歓喜の叫びが響きわたる

危なかった。耳を塞いでなかったら鼓膜が破れてたんじゃないか？

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれて良かった～～～！」

やかましいから黙れ
他のクラスの迷惑だろうが

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬さん
先生なんだからしっかり止めろよ。そんな小さな声じゃ誰も聞こえねえよ
もういっそのこと出席簿アタックを使っちまえよ
今更、躊躇しなくてもみんな千冬さんはそういう人だってわかって――――

パキィンッ！

「お前ら静かにしろ」

「「「は、はい」」」

静かになった。なったがその手段が俺にチョークを投げつけるとはこれいかに

「……」

静かになったところで今度は沈黙が広がる
全員の視線はもう一人の転校生に向けられている
沈黙の理由はそれだけではない
その転校生の雰囲気がかなり重い
身長はデュノアと比べてかなり差があるが全身から放つ冷たく鋭い
気配がまるで同じ背丈であるかのように見えてしまう

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんの言葉は素直に聞く転校生
教官？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

どうやら、千冬さんはあの転校生と知り合いみたいだな
転校生はこちらを向き――

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・・・・」

――の一言だった

「あ、あの、以上・・・・・ですか？」

「以上だ」

できる限り笑顔でボーデヴィッヒに聞く山田先生だが、その一言に撃沈

「！貴様が――」

ん？ボーデヴィッヒがつかつかと一夏に向かって行くぞ？

バシンッ！

「……」

「う？」

いきなり、殴られてしまう。しかも無駄のない平手打ち

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

さっきまで黙っていたのが嘘のように一夏に罵倒している

さすがの俺もこれにはかなり驚いた

「いきなり何しやがる！」

思考が回復した一夏はボーデヴィッヒに文句を言う

「ふん……」

ボーデヴィッヒは何事もなかったかのように一夏の前から立ち去って空いている席に座ってしまう
ある意味、こいつに関心してしまうよ。これが軍人ってわけか？

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

それじゃあ、早く一夏と更衣室に行かないとな
じゃないとこのまま女子と一緒に着替えなくてはならなくなる

「おい織斑、三崎。デュノアの面倒を見てやれ」

了解、教官殿

「君たちが織斑君と三崎君？初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから……って亮兄！なんで先に行こうとしてんだよ！」

ちっ！バレたか

「ツッコんでないで早く来い」

「ツッコませたのは亮兄だろ……」

と文句を言いながらデュノアと一緒に走ってくる一夏

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

「一夏、とりあえず手を放してやれ。それじゃあ階段で転ぶぞ」

階段を見えた辺りから一夏にそう言う
本当に転ばれたら面倒だし、速度も落ちる
それだけは避けたい。なぜなら――

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君、三崎君と一緒！」

そう、ＨＲが終わったからだ
こいつらに捕まったら最後、質問攻めのあげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っている。一度経験したからな……それだけは絶対に嫌だ

「いたっ！こっちよ！」

「者共出会え出会えい！」

くそっ、ドッペルゲンガーよりしつこいんじゃないか？
つか、さっきよりも増えてるし

「織斑君の黒髪や三崎君の茶髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

なんで河原？そっちの方が面倒くさいだろ

「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」

「…男子が俺たちだけだからだろ」

「……？」

俺の言葉に首を傾げるデュノア

「いや、普通に珍しいだろ。ＩＳ操縦できる男って、今のところ俺たちしかいないんだろ？」

「あっ！――――ああ、うん。そうだね」

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないからウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー……何？」

「おい、そんなくだらない例えしてないで早く走れ。追いつかれるぞ」

「くだらないってウーパールーパーに謝るんだ、亮兄！」

知るか

例えを出したお前が謝りやがれ

「あはは♪二人とも仲良いね♪」

「そりゃどうも」

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱ学園に男二人はつらいからな。何かと気を遣うし。もう一人でも男が増えるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

俺に聞くな

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺は三崎亮。呼び方は好きな方で」

「うん。よろしく一夏、亮。僕のこともシャルルでいい――」

「「あっ」」

俺と一夏、デュノアの時間が止まる

のんびりと自己紹介をしていたせいか、下にあった雑巾（何故ある？）を踏みつけたデュノアが盛大に足を滑らし前のめりにゆっくりと倒れる

「うわっ！？」

「ちっ！」

ガシッと俺はデュノアを地面につくすれすれで受け止める

「大丈夫か？」

「う、うん／／／／」

「亮兄！シャルル！急げ、来るぞ！」

くそっ！本当にヤバいな
女子たちはもうすぐそこだ

「悪い。シャルル！揺れるぞ」

「へっ？うわっ！？」

変な声をあげるが、俺は気にせずシャルルを抱きかかえる

「きゃあああああ！見て！三崎君が転校生をお姫様抱っこしてる！」

「あれが幻の！？」

「転校生がお姫様で三崎君が王子様！？」

「私にもして～！」

おかしい！さっきよりも勢いが増している
つか、こいつ軽いな。まるで女の子を抱きかかえてるような軽さだ

「急げ、亮兄！更衣室はすぐはそこだ！」

「だったら少しは手伝え！」

「あわわわわっ！？／／／／」

第２５話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！

感想お待ちしております

第２６話

「はあ…はあ…」

「亮兄。大丈夫か？」

なんとか、アリーナ更衣室に到着した俺たちだが、俺は最後までシャルルを運んでいたためかなり疲れ果て膝を着いてしまう

「ていうか、何で校舎を出た辺りで降ろさなかったんだよ」

ぐっ、それを言われると確かに校舎を出れれば女子たちの追っかけは減るのだ
それなのに何で運んでいたのは、慢心だったのかもしれない
俺もある程度このＩＳ学園で体を鍛えられた。校舎を出た辺りでもまだ余裕があったから、平気だと思ったんだが……ちょっと調子に乗りすぎた

「ご、ごめんね、亮。僕がちゃんとしていれば…」

「き、気にすんな…んなことより早く着替えるぞ」

「うわ！確かに時間ヤバいな！」

俺と一夏は急いで着替えを始める

「わあっ！？」

「？」

いきなり、シャルルが変な声を出す

「荷物でも忘れたのか？って、なんで着替えないんだ？早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあうるさい人で――――」

「一夏はそれでよく怒られてっからな」

「うるせえやい。ちょっと遅くなっちまうんだ」

いや、その理由はなんなんだよ？

「ほら、シャルルも早く着替えろ」

「う、うんっ！き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

「？？？いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！別に見てないよ！？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない――――というか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

経験者は多くを語るってか？

「……」

着替え出して数秒
何故か視線を感じる

「シャルル？」

「な、何かな！？」

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に……って一夏まだ着てないの？」

一夏はまだＩＳスーツのズボンしか着ていない
もちろん。俺はすでに着替え終えている

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなぁ。引っかかって」

「ひ、引っかかって？」

「おう」

「……／／／／」

「よし、シャルル。さっさと行くぞ。一夏を置いて」

「えっ！？ちょっと！？」

俺はシャルルを連れて先に更衣室を出た

「たくっ、一夏の奴。なんであんな下品なことを平気で言うかな」

そんな話、誰も興味ねえっての

「シャルルも嫌だったら厳しく言ってもいいんだぞ」

「う、うん」

「そういえばそのスーツ、見たことねえな」

「これはデュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？デュノアって……」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「ふーん。そうなんだ」

「う、うん」

「？どうした？」

「いや、ちょっと驚いちゃって」

何がだよ？俺、変なこと言った？

「ううん。大半の人はその話を聞いて驚いたり、凄いねって誉めて

きたりするんだけど」

なるほど

「まあ、確かに驚くし、凄いと言えば凄いが、シャルルが社長って訳じゃねえし、凄いんじゃないからなそんな興味ねえ」

「そ、そうなんだ」

「だが……一応シャルルのことはいろいろと知りたいがな」

「あ、ありがとう……」

うん。ちょっとは元気になったみたいだ

会社の話をしているシャルルは顔が暗くなったように見えたからな。

この話は禁止だ

「おおーい！亮兄、シャルル！」

「うし、早く行くぞ」

「う、うん」

一夏の声が聞こえた瞬間、俺とシャルルは走り出した

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

俺とシャルルが一組整列の端に加わると隣にいたセシリアにそんなことを言われた

ちなみに一夏は千冬さんに怒られている

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

何故かセシリアの喋り方に棘がある

「シャルルと少し喋り込んでいただけだよ」

「う、うん」

「あら、そうでしたの？」

シャルルの肯定もあったおかげかセシリアはすぐに納得してくれた

「そういえば、一夏さんはどうしてあの女性にはたかれたのでしょうか？」

「わかんねえよ」

「なに？一夏はまたなんかやったの？」

後ろを振り向いたら鈴がいた

ああ、後ろは二組の列だから当たり前か

「一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ？アイツはなんでそうバカなの？」

「――――安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ギギギギッ……ときしむブリキの音で首を動かすセシリアと鈴

バシーン！

そして容赦なく出席簿アタックが響いた

第２６話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！

今回は少し短めでしたね

感想お待ちしております

第27話

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はかなりの人数がいる
出てくる返事もいつも以上に気合いが入っていやがる

「くうっ……何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

叩かれた場所が痛むのか、セシリアと鈴はちょっと涙目になりながら頭を押さえている
セシリアはともかく、鈴は完全に八つ当たりだ

「そんなに痛いのか？」

「痛いわよ！アンタ喰らったことないの？」

あるが、そんなに痛くなかったはずなんだが

「でしたら見てみてください！赤くなってますわ！」

ぐいっと頭を突き出してくるセシリア

「いや、赤くなってないが……」

「そんなはずがありませんわ！とても痛いのですから！」

「だったら痛くなければいいんだな？」

「えっ？」

俺の言っていることが理解できないのか変な声を出すセシリア
そんなセシリアにお構いなしに俺は行動に出る

ぽむっ

「痛いの痛いの飛んでけ～」

「「……」」

あれ？セシリアだけではなく、鈴までもが黙り込んでしまう
おかしい。当初の予定ではセシリアが『子供扱いしないでくださいまし！』とか言って怒らして、痛みを忘れさせようとしたのだが

「……亮」

なんだろう
鈴の目が獲物を狩る目になっている気がする

ポンポン

「い、痛いの痛いの飛んでけ～」

何やってんだ、俺！？

無意識の内に鈴にも同じようなことをしてしまった

「……／／／／」

あれ？何故か鈴も黙り込んでしまう

つうか、俺はいつまで頭をさすっているんだ

「「あっ……」」

俺が止めて手を離すと名残惜しそうな顔をしている

「えっと……もう頭は大丈夫か？」

「ええ…もう大丈夫ですわ」

「うん…大丈夫」

う、嘘だ！

いつもの二人の反応じゃない！？

「今日は戦闘を実演してもらおう。――凰！オルコット！」

「「はい…」」

返事をして千冬さんの前に立ったセシリアと鈴

「……三崎。この二人に何をした？」

「何もしていません」

ピンポイントに俺に聞いてくる千冬さん
なんでわかるんだ？

「まあいい。さっさと起きろ、馬鹿者」

バシーン！

思いっきり叩かれた二人は頭を押さえて座り込む

「お前たちには戦闘を実演してもらう。さっさと準備をしろ」

「ど、どうしてわたくしたちが！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」

「ううっ・・・」

「お前ら少しやる気を出せ。――アイツに良いところを見せられるぞ？」

なんか最後の方、二人にしか聞こえないように喋っていたが、なんだ？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね！専用機持ちの！」

一体なにを言われたんだよ？

やる気ＭＡＸになっていやがる

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィン……ドカーン！

いきなり変な音が聞こえたと思ったら、謎の飛行物体がこちらに向かっており、そのまま一夏へと直撃してしまう

おっ！白式を展開して怪我はしていないようだ。成長したな一夏

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

「ん？この声は……」

聞き覚えのある声に俺は近づいて見てみる

すると、何故か一夏がＩＳを展開した山田先生を押し倒した体勢になっていた

「そ、その、ですね。困ります……こんなこと‥」

「‥えっ？いや、これは‥‥」

「それに私には三崎くんが――――」

「とりあえず一夏退いてやれ」

「あ、ああ‥‥」

そんな名残惜しい顔するな。この変態

「さて、小娘ども。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で‥‥‥？」

「いや、さすがにそれは‥‥‥」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志をたぎらせている

つうか、もっと言い方がなかったんだろうか？

今のお前たちでは相手にならん、とか‥‥‥一緒か

「では、はじめ！」

号令と同時にＩＳを展開したセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た

「手加減はしませんわ！」

「ソッコーで終わらせるわ！」

「い、行きます！」

いつもの山田先生じゃないな。目が鋭く冷静なものに変わっている

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた

だが、シャルルには悪いが俺は戦闘の方を集中する

先制はセシリア・鈴だったが、山田先生は軽く回避した

そして山田先生の反撃が始まった

両手に持っている五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》が二人を襲う

命中精度が高く二人に確実に当たっている

セシリアもビットで反撃するが避けられ、鈴の弾雨の衝撃砲も避けられる

そして、山田先生の射撃がセシリアを誘導させ、鈴とぶつからせたところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下した

「くっ、うう…まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ…」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

どんだけ仲悪いんだよ、お前らは

ほら、他の奴らもくだらないいがみ合いにくすくす笑いが起こってるぞ

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

確かにこれで山田先生の見る目が変わるだろうな

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

千冬さんが言い終わるや否や、一夏とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄っていく

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて～」

「デュノア君の操縦技術見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

二クラス分の女子全員が一夏、シャルルの方に押し寄せる
もし、俺にも専用機があったらあんな風になっていただろう。恐ろしいな

その状況を見かねたのか、あるいは自らの浅慮に嫌気がさしたのか、千冬さんは面倒そうに額を指で押さえながら低い声で告げる

「この馬鹿者どもが……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

その一声に、それまでわらわらとアリのように群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすがごとく移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふうっとため息を漏らす千冬さん。お疲れさまです

「……やったぁ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……さっきボロ負けしてたし。はぁ……」

「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！わからないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！……」

「……」

と、千冬さんにバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりしていた
まあ、俺がいるドイツ転校生ラウラ・ボーデヴィッヒの班はまったくない――

「……わあーいー。ミッチ～と一緒だぁ～。よろしくねー……」

――と思っていたら布仏が俺に話しかけてきた
どうやら相変わらず喋るのが遅いみたいだ

つうか、改めてボーデヴィッヒを見てみると、張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ。俺たち生徒への軽視を込めた冷たい眼差し。さっきから一度も開くことない口
なんかこいつを見ているとムカついてくる理由はわからないが
他の女子はみんなちょっとうつむき加減で押し黙っている

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄（うちがね）』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。

好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がそう言うと俺のグループ以外は一斉に動き出す

「……」

ふむ。俺らの班の女子達がまったく動かない。布仏ですら固まってしまっている

「……とりあえず、訓練機を取りに行かねえか？」

「う、うん！そ、そうだね！」

「そうしようそうしよう！」

俺の一言に動揺しながら動き出す

「訓練機は『打鉄』で良いか？」

「……好きにしろ」

ボーデヴィッヒに確認したらそんな一言だけを出してくる

まあいい。俺は訓練機を取りに行った

第27話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！

今回は山田先生の実力が明らかになりました

普通に強い事に驚きです

第２８話

「……では、ＩＳの装着と起動、歩行を行う。一番目の奴、とっとと始めろ」

「は、はい！？」

ボーデヴィッヒの重い声に怯えた返事を返す

そんな調子で三人目まではなんとか進んでいたのだが問題が発生する

「あ、あの…コックピットに届きません」

前の人が装着解除時にしゃがまずにそのまま降りてしまい、次の人が乗れなくなってしまったのだ

立ったままで解除するとコックピットは高い位置に固定されてしまうから気をつけないといけないのだが、やってしまったものは仕方ない

「ふん。自分でどうにかしろ」

ボーデヴィッヒは冷たい言葉を言い放つ

「そ、そんな…」

「恨むなら、そんな初歩を間違えるバカを恨むんだな」

「……」

二人目の女子が顔を下へうつむいてしまう
次の女子は先生を呼ぼうとするが、他のグループに付いていて来れそうにない

「う・・・ううっ・・・・」

ヤバい。ぽつんと孤独に感じて泣き出しそうになってしまう

「・・・ちょっと待ってろ」

「・・・・・え？」

俺はその女子にそう言うと立ったままのＩＳによじ登り、コックピットまで一直線
たどり着いた俺はすぐに起動させ座らせる

「これで大丈夫だ」

「・・・あ、ありがとう」

「前の人もミスは誰にでもある。次からは気をつけろよ」

「は、はい！」

これでなんとか問題は解決した

「・・・・余計なことを」

なんかボーデヴィッヒから何かを言われている気がするが気にしない

そして、五人目まで進んだがさらに問題が発生する

「貴様はもっときびきびと動けないのか」

「ううーっ。ごめんなさーい」

布仏の番なんだが、さすがのボーデヴィッヒも布仏ののほほんとした行動に我慢できなかったようだ

「さっさと歩け」

「はーい」

「だからその喋り方を止めろ」

ＩＳを起動させ歩き出すが、その動きものほほんと遅い

「なぜ、貴様みたいな役立たずがこの学園にいるのだ。役立たずはＩＳに乗る資格などな――」

「止めろ」

「み、ミッチ～・・・」

ボーデヴィッヒの発言を止める。布仏は涙目で俺を呼ぶ

この野郎、なんてことを言いやがる

「また貴様か。邪魔するな」

「するね。最低なことを言おうとしている奴にならなおさらな」

「ふん。役立たずに役立たずと言って何が悪い？こいつらはＩＳをオシャレかなんかと勘違いしている。そんな奴らにＩＳを乗る資格などない。それに貴様みたいな男もな」

ぎんっと睨みつけてくるボーデヴィッヒ

「はっ！あんたにそんなこと言われる筋合いはねえよ。そんな上から目線でぎゃあぎゃあ嫌みしか言えない上官気取っている奴にはな」

「なに・・・」

「それにＩＳを使い始めてまだ全然経っていない。少しできないから見放すって織斑先生から教えてもらったのかよ」

「！！貴様！教官を侮辱するのか！」

今までで一番大きな声で怒鳴ってくるボーデヴィッヒ。なるほど、やっぱり千冬さん関係になると沸点が低くなるのか

「全然。俺が侮辱しているのは、織斑先生に教導を受けていてもバカなことを言うてめぇに言ってんだよ、ボーデヴィッヒ」

「き、貴様ぁぁぁぁぁっ！！」

「止めんか！！」

千冬さんの一喝でボーデヴィッヒの動きが止まる

「何をしている」

「い、いえ。この男が‥」

「三崎」

「何でもありませんよ。ちょっと話していたら気に障ること言っていたみたいです」

「‥‥‥わかった。ボーデヴィッヒ、さっさと終わらせろ。三崎、お前は罰としてグラウンド三周だ」

「了解しました」

「はい」

「ミッチ〜‥‥」

俺は走りにグラウンドに向かおうとするところに布仏が申し訳なさそうに俺の名前を呼んでいる
俺は適当に手を振って大丈夫だとアピールする

「三崎。放課後、職員室に来い」

そして、ぼそっと俺にそう言う千冬さんに頷ずき、その場を後にした

「それで亮兄はあいつと何を言い合ってたんだ？」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた
一夏が屋上で昼食を食べようと誘ってきたのだ。もちろん、箒やセシリア、鈴のいつものメンバーとシャルルも一緒だ
そのときの箒の目は恐く、一夏に向けられていた

「そうですわ！あの人と口喧嘩をしてましたが何か理由が？」

「そうね。アンタは滅多なことでは怒らないからね」

「なんでもねえって。ただ意見が食い違って言い合いになっただけだよ」

「本当に？あのボーデヴィッヒさんがあそこまで怒鳴るなんて・・・」

シャルルまで俺に疑いの目をかけてくる

「だから、なんでもねえって。それよりも早く飯にしようぜ」

そう言って俺は弁当箱を取り出す

「あれ？亮って自分でお弁当を作ってるの？」

「まあな」

「こう見えて亮はかなり料理が上手いんだから！」

そこで何故お前が威張るんだよ、鈴

「そしてわたくしの料理の先生でもありますのよ！」

セシリアもそこは自慢げに言う事ではない

確かにセシリアの料理の先生をしているのは本当だ

前にセシリアが俺に手作り焼きそばパンを持ってきたのだが、それがまた酷い味だった

セシリアは俺が美味いと言うと思っていたのだろう。だから、俺は言ってやった『不味い』って、最初はありえないって否定していたが、無理矢理食わせたら『ぐはっ！？』と言ってはいけない言葉を漏らしていた

ショックだったのだろう。その後かなり落ち込んでいたが、料理を教えようかと提案したところ本当に嬉しそうにお願いされた

そして今では週三日空いた時間に教えている

「へえ！すごいね！」

「そうでもねえさ」

「あの：それでですね・・・今日はわたくしも作って来まして・・・」

何だとっ！？

料理を作るときは連絡しろと言っておいたのに

「怪我はしなかったのか？」

「ちょっと、亮。それは過保護過ぎじゃない？」

そんなことはない

前回、少し目を離したら指を切ったり火傷したりとすぐに怪我をする

「だ、大丈夫ですわ！今回はサンドイッチですので」

「パンや材料を用意するときに使うだろうが・・・」

「そ、そういえば箒。俺の分の弁当を持ってきてくれたんだろ？」

「あ、ああ・・・・・」

箒は一夏に弁当を差し出す

「じゃあ、早速。・・・・・おお！」

弁当を開けると一夏が驚く

「これは凄いな！どれも手が込んでそうだ」

「確かに凄いな。朝早くから頑張ってた甲斐があったな」

「えっ？」

「りょ、亮！／／／／」

おっと、これは内緒の話だったな
俺が弁当を作りに来たらすでに箒が弁当を作っていた。弁当を作っているとき、かなり奮闘していて終わるまで俺の存在に気づかなかったんだよな
誰の分を作っていたのかと思っていたが、一夏のために作ってたんだな

「箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ?」

「!こ、これは、だな。ええと……」

答えられねえよな。成功したのが、それ（一夏の分）だけだなんてな

「わ、私はダイエット中なのだ!だから、一品減らしたのだ。文句があるか?」

「文句はないが……別に太ってないだろ」

「一夏。ダイエットは別に太っているからするものだけではないんだぞ。美容や健康のためにすることもある」

「その通りよ。何であんたはダイエット＝太っているの構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわね」

「いやでも実際ダイエットなんか必要ないように見えーーー」

隣にいる箒を見ようとする一夏だが、顔を思いっきり手で押し返される

「ど、どこを見ている、どこを！」

「どこって……体だろ」

「いやダメだろ」

その言い方は完全にアウトだ
見るのであればもっと――

「亮。あんたは一体どこを見ようとしてんのかしら？」

「っ！？／／／／」

鈴が変なことを言ってくる
箒は自分の体を抱くようにして隠す

「誤解だ。俺が見ていたのは箒の顔だ」

「顔……ですの？」

「箒の顔の肌を見ていたんだ。確かにダイエットの必要がない。綺麗な肌だったよ」

「そ、そうか……／／／／」

「「……」」

あれ？変なことは言っていない筈なんだが

「……ははは。亮って凄いね」

シャルルがいきなりそんなことを言ってくる

何が凄いんだ？

「コホン。さて与太話はこのくらいにして昼食にしよう。いつまでも談笑していられるほど昼休みは長くはない」

おいっ、それはどういう意味だよ

「じゃあまあ、いただきます」

唐揚げをほおばる一夏

「おお、美味い！箒は本当に食べなくていいのか？」

「……失敗した方は全部自分で食べたからな……」

ちなみに俺も食べさせられたよ

ほとんどが真っ黒に焦げていたものをな

「本当に美味いから箒も食べてみろよ。ほら」

そう言って一夏は唐揚げを女子の一口サイズに切って、箸で持ち上げる

「な、なに？」

「ほら。食ってみろって」

「い、いや、その、だな……」

箒はかなり動揺している。まあこれは仕方ないだろう

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？」

「そうだな。一夏はまったく意識していないみたいだがな。大した奴だよ」

納得したように微笑むシャルルに俺も賛同する

「それと同じくらい恥ずかしいことを平気にやってみせる亮には言われたくないわね」

「まったくですわ」

小さな声で聞こえないようにひそひそと話す二人

仲良さそうでなによりだ

「はいあーん」

「あ、あーん……／／／／」

多少ぎこちなくそう言って口を開け、唐揚げをほおばる箒

ホント仲良しだよな。この二人は

「い、いいものだな……」

「だろ？美味いよな、この唐揚げ」

「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」

「「……」」

ん？

一夏と箒の方を見ながら考え込んでいるセシリアと鈴

「亮！はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「亮さん！サンドイッチもどうぞ！一つといわずにどうぞ全部！」

ずずいっと鈴とセシリアが押し寄せてくる

しかも、かなりの気迫だ

「「さあ！」」

二人とも俺に料理を差し出してくる

しかも、『はいあーん』をやりたいみたいだ

「……わかった。まずはセシリアからだ」

俺の経験上、ここで断ったらあとが恐い

「は、はい！では、あーん／／／／」

俺は箒みたいにあーんとは言わずにサンドイッチを一口ほおばる

「……うっ！？」

うおぉぉぉっ！？

なんだこれは！舌が痛く、鼻がつーんとして涙が止まらない
パンに挟まっている具材は特に問題ないのに

「どうかしら？」

「……」

「えっ、亮？」

俺は隣に置いてあるお茶のペットボトルを何も言わずに奪い飲む
その行動にシャルルが驚いていたが、このペットボトルはシャルルのものだったようだ

「……『どうかしら？』じゃねえ！お前、具材以外に何をした？」

「えっ？隠し味にわさびを」

セシリアがサンドイッチを開いて見せると、両面びっしりわさびが塗られていた

「違えからな。それはからしだ。それに量は少しでいい。びっしり塗る必要はない」

それじゃあ何かの罰ゲームになっちまう

「そ、そうでしたか…申し訳ありません」

「…まあ、前回よりかかなり良くなっているから。落ち込まずに頑張れ。あと、そのサンドイッチは捨てずにわさびは全部取れ。そ

うすればちゃんと食べられる」

「はい！」

俺の言葉に元気良く返事して、わさびを取る作業に入るセシリア
失敗は成功の元だからな。挫けないように頑張ってほしい

「……あの…」

「ああ、悪い。いきなり奪った挙げ句、飲んじまって」

「う、ううん！大丈夫だよ。少しびっくりしただけだから」

まあ、緊急事態だったからな

「あ～…新しく買った方が良いか？」

「べ、別に構わないよ」

「そうか？ほいよ」

「……」

シャルルにペットボトルを返すとシャルルはそのまま固まってしまう
やっぱり新しい方が良かったか？

「亮！早くアタシの酢豚を食べなさいよ」

わかったから急かすなよ
俺は鈴の酢豚を食べる

「ど、どう？」

ちょっと不安げに聞いてくる鈴

「ああ。美味いな」

その一言にさっきの不安げな表情が嘘のように晴れやかになる

「と、当然よ！アタシが作ったんだから！」

不安げに言っていた奴が何を言ってんだか

まあ、味付けや具材の大きさなどしっかりできているし何も文句はないから言わないでおこう

「ていうか食べようぜ。食べてすぐダッシュは避けたい。俺たちはまた更衣室まで行かないといけないんだからな」

「ん？一夏ってもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」

「え？脱がないとダメだろ？」

「誰がそんなことを決めたんだよ？」

「そうよ。女子は半分くらいの子が着たままよ？だって面倒じゃん」

俺と鈴の言葉にマジで？と言いたげな顔をしている

ちなみに俺は上だけ脱いでいる。理由は特にない

「ていうことは」

「止めんか」

ばしっと箒たちに視線を向ける一夏を叩く
今のタイミングで見たら変態だぞ

「女子の体をジロジロと見ようとしないでよ！スケベ！」

「紳士的ではありませんわ！」

「いや、ただ眺めようとしただけ――」

「お、女の体を眺めようとするなど不埒な！」

ダメだ。一夏の立場がどんどん悪くなっていく

「……」

「？」

「どうかしたの、一夏？」

何故かおもむろに俺とシャルルの方を向く一夏

「男同士っていいなと思ってな」

ダメだ、こいつ。早くなんとかしないと

「よくわからないけど、一夏がいいなら良かったよ」

「ダメだ、シャルル。今の一夏は危険だ。１０メートルは離れねえと」

「酷くないか、亮兄！？」

酷くない
当然の対処だ
こうして、昼食も終わったが、一夏は一日中ずっと箒に白い目で見られていた

第２８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

ラウラとの第一ラウンドは判定で亮の勝ち？？？

感想お待ちしております

第２９話

「失礼します、織斑先生いますか？」

放課後

俺は午前の実習のときに千冬さんに放課後来るようにと呼び出しされたので来ていた

「三崎かこっちだ。付いて来い」

千冬さんに案内され個室に入った

「どうして呼び出されたかわかるな？」

「ボーデヴィッヒのことですよね？」

「そうだ」

「ちょっとつうか、あいつかなり織斑先生を慕っていますね」

「ああ・・・昔、ドイツ軍で教官をしていてな。そのときになつかれた」

なつかれたって、つかドイツで教官って

「だから知っているが、あいつは実習中怒鳴るほど熱くなる奴ではなかった。何を言ったんだ？」

「織斑先生関係のことでちょっと。先生はモテますね」

「茶化すな、馬鹿者。何故そのようなことを言った？」

真剣な顔で聞いてくる千冬さん

「ボーデヴィッヒの八つ当たりを俺に向けるため……」

「『八つ当たり』か……」

「はい。何に対する八つ当たりかはそのときはわかりませんでしたが、今考えればあれは一夏に対する復讐心」

「何故わかる？」

「目を見ればわかります。あれは――」

大切な人を奪われ失い復讐を誓った者の目

昔の俺と同じ目だ

「……そうか。奴は私がこの学園にいることに納得していないようだからな」

「それは一夏がいるから先生がここにいると思っているのでしょうか？」

「だろうな。まったく困った奴だ」

ため息を漏らし、こめかみに手を寄せる千冬さん

「それほど一途ってことじゃないすか」

「ふん。嫌な表現をするでない。私は至ってノーマルだ」

さいですか

「まあいい。ラウラのことは三崎に任せる」

「え？」

俺が？どうして？

「私が動いても何もかわらん。だが、お前ならラウラを変えてくれると思ってな」

「それはちょっと買いかぶりすぎじゃねえのか？」

俺は俺がただできることをやっているだけだからな

「これでも私はお前を信頼しているのだ。自信を持て」

「……」

まさか千冬さんからそんなこと言われるなんて思いもしなかったな

「――わかった。できる限りのことをやって見ますよ」

千冬さんの期待に沿えるかはわからないが、俺もボーデヴィッヒをほっとけない

「うむ。では、後は『スケィス』についてだ。何かわかったか？」

いきなり別の話に切り替える千冬さん

「今日、その知り合いとネットで会う予定です」

「そうか……だが、そのネットで会う奴は本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。俺の信頼してる仲間だからな。実際に会ったこともある」

「お前がそう言うならそうなのだろうな。結果が出たらすぐに知らせること、いいな？」

「了解。でも意外ですよ」

「何がだ？」

「俺をそこまで信じてくれるなんてさ」

「むぅ……」

あれ？千冬さんの目がさらに鋭くなったような

「いいから早く帰れ、馬鹿者」

「はい。失礼します」

俺は部屋の扉に手をかける

「あと……」

「な、なんだ？」

「……頑張るよ」

そう言って俺は部屋をあとにした

「『頑張る』か……」

千冬は亮が出て行った扉を見ながらそう呟いた

「本当に変わりおって……」

そして変わらない所は変わっていない
それも人の心を引きつける所が特にだ

それに良い顔になった
笑顔は見せないが、毎日を楽しく過ごしているように見える。それに自分の気持ちに素直になった

昔は、今の世界に絶望しているそんな顔したガキだった。それに目上の者にはこび、自分より下の者は見下すような奴だった

（私と始めて会った時もそうだったな。ボコボコにしてやったが）

それでも、一夏や回りの女子（箒を除く）には人気があったな

何故かは私にはまったくわからなかったが

でも今の奴は違う。三崎は信頼に値する男だ

それをつい言葉にしてしまうとはな。失態だ

「奴は人を引きつけるだけではなく、変える力も持っているのかもしれんな」

ふっと含み笑いをしながら千冬はその部屋から出て行った

「さてと・・・」

時刻は夜

現在、亮はハセヲとして『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』にログインしている

理由はもちろん『スケィス』についての情報を得るためだ

しかし、会う時間までまだあるため何をしようか考えている

（ん？ショートメールの着信。揺光からだな）

俺は揺光からのメールを確認する

《いきなりのメールごめん

ちょっとハセヲに相談したいことがあるんだ

マク・アヌの噴水場で待ってる》

「相談？」

珍しいな。あの揺光が相談なんて。まあ会う時間まで結構あるし行ってみるか

「揺光」

「ハセヲ！来てくれたんだな！」

噴水場に到着すると揺光がいたので話しかけると揺光は嬉しそうに俺の方を見た

「どうしたんだ？お前が相談事なんて」

「ああ…実はな、アタシ――『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』を止めようかと思ってさ」

「……は？」

いきなりの揺光の爆弾発言に固まる俺
仕方ないだろ？そんなこと言われたら何も言えなくなっちまう

「な、何でだよ？そんな急に」

「アタシ、ちょっとした事情で転校するんだ」

「い、いつ？」

「夏が終わって九月の始めに。その転校する学校は寮制でパソコンを使えないんだ…だからハセヲに会えるのも、あと少ししかないんだよ」

「……」

これればかりは俺でもこればかりは何もできない

「……どこの学校に転校するんだ」

「えっと、ハセヲには縁のない所なんだけど――――」

俺は次の揺光の言葉に体が固まった

「――――IS学園って学校なんだけど」

「・・・・はい？」

俺がやっとのことで出した一言

「ははは、驚くのも仕方ないよ。アタシも驚いてんだから」

驚いている理由は全く違うんだがな

「何でこの時期に？しかもお前、高二だろ？」

「うん。結構前からそんな話があってさ。断ってたんだけど、前にＩＳの起動試験ってのがあってね。それをやったら良い結果が出ちゃって政府から行くようにって言われちゃったんだ。親も乗り気で断れきれなくてさ」

そう言って腕を後ろに回しながら俺の目を見る揺光
ぶっちゃけ俺はかなり焦っていた

（揺光がＩＳ学園に来る？）

俺がそんなことを考えていると黄金の件（くだん）の一言を思い出す

『女難の相がいつも以上に悪くなってるモウから気を付けるモウ～～』

（当たりすぎだ！？）

もはや恐怖を感じざるおえない

「ＩＳについての勉強は今いる学校でもやってたし問題はないんだ。問題は……」

揺光は上目遣いで俺を見る

「あのね、アタシ。ハセヲに伝えたいことがあるんだ…」

揺光には悪いが今の俺の頭の中は混乱していて、言葉が右から左へと聞き流されていた

「アタシ……ハセヲのことが――――」

ピピピッ！

「！？」

突如としてきたメールの着信音で俺の混乱が晴れる
もう会う時間になっている。早く行かなければ！

「悪い、揺光！俺、もう時間だから！」

「――――すってえっ！？」

捨て去るような言葉に逃げるように走り出す俺に驚愕する揺光

「は、ハセヲの馬鹿ぁぁ！」

走り出し遠くに行ってしまう俺に揺光の怒声が聞こえた

「……最後に勇気を出して告白しようとしたのに……ハセヲのバカ」

そう呟いて揺光はログアウトする。もうハセヲに会うことはないと思いながら、思わぬ場所で再会するとは知らずに

第２９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

揺光フラグが立ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

・・・・すみません。興奮してしまいました

感想お待ちしております！

第３０話

「来たか、ハセヲ」

「……お、おう」

揺光と別れた俺は非公式のルートタウン『タルタルガ』のブリッジに到着していた

「どうした？様子がおかしいが？」

今、話している筋肉質の巨体のＰＣ『八咫』
こいつが今日会う約束をしている奴だ
リアルでは『火野拓海』と言って俺が初めてＩＳに起動したときに一緒にいた奴なんだが

「いや、何でもねえ。それより例の送ったディスクのことなんだが――――」

「わかっている。そのディスクについてだがハセヲに会わせたい者がいる」

「は？それは――――」

誰だよと質問しようとする前に後ろから誰かの声が

「僕ですよ。ハセヲさん」

「お前は『欅（けやき）』！」

『欅（けやき）』

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは『月の樹』という巨大なギルドのギルドマスターだ

その実体は俺のＰＣ（ハセヲ）を改造（チート）するスーパーハッカーだ

「お久しぶりですね、ハセヲさん」

「そ、そうだな。五ヶ月ぶりだったか？」

「何言ってんですか、ハセヲさん。つい最近に会ったばかりじゃないですか」

いつもの明るい笑顔でそう言ってくる欅

つい最近だと？全く身に覚えがない

「会ったって言うより話したと言った方がいいですね」

「はあ？意味わからねえぞ」

「ちょっと待ってくださいね。あ、あ、あ～」

欅がいきなり自分の喉をとんとんと叩き始める

「『これでどうでしょうか？』」

「！？」

急に欅の声が変わる

しかもその声は実際に聞いたことがある声だった

「まさかあのクラス対抗戦の電話は・・・」

「『はい！僕です』」

頭が痛くなる

どうしてこいつはこんなに企画外なんだ？

「『えっとですね。早速ですが。そのディスクの中身ですが――』」

「ちょっと待て・・・その声止めろ・腹が立ってくる」

「『そうですか？あ、あ、あ～』」

欅が再び喉をとんとんして声を戻す

「あ～・これでいいですね？ではあのディスクはスケィス因子が入っています」

軽っ！

悩んでいた事がそんな簡単に解決するなんて逆にもやもやする

「でも、何でスケィス因子があるんだ？俺（ハセヲ）の中にあるんだろ？どうやって取り出したんだよ」

「いやだな、ハセヲさん。ハセヲさんを改造したときに決まっているじゃないですか」

あの時か……
今、考えたらかなり無茶なことをされたな

「じゃあ、何でＩＳが変化し、壊れたんだ？あれじゃまるで――」

「――スケィスにのっとられたですか？その通りです。スケィスがＩＳのデータベースを完全に書き換えて自分のものにしたのですよ」

そんなのありかよと思いながらも欅の話は続く

「壊れたのはスケィスが書き換えたデータベースにＩＳの装甲が維持できないからです。ハセヲさんが戦闘している間は保ちますが、ＩＳで言う待機モードに入ると耐えきれず壊れてしまうんです」

「そうか……それじゃあ何でそんなもんを俺に？」

「……ハセヲさんにはやって欲しいことがあるんです」

いつになく真剣な顔になる欅
そんな欅に俺は緊張が走る

「裏の世界で暗躍する秘密結社『亡国機業（ファントムタスク）』が産み出したＩＳを暴走させるウイルス『ＡＩＤＡ』を駆除して欲しいんです」

俺は意味がわからず、頭の中が真っ白になる

「正確に言えば『ＡＩＤＡ』ではないんですが、面倒なのでＡＩＤＡと呼びます。このＡＩＤＡは――」

「ちょっと待ってくれ！」

欅の言葉を遮る

「何でだ？何でそんなものが？」

「理由はまだわかりません。ですがそのＡＩＤＡはハセヲさんも直に戦っています」

「それって！」

どう考えてもあるしかない

「そう。クラス対抗戦のときに乱入してきた無人機ＩＳです」

確かにあのＩＳは異常だった。ただの無人機ＩＳの能力だけでは説明できない

「普通のＩＳではあの無人機ＩＳは倒せなかったでしょう。そんなウイルスが亡国機業に使われなかったらこのリアルは大変なことになるでしょう」

欅の言葉に思わずそんな光景を思い浮かべてしまうハセヲ

でもそこで一つの疑問が浮かび上がった

「それじゃあ、その亡国機業はそんなウイルスがあるのに使用してないんだ。使用してたら今頃――」

「使用『してない』んじゃなくて『できない』んです」

今度は欅がハセヲの言葉を遮り話し始める

「それほどＡＩＤＡの能力が高すぎるんです。使っても自分たちでは扱えきれずにいるのです」

「だから、無人機ＩＳを突入し暴れさせてデータを取ろうとしていたと？」

腕組みをしている八咫が聞く

「そうです。ですので僕も対抗策を、切り札を出した訳です」

「それがスケィス因子を使ったＩＳ」

「はい。と言いたい所ですが正直、ハセヲさんがＩＳを起動させていなかったら対抗策、切り札とか言ってられなかったです」

「は？俺がＩＳを起動させたのはお前が関係してたんじゃねえのか？」

てっきりそう思っていたのだが

「違うんですよ。本当に不思議です。何でハセヲさんはＩＳを起動させることが出来たのでしょう？」

そんなの俺が聞きたい

「とりあえずハセヲさんは今まで通りに過ごしてください。いずれ亡国機業が行動を始めるでしょう。そのときにハセヲさんがスケィスで止めちゃってください」

相変わらず難しいことを軽く言う奴だな

「あと、土曜日にはハセヲさんの元にディスクが届きますので、無くさないように」

「ちょっと待ってくれ。ディスクはち・先生に渡さないといけないんだが・・・」

じゃないと千冬さんに怒られるだけではすまない

「その点については大丈夫。ディスク以外にスケィス因子を組み込んだものも一緒に送っておいてますので」

なんとまあ、ありがたいことで

「それでは、スケィスの能力や注意事項をメールで送りますので今日は落ちましょう」

「えっ！？」

「さよなら～」

まだ聞きたいことがあるんだが、って言う前に欅は落ちてしまった

「・・・・・・・・・落ちるか？」

「・・・・・・ああ」

ここにいても仕方ないので俺と八咫は落ちるのであった

「織斑先生。確かに渡しました」

「うむ。確かに受け取った」

今日は土曜日
ＩＳ学園では、土曜日の午前は理論学習、午後は自由時間
だが、アリーナは全開放
一夏たちも今頃そこにいるだろう
そんな俺は今、千冬さんに例のディスクを渡すために職員室に来ていた

「そうか。お前の知り合いでもわからなかったか・・・」

「・・・・はい」

嘘である。かなりの情報を得た
これは欅の指示だ。できる限りこのことは秘密にしたいらしい
Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄのことを話した千冬さんに話しても良いのではないかとも思ったが、何が起こるかわからないから指示通りにする

「それでは俺はこれで」

「ああ……ん？待て三崎。その指輪はなんだ？」

千冬さんの一言にびくっと反応する俺
千冬が言う指輪は欅が送ってくれたスケィス因子を組み込んだ指輪だ

「これは贈り物ですよ」

「誰からだ？」

「誰でもいいじゃないですか」

「誰からだ？」

どうしようういつも以上にしつこい気がするぞ
だったら一か八か

「か、彼女からです」

「……」

急に下を向いて黙り込んでしまう千冬さん
あ、あれ？
こんな反応するとは思いもしなかったぞ

「すみませんでした！嘘です！だから顔を上げて下さい！？」

耐えきれなくなった俺は結局全部話すことにした

「なるほど。そういうことだったか」

「すみません……」

なんとか千冬さんの調子が戻り一安心する俺

「だが、その欅という奴の判断は正しい。なぜ話した？」

「いや……その……」

嘘を吐くこと自体はなんてことはない。でも――

「千冬さんが落ち込んでいるところを見たくなかったから……」

パァンッ！

出席簿アタックが直撃する

「馬鹿者。織斑先生だ。それに：誰が落ち込んでいるって……？」

「すみません。調子に乗りました」

ゴゴゴッと嫌な感覚を感じたためすぐに謝った

「ふん。もう帰れ。その指輪は特別に許可しよう」

「ありがとうございます、織斑先生」

そう言って俺は職員室から出た

「この女たらしめ」

なにか聞こえたきがするが気にしないことにした

第３０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第３１話

「あっ！亮兄！」

職員室を出て廊下を歩いていると一夏と山田先生と出会わす

「よう。どうしたんだ？」

「聞いてくれよ、亮兄！大ニュースだ！今月下旬から大浴場が使えるって！」

「ほう」

大浴場か、確かに大ニュースかもしれない

最近シャワーは出来ているが風呂には入れていないからな

「なんだよ、亮兄。もっと喜んでも良いと思うよ」

「喜んでるさ」

お前は興奮しすぎだ

「それもこれも山田先生が頑張ってくれたおかげなんだ」

「い、いえ。そんな／／／／」

一夏に誉められて恥ずかしがる山田先生

「そうか。それはありがとうございます、山田先生」

「そんなお礼なんて！喜んでもらえて良かったです！」

「いやいや、山田先生が頑張ってくれたおかげで俺たちは風呂に入ることが出来るんですから感謝して当然。ありがとうございます」

「あ、あああ／／／／」

あれ？

山田先生の様子がおかしい

「お、織斑くん！早く職員室に行きましょう！？／／／／」

「えっ！山田先生！？」

顔が真っ赤になった山田先生がパタパタと走り去ってしまう。教師が走るな

「仕方ないな：あっ、亮兄！ちょっとお願いがあるんだけど」

「何だ？」

「俺の部屋のボディーソープが切れてたのを思い出したんだけど補充するのを忘れちゃってさ。俺これから白式の正式な登録に関する書類を書かないといけないから亮兄が代わりにやってくれないか？今頃、シャルルが困っていると思うんだ」

両手を合わせて俺に頼み込む一夏

「わかった。シャルルはもう部屋にいるんだな？」

「ああ。多分開けっ放しにしていると思うから。頼んだよ、亮兄」

「おう」

俺はそう返事をして一夏とシャルルの部屋に向かった

「……開かないな。誰も居ないみたいだ」

到着したのだが、開かないし、ノックしても返事が来ない
本当に誰も居ないようだ

「仕方ない。いったん戻るか……」

そう呟いて俺は自分の部屋に戻ることにした

仕方なく自分の部屋に帰ってきた俺だがドアノブに手をかけた瞬間、
あることに気づく

「……開いている」

おかしい。ちゃんと鍵を閉めて出かけたのに開いている

「……」

俺はゆっくりとドアを開け、中を確認する
中は真っ暗だったが一ヶ所だけ明かりが付いていた
あそこは、俺のパソコンがある場所だ
そこには誰かがいるが、よく見えない

（もしかして亡国機業か？）

そんな悪い予感をただ寄せながら俺はバレないように入り、ドアを閉めて鍵をする

（よし……行くぞ！）

そして俺は覚悟を決めて電気を付けた

「っ！？」

「てめぇ…何者だ？」

電気を付けて侵入者の姿が見えたものの服装は真っ黒で、ニット帽にサングラスさらにマスクをして顔は全く見えない

性別は女だ
その特徴である膨らんだ胸がなによりの証拠

「……」

「黙りか？」

「……っ！！」

「ちぃっ！」

侵入者が警棒を取り出して俺に襲いかかってくる

「！？」

バシッと俺はその警棒を片手で掴む

滅茶苦茶いたいが、そんなこと言っている余裕はない

「この野郎！！」

俺は怯んだ侵入者の腕を掴みベッドへと投げる

すぐに俺は侵入者の上に跨り、マウントポジションに付いた

「顔を見せろ！」

「あっ！？」

「なっ！？」

侵入者の顔を見た瞬間、俺は驚愕した

なぜなら侵入者の正体は転校生で仲良くなったシャルル・デュノアだったからだ

第３１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

今回は短いので１５時頃にまた更新する予定です

感想お待ちしております

第３２話

「シャルル、お前・・・」

「ははは、バレちゃったか」

そう言って苦笑するシャルル

「何でお前がここに・・・それに女だったのか？」

「・・・・・うん。実家の方からそうしろって言われて・・・・・」

「実家・・・・・って言うとデュノア社か」

「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」

「命令・・・・・」

「僕はね、亮。愛人の子なんだよ」

俺は黙り込んでシャルルの話を聞く

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになった」

シャルルは言いたくないであろう話をそれでも健気に喋る

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは酷かったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのに」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルル

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「……だから、男装して注目を浴びようとしたのか？」

「うん。それに――」

シャルルは俺から視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で続けた

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

「俺や一夏、白式のデータを盗めと言われたのか……」

「そう。特に亮が使っていた黒いＩＳをね」

何でシャルルがそれを知っているんだと疑問に思うとシャルルが話し出す

「あの人がクラス対抗戦の試合を見たとき、亮の使っていた黒いＩＳをたまたま目撃したんだよ。『あれこそが私の追い求めたＩＳだ！どんな手を使ってでもあのＩＳのデータを盗め』ってね」

だから、俺の部屋に忍び込んだのか

「俺のパソコンの中にはそんな情報は無かっただろ？なんですぐに引き上げなかった」

「あはは、亮。そのい言い方はまるで僕が捕まって欲しくない言い方だね」

「そうだな。俺はお前のこんな姿見たくなかった。だが、逆に良かったとも思っている」

「え？」

びっくりした表情をするが構わず話す

「お前がこれ以上悪事に手を染める所を止められたんだからな」

「……亮。僕ね、見たんだよ」

シャルルはパソコンの方へと視線を向ける

そこにはあるサイトが開かれていた

「『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』…」

「うん。僕は別邸で過ごしていたとき、あのゲームをしていたんだ。友達がいなかった僕はせめてネットならと思って始めたんだ」

「……」

「でも簡単には友達は出来なかった。それどころかPK（プレイヤーキラー）に狙われる毎日。それでも僕は辞めなかった。友達が、信頼できる仲間が欲しかったから・・・」

それほど別邸での生活が嫌なものだったのであろうと考える

「しばらく経ってそこそこのレベルになって知り合いも増えた僕は、その知り合いと一緒に冒険に出ていた。でもすぐそこにPKが待ち構えてたんだ。僕は知り合いを守るため戦おうとした」

シャルルの拳に力が入る

「でもダメだった。僕はPKされた。一緒に冒険していた知り合いによって」

「！？」

シャルルの言葉に俺は目を見開く

「最初から僕をPKするために仕組んだことだった。僕は恨んだよ。仕組んだ知り合いじゃなくて僕自身を・・・僕はリアルだけじゃなく、ゲームでも要らない存在なんだって、そう思った」

シャルルの拳がゆるみ、途端に笑顔になってこう言った

「思ったときだった。倒れ失望した僕に一人の錬装士（マルチウェポン）が現れたんだ。まるで正義の味方のように」

「錬装士（マルチウェポン）？」

「うん！名前は『ハセヲ』。このゲームをしている亮も一度は聞いたことあるよね？」

「あ、ああ」

それどころか張本人です

「ハセヲは六人もいたＰＫをあっという間に倒して追い返したんだ！それで、僕をアイテムで回復させて言ってくれた。『俺と冒険しないか？』って。最初、それを聞いたとき自分の耳を疑ったよ。だってハセヲは『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』ではかなりの有名人。そんなハセヲが僕に冒険へ誘ってくれたんだもん！」

まるで子供のように話すシャルル

それまでハセヲとの出会い嬉しかったのだろう

「僕は喜んで一緒に冒険した。それは今までで一番楽しかった。そして別れ際に僕は尋ねた。『僕みたいな要らない存在となんで遊んでくれたの？』って。そしたらハセヲは僕を殴ってこう言った」

『要らない存在なんて、この世には一つもない。お前は大事な存在

だ。現実（リアル）も《Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ（ゲーム）》も俺の中でもな』

「僕は涙が止まらなかった。僕はここにいても良いんだって思えた。僕はハセヲに救われたんだ」

シャルルの目から涙が溢れ出す

「僕は今、あの画面を見て自分は何やっているんだろう、そう思ったら体が動かなかった。多分、ハセヲが止めてくれたんじゃないかな？馬鹿なことは止めろって」

「それは違う。お前は気づけたんだ。自分の本当の想いに」

「自分の本当の想い？」

意味がわからず首を傾げる

俺はシャルルの上から降りて手を握る

「命令より友達の方が大切だって。お前は欲しかったものを自分で守ったんだ」

「……亮」

シャルルは俺の腹辺りに抱きつく

「僕は……守れたのかな？」

「守れたさ。ここで涙を流しているシャルルがいる。それが何よりの証拠だ」

「う、うん…う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」

シャルルは俺の腕の中で泣き叫んだ。想いの全てを涙に変えて

「もういいか？」

「う、うん……」

泣き止んだシャルルはゆっくりと俺から離れる

「これから、どうするんだ？」

「…亮にバレたから、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「俺が聞きたいのはデュノア社のことなんかじゃない。シャルルのことを聞いている」

「……時間の問題じゃないかな？フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな？」

シャルルが牢屋に……ふざけるな！

俺はそんな怒りを抑え話す

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」

「いや、シャルルには選ぶ権利がある」

「えっ？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

これがあるなら、この学園にいる間の三年間は大丈夫だ。それだけの時間があれば、良い方法が見つかる

「だから、ここにいろシャルル」

「……亮でも――」

「心配事があるなら俺がなんとかする。シャルルが戦うなら俺も協力する。居場所がないなら俺がお前の居場所になってやる」

「……」

「……だからここにいろ」

俺の精一杯の想いはシャルルにぶつけた

「……亮って意外と我が儘なんだね」

「ああ。特に大切なものがかかっているとな」

「そっか……」

「だが無理強いはしない。よく考えてお前が決めろ」

「うん。そうするよ……亮ってさ」

シャルルは部屋のドアの前に立って振り向いた

「――ハセヲみたいな正義の味方だね」

「残念ながらそんな大それた存在じゃねえよ」

「あはは。でも、僕はそう思った。またね、亮」

そう言ってシャルルは出て行った

「正義の味方か……」

ほんと、そんな大それた存在じゃねえ

俺もハセヲもな

翌朝

俺と一夏、昨夜に侵入してきたシャルルは、一夏とシャルルの部屋で緊急会議をしていた

「で、結局一夏にバレちゃったと」

「……うん」

申し訳なさそうに返事をするシャルル

どうやら安心しきっていたらしく、そのときの自分の格好（男装解除）に気づかないで入り、一夏に目撃されたらしい

「お前って肝心な所でヌケてるよな」

「ううっ・・・」

しょんぼりと縮こまるシャルル

「まあまあ、亮兄。今はこれからどうするかを考えよう」

「それもそうか。つっても俺と一夏が黙っていれば何も問題はない」

「ごめんね、二人とも」

「謝るなって！俺と亮兄は好きでやっているんだから」

笑顔でそう言う一夏

シャルルはその言葉を聞いてとても嬉しそうだ

「これで緊急会議は終了だな」

「いや、問題はまだ残ってるぞ」

「え？なに？」

「一夏がシャルルを襲わないかどうかだ」

「なあっ！？」

一夏は目を見開いて驚愕する
だってそうだろ?今まで男子と思ってたら実は女子でしたって、さすがの一夏でも意識はしてしまう

「一夏は今まで通りに接することが出来んのか?」

「ぐっ……」

「……『ぐっ……』じゃねえよ。否定しろよ」

「嵌められた!?」

何で嵌められるんだよ
そこは自信を持って大丈夫というところじゃねえか

「まあ、一夏はそんなことをする奴じゃねえから安心しろ」

「もちろん、わかってるよ。でも……」

「???」

「亮が一緒に寝てくれたらもっと安心できるかな」

「なっ!?」

上目遣いでそう言ってくるシャルル

「おいおい。亮兄の方が意識してんじゃん」

「いや、今のは反則だろ!」

「あはは、亮のエッチ♪」

笑顔でそう言ってくるシャルル

なんか肩の重荷が取れて良い表情をしていた

第３２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

シャルとの意外な接点が明らかになりました

感想お待ちしております

第３３話

「そ、それは本当ですの！？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

月曜の朝、教室の目の前にいた俺は、いきなりの大声に足を止めてしまう

「なんだ？」

「さあ？」

近くにいた一夏とシャルルもその声に目をしばたたかせた

「本当だってば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と三崎君と交際できーーー」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃああっ！？」」」

一夏が普通に声をかけたら、取り乱した悲鳴が返ってくる

「で、何の話だったんだ？俺と亮兄の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

怪しすぎる。明らかに俺と一夏関係の話で間違いない

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！わたくしも自分の席につきませんと」

よそよそしい様子で二人はその場を離れていった

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「嫌な予感がするのは確かだ」

（な、なぜこのようなことに……）

教室の窓側列で箒は表面上平静を装いつつも、心の中では頭を抱えていた

その理由は月末の学年別トーナメントに関する噂が原因だった

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏・三崎亮と交際できる』

（そ、それは私と一夏だけの話だろうっ！それになぜ亮まで入っている！）

ひと月ほど前に箒は『月末の学年別トーナメントで優勝したら私と交際してもらう！』と、一夏とそんな話をしていた
その話が誰かに聞かれ、亮を巻き込んでしまう始末に

（まずい、これは非常にまずい・・・）

この噂をほとんどの女子が知ることとなっているらしく、さっきも教室にやってきた上級生が『学年が違う優勝者はどうするのか』『授賞式での発表は可能か』などとクラスの情報通に訊きに来ていた

（と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。優勝すれば――）

ふと、箒の頭にあることが思い浮かんだ

（もし優勝したら、一夏だけではなく亮も私と交際することになるのか？）

確かに交際できるのはどちらか片方だけという決まりはつけられていない
だが、世間一般的に考えてそれはどうかと思う

（……悪くないかも……はっ！？）

一瞬、一夏と亮に挟まれて歩く自分を思い浮かべ、すぐに我に帰る箒

（何を考えているのだ、私は！一人が二人と付き合うなど不埒だ！！）

ぶんぶんと頭を振る箒

その後、千冬に出席簿アタックを喰らったのはお約束

「織斑先生、こんちわ」

「お前か三崎。さっさと教室に戻れ」

相変わらず冷たい人だ

挨拶くらい返しても良いと思う

「こんにちは。これで良いか？良いならとっとと行け」

「……」

何だろう？俺って千冬さんに嫌われているのだろうか？

「タイミングと状況を考えろ」

はい。わかってました

今の状況は千冬さんとボーデヴィッヒがなにか言い合いをしていたところに空気の読めなかった俺が登場って訳だ

正直、ボーデヴィッヒの視線が痛い

「貴様、軽々しく教官に話しかけるな！」

「残念。今は教師だから軽々しく話しかけてもＯＫだ」

パキィン！

「そんな訳あるか、馬鹿者」

「だから、何で俺だけチョークなんですか。危ないですよ」

「お前だからだ」

意味がわからん

「教官！なぜこんなところでこんな奴に指導をしているのです！」

「やれやれ……」

ボーデヴィッヒの言葉に溜め息をつく千冬さん

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ。こいつはそのオマケだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！それにオマケなら棄ててしまえばいい！」

お前ら、なにか打ち合わせでもしたのか？
人をオマケ扱いするな

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど――」

「――いい加減にしろよ、糞ガキ」

「なっ！？」

ドスのきいた声でボーデヴィッヒの声を遮ったのは俺だった

「さっきから上から目線でぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ……うぜえんだよ」

「……っ！」

「意識が甘く、危機感に疎いだぁ？なめてんじゃねえよ。この世界にはお前以上に優秀な奴なんてゴロゴロいんだよ。ドイツだけが優秀だなんて考えてんじゃね！」

「だ、だったら貴様は優秀だと、選ばれた人間だと言う気か！！」

「そうだな」

「！？」

質問の答えに驚愕するボーデヴィッヒ
ボーデヴィッヒの質問に答えたのは俺ではなかった
答えたのは、ボーデヴィッヒが尊敬し、親愛する千冬さんだった

「お前より、まだ三崎の方が見所がある。身の程をわきまえろ」

「きょ、教官……」

びくっと震えるボーデヴィッヒ
今、感じているのは恐怖
千冬さんに嫌われるという恐怖

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……」

ぱっと声色を戻した千冬さん
ボーデヴィッヒは黙したまま早足で去っていった

「悪いっすね。わざと嫌われ役になってもらって」

「ふん……そこの男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！千冬ね――」

ばしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

「そら、走れ劣等生ども。このままじゃお前らは月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。ならいい」

ニヤリと笑みを見せる千冬さん

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。急げよ。――ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。……とは言わん。バレないように走れ」

「了解。行こう、亮兄」

「おう」

「三崎」

一夏と走り出そうとした俺を呼び止める千冬さん

「私は嫌われ役になったつもりはない。ただ『本当のこと』を言っただけだ」

「それはありがたいことで」

「ふん」

ニヤリとさっきと同じような笑みを見せた後くるりと俺に背を向ける千冬さん

俺は感謝しながら教室までの道のりをバレないようにダッシュした

第３３話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

今回は原作をちょっと変えた感じです
楽しんでもらえたら嬉しいです

感想お待ちしております

第３４話

「「あ」」

ふたり揃って間の抜けた声を出してしまう
時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

ふたりの間に見えない火花が散る
どうやらどちらも優勝を狙っているようだ

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

ふたりともメインウェポンを呼び出すと、それを構えて対峙した

「では――――」

ドオォォォォン！

「「！？」」

いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る

そこには漆黒の機体が佇んでいた

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦く強ばる

「……どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

とん、と連結した《双天牙月（そうてんがげつ）》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフト

「中国の『甲龍（こうりゅう）』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラのすべてを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見いだそうとする

「はっ……ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ――――！

何かが切れる音がする

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわ

けね――――セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが――――」

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

ぶちちっ！

「――――今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にいない人間の侮辱……しかもわたくしの大切な人の……
その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」
武器を握りしめる手にきつく力を込めるふたり
「とっとと来い」
「「上等！」」

「ん？」
妙に外が騒がしいな。なにか模擬戦でもしているのだろうか
俺は千冬さんの言う通り、初戦敗退というレッテルを張られないように第三アリーナで特訓しに来ていた
Ａピットで使用する打鉄の整備しているといきなりの爆発音

ドガァァァァァァンッ！

「これは……」

ただの模擬戦で起きる爆発音じゃない。まるで専用機同士が真剣勝負をしているような

「まさか！」

俺はリアルタイムモニターでアリーナの様子を見る

映ったのはボーデヴィッヒにやられている鈴とセシリアだった

「あああああっ！」

ラウラのワイヤーブレードで捕まった鈴とセシリアは、その腕に、脚に、体に、ラウラの拳が叩き込まれている

シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告域（レッドゾーン）を超え、操縦者生命危険域（デッドゾーン）へと到達する

しかし、ラウラは攻撃の手を止めないただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ＩＳアーマーを破壊していく

「おおおおおっ！」

怒りのゲージが振り切れた一夏は白式を展開
同時に《雪片弐型》を構築、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動させ、アリーナを取り囲むバリアーへと叩きつけた

「その手を離せ！！！」

バリアーを破壊し、瞬時加速を使って接近しラウラへと、刀を振り下ろす一夏

「ふん……感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届くその寸前で、びたっと一夏の体が止まる
眼帯をしていないラウラの右目が上から飛び込んできた一夏を正確に捉えていた

「な、なんだ!?くそっ、体がっ……!」

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、ぐるんと一夏へと砲口を向ける

「そこまでだ」

「!……貴様…」

「りょ、亮兄……」

ラウラを止めたのは打鉄を装着し刀を突きつける亮だった

第３４話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！

次回はいよいよラウラとのバトル！！

感想お待ちしております

第３５話

「やりすぎだ、ボーデヴィッヒ」

「ふん、それがどうした。それで私を止めたつもりか？」

「！」

ニヤリと笑うラウラを見て悪寒を感じた俺はすぐに離れ距離をおいた

「ほう。勘はいいようだな」

一夏も同じようなものを喰らっていたからな

「大丈夫、一夏？」

「あ、ああ……」

体の自由が戻り地面に膝をつく一夏に黄色いＩＳ『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』を展開したシャルルが一夏の無事を確かめるどうやら大丈夫そうだ

「亮兄、俺も加勢する！」

「くんな！」

雪片弐型を握り直す一夏を止める

「な、なんでだよ！」

「お前らはセシリアと鈴の無事を確認しろ。ボーデヴィッヒは……俺がやる」

刀型ブレードを強く握りしめる

「いいだろう。まずはお前から仕留める！」

ラウラは六つのワイヤーブレードを一斉に射出して襲いかかる
俺は無理に全部弾かず、少し受け流して対応する

「防戦一方だな。さっきまでの威勢はどうした？」

「焦んなよ。まだこれからだ」

と、言ったはいいが状況は悪い
俺の武器は刀型ブレードだけ、ボーデヴィッヒはワイヤーブレードに大型レールカノンと中・遠距離武器が装備されている

「でも行くしかねえ！」

俺は瞬時加速を使ってボーデヴィッヒに斬りかかる

ガキィン！

「ちっ……」

しかしプラズマ手刀で受け止められる

「あの馬鹿よりかは使い方は上手いが、所詮は訓練機。そんなもので私に勝てると思うな！」

刹那、ビシッ！と俺の体が動かなくなる
これがさっき一夏が喰らっていたやつか

「すぐには倒さん。お前はじっくりと痛みつけてやる」

そう言ってボーデヴィッヒはワイヤーブレードで俺を切り刻んでいく

「亮兄！」

「亮！」

「くんな！」

びたっと俺の言葉に足を止める二人

「……こいつは俺がやるって言ってんだ！邪魔すんな！」

「で、でも……」

「根性だけは一人前か。あのメス豚どもみたいにたっぷり痛めつけてやる」

ボーデヴィッヒはワイヤーブレードを俺の手足に巻きつかせ俺の動きを封じる

ガンッ！

「ぐっ……！？」

ボーデヴィッヒの拳が顔と体を中心に叩き込む

ガンッ！ドンッ！ガンッ！バキィン！ガンッ！

「……」

「亮兄……」

「くっ……」

何度も何度もボーデヴィッヒの拳が俺に叩き込まれる
そんな俺の姿を一夏とシャルルは悔しそうに見ている

「どうだ？私は強い！貴様なんかより遙かに強い」

「……そうだな」

「ふっ、やっと認め――――」

「力イコール強いと考えているお前は俺よりいや、一夏より弱いな」

ぶちっ！

「貴様あああぁぁぁ！！」

「ぐっ！」

ボーデヴィッヒは俺を地面に叩きつけるとレールカノンを俺に向ける
ヤバいな。打鉄はもうとっくにシールドエネルギーが0だから動け
ない

「死ねえええぇぇぇぇ！！！！」

「ちぃっ！」

ドガァァァァァンッ！

レールカノンが俺に直撃した

「亮兄！？」

「亮！？」

「はあ、はあ……なっ！？」

ボーデヴィッヒの表情が歪む
殺したと確信していたボーデヴィッヒが見たのは片腕だけが異様な
形になっている亮だった

「死ねえええぇぇぇぇ！！」

俺は何やってんだ？
ボーデヴィッヒを止めるために出てきたのにボコボコにされて、今はトドメをさされようとしている

だが、ここでやられる訳にはいかない
でもどうする？今の俺にできることは――――

ドクンッ！

（！？）

俺の指輪が赤く光ったと思ったら鼓動を感じる

（ダメだ、出てくんな！）

ドクンッ！

（俺はＡＩＤＡと戦う以外にてめぇを呼ぶ気はない！）

俺はそう決めてんだ

『知るかよ』

ドクンッ！

（！？）

誰かが脳内に話しかけてくる

『このままじゃ俺たちが死ぬ。俺を呼べ亮』

（断る！）

『そうか。なら借りるぞ。お前の体』

ドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッ！

「止めろぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ドガァァァァァァンッ！

爆発音が収まり俺は目を開ける

「これは……」

「何だ……？貴様のそのＩＳの腕は。明らかに打鉄のものではない」

確かに違う。これはスケィスの腕だ

「勝手なことしやがって……」

「っ！？」

ゆっくりと顔をあげてボーデヴィッヒを見るが、目を合わせた瞬間、ボーデヴィッヒが後ずさる

なんだ？一夏たちもかなり驚いている

「亮兄、目が…右目が…」

「目…？……！！」

俺は装甲の反射を鏡にして自分の右目を見てみると真っ黒に染まっていた

「……」

驚くべきところなんだが、かなり冷静にいられる

「この死に損ないめ！」

ボーデヴィッヒがプラズマ手刀で俺にトドメをさしに接近してくる

ガキィン！

「！？」

ボーデヴィッヒのプラズマ手刀をスケィスの右腕『が』受け止める

……そう。『で』ではなく『が』なのだ

今の防御は俺の意志じゃない。スケィスが勝手に動いたのだ

『借りるぞ。お前の体』

不意にその言葉が俺の脳裏に浮かぶ

（言葉通りにしたって訳か）

ガシッ！バキキキキッ！

「っ！？」

スケィスの右腕がボーデヴィッヒの左手を掴むとそのまま握りしめていく

「ぐっ！」

スケィスの右腕を振り払ったボーデヴィッヒはワイヤーブレードを射出する

ブォンッ！

しかし、スケィスの一振りでワイヤーブレードが吹き飛ばされてしまう

「ならば！」

「ぐっ……」

また体が動かなくなる

スケィスの右腕も――

バチチッ！バキィン！

「そんな……馬鹿な」

――止まることを知らず、またもや一振りでそれを解除する

ヴゥン

「!?」

唖然としているボーデヴィッヒをよそに、俺は力を溜めるスケィスの右腕に気が付いた

「データドレイン……?」

止めろ!

そんな力を振るったらボーデヴィッヒだけじゃなく、近くにいる一夏たちにまで被害が!

「……に…逃げ…ろ」

ヤバい。抑えつけるので精一杯だ

「逃げろだと?なぜ、私が瀕死に近い貴様から逃げなければならない?貴様を再起不能にしてやる」

プラズマ手刀を起動させ瞬時加速で俺に向かってくる

止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ!!!!!

「おおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

「!?」

俺は右腕の主導権を無理矢理奪い返し、そのまま地面に叩きつけた

ドガァァァァァンッ!

「はあ…はあ…」

叩きつけた地面がぽっかりと穴が空いていた
クレーターと言ってもいいかもしれない

それに、さっきの俺の脳内に話しかけてきた声。あれはスケィスの声だった
でもどうしてだ?なぜあいつが出てきた?

「おい……」

考えているとボーデヴィッヒが声をかけてくる
おっと、そうだった。今はボーデヴィッヒと戦ってたんだったな

と言ってもISは解除されてしまい、打鉄は粉々に壊れてしまっている

「なぜだ……なぜ最初からその力を使わなかった?」

「……この力はあってはいけない異常(イリーガル)な力。だから無闇に使っていい力じゃないんだ」

「使ってはいけない力などありはしない！それはただ慢心なだけだ！」

「慢心でもなんでも好きに言ってろ。俺がそう決めたんだ」

それに千冬さんに怒らるしな

「わからん……力は立ちふさがる者をなんであろうと叩きのめす、そのためにあるものだ」

「否定はしない。俺も昔はそう思ってた」

「……今は違うと？」

「ああ。叩きのめすだけじゃ何も救えない」

「救う、だと？貴様はこの闘いから何を守ろうとする……」

「……それは――」

「そこまでだ、ガキ共」

「千冬姉！？」

俺の言葉を遮って現れたのは千冬さんだった

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「……教官……ですが」

ボーデヴィッヒが俺をちらっと視線を送ってくる

どうやら納得出来ていないみたいだ

「なんだ？異論があるか？」

「い、いえ！ありません！」

そう言ってボーデヴィッヒはＩＳを解除する

「織斑、三崎、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

状況についてけてないのだろう。素で答える一夏

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

「右に同じく」

俺らの返事を聞いた千冬さんは改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！

と千冬さんが強く手を叩いてこの場を納めたのであった

第３５話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！

今回は亮の負け・・・・・ですかね？
やはり、技術を持っていても相手が強くて初見ではさすがの亮でも敵わないってわけです

感想お待ちしております

第３６話

「……」
「……」

場所は保健室
時間は第三アリーナの一件から一時間

ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアが不機嫌な顔で視線をあらぬ方向へと向けていた

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

開口一番に出てきたのはそんな一言だった

「お前らなあ……はぁ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな――いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味――つううっ！」

「何やってんだよ、バカ」

まるでコントのような2人についついそう呟く

「バカってなによバカって！バカ！」

「亮さんこそ大バカですわ！」

見事に反撃を受けた

そんな興奮してるとまた怪我が痛むぞ

あっ、ちなみに俺は意外なことに軽傷だったからベッドには寝ていない

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

飲み物を買いに行っていたシャルルが戻ってきた

部屋に入るときに何か言っていたが、よく聞こえなかった

だが、それは俺と一夏だけだったらしく、鈴とセシリアは何かをしっかりと耳にしたようで、顔を真っ赤にして怒りはじめた

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ここここれだから欧州（ヨーロッパ）人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

2人はまくし立てながらさらに赤くなっている

ちゃんと聞いてれば良かったな

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましょうっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す

おいおい、せめて買ってきたシャルルにお礼を言えよ

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――――」

ドドドドドドドドドッ……！！

「な、なんだ？何の音だ？」

「だんだんと大きくなってるな」

ドカーン！

いきなり保健室のドアが吹き飛ぶ

って、危なっ！？マジで吹き飛びやがった

「織斑君！」

「三崎君！」

「デュノア君！」

入ってきたのは数十名の女子生徒だった
そして、俺と一夏、シャルルを見つけるなり一斉に取り囲み、手を伸ばしてきた

「な、な、なんだなんだ！？」

「……」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これ！」」」

状況が飲み込めない俺たちに、バン！と女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的に行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

再び一斉に手を伸ばしてきた

「私と組もう、織斑君！」
「私と組みましょう、三崎君！」
「私と組んで、デュノア君！」

いきなりの学年別トーナメントの仕様変更で、学園内で三人しかいない男子とともにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだろう
だが、ここで問題が起こる

「え、えっと……」

そう、シャルルだ
シャルルの正体は女子なため、俺ら以外と組まれるのは非常にまずい
今後ペア同士での特訓もやるだろうから、いつどこで正体がバレてしまうとも限らない

そう思ってシャルルを見ると、ほんの少しだが困り果てた顔で俺を見ているのがわかった

「残念だが、一夏とシャルルはすでに組んでるぞ」

「「「……ええぇぇぇぇ！？」」」

俺の一言に全員が驚きの声を上げる
って、一夏とシャルルまで驚きの表情をするな。バレるだろ

「で、でも三崎君は誰とも組んでないんでしょ？」

「悪いが俺もすでに予約済みだ。悪いが他をあたってくれ」

「そ、そんな！？」

「い、いったい誰が抜け駆けを！？」

「その女、呪ってやる」

しょんぼりした女子たちは保健室を去っていった。最後の奴は危なすぎる

「ふう……」

「あ、あの、亮――」

「亮っ！」

「亮さんっ！」

俺が安堵の溜め息をつくと、シャルルが話しかけてくるが、それを上回る勢いで鈴とセシリアがベッドから飛び出してきた

「あ、あたしと組みなさいよ！深い仲でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

ものすごい勢いだ。怪我をしているのを完全に忘れているなつか、鈴。その言い方は誤解を呼ぶから止めろ！

「ダメですよ」

うおっ！？

どこから現れたのか山田先生が登場

一夏たちもびっくりしているようだ

「お二人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退します……」

うん。無理は禁物だし、ＩＳのためにもそうした方がいい

「？？？」

一夏は意味を理解出来ていないみたいだ

「一夏、ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」

「……『ＩＳは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ＩＳのダメージがレベルＣを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』」

「おお、それだ！さすが亮兄！」

つか、そこは貸した参考書に線を引いといたはずなんだが、勉強してねえな

「しかし、何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「？」

なぜかちらっと俺を見てそう言う鈴とセシリア
でも、そうそうと、この二人が安易な挑発にのるのか？

「ああ。もしかして亮のことを――」

「あああっ！デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！まったくです！おほほほほ！」

何かに気づいたシャルルを、ふたりがすごい勢いで取り押さえたシャルルはふたりから口を覆われて、苦しそうにもがいている

「こらこら、止めろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさっきからケガ人のくせに体を動かしすぎだぞ。ホレ」

一夏が鈴とセシリアの肩を指でつつくって、そんなことしたら――

「「ぴぐっ！」」

――案の定痛みが走ったようだ

おかしな言葉かつ甲高い声を上げて、その場で凍り付いた

「……」

「……」

「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

一夏はすぐにやりすぎたことに気づき、謝ったのだが

「い、い、いちかぁ……あんたねぇ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……」

恨めしそうに一夏を睨む二人

「まあ、一夏の言う通り。お前らはケガ人なんだからベッドで大人しくしてろ」

「きゃあっ!?り、り、亮さん!?」

俺は一夏を睨みつけるセシリアを抱える

変な声を出すが構わず、ベッドに寝かせ布団を被せる

「ほら、鈴。お前もだ」

「えっ!うわぁっ!?」

鈴も同じようにベッドに寝かせて布団を被せる

「ＩＳもそうだが。お前らも安静にしてないとな」

「ううっ……／／／／」

「わ、わかりましたわ……／／／／」

どうやら理解してくれたようだ

でも、何で顔が赤くなってるんだ？

「……亮って本当に凄いよね。わざとやっているのかって思うくらいに」

そう言って俺を睨みつけるシャルル

何が凄いんだよ？

「それじゃあまあ、俺は先に行くわ。織斑先生にまた呼ばれてるし」

打鉄をまた破壊したから反省文を書かなければいけなくなったからな

「亮さん……申し訳ございません。わたくしたちのせいで関係ない亮さんが……」

「気にすんな。俺が好きでやったことだ。じゃあな」

謝るセシリアの頭を軽く撫でた後、俺は保健室の外に出た

「亮！」

するといきなり、保健室から出た俺を追いかけてきたシャルル

「んだよ？」

「あ、あのね……助けてくれてありがとう」

そう言って頭を下げるシャルル

恐らくさっきの押しかけてきた女子たちのことであろう

「気にすんな。咄嗟にそう言っちまっただけだし。お前と約束したからな。『心配事は俺がなんとかする』ってな」

「うん……でも、何で一夏とペアにしたの？」

「ん？嫌だったか？」

「う、ううん！そうじゃなくて、ただちょっと気になっちゃって」

手をぶんぶんと振り回しながらそう言うシャルル

「いや、一夏とお前は同じ部屋だし、特訓も一緒にやってたから息もあっていると思ったんだが」

俺はほとんどセシリア、鈴と一緒に特訓してたからな。無理矢理に

「それはそうだけど……それじゃ、亮は誰と組むの？」

どうやら俺が他の人と組んでいるって嘘を見破っているようだ

「……さあ？俺は誰でもいいから抽選で決めてもらうさ」

まあ、知り合いであるに越したことはないがな

よく考えてみると、一夏とシャルルはもちろんだが、セシリアと鈴も怪我で出場辞退だから知り合いは箒か布仏くらいしかいないあれ？俺って友達少なくね？

「それじゃあ最後にもうひとついいかな？」

さっきまでの慌てふためいたシャルルの表情ではなく、真剣な表情で俺を見る

「右腕は大丈夫なの？」

「！」

俺はシャルルのその一言に表情を歪ませてしまう

「亮、さっきから自分の右腕を庇っていたから怪我でもしたんじゃないかって思って・・・」

よく見てやがる

確かに俺は右腕に激しい痛みを感じている

原因はスケィスだ

スケィスの暴走で俺の右腕にかなりの負担がかかってしまったそれだけではなく、データドレインを無理矢理解除したのも原因だった

「・・・・・んな訳ねえだろ？気のせいだ。それにセシリアや鈴を運んだときにも使ってたじゃねえか」

そう、アピールするために俺はあんな真似をした

「嘘だよ。だって亮の右腕に赤い痣があったもん」

「なっ!?」

赤い痣だと?
そんなもん俺が着替えていた時には何もなかった。もしかして、今になって出てきたのか?
俺は急いで制服の袖をたくしあげたが――

「ないよ。だって嘘だもん」

「……」

シャルルのその言葉に俺はたくしあげた状態で固まってしまう
やられた
どうやらシャルルの方が一枚上手らしい
バレたついでに一応訂正しておくが、セシリアと鈴を運んだのはアピールではなく、単に怪我をしていたのを忘れていたからだ

「何で嘘ついたりするの?みんな心配するだけなのに」

「たく……」

「……亮?」

俺はシャルルの頭に左手を置く
そしてそのまま――

ギリリリリリリリッ

「いたたたたたっ！？」

――力を入れて握りしめる
シャルルは悲痛の声を上げている

「お前はいろいろと人を気にし過ぎだぞ」

「ううっ……亮には言われたくないと思うんだけど」

解放された頭をさすりながらそう言うシャルルだが、スルー

「俺は大丈夫だ。これは一時的なものだから明日になれば治ってるからさ」

「なら良いんだけど……」

「心配してくれてありがとな。俺を見ていることはあるな」

「えっ、いや、それは……／／／／」

顔を真っ赤にして口ごもってしまうシャルル
何かおかしなこと言ったか？

「それじゃあ、俺は行くわ。織斑先生のところに行かねえといけないからな」

「あ！それは本当なんだ」

俺の一言に意外そうな表情をするシャルル
まったく、全部が嘘だと思うな

「それじゃあ、また明日な」

「うん！」

元気な返事を聞いた俺は千冬さんがいる職員室に向かった
千冬さんに説教と大量の反省文を書かされたのは言うまでもなかった

第３６話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第37話

「……はあ」

千冬さんの説教喰らって反省文のさらに説教と俺の体力・精神がかなり削られてしまった
ふらふらと自分の部屋に向かっていると、その先に人だかりが出来ていた

「山田先生、お願いです！」

「お願い、と言われましても……」

その人だかりの真ん中にいるのは、涙目で訴えかける一年の女子と、その訴えに困り果てている山田先生だった

「どうしていきなり部屋を変えたいなんて言うんですか？」

「ルームメイトが恐いんです！」

「あなたのルームメイトは……えーと……」

「ボーデヴィッヒさんです！あの子、部屋に帰るなり、殺気を放ってるし、間違えてナイフを突きつけられたり。今日なんていつも以上に荒れてて手榴弾でも使ってきそうな勢いなんです」

「それは言い過ぎでは……」

女子の話に戸惑う山田先生

恐らく今日の戦闘で興奮しているのだろう

「もう我慢できません！部屋を変えるか、人を変えてください！」

「あううっ……で、ではここにいる人たちの中で変わってくれる人はいますか？」

「「「……」」」

山田先生の提案に誰も答えない

それも当然だ。そんな話を聞いたら誰も変わりたがらない

「えっと、後日ボーデヴィッヒさんと話し合いますのでそれまでは我慢を……」

「そんな！嫌です！なんとかしてください」

「あわわわわっ！？」

山田先生は女子生徒に肩を掴まれ揺さぶられてしまう

「い、ま、す、ぐ、に！変えてください！」

「そんなこと言われても～～～あっ！」

山田先生は揺さぶられながらも人だかりの中、変わってもいいと手を挙げている人物を発見する

「そこの手を挙げているあなたは！変わってくれるのですか？」

山田先生のその言葉に人たがりの全員が、その人物に目を向ける

「はい。俺は構いませんよ」

「えっ？」

山田先生が変な声を出してその手を挙げた人物を見る。それは人たがりの全員もそうだった

なぜならば、手を挙げたのは男子である俺、三崎亮だったからだ

「俺でしたら変わっても構いませんよ」

「そ、それはさすがに……男と女が同じ部屋なのは……」

「別にいいじゃないですか。一夏と箒だって3ヶ月くらい同じ部屋だったんですから」

それにボーデヴィッヒと話したいこともあるしな

「でも……」

だが、山田先生でもさすがにそう簡単には納得してくれないようだ

「私も別に構わない」

「え？」

不意に聞こえたその声で人だかりが一気にひとつの道となり、そこから歩いてきたのはボーデヴィッヒだった

「私も構わないと言っている。その男と同じ部屋でな」

ギンッ！と今にも食らいつきそうな目をしながらそう言うボーデヴィッヒ

「ほら、本人もこう言っていることだし」

「ううっ……わかりました。ですが、学年別トーナメントが終わるまでですよ？それまでになんとかしますので」

肩を落としながらそう言ってくれた山田先生

やはりこの先生は良い人だな

「部屋はどうします？三崎君がボーデヴィッヒさんの部屋に行きますか？」

「いや、私がこいつの部屋に行こう。荷物も少ないし早く済む」

「えっ？でも三崎君の部屋は一人部屋ですよ」

確かに俺の部屋は一人部屋で狭い

「大丈夫ですよ。布団もありますし」

鈴を泊めてあげるために用意したものだが、それが役にたつとはな

「わかりました。織斑先生には私から伝えておきますので」

「はい。ボーデヴィッヒ。俺の部屋はわかるか？」

「気安く話しかけるな。問題ない」

そう言ってボーデヴィッヒはつかつかと去ってしまう

「やれやれ」

こうして、俺とボーデヴィッヒの二人暮らしが始まった

第37話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

亮とラウラが同じ部屋！！

感想お待ちしております

第３８話

「どういうことですの！」
「説明しなさいよ、亮！」

ボーデヴィッヒと同部屋となった翌日の朝
朝食をとっているとセシリアと鈴が凄い勢いで話しかけてきた

「よっ。怪我はもう大丈夫か？」

「あっ、はい。おかげさまで……って違いますわ！」

見事なノリツッコミだ。やるな、セシリア

「あんた、あのクソ生意気なドイツ代表候補生と同部屋になったんですって！」

「ああ、その話か。それは――」

「えっ！そうなのか、亮兄！？」

話そうとしたら、朝食の和食セットＡを持っている一夏に遮られてしまう

「まあな」

「本当なのね……どういうことか説明してもらいましょうか……」

鈴が持っている箸を今にも折ってしまいそうなくらいに握りしめて

いる
危ないから折るんじゃねえぞ

「……ちょっといろいろと話をして見たくてな」

「……また、あんたの悪い癖が出たわね……」

「ですわね……」

なんだよそれ？
悪い癖って？

「わかんないなら良いわよ。言ってもわからないだろうしね」

意味がわからん
これは貶されているのか？

「誉めてますのよ。それもあなたの良い所ですし」

本当にわからん

「おはよう、亮」

俺は挨拶してきたシャルルに右腕を挙げて返すと、シャルルはほっとした表情をしている

「良かった。本当に回復したんだね」

「たく、俺は嘘をつかないって決めてんだから当たり前だろ？」

「それじゃあ、昨夜ボーデヴィッヒさんと何を話していたか話してくれるよね？」

にこっと笑顔でそう言うシャルル
よく見てみるとどこか怒っているようにも見える

「何も話してねえよ」

「本当に？」

これは本当だ。俺とボーデヴィッヒはかなり疲れていたためすぐに寝たのだ

「本当だっつうの……」

「それじゃあ、ボーデヴィッヒさんからは何もされてないんだね」

ほっと胸をなで下ろすシャルル
心配しすぎだ。別にボーデヴィッヒだって、そうそうおかしな行動は……あっ！

「！……何かありましたのね！」

「へっ？い、いや、別に！」

しまった
急に話しかけられたものだから変な声を出してしまった
つうか、なぜわかる？

「亮。昨夜、何があったのか正直に言いなさい」

「亮。さっき嘘はつかないって言ったよね？」

何故だろう。全員から殺気を感じる

一夏は殺気を放つ三人にかなり驚いている

「あっ！そろそろＨＲの時間だから行かねえ、っと！」

「「「逃がすか！！」」」

その後、ＨＲが始まるまで俺の逃走劇が続いた

「みたいなことが今朝あったんだがどう思う？」

「仁王槌（におうつい）！」

「うおっ！？」

『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』にログインしてツインテールに眼鏡をかけた女ＰＣ『パイ』に今朝のことを話したらいきなり攻撃されてしまう

「何しやがる！！」

「女心を踏みにじるヘタヲにお仕置きをしただけよ」

「誰が『ヘタヲ』だ！」

『ヘタレなハセヲ』略して『ヘタヲ』らしいのだが、俺のどこがヘタレだって言うんだ

「それに気づいていないところですでにヘタヲなのよ」

だからその呼び方を止めてくれ

「それで、八咫と欅はまだ来ねえのか？」

場所は前に来たタルタルガ

今回は先日のスケィス暴走について話にきたのだが、まだ来ていない

「我慢しなさい。お二人ともお忙しいのだから」

「だからって――」

「お待たせしました、ハセヲさん」

噂をすればなんとやら

欅が元気良く登場した

「たくっ、何やってたんだよ」

「いえ、ハセヲさんのヘタヲな話を聞いていたらつい足が止まって

しまって」

「最初からいたのかよ!?」

しかも、こいつまでヘタヲって言いやがった

「すみません、ヘタヲさん。悪気はなかったのですが」

嘘だ!

さっきからこいつは悪意しかない言葉を送ってきやがる

つか、ヘタヲ言うな

「あはは!では、さっそくスケィスの暴走について話しましょうか」

納得はできないが、このままでは弄られてしまうだけだから大人しくしていよう

「まだ八咫様が来ていませんが?」

「八咫は僕が依頼したお仕事で今回は来れません。ですので僕だけです」

「仕事?なんだよそれ?」

「秘密です♪」

人差し指を唇に当てて可愛い仕草でそう言った

これ以上聞いても教えてはくれないだろうな

「それで、何でスケィスが勝手に発現したんだ?」

「そうですね……そのときにスケィスと会話かなにかしませんでした？」

「会話か……確かに脳内に話しかけてきたが……」

「僕の予想ではそれに関係していると思います」

とは言われても、記憶に残っているのは、俺を支配するみたいなことぐらいしか記憶にない
相当焦ってたからな：

「では、その暴走したときの映像を八咫に送ってください。解析してみます。時間がかかると思いますので、今日はこの辺で」

そう言って欅は去ってしまう

「なんか最近、忙しそうじゃね？」

「そうね。彼らもあなたのことを心配してくれているのよ」

心配……ねえ

「それじゃあ、俺も落ちるわ……パイ」

俺はログアウトしようとしたが、ふと思ったことを口にした

「何かしら？」

「その・・・・・ありがとな」

「……なによ、急に？」

「だって、あんたも俺のことを心配してくれてんだろ？だからだよ」

パイはさっき『彼らも』と言ってたからな

「じ、じゃあな／／／／」

そう言って俺はログアウトした

なんかパイに説教くらいそうだし、恥ずかしいからな

「……」

パイはログアウトしたハセヲがいた場所をじっと見る

「なんでそういうのは気づいて女心は気づかないのかしらね」

ふふふと笑いながらパイもログアウトした

第３８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

これで一カ月連続投稿したことになるのかな？

まあそれは置いといてパイとヘタヲ登場

感想お待ちしております！！

第３９話

「おい」

「うおっ！？」

俺がパイや欅とスケィスについて話し終わり、ログアウトした瞬間、
背後から声をかけられびっくりしてしまう

「な、なんだ。ボーデヴィッヒか」

「なんだとはなんだ。失礼な奴め」

それは悪かったが気配を消して話しかけてくるな……って、ん？

「珍しいな。お前から話しかけてくるなんてな」

「うむ……そろそろはっきりしておこうと思ってな」

はっきり？何を？

「貴様が隠しているその力についてだ」

「……」

またか
昨夜も眠る前にしつこく聞いてきやがったのだ
疲れていたからすぐに終わったから良かったものの
その後はさらに大変なことが起きたのだがそれは忘れよう

「だから俺もわからねえって言ってんだろ？」

「そんな訳あるか！その力を使っておいてわからんはずがあるか！」

いや、あれは暴走したんだ。使いたくて使った訳ではない

「わからねえもんはわからねえ」

「……いいだろう。ならば言いたくなるように本場の拷問をしてやろう」

そう言ってナイフを取り出すボーデヴィッヒ

確かにこいつは本物の軍人だ。拷問の心得でも持っているのだろう

「だがな。俺がそう簡単にやられると思うな？」

「ふっ…この状況で虚勢を吐くとは面白い」

ぐっと構えるボーデヴィッヒ

確かに場所は四方壁に囲まれた部屋

入り口はボーデヴィッヒが塞いでいる。窓は四階なためそこからは逃げるのは無理だ

だが、俺には策がある

「あっ！織斑先生！」

「なにっ！教官！？」

ボーデヴィッヒが入り口の方を見る

「……ん？」

が、その先には千冬さんはいない

当然だ。嘘だからな

「目の前にいる敵から目を離すなんて余裕だな？」

「っ！しまっ！？」

ボーデヴィッヒはすぐに視線を戻すが、時すでに遅し

俺はボーデヴィッヒの背後に回り――

コチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョ！

「あはははははははははははははははははははっ！？」

俺はボーデヴィッヒの脇をくすぐった

これが意外と効くもので、普段からでは考えられない大声で笑い出す

どうやら、くすぐりに弱いようだ

「さあ！止めて欲しかったら、もう金輪際、凶器を使った拷問をしないことを誓うか！」

「あはははははははははははははっ！ち、誓う！誓うから止めっ――――」

「そして、俺についての質問を止めることを誓うか？」

「それは断る」

男の俺から見ても惚れぼれするほどきっぱりと即答しやがる

何故なんだよ？

「だったら誓うまでくすぐってやろう」

「ひぃっ！？や、止め、あはははははははははははははははははははっ！」

部屋にボーデヴィッヒの笑い声が部屋に響き渡った

「はあ・・・はあ・・・」

くすぐって力尽きたボーデヴィッヒはベッドでうつ伏せになって倒れている

やりすぎた

俺も何故かハイテンションで、思いの外楽しくなってしまい、ボーデヴィッヒが動かなくなるまでくすぐってしまった

今では反省している

「さて、そろそろ寝るか」

「ま、待たんか！」

ガバッと起きるボーデヴィッヒ

復活が早いな

「なんだよ？疲れているなら早く寝た方がいいぞ」

「誰のせいだと思ってる！？」

「おいおい、そんな大声を出すなよ。近所迷惑だろ？」

「今更!?」

うん。そうだね

「……わかった。俺の質問に答えれば、俺もある程度答える」

「いいだろう。どんと来い」

今更だがこいつ扱いやすいな

「まず一つ。お前にとって織斑先生とは?」

「私の憧れだ」

「何で?」

「教官のその強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に……そして、『出来損ない』だった私をトップの座へと導いてくれたからだ」

「出来損ない?」

「これだ」

そう言ってボーデヴィッヒが眼帯を取った

開いたその目は、もう片方とは違う金色だった

「詳しくは言えんが、この目のおかげで私はその『出来損ない』のレッテルを貼られたのだ。しかし、教官と出会って変わったのだ」

目がキラキラと輝いている。本当に千冬さんに憧れているんだな

「そうか……」

似てるな……昔の俺と
ボーデヴィッヒは千冬さんという光を見つけた
でも、ある理由ですぐに居なくなり光輝いていた以上に闇へと落ちてしまったのか

俺がそうだったように

「最後の質問だ。お前にとってＩＳは、力とはなんだ？」

「ＩＳは私と教官を繋ぐ絆、力とは……私のすべてだ」

一昔の俺もこんな風に力しか考えていなかったのか

「次は私の番だ」

そう言いながら眼帯を付け直すボーデヴィッヒ

「貴様のあの力はどうやって手に入れた？」

「……この力は、俺の大切な人達と一緒に歩んで手に入れた。それが故に俺の大切な絆だ」

「そんな訳があるものか。力は自分で身につけるものだ」

「それも一つの力だ。でも、力はそれ以外にもたくさん方法はある。

お前が織斑先生に鍛えられたのと同じように」

「……」

黙り込んでしまうボーデヴィッヒ

ボーデヴィッヒは知らないんだ。人とのふれ合いを

だから、自分の可能性に気づくことができないんだ

「最後の質問だ」

「ん？おう……」

「私がもっと人とふれ合えば強くなれるのか？」

「もちろん」

俺は即答した

それで俺は強くなれた。人とふれ合って、大切なものに気づき、強くなれた

「そうか……」

俺の答えに少し不満があるといった顔をしていたが、そう言って服を脱ぎだすボーデヴィッヒ

……って服！？

「どわぁっ！？」

俺は飛び込むようにして布団に潜り込んだ

「むっ？どうした？」

「どうした、じゃねえよ！寝るなら服を着ろって昨日も言っただろうが！」

俺はボーデヴィッヒを見ないように布団を被りながら言う

今朝、セシリア達に言えなかったのはこれだった

「知るか。私は眠るときはいつもこの格好だ」

なんて堂々とした奴なんだ。声からはまったく恥じらいを感じない

「お前は俺をなんだと思ってんだよ！！」

「男だろ？まさか女とは言うまい？」

んなわけあるか！

「お前はまず、力をつけるより常識を身につけろ！」

「余計なお世話だ。貴様こそ、もう少し堂々としたらどうだ」

それこそ余計なお世話だっつーの！

「それに見たくなければ、貴様が見なければ良い話だ」

くそっ！

反論したいところだが、ボーデヴィッヒに視線を向けることができない

「では寝るぞ」

そう言って布団に潜り込む音が聞こえた

明かりはこっちの方が近いので俺が消すことになっている

今、考えてみるとしっかりと役割分担されている

俺は電気を消して布団に入る

ちなみに俺は敷き布団でボーデヴィッヒがベッドだ

さすがにヨーロッパ人のボーデヴィッヒに敷き布団は合わないだろうからな

「……おい」

ボーデヴィッヒがいきなり話しかけくる

「……寝たのか？」

面倒だから寝たフリをしよう

「三崎亮。起きろ」

今度はゆさゆさと俺の体を揺らしてくる

それほど聞いて欲しいことなのだろう

「……んだよ？」

「うむ、聞きたいことがある」

聞きたいこと？

「私の目を見てどう思った？」

あの金色の目のことか、確か『出来損ない』の証とか言っていたな

「うーん……綺麗だった」

「はっ？」

予想外な答えだったのか変な声を出すボーデヴィッヒ
呆ける奴の顔が容易に頭に浮かぶ

「嘘をつくな。私の、この左目が綺麗なはずがない」

嘘はついていない。素直にそう思った
透き通るような宝石のように綺麗だと思った

「もう寝るんだろ？早く寝ろ」

「むっ……」

寝ようと言い出したのはボーデヴィッヒなため、それ以上は何も言わなかった

「あっ、そうだ。なあ、ボーデヴィッヒ」

俺はふとあることを思い出した

「……何だ？」

「学年別トーナメント……俺とペアを組まないか？」

第３９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！

これもまさかの展開に入るかな？
ラウラと仲良くなるの早くね？というツッコミはなしでお願いします

感想お待ちしております

第４０話

俺とボーデヴィッヒが同部屋になって数週間が経ち、とうとう学年別トーナメントが開催日となった
その慌ただしさは凄いもので、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた

それからやっと開放された生徒たちは急いで各アリーナへと走る
もちろん、俺たち男子組も急いで更衣室に入り準備をしている
とは言っても、男子三人しかいないから場所の取り合いなどは気にせずに着替えられるから楽でいい

「しかし、すごいなこりゃ……」

一夏が更衣室のモニターを見ながらそう言う
映っているのは観客席で、そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

あんまり興味がないらしく適当に喋る一夏

「なに他人事のように言ってんだよ、一夏。一応、お前もそのチェックの対象なんだぞ」

「いや、まあわかってるけどさ」

「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

一夏の様子にくすっと笑ってしまうシャルル

「まあ、な。つか、亮兄もかなり注目されるんじゃないのか？」

「そうだな。今回がある意味でのデビューになる」

忘れがちになってしまうが、俺がＩＳ学園に転入していることは、ここの先生と生徒、一部の関係者しか知られていない

俺と言う存在が初めて世に知られる訳だ

「面倒くせえな……」

「そうなんだよ。俺もそのときはかなり大変だったよ。テレビの人がしつこく人のことを聞いてくるんだ」

「マジか……」

それを想像しただけでも吐き気がするよ

「それじゃあ、俺は先に行くわ。一夏、気合い入れるのもいいが、感情的になって自爆するなよ？」

「そうだよ、一夏。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああ、わかってる」

ふぅと息を吐き肩の力を抜く一夏
そんな一夏を確認した俺は先に更衣室から外に出た

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

「ああ。でもどうして亮兄は先に行っちまったんだ？」

一夏は首を傾げながらそう言う

「そうだね。一緒に発表を見れば良かったのにね」

亮は学年別トーナメントのペアを決めていないので、抽選で誰かとペアを組むことになる
だから、亮は更衣室でトーナメント表が発表されるのを待った方が良かったのではないかと思う

「まあ、それにしても。一年の部、Ａブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？どうして？」

「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

笑いながらそういうシャルル
一夏はそんなシャルルを見て和んでいたりする

「それにアリーナチャンピオンのハセヲだったらそんな考えなんかしないだろうしね――――あっ！」

シャルルは、ぱっと自分の口を隠す

「ハセヲ……？」

「ううん！なんでもないよ、なんでも！」

慌てて主張するシャルル
いきなりオンラインゲームの話をしたらわからない人には混乱してしまう。それで、試合に影響したら自分のせいだと考えたからだ

「……ハセヲって『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』の英雄。『バトルアリーナ三連覇した男』で有名なハセヲのことか？」

「えっ？……うん」

一夏の言葉に思わず唖然としてしまうシャルル

「もしかして一夏も『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』をやっていたの？」

「やってはいないけど、新聞やニュースでよく載ってたからさ。でも、本当に凄いよな！一番下の紅魔宮（こうまきゅう）でチャンピオンになることですら大変らしいのにあっという間にチャンピオンになってすぐにその座を捨てて、次の碧聖宮（へきせいきゅう）に挑み優勝」

「そしてすぐさまバトルアリーナ最上位、竜賢宮（りゅうげんきゅう）に挑戦して非公式ながらもチャンピオンの座についた……凄いよね……」

熱烈となってハセヲについて話し合う二人

「それに格好良くて優しいし」

「えっ！シャルルはそのハセヲの知り合いなのか？」

「知り合いって言うか、偶々出会って一緒に冒険しただけだけどね」

頬をかきながら少し恥ずかしそうに言うシャルル

「それでも凄いなぁ！俺もやりたかったけど家事やら何やらで忙しかったから出来なかったんだよ」

「そっか……僕はあの人からの命令に従い始めてからはもうやってないや……」

はぁとため息を吐いてしまうシャルル

「でもさ。まだコントローラーとか持ってるんだろ？送ってもらって亮兄と一緒にやってみたらどうだ？」

「亮と一緒に……？」

場所はとある草原エリア

「亮！」

「シャルル！疾風双刃（しっぷうそうじん）！」

モンスターにやられそうになったシャルルを亮が助ける

「どうしようモンスターに囲まれちゃったよ……」

状況は最悪で高レベルのモンスターに囲まれている

「大丈夫、お前は俺が守ってやる！」

「亮……」

「お前じゃ役不足だ」

「なにっ！」

ダダダダダダダダダダダンッ！

無数の銃弾がモンスターに直撃しモンスターを一蹴する

「危なかったな」

「ハセヲ！？」

「久しぶりだな」

いきなりのハセヲ登場に驚いていたシャルル
ハセヲに話しかけられてさらに驚いてしまう

「僕のことを覚えててくれたの？」

「当たり前さ。それどころか俺はお前を探してたんだ」

「僕を？」

「ああ。一緒に冒険したくて何度もメールを送っても返事が来なかったから心配だったんだ。でもこうして出会えた。女神に感謝しないとな」

「そんな大袈裟だよ……／／／／」

頬を赤らめて嬉しそうに言うシャルル

「今から俺と二人っきりで冒険しないか？今まで会えなかった分、一緒に冒険したいんだ」

「えっと、その――」

「残念だが、それはまた今度にしてもらおうか」

「――亮！」

シャルルが返事を返す前に亮がシャルルを隠すようにハセヲの前に立つ

「シャルルはこれから俺と『二人っきり』で冒険をするんだ。邪魔すんな」

『二人っきり』を強調しながら言う亮
しかし、ハセヲは笑って言い返す

「お前にはシャルルを守る力も想いもない。そんな奴にシャルルに任せられねえな」

「上等じゃねえか！俺にシャルルを守る力も想いもないかどうか、てめぇに身をもって味合わせてやる！」

「やってみろ！」

二人は武器を構えて戦闘態勢に入る

「や、止めて！僕のために争わないで！！」

（なんてなんて！／／／／）

なんて妄想しながら両手を頬に当てて首を振るシャルル

「しゃ、シャルル？」

「うわぁっ！？」

ビクッと大声で驚いてしまうシャルル

「ど、どうしたんだ？いきなり喋らなくなったと思ったらニヤケだしてびっくりしたんだが」

「なんでもない！なんでもないよ！うん！」

亮とハセヲが自分をめぐって争っている場面を妄想していました、なんて口が裂けても言えないシャルルは、ものすごい勢いで否定するしかし、この妄想は二人とも同一人物であるためこんなことは絶対に起き得ないことだが……

「あ、あ、対戦相手が決まったみたい！」

モニターがトーナメント表へと切り替わったのを見てすぐに指さすシャルル

「「――――え？」」

出てきた文字を見て、一夏とシャルルは同時にぽかんとした声をあげた

一回戦の対戦相手はラウラ、

そして亮のペアだった

第４０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

シャルルの妄想ひとつ入りました！！！！！

感想お待ちしております

第41話

「……よう」

「……」

一夏たちと別れた俺が訪れたのはモニターを仁王立ちしながら睨みつけるボーデヴィッヒに話しかける
しかし、返事はない。なのでそのまま会話を続ける

「嬉しそうだな」

「……わかるか？」

「まあな……」

一応、一緒の部屋に居るわけだし。なんとなくでわかる

「まさか一回戦の相手が一夏たちとはな」

「ふん。待つ手間が省けたというものだ」

「お前らしいな」

多分、一夏もそう思っているだろうな

「……いいのか？」

ボーデヴィッヒがこちらを見ずにそんな言葉をかけてくる

「お前と教官の弟は仲が良いのではないのか？それなのに……」

「なんだ？心配してくれるのか？」

「なっ！ち、違う！私はただ亮が奴らに情に流されて動きが鈍らないか不安なだけだ！／／／／」

頬を紅くしながらそう訴えるボーデヴィッヒ

最近、少しずつだがボーデヴィッヒが心を開いてくれている
その証拠に、さっきも俺のことを名前で呼んでくれている
良い傾向だ

「それで、一夏たちとはどう戦う？」

「……亮は何もしなくていい」

すぐに冷静な顔へと戻したボーデヴィッヒがそう言う

「何も？」

「そうだ。奴らは私一人で倒す」

「おいおい。それはキツいんじゃねえのか？一夏たちだって馬鹿じゃない。お前の対策をある程度考えてきてるはずだ」

「そんなもの、私の力で叩き潰してやる（シュヴァルツェア・レーゲン）」

ダメだ、聞く耳を持たないな

完全に試合のことしか考えていない

「……わかった。お前の好きにしろ」

「……ああ」

「だけど気を付けろ。あの二人は強い。そして忘れるな。この試合は二人一組だ」

聞いていないだろうが、俺はボーデヴィッヒに忠告をした

ボーデヴィッヒは戦闘態勢に入っており、やはり聞いていなさそうだ

まあ、もうすぐ試合だからな。俺も集中することしよう

……なにもしないんだけどさ

「亮兄！なんでそいつとペアを組んだんだよ！」

試合開始の合図まであと少し

そんなときに一夏が話しかけてきた

「悪いが、俺の意志だ。でも安心しろ。俺は何もしない。ただ、見ているだけだ」

「えっ！どうして？」

「ボーデヴィッヒの希望だ。お前ら二人相手に自分だけで十分らしい……さあ、始まるぞ」

試合開始まで

5

4

3

2

1

――開始

「「叩きのめす」」

一夏とボーデヴィッヒの同じ言葉で試合が始まった

一夏は試合開始と同時に瞬時加速（イグニッションブースト）を行って先制を狙う

「おおおっ！」

「ふん……」

しかし、ボーデヴィッヒは右手を突き出す

さっそくあれを使うんだな

俺も苦しめられた。シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器

『ＡＩＣ』。慣性停止能力

「くっ……！」

あっさりと捕まってしまう一夏

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃあどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ガキン！と大型レールカノンを一夏に向ける

「させないよ！」

そこにシャルルが一夏の頭の上を飛び越えて現れる。同時に六一口径アサルトカノン《ガルム》による爆破弾（バースト）の射撃を浴びせた

「ちっ……！」

「逃がさない！！」

たたみかけてくるシャルルの攻撃にボーデヴィッヒは急後退をして間合いを取ろうとするが、シャルルがそれを許さない

左手にアサルトライフルを一秒とかからずに呼び出したこれはシャルルの得意とする技能『高速切替（ラピッドスイッチ）』である事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し

「ボーデヴィッヒ。手伝うか？」

「いらん！亮は黙っていろ！」

親切に声をかけたつもりだったが、怒鳴られてしまった

プラズマ手刀を展開したボーデヴィッヒは一夏を左右から連続で斬りかかる。同時にワイヤーブレードを駆使してシャルルを牽制している

あの二人相手にかなり攻め込んでいる

『シャルル、無事か?』

『一夏こそ。それでどうする?亮が本当に動かないのなら、このままたたみかける?』

『ああ。実際、亮兄はあそこから動いていない』

ちらっと亮に視線を向ける一夏
亮は腕を組んで行く末を見守っている

『わかった!いこう!』

『ああ。見せてやるとしようぜ、俺たちのコンビネーションをな』

「ふあー、すごいですねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて」

教師だけが入ることを許されている観察室で、モニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は感心したように呟く

「やっぱり織斑君ってすごいです。才能ありますよね」

「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。あいつ自体は大して連携の役には立っていない」

身内には相変わらずの辛口評価しかしない千冬に、真耶はやや苦笑気味に言う

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ……そうかもしれないな」

ぶすっとした感じで告げる千冬だったが、真耶はそれが照れ隠しなんだと最近わかったので、別段気にはしない

「それにしても三崎君まったく動きませんね」

「おそらくラウラに何かを言われたのだろう」

そう言って千冬はモニターに視線を戻す
そこでは一対二でありながら、互角に渡り合うラウラの姿があった

「強いですねぇ、ボーデヴィッヒさん」

「ふん……」

しみじみという真耶に対し、千冬は心底つまらなそうな声を漏らす

「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だがそれでは――」

一夏には勝てないだろう
しかし、その言葉をけして口にはしない。言ったが最後、真耶にどんなこと言われるかわかったものではないからだ

ワアアッ！

会場が一気に沸いた
その歓声が観察室まで響いてくる

「あ！織斑君、零落白夜を出しましたね！一気に勝負をかけるつもりでしょうか」

「さて、そう上手くいくかな」

「またまた、そんな気にしてないような態度をしなくても――」

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せっかくだ、十本ほどやろう」

「いっ、いえいえっ！私はそのっ、ええとっ、生徒たちの訓練機を見ないといけませんからっ！」

慌てて首を振り手を振りと大忙しの真耶に、千冬は追い打ちをかける

「では、十本中五本は三崎にやらせるならどうだ？」

「……え？」

さっきまで大忙しに振られていた首と手がぴたっと止まる

「……それはそれで……っ！い、いやっ！ダメですよ！嫌ですよ！」

「ちっ」

「舌打ち！？」

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるようぬ」

「は、はい……すみません……」

真耶は見ていて可哀想になるくらいしぼんでしまう

それがあまりに可哀想だったのか、千冬はぽんと軽く頭を撫でた

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見物だぞ」

「は、はいっ……でも、三崎君をダシに使うのはずるいと思います」

「……」

ギリリリリリリリッ！

千冬は無言のまま真耶の頭を撫でていた手に力を入れる

「いたたたたっ！？」

真耶の悲痛な叫び観察室全体に響いたのであった

第４１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！

バトル開始！と思いきや、亮は観戦！？

感想お待ちしております

第４２話（前書き）

今回は最後に読者様にアンケートを取りたいと思います

後書きを読んでくれたら嬉しいです

第４２話

「これで決めるっ！」

零落白夜を発動させた一夏は、ラウラへと直進する

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・・・それなら当たらなければいい」

ラウラのＡＩＣによる拘束攻撃が連続で一夏に襲いかかる

右手、左手、そして視線。それらの目に見えない攻撃を一夏は急停止・転身・急加速でなんとかかわした

「ちょろちょろと目障りな・・・・・！」

立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、その攻勢は熾烈を極める

しかし、一夏は一人で戦っている訳ではないのだ

「一夏！前方二時の方向に突破！」

「わかった！」

シャルルが射撃武器でラウラを牽制しながら、一夏への防御も抜かりがない

一夏はつくづく、シャルルと組んで良かったと思うし、組ませてくれた亮に感謝しなければならない

「ちっ・・・・小癪な！」

ワイヤーブレードをくぐり抜けた一夏はラウラを射程圏内へと収める

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「普通に斬りかかれば、な。――それなら！」

一夏はそれまで足下へと向けていた切っ先を起こし、体の前へと持ってくる

「！？」

斬撃が読まれるのなら、突撃で攻める。読みやすさは変わらないにしても、単純に腕の軌道を捉えにくい

「無駄なことを！」

ビシッ！と一夏の体をＡＩＣの網が完全に固定した

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められれば――」

「……ああ、なんだ。忘れているのか？それとも知らないのか？俺たちは――二人一組なんだぜ？」

「！？」

慌ててラウラが視線を動かすがすでに遅かった。零距離まで接近したシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込んだ

次の瞬間、ラウラの大口径レールカノンは轟音とともに爆散した

「くっ……！」

「一夏！」

「おう！」

ラウラのＡＩＣが解除された一夏は再度、《雪片弐型》を構え直した

「……！」

絶対必殺を確信した一撃だったのだが

キュゥゥゥン……

「なっ！？ここにきてエネルギー切れかよ！」

途中にもらったダメージ分が大きかったらしい

零落白夜のエネルギー刃は音とともに小さくしぼみ、そしてそのまま消えてしまう

「残念だったな。限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！あと一撃でも入れば私の勝ちだ！」

ラウラの言う通りで、一夏は後一撃でも当たればシールドエネルギーの残量０で負けが決まる

一夏は必死で左右同時に襲いかかるプラズマ手刀を弾き続ける

「やらせないよ！」

「邪魔だ！」

ラウラは一夏への攻撃の手を休めないまま、援護に入ろうとしたシャルルをワイヤーブレードで牽制する
そのどちらもが精度の高さとスピードを伴った攻撃で一夏たちを苦しめる

「うあっ！」

「シャルル！くっ――」

「次は貴様だ！墜ちろっ！」

被弾したシャルルに気を取られ、その一瞬の隙をラウラの攻撃が一夏を正解に捉える

「ぐあっ……！」

ラウラの攻撃を喰らった一夏は白式から力が消え、床へと落ちる

「は……はは！私の勝ちだ！」

高らかに勝利宣言をするラウラに、超高速の影が突撃をする

それは――

「まだ終わってないよ」

一瞬で超高速状態へと移ったシャルルだった

「なっ……！『瞬時加速』だと！？」

初めてラウラの表情が狼狽を見せる

事前のデータにはシャルルが瞬時加速を使えるとは書いてなかったのだろう

「今初めて使ったからね」

「な、なに……？まさか、この戦いで覚えたというのか！？」

シャルルの器用さはかなりのものであることがわかる

「ふっ……だが私の停止結界の前では無力！」

そう言ってラウラがいつものようにＡＩＣ発動体勢へと変わる

その瞬間、動きが止まったのは――ラウラだった

ドンッ！

「！？」

いきなりあらぬ方向からの射撃を受け、ラウラが視線を巡らせる。

見つけたのは、シャルルが捨てた残弾ありのアサルトライフルを構える一夏だった

「これならＡＩＣは使えまい！」

「か、のっ……死に損ないがぁっ！」

そう吼えるラウラだったが、案の定冷静さは失っていない
命中率の低い一夏の射撃を無視してシャルルに集中した
そのＡＩＣの矛先を再び前方へと向ける

「でも、間合いに入ることは出来た」

「それがどうした！第二世代型の攻撃力では、このシュヴァルツェア・レーゲンを墜とすことなど――――」

そこまで言って、ラウラはハッとする
そう、単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備があることに気がついた
そしてそれは、ずっとシャルルが装備していた
盾の中に隠してあったのだ

「この距離なら外さない」

盾の装甲がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する
六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレースケール）》
通称――――

「『盾殺し（シールドピアース）』……！」

初めて、ラウラの表情に焦りが見えた
それは、文字通り必死の形相だった

「「おおおおっ！」」

二人の声が重なる
シャルルは左手拳をきつく握りしめ、叩き込むように突き出す
このままでは直撃してしまう
止めるにしても全身停止は間に合わない。ピンポイントでパイルバンカーを止めるしかない

「！！！」

ラウラはその目を集中して一点に狙いを澄ました――が外した
一瞬、ほんの一瞬だけシャルルの顔が笑みを浮かべる。それはさながら死を宣告する天使の様相であった

ズガンッ！！！

「ぐううっ……！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれる
ＩＳの集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごっそりと奪われる
しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫いたのだろう、ラウラの表情は苦悶に歪んだ

しかし、これで終わりではない《灰色の鱗殻》はリボルバー機構により高速で次弾炸薬を装填する

――つまり連射が可能なのだ

「これで最後だよ！」

シャルルは勝利に向けて盾殺しをラウラに撃ち込もうとする

「お前らこそ忘れていないか？」

びくっと体を震わせるシャルル

「これは『二対二』なんだぜ？」

「！？」

悪寒を感じた方向に目を向けると――そこには刀型ブレードを振り上げた亮がいた

第４２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！

まさかの亮が乱入！！

さて、読者様の皆さまこんにちは

早速ですが、この小説が始まって一カ月ちょっと

それがなんと！！

ＰＶアクセス１００万を突破いたしました！！

ユニークも１２万とかなりびっくりしました

そこで記念として番外編を書きたいと思います
ですので、なにかリクエストみたいのを募集しようかと思います
・・・・けしてネタを考えるのが面倒だから読者様にお願いしよう、

なんて言う訳ではありませんので・・・・

最終的な決定は自分が『これは面白そうだ！！』『なんか書けそうな気がする～～～』と思ったものか、多数の意見が重なったもの、などにしようかと思います

そして、決定したときその意見を出してくれた方にお礼のメールをしたいと思います。「あなたの意見が採用されました。本当にありがとうございます！！」的なことを書いて送ります

なんも嬉しくはないと思いますがね・・・・

期限はゴールデンウィークの間まで

５月４日～５月８日２４時までです

投票方法は、メッセージを送るか、感想に書くか、です

どちらでもかましませんので読者様のご参加を楽しみにしております

ちなみにそれをいつ投稿するかはわかりません。自分の気分しだいです

それでは感想・投票ともにお待ちしております

第４３話

「せいっ！」

ガキン！

「うわっ！」

俺は振り上げた刀型ブレードをシャルルに喰らわした
シャルルは不意を突かれたためそのまま斬り飛ばされてしまう

「ふぅ・・・」

「亮兄！？亮兄は下がってるんじゃ・・・」

「バーカ。なに、対戦相手の言葉を鵜呑みにしてんだよ。嘘に決まってんだろ」

と言うのも嘘だ
俺はボーデヴィッヒがやられる姿なんて見たくないから、つい飛び出してしまったのだ

「り、亮！貴様、何の真似だ！」

シャルルの『盾殺し（シールドアース）』を直撃して地面に膝をつくボーデヴィッヒが怒鳴ってくる

「今のでわかっただろ、ボーデヴィッヒ。お前じゃ一夏たちに勝てねえ」

お前の実力（ちから）は認める。だが、それだけじゃ一夏たちに勝つことは出来ない

「黙れ！だったら貴様は勝てると言うのか！」

「そうだな……今の俺なら勝てるかもしれないな」

「ただの訓練機で、専用機二体にか！？」

ボーデヴィッヒはまだわかってないみたいだな

「勝負はＩＳ（ちから）だけで決まるもんじゃねえんだよ。それを今――」

俺は刀型ブレードを再度握り直し、一夏たちの方を見る

「教えてやる！」

「一夏は下がって！僕が前に出る」

「わかった」

エネルギー残量が少ない一夏が後衛、シャルルが前衛に入る

「亮と戦うのはこれが初めてだね」

確かにそうだな

特訓をするときも一夏に付きっきりだったから、俺とシャルルがや

り合うことは一度もしなかった

「だが、勝たせてもらう！」

「それはこっちのセリフだよ」

シャルルは近接ブレード《ブレッド・スライサー》を呼び出す

「はあっ！」

俺は上段に斬りかかるとシャルルは《ブレッド・スライサー》で受け止める
すると、左手に装備した《レイン・オブ・サタディ》で俺を狙い撃つ

「喰らうかよ！」

俺は体を反転させてそれを避ける
しかし、そこで離れたらまた狙い撃ちされるため、前へ前へと詰め寄る

「はあああっ！」

「くっ！うっ！」

「シャルル！」

シャルルは高速切替で対応するも亮の猛攻に防ぐのでやっとであった
一夏はシャルルを援護しようとアサルトライフルで狙いをつけるが
亮の動きについて行けず狙いが定まらない

「一夏！下手に撃つとシャルルに当たるぜ！」

「ぐっ……」

「ほわあぁ……凄すぎますよ、三崎君……」

観察室で戦闘映像を見ていた真耶がそう言う

「訓練機であれだけの動きができるなら専用機を持ったらどうなってしまうのでしょうか」

「確実に一年の中では最強だな」

そう言って千冬は腕を組み直す

「だが、今はラウラがあいつらを追い詰めた後だからな。万全な状態で戦えば負けるだろう」

「でも、あの動きはそうそう出来るものではありませんよ。どうしたらあんな動きが出来るのでしょうか？」

「強いて言うなら想いの差だろうな」

「想いの差？」

千冬の答えに首を傾ける真耶

「奴は今、後ろに守るべき者（ラウラ）を背負って戦っている。そいつを助けたい、救いたい。その想いが亮に力を与えているんだ」

モニターを見ながらそう説明する千冬

「つい、最近までいがみ合っていた相手なのに……どうして」

「それはわからん。だが、今の三崎の想い（ちから）こそがＩＳにとって一番必要な力だ。それをラウラが気づくかどうか……」

千冬は一人佇んで亮たちを見ているラウラに視線を向けた

――――たが次の瞬間、異変が起きた

（何故だ？……何故、亮はあんなに強い？）

亮は、私が今まで苦戦していた相手と互角、それ以上の戦いをしている

（私は負けられない！織斑一夏にも、三崎亮にも！負けるわけにはいかない……！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ
それが私の名前。識別上の記号
一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体Ｃ－〇〇三七
人口合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた
――暗い。暗い闇の中に私はいた
ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた
私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた
それがある時、世界最強の兵器――ＩＳが現れたことで世界は一変した
その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』
危険性はまったくない
理論の上では、不適合も起きない――はず、だった
この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った
この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることにとなる
そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった

闇からより深い闇へと転げ落ちていた私が、初めて目にした光
それが教官との……織斑千冬との出会いだった

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。１ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した

強烈に、深く、あの人に――――憧れた
その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に焦がれた

――――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい

そう思ってからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話しにいった
そんなある日に私は訊いてみた

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

その時――――ああ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた

私は、その表情になぜだか心がちくりとしたのを覚えている

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が

そして、目の前で戦っているあの男

私が追い求めた教官と似た力を感じる

（奴は教官と同じもの（ちから）を持っているのか？）

そう思うと怒りが沸いてくる

教官を変えてしまう弟、教官と同じもの（ちから）を持つ男、それを認められない。認めるわけにはいかない

だから――

（敗北させると決めたのだ。あの男を完膚無きまでに叩き伏せると！）

ではあの男、亮はどうする？

亮は――

（いや、関係ない。亮……あの男も同じように叩き伏せる！）

そうすれば、教官の言っていた意味がわかるかもしれない

だから――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男たちはまだ動いているのだ

動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない

そうだ。そのためには――

（力が、欲しい）

ドクン……

『――願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

私の奥底で何がうごめいてそう言ってくる

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

DamageLevel……D.

MindCondition……Uplift.

Certification……Clear.

≪ValkyrieTraceSystem≫……boot.

第４３話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

感想・アンケートお待ちしております

第４４話

「あああああっ！！！！」

突然、ボーデヴィッヒが身を裂かんばかりの絶叫を発する
と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれる

「一体何が……！？」

「なっ！？」

「ボーデヴィッヒ！？」

俺も一夏、シャルルも目を疑った
その視線の先では、ボーデヴィッヒのＩＳが変形……いや、何か、
黒い、深く濁った闇がボーデヴィッヒを飲み込みやがった

「なんだよ、あれは……」

一夏は無意識にそう呟く
俺はあれはＡＩＤＡではないかと推測したが、すぐに違うとわかった
スケィスが反応しない。あれは別の何かであると判断した

だったらあれは何だ？
ＩＳがその経常を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップオッティング）』か『形態移行（フォーム シフト）』のいずれかだ

だが、いま目の前でそれ以外の何かが起こっている

シュヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りると、まるで倍速再生を見てるかのようにいきなり高速で全身を変化、成形させていく

そしてそこに立っていたのは、黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳに似た『何か』。しかしその形状は先月の襲撃者とは似ても似つかない

「《雪片》……！」

怒りが込められた言葉を言う一夏

よく見てみると、その手に持っている武器は一夏の白式が装備している《雪片弐型》に似ていた

一夏が雪片と言っていたから、前に聞いた千冬さんが使っていた刀のことだろう

そう考えていると、《雪片弐型》を中段に構えていた一夏に、黒いＩＳが懐に飛び込んできた

そのまま、居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃

「ぐうっ！」

一夏の雪片弐型が弾かれる

そして黒いＩＳはそのまま上段の構えへと移る

「一夏！」

「！」

縦一直線の鋭い斬撃が襲いかかる
一夏はなんとか避けることが出来たが、軽く当たっていたらしく、
刃に触れた左腕からじわりと血がにじんでいた
さらに、今の緊急回避で全ての力を使い切ったらしく、白式が光と
ともに消え去ってしまう

やばい。一夏を下がらせないと

「一夏！下が――――」

「……がどうした……」

「一夏？」

俺の声が聞こえていないらしく、下を向いて何かを呟く一夏

「それがどうしたあああっ！」

何を思ったのか一夏は生身のまま黒いＩＳへと駆けていく

「うおおおおっ！！！」

「止めろ、馬鹿！」

もちろん、俺は一夏を引き留める
死ぬ気かお前は！

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

熱くなる理由はなんとなくわかるが、行かせる訳にはいかない
俺は一夏の腕を離さないようにする

「どけよ、亮兄！邪魔をするならいくら亮兄でも」

「一夏っ！！」

「っ！」

俺は一喝を入れて一夏を落ち着かせる

「落ち着け、一夏。お前はあれが何かわかるのか？」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

ふむ
ということは、あの黒いＩＳは千冬さんの動きをするって訳か

「ボーデヴィッヒは千冬さんに憧れてたからな・」

「そんなことで千冬姉の力を使われて――」

「一夏……別に憧れることが悪いんじゃない。そのおかげでボーデヴィッヒはここにいる。『そんなこと』で済ませていい事じゃない」

それを否定したらあいつの全てを否定することになる。それだけはしてはいけない

「……そうだな。ごめん」

頭を下げて謝る一夏
どうやら冷静になったようだな

「でも、俺はＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

一夏の気持ちはわかる。俺もボーデヴィッヒを叱ってやりたい気分だからな

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

避難放送が響きわたり、来賓と生徒たちはすみやかに避難をしている

「さて、一夏。聞いての通り、教師部隊が来てくれる……が、お前はどうする」

「行く。ラウラを俺が止める」

「お前がやらなくてもいいことなのにか？」

俺はニヤリと笑いながら言う
この問いの答えがある程度わかっていたからだ

「違うぜ亮兄。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえ

よ。織斑一夏じゃない」

「そうだな……行かせてやりてえが、白式のエネルギーはどうするか」

「それなら僕にまかせてよ、亮」

シャルルがふわりと俺たちの元にやってくる
ん？なんとかできるのか？

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？だったら頼む！早速やってくれ！」

「けど！」

びしっとシャルルが一夏に指を指して言う

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

良いことを言ったよ、一夏
確かに男じゃねえよ

「じゃあ、負けたら明日から『亮』が女子の制服で通ってもらうからね」

なるほどなるほど

ん？

「は？」

思わず変な声を漏らしてしまう

何か今、俺の将来の危機を感じたんだが

「いいぜ！なにせ負けないからな！」

「ちょっと待てコラ！なに勝手に話を進めてやがる！」

俺のことなのに俺の意見がまったく取り入れられてない

一夏も即答してんじゃねえよ！

「じゃあ、はじめるよ……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。――一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

無視かよ！俺のことは完全に無視かよ！

だが、この会話のおかげが一夏の緊張がいい意味でほぐれている

「……一夏の緊張を解くためにあんな冗談を言ったんだよな？」

「え……うん。大丈夫だよ、亮。似合ってると思うから」

おい！？

溜めた挙げ句に肯定かよ！

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」

そう言うとシャルルの体からリヴァイヴが消える

それに合わせて、白式は再度一夏の体に一極限定モードで再構築を始めた

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分さ」

「おい、一夏」

俺は右腕装甲だけの一夏に話しかける

「信じてはいるが……もし、万が一、失敗したらお前も女子の制服を着てもらうからな」

「お、おう……」

言ったな？絶対言ったよな！

道連れに成功

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「さっさと終わらせてこい」

一夏は俺とシャルルの言葉を聞くと、黒いＩＳの方を向く

「じゃあ、行くぜ偽者野郎。零落白夜――――発動」

ヴン……と一夏の言葉に応えるように、雪片弐型の形が日本刀のようになった

それに気づいた黒いＩＳが刀を構える

一夏は真っ直ぐに、意識をただ一点、正面の敵のみにと閉ざしていった

「……」

黒いＩＳが刀を振り下ろす。速く鋭い袈裟斬りだ

でも、そいつは千冬さんじゃない
それは――――

「ただの真似事だ！」

ギンッ！

一夏は腰から抜き放って横一閃、黒いＩＳの刀を弾く
そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ黒いＩＳを断ち斬った

「ぎ、ぎ……ガ……」

一夏の一閃で黒いＩＳが真っ二つに割れる
そして、ずるっとボーデヴィッヒが吐き出されるように出てきた

一夏は受け止めようと手を伸ばす
俺はそれを見て安心した。これで終わったと……そう思っていた

ドクンッ！

「！？」

指輪（スケィス）の鼓動を感じた
何故感じたのか、俺はすぐに気づいた

『ＡＩＤＡ』だ！

「離れろ、一夏！」

「え？」

俺の声が一夏に届いた瞬間だった
ボーデヴィッヒに異変が起きた

「ああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！？」

ボーデヴィッヒの叫び声が響き渡った

第４４話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

やったと思ったら再び異変！？

感想・アンケートお待ちしております

第４５話

（私は何なんだ？私は何のためにここにいる？そもそも私はどこにいる？）

そんなことを考えながら私は目を開け、回りを見渡した

そこは暗い暗い闇の中

（また、ここか……私は戻ってきてしまったのか）

自分が生まれてきた場所と同じだ
私はこの場所が嫌いだ
なにも感じないし、気持ち悪かった

（……そういえば亮はあの時、私になにを教えようとしたのだろうか？）

ふと思い出したのは亮の一言だった

（強さはＩＳと実力で決まるのではないのか？）

それが私の考えだった
わからない。亮の力の原動はなんなんのだ？

知りたい。知りたい、知りたい知りたい知りたい知りたい知りたい
知りたい知りたい！

『知りたいのなら教えてあげようか？』

目の前に蠢く何かが現れた

お前は知っているのか？教官や亮の強さの秘密を！

『知ってるよ？教えてあげようか？』

その似合わない子供のような声でそう言ってくる

教えてくれ！なんだ！

『その変わりに君の大切なものをもらうことになるけど』

構わない！空っぽの私に取れるものなら何から何までくれてやる！

だから、教えてくれ……強さの秘密を！

『それじゃあ、君の大切なものをもらうよ』

そう言って蠢く何かは私の体を包み込む

元々暗かった世界が、それ以上に暗くなった

『ちなみに君からもらうものはね……あっ！大丈夫。腕や脚の一本とかそんなグロテスクなものじゃない』

そう言って私の目の前にいくつもの光が現れた

（これは……教官？）

光の中を覗くとそこには、私と教官が映っていた

（これは教官と初めて会った時の……）

『もらうのは――――』

蠢く何かがそう言って私と教官が映し出されていた光の回りに漂う

『君の思い出さ』

（え？）

理解が不能だった。私の思い出？

どういうことだ、と私が聞く前に蠢く何かが、その光を包み込む

その光は消え去って闇へと帰った

『これで君とその教官とやらの初めて出会った思い出は消え去った』

何を言っている？
私がそんな大切なことを――あれ？

思い出せない

（何故だ！？私は思い出せない！あんな大切なことを）

『だから言ったじゃないか、君の大切なもの（おもいで）をもらうって。ここにある光が君の大切なもの（おもいで）さ。何もないって言っておきながらいっぱいあるじゃないか』

そう言って蠢く何かは私の光（おもいで）を包み込む

（や、止めろ！？教えなくていい！知らなくていい！だから、私の

光(おもいで)を奪わないでくれ！）

『酷いね。君がもらっていいって言ったのに、泥棒扱いなんて……でも――――』

『何も言われなくても奪うつもりだったからな！ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！』

そう言って蠢く何かは、一斉に私の光(おもいで)を喰い荒らす

止めろ！止めてくれ！

私の必死の願いは聞いてもらえず、どんどん光(おもいで)が奪われていく

思い出せない

私が教官と一緒に訓練したことも……

一緒に食事をして話したことも……

全て私の記憶から消えていく

『さあ、力をくれてやる。空っぽのお人形さん（ラウラ・ボーデヴィッヒ）』

「イヤアア！！？？」

「あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああっ！？」

「うわっ！？」

「一夏！」

叫ぶボーデヴィッヒから放たれた衝撃波で目の前にいた一夏が吹き飛ばされる

「大丈夫か？」

「ああ」

俺はすぐに打鉄で一夏を受け止めた
見た感じ、左腕以外は無事そうだ

「シャルル。一夏を連れて下がってろ」

「う、うん。でも、亮。ボーデヴィッヒさんに一体何が？」

「さあな」

俺はそう言って、ボーデヴィッヒを見る
ボーデヴィッヒはＩＳが消えた状態で、下を向いて俯いている

「ふっ……」

「！」

「あはははははははっ！！」

いきなり大声で笑い出すボーデヴィッヒ

「三崎亮！私は手に入れたぞ！貴様と教官が持つ力をな！」

そう言ってボーデヴィッヒはＩＳを展開する

ガキィンッ！

「ぐあっ！？」

ボーデヴィッヒが一瞬で俺の目の前に現れ、プラズマ手刀を喰らわせる

俺はなんとか刀で受け止めたが、衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされる

「亮！？」

「ちっ！」

なんてパワーだよ。直撃は避けたのに、あれだけでシールドエネルギーが一気に二桁まで削られた

『教師部隊！迅速にボーデヴィッヒを鎮圧しろ！』

放送で千冬さんの声が聞こえる

回りで待機していた教師部隊が一斉に鎮圧するために動き出す

「蠅が。邪魔だ！」

ボーデヴィッヒは六つのワイヤーブレードを延ばし、教師部隊を斬り刻み叩き落とす

「見たか、三崎亮！優秀な教師部隊が一瞬で鉄屑だ！これが最強の力……私が追い求めた力だ！」

ニヤリと笑いながら言うボーデヴィッヒ
これがＡＩＤＡの力なのか？

ＡＩＤＡの力は俺がよく知っている
ＡＩＤＡに感染したら、そいつの脳内へと潜り込み、欲望や願望を増大させ暴走させる
それだけではなく力も増大させるのだが……それはゲーム（Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ）の話で現実（リアル）ではどうなるかはわからなかった
だが、いま目の前にいるボーデヴィッヒを見る限りほとんど一緒のようだ。それもかなりの強さだ

「それが……お前の追い求めた力だと？」

「そうだ！唯一無二なこの力こそが私の追い求めた力だ。それを貴様に教えてやる！」

「その必要はねえ……」

「なに？」

俺がぼそりと呟いた声を聞いて目を細めるボーデヴィッヒ

「お前はわかってねえ……力の……強さの意味が！だから教えてやる」

ポーン

指輪が光り出すと、打鉄が鼓動するように赤く光り出す

「いいぜ」

ドクンッ！

「来い、来いよ！」

ドクンッ！

「俺はここにいる！」

ドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッドクンッ！

「スケェェェェェェェェェェェェェェェェェィス！！」

俺はスケィスを展開して言った

「お前を助けるついでになあ！！」

「ほざけ！！」

ボーデヴィッヒのワイヤーブレードが放出され俺に向かってくる

俺は大鎌で弾き飛ばすと前へ出た

「馬鹿が！」

「っ！？」

ボーデヴィッヒのＡＩＣが発動され、俺は体が動かなくなる

「喰らえ！」

大型レールカノンをこちらに向け、撃ち放つ

「ぐあああああっ！？」

何もできない俺は直撃し、後方へと吹き飛ばされる
なんとか体勢を整える
今のはかなり効いたな

「どうだ、三崎亮！私の力を！貴様の力（スケィス）を凌駕するこの力を！！」

「！！」

何でそのことを……
いや、おそらくＡＩＤＡが教えやがったな
面倒な奴だ！

「わかってねえな、ボーデヴィッヒ。勝負はまだこれからだ！」

「ふっ！その虚勢がいつまで保つか楽しみだ！」

第45話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！

感想・アンケートお待ちしております

第４６話

「ど、どうしましょう織斑先生！？増援を呼んだ方が良いのでは！？」

「……いや、ここは三崎に任せよう」

急な事態に混乱する真耶
しかし、千冬は腕を組みモニターを見ながらそう言う

「で、ですが！今のボーデヴィッヒさんの状態は異常です！教師部隊があんなあっさり墜落されたんですよ！？」

「だからこそだ。三崎もそれがわかっているからあのＩＳを使っている。増援はかえって邪魔になる」

「そんな……」

千冬の冷静な判断に俯く真耶

「まあ、落ち着きたまえ。糖分が足りないからそんなに取り乱すんだ。コーヒーでも飲んで落ち着け」

コップを持ちコーヒーを入れ砂糖を入れるが

「あっ！それ黒烏龍茶なんですけど……」

ぴたっと千冬の動きが止まる

「……なぜ、コーヒーではなく黒烏龍茶なのだ……」

「えっと時期的に考えて烏龍茶の方が良いかと思いまして……確かちゃんと伝えたはずなのですが？」

「……」

「やっぱり、織斑先生も心配なんじゃないですか。だからそんなミスを」

「違う。私は聞いていない。山田先生からそんな話は聞いていない」

「織斑先生。棒読みでそんなこと言われても説得力ありませんよ」

今回の真耶はひと味違うみたいで千冬を追い込んでいく

「言っときますが、その黒烏龍茶は私はいりませんので」

「くっ……まずい……」

渋々、黒烏龍茶（砂糖入り）を飲む千冬

「「織斑先生！」」

「……お前らか」

観察室に入ってきたのは箒、セシリア、鈴の三人だった

「織斑先生！一夏達は今、どうなっているのですか！」

「モニターにも映らなくなってしまったのでここに来たのですが……」

「もう！また、あのドイツ代表候補生が何かしたの！」

箒たちは、そう言いながらずかずかと入り込んでくる

「み、皆さん。ここは立ち入り禁止ですよ。避難してください！」

「無駄だよ、山田先生。こいつらはもう梃子でも動かんだろう」

真耶はそう言われ三人を見てみると、真っ直ぐな目でこちらを見ている

これは諦めるしかない

「お前ら。そこに突っ立ってないで、観たいなら見ろ」

はい、と返事をした後三人はモニターを見ると驚愕する

「これは……！」

「亮さんのあのＩＳはクラス代表戦のとき襲ってきたＩＳと戦った時に使っていたものですわね」

「なによ……亮は、そこまで追い込まれてるってわけ？」

戦っている亮の姿を見て驚きを隠せない三人

「だが、ボーデヴィッヒのＩＳは見た目は何も変わった感じはないが……」

「いいや。ラウラのＩＳは本来の約１０倍の力を持っている」

千冬の言葉に三人はさらに驚く

「１０倍!?なによそれ!ありえないわよ!」

「事実だ。お前らも味わっただろ。そんな理不尽な力を……」

「まさかボーデヴィッヒさんのＩＳにも、あの無人機ＩＳのような力を持っていると?」

「正確にはウイルスだが……トップシークレットなためこれ以上は言えん」

「そんな……」

「ただ一つ、言えることはラウラに勝てるのは三崎だけだと言うことだ」

そう言って千冬はモニターに視線を戻す

千冬も何もできなくて悔しいのだ。それを理解する三人は手を握りしめながら戦っている亮が映るモニターへと視線を向けるのであった

「このっ！」

「ふん！そんなもの当たらんぞ！」

俺はスタンショットでボーデヴィッヒの動きを封じようとするが、
簡単にかわされてしまう

「おらっ！」

続けて俺は、ダッシュで加速し、ボーデヴィッヒの懐に潜り込んで
大鎌を一閃
大型レールカノンを破壊したのだが

「無駄だ！」

ボーデヴィッヒの声とともに大型レールカノンが復活
くそっ！どうやら再生能力もあるみたいだな

「喰らえ！」

ボーデヴィッヒの視線が俺に向けられる
ＡＩＣか！
俺はすぐにダッシュでＡＩＣ範囲から離れ間合いをとる

「ほらほら！まだまだ行くぞ！」

今度はワイヤーブレードを鞭のように縦横無尽に振り回す
これじゃ軌道が読みにくい

「くっ！」

チッ！と、装甲にかすったくらいだが、俺に痛みが襲いかかる
ナイフで指を切ったくらいの痛みだが

（くそっ！欅の言う通りって訳か！）

俺はこの前、欅からメールをもらって書いてあった注意点を思い出した

こんにちは、ハセヲさん
前に言った通りスケィスの注意点をあげますので、しっかり覚えてくださいね♪

注意点その１『スケィスには絶対防御はない』

スケィスは他のＩＳより能力は高いですが、その分絶対防御がありません
ですので、攻撃は避けるか、大鎌で受け止めちゃってください

注意点その２『スケィスのダメージはそのまま亮さんにフィードバックされる』

書いた通りです
亮さんが倒れた原因の一つはこれですね
Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは精神的なダメージでしたが、現実では肉体的にもダメージを受けてしまいます
ですので、注意点その１のように攻撃は受けないように気をつけてください
ハセヲさんがそういう趣味があるなら別ですが（笑）

注意点その３『起動時間が長ければ長いほど、ハセヲさんに負担がかかります』

ハセヲさんが倒れた原因その２です
スケィスは発動するだけでも、かなりの負担がかかります
相手からダメージをもらわなくても倒れてしまうこともありますですので、決着は早いうちに決めてください
長引けば長引くほどハセヲさんに負担がかかります
負担と言っても疲労感がのしかかるくらいなので命に別状はありません

注意点その3『スケィスのエネルギー源はハセヲさんの精神です』

これも書いた通りです
スケィスはハセヲさんが気絶しない限り、動き続けます
ですが、気絶すればスケィスは消えて、場所によってはハセヲさんが死ぬ可能性が高いですので気をつけてくださいね♪

「……」

ようは瞬殺しろって訳だが、そう簡単にはいかない
それにボーデヴィッヒに教えなければならないことがあるんだ

「ボーデヴィッヒ！お前が追い求めた力はそんなものではなかったはずだ！」

「何を言うかと思えば……何度も言わせるな！この力こそが私の追い求めた力なのだ！」

「違う！お前の追い求めた力は千冬さんのような真っ直ぐで力強い、

信念のある想い（ちから）だったはずだ！」

「信念のある想い（ちから）……」

「そうだ！千冬さんは今のお前みたいに力を使って人を傷つけたか？威張ったか？思い出せ、ボーデヴィッヒ！」

「……思い出せない。何も思い出せない……」

ボーデヴィッヒが頭を抱えながらそう呟く

「何も思い出せない。三崎亮、私の中には教官と過ごした日々は消え去った」

ボーデヴィッヒがプラズマ手刀を起動させる

「今の私には何もない。私の全ては、もうこの力（ＡＩＤＡ）に奪われた！」

そう言って突撃するボーデヴィッヒ
ＡＩＤＡに記憶を奪われたのか？

「だったら、奪い返してやる……俺の力（スケィス）と……」

大鎌を握りしめる

「想い（ちから）でな！！」

「はあああああああっ！！」

ボーデヴィッヒは俺をＡＩＣで動きを止める
そして紫電を纏ったプラズマ手刀を振り上げる
「これで終わりだあああああっ！」
終わるわけにはいかない！
俺は救うんだ！ボーデヴィッヒの全てを！
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」
俺の叫びに呼応するかのように俺（スケィス）の体に赤いオーラを纏う

バキィン！！

「なっ！？」

俺はＡＩＣを自力で強制解除させる
ボーデヴィッヒは驚愕した表情を見せていた

「喰らえ！！」

「ぐあああああっ！？」

俺はすぐさまボーデヴィッヒに大鎌で攻撃する
再生能力も考えて装甲部分に一閃した
これでデータドレインを撃てば終わる

「！！」

俺は右腕をボーデヴィッヒに向けデータドレイン構えをとるが、脳裏にあることを思い浮かべ、動きが止まってしまう

データドレインを撃ったらボーデヴィッヒはどうなる？

第４６話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

アンケートは今日で締切りです

感想・アンケートお待ちしております

第47話

データドレインを撃ったらボーデヴィッヒはどうなる？

俺の脳裏にその言葉が浮かび上がった

「あああああっ！」

「！！」

考えている間にボーデヴィッヒの装甲が再生してしまう

「何やっているのよ、亮！早く撃ちなさいよ！」

「今がチャンスですわ！何を躊躇っているのですか！」
鈴とセシリアが亮に通信するが、亮は撃とうとしない
「何故亮は撃たないんだ？」
「おそらく『撃たない』のではなく『撃てない』のだろう……」
「どういうことなんですか、織斑先生？」
真耶の質問に千冬は黙る
これも言っていけないことだからだ
データドレインはＡＩＤＡのような異常な力（イリーガル）を打ち消す
しかし、ゲーム（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）ではＰＣ（人）に当たれば、
ニュースにもなった『意識不明者』になってしまうらしい
それが現実で生身に喰らえばどうなるか全く予想が出来ない
下手したら命に関わる
このままラウラにデータドレインを使えば、意識不明者になるか、
最悪死ぬか
使わなければ、亮はラウラに倒され、止められる者がいなくなる
「八方塞がりか……」
千冬は最悪な状況にただ、そう呟くしかできなかった

私は全てを失った
暗い暗い闇の中
自分の姿すら目に映らない
私は大切なものを失った
何を失ったのかはわからない
でも大切であったのは確かだ
それに自分は何者なのか、どこからきたのか
自分の名前、姿ですらわからなくなってしまった
私はこのままずっと闇の中なのだろうか？
もう、どうでもいいか
元々、闇に生きるべき私が光を求めようなど、烏滸がましいことだったんだ

だから、このまま闇に身体を委ねよう

そうすれば楽に――――

『ボ‥‥ヴ‥ッヒ！』

何か聞こえる

気のせいか？

『ボ‥デヴ‥‥ヒ！』

いや、気のせいじゃない

この声はついさっきまで聞いていたような‥‥‥

『ボーデヴィッヒ！』

この声は亮‥‥‥三崎亮の声だ

そうだ

私の名前はラウラ・ボーデヴィッヒ

ダメだ

それしか思い出せない

でも、どうして思い出せたんだ？

わからない、わからない

ぽわっ

ん？

私の目の前に一つの光が現れる

その光で自分の姿が確認できた

私はこのような身体をしていたのだな

『だから……って言ってんだろ……ボーデヴィッヒ！』

光から声が聞こえる

気になった私は光の中を覗き込んだ

『た、か、ら！寝るときは何かを着ろって言ってんだろうが！』

『断る！私は寝るときは服を着ない主義だ！文句でもあるか？』

『大ありだ！』

『だったら無理矢理にでも着させるのだな』

『出来るか！！』

これは私の寝方について亮と言い合った時だな

あのときは亮の顔が真っ赤になって面白かったのを覚えている

ぽわっ

もう一つ光が出てきた

気になるから覗いてみよう

『なあ、ボーデヴィッヒ』

『……なんだ？』

『何を食ってんだ？』

『私の軍で配給されている軍事携帯食だ』

『何で朝からそんなものを食ってんだよ！？食堂で食えよ！』

『ふん。あんなものより栄養がたくさん詰まっているこっちの方がいい』

『謝れ！食堂のおばさんに謝りやがれ！』

この後、食堂に連れてかれて日替わり和食セットを食べさせられた
出汁巻き卵がおいしかった

ぽわっ、ぽわっぽわっ

私の回りに光が現れる

その全てが私と亮が映っている
まだ会って間もないのに、こんなにも亮との思い出がたくさんあるのだな

会いたいな

もう力なんていらないから

亮に会いたい

「あああああっ！！」

「ぐっ！」

「……亮兄」

ラウラの猛攻に防戦一方な亮兄
何でだよ！
さっきのあれ（データドレイン）を使っていれば終わってたはずなのに何で使わなかったんだ！

「……多分だけど、さっきのあれ（データドレイン）はボーデヴィッヒさんの命に関わるほどの威力があるんじゃないかな」

悔しそうなシャルルは二人の戦闘を見ながらそう言う

「だからって！それで亮兄がやられたら何の意味もないじゃないか！」

「それは……」

「くっ！」

「一夏！？」

俺は走り出した
俺の声が亮兄に聞こえるところまで
そして言った。

「亮兄！！負けるな！！自分を信じろ！！！！」

亮兄に伝えたいことを大声で

「!?」

俺はこっちに走ってくる一夏を発見して焦る
あのバカ!何やってんだよ
狙われるぞ!

「亮兄!!負けるな!!自分を信じろ!!!!」

「!!」

一夏の声に俺は目を見開いた
自分を信じろ、か……

そうだな
自分を信じられなきゃ、どうやってボーデヴィッヒを救えってんだよ

俺はまた一夏から大事なことを思い出させてもらったよ

「りょ、亮……」

「！」

俺を呼ぶ小さな声
それは両手で頭を抱えていたボーデヴィッヒだった

「暗……い……亮…あ……よ…」

ボーデヴィッヒの目から涙が溢れ出ていた
あいつも、光を、助けを待ってるんだ
大丈夫だ、ボーデヴィッヒ
すぐにお前を助け出す

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

俺は右腕をボーデヴィッヒに向ける
その瞬間、右腕から赤く輝く砲台へと姿を変える
俺は感じた
これはいつものデータドレインではないと
だから、俺は躊躇わずに撃ちはなった

「データドレイン・ハート！！」

「あああああああああああああああああああああああっ！！？？」

ドオオォォォォォン！！

「……」

「ボーデヴィッヒ！」

データドレイン・ハートを喰らったボーデヴィッヒのＩＳが光となって消える

地面に激突するギリギリで追いついた俺が受け止める

危なかった……いや、安心するのはまだ早い

「ボーデヴィッヒ！」

俺は目を閉じたボーデヴィッヒに声をかける

「……う……亮」

「！！」

うっすらと目を開けて俺の名前を呼ぶボーデヴィッヒ

「亮……か？」

「ああ。そうだ」

「そうか……良かった……また会えて……」

そう言って目を閉じるボーデヴィッヒ
どうやら疲れて眠ったようだ
その顔はとても幸せそうで可愛らしいものだった

「亮兄！」
「亮！」

離れて見ていた一夏とシャルルが駆け寄ってきた

「大丈夫か、亮兄！」

「ああ……悪いが、シャルル。ボーデヴィッヒを頼む」

「えっ？う、うん」

不思議そうな顔したが、快く引き受けるシャルル
そうか。シャルルは知らないんだったな

シャルルにボーデヴィッヒを渡すと、俺はスケィスを解除する
その瞬間、スケィスだった打鉄は粉々に壊れる

「ぐっ……！」

「亮！？」

俺に激痛と疲労感が襲いかかり、シャルルの声を聞いたのを最後に俺は気を失った

第４７話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

これにて一件落着！！

アンケートに答えていただき本当にありがとうございます！！
結果ですが、内緒にしたいと思います
前に選んだ案の人には教えると書きましたが、それも無しの方向でいかせていただきます

本当に申し訳ございません

感想お待ちしております

第４８話

「う、あ……」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました

「気がついたか」

「教官……」

千冬を見た瞬間、涙が溢れ出るラウラ

「どうした？」

「い、いえ。何でもありません……」

ラウラは思い出したのだ
ＡＩＤＡに奪われたはずの千冬との思い出が
それが嬉しくて泣いてしまったのだ

そしてラウラはあることを思い出した

「教官！三崎亮は……亮はどうしたのですか！」

全身に筋肉疲労と打撲があるはずなのに上半身を起こし、必死の表情で聞くラウラ
そんなラウラに唖然とした顔になる千冬

「……落ち着け。三崎はとりあえず、大丈夫だ」

「とりあえず、ですか？」

「ああ……」

「！？」

千冬が隣のカーテンを開くと、そこにはベッドで寝ている亮の姿があった

「何が……起きたのですか……？」

声を震わせながら聞くラウラ

「お前と戦って倒れたままずっとこのままだ」

「な、何故ですか！」

「お前はさっきの試合はどこまで覚えている？」

「……私が織斑一夏と戦って……気が付いた時には亮と戦って……それくらいしか……」

「……一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ

「ＶＴシステムは知っているな？」

「はい……正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた」

「……」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。委員会からの強制検査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅぅっとシーツを握りしめた

「もう一方は詳しくは言えんが、そのＶＴシステムにウイルスがさらに仕込まれていたらしいが……その時に何を見た？」

「暗い……暗い闇の中でした……私の目の前に変な奴が現れて……」

「変な奴？」

「形はよくわかりません。いろいろな形になって蠢いていましたので……そいつは私に力を与えるかわりに光（思い出）すべてを喰い漁っていきました」

ラウラは両手で自分を抱くようにする

「怖がった。今の私を作り上げてきた光（思い出）がすべて奪われ、闇にまた溶け込む自分が……」

震えるラウラをただじっと見つめる千冬

「……でも、私にはまだ光（思い出）が残っていました……それは亮との過ごした光（思い出）。ほとんど、言い争ってばかりでしたが、それでも私にとって大切な思い出になって、私を救ってくれた」

ラウラは亮の方を見る

「人とふれ合えば強くなれる。その意味が少しわかった気がします。亮の強さも……」

「お前はそれを知ってどうしたい？」

「……わかりません。ですが、亮を見ていればその答えが出るのではないかと思うのですが……」

「なんだ？」

言葉を詰まらせるラウラに千冬が問いつめる

ラウラは千冬に反抗することはせず、喋り出す

「私は亮に酷いことをしてきました。何度となく私に伝えようとしたことを聞こうとも、わかろうともせずに、ただ逃げていた。そんな私に亮の近くにいる資格はありません……」

「では、どうする?三崎の近くにいなければ答えが見つからんのだろう?」

「亮の迷惑にならない場所で観察しようと考えています」

それはいわゆるストーカーで、ストーカー事態が亮に迷惑をかけるのだが、気づいていないようだ

「…だ、そうだが。お前はどう思う?」

「えっ?」

誰に対しての言葉なのかわからず、首を傾げるラウラ
周りを見渡しても千冬とラウラ、そして寝ている亮しかいないのだが

「……ふぅ」

「!?」

すると、いきなり目を開けて、むくりと上半身だけを起こしながらため息をつく亮
ラウラは亮がいきなり起きたことにかなり驚くのだった

「……いつから気づいてたんすか？」

起きた俺は千冬さんに訪ねる

「私がＶＴシステムを話し始めた時辺りだ。お前はいつ起きた？」

「俺もそんくらいですよ。まさかバレてたなんてね」

もう少しはバレないかなと思っていたんだが

「寝息が、たびたび乱れていたからな」

それだけでわかったのか？

相変わらず、鋭い人だよ

「それでだ。ラウラはお前の近くにいる資格がないから、っと言っているが？」

「そりゃあそうだろ」

「……っ」

「俺と会うための資格なんてどこで取るんだよ」

「……えっ？」

ボーデヴィッヒが意味がわからないと言った表情をしている

「だから、俺と会うのになんか資格が必要なのか？いらねえだろ。つまりそういうことだ」

そう言って俺はベッドから出る

「もういいのか？」

「怪我はそんなに酷くねえし、身体も動きますんで……ボーデヴィッヒ」

「！な、なんだ？」

急に呼ばれついつい強張った返事を返すラウラ

「俺は、俺と関わったすべてに関わり抜くと決めた……だから、俺は……ここにいる」

そう言って俺は保健室から出て行った

「……」

ラウラは亮が残した言葉の意味がわからずにいた

「まったく。奴も大概に素直ではないな」

とは言いながらもその顔は楽しそうなものだった

「教官はわかるのですか？亮の言葉の意味が？」

「大まかにだかな。それも三崎の側で答えを導け。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍するのだからな。た

っぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

千冬の言葉が意外だった
まさか、自分を励ましてくれるとは思ってもみなかったラウラは、
何を言うべきかがわからない
そんなラウラに、千冬は席を立ってベッドから離れる
もう言うべきことは言ったのだろう
教師の仕事に戻るようだった

「ああ、それから」

そして、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく再度言葉を投げかけた

「お前は私にはなれないぞ。私は、いろいろと心労が絶えないのでな」

きっと、ニヤリと笑って言ったのだろう。それがどうしてかラウラにはわかった
そして、千冬が部屋を去ってから数分経って、急におかしくなった

「ふ、ふふ……はは っ」

ああ、なんてズルいふたりだろう
ふたり揃って言いたいことだけ言い逃げた
あそこまで言っておいて結局は自分で考えろなんだから、ズルいことこの上ない

笑いが漏れるたびに全身が引きつるように痛かったが、それさえもどこか嬉しいと感じた

完敗

完膚無きまでの敗北。けれどそれが今はたまらなく心地いい

そうラウラ・ボーデヴィッヒは、これから始まるのだから――

第４８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第４９話

「亮さん。ほらお口をお開け下さい。はい、あーん／／／／」

「亮！さっさと口を開けなさい、ほら！あ、あーん／／／／」

「・・・・・・・・・・」

どうしてこうなった？
場所は寮食堂、時刻は夜
状況はセシリアと鈴に夕飯を食べさせてもらっている

もう一度言おう
どうしてこうなった？

とりあえず、俺はこの状況に陥ったことの一連を整理しよう

「・・・・・・やっと着いた」

身体の節々が悲鳴を上げているのにもお構いなしにたどり着いた場所は、寮食堂

俺は今日、飯を食べていない
いや、ボーデヴィッヒからもらった軍事携帯食を食べたから一応食べたのか？
ちなみにかなりまずかった

と言うわけで、腹が満たされていない俺は寮食堂に着たのだ
俺が何を食べようかと考えていると

「そんなことだろうと思ったわ！」

「ぐはぉっ！」

どげしっ！と嫌な音が聞こえたので見てみたら、そこには怒り心頭中の箒と――――

どごぉっ！

箒に鳩尾を蹴られる一夏がいた。近くには苦笑しているシャルルがいる
どういう状況かまったく理解できない
シャルルに聞いてみるか

ガシャンッ！

俺がシャルルに声をかけようとした瞬間、いきなり何かが落ちて皿が割れる音が響き渡った

何かと思って振り向くと、そこには口をぽかんと開いているセシリアと鈴がいた
ふたりの下にはセシリアが落としたのであろうサンドイッチが落ちていた
鈴はなんとか持ちこたえたようでその両手にはラーメンがある。少しスープが零れ落ちているところを見れば、かなり危なかったようだ
でも、どうしてそんなに動揺してるんだ？

「お、おい。大丈夫か？」

とりあえず、無事かどうか声をかけてみた

「そ」

「そ？」

「それはこちらのセリフですわ！！！！」

大声で怒鳴られてしまう
ん？俺なにかしたか？

「その顔は自分が何をしたかわかっていないわね……」

「うっ……」

鈴に思っていたことを的確に言い当てられてしまう
こいつはエスパーか？

「亮さん！あなたは今までどこに居たのか理解してますの！」

怒鳴りながら、つかつかと俺に歩み寄ってくるセシリア

俺がさっきまでいたのは――――保健室だ

「わたくしが、わたくし達がどれだけ心配していたか理解してますの！？お見舞いに行きたくても面会禁止。不安で胸がはちきれそうな想いでしたのに、ぶらっと現れて『大丈夫か？』……ふざけないでください！！」

ふざけているつもりはないが、明らかに悪いのは俺だな

「……その……悪かっ――――なっ！？」

謝ろうとした瞬間、目の前にいたセシリアが俺に抱きついてきた

「本当に……心配したのですから……」

「……すまん」

俺の胸に顔を沈めるセシリアを引き剥がすことはせず、そのまま謝った

まさか、そこまで心配されていたなんて思わなかった

ゲシッ！

「痛っ！？」

そんなことを考えていると足に痛みが走った
鈴が俺の足を蹴っている
しかも、現在進行形で

「なんなのよ、あんたは！バカなの？大バカなの？超大バカなの？」

それだけではなく三段活用で罵倒される。しかも蹴りながらだ

「どうだろうな？俺はやりたいことをやっただけからな」

「それがバカだって言うのよ！バカ！」

目にためった涙を流さないように凝らえながら、そう言ってまだ俺の足を蹴り続ける鈴

とりあえず、俺はふたりが落ち着くのを待つことにするか

「亮兄！」

「亮！」

「起きたのか！」

騒ぎに気づいた一夏とシャルルに箒がやってくる

「ああ……とりあえず、ふたりともそろそろ離れろ」

「「……」」

「ぐっ……」

上目つかいで俺を見て嫌だと訴えるセシリアと鈴
その顔が小動物みたいで可愛いと思ったのは秘密だ

「……なんか嬉しそうだね、亮」

うっ！シャルルに白い目で見られた
しかも、どこか怒っているみたいだし

「二人とも。亮と離れたくないのはわかるけど、亮に迷惑だよ」

「「！？」」

シャルルの言葉にばっと俺から離れる二人

「な、何を言ってますのかしら！今のは……そう！サバ折りを喰らわせようとしていたのですわ！」

「アタシは…あのまま蹴り続けて骨折させようとしたのよ！」

もはや、意味がわからん。ふたり揃って暴力思考は如何なものかと思う

「亮はお腹が空いたから来たんだよね？だったら一緒に食べようよ」

「あ、ああ……」

シャルルはニコニコ顔なのに恐怖を感じた
たから、俺は急いで夕飯を買うことにした

「……」

夕飯を受け取って席に座り、食べようとしたのだが問題が起きた

カランカラン！

「……」

カランカラン！

「……」

カランカラン！

と言う感じで箸を持とうとしたら指先が麻痺して上手く持てない

くっ！疲れがまだ完全に治ってなかったか
トレイは持てたのに

「……亮兄もしかして右手が使えないのか？」

「いや、これは……手が滑っただけだ！」

そう言って俺は箸を持とうとするが

カランカラン！

「……」

やっぱり落としてしまう

「亮。本当に大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫だ」

「全然、大丈夫に見えないよ」

シャルルにジト目で睨みつけられながらツッコまれてしまう
だから、なんでそんなに機嫌が悪い

「別に悪くないもん」

悪いじゃん！心の声にツッコむほどに！

「でも、どうすんだよ？そのままじゃ食えないじゃん」

確かに……残す訳にはいかねえし

「で、ではわたくしがお手伝いをしてあげますわ」

「な、なに言ってんのよ！そんなのはアタシがやるわよ」

そう言うが早いか、セシリアがフォークで、鈴は箸で料理を取って俺に向けてくる

「いや、別にんなことしなくていい――」

「亮さん♪」

「何か言った♪」

笑顔で俺の言葉を遮る2人

その言葉の裏には黙って従えという意図を感じられる

しかも、殺気付きで

「……何でもないです」

俺は黙って従うことしか出来なかった

という感じで今に至るわけだ
気持ちは嬉しいのだが、かなり恥ずかしい

「亮さん、あーん／／／／」

「亮、あーん／／／／」

ふたりも恥ずかしいらしく頬を真っ赤に染めていた
恥ずかしいならするなよ、と文句を言いたいが、また怒られるのも面倒くさいし、俺も男な訳で女子2人から食べさせてもらえるってシチュエーションは嬉しい訳で……

「……」

「しゃ、シャルル？」

ガタン！と立ち上がるシャルル
いきなりのことにみんなの目が点になっている

「ご馳走さま。僕は先に戻るよ」

「あ、お、俺も行くよ。じゃあまた明日な、みんな」

そう言って寮食堂から出て行くシャルル
一夏もそんなシャルルに付いていった

「どうしたのかしら、デュノアさん？」

「さあ？」

俺にもよくわからない

箒に至っては呆然としている

「それじゃあ、俺もそろそろ帰るかな」

「なに言ってんのよ、亮。まだご飯が残ってんじゃない」

「そうですわ。ちゃんと完食しないと作っていただいた人に失礼ですわ」

ガシッと俺の腕を掴み逃げられないようにするセシリアと鈴

逃げられなかったか。こうなったら箒に助けを・・・・・

「私も先に帰らせてもらおう」

って、うおおおいっ！？

助けを求めようとした瞬間に帰るんじゃねえよ！

見捨てんなあああああああああ！！

第４９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

今回はセシリア、鈴が頑張りましたね

感想お待ちしております

第５０話

「……」

「なあ、シャルル。どうして怒ってるんだよ？」

無言で部屋に向かって歩くシャルルに一夏が話しかける

「別に、怒ってなんかいないよ……」

「そうなのか？」

「……うん、そう」

ならいいけど、と引き下がる一夏

だが、シャルルは内心、かなりイライラしていた

（亮ってば、あんな鼻を伸ばして……だらしない）

わかっている。これは嫉妬であると

でも、納得はしていない

（僕と一緒にいるとき、あんな顔したことないのに……）

セシリアと鈴にご飯を食べさせてもらう亮の顔を思い浮かべる

実際、顔を真っ赤にして渋々食べていたのだが、シャルルから見たらデレデレとした顔に見えたようだ

「あ、織斑君にデュノア君。ここにいましたか。さっきはお疲れ様

でした」

前から話しかけてきた真耶
ちなみにさっきとは、教師陣から事情聴取されていたことだ

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と胸を張る真耶
その強調された大きな膨らみに一夏の視線が釘付けにされる
すぐに視線をそらすがシャルルは見逃さなかった

「一夏のスケベ」

「な、なにっ？ちょっと待てシャルル！それは誤解だ！」

ぷいっと顔を背けるシャルル
完全に八つ当たりである

「？どうかしましたか？」

「い、いえいえ。なんでもないです」

「そうですか。それよりも、朗報です！」

グッと真耶が両手拳を握りしめてのガッツポーズ
それで揺れた胸の膨らみに一夏の視線が動いたのはお約束

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！そうなんですか！？てっきりもう来月からになるものとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

嬉しいサプライズに喜ぶ一夏

「それでは、ふたりは早速お風呂にどうぞ。私は三崎君にこのことを伝えてくるので先に入っててください。はい、鍵はこちらです」

真耶は一夏に鍵を渡すと、「ではでは～」と言って立ち去った

「さて、お風呂が入れるみたいだがどうする？」

「あっ！僕は後でいいよ。一夏が先にどうぞ」

「ホントか！？サンキュー、シャルル！よし！そうと決まれば早く行こうぜ！」

そう言って2人は部屋へと急いだ

「ふぅ……」

寮食堂から出た俺は腹をさすりながら部屋へと向かっていた

くそぅ……セシリアと鈴め、あんなにいっぱい食わせやがって

「あっ！三崎君！ここにいましたか」

「山田先生。俺に用事ですか？」

「はい！実は――――と言う訳なんです！」

なるほど

大浴場が今日、使えるようになったのか、そのことを一夏たちに伝えた後、わざわざ俺に伝えに来てくれたって訳か

「ありがとうございます。わざわざ伝えに来てくれて」

「いえいえ。教師として当然です！」

えへんと胸をはる山田先生

ここで頭を撫でたらどんな反応をするか気になるが、自重しよう

「織斑君とデュノア君は先に入っているんで三崎君も早いうちに入ってくださいね」

「あっ、はい」

そうか、一夏とシャルルが……ん？

（それは大丈夫なのか？）

山田先生が立ち去っていくのを見ながらそう思った

いや、さすがの一夏でもそこは自重できんだろ

多分、交代で入っているに違いない、違いない

そう考えていたら部屋にたどり着いた

とりあえず、着替えを持って俺も大浴場に行ってみよう

「ん？明かりが付いてる？」

ボーデヴィッヒが部屋に帰って来たのだろう

『お、……を引く……した……？』

ボーデヴィッヒの話し声が聞こえる

「なにやってんだ？」

中にはいるとボーデヴィッヒ……らしき物体がいた

何故そんな表現をしたかと言うと声はボーデヴィッヒなんだが見た

目は布団を覆い被さっているので誰かわからないからだ

もしかしたら侵入者かもしれない

と、まあ冗談はここまでにしてボーデヴィッヒは俺に気づいていな

いようだ

おそらく誰かと通信しているみたいだ。しかもプライベート通信ようだな

黙って話を聞いてしまうのも悪いので声をかけよう

「おい、ボーデヴィッヒ！」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああ！！？？」

声をかけた瞬間、今まで一緒の部屋で過ごしてきたボーデヴィッヒの聞いたこともないくらいの甲高い叫びに驚いてしまう

つか、なんだよ。その驚き様は

「り、りりりりり亮！？」

「お、おう」

かなり慌てふためいているボーデヴィッヒ
しかも、布団から顔しか出さず、布団を被ってうずくまっている
何だろう、また撫でたい衝動にかられてしまう

ヤバい。俺に必要なのは癒しなのかもしれない

……なんか俺のテンションがおかしい
やっぱり、大浴場に入ってすっきりしないと

「き、緊急事態発生。た、対処方法を要求する」

なんか嫌な予感がするし、早く対処しないとこちらが対処されそうな気がする。物理的な方法で

「あー、ボーデヴィッヒ。俺はこれから風呂に入ってくっから、その間に話をつけとけよ」

「あ、ああ。了解した」

ボーデヴィッヒの返事を聞いた後、俺はすぐに着替えを持ち、部屋から出ようとドアノブに手を伸ばす

「亮……！」

ドアノブに手をかけた瞬間にボーデヴィッヒが声をかけてくる

「……私はまだ亮の言う強さの意味がよくわからない。でも亮の側にいればわかる気がするんだ。だから私は亮の側にいたい」

それがお前が決めた一つの答えか

「……お前がそう決めたなら俺は止めねえよ……だが、一つ言っておくぜ……お前は俺にはなれねえぞ」

「……ぷっ！くくっ！」

最初唖然としていたボーデヴィッヒだが、しばらくして笑い出した

何だ？俺、変なこと言ったか

「す、すまん。ある人と全く同じことを言っていたからついな」

「マジかよ。だったら俺はその人と結構息が合うのかもな」

「そうだな。合ってるかもしれんな」

ぷっとまた笑い出すボーデヴィッヒ

そんなにそいつと俺の組み合わせがおかしいのか？

「す、すまん。わかっている。私は教官や亮と出会って学んだことを糧とし『ラウラ・ボーデヴィッヒ』となる」

真っ直ぐな眼差しで俺に言うボーデヴィッヒ

もう、過ちを犯すことはなさそうだ

いずれ、俺や千冬さんが持つ答えを導き出すだろう

人を想う心こそが人を成長させ、強くさせる。無限大な力だってことをな

ボーデヴィッヒの答えに満足した俺は部屋を後にした

「ここだな？」

大浴場に到着した俺はとりあえずノックをした
もしかしたらシャルルが入っているかもしれん
間違っても、入って着替えているシャルルに出くわす、という展開は避けたいからな

……何だろう
フラグを潰すな！っていう電波を感じ取った気がする

やっぱり疲れてんだな、俺
ノックの返事もないから誰も居ないみたいだし、さっさと入ろう

「へぇ！結構広いな」

さすがはＩＳ学園の大浴場って訳なのか、下手なホテルよりも広いし、設備が良い
つか、檜風呂と打たせ滝はやりすぎだと俺は思う

一夏は喜びそうだが、俺は殆どは湯船大かサウナくらいしか使わないだろう
俺はのんびり入るのが好きだから、いちいちいくつもの場所を転々と回ることはしない

とりあえず、髪と体を洗おう
さっさと疲れを取りたいからな

「……ふぅ」

体を洗い終わった俺は湯船大へと身を沈める
体中の力を抜き、壁に寄りかかる

気持ち良いな
今日の疲れが全て流されていくようだ

今日と言えばボーデヴィッヒに取り憑いたＡＩＤＡが気になった

なぜ、ボーデヴィッヒのＩＳにＡＩＤＡがいたんだ？
もしかしたら、亡国企業（ファントムタスク）の奴らがすでにＡＩＤＡをバラまきやがったのか？

それかＡＩＤＡの単独行動か

今度、八咫や欅に相談してみよう

「欅って、あの『月の樹』のギルドマスター？」

ああ

「そんな有名な人と知り合いなの？」

そうだな
いろいろと世話になってんだよ、現実（リアル）やＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでな

「そうなんだ。何してもらったの？」

ハセヲの破損を直してくれたり、サポートしたり……ん？

あれ?今、誰と喋ってんだ?

「……嘘?」

この声は!?

「シャルル!?」

声が聞こえた方向を見るとそこにはタオルを体に巻いたシャルルがいた

第５０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

とうとう、亮がハセヲだとバレる！？
次回をお楽しみに

感想お待ちしております

第51話

「……はぁぁぁ♪」

シャルルは一人、のびのびと浴場大に入っている

亮がいつ戻るかわからなかったので、すぐに出るということで一夏と交代した

でも、そこは女の子。いろいろと時間がかかる

そのせいで――

「へぇ！結構広いな」

「！？」

――亮が入ってきてしまったのだ

（え……え？……ええっ！？な、何で亮が！？）

着替えとか脱いだものが脱衣場に置いてあるからもし来ても大丈夫だと思っていたシャルル

しかし、それらは脱衣場の隅っこの方に置いてあったので亮には気づかれなかったのだ

（ど、どうしよう……幸いにも亮は僕に気づいてないみたいだけど……）

湯気のおかげでもあるが、シャルルは大浴場の隅っこに入っていた

ため亮には気づかれていない

そして、亮は体を洗い始める
このタイミングならバレずに出ることが可能なのだが

「……／／／／」

シャルルは亮の体から目が離せずにいた
シャルルも年頃の女の子。異性の、特に好きな人の体には興味がある
だからといって、のぞきはいけないことであるが
ちなみに、見ているのは腕や背中である

（はっ！？僕はなにをしているんだ！？）

我に帰ったシャルルではあったが、時すでに遅し
亮は浴場大に入ってしまう

（どうしよう……亮は僕の反対側にいるから気づかれてないみたいだけど……）

これでは自分は出られない
シャルルはどうにかしてバレずに出る方法を考える

「今日……ボーデヴィッヒに……憑いた……気になったな」

「！！」

気が緩んでいるのか、亮は独り言を呟く

（今、ボーデヴィッヒさんのことを言ってた……）

シャルルの頭から完全に大浴場から出る考えはなくなった

「なぜ、ボーデヴィッヒの……に……んだ？」

（よく聞こえないけど、またボーデヴィッヒさんの名前を……）

独り言の内容が気になったシャルルは大胆行動に出る
首まで湯に浸かり、ゆっくりと亮の元へと近づく

そして、ようやく亮の顔が見える場所まで到着
亮は目を瞑ってリラックス状態。全く気づいた様子はない

（よし。これで亮の声が聞こえるぞ！）

普段のシャルルからは考えられないほどの大胆行動だが、次の亮の
言葉に冷静になる

「今度、八咫や欅に相談してみよう」

（！欅って……）

Ｔｈｅ　ＷｏｒｌｄをＰｌａｙしていたシャルルは八咫はともかく、
欅は知っていた
元大ギルド『月の樹』のギルドマスター
それが欅の表の姿だ。裏ではスーパーハッカー
もちろん、そのことはほんの一部の人しか知られていない

それに月の樹がある理由で壊滅した話は記憶に新しい
シャルルは気になった。どうして亮がそんな有名人と知り合いなのか

そしてその考えがつい言葉に出てしまう

「欅って、あの『月の樹』のギルドマスター？」

「ああ」

シャルルの言葉に返事をする亮

しかし、慌てた様子はない。まだ気づかれてないようだ

「そんな有名な人と知り合いなの？」

「そうだな。いろいろと世話になってんだよ、現実（リアル）やＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでな」

この言葉に驚くシャルル

欅のリアルの人と知り合っている

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで知り合うのも難しいのにどうやって知り合ったのか気になる

「そうなんだ。何してもらったの？」

「ハセヲの破損を直してくれたり、サポートしたり……ん？」

（……えっ？）

シャルルの頭の中が真っ白になった

（亮がハセヲ？ハセヲが……亮？）

頭の中がそれしか考えられず、無意識に立ち上がる

「……嘘？」

シャルルはただそう呟くしかできなかった

第５１話（後書き）

連続投稿継続中！！

今回は短めです

感想お待ちしております

第52話

「シャルル!?」

何でシャルルがこんなところにいるんだよ!
まさか、先に入ってたのに気づかずに入っちまったのか?

「わ、悪い!?すぐ出る!?／／／／」

俺の顔が真っ赤になるのがわかる

「ま、待って!」

急に大きな声で呼び止められ、ぴたっと動作を止めた

「そ、その、話があるんだ。大事なことだから、亮にも聞いて欲しい……」

「……わかった」

真剣な声でそんなこと言われたら聞かない訳にはいかない
俺は一度浮かした腰を再度湯船に沈める

だが、真っ直ぐにシャルルを見るわけにもいかない。俺はシャルルに背を向けて耳を傾けた

「……その…亮がハセヲだって……本当なの?」

やっぱりそのことか……

「ああ」

知られたならもう隠す必要はない
俺は正直に答える

「確かに俺はハセヲのプレイヤーだ」

「何で教えてくれなかったの？」

「プライバシー保護さ」

「真面目に答えて欲しいな」

顔は見えないが真剣な顔をしているだろう

「……知られたくなかったんだよ……巻き込むかもしれなかったからな」

「巻き込む？」

「……これは、重要機密事項だ……千冬さん：織斑先生しかしらない話だ……知りたいなら大まかに教えてやる。知りたいか？」

出来れば知りたくないと言って欲しいが

「知りたい」

即答だった

「どうしてもか？」

「どうしても！、だよ」

シャルルの意志は堅いらしい

「……わかった……これは全て事実だ。信じる、信じないはお前次第だ」

そして、俺は大まかな話をしたＡＩＤＡのこと、無人機ＩＳ、そしてボーデヴィッヒの異変についてだ

「つまり、そのＡＩＤＡが今まで起こった事件に関係してるんだね」

「そうだ。つか、やけに納得すんのが早いな」

「辻褄が合うからね。それに……僕は亮のことを信じているから」

さり気なく嬉しいことを言ってくれるじゃないかめっちゃ、恥ずかしいがな

「たくっ……誰にも言うなよ？」

「うん。もちろんだよ」

「それに危険も伴う……が、安心しろ」

「えっ？」

そんなことは絶対にさせない

「俺がお前を守ってやる」

「……あ…う…うん。ありがとう／／／／」

礼を言ってくるシャルル

「……／／／／」

あー……

今更だが、かなり恥ずかしいセリフを吐いちまった
でも、嘘偽りのない俺の想いだ

「……んじゃ……俺あがるわ／／／／」

そろそろマジでのぼせそうだ

「あっ！待って！まだ話があるんだ」

どうやら大事な話はまだあるようだな

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「……学園に残るかどうかって話か？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

「それに？」

「……」

なぜか、帰ってきたのは沈黙だった
何だ？言いにくいことなのか？

ぴちゃーん

「きゃあっ！？」

「どうした？」

いきなりひっくり返った声が聞こえる

「水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「そうか……」

「……」

「……」

そしてまた沈黙が続く

時折天井から落ちる雫が、妙に大きく感じられた

ちゃぷ……

「シャルル？」

湯船の中を動く水音が聞こえてきた

振り向けないため、声を出して確認する

ぴとっ……

（……は？）

俺の背中に何か暖かいものが触れる
それが何かはすぐに理解する。シャルルの手だ

「お、おい！シャル――――」

そのまま、手は俺を後ろから抱きしめる
背中に華奢な体が密着して、俺の心臓はドキドキとシャルルに聞こえそうなほどに高まっていた

「亮が、ここにいろって言ってくれたから。そんな亮がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「あれは俺の我が儘だ。深い意味はねえぞ」

「我が儘でも、深い意味がなくても、僕はここにいたいって、そう決めたんだ」

「そうか」

そう決めたのなら俺は止めない
俺はただシャルルに協力するだけだ

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「そう。僕のあり方。亮が教えてくれたんだよ？」

俺が？何か言ったか？

「ふふっ、亮って自分に関することはどこまで鈍感だね。憎たらしいくらいに」

思っていたことが読まれたのか、笑いながら言うシャルル

「よくわかんねえが、悪かったな」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれから『シャルロット』って呼んでくれる？ふたりきりのときだけいいから」

「それが本当の名前か？」

「そう。お母さんがくれた、本当の名前」

「シャルロット……なるほど、だから『ロット』って名前だったのか」

俺のその一言にびくっと反応したのが手の振動でわかる

「それは僕のＰＣ名……覚えてたの？」

「いや……まあ……メンバーアドレスとかあるし…で、でもだな。そのときの話はぶっちゃけ覚えてなかった――あっ……／／／／」

俺は恥ずかしさから頬をかき始める

そして、言って気づいたが余計なことを口走ってしまった

「そっか……でも嬉しいよ。メンバーアドレスを残してくれてるんだもん。普通、半年以上連絡つかない人のアドレスなんて消しちゃうもん……」

嬉しそうにシャルロットがそう言う
消すのが面倒だったって考えはなかったのか？
いや、ありえないけどさ

つか、俺の背中にさらに体重がかかる
完全にシャルロットは俺に身を任している状態だ
正直、気が気でない
シャルロットの柔らかい肌とか膨らみが当たって――

「って違う！シャルロット、俺は先にあがるから」

「えっ！？いや、亮はまだ入ったばっかりでしょ？僕が先にあがるからゆっくりしてて」

俺の背中から軽くなると、ざばっ！と水音が聞こえる。シャルロットが立ったようだ
俺はどうしたらよいのかわからず、石のように固まってしまう

しばらくするとガラガラと、ドアが開く音が聞こえる
シャルロットがドアまでたどり着いたようだ

「亮……こ、こっち覗いちゃダメだよ？」

「の、覗くわけねえだろ！？」

「……覗いてもいいのに……」

何か最後につぶやいたような気がしたが、余裕のない俺にはまったく耳に入って来なかった

打たせ滝で頭を冷やし、シャルロットから着替え終わったと報告を受けた俺はすぐに脱衣場に向かい着替えた

着替え終わった俺は外に出ると、シャルロットがいたどうやら待っていてくれたようだ

「……じ、じゃあ……戻るぞ……／／／／」

「う、うん……」

そう言って頷くシャルロット
俺と同じように頬が赤いのは違うとわかっていても、湯上がりのせいだと決めつけて帰った
その間、俺とシャルロットは気まずい雰囲気だった

翌日

朝のホームルーム、シャルロットの姿はなかった
食堂のとき、『先に行っててて』と言われたから別れたのだが、どうしたんだろうか

それにボーデヴィッヒもいない
朝、起きてからその姿を見ていない
昨日の様子を考える限りでは負傷で休みではないだろうし、事情聴取かなんかだろう

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらふらとしている

「今日はですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

山田先生の話にクラスのみんなは一斉に騒がしくなる
今のこの時期に転校生がまた来るわけだから当然と言えば当然だ
でも、『すでに紹介は済んでいる』？

もしかして――

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

やっぱりか、この声は一カ月前にも聞いた声だ

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ぺこりと、スカート姿のシャルロットが礼をする
一夏を始めクラス全員がぽかんととしたままだ
俺はというと、半分呆れ半分安心していた

シャルロットのあり方とはこのことだったのかってことと、デュノア社と戦う決心をしたんだなとそう思った

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

山田先生の憂いはそこにあったか

……ん？なんか嫌な予感

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは――」

ザワザワザワッ！

教室が一斉に喧噪に包まれ、それはあっという間に溢れかえる

「い、一夏！それは一体どういうことだ！？」

「ほ、箒！？落ち着け！とりあえず、その刀をしまえ！？」

ものすごい形相で一夏を睨みつける箒。その手には刀が装備されている

「……亮さんは知っていたのかしら?デュノアさんが男ではなく女だったと」

隣の席のセシリアがジト目で俺を睨みつける

「ああ、まったく知らなかったよ。あいつ女だったなんて驚きだ」

「……そうですか」

まったく信用されていないのは気のせいだろうか

「ちょっと待って!昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!?」

「一夏!!」

「ま、待ってくれ!俺は一緒に入ってない!……そういえば、シャルロットが帰ってきたとき、一緒に亮兄もいたけど……」

「なっ!?バカやろう!?」

あのバカ!余計なことを言いやがった

ビシュンッ!

「うおっ!?」

殺気を感じた俺がその場から跳び去ると、そのいた場所にレーザーが通り過ぎる

「亮さん？あなた、嘘をつかない主義ではありませんでしたか？…少しお話をしなければなりませんね」

どうやら、今のレーザーはセシリアがやったようだ
その証拠にセシリアの手には《スターライトｍｋ？》が握られている
背中にはビットが浮かび、ＩＳアーマーが全身を包み込む

ヤバい！
とりあえず、セシリアの近くにいては駄目だ
俺はすぐにその場から離れ、教卓の前まで移動する

「ちょっと待て！なんでこっちに来るんだよ、亮兄！？」

「元はと言えば一夏が原因だろうが！」

「そんなムチャクチャな！？」

バシーン！

「亮ぉっ！！！」

このタイミングで登場するか鈴！？
つか、ホームルームはどうした！

「死ね！！！！」

問答無用、弁解の余地もなしにＩＳアーマー展開、それと同時に両

肩の衝撃砲がフルパワーで開放される

おいおいおいおいおい！！？？

それはシャレになんねえぞ！？

「亮兄、明日の朝刊一面は決まりだな」

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原形をとどめておらず、クラスメイトは口々にに悲しみの声を漏らす』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿でした」「あるいはイチジクでした」「破裂した缶コーラでした」

誰も悲しみの言葉を挙げてねえ！？

「死んだら毎月お花を添えるからな」

ふざけんなあああああああああああああああ！！？？

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴
その姿は毛を逆立てて怒る猫のようだな

ん？あれ？俺……生きてるのか？

「……」

「ボーデヴィッヒ？」

俺と鈴の間に割って入っていたのはボーデヴィッヒだった
その体には黒いＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っている
おそらく、衝撃砲を得意のＡＩＣで相殺したのだろう

「ふぅ……助かった。ありがとな、ボーデヴィッヒ……ＩＳは無事だったんだな」

「……損傷したパーツ以外は以上はなかった。むしろ、調子がより良くなった。あと、私のことは、『ボーデヴィッヒ』ではなく『ラウラ』と呼べ」

「は？なんでだ――――むぐっ！？」

いきなりだった

いきなり、俺の胸ぐらを掴まれ、ボーデヴィッヒに引き寄せられ、
気づいたときには――唇を奪われる……キスをされた

「!?!?!?!?／／／／」

胸ぐらと唇が解放された俺はその場から離れ、口を腕で押さえた
そして、鈴を始め、その場の全員があんぐりとしている

「お、お前は私の嫁にする!夫婦なのに、名字で呼ぶのは変だから
名前で呼べ!これは決定事項だ!異論は認めん!」

「……嫁?婿じゃなくて?」

俺の代わりに一夏がツッコミを入れる
俺にはそんな余裕はない
つか、今キスされたんだよな?
キス、キスキスキスキスキスキスキスキスキスキス

「あ、あっ、あ……!」

ぱくぱくと口を動かして、声にならない声をあげている鈴

「アンタねえええええっ!!!」

ジャキン!と再び衝撃砲が開く

「……／／／／」

ジャキン！

「亮さん……覚悟は出来ていますわよね？」

次にセシリアが俺に狙いを定める

「……／／／／」

「「「？？？」」」

全員がある異変に気づいた

もう絶望的な状況にいるのに、亮は微動だにしていない

普通なら慌てふためいてもおかしくない

「……ブツブツ……」

「りょ、亮兄？」

ブツブツ何かを呟く亮に一夏は耳を傾ける

「キスキスキスキスキスキスキスキスキスキス……キュゥ」

ドサッ

「亮兄!!??」

亮が崩れるように倒れ、クラス全員が騒ぎ始める

おそらく、衝撃砲以上に衝撃的な出来事（キス）に亮の脳回路がショートを起こしたため、そのまま倒れ、気絶したのだ

「……なにをしているのだ？」

そんな場面に千冬が登場

さすがの千冬でも、今の状況を理解出来ていない

「お、織斑先生、実は――」

真耶がこの状況の成り行きを最初から説明する

それを聞いて発した言葉は

「純情か……」

ごもっともである

第５２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第５３話

「むーん……」

そこは奇妙な部屋であった
部屋の至る所には機械の備品がちりばめられ、ケーブルがさながら
樹海のように広がっている

そう、ここは――篠ノ之束、その秘密ラボである

「おー、おー」

篠ノ之束、その姿はこれまた異色そのものであった
空のように真っ青なブルーのワンピース
それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである
エプロンと背中の大きなリボンが目を引く
顔立ちは箒の実姉ということで似通っている

そんな今、束はなにをしているかというと、ナノ単位のＩＳのプラ
モデルを組み立てている
つまり暇つぶしをしている

「あー、終わっちゃった」

暇つぶしの割には塗装から表面保護、磨きだしと完璧である

「んー……暇、暇ぁ」

ぱらりろぱらりらぺろ～♪

ゴッド・ファーザーのテーマが流れる

「こ、この着信音はぁ！トウッ！」

大ジャンプ。もとい携帯電話にダイブ

「も、もすもす？終日（ひねもす）？」

「……」

ぶつっ。――切れた。二重の意味で

「わー、待って待って！」

束の願いが通じたのかはたまた神様のイタズラか、携帯電話は再度鳴り響いた

「はーい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに――待って待ってぇ！ちーちゃん！」

「その名で呼ぶな」

「おっけい、ちーちゃん！」

「……はぁ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？」

「今回、今回――はて？」

束は首をひねる

とぼけているのではなく、本当にわからない

「ＶＴシステムだ」

「ああ。あれ？うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？すなわち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

「……」

「ていうか忘れていたけれど、つい二時間ほど前にあれを作った研究所はもう地上から消えてもらったよ……ああ、言わなくてもわかっていると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるよりも簡単――ていうか、ちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？私だけ？あれ、おかしいなぁ」

うふふふ、と笑いを付け加えて、束はつらつらと話す言葉を一度区切る

「そうか……例のあれはどうだ？」

「例のあれ？」

再び首をひねる束

「三崎の専用機についてだ」

「ミサキ？」

「……スケィスに耐えられる専用機……」

「あー、あれかー！」

ぽんっと手を叩く束

「相変わらず興味のないことは無関心だな」

「まあまあ。今のところ試作段階だけど、後一週間でできるかな？」

「他のＩＳみたいに壊れてしまわないか？」

「うふふふ、私がそんな中途半端なものは作らないよ。確かにスケィスはこの天才の束さんでも、ちょこっと手を焼いたけど、『けーちゃん』のアドバイスももらって順調だよ」

「『けーちゃん』？誰だ、そいつは？」

「最近知り合ってね、話が合うんだよね♪」

「……お前と話が合う……とんでもない奴なのだろうな」

「うん！私と同じくらいの技術を持ってるね」

「……」

黙り込む千冬
束がそこまで絶賛するのだから相当な人なのだろう

「それで、そのスケィスを使っている人……名前なんだっけ？」

「三崎亮だ。昔、お前も会ったことがある」

「三崎亮……ふーん。まあどうでもいいか。その専用機が出来たら渡しに行くから楽しみにしててね、ちーちゃん♪」

「そうか。では、またな」

ぶつっと電話が切れる。今度はもう一度かかってくるということもない
束は名残惜しそうに一度携帯電話を眺めたが、二秒後にはけろっとしてそれを放り出した

「やぁ、久しぶりに声を聞けて束さんは嬉しかったねぇ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」

腕を組んでうなずきながら、うふふふと笑みを添える

織斑千冬と篠ノ之束
その出会いは小学生の頃から始まる
以来ずっと同じクラス。もちろんそれは束がそうなるようにしていたからで、それは千冬も知っていた

しかし、ふたりの関係はそれだけではない
千冬が高校生の時にＩＳが発表され、以降数年間千冬はＩＳ開発に

操縦者として協力していた
つまり千冬は元々知識ベースからして他の操縦者よりも一枚も二枚も上手、理解のそのレベルがハナから違うのだ
その上であれだけの訓練と独自の戦術

ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』で優勝したのは当然の結果であると束はそう思っている

「しかし、ちーちゃんはなんで引退したんだろーね」

それが未だにわからない
年齢からしても実力からして、今すぐ現役に戻っても第一線で通用するだろう

けれど、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議
天才の頭脳をもってしても、その深さの全てを知ることはできない
――だからこそ、知りたいと思う。世界で三人だけの束の興味対象なのだから

ちゃらら～♪ちゃらら～♪あんたら全員、覚悟しいや。バキューンバキューン！ぐあああっ！ああっ、兄貴っ兄貴ぃ！おっだらぁ、タマぁとったらんかぁ！

突然の携帯電話着信――しかし、ものすごい着信音である
その着信音に、千冬のとき以上の反応を見せる束
折れたウサ耳までもがビーンと真っ直ぐに立ち、その反応の大きさを雄弁に物語っていた
なにせ、この電話が鳴るのは、初めてのことなのだ
相手は、出る前からわかっている

「やあやあやあ！久しぶりだねぇ！ずっとず――――っと待ってたよ！」

「……姉さん」

「うんうん！用件はわかっているよ。欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティブ）、箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能（ハイエンド）にして規格外仕様（オーバースペック）。そして、白と並び立つもの。その機体の名前は

紅椿」

第53話（後書き）

連続投稿継続中！！！

フラグが立つ！！！！！？？？？？

感想お待ちしております

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　前篇（前書き）

ようやく投稿出来ました
楽しんでもらえたら嬉しいです

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　前篇

場所はシャルロットとラウラの部屋
そこには豪華なメンバーが勢揃いしていた

「これで全員か？」

「ああ」

「ええ」

「そうよ」

「うむ」

「うん」

上から一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット
ＩＳが使える男に、ＩＳ開発者の妹、各国の代表候補生
これだけ集まれば戦争起こせるメンバーが勢揃いしている

その理由とは――

「亮兄のもう一つの顔を見よう！」

ガバッと立ち上がる一夏

「亮のもう一つの顔……？」

「どういうことですの？」

意味が分からず、首を傾げる箒とセシリア

「ちゃんと分かりやすく説明しなさいよ！」

「まあ、落ち着け。みんなは『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』っていうオンラインゲームを知っているか？」

「『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』？なんだそれは？」

「わたくし、聞いたことがありますわ。確か、ＣＣ社が運営しているゲームでしたわね？」

「その通り！」

「だが、それと亮の裏の姿とどう関係しているんだ？」

箒の質問に妙にテンションの高い一夏が答える

「実は亮兄はそのゲームをやっているんだ」

「うむ」

「ネットゲームはお互いの顔はわからない。だからいろいろと普段は見ない亮兄の顔が見られるんじゃないかと思うんだ」

「……」

黙って一夏の話を聞くシャルロット

シャルロットは、一夏の言う『亮の裏の顔』を知っている

「でも、どうやって見るのよ？アタシ、ソフトやＭ２Ｄ（ディスプレイ）なんて持ってないわよ」

ちなみにＭ２Ｄとはサングラス型のディスプレイでそこからデジタルの臨場感を楽しめる

「その点については大丈夫だ！実はＣＣ社の特別キャンペーンで当選者に５人分のソフトとＭ２Ｄが当たったんだよ。コントローラー付きで」

一夏がその当選ハガキを見せる

確かにそれはＣＣ社のものであった

「なんか、もの凄く胡散臭いわね・・・大丈夫なの？」

「それに５人分では全員でできないではないか」

ラウラの言う通り、確かに一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット、全員で６人だ

「確かシャルロットが自分のを持ってたよな？」

「え？うん。前に確認したらあるって」

「よし！それじゃ、送ってもらうとどのくらいかかる？」

「一週間くらい？」

「おおっ！M２Dが届くのもそのくらいだ！」

なんというご都合主義というツッコミはなしの方向で

「それじゃあ、一週間後にまたここに集まろう」

「ちょっとお待ちなさい！まだわたくしたちはやるとは言っていませんわ！」

「でも知りたくないか？亮兄が俺らの知らない所で何をしているのか？」

「それは確かに気になりますが……」

さすがにゲームとはいえ、人のプライベートにづかづかと踏み入れるのはどうかと思うセシリア

「それに、もしかしたらゲームで女の人と会ってるかもしれないし」

「「「!?」」」

一夏の一言にびくっと反応する一同

「ふむ……」

「やりますわ！」

「そうね！アイツが何をやっているか、かなり気になるわ！」

「うむ。嫁が浮気をしていないかどうか確かめなければならんしな」

「うん。確かにハ――――亮ならその可能性は十分にありえるね……」

箒以外の全員が賛同する

止めるべきシャルロットですらやる気満々である

「それじゃあ来週に同じ時間で集合だ！」

「「「「おう！」」」」

「……」

箒以外が元気良く返事する

箒は呆れて頭を抱えるのであった

「ぶるっ……なんか嫌な悪寒が……」

時は経って一週間

一夏たちはシャルロットとラウラの部屋に集合していた

「さて、みんな集まったようだな。シャルロット、例のものは届いたか？」

「うん！ほら」

シャルロットは持っていた箱を開けソフトとＭ２Ｄを見せる

「よし！こっちもちゃんと届いてるから早速始めよう！」

「しかし、一夏。亮はログインしているのか？していなければ、やる意味がないぞ」

「大丈夫！亮兄がＭ２Ｄを装着していたし、聞いてみたら友達と会うらしい」

「友達……？」

「もしかして……女！？」

「浮気は許さん……」

「……」

誰も女とは言っていないのだが、ゴゴゴゴッと背後に黒いオーラが見える

一夏は気にしないように心がけながら全員にソフトとＭ２Ｄを渡すと、各々は装着して準備に取りかかる

一週間の間にある程度予習はしているのでやり方がわからないということはなさそうだ

「ふむ。まずは自分が使うＰＣデザインを決めるのだな」

「そうだよ。出来る限り自分だとみんなにわかるようにした方がいいと思う」

経験者であるシャルロットはみんなにアドバイスを伝える

「あっ！セシリア！本名でユーザー登録はしない方がいいよ。下手したら個人情報とか調べられちゃうかもしれないから」

「わ、わかりましたわ」

少しぎこちないが着々と進んでいった

「それじゃあ、準備できたところでログインしよう。集合場所はログインして目の前にあるカオスゲート前ね」

いつの間にか仕切っているシャルロット

みんなも気にしている様子はなく了承しログインをする

「なんか緊張するわね」

「そうだな。でもわくわくするな」

「うむ。嫁が好んでいるゲームだ。楽しいに決まっている」

「はいはい」

「よし！行こう！」

一夏のかけ声と同時にログインした

その頃のハセヲこと亮はというと

「くっ……ふあぁぁ……」

「ハセヲ～！ちゃんと店番をしなきゃダメだぞ～！」

「しょうがねえだろ？眠いんだから」

「眠くてもしっかりやって欲しいぞ～！ハセヲは『カナード』のギルドマスターなんだからな～」

ハセヲは成り行きで入ってギルドマスターになった“初心者救済ギルド”『カナード』。そこで運営しているギルドショップ『ショップどんぐり』の店番をしていた

そして、ハセヲの隣にいる小さい犬の獣人は『ガスパー』
カナードのメンバー
そしてハセヲの友人

「つか、シラバスはどうしたんだよ？」

「シラバスは今、最近作ったオリジナルアイテムの調達をしてるぞ～」

「ああ……どんぐりバーガーか……」

ギルドショップではそのギルドのオリジナルアイテムを作っていいことになっている
つうか、あれめっちゃまずそうだよなゲームだけど

「あの……」

「あっ！いらっ――――」

「いらっしゃいませー！」

ガスパーよりも早く挨拶する営業スマイルＭＡＸのハセヲだが、その顔はすぐに崩れ去る

「こんにちは。ガスパーさんにハセヲさん♪」

「こんにちはだぞ～！」

「んだよ、お前かよ……」

お客かと思いきや、そこには白い帽子をかぶっている『アトリ』だった

「その反応は酷いと思います、ハセヲさん。それにさっき笑顔、と

ても良かったです！もう一回してください！」

「ふざけんな！お前の前では絶対にしねえよ！／／／／」

俺は顔を背けながら言う

その後、シラバスが来るまで、アトリがしつこく笑顔を見せろと言われた

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　前篇（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

どうでしょうか？

今回、Ｇ．Ｕ．メンバーは全然出ませんでしたが、次回にはちゃんとでると思いますので・・・・

感想お待ちしております

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　中篇

「ここがＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄか……」

そして、各々に感想を呟く

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにログインした一夏たちは無事に合流できた

「ああ……なんというか凄いな」

「本当にゲームとは思えないほどのリアリティがありますわね」

「そうね。さすがは世界最大のオンラインネットゲームね」

「シャ――ではなく、ロットはこれを見るのは久しぶりなのだろう？」

「うん！本当に久しぶりだよ……」

感傷に浸るシャルロット

シャルロットは本当に登録を破棄しなくて良かったと思う。もし、していたらまたここに来ることはなかったから

ちなみにロットはシャルロットのＰＣ名

ジョブは錬装士（マルチウエポン）

２ｎｄフォームで槍と杖

一夏のＰＣ名はイチ

ジョブは斬刀士（ブレイド）

箒のＰＣ名はブルーム
ジョブは双剣士（ツインソード）

セシリアのＰＣ名はセシリー
ジョブは銃戦士（スチームガンナー）

鈴のＰＣ名は鈴（すず）
ジョブは撃剣士（ブランディッシュ）

ラウラのＰＣ名は黒ウサギ
ジョブは妖扇士（ダンスマカブル）

「って、ラウラの名前がかなり特徴的だけど？」

「うむ。名前が思いつかなかったからな。この名前にした。何かおかしいか？」

「ううん。いいと思うよ」

ロット（シャルロット）の言葉にそうかそうか、と満足する黒ウサギ（ラウラ）

「それに黒ウサギだけにウサ耳を付けているんだね」

「むっ？別にそういう訳ではなかったのだが……」

黒ウサギ（ラウラ）のデザインは頭にウサ耳が付いている。どうやら獣人をチョイスしていた
理由はなんとなくらしい

「それにしてもロットのレベルは俺達よりもかなり高いな」
ロットのレベルは３５
一夏たちはもちろん始めたばかりだからレベル１だ
「僕は前からやってたからね。それでどうするの？亮を探すの？」
「もちろん！」
「でもどうやって探すのだ？亮のＰＣ名がわからないぞ」
「えっ？ああー・・・」
ブルーム（箒）の質問に頬を掻きながら視線をそらすイチ
「もしかしてあんた、何も考えてなかったの？」
鈴（すず）の質問には黙り込むイチ
それを見た一同はため息を吐く
「イチさん、そういうのは事前に調べておくべきではないのですか？」
「俺も亮兄にＰＣ名はなに？って聞いてみたんだけど教えてくれなくて・・・・」
それも当然であろう、とロットは思う
亮はハセヲであると知っているのは、千冬を覗いて、ここにいるのはロットことシャルロットだけ
しかも、亮には秘密だと言われている

2人だけ、とは言わないが亮との秘密、その響きがなんか良いと思っているので、言う気もない

だが、せっかくログインしたのだからハセヲ（りょう）に会いたいと思うロット（シャルロット）

「そういえば、ここには初心者救済ギルドがあるって聞いたが、そこで相談してみたらどうだ？名前は確か……」

「カナード、でしょ？」

黒ウサギ（ラウラ）が喋っている途中に知らない2人のＰＣが話しかけてきた

「なんだ、貴様は」

「おっと、これは失礼。俺はＩｙｏｔｅｎ（イヨテン）こっちはアスタ」

「こんにちはでござる」

「それで何の用ですの？わたくしたちは今からそのカナードに向かうのですが」

棘のある喋り方をするセシリー

いきなり割り込んでくるというマナーの悪い2人にイラついているようだ

「そのカナードのメンバーなんだが、今このエリアにいるんだよ」

イチはＩｙｏｔｅｎからエリアワードをもらった

「本当なのか？」

「もちろんでござる。ハセヲもいたでござるからな」

「なっ！？マジか！？」

アスタの言葉に驚愕するイチ

「？何をそんなに驚いているんだ？」

「バカ！ハセヲと聞いて知らない奴はこのゲームにはいないと言っても良いほどの有名人だぞ！」

「ほう！そんな凄いのか！」

イチの熱弁にハセヲに感心する黒ウサギ

「早く行ってみるといい。早くしないと帰っちまうぞ」

「それもそうだな！よし、行こう！」

イチ達はＩｙｏｔｅｎからもらったエリアに向かった

「くくくっ、俺達も行くか」

「そうでござるな、ふふふ……」

不敵な笑みを浮かべたＩｙｏｔｅｎとアスタはカオスゲートに触れ、どこかへと転送した

「……」

そんな2人を影から見ていた人物がいた
その人物はカオスゲートではなく扉に向かい、外へと出て行った

「たくっ……面倒くさかったぜ」

「そんなこと言って、とても楽しそうでしたよ」

うふふと笑いながら言ってくるアトリ
まあ、確かに楽しくないことはなかった
ただ面倒くさかっただけだ
営業スマイルもこいつに見られちまうし、最悪でもあるな

「あっ！ハセヲ兄ちゃん！」

「おっ！望か」

元気良く話しかけてきたのは特徴的な帽子とランドセルをしょった
少女『望』

ちなみにリアルは男の子だ
俺の弟分にあたる

「望ちゃん！こんにちは」

「アトリお姉ちゃん！こんにちは！」

礼儀正しく頭を下げて挨拶する望

「朔ちゃんは元気にしてる？」

「うん！でも最近、ハセヲ兄ちゃんに会えてないから少し元気が――」

「……望？どうした？」

急に黙り込む望に俺は手を伸ばすが

「軽々しく触ろうとすんな！この変態がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ドゴォン！

「ぐはっ！？」

いきなり俺の懐に潜り込んだと思いきや、叫びながら鳩尾に拳を喰らわせた
って！この豹変ぶりは！

「お前、朔か？」

「朔ちゃん、こんにちは！」

アトリは驚いた様子も見せず、普通に挨拶してやがる
少しは心配してもいいんじゃねえか？

「どもども……じゃ、あらへん！この変態！」

ノリツッコミを見せる辺り関西人血が……ってリアルのこいつは関西人じゃなかった
ちなみにこいつは『朔』
望の姉……なのだが、色々と事情があるが二人で同ＰＣを使っている
なので、ＰＣ名は『朔望』
見分け方は簡単だ。優しくて穏やかなのが望で、乱暴で凶暴なのが朔だ

「誰が乱暴で凶暴やねん！」

バシンッと頭を叩かれる
つか、何故わかった？

「後な！勘違いせんようにな！別にうちは、ハセヲと会えなくて寂しがったとか、そんなこと一切！一ミリも思っとらんからな！／／／／」

いや、別に寂しがったとか言っていなかったんだが……そこは気にしない

「へいへい。わかってるわかってる」

「うにゃ～♪」

俺が朔の頭を撫でると、目を細めて幸せそうな表情になる

「はっ！？なにかましとんねん！このバカハセヲ！！」

俺の手を振り払い、怒鳴りつける朔

さっきまで幸せそうにしていた奴に言われたくねえよ

「そうだ！ちょうど三人ですし、皆さんで冒険しませんか？」

「ん？そうだな、用事もねえし」

「はあ？何言うとんねん。うちは嫌やでそんな面倒くさい」

（そんなこと言っちゃダメだよ！）

朔が断ろうとすると望がそれを止める

（せっかくハセヲ兄ちゃんと遊べるんだから）

「いや、せやけど……」

（朔も本当はハセヲ兄ちゃんと遊びたいでしょ？）

「それは……望やって……」

（うん！だから遊ぼう！みんなとハセヲ兄ちゃんと一緒に！）

「……」

「どうした？痛っ！」

いきなり俯いた朔に頭を叩かれる

「……しゃあないな！『望が』どうしても行きたい言うから『仕方なく』遊んでやるわ」

腕を組んで偉そうに言ってくる朔

たくっ、素直じゃねえな

「それじゃあ、どこに行く？」

「そうですね～。それじゃあ、私のお気に入りのエリアをご紹介を――」

「おい、ハセヲ」

アトリが喋っている途中に俺の後ろから声が聞こえ振り向いた

「お前は……」

「「「おお～～！」」」」

Ｉｙｏｔｅｎに教えてもらったエリアに転送したイチ達は一斉に感激の声をあげた

「こいつはまた凄いな！」

「ああ。とても綺麗な場所だな」

「あまりの綺麗さに思わず空気を吸ってしまいそうになりますわ」

「最近のゲームはこんなにレベルが高いのね」

「ここにカナードと言うギルドメンバーがここにいるのだろう？早く捜しに行こう」

「そうだね。でも、モンスターもいるからあまり１人で行動しないようにね」

イチ達はこのエリアにいるカナードのメンバーを捜す

（草原エリアか……懐かしいな）

周りを見渡しながらそう思うロット

この草原エリアでハセヲ（りょう）と出会った、そんな思い出がロットにある

「むっ？この木、ロック出来るが、何か出来るのか？」

一番好奇心旺盛な黒ウサギはあるものあるものに反応を見せる
何もしないで経験者のロットに聞く辺り、警戒心が高いことがわかる

「その木には『チムチム』がいて蹴ると落ちてくるんだよ」

「『チムチム』って確か蹴るとチム玉が取れるのよね」

「そのチム玉で罠を解いたり、動かないものを動かしたりと必要なアイテムですわね」

さすがは代表候補生
予習してきたことをすらすらと口に出す

「ならば蹴っても大丈夫なのだな」

「うん！ちょうど、チム玉がないと進めないエリアだし」

わかった、とそう言って黒ウサギは木を蹴る

ゲシッ！ドサッ！ドサドサドサッ！

「チム～」

木から約１０匹の頭の上に光の玉を乗せた小さな生物『チムチム』が落ちてきた

「これがチムチムか！」

「みんな！チム玉を手に入れるには、このチムチムを蹴ること――」

「「か」」

「えっ？」

「「可愛い！！」」

セシリーと鈴が口を揃えてそう言う

「無理ですわ。あんな可愛い生物を蹴るなんてわたくしにはできませんわ」

「こんなものを蹴らせるなんてＣＣ社はどれだけ鬼畜なのよ！」

嘆くセシリーに怒る鈴

「いや、大袈裟だろ。なあ、ほう――ってあれ？」

イチが箒ことブルームに話しかけようといつの間にかいなくなっている

「ブルームならあそこだぞ」

黒ウサギの言う方向を見ると、そこにはチムチムに近づくブルームがいた

チムチムを蹴りに行ったのだろう――そう思ったのだが

「か、可愛い……」

「箒さん!?」

メロメロだった

ブルームは息を荒げながらゆっくりと近づいていく

「チムチム～～」

「大丈夫。恐くない。恐くないからもっとこっちにおいで～～」

「チム～!」

「あっ!逃げた!?」

チムチム達はバラけるように散らばって逃げ始める

「チムチムは臆病だから近づくと逃げるんだよ」

「いや、あれはチムチムじゃなくても逃げ出すんじゃねえか?」

「いいから早く捕獲するぞ!」

イチ達はチム玉を手に入れるためチムチムを追いかけた

捕まえたあと、セシリーや鈴、特にブルームが蹴ることに嫌そうな顔をしていたが、黒ウサギは平然とチムチムを蹴ってチム玉を手に入れていた

さすがは軍人。問答無用である

「うーん……見つからないね」

「ああ。もうこのエリアにはいないのかもな」

「お前達がぼさっとしているからだぞ」

「なっ!?アンタがガキみたいに動き回るから悪いんでしょうが!!」

「そうですわ!そのおかげで、はぐれてしまったり、あなたがモンスターに襲われて戦う羽目になったのですわ!」

「ぐっ……だが、そのおかげでレベルも上がったではないか!」

「今のアタシ達の目的はレベル上げじゃないでしょ!」

ギャーギャーと言い争う三人

「はあ……今はそんなことやっている場合じゃないのに……」

「ふふふっ、でもみんな楽しそうだよね」

「そうだな。この数十分で全員が楽しめている」

「あのお堅い箒ですら、こんなに楽しん――――痛えっ！？」

イチが何もされていないのに痛そうに頭を抱えながら転げ回る

「何すんだよ！箒！」

「ふん！お前が余計なことを言うからだ。それにここでは私はブルームだ」

どうやら一夏はリアルで箒に殴られたようだ

「ははは♪」

ロットは心の底から笑っている

こうやって友達と遊べていることが嬉しいのだろう

「！！」

「ロット？どうした？」

ロットの顔色が変わったことに気づき、話しかけるが、ロットは叫んだ

「みんな！集まって！狙われてる！」

「えっ？」

「いやっほう！」

「「「！！？？」」」

ロットが叫んだ瞬間、岩の影から知らないＰＣが刀剣を振り上げて襲いかかってきた
そのＰＣはそのまま刀剣を黒ウサギに振り下ろす

ガキィンッ！！

「ぐっ！？」

黒ウサギはなんとか妖扇で防ぐも吹き飛ばされる

「黒ウサギさん！大丈夫ですの！？」

「いや、半分以上ＨＰが削られた」

「ちょっと！アンタ何すんのよ！」

鈴は大剣を構えて戦闘態勢に入る

「鈴！この人（プレイヤーキラー）ＰＫだよ！」

「ＰＫ……聞く限り、良い響きではないな」

ブルームも双剣を構える

「多分、初心者狩りの人だよ。弱いＰＣを倒して悦に入る最悪な連

中さ」

「へっへっへっ、酷いこと言ってくれるじゃねえか。俺達はただゲームを楽しんでいるだけだってのに」

「人の楽しみを奪うことが楽しいと？ふざけてますわね！」

「……待って！今、この人、『俺達』って――」

「！！ロット！危ない！」

ビュン！

何かに気づいたイチはロットを抱えて横に飛んだ
すると、銃弾が先ほどまでいた場所に着弾する

「これは……もしかして！」

「何だ、こいつらは……」

辺りを見回すと、至る所にＰＫ達がイチ達に殺気を向けている

「こいつら全員ＰＫだっていうの！？」

「ちょっと待って！あそこにいる奴らは！」

ブルームが見た方向には見覚えのある二人がいた

「俺達にこのエリアを教えてくれた奴らだ！？」

そう、そこにいたのはＩｙｏｔｅｎとアスタだった

「さっきぶりでござるな」

「貴様らもＰＫだったのか……」

「ああ。まったく、お前らみたいな初心者は少し良い顔をしたらころっと騙されやがる。だからＰＫは止められねえ」

「この野郎！」

「ダメだよ、イチ！そのレベルじゃ、返り討ちだよ！」

刀剣で斬りかかろうとするイチを止めるロット

イチ達のレベルは５～６、ロットでも３５

それに対してＩｙｏｔｅｎは７５、アスタは７３、周りのＰＫ達と平均するとレベル７０くらいだ。勝てるはずがない

「どっちにしても、このままでは逃げることもできないぞ」

「みんな、僕が合図したら僕が言うアイテムを使って」

「わかりましたわ」

「オッケー」

イチ達はロットの合図を待つ

「おいおい？さっきまでの勢いはどうした？つか、もっと怯えろよ。じゃないとつまらねえだろ？」

「「「「……」」」」

「ちっ！しゃあないな……お前ら！狩りの時間だ！」

「「「「うおおおおおおおおおおおっ！！」」」」

我慢出来なくなったＩｙｏｔｅｎ達は一斉にイチ達へと襲いかかる

「みんな、今だ！」

「「「「「「『導きの翼』！！」」」」」」

「！？ちっ！」

ロットの合図でアイテムを使った瞬間、その場から消えた

「へっ、バカが」

逃げられたのにも関わらず、Ｉｙｏｔｅｎはニヤリと笑っていた

イチ達はプラットホームに転送された
イチ達が使った『導きの翼』は行ったことのあるプラネットホームに転送してくれるアイテムだ

「よし！これでタウンに戻れば――――」

ロットがプラットホームに触れようとした瞬間だった

「させるかよ！」

「！？」

ザシュッ！

「うわっ！？」

「「「「「ロット！？」」」」」

待ち伏せされていたのかＰＫに斬られるロット

「待ち伏せだと！？何故ここに転送されるとわかるのだ！」

「多分、囲んでいた奴らが全員じゃなかったのよ……」

「その通りだよ」

「……また、あなたですの」

くくくっと笑いながら現れたＩｙｏｔｅｎ
セシリーだけではなく、イチ達も睨みつけるが――

「おい！ロット、どうしたんだ！？」

黒ウサギが大声を出しながらロットの体を揺さぶる
しかし、ロットは起きない……いや、起きることができないのだ

「んだよ？もう一人やられたのかよ。つまんねえな」

そう、ロットは今の一撃で殺（キル）されてしまったのだ
その証拠にロットのＰＣボディは灰色に染まっている

「仕方ないな。ほら」

イチはＩｙｏｔｅｎから“黄泉がえりの薬”をもらった

「……何のつもりだ…」

「何だよ？親切に蘇生アイテムをくれてやったっていうのにお礼のひとつも言えねえのか？」

「ふざけんな！なんか企んでいるんだろ！」

「うむ。そう簡単に死んでくれると拙者らの楽しみがなくなるでござるからな。こうやって蘇生させれば何度でもＰＫを楽しめるでござる」

「最低ですわね……」

「絶対に許さねえ……」

（だ、ダメだよ、みんな！ここは逃げなきゃ！）

戦闘不能になったシャルロットはリアルからイチ達に話しかける

「ここまでバカにされて逃げられるか！」

「そうね！こいつらはアタシ達の仲間を手にかけた」

（えっ？）

「絶対に許さん！」

「目にものを見せてあげますわ！」

「奴らの息の根を止めてやる！」

全員が武器を手にして立ち向かう

シャルロット……いや、ロットはその光景に憧れていた

信頼した仲間・友達と一緒に戦い助けあう、そんな光景を

（イチ、僕を蘇生させて！僕もみんなと戦いたい！）

「ロット……わかった！」

イチは黄泉がえりの薬でロットを蘇生させる

灰色だったＰＣボディが元に戻ったロットは槍を出し戦闘態勢に

「バカな奴らだ。せいぜい楽しませてくれや！」

Ｉｙｏｔｅｎが刀剣を構え飛び出そうとした瞬間――

ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウン！！！

「な、なんの音ですの？」

「これは……蒸気バイク？」

蒸気バイクとは、ギルドマスターのみが乗ることが出来る一輪のバイク
その爆音が少しづつ大きくなって――――

ブウンッ！！

「「「ギャアアアアアアア！！？？」」」

ドカンと不意に後ろから現れた蒸気バイクがＰＫ達を引き倒す
蒸気バイクに乗っているのは銀髪の青年

「あ、あんたは……！？」

「てめぇは……！？」

イチとＩｙｏｔｅｎがそう言った瞬間、銀髪の青年が蒸気バイクから飛び降りる

「ロットと他の奴ら！伏せろ！！」

「！！みんな、伏せて！？」

ロットの言う通りにすぐ伏せるイチ達
銀髪の青年は空中で、その青年しか持っていない『双銃』を装備する
そして、そのまま――

ダダダンッ！！！！

「「「ぐあああああああっ！！？？」」」

青年が放った銃弾の嵐は正確にＰＫ達に「……なんで、てめぇがここにいる！！」

苦虫を噛み潰したような顔で銀髪の青年の名前を言った

「『ＰＫＫ』のハセヲ！！」

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　中篇（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

あんまり出てきませんでしたね・・・・

でも次回は不幸がハセヲに

感想お待ちしております

「……なんで、てめぇがいる！『ＰＫＫ』のハセヲ！！」

Ｉｙｏｔｅｎが俺にそう言ってくるが無視し、ロットに話しかける

「無事か？」

「……」

「？おい、聞こえてんのか？」

「ヒャアッ！？」

びくっと変な声を上げるロット

なんでそんな驚いてんだよ。つか、驚きたいのはこっちだってのに

「お前がここにいるのは、置いとくとして。そっちは……」

俺がロットと一緒にいた奴らの名前を確認した瞬間、唖然とする

何で一夏達までここにいんだよ！？

つか、名前わかりやすっ！

「どういうことか説明しろ」

「りょ……じゃなくて、ハセヲ。これはね？えーと……」

「すげえ！本物のハセヲだ！！」

一夏、じゃなくてイチがまるでサンタクロースに会った子供のような顔をしている

「イチはハセヲのファンなんだよ」

「マジかよ……」

リアルの友達が自分（ハセヲ）のファンて……

「まあいい。ほら」

俺はアイテムを使って他の奴らを回復させる

「あ、ありがとうございますですわ」

「あ、アンタがハセヲ？」

呆然としているセシリー、鈴（すず）

どうやら本当に俺を探していたみたいだな

「……てめぇ……」

「なんでお主ここにいる！それにプラネットホームには他のＰＫがいたでござろう？！」

「ああ、奴らなら今頃――――」

同エリアのプラネットホーム近く

「はんっ！弱すぎやわ」

（ダメだよ、朔。他人の体を踏んづけちゃ）

「争いは何も生み出しません。ですから、ＰＫの皆さん。これに懲りてＰＫを止めてくださいね」

ははははっと高笑いする朔にそれを止めさせようとする望、アトリは倒されたＰＫに説教をしている

「にしても、ハセヲの奴。『お前らに任せた！』言うて先に行きよって……こんなか弱い女の子を置いていくなんて考えられへんわ」

「まあまあ。相手はそんなに強くありませんでしたし、ハセヲさんは私達なら大丈夫と信頼してくれたんですから」

「……ふん！そんなん嬉しくもないわ」

（朔、嘘ついちゃダメだよ。本当は嬉しいくせに）

「だ、黙らんかい、望！アトリも笑うな！！／／／／」

顔を真っ赤にして怒る朔

アトリと望はそんな朔を見て笑っていた
倒れているＰＫ（死体）の山に囲まれながら……とてもカオスな光景であった

「って感じだろうよ」

「『ＰＫＫ』に仲間でござるか……」

「ロット、さっきから言っている『ＰＫＫ』とはなんだ？」

「『ＰＫＫ』（プレイヤーキラー・キラー）ＰＫする人をＰＫする。ＰＫの天敵だね」

黒ウサギの質問に丁寧に答えるロット

「……だが、それはあいつらとやっていることは変わらないのではないのか？」

「でもね、ブルーム。今のハセヲはＰＫＫじゃない。僕達の味方だ！」

自信満々な表情でブルームに言うロット

「さあて、黙って消えるなら見逃してやるが？」

「ちっ！」

「どうするでござる？」

「相手が悪すぎる。退くぞ！」

Ｉｙｏｔｅｎとアスタは適わないと判断し、そそくさと逃げていった

「ふぅ……」

「助かったよ、ハセヲ。でも、どうしてここにいるってわかったの？」

一息入れるとロットが質問してくる

「いや、俺もまさかお前らだとは思わなかった。俺はただカナードに訪ねようとしている奴らがＰＫに狙われている、と言われたから来たんだ」

「？そうなんだ。でも助かったよ。僕は一回やられたけど、みんながやられなくて良かったよ」

そうだ。何で一夏達がこのゲーム（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）をやっているのか聞かなければならない

つか、さっき聞いたけど流されたんだった

「おい、ロット。何でこいつらがここにいんだよ？」

「それは――――」

「我が嫁を驚かせるためだ。どうだ？驚いたか、亮？」

ロットが喋ろうとした瞬間、ウサ耳をつけたラウラ……ではなく
黒ウサギが爆弾発言をしやがった

「……何の話だ」

「我が嫁の話だが？」

当然といった顔をする黒ウサギ

「なに言ってんだよ、ラウラ。ハセヲが亮兄なわけないだろ。すいません。連れが変なこと言って」

ナイスだ、一夏
そのまま押し切れ

「何を言う。私が嫁を見間違えるなどありえん！」

胸をはって言い切った黒ウサギ
何故わかるんだ！

「私はＡＩＤＡに取り憑かれたとき、頭に流れ込んできた映像を見たのだ。スケィスを使って戦うそのＰＣ（ハセヲ）を。そこから推理して亮が乗っているＩＳも『スケィス』。同じ力を使っているハセヲは我が嫁である亮なのだ！！」

ビシッと指差してくる黒ウサギ。その発言にイチ達も俺が俺（ハセヲ　りょう）でない

かと疑い始めた

ヤバいな、完全に詰みだ

「…………そうだ。俺は……お前らと毎日あっている三崎亮だ」

「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！!?!?」」」

ロット、黒ウサギ以外の奴らが驚きの声をあげる

それも当然だろう

まさかこんな大規模なオンラインゲームで、しかもＰＫから助けてくれた人が自分達のよく知る人物で探していた人だった、なんて俺でもびっくりだ

「亮兄が……ハセヲ……なんで教えてくれなかったんだよ！！」

「こっちにもいろいろと事情があんだよ。詳しいことは――ん？」

後で話す、と言おうとしたらピピピッとショートメールが届いた

「……よし、話しても良いがここじゃダメだ。移動する……一応言っておくが、そこで話すことは世界のどこにも知られてなく限られた人物しか知らない重要機密だ……お前らは真実を知る覚悟はあるか？」

「……もちろんだぜ、亮兄！」

「ああ、我々も関係しているからな。見て見ぬ振りはできん」

「このセシリア・オルコット、命を賭けて口外しないことを誓いますわ」

「当たり前じゃない！」

「私の全ては嫁とともにある。覚悟などとうの昔にある！！」

「僕もだよ、って前に聞いたときにも言ったよね♪」

にこっと笑うロット

その言葉は悲劇の火種となる

「シャルロットさんは前に聞いた、と？どういうことなのですか、亮さん？」

「詳しく聞かせなさいよ！」

「嫁よ、隠し事は許さんぞ！」

ヤバい

空気が一気に変わりやがった！？

「落ち着け！話はそこにいるロットに聞け！」

「ええっ、丸投げ！？酷いよ、ハセヲ！？」

うるさい、原因はお前なんだからお前で解決しやがれ

「ハセヲさ～～ん！！」

「げっ……」

ここでアトリと朔がこちらに向かってくる

「どうしたんですか、ハセヲさん？そんなこのタイミングで来るな、と言いたそうな顔してますが」

まさにその通りだ、と言いたいところだが飲み込んで話をする

「気のせいだ。それよりアトリ、朔、今からこいつらをある場所に連れて行かねえといけなくなった。だから今日は――」

「私も行きます！！」

「ウチも行くで」

ここまでな、と言おうとしたらアトリと朔がついて来る宣言をしやがった

「私達、八咫さんからハセヲさんとそこにいる人達と一緒にタルタルガに来いって言われていますし」

「なっ！？」

何だと！？

あの野郎、まさかアトリ達にもこのことを話すつもりか！

ふざけんじゃねえ！もう波乱な予感しかしねえぞ

「いや、来なくていい。むしろ、来るな！」

「いいえ、絶対に行きます。それに――」

にこっと可愛らしい笑顔を浮かべ――

「そこにいる人達とハセヲさんがどのような関係か、激しく気になりますので♪」

黒いオーラを背後に纏いながらそう言うアトリ

ああ……もう俺、今日死ぬかもしれない

「何なんだ、ここは……！？」

イチが到着した場所に驚愕していた
ここはネットスラム『タルタルガ』
ハッカーが集まる無法地帯
驚くのも当然である……のだが

「うふふっ♪」

「ほほほっ♪」

「あはは っ♪」

「ふふふっ♪」

「……」

上からアトリ、セシリー、鈴、ロット、黒ウサギ
あの集団から黒いオーラが噴出されている。しかも全員が笑っているせい（黒ウサギは無言で睨んでいる）で余計に恐い

箒もそんな状況について行けなくてそわそわしてるし、朔は呆れた顔している
何なんだよ、この状況は！

「あのさ、亮兄。話ってどこでするんだ？」

その状況で普通に聞いてくるイチ
いや、こいつ全力であいつらを見ないようにしてやがる。気持ちはわかるがな、現実逃避はすんな

「奥にブリッジがあるそこで話す」

「わかった、行こう」

俺達は奥に向かって歩き出す

「うふふっ♪」

「ほほほっ♪」

「あははっ♪」

「ふふふっ♪」

「……」

「お前らいい加減にしろ！」

「うおおおおっ！？すげえぇぇぇぇぇぇぇ！？」

ブリッジに到着した俺達
イチが再び驚愕の声をあげる

まあ、ここからマク・アヌが見えるんだから仕方ない
さすがのセシリー達も驚いているみたいだしな

「ようこそ、ＩＳ学園の生徒諸君」

後ろから現れたのは八咫だった

「なっ！なんでアンタがそのことを！？」

「すでに調査済みだ。どうだったかね？このＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄをプレイした感想は」

「そうね、ＰＫに襲われたり、アンタに個人情報を知られなければ、もっと楽しかったかしらね」

鈴が睨みつけながら言うかなり警戒しているようだ

「あなたも機密事項を知っている人なのですの？」

「ああ、それにリアルでハセヲがＩＳを動かしたときに居合わせたりもした」

「ということは亮兄と仲が良いのか？」

「そうだな、たまに遊んだりもしていた」

「おい！んなこといいから、さっさと本題に入れよ！」

このままじゃ俺のプライベートがさらけ出されちまう

「いや、まだ全員到着していない」

「はあ？どういう意味――」

「八咫様、お待たせしました」

遮って現れたのはパイだった

なんだ？待っていたのはパイなのか？

「いや、ナイスタイミングだ。全員集まったか？」

「はい、今……」

パイが振り向き、入口を見る

すると、俺の見慣れた奴らが現れた

「よっ！ハセヲ！久しぶりだな！」

青髪のロングポニーテールに黄色い服を着た気さくなお兄さん『クーン』

「……」

「エン様～～♪♪♪♪」

その後ろには華奢な体にアイドル顔負けの美形『エンデュランス』

エンデュランス登場に朔が目を輝かせて近づく。その様はアイドルの追っかけである

「……」

「エン様？」

エンデュランスは完全に朔を無視。視線にも入っていないだろうそんなエンデュランスは俺の目の前まで来て――

「会いたかったよ、ハセヲ……」

俺を抱きしめた

「っていきなりなにすんだ！？」

ばっと、すぐに離れる俺
かなりびっくりしちまったじゃねえか！

「僕の愛をそのまま行動に移しただけさ」

この野郎、ぬけぬけと――俺が変な趣味を持っているみたいに思われるじゃねえか！
ただでさえ、ＩＳ学園でそんな噂が立っているのに……

「たく、クーンも何か言ってやって――」

「やあ、美しいお嬢ちゃん方。君たちはまるで夜空に輝く星のように美しい」（キラーン☆）

「てめぇはさっそくナンパかよ！？」

しかも、みんな絶賛引きまくりだから！？

「おい、八咫……まさか……」

マジかよ……

厄介事が増えるだけじゃねえのか？

「そうだ、Ｇ．Ｕ．のメンバーにも君のことを話そうと思う」

「ん？何かあったのか？」

「そうだ、心して聞きたまえよ。これはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄだけでなく、リアルにも関わる話だ」

八咫の言葉にさっきまでふざけていたクーンやエンデュランスも真剣な顔に変わる

「……まずはハセヲのリアルの事を話そう。――」

八咫は淡々と話し始める

まずは俺がＩＳを起動させてしまいＩＳ学園に通うようになってしまったこと

次にクラス代表トーナメントに現れたＩＳにＡＩＤＡが取り憑いていたこと

その段階で一夏達にＡＩＤＡのことを話した。そして俺の歩いてきた物語も一緒に話された
八咫に確認されたが、俺は一夏達になら構わないと返事をした
俺の物語で一夏達の役に立つのなら喜んで教えてやる、そう思った

「「「……」」」

話が終わったときにはイチ達は黙り込んでいた

「まさか、亮兄がそんなことをやっていたなんて……」

「亮はこのＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄで変わり成長したのか……」

「……亮さんの強さの理由がわかった気がしますわ……」

「そうね……」

「私は嫁のことを何一つわかっていなかったのだな……」

「なんか自分が情けないよ……」

やっぱり、聞かせなさい方が良かったか？
明らかにプラスにはなっていねえぞ

「……ハセヲ、お前――」

そんなとき、クーンが俺の両肩に手を置く

「なっ――――――――んて羨ましい奴なんだ！！！！」

「はあ？」

「だって、そうだろ！？ＩＳ学園と言ったら女の子しかいないんだぞ！しかも、かなりレベルが高い女の子だ！そんな天国（エデン）に男は、ハセヲと織斑一夏だけ……羨ましいに決まってるだろう！！」

「どんだけ熱弁すれば気が済むんだよ！言っとくがそんないいもんじゃねえよ」

隣ではうんうんと頷く一夏
どうやら同じ気持ちのようだ

「なに言ってやがる！彼女ができたり、女の子の部屋に行ったり、招いたり、一緒に飯食ったり、食わせてもらったりとか。他にも着替えを覗いちゃったり、覗かれたり、一緒に風呂に入ったり！！ぬぅおおおおおおお！！なんて羨ましいんだ！！」

「そ、そんなことあるわけねぇじゃねえか！！」

正直、ほとんどやってしまっている
俺が望んだ訳ではないがな

「だったら気になる女の子ぐらいいんだろ！」

「居るわけねえだろ！！」

「「「「……」」」」

ん？後ろから痛い視線を感じる気がする

「かあっ～！！やっぱりヘタヲはリアルでもヘタヲなのか！！代われ！俺と代われ！！」

「誰がヘタヲだ！！」

代われるものなら代わってやりてえよ！

一時間も経たない内に千冬さんにＩＳ学園から追い出されるだろうがな！

「畜生！！ここでさえ女の子に囲まれてんのに、リアルでも女の子に囲まれてるなんて世の中不公平だろ！？」

「知るか！！」

「……クーンさん、でしたわよね？」

「ふっ！ああ、そうだよ、お嬢ちゃん！俺に何かよ…う…か…な…？」

さっきまでの怒りはどこにいったのか

笑顔で話しかけたセシリーの方を向くが、その笑顔が一瞬で強張った

「聞きたいことがありますわ……」

「は、はい！何なりと！？」

「ハセヲさんがリアルだけでなく、ここでも女性に囲まれていると

いうのは本当ですの？」

「は、はい！本当です！」

びくっと怯えながら答えるクーン
何故そんなに怯えているかというとセシリーの気迫もあるが、その後ろに鈴、ロット、黒ウサギがおり、その全員がクーンを睨みつけつけている

「詳しく聞かせなさい……」

「えっとですね！？ハセヲはあそこにいるアトリちゃんや、パイに朔、他にも揺光、志乃、タビー、ボルドー、楓……あと、ハセヲは知らないみたいだけど、ハセヲのファンクラブもあるんだ……」

クーンの奴、余計なことを……ほら、パイや朔が違うって言いたそうな顔をしている。アトリなんてすごい形相で俺を睨みつける
なんで俺！？
つか、ファンクラブなんて初耳なんですけど！？

「ちょっと失礼しますわ……」

「アタシも……」

「私もだ……」

「じゃあ、僕も……」

「えっえっ？」

セシリー、鈴、黒ウサギ、ロットが光に包まれ、居なくなる。ログ

アウトしたようだ
でも、一体どこに？
イチやブルームもいきなりのことに戸惑っている
「りょ、亮兄！？今すぐ逃げるんだ！？」
すぐさま、イチが俺にそう言ってくる
「は？それって――」
ドンッ！！！！
「！！？？」
いきなり轟音が響き渡った
ここではなくリアルで、しかも外からだ
「亮さん、いらっしゃいますわよね……？開けてくれませんか……？」
「亮、今すぐに開けなさい……痛い目にあわせるわよ……」
「嫁よ、詳しく話を聞かせてもらうぞ……」
「亮……僕、女の子と仲が良いなんて聞いてないよ……」
ドンドンドンドンドンドンドンドンッ！！！！

壊れそうな程のノック音にセシリア、鈴、ラウラ、シャルロットの
声がドアの向こうから聞こえる
恐いから!?あいつらの声のトーンがかなり低くなってやがるし!?

「みんな退いていろ……」

ん?音が止んだ?

ドコォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッ!!??

「って、えええええええええええええええええ!!??」

ドアが吹き飛んだ！？

「「「「…………」」」」

その先には四人の修羅がいた

ちょっ！？来るな、寄るな、近づくな！？

ぎゃああ！！！！！！？？？？？？

「「「……」」」

ハセヲ……いや、亮の悲鳴を最後にハセヲの姿が消える
そんなハセヲを見て一同唖然としていた
しかし、一人だけ違った

「……」

「あ、アトリちゃん?ど、どこに行くんだい?」

無言でブリッジから出ようとするアトリに話しかけるクーン

「いえ、ちょっと準備を……」

「じゅ、準備?」

「はい♪今度ハセヲに会ったとき拷…質問するための、です♪」

そう言ってアトリはブリッジから出て行った
ちなみにアトリの目に光がなかった

ちなみにログアウトして自分の部屋に帰った一夏はその瞬間驚愕した

ドアはなく、窓も割れ、壁やベッドがボロボロになっている

「一体なにが……あっ！？」

奥に入るとベッドにうつ伏せになって倒れている亮がいた

「亮兄！？何があったんだ！？」

「……」

返事がない。まるで屍のようだ

ではなく、気絶しているようだ

「……俺も、もう寝るか……」

一夏は気にしたら負けだと考え、そのままボロボロのベッドで眠りについた

悲劇から数日後
亮はハセヲとしてまたログインしていた

「よっ」

「……」

俺は裏路地で腕を組む女性に話しかける
こいつは『ボルドー』
ちょっとした事情で知り合った

「何の用だよ……」

どうやら俺のことは歓迎されていないようだ
それでも、俺にはこいつに言いたいことがあるんだ

「……まあ、なんて言うか……礼を言おうと思ってな。前に知り合いがＰＫされることを教えてくれたろ？しかも、エリアワードも教えてくれてさ」

そう、ボルドーが俺にイチ達がＰＫに狙われていることを教えてくれたのだ

「……ふん！偶々だよ。エリアワードは、あいつらがよくそこのエリアで狩っているのを知ってただけだし……それをお前に教えたのは……そう！お前にＰＫＫ『死の恐怖』の頃のお前に戻ってもらうためだ！！」

「そういえば、いつもの２人はどうした？」

「聞けよ！！」

たく、ボルドーは相変わらず素直じゃねえなそう！って強調している時点でバレバレだってのの

「ネギ丸は大学のレポート、グリンは受験勉強で忙しいんだと」

「そう言うお前もリアルでは今年受験だろ？勉強しなくても良いのかよ？」

「……何で、てめぇがそのことを知っていやがる！」

「はあ？お前が教えてくれたんじゃねえか」

そのとき、やけに嬉しそうに喋っていた気がするつか、ボルドーがリアルのことを話してくれたのもそうだが、こいつのリアルが中学生だと知ったときは驚いた

「そ、そんな昔のこと忘れたね！」

「あっ、そう……進路とか決まったのか？」

「……一応な……」

ぼそりとそう言うボルドー

「そりゃあ良かった」

「お前はどうなんだよ？今、ネギ丸みたいに大学生だろ。ゲームしてて大丈夫なのかよ」

「まあ……そこそこやってるよ」

大学じゃねえけどな

「それじゃあ、俺は行くわ。今度は冒険でもしようぜ」

「ふん……ＰＫツアーなら喜んで行ってやるよ」

「はいはい……」

素直じゃねえな、と思いながら俺はボルドーと別れ、裏路地から出る

「ハセヲさ～～ん♪」

「げっ！？」

すると、アトリが俺に向かって来ていた。杖ならぬ『釘バット』を持って

「って、何だよそれ！？」

「ハセヲさんのために特別に用意したものなんですよ～！だからじっくりとお話聞かせてもらいますね♪」

明らかに肉体的言動で聞くつもりじゃねえか！？

「ハセヲさ～～～～～～～～～～ん♪♪♪」

「う、うわあああああああああああああああああああああああああああああああ！！？？」

「……何やってんだか」

アトリに追いかけられているハセヲを見ながらそう呟くボルドー

その表情はかすかだが楽しそうに見えた

１００万ＰＶ超え記念『明かされる！亮の裏の顔』　後篇（後書き）

連続投稿継続中！！

ハセヲの女難が炸裂！！

感想お待ちしております！！

第５４話

「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

「気にすんな」

放課後の廊下、赤い夕日が差し込む中を亮とシャルロットが並んで歩いていた
２人共、その手には今月の学校行事・臨海学校について書かれたプリントを持っている

「でも、良かったの？今日はセシリアたちと街に行く予定だったんでしょ？」

「別にいいさ。もともと大人数で出かけるのは苦手だ……それにお前がいねえなら行って仕方ねえからな」

「えっ？」

「……その……どんな理由でも、好きな奴と一緒に居てえんだよ／／／／」

そう言った亮の頬はわずかに赤く染まっている
それは夕日の色だけではないように見えた

「亮……」

「シャルロット……」

２人しかいない廊下でお互いに相手だけを映した瞳
そこに言葉はいらなかった
オレンジ色の光景の中、２人の影が徐々に重なって――

「亮さ～～ん♪」

ガラガラッと扉が開かれて、現れたのはアトリだった

「えっ？えっ！？ええっ！！？？」

いきなり現れたアトリに動揺を隠せない

「もう、亮さん♪どこに行ってたんですか？今日は私とデートする約束じゃないですか♪」

「ああ、悪い悪い」

「あ、あれ？」

いつの間にかシャルロットの横から居なくなり、アトリの隣にいる亮

「それじゃあ、キスしてくれたら許してあげる♪」

「わかったよ」

「ええっ！？」

亮とアトリの距離がどんどんと近づいていって――

「だ、ダメぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で状況を確認する
場所はＩＳ学園一年生寮の自室
時刻は早朝六時半

「……」

シャルロットはまだはっきりとしない意識のままだったが、二回まばたきをしたところでやっと現状を把握した

「夢……」

はぁぁぁぁ……っと深く深く深海二万マイルほどのため息が漏れる

（良かったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……まさか、あそこでアトリが出てくるなんて思わなかったよ……）

目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、その執着からかなかなか消えずに手元に残っていた
それを、ホラー映画を見るような感覚で、もう一度頭の中で再生をする

「……はあ……」

盛大にため息を吐くシャルロット

（ううっ……やっぱり最大の敵はアトリなのかな？）

前に会ったときにアトリのインパクトは結構なものだった。なんだかんだでアトリとハセヲはかなり仲が良かったように思えた

（だからあんな夢を……僕もあと少しで……／／／／）

自分が亮とキスしようとしたシーンを思い出す
だが、すぐにドキドキとした気持ちが嫉妬による怒りに変わる

（僕にキスしようとしたくせに……亮のバカ……）

なんて理不尽極まりないのだろう
しかし、そこは恋に悩む十代女子。そんな深く考えない

「あれ？」

隣のベッドにルームメイトの姿がない
先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻ったシャルル・デュノアことシャルロット・デュノアは、今はもう一夏とは別の部屋になっている
ちなみに一夏は前回にも言ったが亮と同じ部屋になった

「……まあ、いいや」

シャルロットはパジャマから制服に着替え始める
夢のせいで今すぐ亮に会いたくなったのだ

「よし！行こう！」

制服に着替え身だしなみを整えたシャルロットは亮の部屋へと向かった

チュンチュン……

「……ん……」

窓の外では早く入れろとばかりに朝日が差している
同じく、目覚めを促すかのようにスズメが鳴いていた

「……」

俺は何事もなかったように目を閉じて、至福の時を楽しむ
しばらくすれば一夏が起こしてくれる。それまではこのままでいよう

ふに

（……ん？）

ふにふに

（俺、なんか布団の中に入れてたか？）

別にいいか……あー、眠い

「ん……ふあああ…」

むくりと上半身を起こし、欠伸をする一夏は状況を確認する

時刻は朝の七時

そろそろ起きて朝食を食べないといけない時間である

（さて、亮兄を起こすか）

一夏は同じ部屋になった亮を起こすためベッドから出る

最近は、これが日課となっている

「おーい、亮兄！朝だぞ！って、ん？」

亮が寝ているベッドを見てみると、ある異変に気づいた

「ふくらみがふたつ……」

一夏は恐る恐るベッドに近づく

そして、顔が見える辺りまで近づくと一夏は驚愕した

「ラウラ……！？」

そのふくらみの正体はひとつは亮。それは当たり前だが、もうひとつはドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒだった

「おい！亮兄、ラウラ！起きろ！」

「……」

「ん……なんだ……朝か……？」

むくりと目をこすりながら起きるラウラ
そんなラウラを見て一夏は顔を真っ赤にする

「な、なんで服を着ていないんだ！？」

そう、ラウラは服を着ていない
シーツで体を隠しているが、肩や太股など隠し切れていない箇所からは綺麗な肌が露わになっていた

カッ！

「ひいっ！？」

いきなりラウラがサバイバルナイフを取り出し、一夏に投げつけた

「な、何をするんだ！！」

「馬鹿者！私の肌を見ていいのは嫁である亮だけだ！」

「うわあっ！？」

再びナイフを取り出して投げつけようとするが

「うーん……うるせえ……な……」

「えっ？わあっ！？」

「亮兄：！？」

いきなり声を出したかと思ったらラウラの手を掴み引っ張ったラウラはそのまますっぽりと亮の胸の中へとゴールイン

「うーん……」

「ね、寝ぼけてる……そういえば、亮兄は昔から寝相が悪かったような……」

「よ、嫁よ……気持ちは嬉しいが、こんな時間に、しかも人が見ているのに……／／／／」

どうやらラウラは気づいていないようだ

「だ、ダメだ！やはりこういうのは2人っきりで暗い場所でないと……／／／／」

なにげに雰囲気を気にするラウラを見て乙女チックだな、と思った
一夏

「……」

「むぐっ……／／／／」

ラウラからは見えないが不機嫌そうな顔を見せた亮は枕を抱きしめるようにしている
抱きしめられたラウラはしばらくしたら動かなくなってしまった
亮に至っては幸せそうな顔になって寝ている

「ど、どうすれば良いんだ……」

あまりの事態にどうすれば良いかわからず、ただ呆然と立ち呆けていた

（……よしっ）

と、自分に気合いを入れて亮と一夏の部屋の前に立つ箒がいた
少し髪が濡れているところを見るとどうやら朝練をした後のようだ
箒は髪型を三回確認し、声の調子を整えようとすること五回
そこまでやって、やっと箒は部屋のドアを叩こうとするが――

「あれ？箒？」

「ぬっ？シャル……ロットか」

思わず男性だった時の名前を呼びそうになってしまった箒

「なにしてるの？もしかして亮たちと朝食に行くの？」

「あ、ああ・そうだ」

箒は前まで一夏と一緒の部屋に済んでいたシャルロットに敵対心を
持っていたが、今となっては名前で呼び合う程の仲良しである

「シャルロットも同じ理由か？」

「うん！……ちょっと、亮の顔が見たくなったって理由もあるけ
どね……」

最後の方は聞こえなかったが気にせず、箒はドアを叩いた

コンコン

「い、一夏、いるか？せっかくだし朝食を一緒にしようかと思うのだが」

しーん。返事がない

「一夏？寝ているのか？もう起きないと朝食に間に合わないぞ」

「……返事がないね？」

二度目の呼びかけにも返事がない

ちょっとだけむっとした箒は思い切ってそのドアノブに手をかけた

かちゃり

「む？鍵がかかっていない……」

「はあ、まったく不用心だね」

「入るぞ、一夏、亮。早く起きて支度を――」

「げ」

「む？」

「何やってるの？」

ドアをあけると、そこには立ち呆ける一夏の姿があった

「一夏？何をしているのだ？」

「箒にシャルロット……良いところ――悪いところか？」

「？どういうこと？」

頬を掻きながら一夏は何もしてない手の方でベッドで寝ている亮とラウラの方に向ける
何も知らない箒とシャルロットがそれを見た瞬間、びしりと表情が、動きが、全身が固まる

「ななななっ、何をしているか！？」

「な！？待て、箒！これは違うぞ！」

しゅらん、と一息で真剣を抜刀する箒。朝から破廉恥なことをしていることが許せなかったのだろう
そんな箒を一夏はすぐに止めた

「何が違うというのだ！？これは明らかにヤバいところだろ！！」

「確かにそうだけど亮兄はなにもしてない。それにこれ以上部屋を壊されてたまるか！！」

「ふふふ……」

「しまった！？シャルロットがいた！？」

ゆっくりと亮とラウラが眠るベッドに近づくシャルロット
一夏は箒を抑えるのに必死で手が回らない
「今日の嫌な予感がこんなに早く当たるなんて思いもしなかったよ……」
シャルロットはそう呟きながら熟睡している亮の体を揺する
「亮、起きて。朝だよ」
「ん～…あと五分…」
「ダメだよ。もうすぐ学校が始まっちゃうよ！！」
ゆさゆさとシャルロットは亮の体をしつこく揺さぶるが――
「……母さん…もう少し……」
「か、母さん！？」
ズギューン！と何かを打ち込まれてしまうシャルロット
「もう～仕方ないな～～♪亮は～～♪」
にへらとさっきまでの怒りはどこへやら、ぽんぽんとシーツを整える
「って、ダメじゃないか！？ちゃんと起こしてくれないと！！」
「はっ！？」

一夏に言われて我にかえるシャルロット

「ごめん。つい……／／／／」

好きな人にお母さんと呼ばれたらこうなっても仕方ないであろう

「よし！次こそ！！」

気合いを入れ直してシャルロットは再び挑戦する

「亮、ラウラ！起き――――あっ……！？」

シャルロットの表情が驚愕、な表情からぽわわっと幸せが溢れ出た表情に変わってしまう

「可愛い……／／／／」

そう、亮といつの間にか眠ってしまったラウラ。２人の寝顔がシャルロットのハートにどストライクだった

「僕も仲間に入れてもらおうかな～♪／／／／」

「シャルロット～～！！？？」

シャルロットはラウラの横に寝ると２人を抱きしめる。まるで家族のようにだ

シャルロット陥落した瞬間だった

「まさかシャルロットまで寝てしまうとは……」

「……一夏、ここは私に任せてもらおう」

「えっ？箒さん？」

箒はゆっくりと亮達が眠るベッドの前に立ち

「チェストォォォォォォ！！！！」

グシャ！

「ぎゃあああああああああああああああああ！！？？」

第５４話（後書き）

連続投稿継続中！

亮に不幸が炸裂！！

感想お待ちしております

第５５話

「……」

時間は過ぎ、場所は変わって、一年寮食堂
箒に生死に関わる起こし方をされた俺は少し遅い朝食を取っている

「なんだ、亮。まだ怒っているのか」

「当たり前だ！刀で叩き起こされたらな！？」

「大丈夫だ。ちゃんとみねのある方でやったから」

「そういう問題じゃねえよ！！」

下手したら本当に死ぬわ！！
ちなみに俺の隣には一夏、逆はシャルロット、正面はラウラ、一夏の正面には箒が座っている

「まあ、落ち着くのだ。私のパンを分けてやろう」

「何でお前はそんなに偉そうなんだよ」

てめえも元凶の一人だろ！

「それで、何だそれは……」

「ん……どうした、かじっていいぞ？」

「いや、無理だから」

自分の口にパンを持ってそれを食べさせようとするラウラ

「ラウラ。それは大胆すぎると思うよ？」

「ふむ……嫉妬か？」

「えっ！？」

「自分ができないものだから、羨ましいと」

「そ、そんなこと……／／／／」

ちらっと俺の方を見ると顔を真っ赤にするシャルロット

「……どうでもいいが、ああいうことは慎め。頼むから」

じゃないと俺の命が危険だ

「うむ……心がけよう」

わかった、とは言ってくれないんだな

「……い、一夏？ずっと僕の方を見てるけど、どうかした？ね、寝癖でもついてる？」

素早く話題を変えるシャルロット

そのおかげで箒の鋭い目がさらに鋭くなったが

「いや、ないぞ。ただほら、先月はずっと男子の服装だったから、改めて女子の格好をしているシャルロットは新鮮だなぁ、と」

「そ、そうかな？亮はどう思う？」

ここで俺にふってくるか

「悪くないんじゃねえの？」

「そ、そう」

「なあ、亮兄？もう少し言い方があるんじゃ……」

「……別に、男子の制服だろうと女子の制服だろうとシャルロットに変わりはねえだろ。まあ、言い方が悪かったなら謝る。それに……」

俺はご飯を咀嚼し飲み込んで話を続ける

「似合ってはいる……／／／／」

「あ、ありがとう／／／／」

隣にいるシャルロットが顔を赤くする。おそらく俺の顔もこんな風になっているのかもしれない

「痛えっ！？」

いきなり足を踏みつけられる

「お前は私の嫁だろう。私のことも褒めるがいい」

「んなこと言われてもな……」

言わないとまた足を踏みつけられそうな気がする

「……ラウラの寝顔は可愛かった」

「そうか、そうか！！」

どうやら正解だったみたいだ。ラウラはとても嬉しそうだ

「痛えっ！？」

「……」

今度はシャルロットに腕をつねられた

どうやらどっちにしても不正解だったみたいだ

キーンコーンカーンコーン

ん？今のはまさか予鈴？
確か今日は千冬さんのＳＨＲだったはず

「ヤバッ！遅刻じゃん！！」

今から全力疾走して走っても間に合うか微妙な時間だ

って、ん！？
テーブルの回りには誰もおらず俺一人
一夏も箒もラウラもシャルロットもすでに食堂を出て猛ダッシュしていた

「うおっ！？お前らずるいぞ！！」

「すまん、俺はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「さらに右に同じく」

「ごめんね、亮」

なんて薄情な奴らなんだ。せめて走り出すときに一声かけてもいい

じゃねえか！！
そんなこと思いながら生徒玄関へと到着した俺は、すぐに内履きに履き替える
いっそのこと学園と寮をくっつけろよ

「ほらっ、亮っ」

内履きを履いてすぐに手を握られる。誰かと思ったらシャルロットだった
持つべきものは友達だな。一緒に死んでくれるみたいだ

「って、ちょっと待て！」

「あうっ！？」

ばしっと、シャルロットの頭を叩く俺
何故かと言うと、シャルロットがいきなり専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』を部分展開したからだ

「な、何するの！？」

部分展開されたＩＳは光の粒子となって消えた
シャルロットは頭をさすりながら文句を言ってくる

「それはこっちのセリフだ！なにＩＳを起動させようとしてんだよ！」

「だって、このままじゃ遅刻……」

「遅刻よりも規則違反する方がダメに決まってんだろ！ほら、まだ

走れば間に合――」

キーンコーンカーンコーン

「あっ……遅刻……」

ここで時間切れのチャイムが鳴った
今のタイミングで鳴るか……
せめてもう少し走った後に鳴って欲しかった

「はぁ……」

「ごめんね、亮……」

「お前のせいじゃねえよ。とりあえず、教室に行くか」

「うん……」

しょんぼりと落ち込んでしまうシャルロット
シャルロットは優等生だから遅刻という行為が嫌だったのだろう

「たく……そんなに遅刻したくなかったら俺を待たないで先に行っていれば良かったじゃねえか」

「……うん……でも、亮が遅刻して怒られるところとか見たくなかったから……」

これまた嬉しいことを言ってくれる

「だからってお前まで遅刻になったら意味がねえじゃねえか」

「ううっ……」

「まあ……でも、シャルロットの気持ちは嬉しかった……ありがとう」

俺がそう言うと、シャルロットはうん、と一言を言って俯いてしまう

「それじゃあ行くか。もういっそのこと、織斑先生のＳＨＲが終わるまで待つのも手だが――」

「ほう？それはなかなか面白い話だな」

「「……」」

ワアオ！！

何故か千冬さんが後ろから現れた

「少し会議が長引いたのだ」

ちくしょう！ということはチャイムが鳴った後でも走っていれば遅刻したことがバレずに教室に着けていたのか

「とりあえず、お前ら言うことは？」

「すみませんでした……」

「惜しかったです」

スパァン！！

俺にありがたい出席簿アタックをもらった
ちくしょう、教師が暴力を振るっていいのかよ

「安心しろ。これは愛の鞭だ」

「俺は鞭しかもらったことありません」

つか、それで安心などできるはずがない。いるとしたら、そいつは変態だ。間違いない

「……どうやら、まだ愛の鞭が足りないようだ」

「すみませんでした」

すぐに謝る俺
再び、出席簿を取り出したのだから仕方ない。普通の出席簿でここまで警戒させないのは千冬さん以外この世にいないだろうええい！出席簿で素振りを始めんな

「まあいい。早く教室に行くぞ」

「織斑先生より早く着いたら遅刻にはなりませんか？」

スパァン！

「なるわけなかろう、馬鹿者」

ですよね

結局、遅刻扱いになった俺とシャルロット

席に着くと千冬さんが話し出す

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

そう、授業数自体は少ないが、一般教科も当然ＩＳ学園では履修する中間テストはないが、期末テストはある
ここで赤点を取れば夏休みは連日補習になる
俺にとっては何の問題もない。本来なら今年で三年生なのだから、一年の勉強など余裕なんだ
つか、ＩＳ授業以外は三年生と一緒でもいいだろうに……
まあ今更な話だが……

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

７月頭の校外実習――すなわち、臨海学校だ

三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間
もちろんそこは海なので、そこは咲き乱れる十代女子。先週からずっとテンションが上がりっぱなしなのである

だが、俺のテンションはだだ落ちである
別に海が嫌でも泳げない訳でもない
俺が嫌なのは面子である
俺と一夏以外は全員女子
心休める暇がない

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

そういえば山田先生の姿がない
真面目な山田先生が遅刻とは考えにくい

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。
なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいな～！」

「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるんだろうなー」

さすがは咲き乱れる十代女子、話題があれば一気に賑わう
俺的には非常に残念な話だった
山田先生がやっていた授業に千冬さんが担当することになる。これでは居眠りができない
それに鬼教官から唯一離れられる平穏な時間だったのに……

パキィンッ！

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」

はーい、と揃った返事をする一組女子。相変わらずのチームワークそして、俺に千冬さんのチョークアタックが炸裂しても微動だにしないのもさすがである

第５５話（後書き）

連続投稿継続中！！

感想お待ちしております

第５６話

放課後、夕暮れ色に染まる教室で俺とシャルロットはふたり掃除をやらされていた
他の生徒はいない――というのも、このＩＳ学園、普通は生徒に掃除などさせないという他の学校では嬉しい決まりがある
毎日専属の清掃業者が教室に廊下、天井に至るまでピカピカにしてくれる

だから、教室掃除は生徒への軽い処分として使われるらしい

「……だからって遅刻一回ぐらいでやらせなくてもよくねえか…？しかも俺だけ」

「ははは……」

と、言っても俺に関しては今朝のことも関係していそうだ

「だから、シャルロットも俺の手伝いをしなくて良いんだぞ？」

「ううん。僕のせいで遅刻しちゃったようなものだし、これくらい手伝うよ！ん、んん～！」

机を運ぼうとするシャルロット

「おい、無理すんな。机運びは俺がやる」

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに――」

と、言葉を続けたシャルロットが重量に負けて足を滑らせる
俺はとっさに後ろから体を支えた

「ふぅ……たく、お前たまに抜けてるところがあるよな……？」

「ううっ……ご、ごめん、ありがとう……」

よく見てみると机の中はぎっしりと教科書が詰め込まれている
たく、教科書はちゃんと持ち帰りやがれ

「……／／／／」

何故か落ち着かず、妙に視線をさまよわせるシャルロット
俺はすぐに原因に気づいた

「わ・悪い・・・」

「あっ……」

すぐにシャルロットから離れたのだが、何故か残念そうな声を出す

「……別に良かったのに……」

「ん？」

「な、なんでもないっ！」

「？」

よくわからねえがさっさと掃除を終わらせるとすっか

（わ、わ、心臓すっごいバクバクいってる……か、顔大丈夫かな？変な顔になってないよね？）

罰掃除とはいえ願ってもない2人っきりの状況に、シャルロットの胸は自然と高鳴りを増していく

夕暮れに染まるオレンジ色の教室が、ふと今朝見た光景と重なってしまって、シャルロットの顔は耳まで真っ赤になった

顔から痛いほどに熱を放っているのが自分でもわかるくらいで、普段の落ち着いた様子は微塵も見られない

（ど、どうしよ……何か喋らないと……うう、でも言葉が出ないし話題も思いつかないし……）

そんなことを考えてまったく作業に身が入らないシャルロット

亮は黙々と掃除を進めていった

「ふぅ、やっと終わったな」

「そ、そうだね」

結局ろくに話も出来ずに掃除が終わってしまう

（ああ……せっかくのチャンスだったのに……）

自分の不甲斐なさに落ち込むシャルロット

「どうした、疲れたか？」

「う、ううん。大丈夫だよ……」

「そうか？あのさ、お礼にジュースを奢ってやるよ。喉渇いただろ？」

「えっ！そんなの良いよ！僕、そんなつもりで手伝ったんじゃ……」

「わかってるよ。ほら、行くぞ」

そう言って先に歩き出す亮

「あっ！待ってよ！」

シャルロットは亮の背中を追って走った

ガコォン！

「ほら」

「あ、ありがとう……」

亮からジュースをもらうシャルロット

（あうう……結局、奢ってもらっちゃったよ）

はあ、とため息を吐いてしまうシャルロット

「たく、お前は遠慮しすぎだ。もっと甘えても良いんだぞ？」

「うーん……でも、甘え方とかよくわからないから……」

シャルロットは家庭の事情で甘えることなど一切出来なかった逆に自分の出来ることを一から十まで考え込んでしまう傾向があった

「まあ、無理に甘えろとは言わねえがさ。せめて、一夏達や年上の俺にもっと甘えても全然大丈夫だからさ」

「そう言えば亮って年上なんだよね？すっかり忘れてたよ」

「そうなんだよな……幼なじみの一夏とかならまだわかるが。クラスの奴らは全員タメ語で、逆に俺に敬語を使ってくる奴は誰もいないんだよな……」

そう言ってこめかみを押さえる亮

「あははっ♪それほどみんなから好かれてるんだよ」

だと良いんだかな、と言って缶を開ける亮
シャルロットも奢ってもらったジュースを開けて飲もうとする

「あれ？開かない……？」

ふたを開けようとするが、妙に固く開けられない。無理に開けようとするが開かず、指が痛くなる

「……開けてやろうか？」

「……うん、そうだね。開けてもらって良いかな……？」

シャルロットはジュースを亮に渡すと亮は軽々とふたを開ける

「ほいよ」

「あ、ありがとう……こんな感じで良いのかな？甘えるのって……／／／／」

「まだどことなくぎこちねえが、そんな感じだな。まあ、少しずつ慣れていけばいい」

「う、うん……／／／／」

シャルロットは開けてもらったジュースを飲む

恥ずかしいのか顔が真っ赤になる

（甘えるってこんなに恥ずかしいなんて思わなかったよ……）

やってはみたが、やはりまだ恥ずかしさが残るようだ

「そ、そう言えば、織斑先生も言っていたけど、後少しで臨海学校だね」

「そうだな。シャルロットは楽しみか？」

「そうだね。話ではとても海が綺麗で楽しいらしいし」

「ふーん……まあしっかり楽しめよ。俺は泳がないからさ」

「……ええっ！？何で！？」

シャルロットはさっきまで赤くなっていた顔が一気に青ざめる

「いや、俺。水着もってねえし、買うのも面倒だから、自由時間は部屋でのんびりしようかと――」

「だ、ダメだよ！！」

「うおっ！？」

シャルロットにいきなり大声で怒られてしまう亮

「それは絶対にダメ！」

「な、なんで？」

「なんでもだよ！！」

めちゃくちゃな理由だが、このままでは亮と海で遊べなくなる
それはシャルロットだけではなく、他の女子もがっかりするだろう。
それだけは避けたい

「亮！！」

「はい！」

「今度の日曜日、水着を買いに行こう！！」

「はい？」

いきなりの提案に戸惑いを隠せない亮

「良い？絶対だからね！！」

「お、おう・・・わかった・」

「うん！！・・・・・あっ・・・・・」

亮の返事に満足した瞬間、自分が何をしているのか理解する

（な、なに言っているんだろう僕は！？これじゃ、まるで融通のきかない女じゃないか・・・・・）

ああ、と頭を抱えるシャルロット

「あはははははっ！」

「へっ？」

いきなり笑い出す亮に呆然とするシャルロット

「くくっ、悪い悪い。いきなり怒り出したかと思ったらすぐに落ち込むシャルロットの姿を見てたら面白くてつい」

「ううっ……／／／／」

自分の醜態に落ち込み俯いてしまうシャルロット

「わかった。今度の日曜日だな。時間はシャルロットが決めてくれ」

「えっ！う、うん。わかった！」

「よろしくな」

そう言って亮は飲んだジュースをゴミ箱に入れ、歩き出す

シャルロットはジュースを両手に持ってただ立ち呆けている

（あれ？これってデートなんじゃ……）

この瞬間、シャルロットの顔が真っ赤に染まった

第５６話（後書き）

連続投稿継続中！！！

感想お待ちしております

第57話

「ふあぁぁ……」

週末の日曜日
俺は急遽、シャルロットと臨海学校の準備をするため街に繰り出していた
その誘ってくれた張本人だが――

「……／／／／」

何故か顔を真っ赤にして落ち着かないシャルロット

「どうしたんだよ？調子でも悪いのか？」

「うひゃあ！？」

心配になって顔を覗き込んだのが悪かったのか、変な声を出した

「悪い。驚かしたか？」

「だ、大丈夫だよ。大丈夫！」

「まったく大丈夫には見えねえんだが……」

「と、とにかく、大丈夫なの！」

「そうか。なら、行くぞ」

「うん……えっ？」

シャルロットの動きが止まってしまう

「どうした？早く手を握れよ。駅前はかなり混むからはぐれたりしたら面倒だからな」

俺は返事を待たずにシャルロットの手を握る

「……／／／／」

今度は黙り込んでしまうシャルロット

「どうした？あっ！手を握られるのは嫌だったか？」

「う、ううんっ！全然、大丈夫、だよ！い、行こっ！／／／／」

急に歩き出すシャルロットにつられて、俺も駅前へと進む

ちなみにシャルロットの手が柔らかくてドキッとしたのは秘密だ

「……」

「……」

駅前へと向かって歩き出す亮とシャルロット
その姿を物陰から見つめるふたつの影があった

ふたりが青になった横断歩道を渡って人混みに消えると、頃合いとばかりに茂みから姿を現すふたつの影
ひとりは躍動的なツインテール、ひとりは優雅なブロンドヘアー
つまり、鈴とセシリアであった

「……あのさあ」

「……なんですの？」

「……あれ、手ぇ握ってない？」

「……握ってますわね」

百人見たら百人ともそう返すであろう言葉を発して、セシリアは引きつった笑顔のまま持っていたペットボトルを握りしめた。ぶしっ！と音を立ててフタが吹き飛ぶ

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし殺そう」

握りしめた鈴の拳は、すでにＩＳアーマーが部分展開していて準戦闘モードに入っていた
衝撃砲発射までのタイムラグはおよそ二秒といったところである
何とも恐ろしい十代乙女の純情であった

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「「！？」」

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返るふたり
そこに立っていたのは、忘れもしない先月鈴とセシリアが敗北を喫した相手――ラウラだった

「なっ！？あ、あんた行つの間に！」

「そう大声を出すな。亮たちにバレるぞ」

「うっ……あなたはどうしてここに？」

つい先月までは目を合わせることすらなかった関係だったのだが、みんなで『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』をしてからかなり仲良くなった。
何か共有するものがあったのだろう

「お前たちと同じだ。では私は亮を追うので、これで失礼するとしよう」

そう言って本当にすたすたと歩き始めたので、今度は鈴とセシリアが慌てて止めた

「ちょっ、ちょっと待ちなさいよ！」

「そ、そうですわ！追ってどうしようといいますの！？」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさりと言われて、逆に怯んでしまうふたり

こうまでストレートに言われると、なんだかもう悔しいのか羨ましいのかわからない

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡ののち、ふたりの関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、何が何だかよくわからないうちにおかしな追跡トリオが結成されたのであった

「水着売場は……ここか」

俺とシャルロットは駅前のショッピングモール、その二階にいた

「ところでシャルロットも水着を買うのか？」

「そ、そうだね……あの、亮はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

なんという質問をしてくるんだよ、こいつは……

滅茶苦茶答えにくいじゃねえかよ

「……さあ、早く水着を買おうぜ……／／／／」

「ま、待ってよ。質問に答えてよ……」

しまったっ！シャルロットと手を繋いでいたから逃げられない

「まあ……見たい、見たくないと言えば……見たいかな／／／／」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかなっ」

繋いだ手に軽く力を込めながら、シャルロットが何度かうなずく

どうやら最後の小さな声で言ったことがしっかりと聞こえていたようだ

「じゃ、じゃあ、男と女は売場が違うし、いったんここで別れよう／／／／」

話題を変えるため少し大きな声でそう言って俺は繋いだ手を離した

「あっ……」

「そ、それじゃあ三十分後にここで集まろう」

じーっと物欲しそうな視線を向けるシャルロットから逃げるように
俺は男の水着売場に向かった

第57話（後書き）

連続投稿継続中！！！！

次回はまさかの展開？次回を待て！！

感想お待ちしております！！

第５８話

色とりどりの水着がディスプレイされている
さすがは量販店から海外の一流ブランドまで網羅しているショッピングモールだ
といっても、俺はそんなに服とか気にしないので適当に黒と白が重なり合ったトランクスタイプの水着を選んだ

（待ち合わせまでまだ二十分ぐらいあるな……どうすっか……ん？）

そう思っていると俺はあることに気づいた

（何やってんだ？あいつ？）

俺の視線の先にはうろうろとその場で右往左往している女だった
しかもなにやら困った風なおもむきを感じさせた

「！ねえねえ、そこのアンタ！そこのアンタだよ。暇にしてそうなアンタ」

目が合ったと思ったらいきなりアンタ呼ばわりで呼び出される
無視するわけにも行かず、仕方ないので俺はその女のもとに向かった

「んだよ」

「ちょっとお願いがあるんだよ。聞いてくれないかい？」

「……少しだけなら聞いてやる」

「実はさ。アタシ、北海道から引っ越してきたばかりなんだけど、それで生活用品を買っていたら財布を落としちゃったんだよ。あれがなかったら今、泊まってるお婆ちゃん家に帰れないんだ。一緒に探してくれないか？」

「……そのお婆ちゃんに向かいに着てもらえば良いじゃねえか」

「それは出来ない。お婆ちゃんに迷惑をかけたくないし、あの財布には大事なものが……」

活発な女が一気にしゅんと落ち込んでしまう。頭のアンテナみたいな毛もへたりとしおれている
なんてわかりやすい奴なんだろうか

「わかった。手伝ってやるよ」

「本当かい!?助かるよ!思い切って話しかけたのがアンタで良かったよ!!」

ぱあっと明るい表情に変わる女。アンテナもぴんっと跳ね上がっている

「そりゃあ、どうも。それでどんな財布だ？」

「えーっと、ピンク色で猫の可愛いアクセサリーが付いた奴だ!!」

「わかった。とりあえず落とし物で届いていないか、確かめに行くぞ」

「おう！」

俺と女はとりあえず落とし物センターに行って確認してみたら、案の定、届けられたりとかはしていなかった

「ということはお前が買い物した店にあるかもしれないな」

「そうだね、行ってみよう！！」

洋服屋、生活用品売場、ダ〇ソー、などなど探し回ったが財布は結局見つからなかった

（ヤバいな……もうすぐ待ち合わせの時間になっちまう）

待ち合わせまで後、五分

このままでは遅れてしまう

「ごめん、もう良いよ。一緒に探してくれてありがとう。きっと誰かに拾われて持っていかれちゃったんだと思う」

「……お前はどうすんだよ？」

「アタシはお婆ちゃんに連絡して向かいに着てもらうよ。本当にありがとう」

「でも……」

「気にすんなって！アタシはもう気にしない！」

胸を張ってそう言い切る女
まったくどんだけ前向きなんだか

「本当にごめんな。ほら、そんなに汗かいちゃってんじゃん。今、拭いてやるから待って――――あっ!!??」

ハンカチか何かを取り出そうとハンドバックに手を入れた瞬間、女はまるたで石のように固まった

「お前……まさか……」

「……いつもはポケットに入れていたからバックに入っているなんて思わなくて……」

ゆっくりとおそるおそる取り出したのはピンク色で猫のアクセサリーが付いた財布だった

「ほんっと～～～にごめん!!」

合わせた両手を前に出し、頭を下げてくる

「完全にアタシの不注意だったよ……だから、アタシを殴って!」

「なんでそうなる!?」

そんな大声でそんなことを言うな誤解される!

「だって、アンタには迷惑をかけたし、けじめをつけないと……」

なんだよ、その古臭い思考は……

「別に良い。見つかったんならそれで良いだろ？」

「でも……」

「気にすんな、俺はもう気にしない」

「……」

うっ！ここで、このチョイスは失敗だったか？

「あはははは♪アンタそれアタシの受けいりじゃん」

呆然としていた顔が一気に笑顔に変わり笑い出す

「アンタ、良い奴だけじゃなくて面白い奴でもあるんだな！」

「出来れば面白い奴は除いて欲しいがな」

「あははっ♪そういえば、アンタ急いでんじゃなかったっけ？」

確かにその通りだ

ヤバい。すでに待ち合わせの時間が過ぎている

「悪い！俺、行くわ！！」

「あっ！ちょっと！！」

なにか呼び止める声が聞こえたが、無視して走り、シャルロットがいる待ち合わせ場所に向かった

「シャルロット！」

「あっ、亮！」

走って水着売場に向かったが、待ち合わせから五分ほど遅れてしまった

「悪い。遅れた」

「どうしたの？水着を選ぶのにそんな時間がかかったの？」

「いや、水着はすぐに買ったんだが、財布を落として困ってた人がいたから一緒に探していたら遅くなった」

俺は言い訳はせずあったことをそのまま話した。嘘を吐いても仕方ないしな

「ふーん……」

ぐわっ！シャルロットの目が疑っている目になっている

これは日頃の行いが悪いからなのか？

って俺はそんなに酷い行いをした覚えがねえんだが……

「そっか♪亮、お疲れ様♪」

急に笑顔に変わるシャルロット
あれ？疑ってたんじゃ？

「だって、亮の額から汗がかなり出てるんだもん。それに亮が嘘吐くときの顔じゃなかったしね」

なるほど、俺をからかったと言うわけだな
つか、嘘吐くときの顔ってどんな顔だよ

「それでだ。シャルロットは水着を買ってなさそうだけど、どうしたんだ？」

「えっとね、ちょっとね、亮に選んでほしいなぁって思って」

「俺が？」

また難しい注文が来たな
まあ、前にこうやって甘えてみろって言っちまったし、別にいいか

そう思って女性用水着売り場に足を踏み入れる

日曜日ということもあってか、そこそこ女性客の姿が目につく
向こうも、女物の売り場に男が入ってきたということですぐに気づいたようだった

「そこのあなた」

「……」

女性客が俺に話しかけたような気がするが気のせいであろう

「男のあなたに言っているのよ。そこの水着、片付けておいて」

と、名前も知らない相手からいきなり言われる

出たよ、ＩＳが普及した十年で女尊男卑の風潮はあっという間に浸透された

どの国でも女性優遇制度が設けられ、男はこうして街を歩いているだけでも見ず知らずの相手から命令される始末

「行こうぜ？あっちに似合いそうな水着があるぞ」

「うん」

こういう手合いは無視に限る

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

「赤の他人だろ。何の興味もない赤の他人」

「……言ってくれるじゃない」

そう言って女性客は警備員を呼ぼうとする

ただでさえ女尊男卑の社会なんだ。これで『いきなり暴力を振るわれた』などと言われたら、問答無用で有罪にされる

「あの、このくらいでもういいでしょう？彼は僕――私の連れで

すから」

「あなたの男なの？躾くらいしっかりしなさい」

こいつの頭の中では男＝犬らしい。なんで世の中ＩＳが発表されただけでこうも変わってしまうんだろうな

「まったく、これだから男はうざいのよ。だらだらしてるし、やることはやらないし。本当に最悪ね」

俺の顔を見ながらそう言ってくる女性客

「まあまあ、落ち着きなって。おばさん」

「何ですって！？」

後ろから現れたのは、さっきの女子高生だった

「私はまだ２６よ！」

「ふーん。アタシは今年で１７だけど。アタシから見たら十分おばさんだよ」

「あなた、いい加減にしないと……」

「どうすんの？殴んの？そしたらアタシは警備員を呼んで『私、この人に殴られました』って言うよ？そこにいる２人が証人だね」

俺はともかくシャルロットが証人になれば、確実に女子高生が勝てるだろう

「くっ！覚えておきなさい！」

「ごめん。もう忘れた」

女性客は逃げるように立ち去っていった

「やあ！さっきぶりだね！」

元気良く挨拶してくる女子高生

「ああ、助かった」

「別にいいよ！さっき財布を一緒に探してくれたお礼」

「それで？ここにいたのは偶然じゃないんだろ？」

「さすがだね。さっきちゃんとお礼を言えてなかったからね。お礼を言うために追いかけてきたんだよ」

「律儀な奴」

「アタシは情に厚いんだ！」

暑苦しいって言われそうだな

「それじゃあ、改めて。さっきは財布を一緒に探してくれてありがとう！！」

「ああ……お前も助けてくれてありがとな」

「おう！あっ！それとこれ」

女子高生は俺に折りたたまれた紙切れを渡される

「それじゃあ、またね！！」

そう言って女子高生は走っていってしまった

何だったんだ？

「亮。もしかして今の人が財布を落とした……？」

「ん？ああ、そうだ」

「そう……」

あれ？シャルロットの機嫌が悪くなったような

「さっき、何かもらってたみたいだけど」

「ん？ああ、何だろな？」

俺は折りたたまれた紙切れを広げる

「これは……」

書かれいたのは、数字とローマ字

「多分、さっきの人の携帯の番号とメアドじゃないかな……」

これは所謂、逆ナンと言うやつか？
最近の女子高生は大胆だな

「何で亮はこう次々と……」

なにやらシャルロットがぶつぶつと独り言を呟いている
シャルロットも女子高生の大胆さに驚いているのか？

「おい、シャルロット。今から水着を買うんだろ？」

「あ、うん。じゃあ、えっと、水着を見てくれるかな？」

「ああ」

と、返事をした俺をシャルロットが引っ張る。俺はそのままシャルロットと一緒に試着室に入る

って、ちょっと待て！？

「これはどういうつもりだ！？」

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわかんないし、ね？」

「いや、俺が聞きたいのはそうじゃなくてだな」

何で俺も一緒に試着室に入らなければならねえんだよ

「す、すぐ着替えるから待ってて」

「だったら俺は外に――――」

「だ、ダメ！」

いや、何でだよ？明らかにここにいる方がダメじゃねえか

「だ、大丈夫、時間はかからないから」

言うなり、いきなり上着を脱ぎ出すシャルロット

「なっ！？」

俺は慌ててシャルロットに背を向ける
こんな狭いボックス型の試着室には俺とシャルロットしかいない
しかも背中ごしに聞こえる衣擦れの音が否応なく胸の鼓動を早めていく

「……」

「……」

この沈黙が俺の精神をじりじりと削られていく
つうか、なんでこうなったのだろうか？

「ん……」

ぱさりと、どんどん衣服脱がれていく
一体、俺はどうしたらいいんだ！？

第５８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！

あの女子の正体は！？

感想お待ちしております

第５９話

（ううっ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）

というのも、こうなったのはシャルロットが追跡トリオの存在に気づいたからである

全てのＩＳは『コアネットワーク』と呼ばれる特殊な情報網で繋がっているため、ある程度の位置はわかるようになっている。しかし、位置の特定を避ける『潜伏（ステルス）モード』がある

追跡トリオは三人が三人とも専用機を潜伏モードにしているのだが、シャルロットは逆にそれでわかったのだった

『三人ともが潜伏モードで現在位置がわからない』、ということはつまり『わかられたくない状況にある』ということで、『尾行している』とわかったわけである

さすがに軍隊経験者であるラウラもいるので直接視認されるような愚を犯してはいないが、そもそも洞察力に優れたシャルロットにとってはこれくらいの推理は造作もない

（ん～……三人とも諦めて帰ってくれないかなぁ）

事情はどうあれ、今は亮とふたりきりでの外出――つまりデートである

亮はどう思っているかはわからないがこの際置いといて、シャルロットは心の底からそうだと主張したいのである

（で、でも、さすがに同じ個室で着替えはやりすぎたかなぁ……）

ぼっと顔を赤くしながら、背中越しに亮の姿を確認する

向こうも大概対応に困っており、上を向いたり、下を向いたりと落

ち着きがない

（ううっ……変な子だって思われてないよね……？）

いくらなんでも異性と同じ個室で仕切り無く着替えているのである
しかも一度完全に裸になるのだから、恥ずかしくないわけがない

ぎゅっと、胸元のアクセサリー――ＩＳ『リヴァイヴ』の待機形態で、十字マークのついたネックレス・トップ――を握りしめる

（で、でも、亮ってかなり鈍いし、これくらいしないと……ああもうっ、勢いでしちゃえ！）

シャルロットは真っ赤になった顔でそう決意をすると、下着を脱いで脚から抜き取る
それを服の上に重ねると、裸の体に水着をまとっていった

「い、いいよ……」

「お、おう……」

見てもらうために着替えたので当然なのだが、早速亮の視線を体に感じてシャルロットは落ち着かなくなる
ごまかすように組んだ指をもじもじと動かして、亮の感想を今か今かと待ちわびた

「……」

肝心の亮といえば、さすがにこんな密閉空間で女子とふたりきり＆生着替え＆水着御披露目の三連コンボに困っていた――というよ

り照れていた
（り、亮ったら何で黙ってるんだろう……み、水着が変だったかな？あ改めて見ると、これって結構大胆な水着だよね……）
セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げるという構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸のその谷間を強調するようにできている
「あ～……その悪くないんじゃないか？シャルロットの髪の色にもあって俺は可愛いと思うぞ……／／／／」
ちらちらとシャルロットの水着を見ながら真面目に答える亮
さすがに凝視して水着を見る余裕はないようだが、しっかりと答えるのが亮らしいといえばらしい
「じゃ、じゃあ、これにするねっ」
「そ、そうか。じゃあ俺は出るから」
これ以上、この空間にいたくない亮はドアを開ける
「えっ？」
「はっ？」
「ええっ？」
「えええっ！？」
上から山田先生、俺、箒、一夏の順で声をあげた

思いもよらぬ再会に目を点にする四人
そして、後ろでは状況に気がついた千冬が頭を押さえる

「何をしているバカ者が……」

次の瞬間、、軽いパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだましたのだった

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室にふたりで入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すみません……」

ぺこりと頭を下げるシャルロット

「むう……私もあれくらいしないとダメなのだろうか……」

「？箒、なにか言ったか？」

「い、いや！何も言っていないぞ！」

なにやらぶつぶつと話している一夏と箒
まあ、そこは置いとくとしてだ

「どうして四人がここに？」

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

「じゃあ、真耶さん」

「は、はい……！／／／／」

あれ？何故か顔を赤くして返事をしたけどやっぱり下の名前で呼ぶのはヤバかったか？

「まったくお前は……」

今度は千冬さんに睨まれたぞ

「ところでなんでこのメンツ何ですか？」

「たまたま、私と山田君でここに向かっていたら一夏と篠ノ之と出会ったのでついでにな」

ちなみに声をかけたのは一夏らしい

どうして一夏は箒といたのかはわからないが

「ところで――そろそろ出てきた方がいいんじゃないか？」

ギクッという音が聞こえた気がする

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計らっていたのですわ」

苦しい言い訳をありがとうってな訳で柱から鈴とセシリアが登場した

「なにをこそこそしているのかと思って、ずっと気になってたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですわ！まったく、一夏さんのデリカシーのなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

危なかった。今、俺も同じことを言おうと思っていたよ

言わなくて良かった

「さっさと買い物を済ませて退散するとしよう」

ふう、ため息混じりにそう言ったのは千冬さんだった

手にしているのはどうやら水着で、千冬さんも真耶さん（で良いよな？）同様に土壇場準備らしい

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので凰さんとオルコットさん、篠ノ之さんついてきてください。それに三崎くんにデュノアさんも」

何かひらめいたような顔をしたかと思ったら有無を言わせず千冬さんと一夏を置いて――なるほど

「姉弟水入らず、って訳ですね」

「はい！ふたりとも学園では話す機会などほとんどないでしょうし。こんなときぐらいは、て」

うん、やっぱりこの人は優しいな

「それじゃあ、アタシたちは……」

「ええ、亮さんがシャルロットさんとふたりきりで何をしていたのかじっくりと聞かせていただきましょうか」

オオッといきなり修羅場へと変わりやがった

「断固ことわる！！」

「「逃がすか！！」」

「あっ！三人とも走っちゃダメですよ！」

真耶さんには悪いが捕まったら面倒だ。つか、殺される

「僕達も行こっか」

「いや、私もシャルロットに試着室でなにをやっていたか、詳しく聞かせてほしい」

「えええっ！？」

箒の言葉にその場から逃げ出したくなったシャルロットだった

第５９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！

感想お待ちしております

第６０話

山田先生が亮兄たちを連れていって俺は千冬姉とふたりきりになった

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「え？」

「ふぅ……言っても仕方がない、か。一夏」

「な、なんですか？織斑先生」

久しぶりに下の名前で呼ばれたので、どうにもぎくしゃくした反応になってしまう

そんな俺はよほどおかしい顔をしていたのか、千冬姉が苦笑いを浮かべた

「今は就業中ではないからな、名前でいい。私たちはこの場ではただの姉弟だろう」

「わかった」

「で、一夏。どっちの水着がいいと思う？」

そう言って千冬姉が見せたのは専用のハンガーにかけられた水着二着

片方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着

もう片方はこれまた対極で、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白水着

どちらもビキニで、肌の露出具合はかなり高そうだった

（これは……黒の方かな）

と、そこまで考えてふと気がつく

もしかするとこっちの黒水着だとおかしな男たちが寄りついて来るんではないだろうか

というか、百パーセント寄ってくるだろう

白水着の方も互角といえば互角だが、ストイックな分声をかけづらいに違いない

「――白の方」

なるべく自然を装ってそう言ったつもりなんだが、それに対する千冬姉の答えはまだ苦笑いを含んでいた

「黒の方か」

「いや、白の――」

「うそをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる」

う……

すげえ簡単に見抜かれていた

「まったく、弟が余計な心配をするな。大体、私がその辺りにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

「いや、見えないけど……でも千冬姉、彼氏とか作らないのか？

亮兄とかさ」

「……なぜ、そこで三崎の名前が出てくる」

「いや、最近千冬姉の亮兄に対する接し方が変わったなぁ、と思ってさ」

まあ、亮兄からしたら、どこがだよ?て文句を言われそうだけど俺にはわかる

「ふん。気のせいだ。昔からあいつの接し方はこんな感じだ」

「いやいや。昔の千冬姉は亮兄を見ただけでものすごく睨みつけていたじゃんか」

それはもう目の前に敵が現れたかのような表情だった

「……まあ確かにな……だが、それは三崎が悪い」

なんて理不尽なんだろうか、亮兄はなにもしていないのに

「三崎はお前にいろいろと悪影響なことばかり話していたからな。喧嘩の仕方や人を騙す方法とかな」

うっ……

確かに教えてもらったな

今考えれば亮兄が教えてくれたことはためになるものはそんなになかった

でも若気の至りなのか、俺は熱心に聞いていたよ

「なんか亮兄って人を引きつける何かを持っているんだよな。千冬姉もそう思うだろ?」

「……さあな……」

腕を組んでそっぽを向く千冬姉

千冬姉もわかってる。亮兄は人を引きつける何かを持っているって

「そういえば、一夏は三崎の秘密を知ったのだな?」

「……うん。正直信じらんない話だけど、実際に目の前で起こっているからね……」

亮兄はＩＳ学園ではシャルロットにバレるまでは千冬姉にしか自分のことを話していなかったらしい

「水くさいよな。話してくれても良かったのに」

「お前たちに心配をかけたくなかったのだろ。察してやれ」

「ああ、わかってる。でも千冬姉にだけ話していたってことは千冬姉はそんなに亮兄から頼りにされているってことだよな」

「むぅ……」

あれ?千冬姉のツリ目がさらにつり上がった気がする

「それは私と三崎は教師と生徒、という関係だからだ」

「だからといって、全部は話さないだろ?千冬姉を信頼していなか

ったら、全部話したりなんてしないよ」

亮兄はそういう人だからね

「千冬姉は亮兄のことをどう思ってるんだ？好きか嫌いで答えてよ」

「む……卑怯だろ、その質問は……」

おっ！珍しく千冬が動揺しているぞ

「私は――」

千冬姉が次の言葉を話そうとした瞬間だった

「はあ…はあ…なんとか逃げ切ったぞ……って、ん？」

息を切らした亮兄が現れた

なんてタイミングの悪い

「あ、あれ？お邪魔だったか？」

「いや、邪魔ではない。むしろ良いところにきた」

千冬姉の言葉に意味がわからないといった表情を見せる亮兄

くそっ、もう少しだったのに

「亮兄はどうしたんだ？そんなに慌てて」

「大方、オルコットたちに追いかけられていたんだろ」

「ぐっ……」

苦虫を噛み潰した表情をする亮兄どうやらそうらしい

「まあいい、三崎。お前はどっちの水着がいいと思う」

「ん？んん～……両方似たような水着なんだな」

腕を組ながらそう言う亮兄

「どっちもいいんじゃね？」

「私はどっちかと聞いているのだが」

「んじゃ、白かな？黒も悪くないけど、機能性重視な水着の方が泳ぎやすいだろうし」

ありゃ、俺と意見が割れたな。俺的には亮兄も黒と選ぶと思ってたんだがな

「まあ、千冬さんならどっちもよく似合ってると思うけど」

「……そうか」

あれ？千冬姉の反応が薄いな

それにちょっと機嫌悪そうに……いや恥ずかしそう？

今まで俺も見たことがない表情を見せる千冬姉

「そういえば、お前たちはどうなんだ？」

「え？俺？」

「何が？」

「何がも何も、お前たちは彼女を作らないのか？幸い学園内には腐るほど女がいるし、よりどりみどりだろう？」

よりどりみどりって……

そういや昔、それって色の一種だと思ってたわ。みどり、きみどり、よりどりみどり

「今のところその気はねえな」

亮兄が先に答える

「ほう？では、ラウラなんかはどうだ？色々と問題はあるだろうが、あれで一途なやつだぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「いや、だから……」

「それに、キスした仲だろう？」

ぐっと動揺する亮兄

確かにラウラとは俺たちの目の前でキスをしている

あれにはかなり驚いた

狼狽している亮兄がそんなに面白かったのだろうか、さっきまで苦笑だった千冬姉はいつの間にか微笑をたたえていた

「まんざらでもないか？」

「いや、あれはだな！その……あいつがいきなり――――／／／／」

「ふむ、いきなりでなければ大丈夫だ、と」

「ちげえよ！！」

「では、ラウラにキスされたのは吐き気がするほどに嫌だったか？」

「いや、そういう訳ではなくだな……」

「では、どういう訳だ？」

どんどん亮兄を追い詰めていく千冬姉
あれ？これなら鈴たちに捕まっていた方が良かったんじゃない？

「その……キスは…だな…もっと雰囲気がある場所でロマンチックなだな……」

「お前は乙女か……」

はあ、とため息をつく千冬姉
うん。それは俺も同意見

「まあいい。容姿は好きな方か？嫌いな方か？」

「嫌いではない。あのサラサラの綺麗な銀髪や整った顔、そして透き通った綺麗な目……俺は好きかな」

「おおっ……」

亮兄の真っ直ぐな答えに俺は思わず感嘆の声をあげる

「では、ラウラは可愛いと？」

「そうだな、ラウラは可愛い……ってなんてことを言わせやがる！！／／／／」

「ついさっき、もっと恥ずかしいことを口走っていた奴が何を今更恥ずかしがっている」

確かに

可愛いよりも、さっきの褒め言葉の方が恥ずかしい

「一夏、お前は？」

「ん？俺はそういうのはよくわかんねーって……」

「ならば私の心配をする前に自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟に気を遣われるような歳ではないさ」

「あーもう、わかったよ。変な心配はしない。これでいいだろ？」

「ああ。それでいい」

「それじゃあ、俺は心配してもいいんだよな？」

千冬姉がレジの方に歩いていこうとすると、亮兄が千冬姉に向かってそんなことを言ってきた

「……勝手にしろ」

そう言って千冬姉はレジの方に歩いていった
横顔がちらっと見えたがその顔はどことなく嬉しそうだった

第６０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！

今回は初めて？の一夏視点でした
そして次回はあいつらが・・・・

感想お待ちしております

第６１話（前書き）

誤字報告が多発してしまいすぐに書きなおしました

本当にすみませんでした！！

第６１話

時間は十分ほど前に遡る

鈴・セシリア・ラウラの三人で始まった追跡トリオだったが、どうにもシャルロットの反応に比べて亮があまりにも普段通りすぎるため、全員がうすうす気づき始めていた

『……ああ、いつものアレか。唐変木・オブ・唐変木ズ、三崎亮か』

となると、ラウラとしては今にもバレそうな尾行をする必要もないそう思って鈴とセシリアから離れて、色とりどりの水着が並ぶ売り場へと移動した

（ふむ。そういえば私も水着を持っていなかったな）

しかしまあ、学園指定のものがあるから別にいいかと考えるラウラ

ちなみに、ＩＳ学園の指定水着というのは絶滅危惧種を通り越して保護指定種へとランクアップした紺色の芸術ことスクール水着である。ちなみに名札つき

（まあ、泳げればなんでもいいだろう。あの水着は機能的に優れている。代わりのものは必要ないな）

そう思い、冷めた瞳で水着の列を眺めるラウラだったが、次の瞬間その白い肌がボッと赤く染まった

「ラウラは可愛いよ」

いきなり、亮の声が――その言葉が聞こえたのであったどうも千冬、一夏の三人で話しているというところまでは把握していたのだが、盗み聞きをする趣味もないので会話を意識していなかったところへの不意打ちである

「……」

突然の言葉に顔は真っ赤になって、心臓の動悸は一気に四速ギアを入れたかのように早くなっている

褒めるがいい――と何度も一夏に言っていたラウラであったが、実際に褒めてもらったことはあまりなく、言われてもそんなに心はこもっていなかった。嘘ではないし、ラウラも無理矢理言わせている感があったので何も言わなかった

そこへきて、突然のこの言葉。しかも、たまに聞く心があまりこもっていない言葉なんかではなく、心の底からの言葉なのだから、冷

静沈着・ドイツの冷氷と呼ばれたラウラが取り乱すのは仕方がないことだった

（か、か、可愛い……私が、可愛い……可愛い……）

意味もなくキョロキョロと周囲を見やってから、ラウラは胸に手を当ててまぶたを閉じる。それは普段なら必要としない意識の集中法で、コールする番号を何度も間違えながらラウラはＩＳのプライベートチャンネルを開いた

同時刻、ドイツ国内軍施設
そこでは現在、ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』――――通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた

ドイツ国内の総ＩＳ数は十機なのだが、そのうち三機を持っているのがこの部隊
そして、それは名実ともに最強の部隊であることの証明でもある

眼帯をした黒ウサギが部隊章であるこの隊は隊長のラウラを始め全員が肉眼へのＩＳ用補佐ナノマシン移植者だ
元々、ラウラの眼帯は機能制御装置（リミッター）であったのだが、現在では全員が肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着していた

「何をしている！現時点で三七秒の遅れだ！急げ！」

怒号を飛ばしているのは副隊長であるクラリッサ・ハルフォーフ年齢は二十二

部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』

その専用機『シュヴァルツェア（黒い）・ツヴァイク（枝）』に緊急暗号通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた

「――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

『わ、私だ……』

本来ならば名前と階級を言わなければいけないのだが、向こうの声が妙に落ち着き無く揺れているためクラリッサは怪訝そうな顔をする

「ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、なにか問題が起きたのですか？」

『あ、ああ……とても、重大な問題が発生している……』

その様子からただごとではないと思ったクラリッサは、訓練中の隊員へとハンドサインで『訓練中止・緊急招集』を伝える

「――部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない……』

「では？」

『クラリッサ。その、だな。わ、わ、私は可愛い……らしい、ぞ』

「はい？」

それまでの規律整然としたクラリッサの声が半オクターブほど高くなる

ついでに、きりりっとした口調は突然の意味不明な事態に対して若干間の抜けたものへと変わっていた

『り、りょ、亮が、そう、言っていて、だな』

とそこまで聞いてクラリッサはピンときた

「ああ、隊長が好意を寄せているという彼ですか」

『う、うむ……ど、どうしたらいい、クラリッサ？こういう場合は、どうするべきなのだ？』

「そうですね……まずは状況把握を。直接言われたのですか？」

『い、いや、向こうはここに私がいるとは思っていないだろう』

「――最高ですね」

『そ、そうなのか？』

「はい。本人のいない場所でされる褒め言葉にウソはありません」

『そ、そうか……』

さっきまで動揺十割だったラウラの声が、クラリッサの言葉でぱあっと花開くように明るいものへと変わる

ちなみに、現現在集めた隊員たちには、クラリッサがプライベート・チャンネルをしながら筆談で状況を伝えている

【隊長の片思いの相手に脈アリ】

「おおおお～！」

と十数名の乙女が盛り上がった声を漏らす

――ちなみに、この部員でラウラは人間関係に多大な問題を抱えていたのだが、先月のＶＴ事件の直後に『好きな男ができた』という相談をクラリッサに持ちかけたときから全てのわだかまりが解けて消えた

実際、その前に亮の『人と触れ合うことで強くなる』という言葉が大きいのかもしれない

そのときの様子を断片的に伝えると――

「えええっ！あ、あの隊長に、好きな……男！？」

「私は織斑教官を本気で好きなのだとばかり……！」

「そうだろう、そうだろう。私もそう思っていた。しかしだな、あの隊長が、あの、隊長がだぞ？『お、男の気を引くにはどうしたらいい……？』と言ったんだ！」

「「「きゃああ～っ！」」」

「だから私は真摯に教えた！日本では気に入った相手を『自分の嫁にする』という風習があるということを！」

「さすが副隊長！日本に詳しい！」

「当然だ。私は伊達や酔狂で日本の少女漫画を愛読しているわけではない！」

「か、かっこいい……！」

「そんなかっこいい副隊長が好きです！」

「でも、可愛くなった隊長はもっと好きです！」

「そうだろう！私もそうだ！ああっ、どうして本国にいる間にこうして心を通わせあえなかったのだろうか！」

「たしか、こういうときに日本では赤いお米を炊くんですよね！？」

「そうらしい。おそらく、血よりなお濃いものがあるという教訓なのだろうな」

「さすがは日本、痺れます！」

「憧れます！」

「よし。部隊員諸君、現時刻をもって今日の訓練は終了する！今すぐ兵舎食堂に向かい赤い米を炊くぞ！」

「「「はい、副隊長（おねえさま）！」」」

――――こんな感じである

さすがは十代女子（一部二十代女子）、いがみ合うのもささいなことなら仲直りもまたささいなことで起こるのであった
まあ、日本の文化を色々と間違っているのもささいなことであろう

『そ、それで、だな、今、その、水着売り場なのだが……』

「ほう、水着！そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？」

『う、うん？学園指定の水着だが――』

「何を馬鹿なことを！」

『！？』

『たしか、ＩＳ学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くはない。悪くはないでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう」

なぜ、そんなに熱く語れるのだろうか？
このクラリッサ・ハルフォーフは色々と日本の文化を勘違いをしている

「だがしかし、それでは――」

『そ、それでは……？』

ごくり、ラウラがつばを飲む

「色物の域を出ない！」

『なっ……！？』

ピシャーンとラウラの背景に雷が落ちた

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。ですが、そこで逃げるようでは『気になるアイツ』から前には進まないのです！」

『な、ならば……どうする？』

「フッ。私に秘策があります」

言葉にも熱が入り出すクラリッサ

そして、その目がキュピーンと光った

おまけ

「そういえば、隊長が好きになった男とはどんな男なのでしょうか？」

ラウラの水着選びの最中。ふと、隊員がそう呟く

「今、諜報隊員から送られてきた情報ですけど、この三崎亮という男は、これといって秀でたものは持っていません」

「一体どうやってあの隊長の心を射止めたのでしょうか……？」

「極秘情報だが、この三崎亮は男で二人目のＩＳ操縦者らしい」

「「「ええええっ！」」」

クラリッサの発言にそこにいる隊員たちは驚愕した

何故、それをクラリッサが知っているのかと言うと――――

『こ、こら！それは内緒だと言ったであろう！』

慌てた声のラウラが割り込んでくる

どうやら他の隊員たちにも聞こえるようにしたようだ

「良いではありませんか。我々はこのことを口が裂けてもいいません。ご安心を」

『むぅ……』

どうやらラウラが動揺していて、口を滑らしたらしい

「でも、だからといって隊長がなびくわけは……」

「もしかして何か弱みを握られたとか――――」

『違う！！』

「「「！？」」」

大声で隊員たちを怒るラウラ

『嫁（りょう）は私を孤独・復讐の殻から救ってくれた恩人だ！次、そんなこと言ってみろ。殺すぞ……』

ドスの利いた声で隊員たちに言うラウラ

『そ、それに嫁はかっこいいし、優しいし、少しつれないがそのときに見せる困った顔が可愛くてだな……／／／／』

しばしの沈黙

「「「きゃあああああああああ！！！！」」」

甲高い女子隊員たちの歓喜の声が響きわたる

「隊長、素敵です！素敵すぎます！」

「ああ……隊長のこんな発言が聞けるなんて感無量です！」

「そして、はにかんでのろける隊長はもっと可愛いです！！」

『……／／／／』

「よし！全員、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長の恋を応援するぞ！！」

「「「はい！！」」」

「そして、もし三崎亮が隊長を泣かせたそのときは――」

「撲殺します！」
「刺殺します！」
「射殺します！」

「そして、社会的抹殺だ！！」

「「「はい！！」」」

さらなる一致団結を見せる黒ウサギ隊
しかも、下手したら亮が黒ウサギ隊によって抹殺されてしまうという恐ろしいフラグが立ってしまった

第６１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！

感想お待ちしております

第６２話

「海っ！見えたぁ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなぁ。なあ、亮兄」

俺の隣にいる一夏は海を見ながらそう言ってくる

「ああ、そうだな」

「亮兄……せめて窓を見ながら言ってくれよ」

ちなみに俺は腕を組みながら目を瞑っている。眠っているとも言うがな

「うるせえな。眠いんだから仕方ねえだろ」

「また夜遅くまでゲーム（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）をしていたのか？」

「ちょっと八咫に呼ばれてな」

「……スケィスのことか……何かわかったのか？」

「まあ、注意事項くらいかな」

そのせいで臨海学校初日に寝不足だよ

「ふんふ～ん♪」

そんな眠気という脱力感に襲われているよそに、通路を挟んで向こう側の席に座っているシャルロットは嬉しそうな表情で手元に視線をやっている

「シャルロット。それ、そんなに気に入ったのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

左手首にシャルロットがしているのは、俺がプレゼントしたやつだ
理由は先週買い物に付き合ってくれたお礼である
シャルロットは銀色のそれをにこにこと眺めては、時々思い出し笑いでもするかのように笑みを漏らす

シャルロットに『亮が僕に似合うと思うのを選んで』と言われて選んだが
まあ、気に入ってくれてなによりだ

「うふふっ♪」

「まったくシャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

見えないが俺の後ろの席に座るセシリアは若干機嫌が悪そうに思える

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……」

セシリアの言葉もなんのその、笑顔で返すシャルロット
そこまで、気に入ったとは……嬉しいが、少し恥ずかしい

「昨日、途中にふたりだけで抜けたと思ったら、まさかプレゼントとは……不公平ですわ」

「そういうと思った……ほらよ」

俺は椅子の上から乗り出して俺はあるものを投げ渡す

「えっ、あの、これは……？」

「シャルロットだけにあげたらお前らがそう言うと思って買っておいたんだよ」

ちなみにセシリアにあげたのは青で基調に花柄がついた手帳である

「セシリアって手帳によくなんか書き込んでいるからよ。アクセサリーよりもこういうのが良いと思ったんだ」

「あ、ありがとうございます／／／／」

セシリアは大事そうに手帳を両手で抱えたいや、そんなにたいそうなものじゃねえからそんなに大事そうにしなくてもいいと思うのだが……

「ラウラ、お前にもあるが――」

「……」

さっきからそうなのだが、セシリアの隣でずっと大人しくして座っているラウラ

ときどき挙動不振になって周囲をキョロキョロ見ている

「おい？ラウラ？」

「……」

ダメだ。全然反応がない。一体どうしたっていうんだよ

「ラウラ！」

「！？なっ、なんっ……なんだ！？ち、近い！馬鹿者！」

「うおっ！？」

何故か両手で追いやられてしまう

何故かはわからないがラウラの顔がわずかに赤くなっていた

（仕方ない。プレゼントを渡すのは後にしよう）

と思った俺は自分の席に着いた

鈴は違うバスだから渡せない

という訳で残りは前の席に座る箒だ

「箒」

「べ、別に私は不公平だとかは思っていないぞ」

「どうだろうな？昔、一夏にお菓子をあげたとき、私にも寄越せとか言って駄々をこねたときもあったじゃねえか」

「あったあった！あのときは最終的に涙目になってたよな」

「そ、そんなこと私は知らんぞ！！／／／／」

怒りからか図星だからか顔を赤くして怒号をあげる箒

「わかったわかった。だから黙って受け取れ」

「お前絶対にわかって――これは！？」

俺が箒にプレゼントをあげる。プレゼントはキーホルダーだが、ただのキーホルダーではない

「チムチムのキーホルダー……だと！？」

「お前、チムチム好きだったろ？だから、わざわざ取り寄せた」

「取り寄せた？」

「一応、俺、ＣＣ社に知り合いがいるからさ」

令子さんに頼めば送ってくれるからな

「わざわざすまないな……」

別についでだし……

「むっ？何がついでなのだ？」

あっ！ヤバい。口に出ていたか！

「いや、なんでもないんだ！なっ！亮兄！」

「お、おう！」

「？」

箒は首を傾げたがキーホルダーが気に入ったのかすぐに席に座りそのキーホルダーを眺めていた

（亮兄！ダメじゃないか！危うくバレそうになったじゃないか！）

小声で話しかけてくる一夏

（悪い悪い。つい口が滑っちまった）

（頼むよ、亮兄。例の作戦をバレるわけにはいかないんだからさ）

（わかってるさ）

一夏のいう例の作戦とは、実はこの臨海学校中に箒は誕生日を迎えるそこで一夏と俺は『びっくり誕生会！』をしようと計画していた

（でもよ。何で他のみんなには言わないんだ？）

（箒って騒がしいのはあまり好きじゃないからさ。幼なじみの俺たちで祝おうと思ってさ）

（お前が良いなら別に良いけどさ）

それでも祝うなら大勢の方が嬉しいんじゃないかと俺は思うが

「そろそろ目的地に着く全員ちゃんと席に座れ」

千冬さんの言葉で全員がさっとそれに従う

着くまでは寝ていよう

第６２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！

感想お待ちしております

第６３話

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着
四台のバスからＩＳ学園一年生がわらわらと出てきて整列した
つか一年生ってこんなにいたんだな。知らなかった

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」」」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする
この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将が丁寧にお辞儀をした

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。あら、こちらが噂の……？」

女将がふと、俺と一夏の方を見て千冬さんにそう尋ねる

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分け難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」

ぐいっと一夏の頭を押さえる。俺はやられる前に頭を下げる

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「三崎亮です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そう言って女将はまた丁寧なお辞儀をする
女将なだけあって気品のあるものだ

「不出来な弟とバカな男でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんと三崎さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

まて、いつそんなに手を焼かせた
……よく考えれば思い当たる点が多い気がする

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう

「ね、ね、ねー。ミッチーにおりむ～」

「うおっ！？」

変な呼び方をしながら飛びついて来たのは布仏だった
最近、よくこうやって飛びついてくる
びっくりはするがそんなに衝撃はこない

「ミッチーとおりむ～って部屋どこ～？一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～」

その言葉で周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかった
普通は男子が女子の部屋に行きたがるものなんだが、俺と一夏は残念ながらそんな気持ちは一切持っていない

「いや、俺も知らない。亮兄は？」

「同じく。廊下にでも寝かされるんじゃね？」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～」

「止めとけ、寝違えるぞ」

ちなみに俺たちと女子を一緒の部屋で寝泊まりさせるわけにも行かないということで、俺と一夏の部屋はどこか別の場所が用意されるらしい
らしいというのも、山田先生がそう言ってただけで明確には聞いてないからだ

「織斑、三崎、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬さんのお呼びだ。急がないとまた出席簿アタックを喰らってし

まう
俺は布仏に「じゃあな」と言って別れた
「それで、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんですか？」
「黙ってついてこい」
俺と一夏は黙って千冬さんの後をついていく
「ここだ」
「え？ここって……」
「教員室……だな……」
ドアにばんと張られた紙は言った通り『教員室』と書かれている
「最初は織斑と三崎の二人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」
はぁ、とため息をついて千冬さんが続ける
「結果、織斑は私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」
「そりゃまあ、そうだけど……」
わざわざ遊ぶために鬼の寝床に入ろうとする勇者はいないだろう

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

千冬さんはそう言って、俺はあることに気づいた

「『織斑は』？それじゃあ、俺は？」

「お前はこの隣の部屋だ。同室の者はまだ来ていないみたいだから、とりあえず入れ。言わないといけないこともあるのでな」

「わかりました」

千冬さんに部屋の中に入る許可が下りた
中はふたり部屋だというのに広々とした間取りになっていて、外側の壁が一面窓になっている
そこから見える風景はこれまた素晴らしく、海が見渡せる

「おおー、すげー」

それ以外にもトイレ、バスはセパレート
しかも洗面所まで専用の個室になっている
ＩＳ学園の寮よりも良い部屋だ

「一応、大浴場も使えるが男のお前らは時間交代だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前ら二人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかりました」

「右に同じく」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「いや、待ってくださいよ。俺はどうすればいいんですか？」

このままじゃ、その同室の人が来るまで待たなくてはいけなくなる

「廊下で立って待っていろ、と言いたいところだが。来るまではここに荷物を置いてもかまわん」

それは助かる

来るまで何もできないのは嫌だからな

「えっと、織斑先生は？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々とある。しかしまあ――」

ごほん、と咳払いをする千冬さん

「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですか」

俺も一緒に選んだ気がするが、まあ弟の意見を優先するのは当然か

「それじゃあさっそく海にでも行こうぜ、亮兄」

「ああ」

俺と一夏はリュックサックに、水着とタオル、それに替えの下着を入れて更衣室へと向かった

第６３話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第６４話

「……」
「……」
「……」

俺と一夏と箒は更衣室のある別館へ向かう途中でばったりと出くわした
それまではまだ良い、問題は目の前の珍奇な光景であった
道ばたに、ウサギの耳が生えているのだ
しかも『引っ張ってください』という張り紙がしてある

「なあ、これって――」

「知らん。私に聞くな。関係ない」

一夏が言い切る前に即否定する箒
なんかわからないけど、俺もなんだか悪寒を感じてしまっている
何なんだ？このウサ耳に何があるって言うんだ！？

「えーと……抜くぞ」

「好きにしろ。私には関係ない」

そう言ってすたすたと歩き去ってしまう箒
俺も出来れば抜かずに無視したいんだが……

俺の願いは届かず、一夏はそのウサ耳を思いっきり引っ張る

すぽっ

「のわっ！？」

簡単にウサ耳は抜けたのだが、力余って盛大にすっころんでしまう

一夏

「いてて……」

「ふぅ……」

「何をしていますの？」

抜いて何もなかったことに一安心した俺

そんなときにセシリアの声が聞こえる

「お、セシリアか。いや、今このウサ耳を――――あ」

セシリアの声の方に視線をやる一夏だが、今の一夏の体勢からだと

……

「！？い、一夏さん！！」

一夏の視線に気づいたセシリアは、ばばっとスカートを押さえて後ずさる

「だ、大丈夫、見えてな――――」

「一夏、何色だった？」

「レースのついた白……って何を言わせるんだよ！！」

「お前が勝手話したんじゃねえか」

しかも、しっかりと見ていやがる

「そ、それで一体何をしていらっしゃったのです？」

「いや、な。ウサ耳が生えていてな……」

「は、はい？」

セシリアは素っ頓狂な声で聞き返す

まあ確かに、そんな説明を受けたらちんぷんかんぷんである

「いや、束さんが――――」

「束……」

その名前を聞いた瞬間、鳥肌が立ってしまう

キィィィィィィン……

ドカ――――――――――ン！

「な、なんだ！？」

いきなり謎の飛行物体が地面に突き刺さった
しかもその見た目というのが――

「「「に、にんじん……？」」」

俺と一夏とセシリアは三人揃ってそう漏らす
しかもいわゆるイラストチックなデフォルメにんじんだ

「あっはっはっ！引っかかったね、いっくん！」

ばかっと真っ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのは変なテンションの女だった

俺はこの人を知っている
この人は篠ノ之束
箒の姉にして、ＩＳ開発者
そして、俺のトラウマである

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

格好はというと、不思議の国のアリスが着ているような青と白のワンピース
一夏の手からウサ耳を受け取って、すぐ装着
相変わらず意味がわからない

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんはどこかな？さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

「えーと……」

どう答えればいいのか目をそらす一夏

「あっ！そうだ、束さん。亮兄のこと覚えてる？」

「亮兄？」

バカ野郎！？そこで話を俺にふんな！
それに――

「知――らない！誰それ？いっくんにお兄さんなんていたかな？」

覚えているはずがない
束さんは興味のない人は例え親であろうと覚えない人である

「ほら、俺と箒が小三のとき一緒に遊んでいた」

「うーん……」

ちらっと俺の方を見る束さん
俺は思わずビクッと体を震わせてしまう
一体何があったのか？だって？聞くな！俺は思い出したくない！

「やっぱり知～～らない！人の顔を覚えるのは箒ちゃんとちーちゃんといっくんで十分だよ！」

「……」

本当にいい加減だ
こんなんで世の中を生きていけているんだから恐ろしい

「それじゃあ私は箒ちゃんを探しに行くね！この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあいっくん。また後でね」

すったったーと走り去ってしまう
まるで嵐のような人だ
ちなみに箒ちゃん探知機とやらはあのウサ耳だったらしく、ダウジングロッドよろしく箒の方角に向いていた
もはやダウジングロッドではない

「い、一夏さん？今の方は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？えええええっ！？い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

ちなみにこの臨海学校では『ＩＳの非限定空間における稼働試験』というのが主題だ
そのため各国から代表候補生宛てに新型装備が送られてくる
だが、一応部外者は参加できない決まりになっている。もちろん侵入もできない

そこを束さんは普通に入り込んできた
一体なにしに来たんだか

「ところで亮さんは酷く動揺していましたが……」

「ああ……亮兄は束さんに色々と酷い目にあわされたからね」

言うな！あれはもう二度と思い出したくないんだ！
束さんが新作のライフルで木に張り付けた俺の頭の上に乗せたリンゴ撃ち抜いたり、インフルエンザを一分で治す秘薬を作ったとか言って俺をインフルエンザにかからせて飲ませようとしたり……他にも……ダメだ！これ以上はダメだ！！

「く、苦労なさっていますのね……でも、どうして亮さんだけがそんな目に？」

「まあ、色々あってね……」

一夏も遠い目をしてそう答える
できる限り一夏も思い出したくないようだ

「まあ、いいや。箒に用があるみたいだったし、今のところ関係なさげだし。ところで俺たちは海に行くけど、セシリアは？」

「え、ええ、わたくしも海へ。そ、そこでですね、亮さん」

こほんこほんと咳払いするセシリア
んだよ？俺今、かなりナーバスなんだが

「せ、背中はサンオイルが濡れませんから、亮さんにお願いしたいのですけど……よろしくて？」

「は？友達に塗ってもらえばいいじゃねえか」

「え、ええまあ、そうですけど、できれば……その、亮さんに……」

セシリアはもじもじとしながら落ち着かなさそうに視線を泳がせるつか、何で俺なんだよ

「一夏に塗ってもらうんじゃダメなのかよ？」

「却下です！」

どん、と即断されてしまった

おいおい。それは一夏に失礼だろ

「仕方ねえな。やってやるよ」

「ほ、本当ですね!?後からやっぱりナシは認めませんわよ!?」

なんだろう。セシリアの必死さに俺は嫌な予感しかしなくなってきた

しかし、今更無理とは言えない

「わかったよ。じゃあ、また後でな」

「ええっ。また後で!!」

こくんこくんと深く二回うなずいて、セシリアは別館へ向かって走り出す

こら、廊下は走るな

「んじゃ、俺たちも行くか」

「おう」

当然だが男子である俺たちは別館の更衣室でも一番奥を使用するようにと言われている

「はあ……」

一番奥の更衣室――ということは女子の更衣室を横切るわけなんだが

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの～？」

「きゃあっ！も、揉まないでよぉっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～」

「そう？アメリカでは普通だと思うけど」

「……」

こういう話題が平然と飛び交っている
そして俺はこれが苦手だ。クーンとかなら大喜びだろうが、俺には無理だ
一夏も苦手らしく下を向いてやや早足になっている
もちろん俺もすぐにその場を立ち去り、男子更衣室へ
男の身支度なんて他愛もない会話をしているうちに済んでしまう

「あ、織斑君と三崎君だ！」

「う、うそっ！わ、私の体変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「わ、わ～。体かっこい～。鍛えてるね～」

「織斑君に三崎君、あとでビーチバレーしようよ～」

「おー、時間があればいいぜ」

「ああ……」

更衣室から浜辺に出てすぐ、ちょうど隣の更衣室から出てきた女子

数人と出会う
各人、可愛い水着を身につけといて、その露出度は目のやり場に困る

「あちちちっ」

砂浜に向けて一歩踏み出した一夏は、七月の太陽がここぞとばかりに熱した砂に足の裏を焼かれていた
ちなみに俺はサンダル装備なため平気だ

波打ち際へと向かうと、ビーチにはすでに多くの女子生徒が溢れている
肌を焼いている子もいればビーチバレーをしている子、さっそく泳いでいる子など様々だ

「よっ、と……」

一夏は準備運動を始める
確かに準備運動は大事だな
だが、俺は面倒だからしない

「亮兄。ちゃんとしないと溺れちゃうぞ」

「わかったよ……」

一夏にそう言われ、しぶしぶ準備運動を始める
まあ、泳ぐのも久しぶりだからちゃんとしないとヤバいか

「りょ～～お！」

「ん？うおっ！？」

「アンタたち真面目ねぇ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったんなら泳ぐわよ」

「な、なな／／／／」

いきなり飛びついてきたのは鈴だった
ちなみに着ているのはスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白のストライプで、へそがでているやつだ

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって溺れてもしらねえぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そうこう言いながら、俺の体をしゅるりと駆け上がって肩車の体勢になる
こいつ、前世は猫か猿だろ！
って、そうじゃねえ！

「おい、鈴！降りろ！」

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね、亮」

「ふざけんな！いいから降りろ！つか、何で登る！／／／／」

「うーん……そこにアンタがいるから？」

どこかの登山家みたいに言うな。そして俺は山じゃねえ！

「そ、そんなこと言ってると本当に溺れたとき助けねえからな！／／／」

「平気だも～ん。あたしの前世は人魚だからね」

にへへっ、と笑ってみせる鈴

たく、こいつは……

「あっ、あっ、ああっ！？何をしてますの！？」

と、そう言ってやってきたのはセシリアだ

手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている

こっちは鮮やかなブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオが優雅さを醸し出している

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ」

「ごっこかよ」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格持ってないし」

「うーん、そう言われるとそうか」

「でしょ？まあ、溺れている子がいたら助けるけどね」

「わ、わたくしを無視しないでいただけます！？」

そして、人の頭の上で会話をするな！

一夏も普通に話しやがって

「とにかく！鈴さんはそこから降りてください！」

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいなことを言って……！」

セシリアがざくっ！とパラソルを砂浜に刺す

なんか知らないが怒りがこもっていやがる

「なになに？なんか揉め事？」

「って、あー！み、三崎君が肩車してる！」

「ええっ！いいなぁっ、いいなぁ～！」

「きっと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

騒ぎを聞きつけた女子が何を勘違いしたのか俺に肩車をしてもらおうと詰めかけてくる

ヤバい！鈴だけでもヤバいのに、こいつらを肩車したらいろんな意味でヤバい

「り、鈴。降りろ！誤解が広まる」

「ん。まあ、仕方ないわね」

よっ、と俺から飛び降りる鈴

ひらりと手のひらで着地して、そのまま前方返りで起立
やっぱり鈴の前世は猫か猿だな
つうか、何で鈴はあんなことをしたんだ？

「鈴さん……？今のはいささかルール違反ではないかしら……？」

セシリアはぴくぴくと引きつった笑顔を浮かべている
ルール違反？

気になったが俺は、やってきた女子に「そんなサービスはしていない」と説明するのでそんな余裕はない
くそ、鈴のせいだ

「そんなこと言って、どうせセシリアだって一夏になにかしてもらうんでしょ？じゃあいいじゃん。ねえ？」

「いえ、何もしてもらわないんだ。じゃ、あたしが――」

「し、してもらいますわっ！亮さん、さっそくサンオイルを塗ってください！」

「「「え！？」」」

もう少しで誤解だと説得できそうなところで、セシリアの言葉に女子が声を揃える
くそ、何でそんな大声で言うんだ

「私サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる」

塗ってあんならわざわざ俺の手間を増やすな！

「コホン。そ、それでは、お願いしますわね／／／／」

しゅるりとパレオを脱ぐセシリア

なんだかその仕草が妙に色っぽく、反射的に体ごと視線をそらす

「あ、あのだな……背中だけだよな？」

「り、亮さんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ／／／／」

「ば、バカ！なに言ってやがる！？／／／／」

んなことできるか！？

「でしたら――」

いきなりセシリアは首の後ろで結んでいたブラの紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる

「さ、さあ、どうぞ？／／／／」

「お、おう／／／／」

紐解いた水着はシートと体に挟まれているだけの状態で、セシリアは無防備な背中を俺に見せている
くそ！やっぱりこれはいろいろとヤバいだろ！？
でも約束したからにはちゃんとやらないと。心頭滅却すれば火もまた涼しだ。集中しよう

「塗るぞ／／／／」

「ひゃっ！？」

「ど、どどどどうした！？」

はい！速攻で集中力が途切れたよ！

「り、亮さん、サンオイルはすこし手で温めてから塗ってくださいな」

「わ、悪い。こういう経験は初めてなんで緊張しちまって……／／／／」

「そ、そう。初めてなんですの。それでは、し、仕方がないですわね／／／／」

何故かセシリアの声がちょっと嬉しそうに聞こえるんだよ。俺がこんなことをよくやるように見えたのか？
ともあれ、俺は言われた通りサンオイルを手に取ってから揉むようにして温める
それが程良く温度を持ったところで、改めてセシリアの体に塗っていった

（……セシリアの肌ってすごくすべすべしてんな……学園でいつも見てるけど、やっぱり肌も綺麗だし触ってるだけで気持ちいい――ってなに考えてんだ、俺は！？）

「ん……いい感じですわ。亮さん、もっと下の方も」

「せ、背中だけでいいよな？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も／／／／」

「なっ！？」

それはさすがにヤバいだろ！

サンオイルを塗るからって、脚と……お尻を触るのは――

「はいはい、あたしがやったげる。ぺたぺたっと」

「きゃあっ！？り、鈴さん、何を邪魔して――つ、冷たっ！」

「いいじゃん。サンオイル塗れればなんでも。ほいほいっと」

「ああもうっ！いい加減に――」

怒って体を起こすセシリア

そうすると、体から離れていた水着はそのまま下に落ちてしまい――

「あ」

「きゃああっ！？」

あ、危なかった……

俺は咄嗟に回れ右をして大事なところは見ずにすんだ

一夏も同じようにどっか違う方向を向いていた

「あー……ごめん」

「い、い、今更謝ったって……鈴さん！絶対に許しませんわよ！」

「うん、じゃあ逃げる。またね」

ぐいいっ！

「おい！俺まで巻き込むな！たく……セシリア悪い！あと、その、見てないから、さ」

「な、なっ……！／／／／」

さらにボッと赤くなったセシリアは、振り上げた拳をどうにもできずにそのままの格好で固まってしまう

「あと、サンオイルは一夏に塗ってもらえ！」

俺がそう言った瞬間、女子のターゲットが一夏に代わる

「亮兄！それはねえだろ！」

「織斑君！私にサンオイル塗って！」

「私も！」

「私にも！」

「ちょっ、俺はそういうサービスはしていませんから！？」

あっという間に女子に囲まれてしまう一夏をよそに俺は、鈴に引っ張られるままに海へ飛び込んだ

「ぶはっ！おい、鈴！」

「亮、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフェおごんなさいよ。――よーい、どん！」

「なんでそうなる！くそ、待て！」

「あははっ♪待たないよーだ！」

こうして俺はナシ崩し的に鈴を追いかけるハメになった

勝負はともかくこのどうしようもない怒りをぶつけてやる！

第６４話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

感想お待ちしております！

第65話

（セシリアには悪いことしたけど、今回は譲ってもらうわよ）

亮と泳ぎの競争をしながら、鈴はそんなことを考えていた
先月、わざわざ早起きして酢豚のお弁当を作ったときは亮はおいしいと言ってくれて嬉しかったが、どうしても料理を教えてもらっているセシリアが有利
なんだったら自分も料理が下手だったらな、と思ってしまう

（でもまあ、男子にスキンシップは効果てきめんでしょ……でも亮でやるのは初めてなのよね……）

前は一夏にやっていたが、今、鈴が好きな人は亮であり、この行動をするのは初めてであった

（で、でも無理矢理落とそうとはしてなかったし、顔を真っ赤にしていたし、効果はあるはず！）

と前向きに考えながら、さっきの一件を思い出す

（サンオイルか……なんか亮、妙にぎくしゃくしてたわよね。そっちもあとでやってみようかしら？）

セシリアのアイディアだが、そんなものやってしまったもの勝ちである

（で、でも、体触られるのよね。あ、あたしから触るのは平気だけど、触られるのってちょっと……恥ずかしい、かも……／／／

／

ついつい赤くなってしまう頬を波に沈めて覚まそうとする
けれど、胸のドキドキは収まるどころか強くなる一方だった

（う～……でも、他の女子も絶対アプローチかけてくるだろうし……）

ぶくぶくぶく、と呼吸ではない照れ隠しの吐息が波にさらわれて泡に変わる

（ええい、凰鈴音、しっかりしなさい！このＩＳ学園に入って亮と出会えたんだから、ここで頑張んなくてどうすんのよ！）

よしっ！と気合いを入れた瞬間、思わず力いっぱい息を吸い込んでしまう
しかし、ここは水中。口の中に入ってきたのは空気ではなく海水だった

「！？ごぼぼっ！」

いきなりのことで軽いパニックに陥った鈴は、姿勢を崩してもがく

（み、水っ、入っ……！上、上に行かないとっ……）

しかし、水中で自分がどこに向いているかもわからない
いよいよ本格的に溺れ始めた鈴を、けれど力強い腕が引っ張り上げた

（あ、亮……亮の腕だ、これ……）

途端に、安堵が胸に広がる
そのたくましい腕をわずかに抱きしめて、鈴は海面へと浮上して――

「鈴！大丈夫か！？」

目の前にいたのは予想通り、鈴の好きな人だった

「鈴！大丈夫か！？」

「ごほっ！けほっ！だ、大丈夫……」

「そうか……」

ホッと一安心する俺
いきなりもがき始めた鈴を見てかなり焦ったが、どうやら無事らしい

「どうしたんだ？どこか怪我したのか？」

「ち、違うわよ！溺れたのは、その、あんたのせいで……」

「なんでだよ……まあいい。とにかく一回砂浜に戻るぞ。ほら」

「な、なに？」

どうやら俺が背中を向けた意図がわかっていないらしい

「乗れ。運ぶから」

「だ、大丈夫よ。別に、砂浜に戻るくらい」

今し方溺れたばかりの奴に大丈夫と言う権利はない

だから、俺はすこし語調を強める

「鈴、早く」

「ふ、ふんだ。わかったわよ……」

今度は素直に従ってくれたな

俺は水の中でかなり軽くなっている鈴を背負うと、陸に向かって泳ぎ始める

誰かを乗せて泳ぐというのは、実際にやるのは初めてだが、高校の研修で習ったことがある

「水が口に入るようだったら肩を叩け。喋ると溺れるからな」

「ん」

口を閉じての返事を聞きながら、俺は陸へと泳いでいく

「あ、あのさぁ、亮……」

「んだよ」

「あ、ありがと……」

ぽそぽそとした声だったが、確かにそう聞こえた
俺は首肯で返事をすると、砂浜に上がって鈴をおんぶした

「も、もういいってば。ここまでついたら後は自分で歩けるからっ！」

「ダメだ」

「だ、ダメって……い、いいから、おろしなさいってば！」

俺が海から上がってきたのを見つけて向かってくる女子に見られたくないみたいだが、そんなもの感係ないとりあえず、鈴が休める場所に移動させよう

「あれ？三崎君がおんぶしてる！」

「本当に！？」

「私にもして欲しいなー」

「亮！本当におろしなさいよ！」

鈴は強引に身じろぎするが俺は無視して鈴を運ぶ

「みんなどいてくれ、鈴を休ませたいんだ」

「ううっ……」

わらわらと近づいてくる女子をどかせながら空いているシートまで運ぶ
鈴は恥ずかしそうにしている

「ほら、降ろすぞ」

「う、うん……／／／／」

鈴をシートに座らせた俺はどこか怪我をしていないかを確認する。
気づかぬ内に怪我をしている可能性もあるからだ
よし、本当に怪我はないな

「ここである程度回復したら別館に行って休め。いいな」

「うん、わかった……／／／／」

こくんと頷いた鈴
ああ言っていた手前溺れたのが恥ずかしいのだろう
そっとしておこう、そう思った俺は鈴から離れようとした

「待って、亮」

だが、鈴に呼び止められる

「なんだ？」

「その……さっきさ！助けてやんないぞ、て言ってたじゃん。それなのにどうして助けてくれたのかなって」

なんか、とてつもなくバカな質問をされてしまった
俺は思わずはあ、と深い溜め息をつく

「そんなの、適当に言った言葉じゃねえか。鈴も本気にしてた訳じゃねえだろ？」

「そりゃあね……」

「でもまあ……本気でそう言ったとしても、すぐに忘れて俺はお前を助けてただろうよ」

「そ、そっか／／／／」

少し気恥ずかしそうにする鈴
でもどこか嬉しそうにも見える

「それじゃあ、俺は行くからな」

「うん……」

鈴の返事を聞いた俺はそこから立ち去った

第６５話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第６６話

「あ、亮。ここにいたんだ」

俺が鈴と別れ砂浜を適当に歩いていると、ふと、呼ばれた声に振り向くと、そこにはシャルロットと――――

「……んだよ、そのバスタオルヤロウは……」

なんだか奇天烈な存在がいた
バスタオル数枚で全身を頭の上から膝下まで覆い隠している

「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

今の声は……ラウラ？
だが、ずいぶんと弱々しい声だ。シャルロットはなにやらそんなラウラになにやら説得を試みている
どういう状況だ？

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、亮に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなぁ」

そういえばラウラとシャルロットは同室だったな
先月の一件ではお互いにライバルとして戦ったのだが、今は普通にルームメイトとして仲がいいようだ
最初はラウラが変わりたくないと言って駄々を言って不安だったが、どうやら大丈夫そうだな
シャルロットのような愛想のいい女子と一緒にいれば色々と心境の変化もあるだろう

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も亮と遊びに行こうかなぁ」

「な、なに？」

「うん、そうしよ。亮、行こっ」

言うなり、シャルロットは俺の手を取る
そのまましゅるっと腕を絡ませて、シャルロットは波打ち際へと俺を誘う

「ま、待てっ。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

ばばばっとバスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れる

しかも、その水着というのが――

「わ、笑いたければ笑えばいい……！／／／／」

黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、さらにいつも飾り気のない伸ばしたままの髪は左右で一対のアップテールだ

可愛い、俺が一番脳内から出てきた言葉がそれだった

それにもじもじと落ち着かなさそうにしているラウラがより強くそう思わせた

「おかしなところなんてないよね、亮？」

「あ、ああ。少し驚いたが、似合ってんじゃないか」

「なっ……！／／／／」

そんなに俺の言葉が予想外だったのか、ラウラは驚きに一瞬たじろいだあとそのままカーッと赤面した

「しゃ、社交辞令ならいらん……」

「んなことすっかよ。なあ、シャルロット？」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからオシャレしなきゃってね」

「そうなのか……うん」

シャルロットの水着も褒めようと思ったが前のことを思い出してしまい、口に出せなかった

そして、目についたのはこの前にプレゼントしたブレスレットだった

「それ、錆びたりしないか？」

「大丈夫だよ。来る前に保護コートしてあるし、後で塩水は洗い流すから。その、せっかく亮がくれたものだしね」

えへへ、と笑顔で言うシャルロット

そんなに大事にしてくれるとは、あげて良かったと本当に思うよ

「亮」

「ん？」

さっきまでの声とは違う、いつもの落ち着き払ったラウラの声が俺を呼ぶ

「ずるいぞ、それは。私にも何かプレゼントを……その、して欲しいのだが……」

ふむ、そういえばバス渡そうと思ったがこいつが挙動不審で渡せなかったんだった

考えてみれば原因はこの水着披露だったんだな

「安心しろ。お前の分もちゃんとある」

「ほ、本当か！？」

「今は持ってねえけど夜に渡すよ」

もしラウラにプレゼントを渡すところを見られたらまた面倒だ

「わかった！絶対だぞ！」

「おい。あまり期待すんなよ。高いもんじゃねえんだからよ」

「うむ。しかし、いずれは給料三ヶ月分というものを頼むぞ。部隊の仲間に聞いたが、日本では大事なプレゼントにはそれだけのお金をつぎ込むのだろう？」

どうやらこの間違った日本のイメージはラウラの仲間が言っていたのか
とりあえず、その仲間とやらに日本の常識を教えてやれ

「亮が私にプレゼントか……」

「だから期待すんなつーの。正直、今の可愛いラウラにあうかわからん」

「かっ、かわいっ……！？」

さっきからどうしたのだろうか。ラウラは俺の言葉に狼狽したような反応をして、両手の指をもてあそぶ

「三崎くーん！」

「さっきの約束！ビーチバレーしようよ！」

「わー、ミッチーと対戦～。ばきゅんばきゅーん」

そういえば、さっき約束しちまってたな。忘れていたよ

「それっ。三崎君にパース」

ぺしんと叩いたサーブで俺にビーチボールを投げてくる
それを受け取った俺は正直、面倒なので一夏にバトンタッチしようと思ったのだが

「織斑くーん！サンオイル塗ってー」

「私にも！」

「だからそんなサービスやってないってば！」

ダメだ
一夏は未だに女子たちに囲まれていやがる
今、バトンタッチしたら俺がああなる
だから俺は切り替えてすぐ側にいたメンツを確認する

「んじゃ、こっちはシャルロットとラウラでちょうど三対三だな。うし、始めるぞ」

俺の返事を聞いてから手早くネットを広げる女子二名、布仏は砂の上にコートの線を引いていた

「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは三回まで、スパイク連続禁止、キリのいい十点で一セットねー」

「わかった。そっちのサーブからでいいぞ」

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を：

…見よ！」

いや意味わかんねえよ、とツッコミたかったが、いきなりのジャンピングサーブ
しかも、スピードといい角度といい申し分ない

「任せて！」

そう言ったのはシャルロットだった

「って、わあっ！？」

どんっ！という音とともにシャルロットの悲鳴が聞こえる
振り向くと、ぼーっと立っていたらしいラウラとボールを追いかけたシャルロットが思いっきりぶつかったようだった

「いたたた……ラウラ、どうしたの？」

「か、かわ、可愛いと……言われると、私は……うぅっ／／／／」

「おい、何やってんだよ、大丈夫か？」

俺はぶつかって倒れたラウラに手を伸ばす

「っ！？／／／／」

しかし、ラウラは自力で起き上がり、なぜか別館の中へと走り、そのまま消えていった
取り残されたのは俺とシャルロットと、ぽかんとした女子三人

「どうしたんだ、ラウラのやつ？」

「うーん、これはあれかな～。ミッチーの乙女ブレイカーが作動中なのかなー」

布仏はそんなことを言っている
ちなみに布仏が着ている水着というよりはもはやぬいぐるみだ。耳までついている全身すっぽり型のきつね姿だ
つか、これで泳いだら溺れるだろ絶対

「仕方ねえ、このまま続けるか。ラウラは様子は後で見とく」

「さんせーい」

そうして数の上では二対三なのだが、実際は布仏の分がマイナスだから二対二のビーチバレーが続いた

「そーれっ」

身軽な動きでシャルロットがスパイクを決める
さすがは代表候補生なのだろうか、スポーツも万全である

「やっぱりシャルロットさんは強敵だなー」

「大丈夫！私にはとっておきの秘策があるのさ！」

「ひさくー？」

「まあ、見てなさい！」

作成会議が終わったのか円陣を組んでいた布仏たちがポジションにつく
次のサーブは布仏だ。よし、このポイントはもらったな

「いっくよ～」

ぺしっと緩やかなアンダーサーブ
めっちゃ遅い。なんとかコートに入るのがやっとだ

「僕が行くよ！」

シャルロットがレシーブをする。ボールは見事に俺の頭上に上がった

「シャルロット！」

「うん！」

俺が普通にトスを上げるとシャルロットはジャンプしスパイクを決めようとするが

「シャルロットさん、そんなジャンプするとその健やかな胸が揺れ

るよー」

「へっ!?／／／／」

バスッとシャルロットのスパイクはネットに突き刺さってしまう

「よし!作戦通り!」

「おー」

「おー、じゃねえ!なんだ今のは!?」

「ふっふっふっ。今のは、シャルロットさんの動きを封じるための秘策!『気になるあの人に身体を見られてますよ作戦!』さ!」

「意味がわからん!」

なんだそのふざけた作戦は!?

「さあ……続きを始めようか!」

くっ!なんだ、このプレッシャーは!?
嫌な予感しかしねえ!!

「いくよ〜!」

布仏がサーブを打つ
ボールが俺の方に飛んできたのでレシーブする

「亮!」

シャルロットが俺にトスをあげるが

「そんな腕を上げると胸が強調されるよ」

「ふえっ！？」

その一言にシャルロットのトスが崩れ、あらぬ方向へと飛んでいってしまう

「おい！それは卑怯だろ！」

「ふっ、勝負に卑怯も糞もないのさ！」

ただの遊びに卑怯な手を使うな！

「それに三崎君はなんとも思わないの？シャルロットさんの魅惑的ボディを見てさ」

「それは……」

そう言われて改めると急に意識しちまうじゃねえかよ！！

結果は惨敗に終わった

しかも、終わった後シャルロットから――

「亮のえっち……／／／／」

と、顔を真っ赤にして言われてしまう

なんでそうなるんだよ……

第６６話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第67話

「あ、そろそろお昼の時間かな？亮、午後はどうすんの？」

「強いて言うなら飯食ったら、海でぷかぷかと浮いていてえな」

正直、午前中だけでかなり疲れたからのんびりしてえ

「そっか。じゃあ、お昼に行こ。それと亮って結局どこの部屋だったの？」

「あー、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

「わたしも～。冷たい床情報は共有しよ～」

布仏よ。それじゃあ意味がわからないぞ

「実はまだわかんねえんだよな……」

「えっ！そうなの」

「それじゃあ、織斑君の部屋は？」

「織斑先生の部屋だ」

それまでワクワクとした顔をしていた女子一同がびしっと凍りついたまさかの展開に思考が止まったかのようだ

「だから、止めとけ。死にたくないならな」

「そ、そうね……で、でも織斑君とは食事時間に会えるしね！」

「だね！わざわざ鬼の寝床に入らなくても――」

「誰が鬼だ、誰が」

びしっと再び凍り付く女子一同
ギギギギ……と軋んだ動作で首を動かす

「お、お、織斑先生……」

「おう」

お！一夏が選んだ水着を着ている
ラウラとはまた印象の違う黒の水着をばっちりと身に纏い、そのスタイルのいい鍛えられた体を惜しげもなく陽光に晒している
正直、俺が選んだ白い水着じゃなくて残念だ、なんて考えは一瞬で消え去った
普段のスーツ姿からは想像しにくいが、形がしっかりと浮かんでいる胸はひいき目に見なくてもかなり大きい
って！なに考えてんだ俺は！？

「……亮、鼻の下伸びてる」

「なっ……！？なに言ってやがる……！？」

「見とれてたくせに」

それは……否定できない

「そら、お前たちは食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらうとしよう」

言葉通り、教師陣には自由時間などないのだろう

「んじゃ、俺たちは昼食に行ってきます。ごゆっくり」

「ふん。集合時間には遅れるなよ」

「はい」

そう行ってその場を離れ、食堂に向かう

他にも生徒たちがぞろぞろと移動していた

俺たちと同じ目的だろう

「織斑先生の水着見た？すっごいきれー。かっこいい～！」

「あー、私もあんな風になりたいなぁ」

「いや、あんたは無理でしょ」

「や、やってみないとわかんないわよ！」

そんなきゃいきゃいした感じで盛り上がっている

（今までは厳しくて逆らってはいけない人と認識してたが……）

正直、綺麗だな……
モデル以上でもおかしくはない

「亮って、織斑先生が好みのタイプなの？」

「は！？な、なんだよ。急に……」

「別に。ただ、ずいぶん僕たちの水着を見たときと反応が違うなぁって思っただけだよ」

ぐっ、シャルロットは何故か機嫌が悪い
何でだ？

「はぁ、ライバル多いなぁ……しかも強敵揃いだよ。そこに織斑先生まで入ってくるんなら極めつけだね」

ライバル？
千冬さんが強いのはわかる
生身でＩＳ用近接ブレードを振り回す人だし
でも、シャルロットと織斑先生が戦う機会なんてないと思うが……？

「よくわからんが頑張れ」

「……亮、関係なさそうに言っているけど、ものすごく関係あるからね」

「は？マジか？」

「マジだよ。はぁ……一番の強敵は亮自身だね」

「何でだよ……」

「ま、考えても仕方ないよね。ほら、亮。行こっ」

「あ、ああ」

気を入れ直したシャルロットに手を取られ、俺は着替えのために別館へと向かう

「昼飯、なんだろうな？海だから刺身かもな」

「お刺身！いいね、新鮮なの大好きだよ」

ちなみにシャルロットはこんな感じで日本文化にもしっかり適応している

セシリアは『お、お魚を生で！？し、信じられませんわ……』とのこと

ラウラは『安心しろ。私は生の食材を食べられる訓練を受けている。ジャングルで孤立無援になったときにも生き延びられるようにな』と言っていた

ラウラ、とりあえず状況判断力を高めよう。そして、日本の食文化を勉強しよう

（そういえば……）

ふと、姿が見えなかった箒を思い出す
一夏の側にも居なかったし……

（あいつ、泳ぐの苦手だったか？まあいいか）

そんなことを考えながら、俺はシャルロットたちと別れて男子更衣室へと入った

第６７話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！

今回は短くなってしまいました・・・・

感想お待ちしております！！

第６８話

時間はあっという間に過ぎ、現在七時半
大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなぁ」

「そうだね。ほんと、ＩＳ学園って羽振りがいいよ」

俺の目の前にいる一夏が美味しそうに刺身を食べながら言う
その一夏の言葉にうなずいたのは俺の右隣に座っているシャルロットだ
俺は逆に刺身じゃなくて肉をだせよ、と思っていたりする

ちなみに今、俺も一夏もシャルロットも浴衣姿だ
よくわからんが、この旅館の決まりらしい
『お食事中は浴衣着用』と
する理由がまったく意味がわからない
ずらりと並んだ一学年の生徒は座敷なので当然正座
そして一人一人に膳が置かれている
メニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種類。それに赤だし味噌汁とお新香
さっきも言ったが肉が少ないのはどうかと思う。でもまあ、刺身は高級魚だから文句はない

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

「本わさ？」

「本物のわさびをおろしたやつのことをそう言うんだよ」

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食でついてるのって……」

「あれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せてあるやつ」

「ふぅん。じゃあこれが本当のわさびなんだ？」

「そう。でも練りわさでも最近はおいしいのが多いぞ。店によっては本わさと練りわさを混ぜて出したりもするから」

本当に詳しいな
だから、鈴にジジ臭いって言われるんだよ

「そうなんだ。はむ」

はっ？シャルロット、今わさびの山を食べやがったぞ！？

「っ～～～～～～～～～～～！！」

案の定、鼻を押さえて涙目になるシャルロット

「ほら、これ飲め」

「ングング……」

俺はすぐにお茶をシャルロットに渡す。もちろん冷えたお茶だ
シャルロットはすごい勢いでお茶を飲み干した

「大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

「どこがだよ」

と、思わずツッコミを入れてしまう
そんな鼻声な返事と涙目で崩れた笑顔では説得力がない

「ふ、風味があって、いいね……お、おいしい……よ？」

優等生なシャルロットに乾杯

「っ……ぅ……」

ちなみに俺左隣ではセシリアがさっきからずっとこんな感じでうめいている
正座が苦手みたいだな
一向に食事が進んでいない

「セシリア。顔色がよくないが……」

「だ……ぃ……ょう、ぶ……ですわ……」

「どこがだよ」

おっと、また同じツッコミをしてしまった

次第にプルプルと震えだしたセシリアは、しかし、英国人としてのプライドなのかなるべく平静を装って箸を手にした

「い、いただき……ます……」

ず、ず……と味噌汁を飲むのにも難儀している

「お、おいしぃ……ですわ、ね……」

無理をしているのがバレバレだっつーの

「セシリア、正座が無理ならテーブル席に移動しろよ。一組のクラスの奴らも何人か行ってるから、別に恥ずかしくもないだろ」

ちなみにこのＩＳ学園は世界中から入学希望者がやって来るから、正座ができない人も当然いる。それを考慮して、正座ができない生徒は隣部屋にあるテーブル席が利用できる

「へ、平気ですわ……この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい……」

獲得？何の話だ？

「亮、女の子には色々あるんだよ」

よくわからんが何かと苦労をしているんだな

（ん？一夏、どこを向いてるんだ？）

キョロキョロと辺りを見回したあと、探しものが見つかったらしく

その方向でぴたっと首が止まる
俺もその方向を向くと、箒がいた
多分、結局海に来なかった箒が気になったんだろう

「あ、織斑君。やっほ～」

ふと、一夏の視線が箒ではなく、その隣の女子に気づかれてしまう
すると、それまで楽しそうにしていた箒がムッと一夏を睨んでいる

おそらく『女子を眺めて何をニヤニヤとしている。不埒者め』と言いたいのだろう
許してやれ、箒。一夏はお前を心配してんだから
そこで、ふと俺は箒の姉である束さんを思い出すが、一秒もせずに切り返した

（あの人のことは忘れよう。嫌な思い出しかない）

「う、ぐ……、くぅ……」

セシリア、いい加減諦めろよ。さっきから二回も刺身を取り損なっているぞ

「おい、セシ――」

「移動は、しませんわ」

ぐっ、言い切る前に言い切られてしまった

「だったらどうすんだよ？このままじゃせっかくの料理が傷んじまうぞ」

「で、でしたら……その……／／／／」

ん？なんかさっきとは違う震えって言うよりか、もじもじし始めた

「亮さんがわたくしに食べさせてもらえませんこと？／／／／」

「はぁ？」

「亮さんの言う通り。このままでは、せっかくの料理が傷んでしまいますわ。それでは、シェフに申し訳ありません」

それはまあ確かにそうだ。あと、ここの場合、シェフではなく板前と言うのではないのだろうか？どうでもいいか

「ですが、わたくしはごらんのように足がしびれてうまく料理が食べれません。ですから亮さんがわたくしにこの料理を食べさせてくださいませ！」

「別に俺じゃなくてもそっちの隣の奴に――」

「亮さんでなければ意味がありませんわ！」

また言い切る前に言われてしまう

なにを必死になっているんだ？

「……わかったよ。食わせればいいんだろ？食わせれば……」

「本当ですの！？で、では。お願いしますわ」

そう言って俺に箸を預けてくる

「まずは何を食う？」

「では、お刺身をお願いします。あっ、わさびは少量で……」

どうやらセシリアはわさびが苦手らしい

「じゃあ」

「は、はい。あー……」

ん、と言おうとしたところで問題が起きた

「あああーっ！セシリアずるい！何してるのよ！」

「三崎君に食べさせてもらってる！卑怯者！」

「ズルイ！インチキ！イカサマ！」

うおっ！？他の女子たちが一斉に言い寄ってきた！

「ず、ずるくありませんわ。席が隣の特権です」

「それがずるいって言ってんの！」

「三崎君、私も私も！」

これ幸いとばかりに自分も食べさせて欲しいと女子が押し寄せる

……なんでこうなる

「早く早く！」

「あーん！」

一様に口を開く女子の群れ
ええい、てめぇらはひな鳥か！

「お前たちは静かに食事することができんのか」

その声に場の全員が凍り付く

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！とんでもないです！大人しく食事をします！」

そう言って各自の席に戻っていく
それを確認してから千冬さんは俺の方を見た

「三崎、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました」

これは俺のせい……になるのか？なるのか……

「悪いがセシリア、やっぱり自分で――」

「……」

ぐっ、すごいふくれっ面をしている
効果音があるとすれば、ぷく～～～～～という感じ
うん、なんか可愛く感じてしまう

「あー……その……」

「……」

ダメだ。さっきの表情のまま俺を睨みつけている

仕方ない……

「あっ！？あれはなんだ！？」

俺はびしっと窓の方を指差しながら言った

「えっ？」

「なになに？」

「どうしたの？」

一斉に女子たちが振り向いた（もちろん、一夏もだ）

「セシリア」

「へっ？むぐっ！？」

窓の方に視線を寄せていたセシリアに小さな声で呼びかける

振り向いたセシリアに俺はすかさず、刺身を箸でつかみ口へと放り込む

「りょ、亮さん！？」

「しっ！黙ってろ！」

セシリアを黙らせた辺りで何もないことを確認した女子たちは視線をもとに戻した

「三崎君。なにもなかったよ？」

「なにかあったの？」

「あれ？なにか光った気がしたんだが気のせいだったみたいだ。悪い」

俺の謝罪になーんだ、とがっかりして食事に戻る

よし、これで大丈夫

「亮さん……今のはいくらなんでもあんまりですわ」

何かがいけなかったらしく、がっかりとした表情で言ってくる

「仕方ないだろ。あのタイミングしかやれなかったんだから」

「だからといって、わたくしにも心の準備がありますのに……」

ううっ、これ以上はそっとしておこう。そう思った俺は刺身を口にするが

「り、亮さん。そ、それはわたくしの……／／／／」

「は！？」

セシリアの言葉に俺はすぐに現状確認をした

まず、セシリアの箸がない

俺の手元に箸が一セット。よく見てみると皿の下に箸がもう一セットあった

ということは――

「す、すまん！セシリア！すぐに箸を代えてもらってくる」

「い、いえ！わたくしはその箸で構いませんわ！」

そう言ってセシリアは俺が持っている箸を奪い去る
そしてそのまま、慣れてない手つきで刺身を取り、食べてしまった

それはつまり――間接キス！？

「……／／／／／」

「ふんふーん♪／／／／／」

俺とセシリアは顔を真っ赤にしながら料理を食べ始めた
俺は黙々と下を向きながら食べていたが、セシリアは嬉しそうに食べていた
なぜ？

第６８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

感想お待ちしております

第69話

「ふ～、さっぱりした」

「ああ。食後に温泉。すごい贅沢だな」

上機嫌の一夏に同意する俺
海を一望できる露天風呂を俺と一夏の二人で独占できるのだから当然である

「千冬姉も温泉かな？」

部屋にいないところを見ると、そうであろう

――と、ちょうど千冬さんが帰ってきた

「ん？お前たちだけか？女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつらだ」

「だから……はあ、もういいよ。それは」

「んなことしたら織斑先生になにされるかわかったものじゃないですからね」

「ふん……」

千冬さんに鼻で笑われてしまう
まあいいや

「それよりも織斑先生。俺の部屋はどうなっているんすか？隣の部屋を開けようとしても開かないし」

俺は未だに部屋に入るどころか誰が一緒の部屋なのかすらわかっていない

「ああ。それなら私と一緒に帰ってきたから部屋にいるぞ」

なんだ、そうだったのか

それならば早いうちに挨拶しないとな。荷物も置きたいし

「んじゃ、俺は自分の部屋に行きますよ」

「そうか。くれぐれも教師に襲いかかることなどしないようにな」

「しねえよ！？」

俺は大声でそう言って部屋から飛び出す

たく、千冬さんめ……俺をなんだと思ってやがるんだよ

そう思いながら俺は隣の部屋の前に立つ

（そういえば、本当に誰なんだろうか？）

一夏は千冬さんとだから男子ではない。そして、女子たちが入り込まないようにしているから自動的に先生だ

そこで俺の頭の中に思い浮かんだのは山田先生だ

（副担任だし、それが妥当だろ）

そう考えた俺はドアをノックした

「は、はい！どちら様ですか！」

山田先生の声だ。俺は予想通りの人にほっと一安心

「同部屋の三崎です」

「ど、どうぞ！あ、開いてます！」

（ん？なんか山田先生の声がおかしいような……）

俺は異変を感じながらも俺はドアを開けた

そこには畳の上に敷かれた布団の上に正座で座っている山田先生がいた

「ふ、不束者ですがよろしくお願いします／／／／」

バタン

よし。状況を整理しよう

俺が部屋に入る

←

山田先生が正座で待っていた

←

何故かぶかぶかと『不束者』とかいいながら頭を下げる山田先生

←

俺、すぐにドアを閉じる

うん

ドアを閉じた俺は悪くない

俺はもう一度ドアを開けた

「み、三崎君。どうしてドアを閉めたんですかー」

うっ、少し涙目でそう言ってくる山田先生
本当にこの人は先生なのかと疑問に思う

「や、山田先生がいきなりあんな風に言ってくるのが悪いんじゃないですか」

「えっ？男の人と一緒に泊まるときはこうしないといけないんじゃ……？」

よし、山田先生もラウラと一緒に日本の常識を学び直す必要がある

「しなくていいんです。それとこれはなんなんすか？」

「えっ？布団ですけど……？」

うん、それはわかっているんですよ
だけど、俺が聞きたいのはそういうことではない

「俺はなんで二つの布団がこんなに近いのかを聞いているんです」

そう、敷かれた二つの布団の両端がぴたっとくっつく程近いのだ

「えっ！ダメなんですか！」

「なんでそんな意外そうな顔をするの！？ダメに決まってるじゃないですか！？」

「でもテレビでやってた番組はこういう風に寝てたよ」

「それはなんの番組ですか？」

「『新婚さんの甘〜〜い旅行日記』」

「まず俺と山田先生は新婚さんじゃないからね！？」

なんでそんな番組を参考にしちゃうかな、この先生は

「た、確かにそうですね。私と三崎君は先生と生徒な訳ですしね／／／／」

うんうんと首を縦にふる山田先生

良かった、ちゃんと理解してくれたようだ

「まずはちゃんとした関係にならないといけませんもんね！」

そうそう、こういうのは、ちゃんとした関係に……はい？

「さあ、三崎君！今から私と、『先生と生徒のいけない関係』になりましょう！」

「うおっ！？」

いきなり山田先生が俺に飛びかかってきた

急なことで俺は避けられず押し倒されてしまう

「えへへ〜♪三崎くーん♪」

俺に思いっきりの笑顔を向けてくる山田先生

その笑顔はとても可愛らしいものではあるのだが……

「酒臭っ！？山田先生、お酒飲んでる？」

「飲んでましぇーん♪ジュースを飲んだだけでぇーす♪」

「……」

ダメだ。完全に酔っ払いになっていやがる

あっ！隅に置かれたテーブルの上に酎ハイの缶がたくさんあるぞ！？

「山田先生。とりあえず水でも飲んで落ち着こう」

「あー、三崎君も私を子供扱いするんですね！私は子供ではありません！立派な大人なのですー！」

まあ、確かに子供っぽいとは思っていたが、子供扱いをした覚えはない

「私が立派な大人であることを証明してあげますー！」

そう言って着ている浴衣に手を伸ばす山田先生

って、嫌な予感しかしない！？

「させるか！！」

俺は自分の浴衣に手を伸ばした山田先生を止める

「離してください、三崎くん！これでは私が大人である証拠が見せられません！」

「それが浴衣を脱ぐこととなんの関係があるんだよ！？」

「大ありですー！同い年の織斑先生に唯一勝っている大人な部分は胸しかないんですー！」

確かに織斑先生と比べると山田先生は子供っぽく見えるし、胸も織斑先生より大きいのも認めるが、それがなんでこんな行動をする必要があるんだ！？

「手を離して！ひゃなして！ひゃな……」

「ん？むぐっ！？」

ドサッと山田先生は力尽きたのか、糸が切れた人形みたいに倒れる当然真下には俺がいるため山田先生は俺に覆い被さるように倒れた

（や、柔らかい！？）

山田先生ご自慢の胸が俺の顔に直撃してしまう

ヤバい、早く退かせなくては！！

すぐに山田先生を俺の上から退かせた

そして山田先生を布団に寝かせた

「むにゃむにゃ……」

布団で寝ている山田先生は気持ち良さそうに眠っているよほど仕事で疲れてたんだな

「さてと……」

とりあえず、部屋から出よう

（今の騒動で目がさえてるし、外で適当に歩いてれば眠くなんだろ）

そう思った俺は山田先生を起こさないように部屋から出て行った

第６９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！！！！

ここで山田先生が登場！！

楽しんでいただけたでしょうか？

感想お待ちしております！！

第７０話

「あっ！亮兄！」

「ん？」

部屋を出てすぐ、偶然にも一夏と鉢合わせた

「よっ、風呂か？」

「ああ。ちょっと千冬姉にマッサージしてたら汗かいちゃってさ。亮兄も一緒に入らない？」

「いや、遠慮しとく。でもマッサージは今度やってもらいたいな」

「ああ、いいぜ。それじゃあまたあとで」

「おう」

そう言って風呂に向かおうとしたが一夏は足を止め、こっちに振り向いた

「そうそう。今、箒たちが俺の部屋にいるから行ってみたら？」

「ということはセシリア、鈴、ラウラ、シャルロットもいるのか？」

俺の質問に、「ああ」と行った一夏はすたすた風呂に向かった

「ふむ……行ってみるか」

それはナイスタイミングだ。プレゼントを渡すにはいい機会だし

（そうと決まればさっそくプレゼントを持ってこよう）

俺は寝ている山田先生を起こさないようにゆっくりと自分の部屋に入った

「……」

一夏・千冬の部屋に入り込んでしまった女子が五人

その五人の前には、ドンと構えた千冬がいるためどうしていいのかわからないようだ

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれて、箒はびくっと肩をすくませる。言葉がすぐに出てこずに、困ってしまった

そうこうしていると千冬は旅館の備え付けの冷蔵庫を開け、中から清涼飲料水を五人分取り出していく

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言われたものの、順番に箒・シャルロット・鈴・ラウラ・セシリアと受け取った全員が渡されたもので満足だったために交換会は開かれなかった

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にする

女子の喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なにちょっとした口封じだ」

そう言って千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、星のマークがキラリと光る缶ビールだった
ちなみに真耶が飲んだ酎ハイも旅館の備え付けだったりする。部屋によって備え付けも違うようだ

プシュッ！と景気のいい音を立てて泡飛沫が飛び出す
それを唇で受け取って、そのまま千冬はゴクゴクと喉を鳴らした

「……」

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

いつもの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と認識している女子全員がまたしてもぽかんとしている
特にラウラはさっきから何度もまばたきをして、目の前の光景が信じられないかのようだった

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラはぽかんと開いた口から何も言葉が出てこない
代わりに、ブラックのコーヒーをごくりと嚥下する

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そう言ってニヤリとする千冬は、全員の手元をざっと流し見る
そこでやっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あっ」と声を漏らした

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける

「お前らあいつのことどう思っている？」

「あいつ、とは？」

「三崎亮だ」

千冬の返事に全員がやっぱりとした表情をしていた

「あの……どうとは、具体的に……」

「なに、簡単に三崎はどんな奴か印象や好きな所を言えばいい」

ビールをくびっと飲みながら言う千冬

「わ、私は……昔とは違ってしっかりとしている印象がありました……好きな所は別に……」

「まあ、篠ノ之は一夏狙いだろうからそんなところだろ。凰、お前は？」

千冬の言葉に箒は顔を真っ赤にして抗議しようとするがスルー

「あたしは、なんだかんだで色々と気にかけてくれる……その……便利な奴だなぁって……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もごもごと言う鈴

「わ、わたくしは……強引な方だなと……」

視線を下に向けて言うセシリア

「ふむ、そうか。ではそう亮に伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、二人はぎょっとしてから一斉に詰め寄った

「「言わなくていいです！」」

その様子をはっはっはっと笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける

「僕――あの、私は……やさしいところ、です……」

ぽつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった

「ほう。確かに優しくなった。だが、逆にあいつは誰にでも優しくなったぞ。素直じゃないがな」

「そ、そうですね……そこがちょっと、悔しいかなぁ／／／／」

あははと照れ笑いしながら、熱くなった頬をぱたぱたと扇ぐシャルロット

なんだかその様子がうらやましいのかくやしいのか、前述二名はじーっと押し黙ってシャルロットを見つめた

逆に箒は感心した様子で見ている

「で、お前は？」

さっきから一言も発していないラウラに千冬が話を振る

どうもそれ自体警戒していないようで、ラウラはびくっと身をすくませながらも言葉を紡ぎはじめた

「つ、強いところが、でしょうか……」

「確かにスケィスを使えば強いが、それ以外はそうでもないぞ」

「つ、強いです。少なくとも私よりも」

珍しく食ってかかったラウラに、そうかねぇ……と言う千冬は二本目のビールを空ける

「あの、この質問になんの意味が……？」

「……あいつは何かと背負い込む傾向がある。スケィスやＡＩＤＡも何かきっかけがなかったら私たちに教えることはしなかっただろう」

確かに、と千冬の言葉に全員がうなずく

「それは奴の思いやりで迷惑はかけられないというところだろう。ふん、学生のくせに生意気だ」

さっきまで機嫌が良かった千冬だが、話しているうちにどんどん悪くなっていく

「あいつは人を頼ることにまだ抵抗があるみたいだからお前たちにあいつを支える柱となってほしいのだ」

「でも、亮はあたしたちの助けが必要なのかしら？あいつは自分一人で色々とできるし……」

鈴はうつむきながらそう言う

ここにいる全員は亮に支えられている自覚があったりする

亮は年上で勉強もできるし、ＩＳ操縦もトップレベル。自分が亮を支える柱となれるか正直不安がある

「あいつは昔から一人だったからな。そういうのには慣れている。別に何から何まで支える必要はない。やつ一人ではできない困難に立ち向かったときに支えてやればいい」

ビールを傾ける千冬

「でしたら、それ以外のときはわたくしたちは何を……」

「いつも通りに話しかけるなり、告白するなりすればいい」

千冬の言葉に顔を赤らめる女子一同
告白という言葉に反応したのであろう

「まあ、せいぜい悩め。恋する女ども」

千冬はそんな女子一同を見て楽しそうに酒を飲む
だが、ここでラウラがまさかの反撃が放たれた

「教官も亮のことが好きなのですよね？」

「！？ゴホッゴホッ！」

ラウラの不意の発言に驚いたのか、噴き出しはしなかったもののむせてしまう

「お、織斑先生！？」

「だ、大丈夫ですか？」

「き、貴様！いきなりなんてことを言うんだ！」

「私から見て教官は亮の見る目がちょっと違うように感じまして……」

「そ、そんなことはない！至っていつも通りだ！」

酒の影響なのか動揺を隠しきれていない千冬
そこに女子一同はチャンスとばかりに詰めかける
「確か織斑先生は昔と違って亮に対する行動が変わりました。何故です？」

「最近、亮さんが居眠りをしてもチョークを投げるのではなく、出席簿で叩いてますが、どうして変えたのですの？」

「なんか妙に織斑先生が亮を職員室に呼ぶことが多い気がするのですがどうしてですか？」

「たまに亮と一緒に夕飯を食べてますよね？なんでですか？」

「あ、う、その……」

いつもなら軽く返せるはずの質問がまったく返せない千冬

「「「「「織斑先生は亮のことをどう思っているんですか？」」」」」

「わ、私は……」

ごくりと唾を飲む千冬
あともう少し追い込めば千冬の本意が聞ける

ドンドンドンドン

「「「「「「!?」」」」」」

いきなりのノック音に全員がびくっと体を震わせた

「だ、誰だ?」

千冬が返事をして誰がきたのかを確認する

「三崎亮です。ちょっといいですか?」

なんとその人物は亮だった

「あ、ああ。いいぞ、入れ」

千冬はすぐに入室許可をする

このときの千冬の顔は、ほっと安心した表情をしていた

逆に女子一同は、そんな千冬を睨みつけていた

第７０話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！！

このあとどうなるか・・・・

感想お待ちしております！！

第71話

「失礼します……ってなんだ、この空気？」

千冬さんに許可をもらって部屋に入った俺なんだが、なぜか千冬さん以外の箒・セシリア・鈴・ラウラ・シャルロットが俺を睨みつける

「なんかお邪魔だった？」

「いや、いいときに来たぞ、三崎」

他の奴らは空気読めよコノヤロー、と言いたげな顔をしている
いつか俺に『ＫＹ』の称号を授かるかもしれない
まったくいらねえ

「それでなんのようだ、三崎」

「ああ、はい。一夏からみんながここにいるって聞いたんで、ちょうどいいと思って」

「ちょうどいい？なにがだ？」

首を傾けて聞いてくるラウラ
んだよ、忘れたのか？

「昼前に言ったろ？プレゼントがあるから夜に渡すって」

「おおっ！教官のことで頭がいっぱいであったからすっかり忘れていたぞ！」

そんなに衝撃的な話の最中だったのか？
ものすごく気になるがそこは置いておこう

「それに鈴にもあるぞ」

「えっ！？あたしにも？」

予想外な発言に驚く鈴

「ああ。ラウラがこれで鈴はこれだ」

俺は二人にプレゼントを渡す

「あ、開けてもいいか？」

ラウラは子供のような目をして聞いてくる
それだけ嬉しいのだろう
俺はああ、と二つ返事で許可する
こんな顔されたらダメだとはとても言えない

ラウラはがさがさと少し乱暴に袋を開けていく

おいおい、慌てて開けなくてもプレゼントは逃げねえよ

「おおっ！！」

中身を取り出してラウラは歓喜の声をあげた

「あれは眼帯？」

そう、俺がラウラにプレゼントをしたのは色々と装飾がついた眼帯だった

「ラウラと言えばそれ（眼帯）かなと思ってさ。あっ！そういえば、今ラウラが付けている眼帯は特製のものだったか？だったらそれはいらないか」

「そんなことはない！！嬉しいぞ！それにこの眼帯はどこにでも配布されている普通のものだ」

「それを聞いて安心したよ」

俺がそう言うとラウラはさっそく眼帯を付けた

「どうだ？似合うか？」

「うん。よく似合ってる。可愛いよ♪」

「そうかそうか！」

隣にいたシャルロットの感想を聞いて満足するラウラ

本当に喜んでもらえて良かったよ

「ね、ねえ、亮。あたしも開けてみていい？」

「ああ」

鈴はラウラとは逆に丁寧に袋を開ける

鈴もどうやら中身がかなり気になったみたいだな。顔がとても楽し

そうだ

「あっ……可愛い……」

ぼそりと口からそんな言葉を漏らす鈴
プレゼントは、猫の肉球をモチーフにしたポーチ

「なんつーか鈴ってこういうのが似合いそうだなって思って選んだんだが、どうだ？」

「えっ？あ、まあ亮にしてはいいチョイスじゃない！」

なぜか上から目線の鈴だがポーチを両手で大事そうに持っているからよしとしよう

「まったく、お前はそうやって甘やかすから災難な目に合うのだぞ」

「いや、あげなかったらもっと災難目に合ってますよ。って、なに酒なんて飲んでるんすか、織斑先生」

よく見てみたらいつの間にか五本目を空けている

「別に貴様がそれでいいのなら私は構わん。困るのはお前だからな」

なんだか言葉に棘があるな。なんでだ？

「まあいいや。織斑先生、これを」

俺は千冬さんに小さい袋を渡す
渡された千冬さんは目を点にしている

「織斑先生にも色々と世話になっているわけだし、ついでにお礼のプレゼントを渡そうと思ってさ」

「これは……くし……」

しかも可愛く装飾されたくしだ
それでいて邪魔にならない折り畳み式である。これならば持ち歩けるってさ」

「織斑先生は普段から身だしなみとか、しっかりした方がいいと思

昔の千冬さんは休日とかはめちゃくちゃだらしない
特に髪がぼさぼさであるのだ。せっかくの綺麗な黒髪がもったいない

「いてっ！？」

カンッといきなり空の缶ビールを投げつけられる
犯人はもちろん千冬さんだ

「お前という奴は……どうしてそう……面倒なことをするのだ……」

そう言って千冬さんは六本目の缶ビールを空ける
飲むの早えな
つか、完全に酔ってやがるぞ、この人

「そうやって……人の弱い部分には……すぐに気づいて……こっちの気持ちには……気づかない……だから貴様は質が悪いのだ……」

「いててっ！？」

急に手元にあった空の缶ビールを投げ始める
しかも、俺だけに向けて

「お、織斑先生落ち着いてください！？」

「うるひゃい！一度こひつには引導渡さなければとなにゃんと思っていはのだ！邪魔するゅな！」

女子一同の制止を振り払って千冬さん手当たり次第に落ちている物を投げつけてくる

くっ、マジで危ないぞ！？

俺が必死に避けていると、今度は高そうな壺を持ち上げる
ってそれはヤバい！？

「このっ！あっ！？」

俺は千冬さんの両手を掴み動きを止める
しかし、その拍子で壺が床に――――

「はっ！」
「よっ！」

ずざざざーっとラウラと鈴がスライディングキャッチで壺はなんとか割らずにすんだ
あ、危なかった……

「ん？」

「……」

千冬さんの抵抗がないと思ったらいつの間にか寝ていらっしゃる
俺の胸に顔をうずめながら

「たく……織斑先生も疲れてたのか？」

「ええ……そうかもしれませんわね……」

「主にアンタが原因でね」

うんうんとうなずく女子一同
なんでだよ。確かにいろいろと迷惑をかけちゃいるが……

「とりあえず織斑先生を布団に寝かせよう」

「ああ、そうだな」

俺は千冬さんを敷いてある布団に寝かせた

「なんかどっと疲れたわ。とっとと部屋に帰って寝ましょう」

「うむ。明日は早いからな」

鈴と箒がそう言うとセシリアたちも同意した

「俺はとりあえず一夏が帰ってくるのを待つよ」

「ああ、わかった。おやすみ、亮」

「おやすみなさい、亮さん」

「おやすみ、亮。その……プレゼント、ありがとね……」

「嫁よ、また明日な。プレゼント、とても嬉しかったぞ！」

「おやすみなさい、亮。また明日」

そう言って女子一同は自分の部屋に帰っていった

「さて、一夏の奴が帰ってくるまでどうするか……」

まあ、一つ、やることは決まっている

「う……ううん……」

カシャッ

千冬さんの滅多に見れない寝顔を携帯の写真に収めることだ

第７１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

感想お待ちしております！！

第７２話

合宿二日目
今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる
特に専用機持ちは大変らしいが俺にはまったく関係ない話だな

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは、意外にもラウラだった
あのラウラが珍しく寝坊したようで、集合時間に五分遅れてやってきた

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のために設けられたもので、現在はオープンチャンネルとプライベート・チャンネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも非限定情報共有（シェアリング）をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは制作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり全容は掴めていないとのことです」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、ふうと息を吐くラウラ

心なしか、胸をなで下ろしているな
おそらくドイツ教官時代にイヤというほど恐ろしさを味わったのだろう。かわいそうに

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と一同が返事をする
さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ
ちなみに現在位置はＩＳ試験用のビーチで四方を切り立った崖に囲まれている
よくこんな場所が見つけたもんだな

「ああ、三崎に篠ノ之お前らはちょっとこっちに来い」

「はい」

「はい？」

打鉄用の装備を運んでいた箒と俺が千冬さんに呼ばれて向かうなんだ？俺なにかしたか？

「お前たちには今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～～～～～～～～ん！！！！」

ずどどど……！と砂煙を上げながら人影が走ってくる
無茶苦茶速い。多分、ＩＳっぽい何かをつけてるからだろう
問題はその人影が――

「……束」

だということだ
立ち入り禁止もなんのその、稀代の天才・篠ノ之束さんは堂々と臨海学校に乱入してきた

すっかり帰ったのだとばかり思っていたのだが……

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ――ぶへっ」

飛びかかってきた束さんを片手で掴む。しかも顔面。思いっきり指が食い込んでいた

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そしてその拘束から抜け出す束さんもただ者ではない

だが、昨日のビールが影響しているのかもしれないが

よっ、と着地した束さんは、今度は箒の方を向く

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙目になって訴える束さん

そんなふたりのやりとりを、一同はぽかんとして眺めた

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私において他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そうですね……」

山田先生轟沈

つか、ＩＳ学園では明らかに部外者だろ？

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。はい、終わり」

そう言ってくるりんと回ってみせる

ぽかんとしていた一同もやっとでこの目の前の人物がＩＳの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気づいたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなる

「はぁ……もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ」

「うるさい、黙れ」

旧知の間柄であるふたりのやりとりに、おずおずと割り込んだのは山田先生だった

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……束さんは激しくじぇらしぃ。このおっぱい魔神め、たぶらかしたな～！」

言うなり、山田先生に飛びかかる束さん
その手はさっそく豊満な膨らみを鷲掴みにしている

「きゃああっ!?な、なんっ、なんなんですかぁっ！」

「ええい、よいではないかよいではないかー」

おい、ジェラシーはどうしたジェラシーは

「やめろバカ。大体、胸ならお前も十分にあるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえっち」

「死ね」

どかっと本気の蹴りを食らって砂浜に顔から突っ込むがすぐに復活する束さん
この頑丈さがＩＳを一人で開発した秘訣なのだろうか？

「それで、頼んでおいたものは……？」

ややためらいがちに箒がそう尋ねる

それを聞いて束さんの目がキラーンと光った

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと直上を指さす束さん

その言葉に従って箒も、そして他の生徒たちも空を見上げる

ズズーンッ！！

「なっ！？」

いきなり激しい衝撃を伴って、なにやら金属の塊が砂浜に落下してきた

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中
身を俺たちに見せる
そこにあったのは――――

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿（あかつばき）』！全スペック
が現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉に応えるかのよ
うに動作アームによって外へと出てくる
全スペックが現行ＩＳを上回っている……それはつまり、最新鋭
機にして最高性能機じゃねえか

「さあ！箒ちゃん！今からフィッティングとパーソナライズをはじ
めようか！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチャーな呼び方
で――――」

「はやく、はじめましょう」

とりつく島もないとはこのことだろう
箒は束さんの言葉を取り合わずに行動を促す

「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか」

ぴ、とリモコンのボタンを押す束さん
刹那、紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る
しかも自動的に膝を落として、乗り込みやすい姿勢にと変わる

「箒ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから、あとは最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」

コンソールを開いて指を滑らせる束さん
さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出すと、膨大なデータに目配りをしていく
それと同時進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを叩いていった

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

相変わらず箒の態度は素っ気ない
過去に何かあったらしいが、俺はそのときにはすでに引っ越してしまったから詳しくはわからない
あれ？なんで引っ越したんだっけ……思い出せない

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪箒ちゃん、また剣の腕前があがったねえ。筋肉の付き方をみればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了～。超速いね。さすが私」

無駄話をしながらも束さんの手は休むことなく動き続けている

それはもうキーボードを打つと言うよりもピアノを弾いているかのような滑らかかつ素早い動きで、数秒単位で切り替わっていく画面にも全部しっかりと目を通している

八咫やパイでもこんな作業はできない。態度はふざけていても、やはり超がつくほどの天才だと、改めて実感させられる

（この機体は見るかぎりでは近接特化か？腰に左右一本ずつの日本刀型ブレード以外は何も装備してないし）

だが、さっき束さんは『自動支援装備がある』、『近接戦闘を基礎に万能型』と言っていたからなにかしらの武器が備えられているのかもしれない

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

ふと、群衆の中からそんな声が聞こえた
それに素早く反応したのは束さんだった

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る
それを別段どうでもいいように流して束さんは調整を続ける

今回は束さんに同意見だ
確かに世界が平等であったことはない
それはリアルでもＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでも同じこと

俺はまだ救えていない奴がいる
思わず拳を握り締める俺

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

束さんに言われ一夏は白式を展開させる

「データ見せてね～。うりゃ」

言うなり、白式の装甲にぶすりとコードを刺す束さん
すると、またさっきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がる

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

ちなみにフラグメントマップというのは、各ＩＳがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のこと
人間で言う遺伝子らしい

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がＩＳを使えるんですか？」

「ん？ん～……どうしてだろうね。私にもさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？イヤならあっちの方にするけど」

びしっと俺を指さす束さん
それは俺に死ねと？

「いい訳ないでしょ……」

「にゃはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

本当に適当な人だ
疑問がまったく解決されていない

「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？白式って束さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ。っていっても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけだけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使えるでしょ？超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？日本が開発してたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

べしん！と手加減なしの打撃が束さんの頭に炸裂する
もちろん手を出したのは千冬さんだ

「いたた。は～、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」

「やかましい」

さらにもう一発べしん！と束さんは叩かれる

「それで私が頼んでいたものもできているのか？」

腕を組みながら束さんにそう聞く千冬さん

それを聞いた束さんはさっきまでの笑顔がどこにやら不満げな表情に変わる

「……一応できてるよー。んじゃ、大空をご覧あれー」

さっきとは違うやる気０の束さん

しかし全員、その言葉に従って空を見上げる

ゴゴゴゴゴゴッ！

ぼこっ！

「うわっ！？」

空からまたなにかが落ちてくるものだとばかり思っていたら地面からモグラのようにずほっ！と金属の塊が這い出てきた
しかも何故か俺の真下で

「はっはっはっ！さっきと同じパターンと思ったでしょうー。甘いよ、束さんは同じネタを二度やる訳がないではないか～」

急に機嫌がよくなった束さん
確かに不意を突かれたがなんで俺の真下なんだよ、危ねえじゃねえか

「……それで？」

「それでって？」

「これで終わりか？」

「うん、そーだよ」

べしん！と再度千冬さんは束さんを叩く

「いたーい。ちーちゃん、なにするのー」

「それはこちらのセリフだ。こんな球状のものがＩＳだというのか？」

どうやら千冬さんが頼んでいたものはＩＳだったらしい

「そーらしいよ？私はけーちゃんの言われた通りに作っただけだし。あとはスケィスを使う三崎亮がなんとかするって言ってたし」

「そうか……三崎、こっちにこい……」

いきなりの呼びだしをくらう俺
正直、行きたくない。嫌な予感しかしない
でも、呼ばれたからには行くしかない

「三崎、このＩＳ？に触れてみろ」

「は？ＩＳ？」

これがＩＳと言えるのだろうか
そもそもＩＳの形をしていない。どこぞの映画になった漫画みたいな黒い球状のものだ

「なんで？」

「これはお前の専用機だからだ」

なんとこの黒玉が俺の専用機らしい

いくら打鉄を何台も壊してしまっているからとはいえ、これはないだろ

「篠ノ之博士、危険は？」

「つーん」

「らぶりぃ束さん、危険は？」

「そうだねぇー。ちょっとビリッと痺れるだけかな？」

最初の呼び方がダメだったから、あえてこの呼び方にしてみたがどうやら正解だったみたいだ

「いいから早く触れ」

くそっ他人事だからそんなことが言えるんだ

もしかしたら痺れるんじゃなくて、爆発するかもしれないじゃねえか

とはいえ、触らないと終わらないだろうし、覚悟を決めて触ろう

「……逝きます」

俺は意を決して黒玉に触れた

ドクン

「!?」

聞こえてきたのは、鼓動
この黒玉から鼓動が聞こえた

（これは……まさか）

ドクン

この鼓動はなんだかすぐにわかった
何度も聞いているのだから当然だ

ドクン

（来い）

ドクン

俺は心の中で黒玉に話しかけるように呟く

（来いよ）

ドクン

（俺は……ここにいる！）

ドクンドクンドクンドクン

俺の言葉に応えるように鼓動がどんどん早くなっていく

（スケェェェェェェェェェイス！！！！）

俺はスケィスの名前を呼んだ

しかし、俺の予想した結果とはまったく違う結果が俺を襲った

「ぐあああああああっ！！？？」

「「「！？」」」

いきなり襲いかかってきたのは激しい痛み
そのあまりの痛みに俺は悲鳴をあげた
その痛みはまるで心臓を握りしめられているかのようだった

第７２話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！

亮に専用機が！・・・と思いきやまさかのアクシデント

この展開はとっさに思いついたんだけどどうでしょうか？

感想お待ちしております！！

第７３話

「束！これはどういうことだ！？」

悲鳴をあげ、心臓を押さえながら苦しむ亮を見て激しく動揺する千冬

「うーん……私にもわかんない♪」

てへっ、と笑う束をバシッと叩く千冬

「亮兄、しっかり！」

「亮さん、しっかりしてください！？」

「亮、返事しなさいよ！？」

「亮、気をしっかりもつんだ！？」

「亮、亮！？」

とうとう地面にうずくまる亮を見て一夏たちは亮に声をかける

箒はパーソナライズの最中のため動けないが、亮のことを心配そうに見ている

「ぐあああああああああああああああああああああっ！！？？」

苦しそうに叫ぶ亮

全員の顔が一気に険しくなる

「見て！亮の身体に！？」

「赤い光……？」

一夏はあまりの光景に唾を飲む

亮の身体には赤い光の紋様が浮かび上がっている

「これって前に八咫さんから見せてもらったハセヲがスケィスを使うときに浮かび上がる紋様にそっくりだよ」

シャルロットが得意の洞察力で赤い光の正体に気づく

ドクン

「ぐおぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「「「！？」」」

がばっと起きあがる亮は天のどこまでも届くんじゃないのかと思う程の叫び声をあげる

その次の瞬間、赤い光が弾け飛んだ

「おい、リアルの俺」

真っ暗闇の中、聞き覚えのある声が俺を呼ぶ

「はあ・・・はあ・・・お前は・・・・・・俺(ハセヲ)か？」

目の前にいたのは俺(ハセヲ)だった

「それとも、スケィスと呼んだ方がいいか？」

「いや、今のお前はハセヲじゃなく亮だ。ハセヲと呼べ」

めっちゃややこしいと思うけど、まあいいか

「こうして会うのは二度目だな」

「ああ……さっそくだが、お前の中に入ってきた奴を今すぐ追い出せ」

ハセヲが言っているのは、おそらく束さんが作ってきたＩＳのことだろう
本当にさっそくだな

「あれはスケィス因子が元になった物体だ」

「スケィス因子!?なんで束さんがスケィス因子を?」

「少し考えてみればわかんだろ?俺ら以外にスケィス因子を持っていそうな奴が」

「欅か……」

確かにあいつならやりかねない
でも、なんで欅が束さんに?

「それが亮の身体の中に入って同化しようとしている」

「同化?」

「言葉通り。あのＩＳが亮の……いや、俺たちの一部になる」

「何かデメリットが？」

「……俺にもわからない。だが、考えられるのは今入り込んでいる奴に俺らが呑み込まれる危険性がある」

「そうか……ハセヲ、今俺がしようと思っていること。わかってんだろ？」

「ああ……」

「追い出しても作ってきた束さんや頼んでくれた千冬さんに悪いしな。それにＡＩＤＡが襲ってきてまたＩＳを壊すことになったらそれこそ千冬さんに申し訳ないじゃねえか」

呑み込まれても千冬さんや一夏たちに迷惑をかける
ならやることは決まっている

「止めろ、亮！」

「俺はこいつを受け入れる！きやがれ！！」

そう言って俺はハセヲの制止を振り切り、上を見上げると頭上から赤い光が俺を包み込んだ

光が収まったときには亮はその場所から消えていた

「我ながら本当に馬鹿な奴だよ……」

そう呟くとハセヲもそこからいなくなる
残ったのは重い沈黙に、ハセヲの意味深な言葉だった

「く……う……うん……」

目を開けるとそこにはギンギンに輝く太陽を防ぐパラソル
あれ？俺どうしたんだ？
確か束さんが作ったＩＳに触れた途端気持ち悪くなって……

ドガガガガーン！

「な、なんだ！？」

いきなりの爆発音に俺は飛び跳ねる
すぐにパラソルから出て俺は状況確認をした
あるのは何発ものミサイルが爆発したような爆煙に近くには真紅のＩＳと箒が威風堂々たる姿をしていた

「――――やれる！この紅椿なら！」

なにやら刀を握りしめ紅椿の力を実感している箒
俺ははっきりと見ていないからわからないが、回りの全員がその圧倒的なスペックに驚愕し、そして魅了され、言葉を失っている
そんな光景を、束さんは満足そうに眺めてうなずいている
それほど、紅椿はすごいのだろう

「……」

だが、一人だけその束さんを厳しく見つめる人物がいた
それは――

「どうしたんですか、織斑先生？そんな厳しい視線をして」

「ふん。お前には関係な…い…」

ん？
いきなりこっちに振り向いた途端、千冬さんの動きが止まる
周りもなぜか俺をまるでお化けを見たかのような視線を送っている

「亮兄！？起きたのか！」

少しの沈黙のあと、一夏が嬉しそうに駆け寄ってきた

「あー……一夏、現状報告をしてくれ」

「ああ。亮兄が束さんのＩＳに触れたら急に苦しそうに叫び出して、赤い光が亮兄の身体から浮かび上がって消えた瞬間、倒れたんだよ」

ふむ、リアルではそんなことがあったのか……

「「この……」」

「ん？」

ずどどどっと何かが近づく音が聞こえ、振り向いたら鈴とラウラがいた

「バカちんがぁぁぁっ！！」

「へぶらぁ！？」

ドゲシッと二人から仮面ラ〇ダーも驚きの跳び蹴りを喰らってしまう

「あんた！なに普通に起きて歩き回ってんのよ！！びっくりするじゃない！！」

「そうだぞ！お前はもっと自分の体のことを考えてだな――」

ぐちぐちと二人から説教をもらってしまう

まあ、心配かけてしまったのは事実だから跳び蹴りのことは仕方ないだろう

「三崎。身体はもう大丈夫か？」

そんなときに千冬さんがそう声をかけてくる

「はい。もう大丈夫です。痛くも気持ち悪くもないですから」

「そうか、束から三日間は起きないと聞いていたからな。どこか身体に異常がないか不安だったが大丈夫そうだな」

「へぇー……ええっ！？」

三日間は起きない！？

どういうことだ！？

「詳しくはわからんが、本来ならあのＩＳを扱えるようになるには三日間は必要になるらしい。眠ったままな」

なにそれ恐い

「束さんもびっくりクリクリさー！束さんはスケィス因子同士が完全に同化するには最低三日間はかかると思ってたのになー」

いきなり現れてそんなことを言う束さん

つか、少し痺れるだけと言ったくせに全然違うじゃねえか！！

「けーちゃんは一日で起きるって言ってたから賭けは私の負けかー。残念無念」

まったく残念そうには見えないんですけどね……

つか、賭けってなんだよ賭けって！

「この天才科学者・束さんの思い通りにならない男かー」

ジロジロとなめ回すように俺の体を見る束さん

「ふふふー。少し君に興味を持ったよー」

「……それは、俺ではなくスケィスでは……？」

「うーん、最初はそうだったんだけど今は君にも興味を持ったのだよー。それに君は良い目になったしねー♪」

笑顔でそう言う束さんたが、さっきまでの子供みたいな笑顔とはまた違う妖艶な大人の笑みを浮かべていた

俺はその笑みを見て背筋が寒くなった

そういえば、束さんと初めて会ったときのことを思い出した

『君、目が腐ってるから嫌ーい』

小さいころから束さんは初対面の人に問答無用だった

普通そんなこと思ったとしても言わない。まあ束さんが普通ではないと感じてはいたんだがな

「それじゃあ箒ちゃんの試運転が終わったところで、りょーちんのスケィスを起動させてみようか！！」

「りょ、りょーちん？」

なんだよ、そのあだ名は……

「どうしたの、りょーちん?早く〜」

急かすように言う束さん
その『りょーちん』ってあだ名はどうにかならないものだろうか?
あだ名で思い出したが前の俺のあだ名は目が腐っているから『目腐(めくさ)』
と呼ばれていた
ヤバい
思い出しただけで泣きそうになるよ

「わかりました。やってみます……」

そう言って俺は目を閉じる

(来い)

ドクン

（来いよ）

ドクン

（俺はここにいる）

ドクンドクンドクンドクンドクンドクン

「スケェェェェェェェェェイス！！」

俺がスケィスを呼んだ瞬間、俺の体に黒いＩＳが俺の体を包み込んでいた

第７３話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

亮の専用機の初始動！！
どうなるかは明日のお楽しみ

感想お待ちしております！！

第７４話

「……」

うん、特に問題はないむしろ調子がいいかもしれない

「展開は問題ないみたいだね。んじゃ、次はこれを撃ち落としてみてね、ほーいっと」

言うなり、束さんはいきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出す
さっきの爆煙の正体はこいつか！
光の粒子が集まって形を成すが、その十六連装ミサイルポッドが二台もある

（ということは三十二発のミサイルが俺に！？）

そう思った瞬間一斉射撃を行った

「亮兄！」

「このやろう！！」

俺は大鎌を呼び出し、力を込めて横一閃
すると大鎌からエネルギー波が飛び出て三十二発のミサイルを全弾撃墜した

だが、エネルギー波はそれで消えることなくそのまま海に一直線
当たった瞬間、水しぶきが俺のいる高さ（約二百メートル）まで上がっていた

「……」

あまりの威力に一夏たちだけではなく、俺でさえかなり驚いていた

多分、打鉄でやっていたらこんな威力は出なかったと思う

それほど束さんが作ったこのＩＳの性能がすごいんだ

「うおおー！これはすごいねー。出力が前のデータより数段に上がっているよ！さすが私、さすがスケィス」

俺のことは褒めてくれないんですね、わかります

でも確かに束さんはすごいと実感できる

「あれ？なんか亮のＩＳ、少し装甲が違わない？」

地上に降りた俺にそう言ってきたシャルロット

確かにスケィスの黒と赤だけだった装甲がところどころ白と金がある

「ああ。これは『第二形態移行（セカンドシフト）』したんだ」

「えっ！？一体いつ『第二形態移行（セカンドシフト）』したのですの？」

「ラウラに取り憑いたＡＩＤＡを駆除したときだ。データドレインの効果が変わっていたから八咫や欅に聞いてみたら、おそらくそれだって」

「あ、あのときか……」

なんか居心地が悪そうな顔をするラウラ

まだあのときのことを引きずっているのか？

「気にすんな、って言っても難しいだろうけどさ。そんな気負うなよ。そのおかげでスケィスが『第二形態移行（セカンドシフト）』したんだ。俺は感謝しているよ。ラウラと出会えたことにさ」

「そ、そうか。私も嫁に会えて嬉しいぞ！」

うん、嫁じゃないからな

「ふむふむ。りょーちん、スケィスは普通のＩＳと違って防御性能は０、攻撃・速度特化した機体、というのは知っているね」

「ええ、まあ」

それは八咫や欅から聞いているからな

「第二形態移行したおかげで少しは防御力が上がったけど、蟻に羽が生えたくらいの意味の無さだから当てにしない方がいいね」

やっぱり、そうか……

「さらにその影響でりょーちんとスケィスの神経がより強く繋がっちゃったからダメージをもらうとより近いダメージが、りょーちんに行くようになっているからね♪」

おいおい、可愛い笑顔で恐ろしい言葉を吐きやがりましたよ、この方は

「そ、それって具体的に言うと……？」

「そうだねー。今までは激痛だけが走っていたけど、これからは激痛だけじゃなく、傷もりょーちんにフィードバックされると思う」

束さんが一息ついて話を続ける

「もし箒ちゃんの紅椿の刀で肩を斬りつけられてスケィスの装甲に傷がついたらその分のダメージがりょーちんの身体に傷がつくのだよー！」

いや、そんな自慢げな顔でそんなこと言われてもどう反応したらいいか、まったくわからねえよ

「それじゃあ、亮兄がスケィスを使うということは……」

「自分の命を削ることと同じ……」

一夏と箒の言葉に周りにいる一同が黙り込んでしまう

「いやいや、なんで黙り込んでんだよ。別に余命一ヶ月とか言われた訳じゃねえんだから……」

「馬鹿者！」

バシンッと千冬さんに頭を叩かれる

「どうやら貴様はわかっていないようだな……」

千冬さんの目を見てすぐにわかった

いつもの叱るときの目ではない。本気で怒っているときの目だ

周りを見てもみんな千冬さんみたいに怒った顔をしている
でも、なんでだ？
俺はなにがわかっていないんだ？

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

いきなりの山田先生の声に、千冬さんは俺に向けた鋭い視線を止めて向き直る
いつも慌てている山田先生だが、それにしても今回はその様子が尋常ではない

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の、その画面を見て千冬さんの表情が曇る

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら、千冬さんと山田先生は小さな声でやりとりをしている
しかも、数人の生徒の視線に気がついてか、会話ではなくなんと手話でやりとりはじめた

（普通の手話じゃねえな……）

テレビのニュースで手話で伝えているところを見たことがあるが、あれは初めてみる
おそらく特別な手話なんだろう

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。――全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬さんはパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒がしくなる
しかしそれを、千冬さんの声が一喝した

「とっとと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「「は、はいっ！」」」

全員が慌てて動き始める
それほど、緊急事態なんだ

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

妙に気合いの入った返事をしたのは、今さっき一夏の隣に降りてきた箒だった

「ちょっと待ってくれ！俺は？」

箒も専用機持ちになったから呼ばれたのはわかる。でもそれは俺も同じこだ
なんで俺が呼ばれないんだよ

「……お前も自室内待機だ。異論は認めん」

「な、なんで！？」

「自分で考えろ。行くぞ」

そう言うと千冬さんは一夏たちを連れて旅館へと行ってしまった
そこにいたはずの束さんもどこかに行ってしまったらしく、俺はひ

とり取り残される

「なんでだよ……俺のなにが悪いんだってんだよ……」

取り残された俺はただそう呟くことしか出来なかった

第７４話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

ようやく、専用機を手に入れた亮だが、緊急事態の作戦メンバーにはなれず、自室待機
それは何故？

つーか専用機にひねりがなくてすみません

感想お待ちしております！！

第７５話

「……」

今頃、一夏たちは作戦会議が行われているはずだ
そんな俺は自室内待機をしているが納得はしていない
なんで俺が自室内待機なんだよ！

「……くそっ」

ダンッと机を叩く俺
苛立ちがどんどん高まっていく。そんなときだった

ピピピピ！

「……電話？」

そんなはずはない
この臨海学校では携帯電話は持ち込み禁止だからだ
山田先生が忘れていったという可能性もあったが、さすがにこの緊急事態に携帯電話を忘れるなんて考えにくい

「……もしもし」

『あっ！ハセヲさんこと三崎さん、調子はいかがでしょうか？』

出てみたら聞き覚えのある声だった

「欅か……」

『はい♪』

嬉しそうな声で返事をする欅

なんでお前が電話に……それにこの携帯はどうやって準備したのやら……

『篠ノ之博士に三崎さんは自室内待機をしていると聞きまして、話し相手をと』

「……切るぞ」

『冗談ですよ、冗談。三崎さんに良い情報をと、思いまして』

「情報……？」

『今、起こっている特命任務についてですよ』

なんでお前がそんなことを知ってやがんだ、とツッコミを入れたい所だが俺もかなり気になっていた

「教えてくれ……」

『はい♪ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ【銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）】が制御下を離れて暴走しました。監視空域より離脱したんです』

「それで……？」

『その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過するらしいんです。時間にして今から二十分後。学園上層部により、ＩＳ学園の教員・専用機持ちの生徒が対処することになったんです』

二十分後って、もうすぐじゃねえか！？

『作戦会議の結果。紅椿と白式による奇襲です』

おそらく束さんがなにか言ったのだろう

でなければ、今日初めて専用機を動かした箒が作戦に参加できる可能性は低い

「……なんで俺はこの任務から外されたんだ？」

『それはわかりません。なにかやってしまったのでは？』

それがわからないからイラついてんだよ

『では作戦開始したらまた連絡しますので！ではでは～』

そう言って電話が切れる

電話を置くと俺は畳の上で寝転がった

「俺はなんもできねえのかよ」

俺は目を閉じて櫂の連絡を待った

時刻は十一時半
七月の空はこれでもかとばかりに晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる
砂浜で一夏と箒はわずかに距離を置いて並んで立ち、一度目を合わせてうなずいた

「来い白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がぱあっと光に包まれ、ＩＳアーマーが構成される
それと同時にＰＩＣによる浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身の感覚が変化した

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦の性質上、移動のすべてを箒に任せ、一夏が背中に乗っかる形になる
それを最初に聞いた箒は嫌そうだったが、今は機嫌がいい

そこに一夏は不安を感じた

（大丈夫なんだろうか……？何かあったら俺がフォローしないとな）

そう思い、気を引き締める一夏

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるかわからない。十分注意をして――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？恐いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒――」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……」

専用機が手に入ったことが相当嬉しいのか、かなり浮かれている一夏はすっきりしない不安をかかえたまま、箒の操る紅椿の背中へと乗った

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

ＩＳのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえ、二人はうなず

いて返事をした

『今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチダウン）だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

箒のそれは一見落ち着いた返事のようだが口調は嬉色に弾み、どこか浮ついている

『――織斑』

「は、はい」

一夏に今し方まで使っていたオープン・チャンネルではなく、プライベート・チャンネルで千冬の声が届く

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかを仕損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます……あの織斑先生」

『なんだ？』

「やっぱり亮兄もこの作戦に参加した方が良かったんじゃ……」

『……お前にもわかるだろ。あいつは間違っていることが』

「それは……」

どうやら一夏も亮が作戦に呼ばれなかった理由がわかっているようだ

『それがわからん限り、スケィスは一切の使用を禁止するつもりだ……例え、ＡＩＤＡが出ようとな……』

そう言って千冬はオープンに切り替わり、号令をかけた

『では、はじめ！』

――――作戦、開始

第７５話（後書き）

連続投稿継続中！！！

感想お待ちしております！！

第７６話

ピピピピピピピピピピピピッ

「はっ！？」

鳴り続ける電話の着信音
どうやら眠ってしまったようだ
時刻は四時前
寝てからすでに三時間以上も経っていた
俺はすぐに電話を取った

『もしもし？やっと起きたみたいですね。作戦開始したときに電話したのに出ないから心配しましたよ』

「さ、作戦はどうなった？」

『……失敗しました。しかも、そのときに織斑一夏さんが負傷し、今もまだ目覚めていません』

「なっ！？」

欅の予想外の報告に俺は驚愕した

『原因は意気消沈した篠ノ之箒さんを庇ったためです』

「そうか……」

そう言って俺は立ち上がって部屋のドアを開け外に出た

『どうするつもりですか？』

「その銀の福音って奴を叩きのめす……」

『三崎さんは自室内待機では？』

そんなの関係ない

俺は無視してスケィスを展開しようとするが――

「……！？」

感じない

スケィスの鼓動が……

「なんでだ！！」

『……どうやら三崎さんはスケィスに拒絶されているみたいですね』

拒絶だと？

『とりあえず部屋に戻りましょう。見られたら面倒ですしね』

「ちっ……」

確かに欅の言う通りなため俺は自室に戻った

でも、なんでだ？なんで俺がスケィスに拒絶される

『まずはどのように作戦を失敗したか映像を見ながら説明しましょう』

携帯電話からモニターが現れ映像が映し出される
無駄に高性能な携帯電話のようだ

『最初の奇襲は福音の性能によって回避されます』

映像は全身が銀色のＩＳと一夏の白式だ
一夏の零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避けている

『凄いですね～。さすがは【重要軍事機密】ってところでしょうか？』

「……続けてくれ」

『はい♪なんとか一撃を浴びせようと必死に攻撃しますが、福音の羽のようなエネルギー弾で悪戦苦闘を強いられます』

しかも、突き刺さった瞬間に爆発してしまう
それに広範囲でかなりの連射速度
これを避けるのは難しい

『ふたりは必死の戦闘により隙を見つけ、攻撃をしますが、ここでアクシデントが起きました』

「これは船？」

『しかも密漁船です。白式はその密漁船を庇いエネルギー切れ、その時点で作戦は失敗。次は、最悪の事態、一夏さんが箒さんを庇っ

て負傷した映像と音声です』

「何をしている!?せっかくのチャンスに――」

「船がいるんだ!海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か!」

一夏が光弾をかき消した瞬間、雪片弐型の光の刃が消え、展開装甲が閉じる
エネルギー切れの証拠だ

「馬鹿者!犯罪者など庇って……そんなやつらは――!」

「箒!!」

「ッ――!?」

「箒、そんな――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う
その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えた

具現維持限界（リミット ダウン）――それは、エネルギー切れということだ
それに気づいた一夏は刀を捨てて一直線に箒へと向かう

「箒ぃぃぃっ！！」

最後のエネルギー全てを使っての瞬時加速
そして福音は再び一斉射撃モードへと入り、箒に照準を絞っていた

エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしくもろい。なので連射攻撃
を一度に受けたらひとたまりもない

それがわかっている一夏は必死に瞬時加速をした
結果、福音と箒の間に割って入ることができた

「ぐあああああっ！！」

箒を庇うように抱きしめた瞬間、あの爆発光弾が一斉に背中に降り
注いだ

「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！」

「う・・・ぁ・・・・・」

そのままふたりは海へと真っ逆さま
最後に一夏が最後の力を振り絞って箒の頭を守るように抱きしめて
海へと落ちた

「……」

『どうでしたか？』

映像が消え黙り込んだ俺に話しかける欅

「一夏はよくやった……あれは仕方ないことさ……」

『箒さんにも同じことが言えますかね？』

「よく言うだろ？若さゆえの過ちってさ。力を手に入れたら浮かれてしまうのもよくある」

俺も昔はそうだったからな

「それで福音は今、どうしてんだ？」

『今は、ここから三十キロ離れた沖合上空にいます。ステルスモードに入っているみたいですね』

相変わらずそういう情報はどうやって調べているのやら

『どうします？』

「どうするもなにもスケィスを使えない今、俺は俺ができることをやる」

『なるほど、冷静ですね……おや？』

「どうした？」

『どうやら、できることをやろうとしているのは三崎さんだけではなさそうですよ♪』

欅の言葉に俺はすぐに誰たちを指しているのかわかった

まあ、あいつらが仲間がやられて黙っている奴らじゃねえだろうからな

そんじゃあ、俺もできることをやるとするか

第７６話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！

まさかのスケィス使用不能！？

感想お待ちしております！！

第７７話

それは一夏がまだ小学二年だった頃のことだ
千冬に付き合わされる形ではじめた剣道も一年が経ち、それなりに様になっていた

（ったくよー。あいつはー……）

道場の娘で同い年の女子とは、どうにも馬が合わない
今朝も朝練で衝突して試合に発展、胴薙ぎ一本で負けた日だった

（あーくそー……勝てねえかなぁ……勝ちてえなぁ……）

そんなことを考えながら、一夏はぶすっとした顔で教室の掃除をしていた
自分以外のクラスメイトはサボって遊びに行っているのを知ってはいたが、別にどうとも思わないるだけだ、と

「おーい、男女～。今日は木刀持ってないのかよ～」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな～」

「……」

女子は答えない
三人の男子が取り囲んで一人の女子をからかっている
そんな状況の中で、けれど少女は凛とした眼差しで相手を睨み、一

歩も引こうとはしない
――その女子の名前は、箒といった

「やーいやーい、男女～」

「……うっせーなぁ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

いい加減、無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に向かってそう言い放つ

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

古今東西、子供のからかいというのは度し難い
そしてそれは、たとえ同い年であろうとも一夏には不快きわまりなかった

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。まじめに掃除なんかしてよー、バッカじゃねーの――おわっ！？」

いきなり、箒が男子の胸ぐらを掴んだ
何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉にだけは反応した

「まじめにすることの何がバカだ？お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」
強靱な腕で締め上げられてもがく男子とは別に、残りのふたりはまだニヤニヤと笑いを浮かべている
「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」
（うわ、出た。夫婦夫婦ってこいつらそういうの好きだなー。飽きたっつうの）
箒の道場に通うようになってから、そう言われたのは別に一度や二度ではない
そもそも両親がいない――つまり夫婦の概念が希薄な一夏にとっては痛くもかゆくもない
「だよなー。この間なんか、こいつリボンしてたもんな！男女のくせによー。笑っちま――ぶごっ！？」
今度は、一夏が怒りをあらわにした
それだけでは済まず、顔面に拳を叩き込む
ぽかんとしている男子をよそに、一夏は倒れた相手を片腕で立たせて締め上げた
「笑う？何がおもしろかったって？あいつがリボンしてたらおかしいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？なんとか言えよボケナス」
「お、お前っ――――！！先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る」

それは三人相手に大立ち回りした一夏が、騒ぎを聞きつけてやってきた教師に取り押さえられて終わった
普段から剣道だけでなく千冬に体術を習っているせいもあって、三人相手でも一夏は引けを取らないどころか圧勝だった
しかし、それがまずかった
馬鹿な子供の親は馬鹿というのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎ立てる馬鹿な生き物が三匹いた

一夏は気にもとめなかったが、そのせいで無意味に千冬が頭を下げさせられているのが許せなかった

『問題を起こせば千冬姉の迷惑になる』

そのことを学んだ一夏は、以後しばらくは穏便な方法で馬鹿な男子を撃退した

「……お前は馬鹿だな」

「あん？何がだよ。馬鹿じゃねえよ馬鹿」

数日後、放課後の修行を終えて顔を洗う一夏に、珍しく箒が声をかけてきた

「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか」

「ん？ああ、あのことか。そうだな、考えねーな。許せねえやつはぶん殴る」

それで一度、千冬からひどくお叱りを受けたことがあったが、けれどこれは曲げられないことだった
それが一夏にただひとつある譲れないことだった

「大体、複数でっていうのが気に入らねえ。群れて囲んで陰険なんざ、男のクズだ」

「……」

「だから、お前も気にすんなよ。前にしてたリボン、似合ってたぞ。またしろよ」

「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

腕を組んでそっぽを向く箒に、そーかと返事をしてまた顔を洗う一夏

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ之」

「――だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。いい加減、覚えろ。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」

「わかった。俺は割と、身近なやつの指図は受ける。――じゃあ、一夏な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。織斑はふたりいるから、俺のことも一夏って呼べよな」

「う……む」

「わかったか、箒」

「わ、わかっている！い、い、一夏！これでいいのだろう！？」

「おう、それでいいぜ。……指図じゃなくて頼みなら聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

最後に強がりを残して立ち去る箒を、一夏はおかしなやつだなぁと思いながら見送った
季節は六月
もう夏はすぐそこまで来ていた

だが、その前にもうひとつの出会いを成していた

第７７話（後書き）

連続投稿継続中！！

皆様おわかりかと思いますが次回はあいつが登場！！

感想お待ちしております

第78話

「来たか、織斑一夏」

「……」

放課後、一夏は人通りの少ない旧校舎の教室に来ていた。いや、今一夏の周りを囲んでいる男子たちに呼び出されたの方が正しいかもしれない
そして、目の前にはリーダーらしき男子とその男子に腕を掴まれている女子がいた

「お前ら、箒を離せ！」

その女子は箒だった
一夏の言葉にリーダーは鼻で笑って返す

「うるせーよ。黙ってないとこいつがひどい目に会うぞ」

「ぐっ……」

どうしてこのような状況になっているかと言うと、放課後、一夏はいつも通り家に帰ろうとしたが下駄箱に一通の手紙が置かれていた

『男女を預かった。返して欲しければ、旧校舎の教室に来い』

その手紙を読んだ一夏はくだらないイタズラだと思っていたが、手紙の中から落ちたあるものを見て本当のことだと理解した

それは最近、箒がいつもしていたリボンである
一夏はすぐにリボンを拾って旧校舎へと駆けだした

「お前、最近調子にノリ過ぎなんだよ」

「だからってやりすぎじゃねーか！早く箒を離せよ！」

リーダーらしき男子は一夏よりも二回りほど大きい。おそらく高学年の男子だろう
まわりにいるのも高学年らしき男子だが、ひとりだけ見覚えのある男子がいた

「お前はあのとき俺が殴り飛ばした……」

「あのときはよくもやってくれたな、織斑！今、ここで恨みを晴らしてやる！頼むよ、兄ちゃん」

どうやらリーダーは一夏が殴り飛ばした男子の兄のようだ
これまたよくありそうなシーンだが、状況はピンチである

「一夏、私のことはいい早く逃げろ！」

「馬鹿！男がそう簡単に逃げる訳にいくか！俺は箒を助ける！」

「おいおい、状況を理解してないみたいだな」

リーダーは箒の髪を掴んで一夏に言う

「逆らうと、こいつがどうなるかわからねえぞ？それに……」

「そのリボンは……！」

「これは本物のリボンだ。お前が持っているのは偽物のリボン。わざわざ買いに行ったんだ」

それはご苦労様と言ってやりたいところだが、そんな余裕はない

「お前が下手な動きをすれば、こいつを引きちぎるからな」

「なっ！？」

リーダーの言葉に激しく動揺したのは箒だった

実はそのリボンは姉である束からもらったものであった

それに一夏に褒めてもらったリボンでもある

そんな大事なリボンをこんな奴に引きちぎられるなんて絶対に嫌だった

「リボンを返せ！！」

「なっ！こいつ！」

箒はリボンの端を掴んで取り返そうとする

リーダーもさせまいと引っ張り返すが、それがいけなかった

ぶちっ

「あっ！？」

両端から引っ張ってしまったせいでリボンが千切れてしまう

「……ぅ……ううっ……」

「お、お前がいけないんだぞ。お前が引っ張ったりするから――――」

「お前ら絶対に許さねえ！！」

リボンを引きちぎられ、目に涙が溢れ出す箒
それを見た一夏は完全に怒った

「ちっ、どっちみちこの人数差で負けるかよ。お前らやっちまえ！」

リーダーのかけ声で回りにいた男子たちが一斉に一夏に襲いかかる
そんなときだった

「先生、こっちだよ！早く！」

ガラッとドアが開く音に、先生を呼ぶ声
見てみると少年がドアの前で立ち先生を急がせるように手招きしている

「せ、先生！？」

「や、やばい！逃げるぞ！！」

こんな現場、先生に見られたら怒られるだけではすまない
そう思った男子たちは少年がいない反対側のドアへと走り、廊下に出ようとする
それを見た少年はニヤリと笑う

「うわぁっ！？」

逃げようとした男子たちが先頭から順番に倒れてしまう

「な、何やってんだよ！」

「いや、足になにか引っかかって……」

「いいからどいて！重い！」

「おい！こんな所に縄跳びが！？」

もがきながらもなんとか立ち上がった男子たちはドアに仕掛けられていた縄跳びに目がいく
どうやらこの縄跳びに足が引っかかったみたいだ

「馬鹿な奴らだな。ちゃんと足下を見ねーからそんな簡単な罠に引っかかるだよ」

「お、お前が仕掛けたのか！」

くくくっと笑う少年を見て男子たちはその少年を睨みつける

「おい、こいつ、三崎亮じゃねえか？」

「あの先生の前だけ良い子ぶっている優等生か！」

どうやら高学年の男子たちには悪い意味で有名人らしく、恨みがこもった視線を送る

「んな、怖い目をすんなって先生が来るって言うのは嘘だからさ」

「なんだと！？」

「でもさ。こんな簡単な罠に全員引っかかるなんてマジでウケるよ」

「この野郎！」

「お前もついでにぶっ飛ばしてやる！！」

男子たちが一斉に亮に向かって殴りかかるが――

「「「いってえええええええええええっ！！？？」」」

「お前らって学習しない生き物なのか？」

「痛いよ！足が痛いよ！？」

「これは画鋲！？また三崎が仕掛けていたのか！？」

「お前らが俺に殴りかかることなんて簡単に予想出来たからな」

「こいつ～～～！！」

完全に頭に血が昇った男子たちは下の画鋲に注意しながら向かうが――

「二度あることは三度あるっていうけど、今回はそんなことないからな」

「はっ？何を言って――」

どささっ

「へ、蛇！？」

「蜘蛛！？」

「蛙！？」

亮に襲いかかろうとする男子たちの頭上から蛇・蜘蛛・蛙が落ちてきて男子たちにくっ付いた
ここは旧校舎、しかも木で作られた校舎なため居てもおかしくない

「「「うわあああああああああああああああああああっ！！？？」」」

男子たちはその場から逃げる者もいればあまりの出来事に気絶してしまう者もいた

「まあ作り物なんだけどねー。本当に単純な奴ら」

「て、てめえ！三崎！どういうつもりだ！」

リーダーは笑いながら教室に入ってきた亮にそう言った
亮は一通の手紙を取り出す

「いやさあ、そこの子がこの手紙を落としていってさ。読んでみたら脅迫状じゃん？しかも旧校舎には俺が集めたコレクションもあったから使ってみようと思ったら、ここまで上手くいくなんて本当にびっくりだよ」

どうやら慌てていた一夏が落としてしまったようだ
亮は笑いながらリーダーを見る

「さて、どうする?残っているのはお前と弟だけみてーだけど」

「に、兄ちゃん……」

「だ、大丈夫だ。こいつは勉強しか出来ない。ひょろっちい奴だ。だからさっきも罠でみんなを倒したが1対1なら俺の方が有利だ」

拳を鳴らしながらリーダーは亮を睨みつける

「さあて俺たちを馬鹿にしたことを後悔させてやる!!」

「……バーカ」

ばきっ!

「ぐあっ！？」

亮はリーダーの拳を避け、そのままカウンターの拳をリーダーの顔へと叩き込んだ

「俺は一人一人相手にするのが面倒だからああいう方法をとったんだよ。それに……」

「っ！？」

小学生とは思えない笑みを見せた亮を見てリーダーだけではなく、一夏と箒も悪寒を感じた

「お前らが痛み苦しむ姿を見たかったんだよ」

「ひっ！？」

「さて、このままお前をボコボコにするのも悪くねえが、俺の言うことを聞いたら許してやるよ」

「ほ、本当に！」

「ああ、もちろん。ひとつはもうこのふたりと俺に近づかないこと、ふたつは今日の出来事を誰にも話さないこと。もし破ったら……」

「ひいぃっ！？」

亮が携帯の画面を見せるとリーダーの表情が歪む

「この写真を先生に見せたり、ネットにばらまく」

ニヤリとまた笑う亮

写真とは、男子たちが一夏を取り囲んでいるところや、リーダーが篝を泣かせているところ、さらに男子たちが作り物の蛇・蜘蛛・蛙を見て気絶している写真である

そんなものを見せられたら大変なことになってしまう

「わかったか？」

「わ、わかりました！」

「それじゃあ、とっととここから失せろ。じゃねえと……」

「ひっ！？おい、帰るぞ！」

「う、うん！？」

ふたりはものすごい勢いで部屋から出て行った

「篝！大丈夫か！？」

「う、うむ……でも……」

引きちぎられたリボンを見てまた涙が溢れ出す篝

「よお、お前ら怪我はないか？」

「っ！」

亮が話しかけると、一夏は箒を庇うようにして立ち塞がる

「そんな怯えなくてもなにもしねえよ。まあ、その様子じゃあ怪我はなさそうだな」

「なんで俺たちを助けた？」

「ん？困っている奴を助けるのに理由がいるのかよ」

「！！」

亮の言葉にハッとする一夏
自分でも困っている人がいたら助けるかもしれない、そう考える

「まあ、さっき言ったみたいに泣いて苦しむ奴を見るのが面白いというのも本当だがな」

「なんだよ、それ……」

「それよりもだ……おい、そこの女子」

亮が呼ぶと箒はびくっと体を震わせながらも鋭い視線を向けている

「ちょっと、そのリボン貸してみ」

「嫌だ」

即答する箒

さすがの亮も涙を流す女の子の対処は苦手みたいで少しうろたえる

「それじゃあ、見せるだけでいいからさ」

「箒」

「……わかった」

一夏にも頼まれたため箒は渋々リボンを見せる

「ん～……これならなんとか直せるかもしれないぞ」

「！！本当なのか？」

「ああ、家庭科室にあるミシンを使えばな」

「……なんでそんなに親切にする？私と一夏はお前と初対面なんだぞ」

「強いて言うなら俺はお前らを気に入ったってところかな。で、どうする？来るか、来ないか」

「「……」」

一夏と箒が亮と出会った六月の中旬

夏休み、一夏と箒は楽しい時間を過ごすが、亮にとって最悪な時間を過ごすのだが、それは別のお話

第７８話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

前回は本当にすみませんでした
今回は亮が活躍しましたね。次回は元の時間帯に戻りますお楽しみに

アンケートの期限は決めていません
皆様のご意見をお待ちしております！！

第７９話

「……」

旅館の一室
亮が起きる前の時間帯
ベッドで横たわる一夏の傍らに控える箒は、もうずっとこうしてうなだれている
リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちまでも表しているようだった

（私のせいだ……）

不意思い出した思い出の中でも一夏は笑っていた
けれど、その笑顔は今はない。ただ力なく横たわっているだけだ

ＩＳの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏の体の至る所に包帯が巻かれている

（私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に――――！！）

ぎゅうっとスカートを握りしめる
その拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた
自らを戒めるかのように、強くただただ強く

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ』

海から引き上げられ、どうにか旅館に戻った箒を待っていたのはそ

の言葉だった
千冬は一夏の手当を指示して、すぐにまた作戦室へと向かう
箒は責められないことがまた一層辛かった

（私は……どうして、いつも……）

いつも、力を手にはいるとそれに流されてしまう
それを使いたくて仕方がない
わき起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある

（なんのために修行をして……！）

箒にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった

――――枷（リミッター）

自らの暴力を押さえ込むための、抑止力
けれど……それは非常に危うい境界線なのだと思い知る
薄い氷の膜のように、ほんのわずかな重みで壊れてしまう

（私はもう……ＩＳには……）

そこでふと、もうひとりの人物を思い浮かべた

（亮はこんな苦しみを感じていたのか……）

亮のＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでの記録で、スケィスが暴走して仲間を傷つけてしまったことがあった
強大な力を手に入れた優越感に浸り、それを意味もなく振り回した

挙げ句の出来事
今の自分に限りなく近いと感じた

（亮はどうやってこの苦しみから這い上がることが出来たのだろう……）

思考の海に溺れかかっていると、突然ドアが乱暴に開く

バンッ！という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力はない

「あー、あー、わかりやすいわねぇ」

遠慮無く入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやってくる
その声は――――鈴だった

「……」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど箒は答えない。答え、られない

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんでしょ？」

「……」

「で、落ち込んでますってポーズ？――――っざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせる

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうＩＳは……使わない……」

「ッ――――！！」

バシンッ！

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる
そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた

「甘ったれてんじゃないわよ……専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは――――」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する
そこにあるのは真っ直ぐな闘志
怒りにも似た、赤い感情

「戦うべきに戦えない、臆病者なわけ！！」

その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた

「――――ど……」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

「どうしろと言うんだ！もう敵の居所もわからない！戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった箒を見て、鈴はふうっとため息をついた

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが――」

言葉の途中でドアが開く
そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった

「出たぞ。ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを鈴はにやりとした顔で迎える

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアこそどうなのよ」

「ああ、それなら――――」

ラウラがドアの方へと視線をやる
そして、それはすぐに開かれた

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

亮以外の専用機持ちが揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は――――」

ぎゅうっと拳を握りしめる箒
それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった

「戦う……戦って、勝つ！今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！」

部屋から出る箒たち
そのとき、箒は鈴たちの後ろ姿を見てあることを思った

（そうだ……亮の回りにはいつも仲間がいた）

それは心許せる仲間
傷つけてしまった者（クーン）も今では笑顔で笑い合う仲だ

（亮はその回りの仲間を守るために苦しみを乗り越えて、ここにいるんだ）

箒は再び拳を握りしめた

（私はこの紅椿で一夏を亮を……仲間を守る！）

そう心に誓った箒は仲間たちの後ろを追った

第７９話（後書き）

連続投稿継続中！！！！！！！！！！

くそ！！！！

箒はどっちにするべきなのかわからない！？

どっちの意見もなるほどと思える考えで選べない・・・・

しかし、いつかは決めなくてはいけない・・・・頑張らなければ・・・

感想お待ちしております！！

第８０話

ざぁ……ざぁぁん……

（ここは……？）

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかぬ砂浜の上を一人歩いていた

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気
海から届く潮の匂いと波の音
それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽

（夏……なのか？今は……）

ここがどこで、今がいつなのかわからない
一夏はなぜか制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた
手には、いつ脱いだのか靴がある

「――――。――――♪～♪」

ふと、歌声が聞こえた
とてもきれいで、とても元気な、その歌声
一夏はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める

さくさく

さくさくと
足下の砂が軽快に鳴る
「ラ、ラ～♪ララ♪」
少女は、そこにいた
波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように躍る
そのたびに揺れる白い髪
輝き、眩いほどの白色
それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った
（ふむ……）
一夏はなぜだか声をかけようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす
一夏はぼーっと少女を見つめた
ざあざあと波の音が聞こえる
時折吹く風は心地よくて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた

「……」

海上二〇〇メートル
そこで静止していた銀の福音は、まるで胎児のような格好でうずくまっている
膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む

――――？

不意に、福音が顔を上げる
次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した

（敵機接近まで……四〇〇〇……三〇〇〇――くっ！予想よりも速い！）

あっという間に一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る
その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上撃ち落としながらラウラへ接近していた
福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右

手を伸ばす

――避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた

「――セシリア！！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる
青一色の機体――ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった

『敵機Ｂを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を真後ろから別の機体が襲う
それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩すけれどそれも一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して《銀の鐘（シルバーベル）》による反撃を開始した

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ
防御の間ももシャルロットは得意の『高速切替（ラピッドスイッチ）』によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する

加えて、高速機動射撃を行うセシリアと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ
三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗をはじめる

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を計る

「させるかぁっ！！」

海面が膨れあがり、爆ぜる
飛び出してきたのは真紅の機体『紅椿（あかつばき）』と、その背中に乗った『甲龍（こうりゅう）』であった

「離脱する前にたたき落とす！」

福音へと突撃する紅椿
その背中から飛び降りた鈴は衝撃砲を一斉に発射する

『！！

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ

「やりましたの！？」

「――――まだよ！」

『《銀の鐘》最大稼働――――開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける

――刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった

「くっ！！」

「箒！僕の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、箒の紅椿は機能限定状態にある
展開装甲を多様したことから起きたエネルギー切れん防ぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定し直した
もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからこそである

集団戦闘の利点を最大限に生かした役割分担であった

「それにしても……これはちょっと、きついね」

そうこう言っている間にもシールドが一枚、完全に破壊される

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「言われずとも！」

「お任せになって！」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃をはじめる

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下から鈴の突撃
双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの衝撃砲を浴びせる
――狙いは頭部に接続されたマルチスラスター《銀の鐘》

「もらったあああっ！！」

エネルギー弾を全身に浴びながら、しかし鈴の突撃は止まらない
同じく衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、
ついにその斬撃福音の片翼をを奪った

「はっ、はっ……！どうよ――ぐっ！？」

片側だけの翼になりながら、それでも福音は一度崩した姿勢をすぐ
に立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む
脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破
壊し、海へと墜とす

「鈴！おのれっ――！！」

箒は両の手に刀を持ち、福音へ斬りかかる
その急加速に一瞬反応を失った福音の、その右肩へと刃が食い込んだ

「獲った――！！」

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひ
らで握りしめる

「なっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるがお構いなしに
福音は両腕を最大にまで広げる
刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す
そしてそこに、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた

「箒！武器を捨てて緊急回避をしろ！」

しかし、箒は武器を手放さない

（……ここで引いて、何のための……）

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる

（何のための力かっ！！）

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする
その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に答えるように開き、エネルギー刃を発生させる

「たあああああっ！！」

かかと落としのような格好でエネルギー刃の斬撃が決まる
ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった

「はっ、はぁっ、はぁっ……！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく

「私は……大丈夫だ。それより福音は――」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ

「!?」

球状に蒸発した海はまるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった

その中心、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くかのようにうずくまっている

「これは……!?一体、何が起きているんだ……?」

「!?まずい!これは――『第二形態移行』だ!」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける

『キアアアアア……!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音は箒たちに襲いかかった

ざあ、ざあん……

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた
その歌は、その踊りは、なぜだか一夏をひどく懐かしい気持ちにさせる

（あれ？）

ところが、ふと気がつくと少女の歌は終わっていた木から離れて少女の隣へと向かう

ざあ、ざあ、と

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない
一夏もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった

きょろきょろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も聞こえない

「うーん……」

一夏は仕方なく木のソファに戻ろうと体を反転させる
すると――背中に声を投げかけられた

「力を欲しますか……？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中――膝下までを海に沈めた女性が立っていた
その姿は白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった

「力を欲しますか……何のために……」

「ん？んー……難しいことを訊くなぁ……そうだな。友達を――いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？単純な腕力だけじゃねて色んなことでさ」

一夏は、いまいち自分の中でもまとまっていないことなのに、妙に饒舌に喋っていた
話しながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつつ、言葉は続いていく

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ？道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う――仲間を」

「そう……」

「だったら行かなきゃね」

「えっ？」

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた
人懐っこい笑み
無邪気そうな顔でじいっと一夏を見つめている

「ほら、ね？」

「ああ」

一夏がうなずくと、いきなり変化が訪れた

「な、なんだ？」

――空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめる
その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく
夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ

「……」

「よう。なんのようだ、俺（りょう）」

何もない真っ暗闇の空間
今、あるのは二筋の光にその光を浴びている亮とハセヲ

「誤魔化すな。お前なんだろ？スケィスを使えないようにしてんのはよ」

「ああ」

さらっと真実を吐くハセヲ
別に知られても構わないようだ

「なぜだ？なぜ、使えないようにする？」

「さあっ。なんでだろうな」

「もしかして、俺が作戦に外されたのにも関係があるのか？」

「大正解。今日の俺（りょう）は頭が冴えているみたいだ」

「はぐらかすな！俺はなにがいけなかったんだ。なにがわかっていないんだ！」

その答えを知らないと俺は前には進めない
そんな気がするんだ

「頭が冴えているくせにこんな簡単なことがわかんねえのか……
しゃあねえな――」

ジャキン！

ハセヲは双剣を取り出す

「俺と戦って勝てば教えてやるよ」

「！」

俺とハセヲが戦うだと

「大丈夫。この世界では俺とお前は同じ能力、同じ武器、同じ技（アーツ）を
使える。条件は一緒だ」

「それを聞いて安心したよ。俺はお前を倒して……」

俺は双剣を取り出して構えをとる
それを見たハセヲも双剣を構えた

「俺は前に進む！！」

「やってみやがれ！！」

二人の双剣がぶつかり合い、ギンッという音が鳴り響くのだった

第８０話（後書き）

連続投稿継続中！！

亮がハセヲと決闘！？
まさかの展開に自分も驚きです

感想をお待ちしております

第81話

「ぐっ、うっ……！」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる箒

第二形態移行した福音によって箒以外のメンバーは撃墜

最後まで耐えた箒はエネルギー切れによって捕まってしまったのだ

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた

（これまでか……情けない……）

ぼうっと光の翼が輝きを増していく

一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中には昔の笑い合う一夏と亮の姿

――会いたい

――一夏に、会いたい

――亮に、会いたい

――すぐに会いたい。今会いたい

――ああ、ああ、会いたい

「いち、か……りょ・・・・・う・・・・・」

知らず知らず、その口からは一夏と亮の名前を呼ぶ声が出ていた

「一夏……亮・・・・・・」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる

ィィィィンッ……！！

『！？』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった

（な、何が起きて――――）

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思って止まない声だった

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある

「あ……あ、あっ……」

じわりと目尻に波が浮かぶ

わずかに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅（せつら）を纏った一夏だった

「一夏っ、一夏なのだな!?体は傷はっ……!」

慌てて声を詰まらせる箒に一夏は答える

「おう。待たせたな」

「よかっ……よかった……本当に……」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に一夏は優しく頭を撫でる

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……」

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え……？」

一夏は持ってきたものを箒に渡す

「り、リボン？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

七月七日。今日が箒の誕生日

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「本当はサプライズとして誕生日パーティーを亮兄とするつもりだったけど、まあ普通のやつで勘弁な」

「それは構わないが……」

「じゃあ、行ってくる。――まだ、終わってないからな」

言うなり、一夏はこちらに向かってきていた福音へと急加速、正面からぶつかった

「再戦と行くか！」

《雪片弐型》を右手だけで構え、斬りかかる
それをひらりとのけぞってかわした福音を、左手の新兵器《雪羅》で追った
一夏のイメージに応えるように、その指先からはエネルギー刃のクローが出現する

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を切る

『敵機の情報を更新。攻撃レベルＡで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす
そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった

「そう何度も喰らうかよ！」

一夏は避けようとはせず、左手を構えて前へと飛ぶ

――雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始

キンっという甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する
それから光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく

「うおおおっ！」

強化され、大型四機のウイングスラスターが備わった白式・雪羅は
二段瞬時加速（ダブルイグニッション）を可能にしている
複雑な動きをする福音を追いつめる

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を自身へと巻き付けはじめる
それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった

（まずい。イヤな予感がする）

それは最悪なことに的中した
翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のような弾雨を降らせる

（くっ！守りきれるか――――！？）

一夏はダメージから回復しきっていない鈴たちの盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされる

「何やってんのよ！あたしたちは腐っても代表候補生よ？余計な心配してないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴……わかった！」

仲間を信じる
一夏はそう心に決め、右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出して、再度福音へと飛び込んだ

ガキィン！キインッ！

鈍い金属音が鳴り響く
亮とハセヲが大鎌を使用してぶつかり合う

「へっ！やるじゃねえか」

「ちっ……」

さすがに条件が互角ならばやることも一緒だな
双剣でも大剣でも大鎌でも双銃でさえ互角

「ジョブチェンジ！疾風双刃！」

「おっと」

俺が双剣に切り替えてアーツで不意を突くが、ハセヲも双剣に切り

替えて防ぐ

「まだまだ！」

俺は猛攻撃を仕掛けるもまるで読まれているかのように避けられる

「ちっ……」

「どうした、終わりか？」

くそっ。余裕こきやがって……

だったら――――

「ジョブチェンジ！」

俺は双剣から双銃に切り替える

「ジョブチェンジ！」

すぐにハセヲも双銃に切り替えた

「「ｊｕｓｔｉｃｅ！！」」

ダダダダダダダダダダダダダダンッ！！

俺とハセヲは銃弾の嵐を撃ち放ったが、その全てがぶつかり合い、

相殺された

さっきからこんなのばかりだ
俺が攻めても攻めても全てが防がれる
そこで俺は疑問が浮かんだ

「てめえ、どうして自分から仕掛けない」

ハセヲはさっきから防戦一方で一切自分から仕掛けてこない
やる気があるのか？

「俺の勝手だろ？」

「ふざけるな！俺はすぐにでも一夏たちの元へ行かなきゃなんねえんだからよ！」

「……それが一夏たちの重荷なっている……って言ったらどうする……？」

ハセヲの言葉にぴたっと止まる俺
一夏たちの重荷、だと
まったく理解できていない俺にハセヲは言葉を続ける

「一夏たちを守りたい、怪我をさせたくない。その気持ちはわかる。俺も一緒だ」

「だったら――」

「それで、お前が怪我をしたら……一夏たちはどう思う」

「！！」

「一夏たちは自分のせいだと思いこむ。自分に力がなかったから怪我をさせてしまった、てな。かつての俺たちみたいに……」

俺が死の恐怖になったきっかけ……

それを俺が味合わせようとしてるってことか……

「そしてお前はさらにやってはいけないことをしようとしてんだ……」

「……」

なるほどな

ハセヲが俺に伝えたいことを理解する

「俺はオーヴァンと同じ道を歩もうしてたんだな……」

『オーヴァン』

自分の妹を救うために、一人で戦い身を犠牲にした男。俺が憧れた男

「確かに俺はみんなを守るために身を削っていたのかもしれないな」

クラス代表戦や学年別トーナメントでみんなを守るため、俺だけが怪我をしてたっけな

「千冬さんに怒られたのも当然か……俺のときもオーヴァンに文句を言ったからな」

オーヴァンが妹を救うため再誕を使ったとき、なんで頼らなかった、と文句を言った

なにもできなかった自分の無力さを後悔した

もしかしたら、一夏たちにもそう思わせてしまう日が来てしまうのかもしれない

「でも……俺はこの道（やり方）を変える気はない」

「……」

「確かに俺が仲間を助けて死ぬ日が来るかもしれない。そのせいで誰かが悲しむかもしれない。それでも――」

何もしないで後悔して、守れずにただ泣くことしかできないのはもう嫌だから

「俺は俺のやりたいようにやる！！」

「……そうか」

目を閉じながら言うハセヲは双銃から大鎌に切り替える

「なら、俺も後悔しねえように……てめえを止める！！」

大鎌を振りかぶったままハセヲは俺に突撃する

「……」

「！？」

ぴたっとハセヲの一閃が止まる

俺の首、数センチというところで止まっている

「おい……なんで武器をしまう」

ハセヲはものすごい形相で俺を睨む

そう、ハセヲが攻撃する瞬間、俺は持っていた双銃をしまったのだ

もしかしたら、そのまま振り抜かれていたかもしれないが、俺にはもうハセヲと戦う意志はない

「ハセヲ。俺は確かにオーヴァンの道を歩いているのかもしれない。でもそれは今現在での話だ」

「なにがいいたい？」

「俺は今、その道を新たな道に変えるチャンスが目の前にある」

俺は手を伸ばす
もう一人の俺であるハセヲ

「俺と俺(ハセヲ)が協力すれば、きっとオーヴァンとは違う、新たな道を歩けるはずだ。他に一夏や千冬さん、箒たちにも協力してもらえば俺たちはもっと強くなれる」

クビアを倒したときと同じようにみんなと協力すればきっと……

「……それはもう一人で戦ってなくねえか？」

大鎌をしまうハセヲはため息を吐きながらそう言ってくる

確かにそうかもしれない
人は一人では生きていけない。だから手を取り合って歩き出すんだ。
困難を乗り越えるために……

「だから、ハセヲ。俺にお前の力を貸してくれ」

「……」

俺の心からの言葉にハセヲはため息をつく
って、なんだよ？
俺、変なこと言ったかよ？

「俺はお前であって、お前は俺なんだ。俺の力ぐらい、いくらでもくれてやるよ」

そういうとハセヲは俺の手を握った
その瞬間、赤いオーラが俺とハセヲを包み込む

「わかってるだろうが、これからは一発でも良いのを喰らうとその分お前の死が近づく。まあかすり傷程度なら俺のカバーとお前の精神力があれば耐えられる。でも――」

「わかってる。攻撃は受けない。そうすれば一夏たちを悲しませることはない」

「まあ、心配と説教はされるだろうがな」

確かに、と俺が言うとふたり同時に笑い出す

「そんじゃあ行くか」

「ああ！」

みんなを守る、そう決めたから俺は前に進む

第８１話（後書き）

連続投稿継続中！！！！

うーーん・・・・って思うのは自分だけかなあ？

箒をマジでどうしよう・・・・このままいけば一夏っぽいけど・・・・

・亮もなあ・・・・

感想お待ちしております

第８２話

「ぜらあああっ！！」

白式の零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても二撃目を回避されてしまう

そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた

「くっ！」

――エネルギー残量二〇％

予測稼働時間、三分

（くそっ！このままじゃ……）

白式の予測稼働時間を聞いて焦り出す一夏

「一夏！」

「箒！？お前、ダメージは――」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

紅椿の手が白式へと触れる

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、

一度視界が大きく揺れた

「な、なんだ……？エネルギーが――――回復！？箒、これは――――」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

意識を集中させ、雪片弐型のエネルギー刃を最大出力まで高める

「うおおおっ！」

福音は一夏の横薙ぎを縦軸一回転して回避、こちらを再び視界に捉えると同時に光の翼を向けてくる

「箒！」

「任せろ！」

一夏に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切る

「逃がすかぁぁっ！」

さらに脚部展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った

予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を、一夏は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す

そして、最後の一突きを繰り出そうとする一夏に、福音は体から生

えた翼全てで一斉射撃を行ってきた

（ここまで来たら、もう引かねえっ！！）

全身にエネルギー弾を浴び、雪片を後ろに雪羅を発動させて福音に突撃した
その勢いで近くの無人島の白浜に激突
すぐさま一夏は零落白夜を発動した雪片を突き立てた

『……』

「ぐっ！」

最後の抵抗か、福音は一夏の首へと手を伸ばす
その指先が喉笛に食い込んだところで、銀色のＩＳはやっと動きを停止した

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

「終わったな」

箒の言葉に一夏が振り向くと、ダメージを喰らいはしたが無事のセシリア、鈴、ラウラ、シャルロットたちがいた

「ああ……やっと、な」

誰もがそう思った……その瞬間、だった

ぶくぶく。

「「「「「「！？」」」」」」

全員が驚愕の表情に変わる
福音の体から黒い泡が溢れ出したのだ

これが何なのか全員が理解している

「ＡＩＤＡ！？」

「まさか福音にも取り憑いていたと言うのか？」

「どうすんのよ。亮は今、いないのよ？」

そう、亮は今自室待機を命じられているためにここにはいない

「やるしかねえだろ……」

一夏はぎゅっと雪片を構える

「ああ！」

「もちろんですわ！」

「ええ！」

「いつぞやの借りを返してやる！」

「うん、やろう！」

箒たちもエネルギー残量が少ないが、それぞれ武器を構える

一夏は亮を戦わせないと千冬から聞いている

だが、箒たちはそれをなんとなく理解していた

亮は来ない、戦わない

それに戦って欲しくないのだ。戦う度に傷つく亮を見たくない

その気持ちが傷ついた自分の体を動かしている

ぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶくぶく

「なっ！？」

「泡が……」

「福音と同じ姿に……」

再び驚愕した
福音から溢れ出ていたＡＩＤＡは膨れ上がり、その姿を福音のものへと変えた
そのＡＩＤＡの下には福音の姿は無く操縦者が力無く倒れ込んでいる

「こいつ、もしかして操縦者を強制的に追い出して福音を自分の物へと変えたのか！？」

ありえない、誰もがそう思ったが、ＡＩＤＡに常識は通じない

『アア』

ＡＩＤＡの雄叫び
それだけで衝撃波を発生させ、一夏たちを震わせる

『……』

ＡＩＤＡは手を閉じたり開いたりを繰り返す。自分の体の調子を確認するかのように

そして、ゆっくりとＡＩＤＡは一夏たちの方へと振り向いた

「「「「「「「！？」」」」」」」

一夏たちの体が一気に硬直する
一夏たちは見てしまったのだ

ＡＩＤＡの顔を

その顔はまるで良い玩具を見つけたような愉快犯のような顔だった
黒い顔に黄色く光る目とにっこり笑う口
それを見た一夏たちは蛇に睨まれた蛙のように動けなくなってしまっている

一夏たちのやる気が一気に絶望へと変わる瞬間でもあった

「あ……ぐっ……」

みんなに逃げろ、と大声で伝えたい一夏だが恐怖から声も出せない
一夏
それは、みんなも同じである
せめて声だけでも、と思ってもそれすら出せない

『何をしている！早く逃げないか、馬鹿者！！』

聞こえたのは千冬の声
通信を切っていたはずなのだが、いつの間にか繋げられていた
理由はわからないが、千冬の一喝のおかげで身体の硬直が解け、動けるようになった

『アアアアアアアアアア！！』

ＡＩＤＡは福音のように翼を広げる
その翼は漆黒の翼

『銀の鐘』ならぬ『漆黒の鐘』が今、撃ち放たれようとしている

「みんな！俺の後ろに！」

一夏は雪羅を構えて、出力全開のシールドモードに切り替える

無駄だとわかってはいるが、やらないよりかはと一夏の判断

しかし、一人だけ別行動をとる

「はあああっ！！」

「箒！？」

箒は両手に刀を持ち、そのままＡＩＤＡへと突撃する

「何やってんのよ！？」

「早くお戻りなさい！？」

「死ぬ気か！？」

鈴、セシリア、ラウラの言葉に箒は聞きもせず突撃する

「私は仲間を守るんだ！！」

「箒！」

シャルロットは箒を止めようとするが、紅椿のスピードには追いつけない

「箒いいいいっ！？」

無情にもＡＩＤＡの漆黒のエネルギー弾が箒に撃ち放たれた
今度は一夏のフォローがない。そのエネルギー弾は箒に直撃する

「……」

ＡＩＤＡのエネルギー弾の爆風で舞い上がった砂煙で目の前がよく見えない
箒はどうなってしまったのか
砂煙は段々と晴れてくる

「あ……ああ……」

一夏の身体が震える
箒の姿がなかったのだ。紅椿の破片すら見あたらない
言葉通りの跡形もないのだ

「そんな……」

「箒……」

「箒さん……」

「くっ……」

セシリア達も箒がいた場所に視線をやり、ただ立って悔やむことしかできない

「お前が箒を……」

一夏はＡＩＤＡを睨む
箒を殺したＡＩＤＡを睨む
一夏の心の中にはもう恐怖は無かった
あるのは、どんな手を使おうとも殺してやろうという殺意しかなかった

「絶対に許さねえええええ！！」

「待って、一夏！落ち着いて！」

「そうよ！今のアタシ達じゃ勝てっこないわ！」

「一度退いて態勢を……」

一夏を落ち着かせようと説得するセシリア達
しかし、一夏の頭には入らなかった
さっき誓ったのに、仲間を守ると
守れなかった自分が許せなかった

（絶対に殺してやる！！）

「きゃっ！？」

「うわっ！？」

一夏はセシリアを振り払ってＡＩＤＡに突撃する
雪片を片手に全力の一撃を喰らわせようとした

「止めろ、一夏！！」

「！！」

誰の言葉も聞かなかった一夏がその一声でぴたっと止まる

「亮……兄……なのか？」

声が聞こえた上を向くと一夏は恐る恐るそう行った
一夏の発言はもっともだった
聞こえたのは確かに亮の声だった
しかし、その姿はまったく違うものだった
その姿は前の黒一色ではなく白式のように白一色
しかし、顔はフルヘルメットで隠され、背中には光輝く剣のようなものが八本
その光剣はまるで翼のように広がっている

「あっ！見て！？」

「ああっ！？」

そしてその両手にはあるものを持っていた

「箒！？」

そう、ＡＩＤＡのエネルギー弾で跡形もなく消し飛ばされたと思っていた箒がいた

「間一髪だったよ。あと少し遅かったら間に合わなかった」

「ということは本物亮兄なんだな！！」

「ああ……みんなよく頑張った」

亮は一夏の目の前に降りて箒を預ける

「亮兄！箒は？」

「大丈夫。今の攻撃は喰らっていない。気絶しているだけだ」

「そっか……」

ほっと一安心する一夏

ちなみに顔が見えないからわからなかったが、亮の顔はそのときしょんぼりしていた

理由は簡単

箒を助けたまでは良かったのだが、箒が自分の顔を見た瞬間、声にならない声を上げてそのまま気絶

さすがの亮もこれにはショックを受けざるおえない

「亮さん！なんなのですの、その格好は？」

「もしかして……スケィス……？」

「えっ！でも、亮のスケィスはもっと黒いやつだったじゃん！」

「いや、間違いない。これはスケィスだ。私にはわかる」

一斉に喋り出すセシリア達に亮は一旦、落ち着かせる

「こいつはシャルロットとラウラの言うとおりスケィスだ」

「で、でも姿形が全然――」

「これはスケィスが第三形態移行（サードシフト）した姿だ」

「「「「「「！？」」」」」」

『第三形態移行（サードシフト）』

第二形態移行でさえ数えられる程しか存在しないのに、第三形態移行もしかしたら世界で初めてかもしれない

「そんなのいつの間に……でも亮は織斑先生から自室内待機を命じられてたはずじゃ……」

「……よし、とりあえずお前らはここから離れてろ」

「無視したな」
「無視ですわね」
「無視したわね」
「無視か」
「無視はダメだよ、亮」

「ぐっ……」

話をそらそうとする亮に全員が非難の言葉をぶつけるさっきは、格好良く登場したのに、今ではかなり情けない

「……無断で出動してたお前らに言われたくねえよ。そんなことより、ＡＩＤＡは俺に任せて、ここから離れろ」

「なっ！？そんなことできるかよ！」

「そうだよ！また亮が――」

必死の形相で俺を止めようとする――いや、してくれる一夏たち
こんなにも俺のことを心配してくれる仲間たちに俺は言った

「大丈夫」

「えっ……？」

「ちょっ……ちょっと、何が大丈夫なのよ！」

落ち着けよ、鈴
俺はまだ最後まで言っていない

「俺はお前らを悲しませることは絶対にしない。絶対に帰ってくる」

「で、ですが……」

「確かに心配させちまうけど、俺を信じてくれ」

「亮を信じる……？」

「そう……その想いが俺の力になる。だから……信じてくれ」

「……私は信じるぞ……」

俺の言葉にいち早く答えてくれたのは、なんと気絶していた箒だった

「箒……」

「亮……さっきは助かった、ありがとう……」

「気にすんな。次から気をつければいい」

「うむ……」

うなずく箒を見た俺はＡＩＤＡの方へと振り向いた

「亮兄！俺も信じるよ！亮兄なら絶対に帰ってくるって！」

「わたくしもですわ！」

「亮があんなヘンテコな奴に負けるはずないもんね！」

「我が嫁が私を置いてどこか行くなどありえんからな」

「亮……頑張ってね！」

「……ああ！！」

感じる

みんなの想いが……

もう負ける気がしねえ

「はあああっ！！」

光剣は俺の雄叫びに呼応するかのように光り輝いた

『アアアアアアアアアアアア！！』

福音の形をしたＡＩＤＡも雄叫びを上げ力を溜めている
《漆黒の翼》だろう
避けるのは簡単だが後ろには一夏たちがいる
「くっ！みんな、ここから離れるぞ！亮兄の邪魔に――」
「動くな！」
「えっ！？」
離れようとする一夏たちを引き留める
「ここにいろ。そしてできるだけ俺の後ろにいろ」
「亮！さっきのアンタも見てたでしょ！あんな量のエネルギー弾を全部受けられる訳ないでしょ！」
確かに全部『受ける』のは無理だな
でも――
「全部『撃ち落とす』ならどうだ？」
「えっ……？」
俺の言葉に鈴が変な声を上げる
そんなことお構いなしにＡＩＤＡは無数のエネルギー弾を撃ち放つ
「はあああっ！！」

スケィスの光剣からエネルギー弾が撃ち放たれる
その数は光剣と同じ八つ
しかし、近づくにつれ八つから十六、十六から三十二、六十四とどんどん増えていく

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドーンッ！！！！

ＡＩＤＡのエネルギー弾は全て打ち落とされた

「す、すごい……」

「これが第三形態の力……」

「違うさ」

これは力じゃない

「一夏たちの想いだ！！」

俺は大鎌を取り出す

大鎌は質量化されておらず、エネルギーのみで構成されている

「うおおおおっ！！」

『アアアアアアアアアアア！！』

ＡＩＤＡは一直線に向かってくる俺に再びエネルギー弾を撃ち放つ

「芸がねえんだよ！！」

『！？』

わずかな隙間をくぐり抜け、ＡＩＤＡの目の前にたどり着く

「せいっ！」

そのままＡＩＤＡに一閃

ＡＩＤＡの翼を斬り落とす

だが、俺の攻撃はまだまだ止まらない

大鎌で何度となく斬りつける

『アアア……アア……』

「ＡＩＤＡ、ひとつ言っておくぞ。俺の仲間に手を出すなら容赦はしない。全力で叩きつぶす」

『……』

最後の悪あがきか蹴りをふるってくる
なるほど、それが返事か

「はっ！」

ＡＩＤＡの蹴りを軸に一回転して懐に潜り込む
そのまま海面へと叩きつける

すぐさま俺は片腕を突きだしてデータドレインの準備をする

「いっけえええぇぇぇ！！」

ドオオオオオオオオオオンッ！！

データドレインが直撃したＡＩＤＡは消滅
そのため銀の福音の操縦者がいなくなったため海へと落ちていく

「やべ。あれは回収しねえとな」

すぐに俺はＩＳを海面に落ちるギリギリで回収
一夏たちの元に戻った

「……これで終わったんだな、亮兄」

「ああ……箒はどうした？」

「寝てるよ。よっぽど疲れてたみたいだ。亮兄がＡＩＤＡに突撃したところを見た後、すぐに寝ちまったよ。こんなに安心した寝顔してる」

一夏の腕の中でぐっすりと眠る箒を見てほっと一息

「そりゃあ、福音にやられたあんたをずっと看病して、ずっと悩んでいたんだから仕方ないわよ」

確かにな
でも、本当に今の箒の顔とても安心した表情で子供のような寝顔である

「それじゃあ、帰るか！」

「「「「「おう！！」」」」」

一夏たちの返事を聞いた俺は旅館の方角へと飛んでいく
その後ろに一夏たちがついてくる
俺は絶対にこいつらを悲しませることはしない
再びそう心に誓った

第８２話（後書き）

連続投稿継続中！！

ちょっとアクシデントがあって更新が遅れてしましましたすみません！！

まさかのまさかの第三形態！！
第二形態はどうしたかって？
気にするな！！

感想お待ちしております！！

第８３話

「さて、貴様の言い分を聞こうじゃないか、三崎亮」

「……」

千冬さんにそう問いただされる
いきなりだが現在の状況を整理しようと思う

福音とＡＩＤＡを倒した俺と一夏たちは旅館に着くなり、腕を組んで待っていた千冬さんに連行され、全員正座（箒以外）
一時間くらいでやっと終わり解放されたと思いきや、俺だけ千冬さんに呼び出しをくらい

一夏・千冬さんの部屋で再び正座され、今の質問をされている

「確かに織斑先生の指示を無視したのは悪かったと思っています。ですが、この判断が間違っていたとは思いません」

「……」

黙って俺の話を聞く千冬さん
何も言わないようだから話を続ける

「俺は千冬さんに言われたわかっていないことをようやく理解しました。俺がみんなを助けることができても、俺が傷ついたら誰も喜ばない。ただ悲しいだけだということに……」

「それを理解し出した答えがそれ（戦うこと）か……」

「織斑先生には悪いですがこれは譲れません……」

俺がそう言うと千冬さんはふうとため息をつく

「どうやら意志は変わらんようだ。わかったよ、好きにしたらいい」

「あ、ありがとうございます！」

「だが……今度、大怪我をしたときはスケィスを使用禁止にする。覚えておけ」

グサッと釘を刺されたがこれも千冬さんが俺を心配してくれているからだそれに大丈夫
今の俺とスケィスはどんな奴が相手だろうと負けはしない

「それじゃ俺は失礼しま――」

「待て」

俺が立とうとすると千冬さんに止められる

「お前には私の指示を無視した罰を与えなければならん」

「あの～……それは反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングの筈では？」

「それはそれ、これはこれだ。大丈夫だ、そんな厳しい内容ではない」

だったらそのどう料理してやろうかっていう目を止めろ！

ところ代わって一夏たちは何をしているかというと

「「「「「「誕生日おめでとう！！！！」」」」」」

パンッパンッとクラッカーの音が響きわたる
どうやら箒の誕生日会を開催しているようだ

場所は亮と真耶の部屋
メンバーは主役の箒に一夏、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット、真耶の七人

「その……えっと……あ、ありがとう／／／／」

「なんだよ、箒。緊張しているのか？」

「う、うるさい！仕方ないではないか！いきなり呼ばれたかと思いきや、誕生会をするなど……」

「あんたねえ。臨海学校の日に誕生日だってなんで言わないのよ？」

「まったくです。さすればプレゼントを準備いたしましたのに」

「むぅ……」

箒は誕生日を言うと自分がプレゼントを要求しているように思われるのが嫌だから言わなかったのだ

「まあ、でもこうして誕生会をして祝えているんだし、良いんじゃないかな」

「うむ。だが、このケーキはどうやって用意したのだ？」

一夏たちの中心にはホールのケーキがドンと構えている

「これは、俺と亮兄が女将さんに頼んで材料を貸してもらって作ったんだ」

「うわぁ！織斑君と三崎君の手作りですか！すごいですね！」

「でもさあ、もともとあんたと亮と箒の三人でやるつもりだったんでしょ？多すぎじゃない？」

確かに量は軽く六人前くらいある

三人で食べるのは少々キツい量だ

「最初はそのつもりだったんだけど、ケーキを作っているとき、せめてセシリア達も呼んで箒を祝ってやろうって亮兄が言ったんだ」

「そ、そうなのか……」

少し前の箒だったら大人数で集まって何かをすることは嫌だったが、仲間の大切さを知った今ならこの楽しさを理解することができる

「普通ならここでプレゼントを渡すところなんですけど、わたくしたちは用意しておりませんし」

「一夏は今、箒が付けているリボンでしょ？亮は？」

「亮はこのキーホルダーだ」

箒はみんなに見えるように上に持ち上げる

「えっ、違うぞ。そいつは普通のプレゼントで、誕生日プレゼントはまた別に用意してあるぞ」

「……え？」

予想外な一夏の言葉に箒は目を点にする

そういえば、誕生日プレゼントとは言っていなかったなと思う箒

「それじゃあ、亮の本当のプレゼントってなに？」

「いや、それは俺にもわからない。亮兄は教えてくれなかったんだ」

「それじゃあ、どうすんのよ？亮が来るまで待つわけ？」

今、亮は絶賛千冬の説教を受けている最中、来るまでまだまだ時間がかかりそうである

「あっ、大丈夫ですよ。私、三崎君から篠ノ之さんに誕生日プレゼ

ントを渡してくれって頼まれましたので」

そう言うと真耶は押し入れの中からあるものを取り出す
それは意外にも大きく五十センチくらいある

「これが亮の誕生日プレゼント……」

真耶から受け取るとまじまじとプレゼントを見る

「箒、早く開けろ。気になる」

「ラウラ、気持ちはわかるけど落ち着いて」

「でも確かに気になりますわね……」

「そうね……」

じーっと亮の誕生日プレゼントを見る

「では……開けるぞ」

恐る恐る袋を開けて中身を確かめる

「……」

「「「「「？」」」」」

中身を確認した箒が動きを止めて固まってしまう
一夏たちは、どうしたかと思い不思議がっていると箒は中身を取り出す

「「「「「「「あっ！」」」」」」」

取り出したプレゼントを見て箒と同じように固まる一夏たち
そのプレゼントとは――――

等身大のチムチム人形だった

「亮兄……」

「これはさすがに……」

「ないですわよね……」

普通のと誕生日プレゼントが同じデザインのものというセンスに呆れる一同
さすがにチムチムが好きな箒とはいえ連続でもらっても困ってしまう

「そういえば、『ついで』と亮は言っていたな……」

少しがっかりするが、亮の気持ちは嬉しいので文句はない

「あれ？袋の中に何か入ってますね？説明書みたいですよ？」

「説明書？」

真耶が袋から取り出すとその説明書を読み始めた

「えっと、これは『メッセージチムチム』と言ってチムチムを蹴るなり叩くなりして衝撃を与えると、登録したメッセージと音声がモニターで表示され代わりに伝えてくれます。置き書きしたいときや、好きな人に告白したいときなどにうってつけです」

「好きな人に！？」
「告白！？」
「……」

一同がごくりと唾を飲む
もしかしたら亮は箒に告白のメッセージを入れたのではないか？と勝手な妄想をしてしまう

「えっと……こいつに衝撃を与えれば良いのだな……」

箒は恐る恐るチムチムを床に置く

どうやらゲームと同じように蹴るつもりらしい

「……」

「……箒、早く蹴ってくれよ」

箒が立って蹴る構えを取ったまでは良かったが、その状態のまま固まってしまう
ゲームでも蹴れなかったのだから、リアルでも蹴れないのは仕方ないのかもしれない

「よし、ならば私が代わりに蹴ってやろう」

躊躇している箒にイラついたのか、ラウラが代わりを申し上げる
それほど亮が送るメッセージが気になるのだろう

「け、結構だ！ちゃんと、私が蹴る！」

深呼吸をして再び蹴る構えをとる箒

「え、えい！」

目を瞑りながらちょこんと蹴る箒
そんな箒を見て、全員がええ～と心の中でツッコミを入れる
蹴られた（軽く突かれた）チムチムはころんと一回転してしまう
そんなチムチムを見てどこか心を癒やされる

「！」

ぽんっ！とチムチムの頭の上にあるチム玉が破裂した
すると同時にメッセージが書かれたモニターが映し出された

えっと、もう始まっているのか？
あ～……箒、誕生日おめでとう
これからも……その……よろしくな

たった数行の文とぐだぐだな亮の声
でも、何故か安心する亮の声に箒はチムチムを持ち上げ抱きしめる

「……ありがとう…亮…兄……」

誰にも聞こえないようにぼそっと言う箒
久しぶりに言った『亮兄』はもう言わないと決める箒

その理由は箒にしかわからない

ところ代わって、その頃の亮はと言うと――

「なあ、織斑先生……」

「……なんだ……」

俺は千冬さんから命令無視で罰を与えら実行しているのだが――

「……これは罰なのか？」

と、思わず聞いてしまう
その罰の内容はと言うと、千冬さんの髪をくしでとかすことであった

「んー……罰だぞー……これ以上ない罰だ」

そんな気持ちよさそうに言われてもな……
しかも布仏みたいにのんびりした答え方だ
そんなに気持ちいいのか？

「不満があるなら違う罰を与えるが」

「どんな？」

「十分間で生きていて後悔したくなる千冬スペシャルをおみまいしてやろう」

レベルが全然違う！？
なんだよ、千冬スペシャルって！

「わかりました。こっちでいいです」

「わかればいい……」

観念した俺は再び千冬さんの髪をとかし始める
千冬さんは気持ちよさそうに目を細める

そんなに気持ちいいものなのか？
俺にはよくわからないが……

「亮……」

「……なんすか」

「それが……お前の導き出した答えなら私は否定しない……でも、もしも、お前に危険が迫っているとき私は必ず貴様を止めてやる」

そんなことが来ないと信じたいが何が起きるかなんて誰にもわからない

「それはどうも」

だから俺は適当に答えた
千冬さんは何もしてこない
それほどリラックスしているみたいだ

「……もういいぞ」

「どこに行くんすか？」

立ち上がり髪をいつもの髪型に結ぶとドアの前で立ち止まって言った

「まだやることが残っているのでな」

そのやることはおそらく仕事ではないだろう
福音についての後処理はほとんど終わっているはずだからだ
でないと俺に罰を与える暇などないはずだ
何かはわからないが、それほど大事なことなのだろう

「遅くならないように気をつけてくださいね。それと、俺は箒の誕生会に行くんで千冬さんも来れたら来て下さい」

「ああ」

そう言って千冬さんは部屋から出て行った

この後、すぐに隣の部屋で箒の誕生会に参加したのだが何故かセシリア・鈴・ラウラ・シャルロットにジト目で睨まれてしまう

えっ？

俺まだ何もしてなくね

第８３話（後書き）

連続投稿継続中！！

今回は箒の誕生会
原作でそれらしいことしてなかったからしてみようかと思いやってみました
さりげなく、千冬の独占が入りましたね
これからどうなるか・・・・

感想お待ちしております！！

第８４話

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四十二％かぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む
子供のように。天使のように
月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない
いつだってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった

「んー……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す
そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れていた
それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす

「は～。それにしても白式には驚くなぁ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す
漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇すべてを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

ふたりは互いの方を向かない
背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける

どんな顔をしているのか、別に見なくてもわかる――――

そんな確かな信頼が、ふたりの間にはあった

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した
そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやりとりしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねぇ」

「……」

千冬は、答えない
しかしそんな反応はお構いなしに、束は続ける

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである
それは束にとっても同じ
しかし、束は別にわからなくても問題はない

「それと、スケィスとＡＩＤＡにも驚かされたなー。まさかあんな力があるなんてなあ」

「ＩＳを越えたＩＳにシステムを超越したウイルス。お前にとってかなり興味深いものだろう？」

「だねー。でも、それ以上に興味深いのはりょーちんかなあ？」

「なに……？」

ぴくっと体を震わして動揺を見せてしまう千冬
それほど束が言ったことが予想外だったのだろう

「お前が人に……しかも、男に興味を持つとはな……」

「ふふん～♪束さんも女の子ってことなのだよ、ちーちゃん」

「嘘をつくな。そんな気などさらさら無いくせに」

嘘ではないんだけどなあ～と、束は言うが千冬は無視する

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ。まあ、りょーちんに髪をとかしてもらってたからそうなのかもね？」

「なっ……／／／／」

「ふふふっ♪」

いきなり岬に吹き上げる風が一度強くうなりを上げた

「――――――――」

その風の中、何かをつぶやいて……束は消えた

忽然と。突然と

「……」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる

その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた

そして、頭の中では次、束とあったときどう料理してやろうかと計

画を立てたりもしていた

翌朝
朝食を終えて、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる
そうこうして十時を過ぎたところで作業は終了
全員がクラス別のバスに乗り込む
昼食は帰り道のサービスエリアで取るらしい

「あ～……」

「……」

座席にかけた今の俺と隣にいる一夏の状況は、一言でいうとボロボロだ
なぜかと言うと、隣にいる一夏と箒が元凶なのだ

誕生会に参加し、セシリアたちに睨まれていると箒は一夏にケーキを食べさせてもらっていたのだが、何故か箒は俺にも食べさせて欲しいと頼んできた
箒からお願いなんて珍しいので、了承して食べさせてあげたのだが
――それが悪かった

セシリアたちがなぜか怒りだし、俺に襲いかかってきたのだ
逃げるため外に逃げ出そうとしたら千冬さんとばったり出くわし大目玉をくらってしまう
なんか俺って運悪くない？

その後、全員で説教をくらったのだが何故かまた俺だけ居残り説教をもらう始末

結局、就寝時間は三時間
そして、あの重労働
マジで死ねる

「悪い……誰か飲み物持ってないか……？」

「……ツバでも飲んでいろ」とラウラ

「知りませんわ」とセシリア

「あるけどあげない」とシャルロット

鈴は二組なのでいない
俺と一夏は最後の望みを託して箒へと視線を向ける

「なっ……何を見ているか！／／／／」

ボッと赤くなったかと思ったら、いきなり一夏にはチョップ、俺には脛に蹴りを喰らわしてきた
なんか扱い酷くないか？
めちゃくちゃ痛いんだが……

「ふ、ふんっ……！」

結局、飲み物はもらえずむなしさと痛みをもらうはめになってしまう

「どうする……亮兄……」

「……もういい……俺は……寝る……」

そう決めた俺は腕を組み目を閉じる

一夏がうー……と唸っていたがスルーして、眠りに入った

（うーん、ちょっと可哀想だったかな……？）

さっきはつい冷たく返したものの、シャルロットは亮のぐったりと眠りに入る様子にちくちく良心の呵責を感じていた

（昨夜は亮の無意識とはいえ、僕たちが勝手にヤキモチ妬いちゃっただけだし……そろそろ許してあげようかなぁ）

荷物からお茶のペットボトルを取り出す

乗り込む前に自販機で買っておいたのが役に立ちそうだった

（みんな動かないみたいだし……よしっ！）

（さすがに冷たかったかしら……？）

セシリアは、ため息を吐いて眠りに入る亮を見ながら、少しそわそわとしていた
せっかく優しくするチャンスだったのに、つい昨日のことを思い出してあんな態度を取ってしまった
よくよく考えれば、他の女子が非好意的なのだから、千載一遇のチャンスである

（そうと決まれば――）

鞄の中で横になっているペットボトルへと手を伸ばす
元々自分用に用意していたものだったが、思わぬところで使えそうだった

（善は急げですわね。……コホン）

（さっきは、何か別の言い方があったのではないか……？）

そんな自問自答を繰り返しているのは、今回のビーチで新しい一歩を踏み出したラウラだった

昨夜のことが引っかかって真っ先に冷たい反応をしてしまった自分が恨めしい
あそこで、笑顔を見せてこそいい女というものではないだろうか

そんなことを考えながら、ではどう巻き返すかと考えるラウラ

（そう……だな。どうも喉が渇いているようだし、朝方に買ったお茶が使えるか）

さっき取り出しておいたペットボトルをもてあそびながら、どう渡したものかと考える
せっかく他の女子が引っ込んでいる今こそ、チャンスだと見据えながら

（うむ。さりげなく隣に座って渡すか。……そ、それなら帰りはずっと隣にいられるな）

（あああ、やってしまった……）

せっかく昨夜は誕生会でふたりから、あーんをしてもらいって良い雰囲気までいったのに、結局はそれだけで最後には千冬に怒られると最悪な展開へとなってしまった

（い、いかんな。私はすぐに手を出すクセがついているのではないか……？）

正直、それはまずい
先々月までならまだしも、今は同じクラスにシャルロットがいるあの強敵を前に暴力一辺倒では、おそらく後手に回ってしまう

（それに亮にも悪いことをしてしまった……）

どうも、亮が他の女子と触れ合っていると一夏と同じくらいイラついてくる
それもあってあんなことをしてしまった
これでは、一夏だけでなく亮にも呆れられてしまう

（よ、よし！今こそ優しさをもって接するべきか！）

バス移動までの間に買ったペットボトルのお茶を握りしめて、箒は立ち上がった

「ふぅ……」

「「「り、亮っ」」」

「一夏、亮！」

「はい？」

「？」

四人の声が同時に聞こえ、俺は目を開ける
それと同じタイミングで、車内に見知らぬ女性が入ってきた

「ねえ、織斑一夏くんと三崎亮くんっているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

「……」

幸か不幸か一番前の席にいた一夏と俺
一夏が返事をするが、俺は嫌な予感がしたため、再び目を瞑った

「君たちがそうなんだ。へぇ」

声だけしかわからないけど、どうやら俺と一夏を見に来たらしい
一体何者だ？

「あ、あの、あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え――――」

「！」

予想外の言葉に俺は驚かされた
あの福音の操縦者がまさか元気に挨拶に来るとはまったく思いもし
なかったからだ

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

ん？
今、一夏に何かしたのだろうか？
考えごとをしていたから聞いていなかった

「さてと――――」

どうやら帰るようだな、そう思って気を抜いていたその瞬間だった

「むぐぅ！？」

いきなり目を瞑っていた俺の唇に柔らかい感触が伝わってくる

すぐに目を開けると、そこには目を瞑って俺にキスをする二十歳くらいの鮮やかな金髪の女性がいた

「こおら、狸寝入りをして人の会話を盗み聞きしちゃダメだぞ♪」

「なっ、ななっ……！？／／／／」

バレてたのか……ってそうじゃない！！
なんでいきなり、キ、キスを！？

「これは私とあの子を助けてくれたお礼だよ。ありがとう、白いプリンスさん♪」

「な・・なな・・プリ・・ンス・・！？」

「じゃあ、またね。バーイ」

「は、はぁ……」

「……」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャ

一夏はぼーっとしたまま手を振り返して見送る
俺はあまりの衝撃的なことに呆けることしかできなかった

ぞくり

「……」

今、俺は至近距離でトライエッジにデータドレインを突きつけられた時と同じくらいかもしれない悪寒を感じている
おそるおそる悪寒を感じた方向を振り向いた

「浮気者め」

「亮ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね」

「はっはっはっ、一夏、亮……覚悟、出来ているな？」

すたすたと歩いてくる四人
どうするかって？

決まっている

「逃げるぞ、一夏！」

「えっ！ま、待ってくれ亮兄！？」

「「「「逃がすかぁぁぁ！！」」」」

勢いよくバスから出る俺と一夏
それを追う女子四人
捕まったらその瞬間、地獄となる
捕まってたまるか！！

「……」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった
ナターシャは、その言葉に少しだけはにかんで見せる

「思っていたよりもずっと素敵な男性たちだったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。――私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた

「――やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を、あの子を奪い操ったウイルスを――必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された

「……何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ

千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることは好きではなかった

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあったふたりは、それ以上の言葉なく互いの帰路に就く

「ああ、そうそう」

「？」

「次、亮にあんなことをしたら……わかってるな？」

ゴゴゴゴッとナターシャを睨みつける千冬
しかし、ナターシャは笑みを浮かべて答えた

「ふふふっ♪それも忠告として心得ておくわ。でも――障害が高ければ高いほど燃えるのよね」

プリンスによろしく♪と最後にナターシャは去って行った
千冬は頭を抱えて呟いた

「あいつはどれだけ女を落とせば気が済むんだ……」

第８４話（後書き）

連続投稿継続中！！

うおおおっ！！
なんかやっちまった、って気分です
ナターシャが滅茶苦茶大胆！！アメリーカだからいいか？
箒をどのルートにしたのかわかっていただけたでしょうか？
優柔不断の作者で申し訳ありません

ここでみなさんにお知らせです
今回の話で三巻分です
キリが良いのでここでひとまず休もうかと思います
と言っても休むのは二日だけ火曜日には再開する予定です

さらにお知らせがあるのですが、それは活動報告にてお伝えしようかと思います
自分勝手ですみません
連続投稿の記録はこれにて終了
正直悔しい気持ちもありますが、後悔はありません

感想お待ちしております

ではでは～～～

第85話

「……なんだって……？」

今、俺はＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでアトリと会っているのだが、いきなり変なことを言い出した

「ですから、夏休みにハセヲさんと『リアル』で会う日程が決まったんです！」

そういえばかなり前に電話でそんな約束をしちまった気がする

「日にちは八月二十九日、待ち合わせ場所は東京駅です」

「ん？何で東京駅なんだよ？」

いつもは俺の家かアトリの家の近くで待ち合わせるのに

「決まっているじゃありませんか！一泊二日の温泉旅行に行くんですから」

「……は？」

アトリの言葉に俺は呆けてしまう
温泉旅行？
何言ってやがるんだ、こいつは

「まさか商店街の福引きで一等の『一泊二日の温泉旅行　二名様』に当たるなんて驚きでした。やっぱり、通販で買った幸運のブレス

レット『幸運くん』のおかげですね♪」

「その幸運なんとかはどうでもいい！何で俺とお前が旅行に行かなきゃいけねえんだよ！」

「だって、日にちとかは私に任せるって言ってたじゃないですか」

「それがまさか旅行に行くことになるなんて思いもしねえよ！」

「とにかく、詳しいことはメールで伝えますのでよろしくお願いしますね♪」

「あっ、おい！！」

俺の制止を聞かず、アトリはログアウトしてしまう
なんか成り行きでリアルのアトリと温泉旅行に行くことになってしまった
今年の夏休みは荒れそうだと俺はそう感じ取った

八月

クソ暑いったらありゃしない
昔から、この国の夏は嫌いだ
大ッ嫌い
そもそも、私はこの国の人間じゃない
最初は両親の都合、次は祖国の都合でここにいる

凰鈴音

それがあたしの名前
ＩＳ『甲龍』の専属操縦者にして国家代表候補生
現在はＩＳ学園に通う一年生

「あっつぅ……」

八月、ＩＳ学園は遅めの夏休みに入る
そのせいで、世界中からやってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中
あたしも本当は国に帰ろうかと思ったんだけど――

「……」

でもやめた
帰ってもどうせ両親は一緒にはいないし、軍施設で面倒な訓練も受けたくない
それに別の理由だってある

（あいつ、いるんでしょうね。まったく。なんであたしから誘わなきゃいけないのよ）

あたしは寮の廊下を歩きながら、だんだんと腹が立ってきた

――そう、そうよ
あいつから誘いにくればいいのよ
そう思って足をUターン――させたところで、ばったりと会った

「ん、鈴か。何してんだ？」

「り、り、亮！？な、なんでアンタここにいんのよ！へ、部屋じゃないの！？」

「ちょっと気分転換に歩いてたんだよ。ん？何持ってんだ？」

「な、なんでもないわよ！」

反射的に、あたしは手に持っていたチケットを後ろに隠してしまう

……ああ、しまった

『ふふん、気づいた？実は――』

って流れならすんなり言えたのに！言えたのに！

「ふーん……」

ぐ……

『まあ、なんでもいいか』って顔してるわね……

あー、ごほんごほん！

「きょ、今日は暑いわね」

「そうだな。まだ涼しい方だけど、俺も暑いのは苦手だからなあ」

「そ、そうなんだ。一緒ね」

「ああ、一緒だ」

あ、う

ちょっと共感できることがあってちょっと嬉しい

「んじゃ、俺の部屋に行くか？エアコン消してまだそんな経ってねえからまだ涼しいと思うし」

ん？

もしかして、これってチャンス……？

「ま、まあ、そうね。じゃああんたの部屋に行ってあげる。飲み物出しなさいよ？ついでにお菓子も」

「へいへい。でも、そんなにお菓子食うなよ？」

「善処するわよ」

そう言って、あたしは亮と並んで歩く

今は寮内も閑散としていて、ちょっとしたふたりきりだった

（そ、そういえばあたしって汗臭くないわよね……？）

急にそんなことが気になってしまって、あたしは亮の隣から半歩横にずれる

大丈夫。大丈夫……だとは思うんだけど、この暑さなんだから、

別にちょっとくらい汗をかいてても仕方ないわよね
――うん、仕方ない！

「おい、鈴」

「！？な、何よ！？」

ずいっと亮がこっちに顔を寄せてきた
――わあっ、近い、近いっ！
あたしは反射的に、その顔を押し返す

「いや、何回も呼んでんのに返事しねえからさ。どうしたのかと思ってよ」

「そ、そう！それは悪かったわね！か、考え事をしてたのよ！」

「そうか……」

「な、何よ……」

「いや……何か悩み事とかだったら、誰かに相談しろな。一人で出来ないことでもみんながいれば解決できるかもしれないからよ。もちろん、俺も協力を惜しまないからさ」

「う……あ、ありがとう……／／／／」

う、やばい……
ドキドキする
なによ、バカ
なんか臨海学校以来憑き物が落ちたみたいに爽やかになったって言

うか……格好良くなってるしさぁ……

「鈴？」

「なっ、なによ！」

「部屋ついたぞ、早く入れよ」

「わ、わかってるわよ、バカ……」

あたしはそう言いながら亮のあとについて部屋に入る
そこであたしはあることに気づく

（そういえば、一夏もここの部屋だったような……）

しまった
ふたりきりでも渡せるのかわからないのに、一夏がいたんじゃ余計に渡しづらいじゃない！

「って、あれ？一夏は？」

「ん？ああ、一夏なら出し忘れたレポートを提出に行ってんだよ」

「そ、そうなんだ……」

心の中でガッツポーズを取るあたし
一夏には悪いけどあんたのそのうっかりな所に感謝だわ

「んじゃ、飲み物用意するから適当に座って待っててくれ」

「う、うん……」

まずい
部屋に入ってベッドにかけて、早速まずい

（亮ってなんか……いい匂いするわよね……）

まずい、やばい、落ち着かない

（あ～……うー……）

ばたばたと足を動かしてもがきたいけれど、そんな動きを亮に見られたくはなくて、結局あたしはもぞもぞと小さく体を揺すった

「んだよ。落ち着かねえな、とりあえずお茶を飲め。ちゃんと冷えてるからさ」

「ありがと」

受け取った麦茶を飲みながら、あたしはさりげなく制服の上からサイフを確かめる
……うん、大丈夫。ちゃんとある

「そういえばよ。鈴は帰省しないのか？セシリアとか他のみんなはしてるみたいだが」

「まあ、ね。帰ってもどうせ軍施設で訓練させられるだけだし」

「確かにそれは面倒だな。でも親に会わなくても良いのか？」

「……あたしの両親離婚しちゃってるから……」

「あ……」

やばっ、どうでもいいこと喋っちゃったじゃない
亮もなんか気まずい顔になってるし……どうする……

何か良い案がないか考えていると、亮の手があたしの頭に手を置いた

「な、なに……？」

「ただ……なんとなく……」

「そう……」

ここで励ましたり、謝ったりしないのが亮らしいわね
でも、下手に励まされたり、謝られたりするよりもこっちの方が良いわ
あたしのことを全部わかってくれているみたいで嬉しい
少し両親のことを思い出して胸が痛くなったけどすぐに直った

「……で、そういうあんたはどうなのよ？家には帰んないの？」

「……とりあえず半ば頃には帰るつもりだが……」

いいことを聞けたわね
その日を詳しく聞かないと……

「半ばっていつ頃？」

「15、6かな」

よしよし、良い情報ゲット！
って、なんか目的が変わってんじゃない！
まあ、良い情報なのは間違いないから結果オーライね

「つか、あんたはいつまで頭を撫でてるわけ？」

「おっ、悪い。嫌だったか？」

「べ、別に……嫌って訳じゃ……」

少し名残惜しく思ったがそろそろ本題に入ろうと思う

「亮」

「ん？」

「あんたさぁ、夏休みなのにどこにも行かないわけ？」

「そうだな……考えたことなかったな」

「ったく、しょうがないわねぇ。このあたしが融通利かせてあげるわよ」

「へえ。何かあんのか？」

――よしよし、興味を持ったわね！

「ん」

「チケット？」

あたしが取り出したチケットを、しげしげと眺める亮

……食いつきは上々ね

「なにアンタ知らないの？今月できたばっかのウォーターワールドよ。言っとくけど前売り券は今月分が完売。当日券だって開場二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「それはすごいな」

ふふふ！

これを手に入れるのにあたしがどれだけ苦労したと――――

「そんなレアな代物を俺にくれるのか？」

「そうよ。もちろん行くわよね？」

「せっかく鈴が用意してくれたんだからな、行くよ」

むっ……

まるであたしが強制しているみたいじゃない

「別に無理しなくてもいいのよ？亮以外にも欲しい人いるし」

し、しまった！？

確かに欲しい人はいるけど、亮を誘うためにわざわざ用意したのに

「無理してねえよ、暇なんだからさ。いつ行くんだ」

よ、良かった
なんとか誘うことに成功ね

「明日の土曜日」

「そりゃまた急だな」

（仕方ないでしょうがっ、友達のキャンセル品を引き取ったんだから！）

「まあ、用事はねえし良いけどさ。どこで待ち合わせる？」

「え、えっと学園内だと制服しかダメだからゲート前で待ち合わせがいいわね！」

――やった！
すごく、すごくデートっぽい！

（ていうかデートよね！）

あたしは心の中でグッと右手を握りしめる
ここ最近ライバルの増加に出遅れることが多かったけど、今度こそはあたしがリードしたわね！

「じゃあ待ち合わせは何時にすんだ？」

「うーんと、じゃあ十時に」

「わかった」

やった！やったぁ！

あたしは心の中で何度もガッツポーズを繰り返して、お菓子をほおばりおかわりの麦茶を一気に飲み干す

タンッとテーブルにコップを置いて、立ち上がる

――――フ、決まった

「くくくっ」

「な、なによ……？」

「いや、あまりにも嬉しそうな顔してたからおかしくてな」

あ、あたしそんなおかしい顔してたのかしら？

浮かれていたとはいえ恥ずかしいわね

「し、失礼ね！とにかくっ明日遅れるんじゃないわよ！」

ばたん！と後ろでドアが閉まる音を聞いて、あたしは廊下に出る

そして出るなり、今度は心の中じゃなく実際にガッツポーズをした

（やったあああっ！やった、やったあ！）

さすがに声は出せないけれど、もうとにかく嬉しさのあまり動かずにはいられない状態だった

（早速部屋に戻って準備をしないとね！）

半ばスキップに近い足取りで、あたしは自分の部屋へと戻る
夏の暑さは気がつけばどうでもよくなっていた

第85話（後書き）

投稿再開！！

今回は鈴サイドでしたね
次回はセシリアです

人気投票よろしくお願いします！！

第８６話

「さて、やっと戻ってこれましたわ」

ＩＳ学園の正面ゲート前で、白のロールスロイスから降りたわたくしは早速の熱気にうんざりしながらも気分は高揚していた

（やはり、思い人とは同じ空の下にいたいものですし……）

わたくしセシリア・オルコットは本国イギリスでの仕事を終えて、やっと今日日本へと戻ってこられた

オルコット家での溜まった職務、国家代表候補生としての報告、専用機の再調整、それ以外にもバイオリンのコンサート参加、旧友との親交、それに――両親の墓参り

「……」

考えると、まだ胸の奥が痛む

――どうして、何もいわずに逝ってしまったのだろう

――どうして、わたくし一人が残されたのだろう

――どうして、二人は最期に一緒にいたのだろう

（いつかわかるときが来るのかしら……）

「お嬢様」

――――っ！？

呼ばれて振り向くと、わたくしの幼なじみであり専属メイドでもあるチェルシーがいつもと同じように微笑みを浮かべて控えていた

「どうかなされましたか？」

「い、いえ、なんでもなくてよ」

わたくしは多少乱れはしたものの、努めて平静を装った
相変わらず、チェルシーは人の心の機微に鋭い
昔からそうだ
十八歳とは思えない落ち着いた雰囲気を身に纏っていて、幼なじみと言うよりわたくしにとってはお姉さんのような人
そんなチェルシーは憧れであり、目標でもある

「そうですか。それでは、お荷物の方は私どもがお部屋まで運んでおきますので」

そう言ってチェルシーはうやうやしく頭を垂れ、もう一人のメイドを連れて荷物を運びはじめる

（さてと、わたくしは――――）

「早速、三崎様に会いに行かれますか？」

「ちぇ、チェルシー！？荷物を運びにいったのではなかったの？」

「実は一つ確認しておくことを恥ずかしながら失念しておりまして、

戻って参りました」

「そ、そう。それで、確認とは？」

「あの白いレースの下着は三崎様用ですか？」

「――――――――――」

え？

「お嬢様、派手すぎる下着は却って逆効果と思われます」

「あ、あの、あれは――――」

「では、これで」

言い訳をする暇も与えず、チェルシーは再度丁寧なお辞儀のあとスカートを翻して行ってしまう

いや、あの、ええと――――、え？

「え？」

母国に帰った際にこっそりネット通販で買って、二重底のスーツケースに隠しておいたのに……なぜ？

ふっ、とあのチェルシーの柔らかな笑みが脳裏に浮かんで、たまらなく恥ずかしさがこみ上げてくる

あああああっ……

（あ、穴があったら隠れたいとはこのことですわ）

顔が痛いほど熱くなって、夏の暑さとは関係なく汗が噴き出してくる
手のひらは特にひどくて、今すぐにでも洗いたいほどだった

「セシリア」

――――どきぃっ!?

え?えっ?ええ!?

（こ、この声は亮さん?どうしてここに……はっ!?も、もしかして、わたくしの出迎えに!?）

ドキドキと高鳴る胸を一度手できゅっと押さえ、あくまで冷静にどこまでも平静にわたくしはゆっくりと振り返る

「よっ、帰ってたんだな」

「亮さん、一週間ぶりですわね。ごきげんよう」

スカートをつまんで優雅に挨拶をしながら、けれど内心はとても穏やかではいられなかった

――――ああっ、本当に亮さんでしたわ!
やはり、わたくしを思ってわざわざ出迎えに……?
きゃあっ、そんな、亮さんったら!

『セシリアが帰ってくると思ったら、いてもたってもいられなくなって』

『そんな、亮さんったら……お上手ですわ』

『ウソじゃない。セシリアと離れて過ごす一週間は、永劫の時にも等しかった』

『亮さん……。あっ――――』

『もう離さない。マイ・プリンセス』

ああっ、ああっ！
いけませんわ、いけませんわ！
このような場所で！
誰かが見ているかもしれませんのに！

「おい、セシリア？」

「――――はっ！？」

真夏の白昼夢――――もとい、妄想だった

「どうした？ぼーっとして、具合でも悪いのか？暑いし日射しも強いから日射病には気をつけろよ？」

「え、ええ。大丈夫です！その、さっきまで車の中でしたから、すこし立ちくらみをしただけです」

「そうか。それならよかった」

「ええ、まったくです」

！？

「ん？あなたは？」

「お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えするメイドで、チェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

もう荷物は運び終えたのか、いつの間にか戻ってきたチェルシーは亮さんに丁寧なお辞儀と自己紹介をする

（あら……？なぜチェルシーひとりなのかしら？）

考えて、すぐに思い当たる

チェルシーだけが戻ってきたところを見ると、どうも陰から様子を見ていて、このタイミングで出てきたのだろう

……本当に心の機微に鋭い

「ああ。前にセシリアから話は聞いてたメイドさんか。どうも、三崎亮です」

「はい。三崎様。――ときに、ご無礼を承知の上でおたずねしま

すが、私のことをお嬢様はなんと？」

「ああ。とてもよく気が利く方で、優秀で、優しくて――美人だって言ってました」

「まあ」

にっこりとした柔らかな笑み
それはお世辞のしようがないくらい綺麗で、けれど嫌味ではなく人を包み込むような優しさに満ちている
それはわたくしが一番よくわかっているのだけれど――

（亮さんったら、わたくしには一度も美人だなんて言ってくれませんのに！）

そんなちょっとしたやきもちさえ見透かしたように、またチェルシーが微笑む

（ううう……、チェルシーもチェルシーですわ……）

この笑顔には勝てない
昔から、ずっとそう

「私も三崎様のお話はよくお嬢様から耳にしております」

――――！？

「へえ、そうなんだ。セシリアは俺のことはなんて？」

あああああっ！

チェルシー！お願いだから話の内容は言わないで！

「くすっ。それは……」

今度は動揺を感じ取ったようで、さっきよりも茶目っ気のある笑みを浮かべるチェルシー

そして、ゆっくりと人差し指を唇に持って行く

「女同士の秘密、です」

それは同性さえドキッとさせる、ものすごく魅力的な笑みだった

「それにしてもチェルシーはセシリアの言ってた通りのだったな」

「……そうですわね」

場所は変わって学園の食堂に隣接しているカフェ

冷暖房完備、年中無休のここでは駅前のコーヒーショップなんか目じゃないくらいの本格的なドリンク、それに四季折々のスイーツが楽しめるとあって、夏休みであっても学園生の姿が絶えない

「ね、ね、あれ、一年の三崎さんじゃない？」

「ホントだ初めて見た！」

「やーん、カッコイイ～！」

そんなおしゃべりがにわかに聞こえてくる

普段なら、その亮とのツーショットなのだから、何より嬉しいし自慢したくもなるシチュエーションだった

けれど……

「……」

むすっとしたふてくされ顔で、セシリアはアイス・カフェラテをつまらなさそうにかき回す

ストローに押された氷がからららんと透き通った音を立てるが、今のセシリアの耳にはどうでもよく響くだけだった

（大体、初対面なのにふたりともあんなに楽しく話して……）

さっきまでの亮とチェルシーの会話を思い出し、またモヤモヤとした苛立ちがわき起こってくる

『チェルシーさんってすごいな。俺と年は変わらないのにさ』

『三崎様、私のことはどうぞチェルシーとお呼びになって下さい。

口調も、お気を遣わずに使用人と思っていただいて結構ですので』

『そうか？それならそうするけど、同い年の人を使用人扱いはできねえよ。それに俺のことは、様付けで呼ばないでくれ。なんか変な感じがする』

『まあ。三崎様はお優しい方ですね』

『いや、だからその呼び方は……』

『では、亮様で』

『悪化してんじゃねえか！？』

『そうですか？ふふっ』

楽しそうに話す亮
それに、自分の本心を知っているくせに目の前で仲良くするチェルシーにも心がざわざわとした

（あの噂、本当なのかしら……）

先月の終わりに偶然耳にした噂
それも、昨日まではまったく気にもとめていなかったのに、今になってそれが落ち着かなくなる

いわく、『三崎亮は年下には興味がない』

（根も葉もないつまらない噂話と思っていましたけれど……）

先刻のチェルシーに対する態度を見ると、あながちウソでもないように思えてきてしまう

（年下って、それはどうにもなりませんし……。はぁ……）

年下に生まれた以上、いきなり自分が年上になることも、相手が年下になることもない
そんな、努力でどうにかならないものを求められても困る

なんだかよくわからないままにセシリアは気が滅入ってきて、ただひたすらに憂鬱な気分だった

「はぁ……」

「……セシリア。さっきからどうしてそんなに機嫌が悪いんだ？」

「亮さんのせいですわ」

「俺のせいかよ……」

がくっとうなだれる亮を見ても、セシリアの気は一向に晴れない
こうしてカフェに誘ってくれたのも、今はさほど嬉しく感じない

（亮さんが悪いんですわ）

とにかくそうなんだと思い込むことにして、セシリアはストローに

口をつける
ミルクが多めのノンシュガー。いつもならおいしいそれも、今はよく味がわからない
けれども口を離せばため息しか出てこないので、セシリアはなんとなくそれを飲み続けた

「……あのさ、俺が何かをしたのかはわからねえけど機嫌直せって、な」

「……」

亮は説得を試みるもセシリアはストローを口から離さない

「お前は笑顔が可愛いんだからさ」

「!?」

ちょうど喉の途中まで入っていたものが逆流しそうになった
原因はもちろん亮の予想外の言葉だった

「ケホッケホッ」

「?どうした?」

「い、いえ。なんでもありませんわ。それより亮さん、今なんて……?」

自分の聞き間違いかと思ったセシリアは再度聞き直す

「だから、セシリアは笑顔が可愛いんだから……って、言い直す

と照れくさいな……」

自分が恥ずかしいセリフを言ったことに気づいた亮は照れ隠しに頭をかく

自分の聞き間違いでないことを確認したセシリアは思い切って質問した

「で、では私とチェルシーの笑顔はどちらが好きですか？」

「はっ？」

予想外の質問に手を頭に乗せたまま固まる亮

「そ、そうだな……ど、どっちも――」

「どっちもは無しですわ！！」

セシリアに釘を刺され、顔がひきつる亮

だが、セシリアも必死で自分でなかったらどうしようと言う恐怖と戦っていた

（正直、分が悪いですわ……）

ずっと昔から思っていたが、チェルシーの笑顔には勝てないと

セシリアは少し諦めながらも亮の答えを待つ

「セシリア……かな」

「……えっ？」

「……だからセシリアだって……」

「わ、わたくしですか！？」

再度確認して驚愕するセシリア

負けると思っていた試合にまさかの勝利を得たのだから当然である

「確かにチェルシーの笑顔も魅力的だけど、俺はみんなと一緒に笑いあっているセシリアの笑顔の方が好き……かな」

「……あ、ありがとうございます……」

思わず敬語でお礼を言うセシリア

（亮さんはわたくしの笑顔をそんな風に思ってくださっていたのですね……）

本当に幸せな気分になるセシリア

亮は恥ずかしさのあまり置いてある水を一気に飲む

「……何笑ってんだよ……」

「……いえ、なんでもありませんわ」

自分でも気づかない内に笑ってしまっていたようだ

でも仕方ないですわよね？

あなたがこの笑顔を好きだって言うのだから

「まあ、いいや。セシリア」

「はい♪」

「ここに行かねえか？」

「――――はい？」

第８６話（後書き）

セシリアサイドいかがでしたか？

亮はとっさにあんなこと言えちゃうなんて・・・・

続きはどうなるかお楽しみに

人気投票よろしくお願いします！！

第87話

「ん～っ！！今日は超いい天気！これぞまさしく――――」

デート日和ってやつね！

グッと、鈴は両手の拳を握りしめる

力一杯のガッツポーズだった

場所はまだ自室だったが、服装はすでに準備万全の一張羅

この日のためにわざわざ新しく買った服である

（ふ、ふ、ふ。あのシャルロットもラウラも出し抜いてやったわ！

あたしの完全勝利！）

大胆行動をする2人に勝ったということは鈴の中でかなり大きいことだった

それに、最近箒すら亮を狙っている、気が気でないのだ

（ふふん、同じ水着でもこの前の臨海学校とは意味が違うのよ、意味が。これはれっきとしたデート！男女の付き合いなんだから！）

男女、というところを強調して考えていると、いきなり鈴の顔がほんのりとピンク色に染まる

（う、うん、今日はとっておきの可愛い下着を選んだし、もちろん替えの下着も用意したし、うん……）

夏は何が起こるかわからないから油断するな、と昔の歌も言っている

（た、例えば、帰り道とかでさぁ……）

……。

『今日は楽しかったわね』

『そうだな。鈴と一緒だったからな』

『そうそう。やっとあんたもあたしのありがたみに気づいたってわけね。うんうん』

『――鈴』

『え？な、なによ？急に手なんか握ったりして……』

『俺、わかったんだ。鈴と出会い、一緒に過ごして……どれだけ大事な存在だったかってことにな』

『り、亮……？』

『鈴、好きだ』

『え、あっ――――だ、ダメ、こんなところで……』

『俺のこと、嫌いか？』

『き、嫌いじゃないけど……』

『じゃあ、いいな？』

『ば、ばか……。強引……んっ』

――――なんちゃって、なんちゃって！

「ねえ、ティナ！ねえ！」

「……はいはい、そーね」

カップアイスを食べながら、ルームメイトのティナは鈴の方を見ずに答える

まともに相手をするのは馬鹿らしい

昨日のやりとりで、十分鈴が浮かれていることはわかった

……その理由までは知るよしもなかったが

「じゃああたし出かけてくるから！」

「いってらっしゃーい」

「よ、夜遅くなるかもしんないから！」

「ふーん、あっそ」

「じゃあね！」

「じゃーねー」

バタン、と後ろでドアでドアが閉じる

再度、鈴はガッツポーズをして意気揚々と歩き出した

「……」

「ふふふっ」

ウォーターワールドのゲート前にて、見知った顔に睨まれている

鈴は目をそらし、セシリアは睨みつけている

「……なんであんたがあたしが亮とここに出かけるって知ってんのよ！！」

ウガーッとセシリアに文句を言う鈴
ちなみに鈴は出会い頭にこう言われた

『ごきげんよう、鈴さん。抜け駆けとは油断も隙もありませんわね』

だった
どこで情報が漏れたのかわからないがセシリアは完全に一緒に来る気だった

「それに亮はどうしたのよ！まだ来ないし！」

「それはわかりませんわ。わたくしはこのチケットをもらって、この時間に集合するようにと言われただけですので」

そう言って見せたのは一枚のチケット

「ち、ちょっと待ちなさいよ！それはあたしが亮のためにあげたチケットじゃない！！」

「あら、チケットは三枚あるのではなかったのですか？」

「なわけないじゃない！チケットは二人分しかないわよ！！」

二人きりのデートなのになぜ三枚も用意しなくてはならないのか、意味がわからない

「それでは亮さんは……？」

「もしかして、あいつ来ない気じゃ……」

そう言った鈴はすぐに携帯を取り出して亮に電話しようとするだが、その必要はなくなった

「よっ」

悪びれもない顔で現れた亮
そんな亮に鈴は――――

「よっ、じゃないわよ！このバカ！！」

「グハッ！？」

全ての怒りを込めた拳を亮にぶつけるのだった

「な、なにしやがる！！」

出会い頭に鳩尾に右ストレートをぶつけやがって

「それはこっちのセセリフよ！どうしてセシリアがここにいるのよ！」

「いや、それは俺が誘ったからだよ」

「このバカ！なんで誘ったのよ！！」

「いや、セシリアもつい昨日戻ってきたばかりだったからさ。学園のみんなと遊んでねえんじゃねえかなと思ったんだ。せっかくの夏休みなんだ。みんなと遊んだ方が楽しいだろ？」

「それは……そうだけど……でも、誘うならあたしの意見も聞くべきじゃない！」

「ちゃんと聞こうとしたぞ？電話をしても出ねえし、部屋に行ったら寝てるって言われたからできなかったんだ」

俺がそう説明すると鈴は頭を抱えて唸りだす

どうしたんだろうか？

「で、でもチケットはどうすんのよ、チケットは！この二枚しかないのよ！！」

「それは大丈夫だ。ほら」

俺があるものを見せると鈴は驚いた表情で固まってしまう

「それは当日券！？なんであんたが！？」

「苦労したんだぜ？このチケットを手に入れるには開場二時間以上は並ばねえと買えないってクーンに聞いてさ。だから三時間くらい前に並んでついさっきやっと買えたんだ」

正直、この暑さに死ぬかと思ったよ

「な、なんでそんな苦労してまで……」

「はあ？お前と遊びたかったからに決まってんだろ？」

「あ、あたしと……？」

「たく、ほら行くぞ。せっかく来たんだ。楽しまねえとな」

じゃねえと苦労して並んだ意味がねえからな

「……何よ、そんなこと言われたら文句言えないじゃない……」

「さすが亮さんですわね」

なんか言っているが気にしないようにしよう

「へえ、中はかなり広いんだな」

ウォーターワールドへ入場した俺はとりあえず鈴とセシリアを待っている

ここは色々なプールがあるみたいだ
流れるプールや子供用プールはもちろん、ウォータースライダーや波のプールもある
これは楽しめそうだ
正直、一夏も呼ぼうと思ったんだが、山田先生のミスで急遽呼び出しをくらった。書類がどうとかで
しかも、丸一日かかるらしい
残念な奴だ

そういえば、俺がそういった呼び出しは一度もないな
一応俺は世界で二番目にＩＳを使った男、普通なら一夏みたいに色々と書類とか検査を受けるのだが、一度もない
千冬さんや山田先生がいろいろと手回しをしてくれているのだろうかもしかしたら欅も関係していそうだ

でも、ＩＳの関係者には少なからずも俺の存在を知っている
ＩＳ学園はもちろん、シャルロットのデュノア社、アメリカのナターシャ――

「――っ！？」

しまった。キスされたことを思い出してしまった

（せっかく忘れていたのに、ヤバい。顔が赤くなっちまう）

慌てて顔を直そうとしたが、結局顔が真っ赤になる運命だった

「お待たせしましたわ、亮さん」

「待った、亮？」

「い、いや大丈……ぶっ!?」

俺は思わず話しかけてきたセシリアと鈴を視線から外す

「亮さん？どうなさいましたか？」

「い、いや……」

「あ、あのさ、亮。どこか変な所あるかな？」

恥ずかしそうに聞いてくる鈴
だが、正直今の俺は答える余裕がない

臨海学校で一度見たが、セシリアは違う水着をしている。しかも結構派手な
鈴は同じ水着をしているが、臨海学校の時よりも引き締まっている

「い、いいんじゃないか？うん」

「そ、そう？ありがとう、亮」

「あ、ありがとうございます、亮さん」

「お、おう……」

ぐっ、ヤバい
二人とも、嬉し恥ずかしいのかもじもじしている
それがまた二人を可愛いく見せている

「そ、それじゃあ行こっか！せっかく来たんだから遊ぶわよ！死ぬほど遊ぶわよ！」

「あ、おい！？」

鈴が俺の手を引っ張ってプールへと導く

つか、死ぬほどはダメだろ

「お、お待ちなさい！抜け駆けは許しませんわ！！」

そんな俺たちを追いかけるセシリア

なんか疲れそうな気がする……

第87話（後書き）

えー、原作とは違う展開にしてみました

原作通りだとあの2人は可愛そうだな、と思ったからです

人気投票よろしくお願いします！！

第８８話

「ふぅ！結構泳いだわね」

「ああ、もう全部のプールを泳いだんじゃねえか？」

あの後、俺たちは色々なプールを回って泳いだ
途中、虹色のプールや噴水プールなんてのもあったが意外に楽しめた

「確かあっちにアスレチックプールがあった気がしますが……あそこですわね」

「ん？なんか賑やかね？」

アスレチックプールの回りには人だかりが出来ている

「さあさあ！本日午後一時より開始のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースの受け付けはこちらでーす！是非とも参加してくださーい」

「へえ、そんなのやってんのか」

「ふーん。こんな暑いのによくやるわね」

「まあ、暇つぶしに観戦するのもいいかもしれませんわね」

どうやら二人はそんなに興味が無いらしい
それじゃあ他に行こうかと思ったとき、受け付けの人がさらに一言

「優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！」

「あたしと組もう、亮！」

「わたくしと組みましょう、亮さん！」

変わり身はやっ！？

つか、賞品目当てなのがバレバレだ

そんなに行きたいのか、沖縄に

しかも何故か俺に組もうと言ってきやがった

「ちょっとセシリア！あんた、譲りなさいよ！ここに来れたのはあたしのおかげでしょ！」

「それとこれは関係ありませんわ！鈴さんこそ抜け駆けしようとしたのですからわたくしに譲りなさい！」

今にも喧嘩をしそうな二人

このままでは俺にも被害がきてしまう

「すみません」

「はい！参加希望ですか？」

「はい。あの二人が」

俺は後ろで言い争っている二人を指さす

「「ええっ！？」」

「はい。かしこまりました。優勝目指して頑張ってください」

「ちょ、ちょっと亮！なに勝手に決めてんのよ！」

「そうですわ！どうしてわたくしが鈴さんと組まないといけないのです！」

「それはこっちのセリフよ！！」

「落ち着け、お前らは賞品が欲しいんだろ？なら協力すれば簡単に優勝できるだろ？」

「そりゃあそうだけど……」

「わたくしは亮さんと組みたいのに……」

「んじゃ、こうしよう。このイベントで活躍した方になにか褒美みたいなのをしてやるよ」

「「！？」」

おっ？

二人の目の色が変わったぞ

「よーし！やってやろうじゃない！」

「ＭＶＰはわたくしのものですわ！！」

「……まあ、頑張れ」

まさかこんなにやる気を出すとは……

（勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ！！！！）

（ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美ご褒美！！！！）

二人の頭の中は優勝商品ではなく、亮からのご褒美へとチェンジされていた

「なんか嫌な予感がする」

このイベント……大波乱の予感がしやがる

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

わぁぁぁぁっ……！と、会場からは歓声と拍手が入り乱れる

レース参加者は全員女だから、観客のテンションもおおいに上がっ

ているようだ
なお、参加を希望した男はことごとく受付で『お前空気読めよ』という無言の笑みに退けられた
ちなみに俺が話しかけたときもそうだった
女性優遇の社会ではあるが、それはそれらしい
水上を走り回るのは女性がいいに決まっている、と主催者であり当園オーナーでもある向島光一郎の指針――つうか、趣味だな

「さあ、皆さん！参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」

再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応えている
そんな中、特にどういう反応をするでもないペアがいた
――鈴とセシリアだ
二人とも念入りに準備体操をしながら、それぞれ体をほぐしていた

「勝ってご褒美勝ってご褒美勝ってご褒美……」
「勝つためなら手段を選ぶな手段を選ぶな手段を選ぶな……」

なにかを呟いているみたいだが、観客席に座る俺は回りの大歓声でよく聞き取れない
気合いが入っているのだけはわかったが

「では！再度ルールの説明です！この五〇×五〇メートルの巨大プール！その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央へと続いています。その途中途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっています！ペアの協力が必須な以上、ふたりの相性と友情が試されるということですね！」

ふむ、あの二人ならどんな障害物でも軽くこなせそうだが、問題は相性だ
あの二人はなんだかんだで意見が食い違う
今日も鈴が流れるプールと言えばセシリアは波のプールとまったく違う場所に行きたがる

「大丈夫か……？」

もう不安しか頭の中にはなかった
それでもレースは始まる

「さあ！いよいよレース開始です！位置について、よ～い……」

パァンッ！と乾いた競技用ピストルの音が響き、二十四名十二組の参加者が一斉に駆け出す

「セシリア！」

「わかっていますわ！」

開始直後、足払いを仕掛けきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する
一応言っておくが、このレース『妨害ＯＫ』なのだ
だが、そこは代表候補生
そのルールは二人にとって有利なだけだ
その証拠に向かってきたペアを軽くかわし、ついでに足をひっかけて水面へと落としている

（さすがだな、これなら大丈夫か？）

そう思っていると、いきなりの大立ち回りのせいか、以後の妨害はとにかく鈴とセシリアに集中した

「ああもう、うっとうしい！」

「邪魔ですわ！」

向かってくるたびに水面に落としてはいるものの、きりがないどうやら先行した組と落とされた組がグルになっているようだ落とされては即復活し、とにかく妨害行為を仕掛けてくる

「くっ……このままじゃ置いてかれる！」

第一グループが二番目の島に渡っていることに焦りを感じている鈴は、なにやらセシリアに目配せしているあいつらプライベート・チャンネルで、交信してやがるな？交信が終わった二人はしつこい妨害ペアに向き直った

「「うりゃあああああっ！」」

がっつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペアそんなペアに呆れため息をはく二人は、風を裂くような素早い動きで一閃した

どぼーん！とプールに落ちる妨害ペア、しかし慣れたのかすぐに蘇るが――その体にはあるべきものがない

「ふっ……。人は水着無くして生きてはいけない……」

「マリー・アントワネットの言葉通り、水着がないのなら全裸でど

うぞ」

「「きゃあああああっ！？」」

素早く水着のブラを奪った鈴とセシリアは、パニックに陥る妨害組を一瞥したあと手元のそれを丸めて反対側の客席へと放り投げたなんて奴らだよ、普通そこまでやるか？
観客は期待通り――というかそれ以上のアクシデントに、会場がおおいに沸いた。主に男性陣がな
つか、どや顔してっけどやっていることは最悪だからな？

「さて、邪魔者は去ったし」

「追撃しましょう」

一番目の島ではロープで繋がれた小島を一人が固定して渡り、それから向こう岸で支えてもう一人も渡るというものだったが――

「ま、時間食った分一気に行くわ」

「ええ。これ以上の差は許しませんわ」

鈴とセシリア、ふたり同時に小島へと飛び移る
無謀な行動にも思えるが、小島一つ飛ばしで前転側転織り交ぜた鈴が軽やかに飛び、そのあとを揺れを見切ったセシリアが素早くついて行く
さっきまでは水着ポロリに沸いていた会場だったが、今度は二人の活躍に観戦が巻き起こった

「こ、これはすごい！二人は高校生ということですが、何か特別な

練習でもしているのでしょうか！？」

ＩＳ学園の生徒でかつ代表候補生です、とあの司会者に教えてあげたいよ

でもまあ、確かにすごい

改めてあの二人の実力を実感したよ

「ははん！余裕！」

「地雷原に比べれば何とも簡単ですわね」

――あの調子に乗った顔をしていなければね

そんなこんなで続く第三の島、第四の島とクリアーをしていき、ついに最後の第五の島なのだが――問題が起きた

第８８話（後書き）

２人が大活躍でしたね

しかし、次回は大変なことに

人気投票よろしくお願いします

第89話

まともに走ったのでは負けると踏んだのか、トップのペアが反転して鈴とセシリアに向かってきた

「あっはっはっ。一般人があたしたち候補生に勝てるとでも――」

「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！」

「――はい？得意の…なんですって？」

「ご存じふたりは先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！仲がよいというのは聞いていましたが、競技が違えど息はぴったりですね！」

ああ……どっかで見たことがあると思ったらあのメダリストか

「え……？なに、金メダル？ていうか、体がこのふたりだけ違うんだけど！？」

うん

マッチョ・ウーマンという単語がぴったりと合いそうなペアだからな

（まずい！こっちはさっきから全力疾走で疲れてんのに、ここでこんな筋肉バカとやりあったら――）

（さ、さすがに押し切られますわね）

疲労からさすがに敗色が濃いと見たふたりは、思わず足を止める
馬鹿、それはまずい

「もらったあああああっ！」

「くっ……！」

鈴とセシリアは後ろ跳びに距離を取るが、そこは浮島。もはや逃げ道はない
ここまでか……

「こうなったら……セシリア！」

「な、なんですの！？」

「あたしに策がある！突っ込んで！」

「は！？わたくしが前衛！？」

「そうよ！迷ってる暇はないから！」

「ああもう！」

再度距離をツメにかかってきたメダリスト・ペアに向かってセシリアは単機特攻する

（片方だけでも気を逸らせられれば……信じましたわよ、鈴さん！）

「セシリア、そこで反転！」

「え？」

大声に呼ばれて振り向くセシリア
そして見たのは、眼前に迫る鈴の足――の裏

「は……？――ぶべっ！！」

思いっきり
思いっきり、顔面を踏まれた

「よしっ！」

「……よしっ、じゃあねえだろ……」

セシリアを踏み台にした鈴はその身軽さで一気にゴールへ跳躍
フラッグを手に取る

「勝ったぁ！」

その後ろ、数秒前まで鈴がいた島では、踏まれてバランスを崩したセシリアがさらにメダリスト・ペアのタックルを受けて一緒に数メートル下の水面へと落ちていった

どっぼーん

高く伸びた水柱を、鈴は眩しそうに見つめる

「ありがとう、セシリア。あんたのおかげよ」

いや、まだ死んでないから

「ふ、ふ、ふ……」

地の底から響くような絶対零度の笑い声

そして、さっきの倍ほどの水柱が立つ

「今日という今日は許しませんわ！わ、わたくしの顔を！足で！しかも亮さんが見ている所で！――鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開した水着姿のセシリアが、憤怒の表情で鈴へと向かう

「はっ、やろうっての？――甲龍！」

対する鈴もすぐさま甲龍を展開し、即応態勢へと移る

って、なんか大変なことになっちまったぞ！

「な、なっ、なぁっ！？ふ、ふたりはまさか――ＩＳ学園の生徒なのでしょうか！この大会でまさか二機のＩＳを見られるとは思いませんでした！え、でも、あれ？ルール的にどうなんでしょう……？」

そんなこと言っている場合か！

このままでは回りに被害が出るぞ

「ちょっと貸してくれ！」

「えっ？あ、ちょっと！？」

俺は司会者から無理矢理マイクを奪い取り言った

「会場の皆さん！これは私たちが呼んだＩＳ学園の生徒たちによる演武です！」

「ちょっと、あなた！なにを勝手な――――」

「危ねえ！！」

俺は司会者を抱いて横に飛んだ
するとビームがさっきまでいた場所を貫いた

「ええー・・・・・このようにふたりは緊張しているようで回りが見えていません。ですので皆様、早急に避難してください」

俺がそう言うと観客は実際に当たりそうだったのを見てか大慌てで避難を始める
司会者も避難をさせ、誰も居なくなったことを確認した俺はガチギレしたふたりを見る

「ぜらぁあっ！」

「はあぁぁっ！」

ガギンッ！

互いのブレードがぶつかり合い、火花を散らす
ああくそっ！どうにかして止めねえと！

「ティアーズ！」

「甘いっての！」

すぐさまビットを射出するセシリアに対し、鈴は両足のスラスターを巧みに扱って距離を離しては寄せ、近づいては下がるを繰り返す

「くっ！耐狙撃制動とは……相変わらずやりますわね」

標的を絞りきれず、セシリアはゆらゆらと銃口を泳がせる
そして、その隙を逃す鈴ではなかった

「衝撃砲はあんたのと違って早いのよ！ほらほらぁ！」

逆さまの態勢から三連射、その後一気に距離を詰めての袈裟斬り
しかし、それはセシリアも承知の上で、あえてライフルで刃を受けた

「動きが止まればこちらの領域（テリトリー）ですわ！」

ビットをさらに二つ射出し、鈴の背後を狙う

「この距離なら衝撃砲の方が早い！」

ふたりは手を伸ばせば届くほどの接近距離で、互いの武装をフルに展開する

どちらも退くことなく、そして――

「そこまでだ」

「「え？」」

ピタリとふたりの動きが止まる

聞こえたのは亮の声

そして次に聞こえてきたのは標的にされたという緊急アラーム音

冷静になったふたりが回りを見てみるとスケィスの光剣が自分たちに向けられていた

「さて……と」

「あ、あの、亮？」

「お前ら回りを見てみろ……」

「「……あっ……」」

俺に言われ確認したふたりは顔を引きつらせる
綺麗だったプールは鈴の衝撃砲やセシリアの射撃により穴だらけとなり、ボロボロになっていた

俺はあまりの惨状に呆けているふたりの前に立ち頭を掴む

「り、亮……？」

「亮さん……？」

「まあ……とりあえずお前らは……反省しろ！！」

俺はふたりの頭を掴みながら急降下する。もちろん、ふたりも逆らえずにそのまま急降下
下にあるのはプールのみ
寸前で俺はふたりをプールへと投げつけた

「「きゃあああああああああああっ！！？？」」

ざっば――――――――ん！！

今日一番の水柱が立った
しかも、虹が見える
うん、一仕事やった後に見る虹は格別だな

でもまだ、仕事は残っている

「「……」」

伸びているふたりを回収することだ

「とにかく！こういったことは！金輪際！しないでくださいね！」

「「はい……」」

司会のお姉さんに事務室でこってりと絞られて、私服に着替えた鈴とセシリアはしゅんと小さくなる
ちなみに亮は外で待機している

「それにあの男の子の機転がなかったら、これ以上の被害が出ていたかもしれなかったんですよ！わかってます？」

「「はい……」」

そう、亮の機転で幸いにま怪我人は出なかったが、レース会場のプールは半壊、天窓も一部割れるという物損被害が発生した
スケィスによる鎮圧がなければさらなる被害が出ていたのは言うまでもない

「はぁ、まったく……！本当はもっと言いたいことが山ほどありますが、あの子にも謝ってもらいましたし、そこそこで勘弁してほしいと言われました。命の恩人ですからね、これぐらいで勘弁してあげましょう」

「「……ありがとうございます」」

「お礼はあの子にも言ってくださいね」

「あ、あのぅ……」

「何か！？」

「い、いえ、あの、優勝はどうなったのかなと思いまして……」

「……景品、もらえると思ってるの？」

ギラリ、殺し屋の目で睨むお姉さん

「「す、すみません……何でもありません……」」

鈴とセシリアがＩＳで大暴れしたために、当然、大会はメチャクチャとなって途中中止
であるから、優勝者などいるわけがない

「ほら、さっさと帰んなさい」

「失礼しました……」

ばたん、とドアが閉まる音を背中で聞いても、ふたりはぼんやりと床を見つめたままうつむいて歩き出す

「よっ、お疲れ」

「「……」」

外で待っていた亮は出てきたふたりを見て話しかけるが、返事がない

「まあ、何にしても良かったな。ここのオーナーの計らいで学園には伝えないでくれてさ」

「それは……」

「亮さんが……」

亮の言葉にふたりの表情がさらに暗くなる

そう、この計らいは亮がオーナーに必死で頭を下げた結果なのだ

「気にすんな。年長者の俺がしっかりしていなかったのにも原因はある」

「そ、そんな……」

「悪いのは全部――」

あたしたち、と言おうとする前に亮はふたりの頭に手を置いた

「もう終わったことなんだし、忘れようぜ。それに優勝賞品より良いもんもらったからな」

「「？」」

そう言ってふたりに見せたのはチケット

「これは@（アット）クルーズの無料券だ。オーナーが俺を気に入ったとか言ってくれたんだ。しかも五枚」

取り出した五枚のチケットを団扇のように扇ぐ亮

「これで甘いもんでも食って忘れろよ」

「……えへへっ、うん♪」

「……ふふふっ、わかりましたわ♪」

「んじゃあ行くぞ」

ふたりの前を歩く亮
そんな亮を見ながら喜色満面の笑みを浮かべる
さっきまでの落ち込みや罪悪感はどこへやら
ふたりは亮の腕を取る

「さ、行きましょうか」

「んだよ、急に……」

「なに、イヤなの？」

「イヤだっつーの。でもまあ、レースを頑張ったご褒美として、今回は我慢してやるよ」

「あら？より頑張ったどちらかではありませんでしたの？」

「どっちもより頑張ってたさ。嫌ならご褒美はなしにするが？」

そう言うとふたりは黙り、ぎゅっと亮の腕を掴む
そんなふたりを見て苦笑しつつも亮は両手に花の状態で歩き出すのであった

第８９話（後書き）

まさかのスケィス登場

でも、誰もいなかったのでバレテいません

人気投票よろしくお願いいたします

第９０話（前書き）

人気投票最終日！！

第９０話

「いらっしゃいませ、@クルーズへようこそ」

ここは@クルーズ
特異な喫茶店で、女は使用人の、男は執事の格好で接客をするという――メイド&執事喫茶である

「あ、あのっ、追加の注文いいですか！？できればさっきの金髪さんで！」

「コーヒー下さい！銀髪のメイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんを一つ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

そこで一番注目を浴びている美少年執事と美少女メイド
そのふたりはどこかで見たことがある二人だった

「はあ……」

「どうした、シャルロット？」

「いや、なんでもないよ……」

そうこの美少年執事と美少女メイドはフランスの代表候補生シャルロット・デュノアとドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった

「僕達なんでこんなことしてるんだろう……」

シャルロットはそう呟くとこの状況になるまでのことを思い返した

時間は十二時を過ぎたところ

二人はオープンテラスのカフェでランチをとっていた

「ふぅ、疲れたな」

「まさか最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」

二人は服を買うために駅前のデパートで買い物をしたのだが、最初に訪れた店で何故か写真を撮られたり、握手されたりと休日のアイドルみたいに取り囲まれてしまったのだ

「しかしまあ、いい買い物はできたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？あ、もしかして、お披露目は亮に取っておきたいとか？」

「なっ！？ち、違う！だ、だだ、断じて違うぞ」

顔を赤らめて取り乱すラウラの姿に、シャルロットは的を射たことを確信しながらもあえて知らないフリをする

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まったくだ」

「ラウラ」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆」

「っ～～～～！！」

シャルロットによって気がついたラウラは、それこそ耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離した

「ご、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなぁ。日本製の時計ってちょっと憧れだったし」

「うん、せっかくだからね。ラウラはそういうのってないの？日本製の欲しいもの」

「日本刀だな」

「……女の子的なものは？」

「ないな」

即答

わかっていたとはいえ、にべもない返事にシャルロットはがくっと首を落とした

ふと、シャルロットが隣のテーブルの女性に気がつく

「……どうすればいいのよ、まったく……」

年の頃は二十代後半で、かっちりとしたスーツを着ている

何か悩み事があるらしく、注文したであろうペペロンチーノは冷め切ってしまっている

「はぁ……」

深々と漏らすため息には、深淵の色が見て取れた

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

ラウラがシャルロットの言葉を先回りする

そんな反応にびっくりするシャルロットだったが、すぐに嬉しそうな顔をして続けた

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ。……で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

「え？――――！？」

ふたりを見るなり、ガタンッ！とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる
そしてそのまま、シャルロットの手を握った

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

（それがまさか喫茶店のバイトなんて……いや、そこは全然構わないんだけど……）

シャルロットはちらっとラウラを見た

（僕もメイド服が良かったなぁ……。そっちを着てるラウラ、すっごく可愛いし……）

店長には執事姿が格好いい、と言われて仕方なく着ているが、それはただシャルロットのため息を増やす結果となる

（でも、まあ亮に見られる訳じゃないし、いいかな）

そんなことを考えていると、ちゃらんちゃらん！と来客のベルが鳴った

「いらっしゃいませ！@クルーズへようこそ」

切り替えしの早いシャルロットが一番早く反応した

「ん？……シャルロット？」

「……え？」

シャルロットの目の前には一番見られたくない想い人がいた

@クルーズに到着した俺は出迎えてくれたのはどこか見覚えのある執事だった

「……」

「……お前、シャルロットだよな？」

思いっきり視線をそらす執事に俺は問いかける

「だ、誰のことをおっしゃっているのでしょうか？僕にはわかりませんが……」

「だったらこっちを向けよ」

「と、とにかく席にご案内いたします」

「その前に、俺の質問に答えろ」

「ぼ、僕はシャルロット・デュノアっていう名前ではありません！」

俺はフルネームを言った覚えはないんだが、まあいい

「んじゃ名前はなんだよ」

「え、えっと……あ、○崎ハ○テです！？」

それは色々とヤバい気がするんだが……

つか、咄嗟でなんでその名前なんだ？

「そうか、あんたは○崎ハ○テって言うんだな？」

「は、はい。その通りでございます」

そうか、と返事した俺は携帯を取り出して電話を始める

「あ？もしもし、一夏？」

「！？」

「男装したときのシャルロットみたいな美少年がいる店を見つけたんだけど今から来ないか？」

「！！？？」

「えっ？みんなもシャルロット似の美少年を見たいから連れて行くって？ＯＫＯＫ連れて来い」

「わあぁぁぁぁっ！？待って！待って、亮！？」

観念したのか俺の名前を呼びながら飛びついてくるシャルロット

「なんですか、○崎ハ○テさん？俺はただ友達を呼んだだけですよ」

「それがダメなんだよ！？」

「何言ってるんですか。客が増えるのに、しかもクラスメイト全員分」

「だから……僕は……」

……そろそろふざけるのは止めるとするか
このままでは泣く恐れがある

「冗談だよ、シャルロット。さっきの電話は嘘だから誰も来ねえよ」

「え……。……亮～……今のはさすがに酷いと思うんだけど……」

ゴゴゴゴッと怒りのオーラを纏い始めるシャルロット
ヤバい、シャルロットは怒ると一番怖い

「悪い悪い。慌てふためいているシャルロットが可愛くてつい」

「か、可愛い……そ、そんなこと言っても許さないからね！」

ぷいっ、と顔を横に向けるシャルロット

「……んじゃ、ここのパフェ奢るからさ。それで許してくれよ」

「ま、まあそれなら許してあげる」

本当は誤魔化そうとした自分が悪かったのでそこまで怒ってはいなかった

（あう……なんか僕、感じ悪くなっちゃってないかな？）

と自分の言ったことに軽く後悔するシャルロット

「それでどうしたんだ？バイトか？」

「……そんなところかな。あっ！ラウラもいるよ。可愛いメイド服を着てるんだ」

ラウラもか、どういう経緯でそんなことになっているのかはわからないが……

「よし、ラウラにもびっくりしてもらうか」

「亮……。なんか今日はテンション高いね」

「いろいろとな……」

今日は誰かさんたちの暴走を止めたり、頭を下げたりと苦労したからな

それくらいの息抜きは許してほしい

「まあ、シャルロットより、酷いことはしねえから安心しろ」

「なんか素直に喜べないんだけど」

気にすんな

第９０話（後書き）

何故かセシリアと鈴がいません

理由は後々

今日で人気投票最終日、遠慮せずどしどし送ってください

第９１話（前書き）

人気投票は昨日で終了いたしました

ご協力・投票ありがとうございました

第９１話

「ラウラ、六番テーブルお願い」

シャルロットがパタパタと忙しそうに小走りしながら言ってくる

「うむ、わかった」

私、ラウラ・ボーデヴィッヒはシャルロットにそう返事をした後、六番テーブルに向かった

「水だ、飲め」

ダン！と割れそうなくらいの音を出しながらコップを置く

「注文を言え」

「……」

何故か黙り込む客

この客、少し変だな

店内なのに帽子をかぶり、しかも下を向いて顔が見えないようにしている

「おい、聞いているのか？さっさと注文しろ」

「……」

客はメニューをぴらぴらとめくりながらどれにしようかと考えている

ああ……イライラするな

「おい！さっさと決めろ！それでも貴様は男か？私の嫁はもっと早く決めるぞ！！」

がやがやと回りがざわつき始めた

「え！？あの子結婚しているの！？」

「しかも嫁！？〇合！？」

「神様ありがとう！！」

外野がうるさいが私は目の前にいる軟弱男を睨みつける

「……あのさ」

「なんだ？」

「そいつはどんな人なんだ？」

「いいだろう、特別に教えてやる。格好良く、強く、優しい、そして何より私の全てを受け入れてくれた心の広さ。どうだ、素晴らしい嫁だろう」

「……」

むっ？

なんかさっきよりもうつむいてしまったような……

しかも帽子を深々とかぶり直している

「そ、そうですか……素晴らしい嫁なんですね……」

「当然！」

「ちなみにその嫁の顔は……」

軟弱男がそう言って帽子を取ろうとする
嫁の顔がどうしたのだ？、そう思った瞬間、私は軟弱男の顔を見て
頭の中が真っ白になった

「こんな顔じゃなかったか、ラウラ？」

その顔は今まで私が自慢話をしていた人物――三崎亮だった

「おい、ラウラ。そろそろ機嫌直せって」

「……」

「あはは……」

俺は@クルーズでメイド姿でバイトをしていたラウラをびっくりさ

せることには成功したのだが、それが原因で拗ねてしまい口を聞いてくれない

「でもさ。お前も人のことをそうそう話すなよ。もし、今のが俺の知り合いだったらどうすんだよ。誤解されんじゃねえか」

「ふん……私は事実を言っただけだ。誤解など一つもない」

嫁が最大の誤解になりうるんだが……

「はいはい。ラウラ、その辺で許してあげようよ。亮も反省してるし。ここのパフェを奢ってくれるから、ね」

「むぅ……仕方ない。許してやろう」

「ありがとな、ラウラ。このチケットで好きなのを頼んでくれ」

俺はウォーターワールドのオーナーにもらったチケットを渡すとシャルロットは驚愕の表情へと変わった

「亮、確かこれはゴールド会員しかもらえない。ゴールド無料券だよ。なんでそんなものを亮が？」

「とあるオーナーからもらったチケットなんだ。いや～、あの人ここの会員だったのかよ」

「でも、ゴールド会員になるにはかなりのお金が必要なんだよ？」

「そうなのか？」

まあ、ウォーターワールドのオーナーならお金くらい普通に持っているだろう

「そういえば、亮よ。お前、私たちの電話に出なかったが何をしていたのだ？」

「えっ？」

ラウラにそう言われ携帯を確認する

ヤバい

振動しないサイレントマナーモードにしていたから気づかなかった

「それに持っているバッグって何が入ってんの？出歩く時はいつも携帯とサイフの最小限の荷物しか持たない亮にしては珍しいよね」

うっ……

さすがシャルロット。洞察力はかなりのものだ

「え、駅前のデパートの地下で買い物してたんだよ。あそこは電波が悪いしな」

「亮、私が電話した時間は朝だ。お前はそんな時間からデパートに行っていたのか？そもそも、その時間はデパートはまだやっていない」

し、しまった！？

「……亮、何か隠してるね？」

「綺麗さっぱり話してもらおうか……」

「……はい」

観念した俺はセシリア・鈴と一緒にウォーターワールドに行っていたことを話した
ちなみにセシリアと鈴がいないのは急に学園から呼び出しを食らったもしかしたらＩＳの使用がバレたのかもしれない

だったら俺が呼ばれてもおかしくないのでは？、と思ったが結局呼ばれず俺はふたりと別れ、結局一人でここに来たのだが失敗だったかな

「へぇ～～、亮は私たちをほっといて三人で楽しんでたんだ。ふーん」

三人、って部分を強調するシャルロット

「私をほっといて他の女と遊ぶとはなんて浮気癖のある嫁だ。ここは調教し直す必要があるな」

うおっ、何故かわからないが一気に死亡フラグ
どうすれば良いかと考えたその時、事件が起こった

「全員、動くんじゃねえ！」

ドアを破らんばかりの勢いで雪崩れ込んできた男が三人、怒号を発する
一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

（なんなんだ、こいつら？強盗か？でもなんでこんな所に……）

俺はちょうど男達から見えない席に座っており、テーブルの下で状況確認をする

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――」

さすがは駅前の一等地
警察機関の動きはこの上なく迅速で窓から見える店外ではパトカーによる道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網を作っていた

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

それは俺も思った
一世代くらい前の刑事ドラマみたいな感じだ
おそらく今の十代には俺くらいしか通じないだろう
えっ？なんで俺が知っているのかって？
たまに見るんだよ

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員――」

「うろたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中で髭をはやした男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す

「そ、そ、そうなんだな。お、おらたちには高い金払って手に入れたコレがあるんだな」

ジャキッ！と硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う
そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げる
それを今度は髭の男がハンドガンを撃って黙らせた

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと声が漏れないようにきつく口をつぐむ

（亮、デブの人はショットガン、チビの人はサブマシンガン、そして髭の人はハンドガン。他にも予備で何か持っている可能性もあるけど……）

（ちっ……状況は最悪ってわけだ……）

目立たないようにしゃがみつつ俺とシャルロットは状況を冷静に分析していく

（うん。だから、とりあえずは――）

（どうし――っ！？）

もう一度店内の状況を確認しようと視線を動かして、そこで俺とシャルロットはぎょっとした

「……」

店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだったあいつどこに消えたかと思ったら……

「なんだ、お前。大人しくしてろっていうのが聞こえなかったのか？」

案の定、すぐにリーダーがやってくるその手に握ったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外したこうも冷静だと見ているこっちも冷静になるでも、ラウラは一体なにを考えているんだ？

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか！時間はたっぷりあるんスからこの子に接客してもらいましょうよ！」

「あぁ？何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！すっげー可愛いッスよ！」

「お、オラも賛成なんだなっ。それにめ、メイド喫茶に入るのは、初めてなんだな！」

ふたり揃ってテヘヘと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下にリーダーは眉間にしわを寄せながらソファにどかっと腰を下ろす

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渇いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

ラウラはうなずくでもなく男たちを一瞥すると、カウンターの中にすたすたと歩いていく

「……」

（！……シャルロット……）

（うん。わかってる）

第９１話（後書き）

ツッコミは無しでお願いいたします

感想お待ちしております

第９２話

すぐにラウラが持ってきたのは氷が満載された水だった

「……なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんスけど……」

「黙れ。飲め。――――飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す

当然、氷水が宙に舞うがそれらを回転するような動作で掴み――――

弾いた

「いってええっ！？な、なっ、何しやがっ――――」

氷の指弾

それをトリガーから離れていた人差し指に突然の出来事に反応できずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる

そして犯人の怒号より早く、デブの懐へと膝蹴りを叩き込んだ

「ッざけやがって！このガキ！」

いち早く痛みから復活した髭がハンドガンをぶっ放そうとするが――

「させっかよ！」

髭の後ろから現れ殴り倒したのは亮だった
ラウラに視線を奪われていたため亮が背後へと回っていたのに気づけなかったのだ

「あ、兄貴っ！？こ、こいつッ――――」

「――――僕もいるんだよねぇ、残念ながら」

サブマシンガンで亮を撃とうとしたチビの、その背後に迫っていたのは見目麗しい執事服の美少年――――もとい、美少女のシャルロットだった

「なっ！？このっ――――」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」

そんなことを口にしながら、シャルロットチビを制圧した

その対応はふたり揃って慣れている――――というようなレベルではもはや無い
より高度な戦闘を数多く経験している、その証明であった

ＩＳの専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している
それが候補生であっても変わりはない
ＩＳが展開不能な状態にあっても、状況を打破できるように鍛えら

れているのだ

無論、軍人であるラウラと非軍人のシャルロットでは、それぞれに持っている技能・対応能力・肉体能力に開きはあるしかし、この程度の状況ならば、特に問題はない

「目標2、制圧完了。――ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

「ふぅ……正直、すごく緊張した」

強盗達の意識、及び行動能力の喪失（気絶）を確認してふたりがうなずいた
亮は深々とため息を吐いた

「つーか、ラウラ。無理するなよ。突撃する合図がなかったら驚いて動けなかったぞ」

「ふっ。だが、よく覚えていたな？てっきり忘れているのだと思っていたぞ。だから私は一応シャルロットに送った合図だったのだが」

そう、ラウラは水を運びに行く前、軍人かそれ関係の人にしかわからないハンドシグナルを送っていたのだ
だから、あれほどの的確な動きが出来たのだ

「まあな、覚えておいても損はしないだろうと思ってたんだが……まさか本当に使う時がくるとは……」

「さすがは我が嫁だ。どうだ、我が部隊に入ってみないか？」

「断る」

「あはははは……」

亮たちがそんな会話をしていると、客とスタッフが、のろのろと頭を上げはじめる

「お、終わった……？」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々は、何度もまばたきを繰り返してラウラとシャルロットと亮の姿を呆然と眺めている

同じくまだはっきりとした意識が戻らない店長は、『銀髪美少女メイドと金髪美少年（女）執事とおまけが銀行強盗を撃退しました』って本社に報告したら信じるかしら……？と変にずれたことを考えていた

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！メイドさんに執事さんにおまけさん、ありがとう！」

「てめぇ、殴るぞ？」

助かった実感が今になってはっきりと自覚できたのか、突然店内は

わっと騒がしくなる
その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰めかけてくる

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」

「それもそうだな。このあたりで失敬するとしよう」

案の定、警官隊の後ろには交通規制もなんのその、立ち入り禁止のロープを乗り越えたマスコミ関係者が大勢見えた

――しかし、事態は再び一変する

「捕まってムショ暮らしになるくらならいっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」

完全に意識を失っていたと思っていたリーダーは、決まりが浅かったのかそう叫んで立ち上がるなり、革ジャンを左右に広げる

「げっ」

思わずそう声を漏らす亮
そこにあったのは、軽く四〇メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾の腹巻きだった
起爆装置は、もちろん手の中にある

「わー……」

「最後まで古～……」

そんな言葉を漏らしたのは誰だったか、すぐさま店内は先刻以上のパニックに飲み込まれる
しかし――――

「亮、まだまだ腰の使い方が甘いぞ」

「面目ない……」

「仕方ない。今度私が教えてやろう。2人っきりでな」

「あっ！ラウラ、抜け駆けはダメだよ！」

と、亮たちは完全に無視していた

「コラアッ！！無視すんじゃねぇ！？」

「うるさいな」

ふわっと、ラウラがスカートをなびかせるように右足を上げ、その奥にちらりと見えた白い布地に男の視線と意識が奪われた
そしてその一瞬の隙に、ラウラは足を振り下ろす

その踵はテーブルを勢いよく傾け、そこにあった拳銃が宙を舞い、それをシャルロットがラウラの背中を転がるようにして受け取る
そして――――

ダダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

高速五連射×２の弾丸は、的確に起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を撃ち抜いていた

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

ジャキッ！と二丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威厳も高圧もなく男は震える声で謝った

「す、すみっ、すみませんっ！も、もうしまっ、しませんっ。い、

命ばかりはお助けをっ……」

そんな敗北宣言を最後まで聞くことなくラウラとシャルロットのふたりは亮を連れて颯爽と立ち去った

さながらそれは、黒き（シュヴェルツェア）一陣の風（ラファール）のように

ちなみに亮は髭にご愁傷様、相手が悪すぎた、と心の中で言っていたりした

第９２話（後書き）

事件解決！！

改めて２人の凄さを実感した話ですね

第９３話

「もう夕方だな」

強盗事件から二時間後、俺はシャルロットとラウラの残っていた買い物をに付き合い、駅前のデパートから出ると外はもうオレンジの光景に変わっていた

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「気にすんな。俺も暇だったし」

「ありがとう、亮」

「買い物はもう全部か？」

「うん。っていうかラウラ、自分のものなのに後半は『任せる』とか『好きにしろ』とかばっかりだったでしょ。ダメだよ、女の子なんだから」

「あまり小言ばかり言うな。老けるぞ」

「ふ、老けないよっ。そうだよね、亮？」

「俺にふるな」

俺は適当に答えて荷物を持ち直す

いつも思うがなんで女子の買い物はこんなに量が多いのだろうか？

「亮。やっぱり手伝うよ。買い物に付き合ってくれたばかりか荷物まで持ってもらうのはやっぱり悪いよ」

「気にすんな。こういうのは男が持つって相場が決まってんだよ」

って、昔、千冬さんと束さんに叩き込まれた
手で持てない荷物は体の至る所を使ってでも持て、って言われたっけな

そしてマンガみたいに背中に山積みになるまで乗せられた記憶がある
しかも、一つでも落とすと千冬さんに木刀で叩かれたり、どこまで積めるかか実験しようとか言って俺がくたびれるまで積み上げる束さん
あれには困った。だって束さんに荷物を無理矢理持たされ、落とすと叩かれる
それが無限に続くのだから当然だ
これぞ、無限ループ

だから、これくらいは全然平気である

「だったら、向こうの公園行こうよ」

「公園？」

「うん城址公園。元はお城なんだって」

「ほう。それは興味深いな。日本の城は守りにやすく攻めに難いと聞く。城跡とはいえ、一見の価値はありそうだ」

「ふーん。でもシャルロットは城跡じゃなくて違うものが目的なん

だろ？」

「うん、そうなんだけどよくわかったね」

ラウラと違ってシャルロットはそういう方向の着眼点じゃねえからな

「なんとなくな。それで何があるんだ？」

「クレープ屋さんだよ。クレープ屋さん」

「うん？クレープ屋？なぜだ」

「えっと、休憩時間にお店の人に聞いたんだけど、ここの公園のクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるっておまじないがあるんだって」

「『オマジナイ』……というのは、日本のオカルトか？」

「ジンクスって言った方がいいな」

「ああ、験担ぎか」

「まあ、そんなもんだ」

「ええ～……」

俺の言葉になるほど、とうなずくラウラに対して、シャルロットはちょっとだけ困った顔をするが気にしない

「んじゃさっさと探すか」

「うむ。というかあれではないか」
探すまでもなくすぐに見つかった
まあ、女子高生が局所的に多くいるんだからすぐに見つかるな
「じゃ、早速頼んでみようよ。亮はそこで休んでて」
「いや、金はどうすんだよ？」
「大丈夫。僕が払うから買い物に付き合ってくれたお礼」
「いや、気に――――って行っちまったよ」
俺が最後まで言い切る前にシャルロットはラウラを連れて行ってしまう
まあ、たまにはいいかな、と思い俺はベンチに荷物を置き腰を下ろした
しばらくしてふたりが帰ってきた
持っているのはもちろんクレープ――――なのだが少しシャルロットがしょんぼりした顔になっている

「どうしたんだ？」

「うん。目的のミックスベリーは終わっちゃったみたい」

あー、なるほど
それは確かに残念だな

「んじゃあ、何を買ってきたんだ？」

「えっとね、イチゴが二つにブドウが一つ。ラウラが選んでお金も払ってくれたんだよ」

「そうなのか。ありがとな、ラウラ」

「うむ。嫁の分はこれだ」

そう言ってラウラがくれたのはブドウのクレープだ

「んむ、んっ。これ、おいしいね！」

「そうだな。クレープの実物を食べるのは初めてだが、うまいと思うぞ」

噂のミックスベリーを食べられなかったことに少し沈んでいたシャルロットだったけど、出来立ての柔らかさもあってその味に声を弾ませていた

俺もブドウを一口
ふむ、確かにおいしい

シャルロットが上機嫌になるのも納得だ

「嫁よ、うまいか？」

「ああ。ラウラが奢ってくれたからな」

「そうか……。ならば私のも一口食べてみろ。うまいぞ」

確かにイチゴ味はどんな味なのか気になるな

「んじゃあ、もらうよ」

「うむ。ほら、あーん」

そのあーん、って止めて欲しかったが気にせずにラウラのクレープを一口

「どうだ？」

「うまい。ブドウとはまた違う酸味があってうまいぞ」

「で、では今度は私にあーんをしてくれ」

少し頬を赤らめて言うラウラ

まあ別にいいけどさ

「ほら、あーん」

「あ、あーん」

ラウラは俺のブドウを一口食べる

「うむ。こ、これもうまいな」

「だろ？」

「ず、ずるいよ、ラウラ！抜け駆け――」

「ちなみに」

ラウラがシャルロットの言葉を遮って話しはじめた

「あのクレープ屋だがな、ミックスベリーはそもそもないぞ」

「え？」

「そうなのか？」

「ああ、メニューになかった。それに、厨房にもそれらしい色のソースは見当たらなかった」

「そ、そうなの？よく見てるね」

「当然だ。あれがもしテロリストの偽装だったらどうする。あの距離でグレネードが起爆してみろ。ＩＳを急速展開しても命に関わる」

「……そういう観点で見てたんだね」

何かを期待してたのかラウラの発言を聞いてがくっと肩を落とした

「だが、ミックスベリーは食べられただろう？」

「ん？どういうことだ？」

「ふっ、どういうことだろうな」

ぐっ、どうやらラウラは教えてくれないらしい
ミックスベリーはなかったんだろ？

「ああっ！？」

俺が考えているとシャルロットは声を上げた
何かに気づいたようだ

やられた！
声を上げたシャルロットが頭でそう叫んだ
ラウラの言ったことが理解できたからである

今、ふたりが食べたのはイチゴとブドウ

イチゴとブドウ＝ストロベリーとブルーベリー

（そういえば、ラウラがイチゴとブドウと言ったとき、店主さんが含み笑いを見せていたような……）

「どうした、シャルロット？」

そうと分かればシャルロットも行動に出る

「あ、あのね亮。僕のイチゴも食べてみない？」

「いや、俺ラウラからもらったから」

ここでシャルロットはこれが仕組まれた作戦であることを理解する

そもそも、おかしいとは思っていた

何種類もあるのにイチゴとブドウ。しかもイチゴが二つとブドウが一つ

明らかに何かを狙っていたのは目に見えていた

（しかも自分で買うことでクレープを渡す権利を自分のものにしたのか）

ラウラ、なんて恐ろしい子！

（でも、まだ何か方法が……）

「何やってんだよ？あっ、シャルロットもブドウが欲しいのか？」

確かに欲しいのだが、そのクレープを食べ合って初めてミックスベリーとなる

しかし、シャルロットはあることに気づく

「亮、僕にもブドウをちょうだい」

「ああ」

「あむ……うん！おいしいね！」

ここまでは問題ない
問題はここからである

「亮、お礼に僕のイチゴも食べてよ」

「ん？いいのか？」

「もちろん！ほら、あーん」

シャルロットはクレープを亮に近づける
亮はしぶしぶだがクレープを口に入れた

（やったぁ！）

そう、シャルロットはお礼という形で亮に食べさせる作戦だった
これならば、心置きなく亮に食べてもらえると考えたのだ

「んじゃあ、食べ終わったし。さっさと帰るか」

亮が帰る支度を始めるとシャルロットはラウラに小さな声で話しかける

（ずるいよ、ラウラ。危うく亮とミックスベリーを食べることが出来なくなるところだったじゃないか）

（だが、ちゃんと食べれただろ？）

（それはそうだけど……）

それでも納得はできない、と思っているとラウラが話す

（それにちゃんとヒントをあげたし、チャンスもあげたではないか）

（チャンス？なんの……あっ！）

（気づいたか）

シャルロットの顔を見てニヤリと笑うラウラ
これは亮がブドウではなく、ラウラがブドウであったらシャルロットは一緒に食べることすらできなかったのだ
ラウラがブドウならばミックスベリーを食べられるのは自動的に、ラウラ・亮、ラウラ・シャルロットの組み合わせとなってしまう
いち早く気づいたラウラならそんな考えなどすぐに出来ていた。だが、それをラウラはしなかった

（そっか……ありがとう、ラウラ。ラウラはやっぱり優しいね）

（わ、私は別に……そう、情けをかけてやっただけだ！）

顔を真っ赤にしてそう否定するラウラ

「あはははっ♪」

そんなラウラを見て思わず笑ってしまうシャルロット

「わ、笑うな……！？」

「ごめんごめん。でも、ありがとね、ラウラ」

「う……うむ……」

「おーい。置いてくぞ」

二人が愛する人が呼んでいる

「はーい、今行くよ～！さっ、行こっか」

「ああ」

お互いに笑いあい、シャルロットとラウラは仲良く手を握って愛する人の方へと駆けだした

おまけ

「おっ？仲良いな、二人とも」

「うん♪そうだ、亮も手を繋ごっ♪」

「えっ……いや、俺は……荷物で手が空いてないし……」

「大丈夫。片方の荷物はラウラが持ってくれるから」

そう言ってシャルロットは亮の荷物をかっさらい、荷物をラウラに無理矢理持たせた

「えっ、なっ！？」

いきなりのことに何も出来ずラウラは抵抗する間もなく荷物を持たされてしまった

「ほら、亮」

「あっ、おい」

シャルロットは無理矢理亮の手を握るそれはとても強引であったが、亮は特に抵抗はせずなるがままだったどうやら諦めたようだ

「……！？」

何が起こっているのか理解が遅れてしまうラウラだが、ふとシャルロットの方に視線を向けたラウラは驚愕した

笑っていたのだ
それも、どうだと見下すような目だった
そしてすぐに理解した。これは仕返しであると、ラウラがシャルロットにしてしまったことをそのままやり返されたのだ

しかし、ラウラみたいに慈悲どころか情けすらもらえないみたいで、ＩＳ学園に着くまでシャルロットは亮と手を繋いでいた

ラウラはこのとき学んだ

「シャルロットを怒らせるのは止めよう」

と

第９４話

「暑い……」

「我慢してくれよ、亮兄。もう少しで着くからさ」

俺は今日、一夏と一緒に出かけている
どうやら紹介したい友達がいるらしい

「つーか、俺を紹介してどうすんだよ。それにどこで知り合ったのか、って聞かれたらどうすんだよ」

小学校で知り合ったまでならどうにかなるが、ＩＳ学園で再会した、なんて言えねえぞ

「うーん……まあ、どうにかなるさ」

「考え無しかよ……」

相変わらずの無計画な奴だよ、こいつは……

「おっ、ここだここだ。着いたよ、亮兄」

「五反田食堂？」

「そっ、ここの料理はとてもうまいんだ」

ということは、その友達はこの店の息子という訳だ

「だから昼飯は食べずに来いって言った訳か」

「そういうこと。お邪魔しまーす」

そう言って一夏は扉を開けて中に入る。俺も続いて中に入った

「いらっしゃい……って一夏じゃねえか」

「オヤッサン久しぶり」

一夏に話しかけてきたのはどうやらここの店主みたいだ
息子の友達だけあってかなり親しいみたいだ

「どうした？弾にでも会いに来たのか」

「それもあるけど、亮兄にここの料理を食べてもらおうと思ってね」

「亮兄？そこの坊主のことか？」

「ども。三崎亮です」

「これまた、ウチの息子と似たようなチャラ男だな」

このおっさん。何の躊躇いもなく言い切りやがった

「おいおい、オヤッサン。弾と同じにしないでくれよ。亮兄は俺が尊敬する人なんだからさ」

一夏、そういうのは本人がいない場所で言え。恥ずかしい

「ほう、そうか。んじゃあ、さっさと座れ」

「うん」

俺と一夏は適当な場所に座る

「おっ、一夏！もう来てたんだな」

奥の方から女の人ぐらい伸ばした赤い髪の男が一夏に話しかける

「弾！久しぶりだな！」

「おう！前の休日以来だな！って、ん？」

近くにきた弾って奴は一夏から俺に視線を向ける

「ああ、この人は三崎亮。俺は亮兄って呼んでんだ。前に話したよな？」

「確か、一夏が尊敬してる人だったけな」

こいつはどれだけそのことを回りに言いふらしてんだよ

「ども。俺は五反田弾（ごたんだだん）。よろしくッス」

「あ、ああ……三崎亮だ」

互いの挨拶が終えると弾は一夏の隣に座る

「一夏の言った通りのクールな人だな」

「だろ？」

一体、俺の何を話したのだろうか、弾の俺の見る目が輝いて見える気のせいだ。忘れよう

「おい、弾。一夏たちはこれから昼飯にするらしいからお前も食え」

「そのつもりだよ。二人は何食う？」

「ここは何食ってもうまいからな……亮兄はどうする？」

「俺は……」

一夏に訪ねられたのでメニューを確認する

「んじゃあ、焼き魚定食で」

「ほう。そいつは今日のおすすめだ。それを知らずに選ぶとはなかなかやるな」

いや、偶然だから
それを聞いた二人も俺と同じものを頼んだ

「おらよ。残さず食いやがれよ」

「「いっただきまーす！」」

「……いただきます」

俺たちは出された焼き魚定食を黙々と食べる
どうやら食事のときは黙って食べるように教えられているようだ

「「ごちそうさまでした」」

「……ごちそうさまでした」

「ほう」

おっさんが俺を見てそう頷いてきた

「……んだよ」

「いや、お前がただのチャラ男じゃねえなと思ってな」

「は……？」

「食べ方だよ食べ方。坊主と弾の食器を見比べてみろ」

そう言われて俺たちは食器を見比べる
俺は特に変わった食べ方などしてねえが？

「弾の方はごはん粒があったり、魚は所々に身が残っていて全然ダメだ。逆に坊主の方は綺麗にごはんを食べ、魚の身はねえし骨と皮だけ。今時、こんな食い方ができる高校生は珍しい」

なんだそんなことか。別に意識してた訳じゃなかったが、そんなに珍しいのか？

「ふーん。そうなのか、一夏？」

俺は同じように綺麗に食べた一夏に聞いてみる

「うーん。当たり前に食べてたからな」

「だよなぁ」

向き合ってそう言っているとおっさんが笑い出した

「がっはっはっ。なるほど、当たり前か。おい、弾。お前もこの二人を見習いやがれ」

「う、うっせぇな……」

「どうでもいいが、いくらだ?」

「金はいらねえ。今日はマケてやる。俺はお前が気に入った」

何故か上機嫌なおっさん

まあ、タダにしてくれるんだから文句は言いまい

「んで、この後どうすんだよ?」

「もちろん、弾の部屋で遊ぶ。良いよな、弾?」

「おう。もう部屋にはゲームの準備は出来てっからな。さっさと始めようぜ!」

そう言って俺たちは弾の部屋へと向かった

ここで俺はある人物と出会うことになるとは思いもしなかった

第９４話（後書き）

今回は短いですね。すみませんでした

次回は皆さんが待ち望んだ?あの子が登場

しかも、波乱の予感

お楽しみに

第９５話

俺は今、一夏の友達である五反田弾の部屋で遊んでいるのだが――

「師匠！飲み物持ってきやした！」

「おう。サンキューな……つか、師匠は止めろ」

「あはは……」

弾がコンビニから飲み物を買ってきてそれを俺に渡す。俺のことを『師匠』と呼びながら
何故こうなったか、それは簡単な理由である

俺、一夏、弾の三人でゲームをしていたのだが、その内に持ってきた飲み物が無くなってしまい買いに行くかと考えたときに一夏が言ったのだ

『次の勝負で負けた人が買いに行こう』

まあ、よくある罰ゲームだ
ところが、そこで弾が文句を言ってきた

『おいおい。それじゃあ俺か一夏のどっちかじゃねえか』

はたから見たら滅茶苦茶情けない発言だが、それも仕方ない
なぜならば、そのときには十回ちょっとゲームをったが、俺は一位、二位か三位は一夏か弾と俺は全勝しているのだ

ちなみにやっているゲームは『IS（インフィニット・ストラトス）／VS』
と言い、歴代のISを再現したゲームである。意外にも人気はあるらしい
それとこのゲーム、俺は今日で初めてだ
まあ、弾の言い分も少しはわかるので俺はある条件を出した
『今から五十回やって俺が一回でも一位になれなかったら変わってやる』
ってな
結果はさっきの通り
五十戦五十勝。総合で見て弾が買いに行く羽目になった
そのときのゲーム捌きや有言実行した俺の姿に憧れたのか師匠と呼ぶようになってしまったのだ
「というか亮兄強すぎ」
「そうか？」
そんなに意識したことなかったがそんなに強いのか？
そんなこと考えていたら、バンッ！といきなりドアが開けられた
「ちょっとお兄！今日は友達が来るから静かにしててって言ったじゃん！一体何をして――」
入ってきたのは中学生くらいの女子。『お兄』と言っているのでおそらく弾の妹かな
どうやらうるさかった俺たち（主に弾）に文句を言いに来たらしいだが、何故かすぐに停止して驚愕の表情へと変わっていた

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いっ、一夏……さん！？」

どうやら弾の妹は一夏を見て驚愕していたようだ

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？」

「ああ、うん。昨日、遊ぶ約束をしたんだが聞いてなかったか？」

「い、いえ。聞いてないです……」

ギンッ！と妹が兄を睨みつける

「わ、悪い。すっかり忘れてた」

「……」

ギロリ、死に体にナイフを突き立てるが如くの視線を再度弾に送りつけ、妹はそそくさと部屋を出て行く

「あ、あの、私の友達が遊びに来てるんで出来ればもう少し静かにしてもらえたら……」

「おう、わかった。ごめんな、うるさくて」

「い、いえっ、そんな！？悪いのは全部、バカ兄なんで！それじゃあ失礼します！」

ぺこりとお辞儀をして妹は出て行った

「なんつーか、元気な妹だな」

「『元気』で済む妹じゃないッスよ、師匠」

ガクッと頭を下げる弾

だから師匠じゃねえっての

「亮兄。今の子は弾の妹で五反田蘭(らん)だよ。とても素直で可愛い子だよ」

「ふーん」

怒ったら滅茶苦茶怖そうだがな

「うるさえんだよ!!もうアタシに構うな!」

ほら、あんなに声を荒げて――ん?

「おい……今の……」

「蘭の声じゃねえな……」

ガッシャーンッ！！

「「「！！？？」」」

何かがぶちまけられた音が聞こえる

「弾、亮兄！行こうっ！！」

「あ、ああ！」

「……」

いち早く反応した一夏が部屋を飛び出す。弾、俺と続いて飛び出した

「蘭！どうした！」

「あっ……一夏さん、お兄……」

「蘭！？大丈夫か！？」

蘭の部屋に入ると酷い有り様だった
まるで空き巣に入られたかのような散らかりようで、その中心にはへたり込んだ蘭と熱り立っている女の子がいた

「おいっ！お前、蘭に何をした！」

弾が真剣な表情で女の子を怒鳴りつける

「……」

「おいっ！何か言えよ！」

「落ち着け、弾！……君はどうしてこんなことを……？」

一夏は興奮しているだろうと女の子に優しく問いかける

「……ウザいんだよ。ニコニコして人のご機嫌取り。同じクラスで生徒会長だからって転校生のお世話なんて面倒だって思ってんだろ？大変ですね、生徒会長様は」

だが、返ってきたのは蘭への罵倒だった

「そ、そんな……私は……ニナちゃんと友達になりたいって……」

「はぁっ？意味わかんねえんだけど？友達になりたい？そんな気さらさらないくせに綺麗事並べてんじゃねえよ、ばーか」

「……うっ……ううっ……」

女の子の酷い言葉に蘭は黙り込んで泣き出しそうだ

「てめぇ……」

「ふん、なに？妹の敵に殴る？やってみれば？その瞬間、訴えるけどね」

にやりと中学生とは思えない悪意の笑みを浮かべた女の子

女の子はそのまま部屋から出ようとする

「……なに？どいてくれない？」

「……」

その女の子の前に立ちふさがったのは俺だった

第９５話（後書き）

蘭とニナことボルドーさん登場！！

今回も短くてすみません

第９６話

「どけよ」

「……」

俺は女子の行く先を黙って立ちふさがる

「どけって言ってんだろ！！」

睨みつける女子に俺は一言呟いた

「……怖いんだろ？」

「！！」

ビクッと震える女子

「優しくされて本当は嬉しいのに、もし裏切られてまた一人になるのが怖いんだ」

「……うるさい……」

「だったら最初から一人でいい。一人なら傷つくことはないから」

「……うるさい……黙れよ……」

「でも寂しいんだ。一人は嫌なんだ」

「黙れって言ってんだよ！」

「ぐっ！？」

「亮兄！？」

耐えきれなくなった女子は俺の顔面を殴りつける

「……何で避けないんだよ」

「お前に必要なのは、前に踏み出す勇気だ。恐れるな前に進め。後先考えるな」

「……意味わかんねえ……何いきなり説教してやがんだ……」

「俺もそうだったから……踏み出す勇気があったから俺はここにいる……って言ってもゲームの話だがな」

「ゲーム……もしかして……Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄか？」

「！」

今度は俺が驚かされてしまう

何でわかった？そう考えていると、さらに女子が衝撃の一言を言う

「もしかして……お前……ハセヲか？」

間違いない

この女子は俺のことを知っている

しかも、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで会ったことがある

そこまで考えて俺はある奴が頭に浮かんだ

すぐにキレて暴れて、素直じゃなくて不本意だが俺に似ている奴

「……ボルドーか？」

「……」

女子は黙って頷いた

「えええぇぇぇっ！？ボルドー！？お前が？」

「な、なんだよ！悪いのかよ！！」

「い、いや別に悪いって訳じゃ……」

ただ俺のイメージとはかなりかけ離れていた

年は十四で中学生。離婚したドイツ人の父と日本人の母のハーフであることもボルドー本人から聞いていた

だが、まさかこんな西洋人形という言葉が合うような容姿とは思わなかった

髪は腰の高さまで伸びた整った金髪

顔は母に似たのかアジア系で、目が透き通った綺麗なブルー

服装はこれまた清楚な白いワンピース

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで会ったボルドーとは全くの逆なのだ

「つか、何で俺がハセヲだって……」

「今みたいな臭いセリフが言えるのはハセヲ（お前）ぐらいしかいねえよ！」

俺はそんな臭いセリフを言ったのか？
つか、そんないつも臭いセリフを吐いてますみたいに言うんじゃねえよ

「なあ」

「んだよ……」

「もっと素直になれよ。もっと向き合えよ。Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの時みたいにさ」

「……でも……」

「わかってる。ゲームとリアルは違う。けどできる筈だ。今のお前なら……俺はそう信じてる」

「……」

ボルドーは一夏たちがいる方に向き直って歩き出した
蘭の目の前に立つ

「ごめんなさい……」

「えっ……」

「あいつの言った通り怖かった。優しくしてくれたあなたがいつかアタシから離れて行くのが……だったらアタシから突き放した方

がまだ傷つかずに済む……そう思ったんだ」

「そんな……私は……」

「うん……わかってる……蘭はそんなことしない。今まで一緒に居てくれたからわかる。でも、それは今日で終わり」

「え？」

「こんなアタシと一緒にいたら蘭は後悔する。だから――」

「バカ！！」

バシッと蘭はボルドーの頬をはたく
いきなりのことにボルドーははたかれた頬を押さえた

「私はニナちゃんと一緒にいて嫌だったことなんてなかったよ！不器用だけど本当は優しい子なんだって私は知ってるから……」

「蘭……」

「だから逃げないで。私は絶対にニナちゃんを裏切らないから……」

「……ありがとう」

もうボルドーは大丈夫みたいだな

「一夏、弾。行くぞ」

俺は一夏たちを連れて部屋を出た
女の子が泣いてる所なんて見たくないし見られたくないからな

「おーい、亮兄！」

「ん？」

あれから翌日
セシリアや鈴などいつものメンバーで昼食を取っていたら弾とメールしていた一夏が飛んできた

「どうした？」

「はい。電話」

電話？一体だれが？

『あっ、もしもし。亮さんですか？』

「この声は……蘭か？」

『はい』

「どうした？急に電話なんて」

『先日のことでお礼が言いたくて。亮さんのおかげでニナちゃんともっと仲良しになれました。本当にありがとうございます』

なんだそんなことか。別に俺は何もしてねえっての

『確か一夏さんの携帯ってテレビ電話が出来た筈なんですけどやってくれませんか？』

「いいけど何でだ？」

『ニナちゃんも亮さんにお礼を言いたいので』

『ちょっ、蘭！別にテレビ電話じゃなくてもいいだろ！！』

おっ？ボルドーの声も聞こえたぞ

近くにいるみたいだ

『ダメだよ。ここはちゃんと面を向かって言わないと。そういう訳で亮さん、お願いします』

「了解」

俺は言われた通り通常電話からテレビ電話に切り替えた

映ったのは蘭だけ――かと思ったが隅にボルドーがいた

『ほら、ニナちゃん。ちゃんと立たないと映らないよ』

『い、いいんだよ！アタシは！』

「おい、ボルドー。蘭に迷惑かけんなよ」

『う、うるせえ！ハセヲは黙ってろ！！』

たく仕方ない奴だな

「蘭」

『はい？』

「俺の言う通りにやってみろ」

俺は蘭にボルドーの扱い方を伝授する

言い終えたら蘭はさっそく行動に移った

『ニナちゃん』

『な、なんだよ……』

『お願い』

『ぐっ……』

蘭は上目遣いで悲しい表情をしながらボルドーにお願いする

『ねっ』

『うっ……』

『ねっねっねっ』

『わ、わかった、わかったよ！映ればいいんだろ映れば！』

顔を真っ赤にしてそう言うボルドー

ボルドーに見えないように蘭はニヤリと笑い、ピースをこちらに向けた

計　画　通　り　！

ボルドーはなんだかんだで押しに弱いああやって詰め寄ればどうにかなるのだ

ゲームで誘うときも頼み込めば一緒に遊ぶし、サポートしてくれるのだ

『おい、ハセヲ……』

しぶしぶ画面に現れたボルドーは俺を呼んだ

『昨日は……その……あの……ごめんなさい……顔殴っちまって……』

「気にすんな。ＡＩＤＡに取り憑かれたボルドーの一撃の方がもっと痛かったよ」

『うっ……それと……あ、あ、ありがとう……』

「……ああ」

こいつが素直にお礼か、成長したもんだな

『そ、そ、それじゃあ、またな!?りょりょりょ、亮!?』

今、こいつ俺のリアルの名前を……

「おう。またな、ニナ」

『っ!?Ｄｕｍｍｋｏｐｆ!!』

『ニナちゃん!?』

俺がボルドーの名前を言ったのがそんなに嫌だったのか、顔を真っ赤にして画面から消えた

つか、最後なんて言ったんだ?

『あははっ……それでは亮さん。一夏さんにもよろしくとお伝えください。でははでは』

それを最後に電話は切れた

俺はボルドー……ニナの面白い姿を見て満足していると――

「「「「「「りょう～～～……」」」」」」

五つの殺気が俺を突き刺した
その正体はもちろん。箒・セシリア・鈴・ラウラ・シャルロットの5人からだ

「亮……どういうことだ？」

「今の方と大変仲良しでしたが？」

「あんた、蘭とも仲良く名前で呼び合ってたわね」

「しかも『Ｄｕｍｍｋｏｐｆ』。日本語で馬鹿という意味のドイツ語だ。まさか浮気相手が自分の祖国の者だとは思わなかったぞ……」

「亮。少しＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」

「だが、断る！！」

俺は食堂から走って抜け出す

「「「「「待てえええぇぇぇっ！！！！」」」」」

ちくしょう！

ただお礼言われただけで何で追われなければいけないんだよ！！？？

そんなこと考えながら亮は必死に逃げた

おまけ

「おい、蘭！お前のせいで滅茶苦茶恥をかいたじゃねえか！！」

蘭の部屋でご立腹のニナ

「ごめんごめん。でも良かったね。怒ってなくて」

「お、おう……でも、お前もよくやるよ」

「なにが？」

「アタシとりょ、亮を話させるのを口実に自分は好きな人と話をす

るなんてよ」

ニヤリと笑って言うニナ
図星なのか顔を真っ赤にしてしまう蘭

「べ、別にそんなつもりじゃ……」

「ないと？」

「すみません。下心がありました」

「素直でよろしい」

ぺこりと頭を下げる蘭を見て満足げに腕を組み頷くニナ

「ニナちゃん、意地悪だよ」

「へっ」

ニヤリとまた楽しそうに笑うニナ
ニナも今までこんなに心の底から笑ったことはなかったかもしれない
それもこれもゲームで知りあった男のおかげである

ゲームでは相手をなぶり倒してストレス発散の道具にしか見ていなかった自分を変え、詳しくはわかったいないが取り憑いたＡＩＤＡから助けてくれたハセヲ
リアルでは、素直になれず、嫌われるのが怖かった自分を変えて今こうして蘭と仲良くなったきっかけをくれた亮

どちらも同じ人

二つの世界で自分を変えて救ってくれた人
これがニナの好きな人

「蘭の好きな織斑一夏への恋を応援すんだからこれくらいいいだろう？」

「ううっ……その前にちゃんと合格しないといけないんだよ」

「わかってるよ。でも、アタシと蘭なら余裕だろ？」

ニナは机に置いてあるパンフレットを団扇のように扇ぐ

そのパンフレットにはこう書かれていた

『ＩＳ学園受験票』

第９６話（後書き）

はい！！

フラグが立ちました！！

亮の女難はまだまだグレイトアップ！！

第９７話

「ただいまより第二十回ハセヲ（亮）さん愛好会緊急会議を始めます」

「……えっ？」

ここはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄのハセヲが所属するギルド『カナード』のある一室
そこにはアトリ・ブルーム・セシリー・鈴（すず）・黒ウサギ・ロットが集まっていた

そしてアトリの一言にその場にいた全員が固まる

「えっと、アトリ」

「何ですかロットさん？」

「僕たち、みんなで冒険する（遊ぶ）ために集まったんだよね？どうしてここに？」

実はこのメンバーを揃えたのはアトリだった

「そうですよ？今ちゃんとこうしてみんなで遊んでいるじゃありませんか」

「いや、そうだが……」

「今、『緊急会議』って言ったわよね……」

「言いましたわ……」

「はい。でもここはしておくべきだと思います。ハセヲ（亮）さんが好きという共通点がある私たちなら良い会議が出来ると思うんです」

アトリのハセヲが好きという所で全員の顔が赤くなってしまう

「それで緊急会議とは何をするのだ？」

「良い質問ですね、黒ウサギさん。それは……情報交換です」

「情報交換？」

「はい。実は私リアルで忙しいのと遠いのもあって亮さんとあまり会う機会がないんです。ですから毎日会っている皆さんに最近の亮さんは何をしているのか聞きたいんです！」

「ふむ。だかそれではアトリが得するだけで私たちは何の利益もないが……」

「もちろん、そこは考えています。ちゃんと私から皆さんが知っておくべき情報をお伝えします」

Ｇｉｖｅ－ａｎｄ－ｔａｋｅ

それをのっとった緊急会議が始まった

「まずは私から行きます」

挙手をして立ち上がるアトリ

「最初は私が知っているＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでハセヲさんに好意を抱いている女性を言います」

「まずは敵を知ることが大事だからな」

「私やファンクラブの人を除いて、まずは揺光さん。この人は最初、ハセヲさんをライバル視していましたが後にハセヲさんの優しさに触れて恋に落ちました」

『アタシは一途でしつこいぞ』

「……この小豆女め……」

モニターに映し出された揺光を見てアトリが毒を吐くが全員スルー

「次はパイさん。今も手のかかる弟みたいな感じで見てますが、たまに見せる大人びいた行動に胸をうたれました」

『やっと……名前で呼んでくれたわね』

「……このババア」

「「「「「……」」」」」

「次は朔望の朔ちゃん。いつも敵意を見せてますが、これは愛情の裏返しと見て良いでしょう」

『ハセヲのバーカ！』

「……このストーカーが……」

さっきからアトリに対するツッコミが何一つないのだが、理由は全員が同じ気持ちだからである

「次はボルドーさん。ＰＫするために追いかけていく内にハセヲさんの魅力を知った人です」

『もっともっと……愛し合おうじゃないかぁぁぁぁぁぁっっっっ!?』

「……うるせえ、負け犬」

「「「「「……」」」」」

「他にもタビーさん、楓さん、エンデュランスさん、アイナちゃん……そして忘れていけないのが……」

バンッ!とアトリはモニターを叩くと一人のＰＣが映し出される

「これはアトリ……か？」

「いや、同型のＰＣボディだね。でも本当にそっくりだね」

「油断してはダメです!この人がハセヲさんの本命であるという可能性が一番高い人なんです」

「……そういえば違うどこかで見たことがあるような気がしますわね……」

「あっ!思い出した!亮の過去を教えてもらったときにちょくちょく出てきた奴じゃん!」

「この人は志乃さんと言って一番早くハセヲさんと仲良くなった女

性です。それだけにハセヲさんのことは一番よく知っていると思います」

『ずっと……見ていたから』

「ぐっ……何も言えないです……」

がくっと膝をつけるアトリ

「だ、だが一番知っているとはいえ有利とは限らない。戦場では戦車相手に短剣一つでも勝利出来る可能性もある」

「それは可能性は0に近いんじゃないか……？」

「……これにより、ハセヲさんの好みがはっきりとしました」

ゆらりと立ち上がるアトリ
全員はそんなアトリに注目する

「ハセヲさんは年上……もとい『熟女好き』だと！！」

「「「「「な、なんだってぇ！！？？」」」」」

あまりにの衝撃的な発言に雷が落ちた

「だってそうでしょう？ハセヲさんはなんだかんだで年上もとい熟女と仲が良いでしょう？」

そう言われれば、と思い返す一同

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは志乃・パイ・楓
現実（リアル）では千冬・真耶・束？・ナターシャ

と好意を抱く年上もとい熟女？が多い

「で、でもそれは仕方ないのでは……」

「その通りです。ですから私たちにしかない武器で対抗するしかありません」

「武器？何よ、それ？」

「それは……若さです！！」

「わ、若さ……ですか？」

「はい！私たちはあの人達より十分に肌が綺麗で艶もあります！あんなボロボロな肌の人には負けません！」

「――へえ。アトリちゃんはリアルの私の肌を見たことがあるの？」

「いえ！ありませんが、私はそうなんじゃないかと思いまして」

「そうなんだ。でも憶測で人の肌を考えちゃダメだと思うな」

「……はい？」

ようやくアトリは自分と話しているのが、ＩＳメンバーでないことに気づく

「あ、あれ？あの人は……」

「アトリにそっくりね……」

「ということは……」

「しししししし、志乃さん！？」

「こんにちは。初めまして」

にこりとアトリと同型ＰＣのはずなのに、アトリとは比べものにならない大人びいた笑顔
この女性ＰＣが噂の『志乃』

「アトリちゃん」

「は、はい！？」

アトリはいきなり現れた志乃にかなり動揺しているようで、体が震えている

「とりあえず、行こうか……」

「えっ、えっ、ええっ!?し、志乃さん、そちらは錬成工房しかありませんよ……？」

ずるずると志乃に首根っこ掴まれ引っ張られるアトリは志乃にそう訪ねる

志乃はゆっくりと振り向いてアトリに笑顔を向ける
アトリもその笑顔に笑顔で返すが完全にひきついている

「私、アトリちゃんの頭の中をちゃんと直した方がいいと思うの」

「まさかの欠陥品扱い!?」

「大丈夫。痛いのは最初だけだから」

「安心できませんよ!?」

「それじゃ、デス・ランディちゃんには例のパーツを付けないように言っておくから」

「私、まさかの改造人間にされてしまう!?」

「それもいいかもね。それじゃ、逝ってらっしゃい」

「どこに!?あっ!止めて!謝ります!土下座でも何でもしますから許して――」

アトリは奥の部屋へと引きずり込まれ――

「あああっ！！！！？？？？」

「「「「「………………」」」」」

アトリの悲鳴に黙り込むＩＳメンバー
拷問に慣れている黒ウサギですらひきついている

「さて……」

「「「「「！！？？」」」」」

奥の部屋からただ一人何事もなかったように現れた志乃に全員が体をびくつかせる

「皆さん、改めて初めまして。私は志乃。よろしくね」

「「「「「よろしくお願いします！！」」」」」

声を合わせて言うＩＳメンバー
そんなＩＳメンバーがおかしかったのか笑い出す

「ふふっ♪そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。もっと楽に、ね」

「は、はあ……」

「あなた達がハセヲが通っているＩＳ学園の生徒さん達？懐かしいなぁ」

「懐かしい？」

「私、ＩＳ学園の卒業生なの」

「「「「「！！」」」」」

志乃の言葉に驚愕するＩＳメンバー

「自慢じゃないけど代表候補生にならないかって話もあったんだよ。断ったけどね」

「ど、どうしてですか？」

ブルームの質問に少し考えて答えた

「合わなかったから、かな」

「ＩＳとの相性がですか？」

「うーん……まあ、そんなところかな。みんなはＩＳ学園を卒業したら何をやりたい？」

「えっ？」

志乃の唐突な質問に戸惑うＩＳメンバー

「卒業したら……か……」

「わたくしは家を継ぎますが……やりたいこと、ですか……」

「難しい質問ね……」

「別に今すぐ決めろってわけじゃないよ。ただ、自分の歩く道をある程度は考えておいた方がいいって先輩からのアドバイス」

「自分の歩く道……」

「考えた結果、あなたはどうしたんだ？」

「私はＩＳに乗るのを止めて大学にいったよ。そこでまた自分の歩く道を探している」

黒ウサギの質問に答えた志乃はゆっくりと離れていく

「私の取った道は逃げる道。でもそういうのがあっても良いと私は

思ってる。でもみんなにはまだ時間がある。ゆっくり考えて自分の道を見つけてね」

にっこりとＩＳメンバーに笑顔を見せる志乃
その笑顔はＩＳメンバー全員が癒やされた

「……一つ、良いですか？」

「うん？何かな？」

「あなたはハセヲの……亮のことが好きなのですか？」

「……ふふっ♪」

背を向けていた志乃はふわっと反転し、人差し指を唇に置いてこう言った

「内緒……だよ♪」

そう言って志乃はログアウトした
志乃のアドバイスと意味深な言葉にＩＳメンバーはしばらく頭を悩ませた

おまけ

「ふぅ……」

とあるマンションの一室
そこに志乃のプレイヤー『七尾志乃』がそこにいた

その手には携帯
誰かに電話するようだ

『も、もしもし……』

電話に出た声はどこか緊張した感じの男性のものだった

「久しぶりだね、亮」

『どうしたんだよ……？急に電話してきて』

その男性は亮だった

「うん。ちょっと亮の声を聞きたくなっちゃって。ダメだったかな？」

『いや、ダメじゃねえけどさ……』

「良かった」

志乃がそう言って静まる空気

『あ、あのさ……何か用があって電話したんだろ？』

「うん……実はね。私、大学を辞めるかもしれないの」

『はあっ！？』

大きな声を出して驚く亮

まあ、そんな突拍子な話をされたら誰だって驚愕するだろう

『な、何で？』

「私、留年してるし、就活には不利なの。それにとある所からスカウトが来てるから」

『スカウト？一体どこから？』

「ＩＳ学園」

「はい？」

「ＩＳ学園で教師をやらないかってスカウトが来てるの」

『な……何で……？』

「これでも私、ＩＳ学園出身だからかな。成績も悪くなかったから目をつけられたんだと思う」

『……』

黙り込む亮
それほど衝撃的だったのだろう

「あっ。もしかして私には似合わないかな？教師」

『そんなことはねえけど……』

「ふふっ♪それじゃあまたね、亮。今度は直接会ってお話しようね」

『お、おう』

そう言って亮との電話を切った志乃は椅子から立ち上がる

「さてと……」

そして片手にはＩＳ学園のパンフレット
向かう机の上には入学前にもらった参考書の三倍はありそうな分厚い本
さらに一通の手紙が置いてある
その内容は――

ＩＳ学園教務員試験の案内

――――である

「次に亮と会うのは来年のＩＳ学園の入学式かな」

そう呟いた志乃は分厚い本を開いて読み始めた
この本はＩＳ学園の試験の過去問らしい
それを志乃は真剣な顔で読み続けるのだった

ちなみに亮は志乃がＩＳ学園に来る、という予想だにしないことに慌てていた
本来、ＩＳ学園の教師になるにはかなり大変なことだが、志乃ならば出来てしまいそうな予感がしてどうすればいいのかと頭を悩ませたのだった

第97話（後書き）

やっと更新できました

とうとうあの志乃さんが登場しました！！

出すか出さないか迷いましたが、思い切って出してみました

しかも、少し気がある？？？

志乃の本意は？？？

次回は人気投票の結果発表です

お楽しみに

三〇〇万ＰＶ突破記念！！第一回人気投票結果発表！！

「三〇〇万ＰＶ突破記念！！」

「第一回人気投票結果発表！！」

ワーワー！！パチパチパチ！！ヒューヒュー！！

「とうとう始まった結果発表！！司会はＩＳ学園二年生、新聞部副部長の黛薫子と」

「ＩＳ学園教師、山田真耶の二人が進行いたします！」

「ところで山田先生。何で私たちが司会者なんですか？」

「……それは私たち二人は一票も投票してもらえなかったモブキャラだからですよ……」

「ぐはっ！？そうなんじゃないかって薄々思ってたけどそこまでストレートに言われるとかなりキツい」

「黛さん、私たちみたいに０票で出れない人がたくさんいるのですから、私たちなんてまだ良い方です」

「確かに……ん？」

『愚痴はいいからさっさと始めろ』

「ううっ。カンペでそう言われてしまったのでさっそく初めましょう」

「では、第8位からの発表です！」

第8位は、1ポイント
原作ヒロインの一人とまさかの重要人物!?

「中国の代表候補生、凰鈴音さんと」

「スケィスさんです！」

「ちょっと待ちなさいよ！！なんでアタシが８位なのよ！」

「いや、そう言われましても……」

「スケィスさん。８位入賞したご感想をお聞かせください」

「……つーか、何で俺が？」

「さあ？」

「……適当だな……」

「では次に行きましょう！」

第７位は、３ポイント

原作ヒロインの一人がまさかの連続登場
そして、ＩＳの創作者が登場

「イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットさんと」

「稀代の天災？、篠ノ之束さんです」

「少々納得できませんが、ありがとうございますですわ」

「ハロハロ～♪天才の束さんだよ♪天災じゃないから間違えないでね♪」

「オルコットさんと篠ノ之博士には投票してくれた読者からの理由が書かれています」

セシリア：たしか一番最初に亮にデレたはず

篠ノ之束：ああいうキャラのデレが一番可愛いから

「以上です」

「それだけですの！？しかも理由が……」

「違うの？」

「ち、違くはありませんが……／／／／」

「篠ノ之博士はどうなんですか？三崎くんにデレたりしちゃいます？」

「どうだろうね～♪私がデレたりしたら、りょーちんはメロメロメロンになっちゃうかもね～♪」

「おおっ！それは確かに見てみたい！」

「うーん。見たかったら次の人気投票に私に投票してくれたら見せ

てあ・げ・る♪」

「あっ！勝手なアピールは止めてください～」

「あはは。それではバンバン行きましょう！」

第６位は、４ポイント
姉を越えたか？
原作ヒロインの連続登場継続中！？

「優柔不断少女、篠ノ之箒さんです！」

「ちょっと待て！だ、誰が優柔不断少女だ！？」

「えっ？だって……」

「ですよねぇ？」

「そんな不思議そうな顔をするな！！」

「まあまあ、それはそれとして読者からの理由を聞いてもらいましょう」

篠ノ之箒：これからどう亮に絡んでいくのか楽しみ，もともと好きなキャラだったので，亮にもデレてくれてよかったです

「ほら、読者の皆さんも篠ノ之さんは織斑くんと三崎くんに気があ

ると思われてますよ」

「ぐっ……／／／／」

「あと、箒は一夏と亮、両方狙いですか？と質問がきているけど実際のところはどうなの？」

「どうと言われてもだな……その……あの……／／／／」

「質問してくれた悠君。この篠ノ之さんの反応を見れば一目瞭然ですね」

「えっ！ちょっと！？」

「では次に行きましょう！」

第５位は、６ポイント
原作で一番人気のヒロイン二人が登場
ＩＳのヒロイン全員集合した！！

「フランスの代表候補生、シャルロット・デュノアさんと」

「ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒさんです！！」

「ど、どうも」

「うむ」

「二人とも5位入賞した気持ちはどんなですか？」

「どんなって言われても、まさかこんなに投票してもらえるなんて思っていませんでしたよ」

「まあ、投票してくれた読者には感謝しておこう」

「ではさっそく投票してくれた理由を聞いてもらいましょう！」

シャルロット：甘え方が下手なのと時にパニックになって強引に行動するギャップがいい，かわいいは正義！！

ラウラ：たまにある常識はずれな行動がかわいい，ラウラかわいいよ。ラウラ，

ああ可愛いよラウラたん
ルービックキューブやって涙目になってほしいな
組み体操で背伸びをしたラウラたんカワユス
夜抱きしめて寝たいなハアハア
後ろから「だ～れだ」をやって欲しいな
撫で撫でして抱きしめたいなハアハア
花火を一緒に見上げたいな
優しく名前を囁いて欲しいなハアハア
さあ、僕の胸へおいで！ラウラたん！　等々

「と、なっておりますがいかがですか？」

「ぼ、僕ってそんな風に見られていたんだね……恥ずかしいな／／／」

「いや、それよりも私を投票してくれた最後の読者の理由はなんなんだ！？」

「とても愛のある理由じゃないですか」

「愛は愛でもかなり歪んでないか！？ハアハア言ってるぞ！？」

「大丈夫ですよ、ボーデヴィッヒさん。襲ってきたりはしません……と思います」

「そこは断言してくれ！！」

「では次に行きましょう！」

第４位は、７ポイント
原作の主人公がここで登場！主人公の面目を守った！
そしてＧ．Ｕ．ヒロインが登場！

「ＩＳ主人公は強かった！織斑一夏くんと」

「Ｇ．Ｕ．の電波女、アトリさんです」

「まさか箒たちを抜いて４位なんて自分でもびっくりだ」

「私なんて出番とか全然なかったのにいいんでしょうか？」

「気にしないで読者の理由を聞いてもらいましょう！」

織斑一夏：亮に最近押され気味なためこれからの活躍を期待してと原作と違って女難が減ってる祝いを込めて，亮兄との掛け合いが本当に兄弟みたいで微笑ましいのと、やるときゃやる所がいい

アトリ：やっぱりハセアトが一番と自分は思うので，ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤでしか余り会うことが出来ないのに、それでも亮に想いを寄せている所が良いですね

「と言う感じですがいかがでしたか？」

「はい。亮兄は俺にとって本当の兄みたいに思ってるからな。そう思ってくれて嬉しいよ」

「私はハセヲさん一筋ですから♪だから絶対に逃がしません……」

「アトリさん、怖いです！？変なオーラがただ漏れです！？」

「早く次に行きましょう！次はいよいよトップ３です」

第３位は、８ポイント

もう裏のヒロインなんて呼ばせない
G．U．のヒロイン！

「読者の全員が出番を待ち望んでいる！揺光さんです！！」

「読者のみんなありがとう！アトリみたいに全然出番がないけど3位になれて嬉しいよ！！」

「そんな揺光さんに投票してくれた読者の理由を聞いてもらいましょう！」

揺光：揺光カッコいいよ，G．U．のヒロインの中で一番のお気に入り！，思い切って、ハセヲに自分の想いを告げようとした所が良

かったです，どう亮と接触していくか楽しみ，一途でしつこいと自分でいう子なのでＩＳガールズとの絡みが楽しみで仕方がない

「さすがは3位！かなりの人気です！見た感じ原作のファンが多いみたいです」

「そうだね。多分、これから出番が増えると思うから原作では見れないアタシを見て欲しいよ」

「これからの活躍に期待ですね！それでは、いよいよ第2位の発表です！」

第2位は、二桁の１３ポイント

ＩＳ、Ｇ．Ｕ．、両作品のヒロインを差し置いての入賞！
これが我らのお姉様！！

「ＩＳ学園最強の教師、織斑千冬さんです！！」

「ふむ……」

「あれ？どうしましたか、織斑先生？この結果に何かご不満が？」

「いや、教師である私が生徒を差し置いてこの順位はいかがなものかと思ってな……」

「そんなご謙遜を」

「そうですよ。織斑先生なら誰もが納得しますよ！……妬まれはするでしょうけど……」

「ぐっ……」

「で、では、読者の投票してくれた理由を聞いてもらいましょう！」

織斑千冬：デレ方が好きです，ＩＳのヒロインの中で一番のお気に入り！，他のヒロインとは違う大人の対応とやれやれと呆れながらも思いを寄せる描写がいい味出してる，第８３話の櫛イベントで、好きになりました，君は狙っているな！？何だあのイベは！想いを言葉にしちまえよ、もう！，織斑先生の時も良いけど千冬さんの時のささやかなデレ？の可愛さ。第８３話の櫛イベントで更に好ましくなりました

「どうやら第８３話の織斑先生が三崎くんに櫛で髪をすくイベントが大人気みたいです」

「織斑先生。三崎くんに髪をすいてもらったときはどんな気持ちでしたか？」

「ど、どんなって……」

「「「「「「「「「「「「ジイィィィィィ……」」」」」」」」」」」」

「ええいっ！貴様らその目を止めんか！！」

「でしたらどうだったか教えてください！」

「うっ……それは……／／／／」

「「「「「「「「「「「「それは？」」」」」」」」」」」」

「き、きも、気持ちよ…………何で私がそんなことを言わねばならんのだ！！」

「うわぁ！？織斑先生、日本刀は反則ですよ！？」

「黙れ！目上の者をからかった罰を与えてやる！！」

「「「「「「「「「「「「うわああああああああああああああぁっ！！？？」」」」」」」」」」」」

「ぜえ……ぜえ……よ、ようやく織斑先生の怒りが収まったと

ころで……いよいよ！！」

「第一回人気投票、栄光の第１位の発表です！」

第１位は、圧倒的な４８ポイント
やはり１位はこの男！
Ｇ．Ｕ．と本作品の主人公！

「誰もが認める主人公、三崎亮くんだ！！」

ワーワー！ヒューヒュー！パチパチパチパチ！

「あー……ども、三崎亮です」

「三崎くん。見事1位になりましたが、感想をお願いします」

「正直、こんな票数が離しての1位とは思わなかったよ」

「では、投票してくれた読者の理由を聞いてもらいましょう！」

三崎亮：自分自身との戦いとかやはり主人公～って感じで好きです，カッコよくＡＩＤＡに負けない精神力を持っているから，ＴＨＥＷＯＲＬＤでもリアルでも人間として成長していく姿が良いです，さりげない優しさで次々にフラグをたてていくところ，自分を犠牲してまで，仲間を助けようとする姿勢に感動しました，最高です！Ｇ．Ｕ．を経ての成長具合がにじみ出てます！

等々

「さすがは主人公！投票してくれた理由もかなりカッコイいです」

「う、うっせぇな……／／／／」

「テレてる三崎くんは可愛いです♪では、三崎くんには総括してもらいましょうか」

「お願いします！！」

「えー……今回、三〇〇ＰＶ突破記念、第１回人気投票に協力してくれた読者のみんなありがとう。一応、結果はこうだ」

第８位
凰鈴音
スケィス

第７位
セシリア・オルコット
篠ノ之束

第６位
篠ノ之箒

第５位
シャルロット・デュノア
ラウラ・ボーデヴィッヒ

第４位
織斑一夏
日下千草（アトリ）

第３位
倉本智香（揺光）

第２位
織斑千冬

第１位
三崎亮（ハセヲ）

「最近、作者は就活とかで忙しくてあまり更新出来ていないが、気

長に待っていて欲しい。今回は本当にありがとうございました」

「三崎くん、ありがとうございました。おっと？作者からのお知らせですね」

『読者の皆様、ＴＥです。今回の記念小説を楽しんでいただけたら幸いです。次の記念小説は五〇〇万ＰＶ突破、一〇〇万ＰＶみたいに読者の読んでみたい話を書きたいと思います。どうかお楽しみに』

「と、言うことらしいです！これは楽しみですね～」

「そうですね。でも作者がサボらずに更新出来れば話ですけどね……」

「それは言わないであげてください！ちなみに第２回人気投票は七〇〇万ＰＶに行う予定です！それでは最後に皆さんでお別れの挨拶をしましょう！せーの！」

「またね～～～！！」

第９８話（前書き）

久しぶりの投稿

お待たせしてすみません

第９８話

「ふわあぁぁぁ……」

夏休みも中盤に入り、俺は遅めの起床
時刻は１１時過ぎ

いつもなら一夏が起こしてくれるのだが、一夏はいない
なぜなら俺は自分の家に帰宅しているからだ

まあ、それでももっと早く起きるんだが昨日志乃からの電話での告白に驚いて眠れなかったんだ

「……寝よう」

俺は再びベッドに寝ころび二度寝をすることに――

こんこんこん

「亮、起きてる？」

しようとしたが、珍しく仕事がない母さんが俺を呼んでいる
大した用ではないだろう、だから俺は返事をせず狸寝入りをすることにした

「返事がないってことは寝ているみたいね。入っちゃっいましょう」

ガチャリとドアが開く音が聞こえる

（あいつはまた勝手に……）

そう思いながらも俺は起きることはしない
面倒だからな

「寝てるわね……今がチャンスよ」

「は、はあ……」

（ん？今の声は……）

どこかで聞いたことがあるような気がする
母さんの声ではないのは確かである

「ほらほら躊躇しないで」

「は、はい……」

そこまで聞いて俺は嫌なオーラを感じ取り目を開けた

そこには、寝ている俺に顔を近づける鈴がいた

「って何やってんだよ!?」

「きゃあああああああっ!?」

俺のツッコミに鈴が悲鳴を上げながら後ろに跳んだ

「あ、あんた！お、起きてたの！？」

「今さっきな」

最初から起きてました、とは言えず適当に答えながら俺はなぜか家にいる鈴に質問する

「お前が何でここに？つか、何しようとしてたんだよ」

「えっ？あ、その、それは……」

顔を真っ赤にして慌て始める鈴

「実はね。私がゴミを捨てに行って帰ってきたらこの子が家の前にいたのよ」

代わりに母さんが事情を説明し始める

ここは黙って聞いておこう

「しばらく眺めていたらチャイム押そうか押さないかで悪戦苦闘していてね。最後には頭を抱えて悩んでいたから面白かったわ」

「実の母親ながら最低なことをしてやがる！？」

「それで、私の家の前で何やってるの？って聞いたら亮の友達って言うじゃない。亮にもとうとう女を家に連れ込むようになったんだ、って嬉しくなって家に招待したのよ」

「連れ込むとか言うんじゃねえ！つうか、それなら何で俺にそのこ

とを言わない？」

「言ったわよ。心の中で」

「わかるか！？何か、俺はテレパシーでも使えるのか？」

「実は……そうなのよ……」

「んなわけあるかー！？」

くそ……

起きて早々にこんなツッコミをする羽目になるとは思わなかったぞ

「……」

しかも、鈴が状況について行けず唖然としている

「私がテレパシーを送っても起きてなかったから寝起きドッキリでもしようかなって思って」

「それが何で鈴があんなことをしなければいけねえんだよ！」

「あら？彼女なんだからそのくらい平気じゃない」

「……はあ？」

「だから、彼女のキスで起きるドッキリなら本望でしょ？」

「はあああああああああっ！？」

「あら？違うの？」

不思議そうな顔で俺を見る母さん
こいつ、勘違いにも程があるぞ

「ち、ちげえよ！俺と鈴はそんなんじゃ……」

「まあ、そうだと思ってたけど」

はあ？

「良かったわね、鈴ちゃん。亮が動揺してるってことはかなり意識しているってことよ！」

「えっと、その、アタシは……別に……」

ヤバい

このままでは母さんの流れになっちまう

「もういい……鈴、何でお前が家に来たんだ？」

「あ、遊びに来たのよ！なによ、悪いの？」

「悪くはねえが、一言連絡ぐらいしろよ」

「べ、別にいいじゃない……なに？エロいものでも隠すわけ？」

なんで、こいつはそんな考えしか思いつかないんだよ

「んなもんねえ――」

「確か机の二重底になっている引き出しの中の参考書のカバーをかけてある奴があるわよね？」

「……」

な、なんでそのことを知っていやがる！？

俺が一生懸命作った隠し場所が知られてやがる！？

（待て！落ち着け！ここで慌てたら母さんの思う壺だ。ここは冷静を装って誤魔化すしか……）

「ちなみにそのエロいものがこれね」

「何やってんだテメェはぁぁぁぁぁっっっっ！！？？」

このヤロウ。俺がいない間に抜き取りやがったな！？

「ちなみに亮はツインテールで胸が大きい子が好みみたいね」

「ツインテールで……胸が大きい……」

母さんの言葉を復唱する鈴

あれ？俺、そんな本持ってたか？ってそんなこと言っている場合じゃない

早く取り戻さねえと――

「今後の参考のためにどうぞ」

「何のだよ！？」

よりによって鈴に渡しやがったよ、この母親は！！

「……」

エロいものを渡された鈴は顔を真っ赤にしながらそれを読んでいる

無理して読むな！つか読まないで！？

「……！？」

「あの……鈴さん……？」

ぼんっ！と顔から湯気を噴出させる鈴
俺は恐る恐る鈴に声をかける

「そんなに……」

「はい？」

「そんなに大きいのが好きなのかぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！」

「ご、誤解だへぶろぁ！？」

鈴の拳が俺の鳩尾に一閃
俺は膝をつく
そして、俺はこのとき思った

なんでこうなった？

と……

「まったく災難だったわよ！！」

「……」

それはこっちのセリフだ、と言い返したいが不利なので黙っておこう

「それにしても亮のお母さんって若いわね。てっきりお姉さんかと思ったわよ」

「そうか？言い過ぎじゃね？」

そう言われると確かに若い分類に入るのかもしれないな

小さい頃からあんまり変わってない気がする

「つかもう母さんの話はいいだろ？」

じゃねえと、またいつ出てくるか――

「亮、入るわよ」

「……」

噂をすれば何とやら……

「母さん。せめて、ノックをしてから入ってくれ。びっくりするじゃねえか」

「あら、ごめんなさい。それよりも亮にお客様よ」

客？

誰かと思ったとき、その正体がすぐにわかった

「お邪魔しますわ、亮さん。偶然近くを通りかかったので遊びに……」

それはイギリスの代表候補生、セシリアだった

「ど、どうして鈴さんがこちらに……」

「あんたと同じ理由よ。悪い？」

バチバチッと何故か睨み合う二人
直感的に今、ここにいたらダメな気がする

「飲み物持ってくるから少し待ってろ」

「うん、わかった」
「ええ、わかりましたわ」

返事はするが、睨み合うことを止めない二人を置いて俺は部屋を出た

「ムフフ……」

出たらニヤニヤ笑っている母さんがいた

「んだよ……」

「修羅場だな～って思ってね」

確かに修羅場だな
下手したらここが戦場になるかもしれない

「私の予想だともっと修羅場になりそうな気がするわ♪」

「そんな嬉しそうな顔をしながら言うんじゃねえよ！！」

本当にそうなったらどうすんだ

ピンポーン

「あら？今日は千客万来ね」

「・・・・・・・・・・」

そう言って母さんが玄関へと向かった

しばらくして戻ってきたと思ったらその顔はいやらしくニヤニヤ笑っていた

「修羅場追加しま～す♪」

「……」

俺は歳に合わないしゃべり方に殺意を持ちながら飲み物のコップを追加するため台所に向かうのだった

第９８話（後書き）

亮の実家・・・・そこまでは良かった。良かったんですが・・・・

亮の母・・・・何故ああなった？

あんな性格になってしまうとは・・・・・

面白くなってればいいかな？

面白ければですが・・・・

亮も今年で１８歳

エロいものを持っていても不思議ではありません

そういうネタをたまには使ってもいいですよね？

感想お待ちしております

第９９話（前書き）

遅れてしまい申し訳ありませんでした

第９９話

「はあ……揃いも揃って、何でお前らは連絡も無しに家に来るんだよ」

「悪い、亮兄。箒が行ってみたいって言うからさ」

「そ、そんなことは言っていない。昔は一度も亮の家では遊んだことなかったからどんな家なのかと気になっただけだ！」

昼食の出前寿司を食べながら、一夏と箒が答える
大人数のためリビングで昼食を取ることにしたのだ
しかも『今日はお赤飯ね♪』と笑いながら買い物に出かけた亮の母
出かける前に出前で好きなものを頼みなさいと言ったので、特上を全員分注文した
もちろん払うのは母。亮のささやかな復讐でもある

「ご、ごめんね。うっかりしちゃってて」

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

そう言ってウニを食べるラウラ

（この自信が羨ましい……）

ラウラ以外の女子四人は、全く同時にそう思うのだった

「食べ終わったらどうする？全員、俺んちがいいんだよな？」

こくん、と一糸乱れぬ動きで全員が頷く

（わざわざ亮が帰省をしている日を狙ってきたのだ）

（外になんか出たら台無しじゃない、バカ）

（なにか、今まで知ることの無かったことの一つは得たいものですわ）

（亮の部屋をまだ見てないし）

（嫁の実家は隅々まで把握して置く必要があるからな）

そんなことを各々に想いながら、寿司を口に入れる

何か不穏な空気を感じつも俺は黙々と寿司を食べ、しばらくして食べ終える

「あのさ、亮兄。俺、亮兄の部屋を見てみたいんだけどいいかな？」

（（（（一夏、ナイス！！））））

まだ亮の部屋を見ていない三人にとって一夏のその一言はファインプレーだった

「うーん……別に良いけど。散らかすなよ？」

亮は渋々ＯＫを出して、自分の部屋に案内した

「へえー！ここが亮の部屋なんだ」

「予想以上に片付けてあるな」

ジロジロと部屋を見渡す箒とシャルロット

「そりゃあある程度はな……で、ラウラ。お前は何をしている」

「む？」

今、ラウラは姿勢を低くして亮のベッドの下を覗き見ている

「何ってベッドの下にいかがわしい本がないかどうか確かめているのだが」

「んなもんねえよ……」

「そうなのか？一般日本人男子はベッドの下に隠してあると部下から聞いたのだが」

「全員が全員そう思うな、ってお前の部下に伝えとけ」

亮はため息を吐きながら椅子に座る

「ほら、別に面白いものなんて一つもねえだろ？」

「あれ？亮、このパンフレットはなに？」

本棚を見ていたシャルロットが隅っこにあったパンフレットを取り出した

「それは俺が行こうとしていた大学のパンフレットだな」

「えっ!?亮兄、そこって偏差値がかなり高い大学じゃないか!」

「まあな。でも俺の学力なら十分に行けたんだよ」

亮は学年でも上位を争うほどの実力はあった

「もしＩＳを動かしてなかったらそこに進学して普通の生活を送っていたんだろうな」

「「「「「「……」」」」」」

亮の何気ない一言に一夏達は黙り込んでしまう

「まあ、今更な話だけどな」

「……あのさ、亮。……もし、もしＩＳを動かさないで最後の高校生活を過ごしていたら……。そっちの方が良かった?」

「はあ?鈴、何だよ急に」

「だって、亮なら有名な大学に進学してＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄのみんなと楽しく過ごしていたんじゃないの?一夏みたいに織斑先生とかいた訳でもないんだからさ……」

「……確かに最初は辛かったさ。進学を考えていたのに結局は一年からやり直し、ましてや男子が一夏しかいない女子校なんだからよ」

「「「「「「……」」」」」」

亮の言葉に下を向く一夏達
しかも、ＡＩＤＡという強敵と戦い、傷つき、倒れることが多くなった
そんな普通じゃない暮らしをするぐらいならＩＳと関わらない平凡な生活の方が十分に良いはずである
でも――

「でも、俺はお前らと出会った」

「えっ？」

「俺がこうしていられるのはお前らと出会えたからだ。俺はそう思ってる」

「亮……」

「だから、そんなしけた顔するなよ。それとも俺はここにいない方が良かったか？」

「そんな筈がないじゃないか、亮兄！！」

「一夏の言う通りだ！！そんな筈がない！！」

「わたくし達は亮さんと出会えて本当に良かったと思っています！！」

「そうよ！変なこと聞かないでよ、バカ！！」

「嫁がいなかったら私は今頃、ＡＩＤＡに身も心も奪われていただろう。そんな大切な人をいない方が良い、と誰が思う？」

「僕もだよ！亮のおかげでこの、幸せな時を過ごせてるんだよ！！」

一夏達の言葉を聞いて亮は笑った

「それを聞いて安心したよ。俺はここにいる。そう実感できた。さっ、こんなつまらない話は終わりにしてゲームするぞ」

パンパンと手で音を鳴らし、話題を変える

一夏達は、今の言葉が本心かどうかはわからない。だけど、亮が笑ってそう言うのならば自分たちは信じようと一夏達は思った

「……わかったよ、亮兄。何のゲームをするんだ？」

「そうだな。俺んちで遊べるのって言えばテレビゲームしかないんだが……」

「ええっ～！アタシ、そういうのは嫌なんだけど」

「ん～……どうすっか……」

一応、将棋や囲碁、チェスなどもあるが、どれも二人でしか出来ない

バーンッ！

「それならば、私に任せな――――」

バタン

「さて、どうすっか？」

「「「「「「……」」」」」」

いきなりのことに反応できなかったので説明しよう

何して遊ぼうかと考えている最中に亮の母がドアを破る勢いで参上

しかし、言い切る前に亮がドアを閉めて追い出したのだ

「な、なんて早業……全然見えなかった」

「そんなことより良いのか？あれは顔面にぶつかってたけど……」

「大丈夫。あいつはその程度でくたばりはしない」

「その通りだよ、亮！」

バタンと再び亮の母参上

鼻にティッシュが詰め込まれているが気にしない

「それでも実の母にこの仕打ちはないんじゃないかな？」

「知るか。用がないならさっさと出て行け」

「用はもちろんあるよ。ゲームでお困りなら私が良い物を用意しておいたわ」

「用意？」

「それは宝探しゲームよ！！」

「宝探しゲームか……面白そうだな」

興味を持ち出した一夏達に亮の母は説明を始めた

「ルールは簡単！制限以内に隠された宝を見つけたらあなた達の勝ち。見つけられなかったら私の勝ちという訳よ」

「質問。宝の数は？」

「五個よ。ちなみに見つけた宝はそのままみんなにあげちゃう」

「良いんですか？」

「構わないわ」

「あと、宝は何ですか？」

「うーん……それを教えたらつまらないんだけど特別に教えてあげる」

ニヤリと笑う亮の母

亮はそんな母を見た瞬間、悪寒を感じた

「お宝は……亮の恥ずかし写真よ！！」

「……はぁ……？」

亮は自分の母が何を言っているのかよく理解できなくて固まっている

「亮の小さい頃の恥ずかしい写真一枚一枚。計五枚をどこかに隠したわ」

「亮の？」

「小さい頃の？」

「恥ずかしい写真？」

「亮はね。私に似て顔がよく整っているじゃない？だからよく女の子の服を着せて楽し――エンジョイしてたの」

「今、言い直した意味なくないか？」

「はっ！？」

一夏がツッコミをいれた後、我に戻る亮

「おい！どういうつもりだ！何でそんなものを！？」

「落ち着きなさい、亮。これも彼女たちのためよ」

「意味わかんねえ！？」

「ちなみに見本として……この写真は亮が中学生のとき、文化祭で無理矢理着せられたゴスロリ姿の亮よ♪」

「「「「「！？」」」」」

「はい。終わり～～♪」

チラッとしか見えなかったが、それは確かにゴスロリを着た亮の姿だった

「さあ、これでみんなのやる気がＭＡＸになったわね」

「んなことでなるわけねえだろ！！つか、その写真いつの間に撮りやがった！母さん、中学の文化祭は仕事で一度も来なかったじゃねえか！！」

そう、亮の両親は共働きで忙しい

そのため文化祭だけではなく、体育祭なども来たことはなかった

「実は……そのときはこっそり来ていたの……」

「はっ？なん――――」

「恥ずかしがる亮を盗撮するために！！」

「最低だっ！？」

母の言葉に頭を抱える亮
亮の恥ずかしい写真を撮るためだけに仕事を休むなんて普通ではない

「それじゃあ始めるわよ」

「ちょっと待てって！そんなもんでやる気なんて――――」

「それはどうかしら？」

亮の後ろを指さす亮の母
後ろを振り向くと亮の表情が固まった

「「「「「……」」」」」

その先にはゴゴゴゴゴッと殺気に似た何かを発する箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロットがいた

口々に『亮の写真、亮の恥ずかしい写真』と呟いている

亮は思った
こいつら本気だ

と……

「それじゃあ宝探しゲームスタート！！」

第９９話（後書き）

再びこんなに遅れてしまって申し訳ございませんでした

えっと、まさかの宝探しゲーム、どんな結末になるのかお楽しみに

第１００話（前書き）

こっれで１００話！！

なので今回はいつもより長めです

第１００話

「……」

母さんが勝手に開催した宝探しゲーム
俺にとって名誉がかかっている絶対に負けられないゲームだ

始まってまだ数分、まだ見つかっていないがこの家は普通の一戸建て
見つかるのは時間の問題でもある

そういうときこそ冷静な判断が必要だ

あの母さんのことだ発見困難な場所に隠しているに違いない

「とりあえず……」

俺が向かうのはトイレだ
別に用を足すのではない。そこに隠してある可能性が高い

「……やっぱり……」

俺の予想は的中
トイレの貯水の中に隠してあった丁寧にビニールが巻いてある

「これは……」

一応、写真を見てみると文化祭でゴスロリを着た俺だが、何故かローアングルで下着が見えるか見えないかのギリギリな写真だった

「……」

俺は問答無用に写真を破った
こんなのを見せたらなんて言われるかわかったもんじゃない

「あーもー!!どこなのよ!亮の写真は!!」

「絶対に探し当てますわ!!」

ガラガラガッシャーンと凄い物音が鳴り響いている
鈴とセシリアの声が聞こえたからあいつらががむしゃらに探しているんだろう
後でちゃんと片づけさせなければ

「見つけた!!」

「!この声は箒か!?」

しまった!ぼさぼさしてたら先に見つけられてしまった
俺は急いで声が聞こえた方へと走り出した

「箒?大丈夫か?」

「だ、大丈夫……ぐっ……」

「……これは……？」

たどり着いたは良いが状況についていけない
何故かわからないが鼻を押さえて膝をつく箒とそれを少し呆れた顔をして声をかける一夏

「あっ！亮兄」

「一夏、何が起きた？」

「いや……箒が亮兄の恥ずかしい写真を見た瞬間、鼻血を……」

「……」

聞かなきゃよかった
つうか、あの箒が鼻血を出すほどの恥ずかしい写真って……

「箒。それを渡せ」

「こ、こほわる……」

どうやら写真を渡す気はないようだ
それだと俺が困るんだが……

「……わかった。渡さなくていい。だからどんな写真か見せてくれないか？俺が写っている写真なんだから見る権利くらいあるだろ？」

「……わはった」

箒は俺に見えるように写真をこちらに向けた

その写真は――

ゴスロリを脱ぐ最中（そのために背中の肌が丸見え）の写真

「アウットォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

これはもはや犯罪だ！

いくら肉親だろうと許される行為ではない

「箒！その写真を俺に渡せ！」

「こ、断る。それにさっき、渡さなくていいと言ったではないか！」

「まさかそんなマニアックな写真とは誰も思わねえだろ！！」

さっきのローアングルのやつといい。なんて写真を撮ってやがるんだ

「さあ、渡せ！」

「断る！」

そう言って箒は走り出した

逃がしてなるものか！

「来い！来いよ！俺はここに――」

「うおおおっ！？止めろ、亮兄！」

ガバッと俺を羽交い締めする一夏

離せ！あんな写真を存在させる訳には！

「だからってスケィスを使うなって！それにまだ写真がどこかに隠されているんだし、そっちを優先した方がいいんじゃないか？」

一夏の言う事も一理あるな

あれ以上の写真があるかもしれない

「わかった。他の写真を探す。箒については後でなんとかしよう」

俺の言葉にほっと一息ついて解放する一夏

「一枚は俺が見つけてあるから残り三枚。一夏、お前も見つけたらすぐに俺に渡すんだ」

「もちろん、わかってるさ」

「頼んだぜ」

そう言って俺と一夏は二手に分かれて行動を始める

さて、次はどこを探すか

「ん？」

「……」

俺の視線に入ったのは妙にこそこそと怪しい動きを見せながら移動しているシャルロットだった

「……」

怪しすぎる

もしかしたら写真を見つけたのかもしれない

ここは刺激しないようにシャルロットの後を尾行しよう

「……」

「……あの部屋は……」

尾行してシャルロットが入った部屋はなんと俺の部屋だった

「何で俺の部屋に……」

そうか。スタート地点である俺の部屋なら誰も来ない
だから一人でゆっくり見れるからな

俺は気づかれない程度にドアを開けて中の様子を確認する

「……」

（何やってんだ、シャルロットのやつ？）

ただキョロキョロと回りを見渡すシャルロット

（写真らしきものは持ってねえし……ん？）

キョロキョロしていたシャルロットがある方向に目を向けて動きが止まる
その方向にあるものとは――

（俺のベッド？）

「……りょ……の……」

何を呟いているかはわからないが、シャルロットはゆっくりとベッドへと歩み寄って行った
そしてついには――

ぽふっ

シャルロットは俺のベッドへダイブした

「はふぅっ♪」

（？？？）

あいつは一体なにがしたいんだろうか、今度は枕を抱き始めた

（もしかして……）

俺はシャルロットの行動にある仮説を立てた

（体調が悪いのか？）

それならばシャルロットがベッドにダイブしたのも頷ける
人に迷惑をかけたくない気質のシャルロットだ
誰も来ないだろう俺の部屋で休憩しようと考えたに違いない

（だったらそっとしておいた方がシャルロットのためだな）

そう考えて俺はドアを閉めようとした

（あれは！）

だが、俺はあるものを発見してしまった

（写真！？）

そう、シャルロットが抱いて寝ている枕の裏に写真が張ってあったのだ

（あのヤロウ……俺達が出て行った時にこっそりここに隠しやがったのか……）

灯台下暗しとはまさにこのことである

幸いにもシャルロットはまだ気づいていない

（シャルロットには悪いがここは強行手段に入るしかねえ）

そう決心した俺は行動に移った

「動くなっ！！」

「!!??」

びくっと体を震わせるも枕を抱いた状態のまま動きを止めるシャルロット

「そうだ。そのまま動くんじゃねえ」

「り、亮……いつから……」

「最初からだ」

亮がそう答えるとシャルロットは顔を真っ赤になる

（さ、最初から!?ど、どうしよう。亮のベッドの上で意味なく転がったり、枕の匂いを嗅いでたところも見られちゃったの!?）

はたから、見ればその行動は変質者そのものだ

シャルロットは必死に弁解を試みる

「り、亮!これは、その、違うんだよ!これは、えっと……」

「わかってる。だから何も言うなシャルロット」

「えっ?」

一歩ずつ近づく亮の言葉に気の抜けた声を出してしまう

「（体調で）苦しむお前に気づいてやれなくて本当に悪いと思ってる」

「亮……ごめん……僕、我慢できなくて……」

「謝んなよ。シャルロットはそのベッドで寝ていればいい」

「亮……それって……」

（僕の想いが亮に……）

シャルロットの表情が一気に明るくなる

「さあ、目を瞑って……」

（わあっー！わあっー！ど、どうしよう！まだ心の準備が！？）

心の中は完全にパニック

冷静沈着のシャルロットでも冷静にはいられない

シャルロットは力強く瞼を閉じた

（あ、あれ？）

しばらくしても何も起きないことに疑問を持ち始める

「悪いな、シャルロット」

「えっ？」

亮の言葉を聞いてシャルロットは目を開く

そこには一枚の紙を片手に持つ亮がいた

「その写真は……もしかして……」

「宝だよ。俺にとって災いの元なんだがな。シャルロットが抱いてる枕の裏にあった」

「……さっきの目を瞑ってろって言ったのは……」

「ん？お前体調が悪いんだろ？俺達に気にせず寝てろよ」

「そういう意味……」

がくりとうなだれるシャルロット

「……」

「シャルロット？」

「ちなみにさ……。その写真はどんなのだったの？」

未練があるようで恐る恐る聞いてみる

「ん？ベッド繋がりみたいで俺がここで寝ているところだな」

「そ、そうなんだ……」

「俺が六歳の頃のだけどな」

ぴしっ。

今、確かに何かにヒビが入る音が聞こえた

「亮……」

「な、なんだ？」

ゆらりとその場に立つシャルロット
そんなシャルロットの姿に亮は思わず後ずさる

「乙女の純情を傷つけるばかりか、宝まで奪う気なんだね？……
ふふっ……ふふふっ」

「しゃ、シャルロット？」

「はあっ！」

「ぐっ！？」

シャルロットは枕を投げつけてくるが、亮は寸前で屈んでに避ける
もそれが悪かった

「やあああっ！！」

シャルロットは屈み込む亮にベッドのバネを利用し、跳んだ
屈み込む亮は避けることなどできる訳もなくそのままシャルロット
に押し倒される

「さあ！その写真を僕に！」

「こ、断る！」

どうにか抵抗しようとするが、さすがの亮も代表候補生の寝技には勝てない
腕を完全に押さえつけられている

「強がっても無駄だよ。今の亮は身動きが取れない。このうちに写真をもらうよ！」

シャルロットは写真へと手を伸ばす――

「亮？今、大きな音が聞こえたけど大丈夫？」

そのとき、運が良いのか悪いのか亮の母が登場
さっきの大声に気づいて様子を見に来たようだ

「あらあら。シャルロットちゃんって意外と大胆なのね」

「えっ？」

ニヤニヤと笑いながら言う亮の母

意味がわからず、シャルロットは現状確認をした

手は自分の手で拘束、仰向けに倒れる亮の体に馬乗りする形、しかも写真を奪い取ろうとした際に身を伸ばしたために顔がかなり近いはたから見たらシャルロットが亮の唇を強引に奪おうとしているようにも見えてしまう

「まあ、亮にはそのくらい積極的な方が良いかもしれないわね。それじゃあ、ごゆっくり♪」

手をひらひらと振りながら亮の母はその場から退出した

「……はっ！？ご、ごめん、亮！？」

氷のように固まっていたシャルロットはすぐにその場から離れた

「いててっ……」

「その、亮、僕……頭に血が昇っちゃって……」

（欲に負けたとは言え僕は亮になんてことしちゃったんだ……どうしよう……これで亮に嫌われちゃったら……）

「シャルロット」

不意に呼ぶ亮の声にびくっと震える

「何でお前らは俺の恥ずかしい写真なんか欲しいんだよ?」

「それは……」

八割ほど不純な理由のため、どう言ったものか悩むシャルロット

「理由はどうあれ。写真は諦めてくれ」

「ううっ……わかったよ……」

これ以上、亮に嫌われるような行動はしたくないシャルロットはおとなしく従うことにする

「それがいい。ほら、体調悪いんだろ?俺のベッド使っていいから」

「う、うん……ありがとう……」

亮のベッドに入れるのは嬉しいが、宝が手に入れることができなくなったことの方がショックが大きかったようで、しょんぼりしてしまう

「……」

それを見た亮はあることを提案した

「何かして欲しいことはないか?何か食べたいものとかあったら買ってくるし、作ってやるよ」

「……ううん。それよりもお願いがあるんだ」

「なんだ？」

「僕のこと、嫌いにならないで……」

シャルロットの心からのお願いだった
亮に嫌われたら自分は生きていけない、それくらい亮の存在は大きいのだ

「何言ってんだよ。んなこと、あるわけねえじゃねえか。ありえないね」

亮はシャルロットの頭を撫でてそう言うとそのままベッドに寝させる

「それじゃあ……お願いがあるんだけど……良いかな……」

「なんだ？」

「おやすみの……キス……して欲しいな……」

「はあっ！？」

予想外のお願いにさすがの亮も驚いてしまう

「き、キスと言ってもおでこに、だよ。昔はいつも寝るときはお母さんにしてもらってたから……」

「うっ……ぐっ……」

シャルロットの事情は知っている亮だから気持ちはわかる
わかるが、おでことはいえ、異性とキス
躊躇してしまうのは当然である

「お願い……」

「……わ、わかった」

シャルロットの上目使いには勝てず、亮は承諾してしまう

「じゃあ、行くぞ……」

「うん……」

顔を真っ赤にする二人
そんな恥ずかしいならしなければいいのにと思うのだが後先引けない二人
これは覚悟を決めるしかない、心に決める

「い、行くぞ！」

「う、うん！」

亮はゆっくりとゆっくりとシャルロットのおでこに口を近づける
そして――

チュッ♪

「……」

沈黙が広がるどうにも言えないこの雰囲気が二人の精神を削っていく

「じじじじゃ、じゃあ俺はここここ、これで！！」

「う、うん……」

耐えきれなくなった亮は逃げるようにその場から出て行った

「……あううう…」

ひとり残されたシャルロットはキスされたおでこをなぞると、布団をかぶって唸り出す

キスしてもらったこともそうだが、お願いした恥ずかしさが一気に

溢れ出した

「……えへへっ♪」

それでもおでこをなぞっては嬉しそうな表情をするシャルロット
なんだかんだで幸せなシャルロットであった

「結果発表～！」

母さんがパチパチと拍手をしながらそう言ってきた
このふざけたゲームが終わって俺はほっと一息

「結果は亮の単独1位！四枚を探し当てたわ！」

そう俺は等に取られたヤツ以外は全て回収したのだ
ラウラやセシリア、鈴に襲われたりしたがなんとか凌ぎ切った

「くっ……もう少しでしたのに……」

「あたし達から逃げ切るなんて……」

「やはりピアノ線を仕掛けておくべきであったか……」

落胆する三人のつぶやきが聞こえる

最後のラウラなんて写真ではなく、俺の命を奪うような言いぐさだぞ

「さて、1位になった亮にはさらなる賞品を渡したいと思います！」

「賞品？」

なんだろう、嫌な予感しかしない

「はい」

渡されたのは綺麗に包装されたなにか

大きさから見て本みたいだけど……

「開けてみなさい。きっと、あなたの役に立つわ」

「お、おう……」

よくわからないが、とりあえず開けてみよう

その中身は――

エロ本だった

「なんじゃこりゃあああぁぁぁぁ！！？？」

俺は思わず叫んでしまう

つうか、叫ばないとやっていけない気がした

「それは本当に亮が隠していたエロ本よ」

「それじゃあ、鈴に渡していたヤツは？！」

「あれはお父さんの」

「親父のかよっ！？」

良い年してんなもん持ってんじゃねえよ！！

「見つけたときはショックだったわ。内容が私とは逆のものだったのだから……あとで締め上げてやるわ……」

親父逃げろ……

こいつは本気だ

「亮は人の心配をしている暇なんてないでしょ」

「……」

そうだった……

俺はゆっくりと振り向くと――

「「「「「……」」」」」

5人の修羅がいました

さっきまで上機嫌だった箒とシャルロットまで俺に殺気を送っている

「待て！これは――」

「亮さん、とりあえずそれをこちらに渡して下さいませんこと？」

「待て、渡したらどうするつもりだ」

「決まってるじゃない。さっきのヤツみたいに……燃やすのよ」

ぐっ……

だが、それで許してもらえるなら――

「そして、最後に亮も……燃やす」

「散開！！」

エロ本だけじゃなく、俺も燃やされるなんて冗談じゃない！！

「どこに行くのだ、亮？」

「逃がさないよ、亮。フフフ……」

箒とシャルロットに先回りされてしまった

ヤバい……

「一夏……」

「亮兄、骨は拾うよ……残っていればだけど……」

一夏に助けを求めようとしたら突き放されてしまった

そんなことしている内に5人に取り囲まれてしまった

「ちっ、チクショォォォ！！？？」

オマケ

「あらあら、亮ったら友達がいるのに眠っちゃって」

「いや、眠ったっていうより気絶したと言った方が……」

床に眠る（気絶する）亮を見て呆れる亮の母
一夏がすぐにツッコミを入れた

「あと、皆さん。今日は亮と遊んでくれて本当にありがとう。あんな楽しそうな亮を見たのは久しぶりだわ」

「いえ、そんな!?急にこんな人数で押しかけてしまって申し訳ありません」

「良いのよ、別に。亮は小さい頃からあまり友達と遊ばない子だったからね」

「えっ?昔はよく亮兄と遊んでいたけど……」

「一夏君に箒ちゃんよね。あなた達二人はよく覚えているわ。亮とよく一緒に遊んだ子達ですもの」

「はあ……」

「どうして亮さんは昔は友達と遊ばなかったのですか?」

「私とお父さんは共働きでね。友達と遊ぶことが両親の迷惑になる、

と思っていたのよ。この子は昔からそういうのは敏感だったから」

「亮って家族想いだったのね……」

「ええ……洞察力が良くて教師の人達の評判も良かったわ。でもね、私は不安もあったわ。そのせいで、友達が少なくて……でも、そんなときに二人に出会ったの」

「俺と箒にですか？」

「ええ。自分のやりたいことをやりたいようにやる一直線な所に亮は惹かれたって言っていたわ」

「まあ、バカって言えるけどね」

「うるせぇ」

「そんな二人と遊んで亮は楽しそうだったわ。たまに服がボロボロだったのが気になったけど」

（千冬姉と束さんのせいだな……）

「私とお父さんは亮が楽しくしているのならばそれで良いと思っていたけれど……事件が起きたの」

「事件？」

「亮が意識不明者になったの」

「「「「「「！？」」」」」」

「原因はそのときにハマっていたオンラインゲーム『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』。あの時は驚いたわ。まるで死んだみたいに動かないのだから」

「その後……どうなったんですか？」

「私とお父さんは亮をもっと都会の大きな病院に移させたわ」

「そうか……だから亮兄はなにも言わずに転校を……」

「ごめんなさい。せめて、あなた達だけでも伝えられれば良かったのだけれど……」

「気にしないで下さい。自分の子供がそんなことになったら余裕なんてありませんから」

「ありがとう……。そして亮は一年後に目を覚ましたわ。でも、亮は自分がどうして意識不明者になったのか記憶がなかったのハマっていたＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄのこともね」

「一時的な記憶障害……」

「私とお父さんは不気味になって、適当にごまかしたわ。そして、そのときに誓ったわ。暇な時は亮と一緒にいようって、もう亮があんな風にならないように見守っていようって……」

亮の母の言葉に黙り込む一夏達

「でも、亮は今、私にはどうしようもできない世界にいるわ。だか

ら同じ世界にいるあなた達に勝手なお願い。どんなことがあっても亮と一緒に、亮の近くに居て上げて」

亮の母のお願いに一夏達は口を揃えて答えた

「「「「「「はい！！」」」」」」

「ふふっ、ありがとう」

一夏達の答えに亮の母は満足そうに笑うのであった

第１００話（後書き）

母の思いが一夏達に託された・・・・

それをおまけにしちゃったのは駄目だったかな？

まあ、いいか

次回はあの人たちが登場！！

波乱の予感がします

第１０１話（前書き）

やっと更新できました

残念ながら温泉旅行ではありませんのであしからず

第１０１話

「よし、ここだな」

夏休みも終盤にさしかかってきたはそんなとき、亮は珍しく外を出歩いていた
目の前には一軒の家
その表札には『織斑』と書いてある

「前回はあっちからだったから今回はこっちが訪問する番だ」

どうやら前回のお返しをしようとしているらしい
やられたらやり返す。それが亮のポリシー

（うしっ！行くか！）

亮は心の中で気合いを入れて呼び鈴を押そうとしたのだが――

「三崎……こんなところで何をしている……」

「……」

まさかの大黒柱（ちふゆ）が登場
亮はいきなりのことすぎて固まってしまう

「三崎亮、質問に答えろ」

「ごめんなさい。家を間違えまし、たっ！！」

亮は千冬が来た反対側へと走り出す
ここで捕まったら何をされるかわかったものではない

ガチャンッ！

「どわあっ！？」

「やれやれ……」

不穏当な金属音とともに倒れてしまう亮
見てみると、ＩＳの手のようなものが亮の片足を掴んでいた
しかも、アームは織斑家から伸ばされていた
千冬は両手にスーパーの袋を持っているところを見て、千冬がやったのではない

「まったく素直に話せば良いものを……まあ、いい。ここは暑い中で詳しく話そうじゃないか」

「いや、丁重にお断り……イテテテッ!?」

「遠慮するな。珍しい客もいる。どうやらお前に会いたがっているようだ」

千冬の言葉から察するにどうやら亮を捕まえているアームを操っている人物のことを言っているらしい

「普通に嫌な予感しかしないんですけど!?」

「その予感は、大正解、とだけ言っておこう。黙ってついて来い」

「イヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!??」

アームに引きずられ、家に入れられる亮の姿はまるで○理の扉に引きずり込まれる某マリモのようだった

「ハロハロ～♪りょーちん久しぶりだね！！」

「やっぱりあんただったか……」

リビングまで連れてこられた亮の目の前に居たのは稀代の天才・篠ノ之束であった

「あれれ～？りょーちんボロボロだよ？」

「あんたのせいだろ！！」

ここに着くまでずっと引きずられていたんだからな！

段差で顔とかに当たってマジで痛かった

「つーか……何であんたがここに居るんだよ」

「ふっ、ふっ～！私はね、ちーちゃんが帰省するという情報をゲットしたので先回りしていたのだ！！」

「私はそのことを誰にも言ってないうえ、家の鍵を開けて私の部屋でゴロゴロしていた」

「警察に突き出した方がよくね？」

「やっても一時間としない間に脱獄しているだろう」

「甘くみちゃあダメだよ、ちーちゃん。私なら十分くらいで脱獄しているね」

なにこのチートさんは……

下手したら世界征服なんて夢じゃないかもしれない
……怖いから考えるのは止めよう

「あと、何ですか。この散らかりようは……」

「むっ……」

「あははっ♪」

俺の指摘に顔をそらす千冬さんに、気にも止めない束さん

さっきも言ったが、俺が連れてこられたのはリビングだ
それなのに辺りはゴミだらけ、缶ビールやそのツマミ
なんだかんだで、二人は仲良く飲み会をしていたようだがこの散らかりようはないだろ……
足場がほとんどないじゃないか……

「一応少しは掃除をしたのだが……」

「フッフッフッ！私の研究所はこれ以上に汚いぞ！！」

まったくもって威張れたもんじゃねえ

「千冬さんが買ってきたそれはなんですか？」

「これは今日の昼食の弁当だが……」

「いい大人がコンビニ弁当で済ませようとしないで下さいよ」

しかも、弁当以外にツマミが入っていやがる

まだ飲むつもりか……

「仕方ないよ、りょーちん。ちーちゃんは料理できないのだから」

「そういう束さんはどうなんですか？」

「私は天才の束さんだよ？料理くらいお茶の子さいさいなのだ」

「それじゃ、なんで料理を作ってあげない……」

「面倒くさいから」

即答かよ……

「そこまで言うのなら、お前は料理が出来るのだろうな？」

「まあ……ある程度なら……」

「……なら作ってみろ。どのくらい美味いか確かめてやる……」

「おおっ～！りょーちんの愛妻料理だね！楽しみ～♪」

なんかいつの間にか俺が昼食を作ることになっている

あと、誰が愛妻だ

「わかりましたよ。適当なもので良いですよね？」

「ああ、任せる」

「私は中国料理のフルコース～♪」

「束さんはいらないってことですね？」

「ぶー、冗談だよ、冗談」

俺はため息を吐きながら料理を作るため、台所に向かった

おっ？ここはちゃんと綺麗にしてある――いや、使ってないだけか……

「おーおー、台所が身についている感じがするね、ちーちゃん」

「ああ……」

昼食ができるのを待っている千冬と束は、亮が台所で料理をしている姿を見て感心していた

（あいつは、勉強・運動・ＩＳだけではなく料理までできるのか……）

亮のスペックの高さに軽い嫉妬をする千冬

ある意味、束と似ているのではないかと思ってしまう

「そういえば、ちーちゃん。今日、誰か来るんじゃなかったっけ？」

「ああ……私の後輩に当たるんだが、ＩＳ学園の教師試験を受けるために勉強を教えて欲しいと言われてな」

「ふーん」

呆気ない返事をした束は亮に視線をやる

「そんなに三崎が気になるか？」

「そーだね～。りょーちんは将来私のお嫁さんになるかもだもんね」

「ラウラみたいなこと言うな、まったく……」

「実際のところちーちゃんはどう思ってるの？りょーちんのこと好き？」

「むっ……私は……」

ピンポーン！

タイミングが良いのか悪いのか呼び鈴が鳴り響いた

「どうやら来たようだ出てくる」

「ぶー、タイミング良すぎだよー」

束の文句をスルーして玄関へと向かった

「束さん。千冬さんはどうしたんですか？」

「ん～？なんか今日、後輩が来てその人と勉強会するんだって」

「勉強会？なんの？」

「ＩＳ学園の教師試験に受かるための」

「……」

ここで亮の研ぎ澄まされた第六感が頭に訴えかけた

しかも危険信号だ

それに、ものすごく心当たりがある

「ちなみに名前って……」

「知らなーい。興味ないもーん」

「そうすか……って、何で隣にいるんですか……」

いつの間にか亮の隣に立つ束
まるでご飯が待ちきれずにきた子供のようだ

「だって暇なんだもーん。おっ、アジの開きに味噌汁、卵焼きもある～」

「あっ、嫌でしたか？」

「ううん～。最近、日本料理とか食べてなかったから懐かしくてねー」

逃亡生活みたいなことをしている束
普段なにを食べているのか気になるところである

「日本料理と言えば、前に箒から肉じゃがを作ってもらいましたよ」

「おう！お袋の味だね！」

「そうですね。束さんもせっかくここまで来たんですから箒に会っていったらどうです？」

「うう～～～ん……私、箒ちゃんに嫌われてるからねー」

「自覚あったんですね」

「ぶー、りょーちんの意地悪。そんな意地悪な口はその口か～？」

束は亮の背後に回り、両手で口を伸ばす

「イハイ、イハイでふ」

「うはっはっはっ！束さんをイジメた罰なのだ～」

楽しそうに亮の口を動かす束

放された亮は料理を続ける

「……深くは聞きませんが、箒は束さんとの関係に悩んでるようでしたよ」

「……そっかぁ～」

いつも通りの素っ気ない返事なのだが、亮はそこに違和感を感じた

「やっぱり姉妹だけあって箒と束さんは似てますね」

「……ほうほう？私は嬉しいけど、箒ちゃんは否定しそうだねー」

「そうっすね。でも、頑固なところとか真っ直ぐなところとか。あと、素直じゃないところもですね」

「……」

珍しく黙って人（亮）の話を聞く束

「箒は幾分かましになったけど、束さんも素直になって箒と話し合ったらどうですか？」

「……はっはっはっ！何を言っているのやら、りょーちん。私は言いたいことは何でも真っ直ぐ素直に述べる束さんだよ？」

「身内以外は……ですよね……」

「……」

亮は食器を出し始める
そんな亮を見ながら束はまた黙り込んでしまった

「ふぅー……」

「うおっ！？」

束がまた亮の背後に回ったかと思いきや、そのままグテーと体重を預けた
その顔は少し悲しそうな表情だった

「ちーちゃんや箒ちゃんが惹かれた理由が少しわかった気がするよ……」

「はい？今、なんて？」

「……何でもないのだー♪ギューッ♪」

束はそのまま亮を抱きしめる

その顔はさっきよりもかなり楽しそうだ

「い、いきなり何するんすか！？」

さすがの亮も不意打ちの連続に困った表情をしている

しかも、背中には柔らかいものが密着している。意識してしまうのは仕方のないことだ

「りょーちん、りょーちん！」

「なんすか？」

「りょーちんはさらに気になる存在となりました！」

「はい？」

何の事やらわからず、亮は変な返事をしてしまう

「りょーちんはホントいけない子だねー♪」

「な、なにが！？」

いけない子と叱りながらも笑顔全開な束に亮はかなり戸惑う

「私のシークレットな部分に飛び込んだのだから責任はちゃんと取ってよね♪」

「意味がわからないのですが！？」

「ふっふっ～～。ちーちゃんの言う通り世の中はそんなに悪くない

のかもね？」

「だからなにを――」

「なにをしているのだ……お前らは……」

「……」

ぞくぞくと、クーラーの効き過ぎかと思うくらいの寒気がした
もちろん、原因はクーラーではない
目の前に現れた千冬だった

「もう一度聞こう。なにをしている」

「あのね、ちーちゃん！私ね、さらにりょーちんの気に入ったのだよ！」

束の話を聞いて千冬はため息を吐いた

「お前というヤツは……どうしてそう問題を増やしていくんだ……」

「いや、何を言っているのかさっぱりわからないのですが……」

「とにかくお前が悪い」

「ええ～……」

あまりの理不尽さにどうしようもなくなってしまう亮
そんな亮にさらに追い討ちがかかる

「お邪魔します」

「！？」

「ん？どうしたのりょーちん？」

ドアから現れた女性を見て亮は驚愕した
束が話しかけてもまったく反応しない。それほど衝撃が走ったのだ

「亮？」

「し、志乃……」

その女性とはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄで知り合ったかけがえのない人だった

第１０１話（後書き）

更新が遅れて申し訳ございませんでした

束がデレ？ました

これからどうしよう・・・・

第１０２話

「亮？」

「し、志乃……」

なんだ、この状況……
なんで志乃がここに居るんだ……

「七尾、三崎のことを知っているのか？」

「はい、ネットゲームで仲良くなってリアルでもたまに会ったりしていました」

「そうか……」

そこでなんで俺を睨みつけるんですか……

「まあいい……三崎、悪いが料理はいらなくなった。これから七尾と試験対策をする」

はっ？
せっかく作ったんだが……

「千冬先輩、私は構いませんから。せっかく亮が作ってくれたのですし……」

「だっ、だったら……し、志乃も食べるか？」

「いいの？」

少し申し訳なさそうな表情をする志乃
俺は一向に構わない

「……少し多めに作ったから全然構わない……」

「そっか。それじゃあ、お言葉に甘えようかな」

「お、おう……」

まさか志乃にもご馳走することになるとは思わなかったが、料理の出来は悪くない……はず……

「……ちっ……」
「……ぶー……」

舌打ちを吐く千冬さんに頬を膨らませ不機嫌オーラを出す束さん
俺はそんな二人に戸惑いながら料理の支度をした

「いただきます」

「い、いただきます……」

志乃の言葉に俺も両手を合わせてそう言う
ダメだ。かなり緊張してしまっている
この前の電話でさえ、少し緊張してしまったのだから仕方ないかもしれない

「いただきます……ちっ……」

「いただきまーす……ぶー……」

千冬さんと束さんは何故かさっきからこの調子で機嫌が悪いつか、束さんは少しふざけてやっている感がある

「むっ……美味い」

「本当、美味しい」

「さすが、りょーちん。愛がこもっているね！！」

「勝手なことを言わないで下さい！！」

「こもってないの？」

「こもってない」

こもっているとしたら、真心だ

「亮って相変わらず料理が上手だね」

「んなことねえって……」

「七尾は前にも亮の料理を？」

「はい。退院祝いで作ってもらったんですよ」

笑顔でそう言っているが、志乃は半年の間寝たきり……意識不明者になっていた
原因はもちろんＡＩＤＡ

「そうか……」

何故か俺を睨みつける千冬さん
最近こんなことばっかりな気がするのは気のせいだろうか……

「ふぅ……」

昼食が食べ終わり、皿洗いをする亮

「ねえ、りょーちん」

そんなときに束が声をかけてくる

その顔は不機嫌そのものだ。原因は千冬が志乃と勉強会をしているからだろう

「なんすか？」

「暇～～何かしようよ～～」

「何かって……何を？」

「うーん……そうだ！探検しようじゃないか！！」

「探検？」

束の提案に興味を持ったのか、皿洗いを中断し目を向ける亮

「ちーちゃんといっくんの家って結構広いじゃん。だから探検してみたら不思議発見できるかもよ？」

束に呆れてなのかため息をつく亮

「束さん。ここはどうみても普通の家じゃないですか……」

洗い終わった亮は手を拭きながら亮は答える

「ですが、悪くありませんね」

イタズラ心に火が着いたのかニヤリと悪い顔で笑う亮

「ふっふ～♪りょーちんも悪よの～」

「天才にはかないませんよ」

悪い顔をした二人は行動に移った

部屋荒しという名の探検を……

「ここは一夏の部屋？」

「その通り！いっくんも男の子だからね。アレなモノが隠してあるかもしれないのだ～♪」

ハキハキとした亮と束

亮に至っては前回の仕返しと考えている

「綺麗に整頓してあんな……」

「いっくんはちーちゃんみたいに真面目だからね～」

「どちらかというと千冬さんは……いや、止めておこう。行けばわかるし……ん？」

結局、なにも一夏の弱みを握るモノはなく部屋を出ようとするが、

亮はある物に目が行った

「これは……」

「箒ちゃんとりょーちんといっくんのスリーショットだね」

箒が真ん中で左右に亮、一夏と並んでいる写真であった

「この前一夏が再会した幼なじみの記念に撮った写真だな……」

大事に写真たてで飾られている所を見ると大事にされていることがわかる

「りょーちん。こっちにアルバムがあるよ。見てみる？」

断る理由がないため、亮はそのアルバムを手にして開いた

「……」

ペラペラと写真を見る亮

「おっ？これはいっくんの修学旅行の写真かな？楽しそうだね。むむっ、これは小学６年の写真だね？ちっちゃい女の子と一緒だけど？誰かな？」

写真を見て様々な反応を見せる束

しかし、亮はあることが気になるのか、ちっちゃい女の子＝凰鈴音だ、というツッコミを入れない

「どうしたの、りょーちん？」

「いや、さ……束さんの写真が一枚もないなって……」

亮の言葉に束は何も変化を見せずいつもの高笑いを始めた

「それは当たり前だなのだよ。私は誰もが欲しがる天才束さんなのだよ？写真という記録を残していたら私の秘密基地とかがバレてしまう可能性があるではないか」

「ということは家にも……家族や箒と一緒に映っている写真は……」

「ない。箒ちゃんの写真なら持ってるけどねー」

「……なんて言うか……寂しくないか……？自分が居たという証がないなんて……」

「べっつにー？私がいた証はＩＳだけでも十分。この先もっと凄いことをして名を残すかもよ～？」

確かにそうかもしれない
だが、そんな証は亮は嫌だった

「それじゃあ今から写真を撮りましょう」

「えっ？いやいや何を言っているのかね？私はそんなのはいらないのだよ」

「束さんはいらなくても、俺には必要です」

「な、なんでかな？」

少し動揺を見せる束
亮は理由を述べた

「俺は……人の顔を覚えるのが苦手だからです」

「はい？」

「名前を覚えても顔が一致しないと意味ないじゃないですか？あーヤバい。次、会うとき『おたくどちら？』って言ってしまうかも」

「なんですとー！？それは困っちゃうよ～～」

明らかに嘘な亮の言葉に束は明らかなオーバーリアクションをする

「ですからほら、写真を撮りましょう！携帯のカメラですけど……」

「撮ろう撮ろう～♪」

携帯のカメラで撮ろうと亮は束に携帯を向けるが……

「せっかくだからりょーちんとのツーショットを撮ろう♪」

「えっ？ちょっ！？」

亮からカメラを奪い取った束は亮の腕に抱きつく

「そ、そんなに抱きつく必要はないのでは！？」

「いやいやいや、これくらいしないとカメラに映らないのだよ、りょーちん」

ムギューと束の柔らかいものが亮の腕にあたる
あたふた慌てる亮を見て束は満足といった顔をしていた

「はい、チーズ♪」

パシャッ

その撮った写真の束は今までで一番の笑顔で映ったものであった

「さあさあ、りょーちん！この部屋が今日一番の不思議発見！」

「ここが……」

思わず息を呑んでしまう亮
その部屋とはもちろん――

「千冬さんの部屋……」

そう、千冬ファンだったら誰でも気になる織斑千冬の部屋
亮は別にファンでもなんでもないが、かなり気になる

「それじゃあ、レッツゴー！！」

束は千冬の部屋をなんの躊躇いもなく入る
幼なじみなのだからおかしくないかもしれないが、亮は別である
でも見たいという欲望が勝ち、恐る恐る入室した

「……」

「……」

「……普通だね……」

「……普通ですね……」

思わずそんな感想を呟く束と亮
千冬の部屋はなんの飾りもなく女性の部屋らしさを感じられない
机にはＩＳの参考書に、一夏とツーショットの写真だけ

「……もっと面白いものが見れると思ったんだが……」

「多分、いっくんが全てやっているからこんな感じになってるんだと思うよ」

「なるほど……」

織斑家の掃除は全て一夏がやっている。真面目な一夏だけに整理整頓は完璧で綺麗にしてある
束や亮が望む面白いものが置いてあることはなかった

「だからって、一夏のやつ真面目にやりすぎ……ん……？」

亮がある場所に目が向く。それは押し入れ
どこか違和感を感じられた

「ねえねえ、りょーち～ん♪」

「なんす――ぶっ！？」

束の声に振り向いてみると亮は口を押さえながら驚愕する

「ほらほら♪これちーちゃんのブ・ラ・ジ・ヤー♪」

「――――っ！？」

束が持っていたのは黒い下着
しかもそれは千冬のものであると言う
亮は直視できず首を思いっきり違う方へと向けた。その際にゴキッと嫌な音がなったがそんなことはどうでも良かった

「ちーちゃん、また大きくなったみたい。ワンサイズ大きくなってるよ」

オオーッと感心しながら千冬の下着を眺める束

「どうでもいいから早くしまってください！！」

「ええー？どうしようかなー♪」

完全に亮の反応を見て楽しんでいる束

「私はこれ以上に大きいのだよ、りょーちん。見てみる？」

「結構です！？」

「りょーちんは下着じゃなくてその中身に興味があるんだね？なるほどなるほど。それじゃあ――――」

「それじゃあ、なんだ？」

「……あらら？」

いきなり聞こえるどこか聞き覚えのある声に束はギギギッと壊れた

機械のように首を動かした

「どうした？答えろ、束。ついでに私の部屋に無断で入ったことと私のし、下着を亮に見せつけている理由も答えろ」

「えっと～～……それじゃあ――――そろそろ帰ろうかなー？って……」

「そうか」

「あ、あれ？どうして私の頭を掴むのかな？かな？」

「決まっているだろ？」

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ！！！！

千冬のアイアンクローが炸裂した

「いたたたたっ！！？？」

「お前を送り出してやるためだ」

「お、お気持ちは大変嬉しいんだけどドドドドッ！？前に喰らったときよりパワーアップしてる～～～！！？？」

どうやら脱け出そうと試みたが失敗に終わったようだ

千冬は束を引きずりながら窓の前へと移動し開けた

「ほら、さっさと帰れ」

「あ～～れ～～～！？」

「……」

まるでゴミを捨てるかのように束を窓から投げる千冬

亮はそんな光景をただ呆然と眺めていることしかできなかった

「三崎……」

「は、はい！？」

ゴゴゴゴッと獲物を狩る目をしている千冬に思わず気をつけをしてしまう亮

「お前も帰れ。今すぐにだ……」

「あの……その……」

「でないとお前も束と同じようにするぞ……」

「わかりました!?」

束のように窓から捨てられるのは嫌である亮は早足でその場から立ち去るのだった

「まったく、あいつらは……」

二人の厄介者を追い出して一人になった千冬はため息をつく

「千冬先輩。さっき亮が慌てて家から出て行っちゃいましたけど、どうかしたのですか?」

「どうやら部屋をあさっていたらしくてな。追い出した」

「そうなんですか。うふふ♪もしかして押入の中、見られちゃいましたか?」

「いや、見られてはいない」

「そうですか。良かったですね」

ニコニコと笑う志乃
どうやら志乃は押入の中身を知っているようだ

「中身はたくさんのぬいぐるみが入っているだけなんですけどね」

「ふん……奴らにそれが知られたらなんて言われるか……」

ガラッと押入を開けるとそこには可愛らしいぬいぐるみが仕舞ってある

「……せっかくの二人きりだ。お前に聞きたいことがある」

「誰からＩＳ学園の教師試験の推薦をもらったか、ですか？」

一気に空気が重くなる
志乃は構わず話を続ける

「確かに普通でしたら推薦なんてもらえる訳がないのはわかっています。書類上では政府の偉い人みたいですが……」

「ならばなぜ……」

「送られてきた手紙に感じたんです。意志を……」

「『意志』？」

「物語は歩き続ける限り終わらない。私はその彼の意志と共に歩きたいと思いました」

「『物語』？『彼の意志』？どういうことだ……」

「さあ、なんでしょう。でも……ＩＳ学園で亮と会えば何かがわかると思います」

「……七尾、お前どうして……」

亮がＩＳ学園にいることを知っているのか、この情報はまだ一般人には知られていない

「私の知り合いが教えてくれたんです。恐らくは推薦状を細工したのも」

「……」

志乃の推測に黙り込む千冬
そんなことが可能なのか、可能だとしてもその知り合いは一体何者なのか、謎は深まるばかりである

「それじゃあ千冬先輩。勉強の続きをしましょう。推薦状をもらっても試験で落ちたら意味がありませんから」

「……ああ……」

確かに志乃の言う通り、全ては試験に合格してからである
志乃と千冬は勉強していたリビングへと戻る

その最中に

「あっ、千冬先輩は篠ノ之博士と亮のどちらに自分の部屋を見て欲しくなかったんですか？」

「なっ、なんだ急に……」

「いえ、あまりにも必死だったようなので気になって」

「どちらもに決まっているだろう！」

「ふーん……」

ぷいっと顔を背ける千冬に志乃はジト目で軽く睨みつけている

「千冬先輩がこれなら学園の生徒はもっとメロメロになっているんだろうな」

「それはどういう意味だ……」

ゴゴゴゴッと黒いオーラを放ちながら志乃を睨みつける千冬

だが、顔色一つ変えずに志乃は笑顔のまま答えた

「私も亮争奪戦に参加しようかな、なんて」

「……それは本気で言っているのか……」

「さあ、どうでしょう？」

立ち止まって聞く千冬の質問に、ふふん♪と微笑みながら志乃はそのまま前に歩き出す
頭を抱える千冬を置いて

おまけ

「……」

現在、ＩＳ学園の寮に帰ってきたばかりの亮なのだが、何故か正座をしていた

「「「「「……」」」」」

五人の修羅が目の前にいるのだから仕方ないと言えば仕方ないのか

もしれない

「亮」

「はい……」

「どうして正座させられているのか理解していらっしゃいますかしら？」

「それがまったく……」

「ふーん……そう……自分の胸に聞いてみたら？」

「いやだからまったくもって身に覚えがねえんだって！！」

亮は必死に主張するが五人はまったく聞こうとしない

「嫁よ、これを見てまだその口が聞けるか？」

そう言うとラウラは亮に何かを突きつける

「携帯？それも箒の……」

「その携帯の画面をよく見てみて」

「……！？」

シャルロットの言う通り画面を見ると亮は目を見開いて驚愕した

「どうして貴様は姉さんと写真を撮っている。しかも、こ、こんな

に密着しながら」

「……」

箒の質問に答えられない亮
それよりもどうして束と撮った写真のデータを箒が持っているのか
が理解出来なかった

「つい、先ほど珍しく姉さんからメールをしてきたのだ。滅多に自分から連絡をとらない姉さんがだ。何かと思い、見たメールに添付されていたのがその画像だ。そして……」

『

はろろーん♪
箒ちゃん、元気にしてるかなー？
私はもちのろん元気さ～（＾－＾）ｖ♪
今日ね、ちーちゃんの家に遊びに行ったんだけど、そこになんとりょーちんが遊びに来たのだよ（≧∇≦）！！
それでりょーちんに愛妻料理を作ってもらったのだ（＝～（）オイシイ♪
その証拠に写真を添付したから見てね！（ｂ＾ー。）♪
それじゃあ箒ちゃんまたね～♪

私の未来の旦那様によろしくね（＾３＾）－☆Ｃｈｕ！！♪
』

「なんじゃそりゃあ！！？？」

束のメールを見て叫ぶ亮

「それはこちらのセリフですわ……」

「一夏の家に勝手に遊びに行っただけでも許されないことなのに……」

「まさか篠ノ之博士を落とすとは……この浮気者め……たっぷりお仕置きをしなければ……」

「そうだね。覚悟は良いかな、亮……？」

「待ってくれ！これには訳が――」

亮は必死に弁解しようとするが

「「「「「問答無用！！」」」」」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああっ！！！！？？？？」

聞いてもらえる筈もなく亮は五人の修羅にお仕置きされるのであった

第１０２話（後書き）

最後はやっぱりこうなったか・・・・って思った読者様申し訳ないです

でも、このお決まりが面白いと自分は思うのですよ

次回はいよいよ、あれだ！！

『あれ』といわれてわからない人は楽しみにお待ちしてください

ではでは

第１０３話（前書き）

やっと更新できました

皆様が（多分）期待していたあれです

喜んでいただいたら幸いです

第１０３話

「あっ！亮さん、到着しましたよ！」

「ああ……」

夏休み終了まで一週間を切った
そんな俺はアトリこと千草と約束した一泊二日の温泉旅行に来ていた

「もう亮さん！ようやく着いたのですからもっと喜びましょうよ！」

「確かに『ようやく』だな」

出発した東京駅から新幹線で二時間
そこから
電車三十分
バス一時間
徒歩二十分

と、かなり遠く、来るだけで疲れてしまった

「で、でも、ここの温泉はかなり有名で疲れを落としてらしいですよ！他にもいろんな効能がある温泉があるとか」

「へえ、それは楽しみだな。んじゃあさっさとその温泉に入るとするか」

「はい♪」

俺と千草は築五十年はあるらしい貫禄のある旅館へと入った
そこで待ち受けていたのは一人の女性。

「いらっしゃいませ。私はここの女将でございます。何名様でしょうか？」

「あの私たち、福引きで一泊二日の旅館券をもらったのですが」

「！……少々お待ち下さい」

ん？
いきなり目を見開いたかと思えば後ろに下がったぞ

「例の客が現れました。作戦通りに……」

「明らかに不穏当な話をしてないか？」

「きっと特別な券だったんですよ！だから用意周到にしようとしているのだと思います」

「トランシーバー片手に客のことを現れたって言っている時点で怪しいだろ！？」

なんだか嫌な予感がする

「失礼いたしました。お部屋へと案内いたします」

そう言った女将の後を俺と千草はついて行く

「外は貫禄ある建物って感じてでしたけど中はとても綺麗なんですね♪」

「はい。ここは元々、忍者屋敷だったものを外見をそのままに中をリフォームいたしました。中には入っていけない場所もありますので気をつけてください」

「おいおい……大丈夫なのか？」

「もちろん、お客様がお通りになられる場所はちゃんと解除・取り壊しされているため大丈夫でございます」

「そうですか、良かったです」

「こちらが、お客様がお泊まりになられるお部屋でございます」

どうやら話している間に着いたようだな

「わあっ♪綺麗♪」

千草が一番に大喜びする。俺も続いてその部屋に驚いた
部屋は二人部屋とは思えないほど広く、和風感あふれる畳
窓の外はあたり一面の山が見渡せる

「いかがでしょうか？この旅館で一番の良い部屋でございます」

「はい、とても綺麗で気に入りました♪」

「ありがとうございます。お客様、お夕食の支度はいつにいたしましょう？」

そういえば旅館が遠いおかげでもうそんな時間なんだな

「先に温泉に入りたいのでその後お願いします。それで良いよな、千草」

「はい、構いません」

「かしこまりました……本部、ターゲットは温泉に入る模様。作戦Bへと移行せよ」

「おいこら！今、明らかにターゲットと言ったよな！？」

しかも作戦Bってなんだよ！？

「気のせいでございます。ではごゆっくり」

そう言って女将は部屋から出て行った

「なんか怪しくないか？」

「そうでしょうか？ほらそんなことより、温泉に行きましょう！！」

相当楽しみだったのか、すでに準備を整えた千草

「わかったわかった。すぐ準備する」

宣言通り、すぐに準備した俺は千草とともに温泉へと向かう

「ここが入口ですね♪」

「ああ……」

「亮さん、まだ疑っているんですか？」

千草の言う通り俺はこの旅館に何かあると疑っている
理由は
・あの女将の対応
・他の従業員の姿を確認出来ていない
・宿泊客が俺と千草以外いない

明らかにおかしい
ここが特殊だからと言えばそれまでだが……

「考えごとは温泉から出た後に考えれば良いじゃないですか！では、私はこちらなので」

「おう……」

そう言って男女別の脱衣所へと入った
まあ、千草の言う通りか
俺もこれまでのことで神経質になっているのかもしれないな

だから、俺も温泉を楽しもう

「ふふ……ふふふ……ふふふふふふふふっ♪」

脱衣所で亮と別れた千草は服を脱ぎながら不気味な笑みを浮かべている

（これはチャンスです！亮さんの言う通り、客が誰もいないのは不思議ですが私にとっては神様がくれた大チャンス！！）

ＩＳ学園に入っていない千草にとって邪魔者がいない今こそが亮にアピールする大チャンス
それを逃さないため、この日が来るまでいろいろと努力してきた

美容室やエステに通ったり、ダイエットのために断食まがいなこともした
極めつけは『彼氏を魅力する方法完全版』を毎日読んだ

準備は万全。さらに――

「この温泉は混浴できる露天風呂がある！そこで――」

「そこで我が嫁に何をするつもりだ、アトリ？」

「……えっ？」

誰もいない筈なのに誰かが千草に話しかけてきた

千草は恐る恐る後ろを振り向いた瞬間

「きゃあああああああああああああああああああああっ！！？？」

千草の悲鳴が脱衣所全体に響きわたった

「ふぅ～……」

完全防音のため千草の悲鳴が聞こえなかったのか、のんびりと温泉に浸かっている亮

「確かにここの温泉は疲れがとれる……」

もはや、完全に疑っていたことを忘れている

「ん？露天風呂、そんなんまであるのか……！！」

ふらふらっと露天風呂に行くためのドアを開けようとしたが、亮はその寸前で止めた

（危ねえ危ねえ。このまま入ったら千草と鉢合わせ、とか誰かが狙ったような展開になっちまう所だったぜ）

亮の危機察知能力はちゃんと正常に働いていたらしく、千草（読者）のもくろみは見破られる

亮は汗をかこうとサウナに向かうことにした

「たく、俺がそう何度も罠に引っかかると思ったら大間違いだっつ

うの」

「そうか。亮も少しは成長したのだな」

「ああ、当然だろ。『箒』」

「……『箒』？」

ダラダラダラダラ

亮の身体から大量の汗が流れ落ちる。これはサウナのせいなのか、それとも居るはずがない筈（水着着用）が自分の隣にいるせいなのか、恐らく後者だろう

「どうした、亮？汗が酷いが」

「そういえば俺、サウナ苦手だったんだわ。先にあがる」

「情けない。このくらいでダウンか？私は『亮とアトリ』が脱衣所で別れた時から入っているというのに」

腕組みをしながら言う筈にそうか、と答え、亮はサウナから出てそのまま水風呂に入る

「ふぅ……」

「……撤退！！」

ザバァンッ！と勢いよく水風呂から飛び出した亮は脱衣所に一直線

「どこにいくのかしら亮さん？」

「逃げられると思ってんの？」

「セシリア！？鈴！？」

しかし、亮の前に立ちふさがったのはセシリアと鈴（水着着用）だった

「くっ……！」

亮はすぐさま回れ右、逃げるために走り出した

（なんでアイツらがここにいるとかは後で考えるとして、今は逃げ切らねえと！！）

捕まったら殺される、亮の第六感がそう告げている

「確か非常口があったはず……」

「行かせないよ、亮！！」

「シャルロット！？お前もか！？」

非常口にはシャルロット（水着着用）が待ち受けていた

「亮、僕たちには何も言わず、アトリと温泉旅行に行くなんて酷いな～……」

「ちぃっ！」

このままでは捕まってしまう
亮は最後の希望のドアへと走り出す
そこは露天風呂の入口。だが、そんなことは関係ない
亮は勢いよくドアを開けた

「よくここまでたどり着いたな、亮」

「……千冬……さん……」

脱出口と思われたそのドアはドアはどうやら魔王（ちふゆ）の部屋への入口だったようだ

「とりあえず露天風呂に入ったらどうだ。その格好では寒いだろう」

「……はい……」

もはや従うしかない亮は露天風呂に入る
こんな状況でなければ気持ち良く入浴できたものだが、残念ながら状況は最悪である

「さて、何か言うことがあるか？」

正座で露天風呂に浸かる亮の回りには千冬・箒・セシリア・鈴・シャルロットが囲い込む

「千草は今、何を？」

「千草ならここだ、我が嫁よ」

ゆっくりと声がした方へと振り向く
もちろん、そこに誰がいるのかはわかっている

「うう～、ほぅは～ん（うう～、亮さ～ん）……」

ラウラと縄でぐるぐる巻きにされた千草（浴衣着用）がいた

「さあ、他に言うことは？」

まるで遺言のように聞いてくる千冬たちに亮はゆっくりと口にした

「みんなが着ている水着……綺麗だな・・・・・・」

そう言った瞬間、亮の意識がブラックアウトした

第１０３話（後書き）

いかがでしたか？

皆様の期待にそえたでしょうか？

第１０４話

「うっ……ここは……」

確か俺は、千草と一泊二日の温泉旅行に出かけて、そしたら何故か待ち伏せしていた千冬さんや箒たちに……

「つうか、ここはどこだ……？」

俺は旅館にいたはずなのに、いつの間にか河原にいる
川の反対側にはお花畑が見える
なんだろう、とても楽しそうだな……

「ハセヲ、行ってはなりません」

「あんたは……」

ふらふらっと川を渡ろうかとした瞬間、白髪の少女が話しかけてきた

「私はアウラ。ハセヲ、そちらに行ってはいけません。二度と戻れなくなってしまいます」

「まさかＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄ全知全能の神『アウラ』にこんなところで会えるとは思わなかったよ。でもさ、よく見たら向こうに死んだはずの爺ちゃんが手を振ってんだよ」

「ハセヲ、ダメです。逝ってはいけません！正気に戻ってください！！」

何をイッテいるンダ。俺ハ正気ダゾ
俺ハ爺チャンに今マデ起コッタヲハナスンダ

「……仕方ありません……最後の手段を使うしかありませんね……」

ジイチャン、イマソッチニイクヨ

「ぴろし3お願いします」

「ぬっふーん！喚ばれて飛び出て鈍足のイーグルマン『ぴろし3』参上！！」

「ハイ？」

川を渡ろうとしたら、あの暑苦しい男『ぴろし3』が現れやがった

「おう〜、なんということだ良き目をした人よ。そんな狂った目をしてしまうとは情けない」

なんだろう、嫌な予感しかしない

「ここは私の熱〜〜〜〜〜〜いヴェーゼで目を覚まさせてやろう」

「い、いや、いい！！もう目が覚めた！正気に戻った」

「さあ今、元に戻してやろう！！ムゥゥ〜〜〜」

「止めろおお

おおおお！！！！！！」

「ぶはっ！？……ん……？」

「亮兄！？良かった、目を覚ました！！」

「いち……か……？」

なんだろう、とてつもなく怖い夢を見たような気がする

「一度、心拍停止になったときはどうしようかと思ったけど目が覚めて良かったよ」

なるほど、俺は死の境地に立たされていたようだ

「つうか、何でお前がここに……？箒たちや千冬さんもいたが……」

「ごめん、亮兄。これは俺のせいなんだ……」

「……そういえば一夏には、旅行に行くことを教えていたな……」

すっかり忘れていた
一応、口止めはしといたんだが

「俺も抵抗はしたんだけどあまりの圧力に抵抗できなかったんだ・・・抵抗した瞬間殺されるような圧力が・・・・・」

「そうか・・・・・」

これは一夏を責めることはできないな
俺、実際に死にかけたし・・・・・

「それで、他の奴らはどこに行ったんだ?」

この部屋にいるのは俺と一夏だけ。女性メンバーがいない

「みんなならーーーー」

「ようやく起きたか」

「千冬さん・・・・・」

話していると千冬さんを始め、他のメンバーも入ってきた

「まったく我々に内緒で旅行などに行くからそうなるのだぞ」

「まったくですわ」

「反省しなさいよね」

「もう少し我が嫁であることを自覚してほしいものだな」

ぐっ、好き勝手言いやがって

「亮さん……せっかくの二人きりが……」

みんなに邪魔されたからなのか、がくりとうなだれる千草

「アトリ、じゃなくて千草。抜け駆けは許さないよ」

「うう～……」

ニコニコ笑うシャルロットだが目が笑っていない

さすがの千草も黙り込んでしまう

とりあえず俺はこいつらに言わなければならんことがある

「俺がここにいることは一夏から聞いたってのは理解した。だが、あそこまでやるか？運良く客がいなかったから良かったものの、他に客がいたらどうするつもりだったんだ」

「その点については大丈夫だ。この旅館を貸し切ったからな」

「……はあ？」

貸し切った？

どういうことだ？

「このわたくし、セシリア・オルコットにかかればこんな旅館貸し切りにすることなど容易いですわ！！さらに従業員も今日だけ、わたくしの使用人達と」

「私が所属する部隊『黒ウサギ』のメンバーだ。ちなみにさっきの女将が副隊長だ」

「そこまでするか、普通！？」

だから客どころか従業員の姿が確認できなかったのか！

つーか、女将がやけに若くて、日本人でない時点で気づくべきだった！

「まあ、いいや」

「良いんですか、亮さん！？」

「仕方ねえだろ。こいつらが旅館を占領しちまったんだから」

「それはそうかもしれないですけど……」

納得いかないのか不満げな表情をする千草

「その代わり、ちゃんともてなしてくれるんだろ？」

「もちろんですわ。オルコット家の使用人たちが全精力でおもてなしいたしますわ」

胸を張って答えるセシリア

これは期待できそうだ

「だそうだ。だから機嫌直せ」

「もぉ～～……わかりました、わかりましたよ！それじゃあ、私、お肉が食べたいです！！」

「うふふっ。牛肉から豚肉、鶏肉はもちろん馬肉や羊肉などなど全てが最高級のものをご用意しておりますわ！」

さすがはセシリアってところか？

まあ、こうなったらとことん楽しむとするか

「あむ！もぐもぐもぐもぐ！いただきます！！」

「あっ！千草！それはアタシの肉よ！！」

「ふーんっ！早い者勝ちです！」

「言ったわね……たあっ！！」

「ああっ！？私の最高級牛肉が！？」

「へっへーん！」

「お二人ともお肉はまだまだたくさんありますから、そんな行儀の

悪いことをしないでいただけませんこと。まったく、はしたない」

「「えいっ！！」」

「ああっ！亮さんからいただいたお肉が！？」

「やっぱりね。そんな大事そうにしていたからもしかしてと思ったのよ」

「セシリアさんって好きなものは最後に食べる方なんですね。でもそれは損する可能性が高いですよ。今みたいに」

「あ、あなたたちは～～……！！」

少し遅めの夕食をとっている亮たち
楽しそうに肉の取り合いをしている千草、セシリア、鈴を見てほっとした表情をしていた

「まったく、あいつらは静かに食事もできんのか……」

「まあまあ、ここは無礼講といこうじゃんか千冬姉」

「たく……おい、三崎」

「はいはい」

亮にコップを突き出す千冬
亮はすぐにビールをそそいで対応する

「三崎、お前も一杯付き合え」

「おいこら。教育者が何を言っていやがる」

「今日は無礼講なのだろ？だから飲め」

「千冬姉、それはさすがに……」

無礼講とはいえ未成年が飲酒をするのはいけないことだ

「固い奴らめ……」

くびっとビールを飲む千冬

「うーん……せっかくこうして集まっていることだし何かゲームをしたいね」

「むっ？それならば良い物があるぞ」

シャルロットに指摘されラウラはトランプを取り出した

「これで何をする？」

「そうだな……この人数なら大富豪をやるか？」

「良いわね。でもただの大富豪じゃつまらないわ」

「と言うと？」

「大富豪が大貧民に一つ命令ができるなんてどうかしら？」

「へえ、面白そうじゃん。俺はやるぞ」

鈴の提案に一夏は賛成する

「俺はいいや。疲れてるし」

「あら?亮さん、もしかして負けるのが怖いのかしら?」

「……んだと?」

セシリアの言葉に亮はこめかみを動かす

「まあ、仕方ないだろう。負けて疲れを言い訳にされても困るからな」

「あ〝ぁ〝……?」

「セシリア、ラウラ言い過ぎだよ。亮も気にしないでね。負けるのが目に見えているから逃げるのも一つの手なんだから」

ぶちっ

「上等じゃねえか！俺は負けるのが怖くなんてねえし、負ける気も逃げる気もねえ！！やってやんよ！！」

「「「「「「「にやり」」」」」」」

亮は気づいていなかった
まんまと彼女たちの罠にハマってしまったことに

「……」

おかしい、どうしてこうなった？

「はい、あがり。えっと大富豪は誰だっけ？」

「アタシよ。大貧民はもちろん……」

鈴が俺を指差しながらこう言った

「亮、あんたよ。それも五回目のね」

「ぐっ……」

そう、俺は五回も大貧民つまり負けている
今、この大富豪は七回やっているが半分以上が俺なんだ

一回目は一夏が大貧民で箒が大富豪だった
そのときの命令は肩を揉めと簡単なものだった

二回目は俺が大貧民でシャルロットが大富豪だった
命令はご飯を食べさせるとまあ、まだ許せる内容だ

問題はその後だった
三回目、千冬さんが大富豪で千草が大貧民だった

「千草……だったな？」

「は、はい！」

「そう緊張するな。なにそんな無理難題な命令ではない。ただ――
――をすればいい」

「は、はあ……」

と、こんな会話しただけで次のゲームへと移行したのだが……

「むっ？この飲み物なかなか美味いな」

「本当だ美味しいね」

「……」

俺はそのとき大富豪になりたいということだけに頭がいっぱいで回りの異変に気づかなかった

（よし、この手札なら勝てる）

そう確信していた

だが……

「はい！大貧民は亮に決定！」

「……」

見事に負けてしまった

「ちっ……誰が大富豪だ……？」

「私……だ……」

大富豪はラウラなのだが、少し様子がおかしい

「ラウラ？」

「それでは……命令だが……」

「お、おう……」

「とりあえず……そこに座れ……」

いや、最初から座っているんだが、とツッコミを入れる前にラウラが俺の目の前にいた

「んしょ……」

「なっ！？」

いきなり俺の上に座るラウラ

「ら、ラウラ？」

「今から命令を言うぞ」

どうやらまだ罰ゲームは終わっていないみたいだ

ラウラのやつ、一体なにをするつもりだ

「ぎゅ、ギュッと……抱きしめろ……」

「この態勢からか？」

「う、うむ……」

恥ずかしそうに頷くラウラ。恥ずかしいならそんなお願いするな！

「亮、罰ゲームなのだから早くやれ……」

「そうよ……早くやって終わらせなさい……」

わかったから睨みつけるな

「それじゃあ……」

「んっ……ん……」

気持ち良いのか目を細めるラウラ

俺は逆に緊張してガチガチである

なんて言うかラウラってかなり軽いんだな。それに銀髪がふわふわしていて柔らかいし、良い匂いがする。まるで猫みたいだなんだか心が癒やされるような……

「……亮さん？」

「はっ！？」

殺気を感じた俺はすぐに正気を取り戻す

「そろそろよろしいのではありませんか、亮さん？」

「あ、ああ、そうだな」

俺はすぐにラウラを降ろす。ラウラは残念そうな顔をしていたが、俺の命が関わるからスルー

俺はそのときに気づくべきだったのかもしれないあいつらに起こっていた異変に

ゲームは続きまさかの四連敗
大富豪になったのは千草、セシリア、そして鈴

罰ゲームである命令はというと

千草は、頭を撫でる
セシリアは、膝枕

といった感じである
そして次は鈴が俺に命令をするのだが……

「脱ぎなさい」

「はっ？」

「だから服を脱ぎなさい」

なんて事を命令しやがるんだ、こいつは！？

「お、おい……冗談……だよな？」

「あら？アタシが冗談を言うと思う？」

ヤバい目が本気だ

「ん？」

鈴の顔がほんのり赤みがかっている

「なにシてんの？早く脱ギナさいヨ」

鈴がコップに注がれた飲み物を一気に飲む

「……まさか……」

俺は鈴が飲んでいたコップを奪い取り匂いを嗅いでみた。臭い！？

「これ酒じゃねえか！！」

もしかしてさっきのラウラの奴も酔っ払って……

「気づいたか、亮」

「千冬さん……あんたの仕業か……」

でも、そんな動きは……

「指示を出したのは私だが、やったのは私ではない」

指示だけ……？

まさか！？

「千草か！？」

「ほえ？なんへすか～？」

しかもすでに出来上がってるし……

「一体、千草にどんな命令を……」

「簡単なことだ。この瓶に入っている水を全員のコップに注げ、とな」

だから、みんなの様子がおかしかったのか……

「でも一夏は平気そうだな」

「俺はゲームに夢中になって飲まなかったからな」

俺と一緒だ

まだ俺の味方がいる

「亮、さっさと服を脱ぎなさい！」

「ちっ……」

いいだろう。脱いでやろうじゃねえか

「ちょっと、亮！靴下を脱ぐなんて……」

「んだよ？靴下も服の一部だぜ？」

「ぐぐぐ……良いわ……次も勝って脱がせればいいんだから……」

鈴のやつ本気だ
だが、俺も黙ってやられる訳にはいかねえ
逆襲だ……

（一夏、お前も協力してくれ）

（ああ、任せてくれ）

見てやがれ……
負けるのはてめえらだ！！

「ほら次は亮が脱ぐ番だよ」

「早くお脱ぎ下さいな」

「……」

「嫁よ、帯だけとは男らしくないぞ」

「一夏、次はお前だから覚悟しておけよ」

「「……」」

ダメだ

一夏と協力している筈なのに全然相手にならない

しかも、負けるのが俺、一夏、俺、一夏と交互になっている

（おい、どうなってんだよ亮兄）

（奴らは俺たちが思っている以上に上手だってことだろ）

（だったらどうすんだよ！このままじゃ大変なことになるぞ）

（わかってる。こっちも手段を選んでられねえ……やるぞ、一夏！）

（おう！）

俺と一夏は気を取り直して大富豪に挑んだ

その結果――

「「……」」

「ほらぁ、亮……はひゃく脱ぎなひゃいよ……」

「一夏……も、脱げ。男らひくなひぞ……ひっく……」

完敗だった。俺と一夏は残り下着一枚と言うところでの敗北
しかも、どんな手を使っても酔っ払い共には通用せず、ことごとく
見破られてしまった

（それにこいつら、酔っ払えば酔っ払うほど強くなりやがる……）

（亮兄……）

ガタガタと震えながら俺に視線を送る一夏
わかってる。俺も同じ気持ちだ

「「うおおおおおおっ！！」」

ガシャーン！と俺と一夏は窓を蹴破り脱出
扉はセシリアの使用人、ラウラの部下達がいるからすぐに捕まる恐れがある
だから、外が断崖絶壁と思われる窓へと脱出したんだ

「来い、スケィス！」

「白式！！」

普通ならそのまま崖へと落ちるだけなのだが、俺達にはＩＳがある

問題があるとしたら一つだけ――

「「「「「待てぇぇぇえええええええええええ！！」」」」」

あの酔っ払い共（専用機持ち）からどう逃げ切るかだ

現在は真夜中で月が綺麗でよく見える

結局、亮と一夏は逃げ切ることに成功……というのも最終的には
酔いつぶれて寝てしまったのだが
その後、亮、一夏の二人で追っかけてきた五人の専用機持ちの女子
たちを布団へと寝かして終わった

だが、そんな中一人だけ起きていた

「欅様、お願いがあります！！」

それは千草だった
しかも、どうやらＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄにログインしているようだ

「お願いします！私に……」

千草はコントローラーをぎゅっと握りしめとんでもないことを言い
出した

「私にＩＳを……守るための力を下さい！！」

第１０４話（後書き）

はい！！ようやく更新できました

今回はいつも以上に長くなってしまいましたが楽しんでいただけたでしょうか？

まあ、そんなことより千草の専用機フラグが立ってしましました

もともと千草（アトリ）は傍観者ってことにしていたのですが、読者の皆様の要望が多数来ていたためやってみようかと思い書きました

ああ、亮の女難もそうだけど、これからどうやって参入させるかとかＩＳをどうするとかの設定に大変になりそうです

ではまた次回お会いしましょう

第１０５話（前書き）

久しぶりです

楽しんでもらえたら嬉しいです

それと後書きにあれを載せます

第１０５話

「でやあああああっ！！」

ガギィンッ！と鋭く重い金属音を響かせ、一夏と鈴は刃を交えて対峙する

九月三日

二学期初の実践訓練は、一組二組の合同で始まった

「くっ……！」

「逃がさないわよ、一夏！」

クラス代表者同士ということではじまったバトルは、最初こそ一夏が押していたものの次第に鈴が巻き返しはじめていた

「やっぱ、第二形態になった白式の燃費の悪さが出たな」

一夏と鈴の実践訓練を観戦している亮がそう呟いた

「最初にシールドを使いすぎたわね！」

「まだまだぁっ！」

そう言って刀を振るう一夏だったが、その《雪片弐型》もすでに『零落白夜』の輝きはなく、通常の物理刀になっている

「無駄よ！この甲龍は燃費と安定性を第一に設計された実戦モデル

なんだから！――――衝撃砲！」

ズドドンッ、と連射性の高い砲撃を近距離で受け、距離が開く
そしてその瞬間を見逃さないように、鈴は連結状態の《双天牙月》
を投擲した

「ぐうっ！」

一夏は重い斬撃を受けきったものの、視界から鈴を見失ってしまう
すぐにＩＳハイパーセンサーの位置情報補足がやってくるが、しか
し遅かった

「たあああっ！！」

一夏の真下、足首を掴んだ鈴はそのまま力任せに地面へと一夏を投
げ飛ばす
眩しい陽光に一瞬目を細める一夏。その視界に影が落ちた

「もらい！」

「！？」

逆さまの格好のまま、鈴は衝撃砲の連射を浴びせる
それが十発ほど直撃したあたりで、試合終了を告げるアラームが鳴
り響いた
――――言うまでもなく、一夏の敗北である

「これであたしの二連勝ね。ほれほれ、なんか奢りなさいよ」

「ぐう……」

いつものメンバーで昼食をとる俺達
一夏は実践訓練で前半戦、後半戦ともに負けたため鈴に責められている

「ふぅ……」

「どうしたの、亮？ため息なんてついて……」

ため息を吐いていた俺を心配してか話しかけてきたシャルロット

「いや……織斑先生に言われたことにちょっとな……」

「ああ……あれか……」

俺の言葉に表情が険しくなる箒

「まさかスケィスの使用は禁止だなんて……」

そう、俺は織斑先生からスケィス使用をＡＩＤＡが現れない限り禁止。使用するのは訓練機のみとクラスみんなの前で言われたのだ

「まあ、実践訓練の時はわかるが。自主トレの時は使ってもいいじゃねえか……」

「うむ。だが、それも嫁が怪我をしないようにという教官の優しさなのだぞ」

それはそうなんだろうけどさ……

「せめてお前ら専用機持ちと訓練するときくらいはスケィスを使わせて欲しいよ、マジで」

「確かにまたＡＩＤＡとか現れて、操作できなかった、じゃどうしようもないからな」

「でも、一応訓練機でもあんまり変わらないんでしょ？」

「まあな。でも細かい所は全然違うんだ」

「そう。だったら後で織斑先生に聞いてみたら？せめて私たち専用機持ちとの時だけはスケィス使用を許可して欲しいって」

「そうだな」

そうと決まればさっさと飯を食べてしまおう

「それにしてもなんで俺の白夜はパワーアップしたのに負けるんだ……」

さっきの俺と同じようにため息をつく一夏

「だから、燃費悪すぎなのよ。アンタの機体はただでさえシールドエネルギーを削る仕様の武器なのに、それが二つに増えたんだからなおさらでしょ」

「うーん……」

それだけではなく、白式の背部ウイングスラスターが大型化してしまったせいでエネルギーを大量に使用してしまっているせいもある

「それに近距離と遠距離戦闘の即時切り替え。基本戦略の組み立て直し。それに苦手の射撃訓練の追加、新装備の経験訓練……やることといっぱいだな」

「だあぁっ！」

頭を抱えて唸る一夏。まあそれも当然だろうな

「まあその問題を解決させる一つは箒の紅椿なんだろ」

「それは――――」

「そ、その通りだ！そんな問題は私と組めば解決だな！」

どどん、と腕組みで啖呵を切ったのは箒だ

箒の専用機『紅椿』のワンオフ・アビリティー『絢爛舞踏（けんらんぶとう）』は一夏の専用機『零落白夜』とはまったく逆――――つまり、最小のエネルギーを増大させる性質を持つ

まあ、俺は実際に見てはいないからわからねえが、それはかなり便利ではある。だけどそれが白式にしかできないのが痛い

「そういえば、亮さんのスケィスはエネルギーとかはどうしていますの？」

「ん？いや、スケィスにはエネルギーとかそういうものはないな」

「え？そうなの？」

全員が驚いた表情を見せる。まあ、確かにそうなる気持ちはわかる

「強いていうならスケィスの起動に必要なのは『精神エネルギー』だろうな」

「精神エネルギー？」

「俺が気絶したり、戦意喪失するとスケィスは消滅するんだ」

「へえ。その二つをしない限りは消えないのか。それは羨ましい……」

本当に羨ましそうにする一夏に俺はため息をつく

「その分、シールドエネルギーはなし。痛みは直接操縦者に。下手したら死ぬ可能性がある……そんな危険しかないものが欲しいならくれてやりたいぜ」

「うっ……」

「それじゃあ、この中で誰のＩＳが相性が良いんだろ？」

シャルロットがふとそんなことを聞いてくる。そんなことは考えた

ことなかったな

「何を難しそうな顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め。私のシュヴァルツェア・レゲーンとの相性もいいしな」

「ざーんねん。亮はあたしと組むの。甲龍は近接も中距離もこなすから、スケィスと相性いいのよ」

「な、何を勝手な……！？ゴホン！それならこのわたくし、セシリア・オルコットも遠距離型として立候補しますわ」

「僕も立候補するよ。近・中・遠どこでもできるからいろいろとサポートできるし」

次々と俺とのペアに立候補してきていた

「んー……。でもなあ、別に最近ペア参加のトーナメントとかないしなぁ」

「つか、今はスケィス使用を禁止されてっから組むとしても打鉄だろうな」

「あんたなら訓練機でも代表候補生くらいの実力はできるでしょう」

「アホか。どうやってもお前ら専用機持ちには勝てねえよ」

「だが、セシリアには勝っているだろう」

「うっ……」

箒の言葉に胸が痛くなるセシリア

「あれは不意を突いただけだ。今度やったら勝てる気がしねえよ」

「それじゃあ、スケィスが使えるとして組むなら誰と組みたいのよ？」

鈴の質問に一夏以外の全員が俺を睨んでくる。これは下手に答えたらやばそうだ

「一夏の白式かな」

そう答えたら一夏以外の全員からコップを投げつけられた

「たく……」

箒達に水をかけられた俺はすぐに部屋へと帰り着替え、今はロッカールームへと急ぐ

「つうか、ここは無駄に広いんだよな……」

まあ、そんな文句を今言っても仕方のないこと。だから急いでロッ

カールームに向かおうとしたのだが――――

「だあああぁっ！！なんでここは無駄に広いのよ！！！！」

さっきの俺の文句を大声で言っている女子を見つけた

「もう……体育館ってどこにあんのさ……」

どうやら道に迷っているようだ

っておかしくね？あいつの着ている制服のリボン。あれは二年生のリボンだ。二年生が道に迷うか普通？

（まあいいか。俺にはどうでもいい――――）

「あっ！そこのあんた！」

「……」

ぐずぐずしていたら呼び止められてしまった

「ねえねえ、ちょっと道を――――ってあんたは！？」

「ん？……あっ！」

俺を呼び止めやがった女子を見ると見覚えのある奴だった

「あんたはこの前デパートであった人じゃん！こんな所でも会うなんて奇遇だな！」

「ああ……」

「いやぁ、こんな所で……ん？」

どうやらこの女子は一番最初に思いつくべき疑問に気づいたようだ

「な、なんであんたがこのＩＳ学園にいんのよ？！あっ、もしかして――――」

「俺は織斑一夏じゃないからな」

「――――えっ？違うの？」

「残念ながら」

つかちゃんとニュース見てんのか？顔写真映ってたじゃねえか

「それじゃあ、あんたは？」

「……一応、ＩＳを動かした二人目の男だ。非公式だけどな」

「ええっ！？そうなの！？」

かなり驚いてやがるな。一応、このＩＳ学園の人なら誰でも知っていると思ってたんだが

「いや、あたしは二学期から転入してきたんだ。まさか二人目の男がいたなんて……」

「まあその気持ちはわかるが、絶対に外の奴らにこのことを言うな

よ。一応、俺の存在は秘密にされてんだからな」

「うん！わかったよ、誰にも言わない」

「んじゃ、俺はこれで――――」

「待ちなさいよ」

話の流れで逃げようとしたがそう簡単にはいかないようだ

「私今、道に迷って困ってんのよ。だから案内して欲しいんだけど……」

「……わあーたよ。だが、俺も急いでんだ。さっさと行くぞ」

「うん！」

「……遅刻の言い訳は以上か？」

腕組みをしながら一夏を睨みつける千冬

遅刻した一夏を叱っているようだ

「いや、あの……あのですね？だから、見知らぬ女生徒が――――」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ――――」

一夏の主張がまったく通らない。そんなありさまを違う場所でこっそり見ている男がいた

（一夏のやつめっちゃ怒られてやがんな……）

それはＩＳスーツに着替えた亮だった

一夏が怒られているのを見て出るのを躊躇っている亮。こっそり合流しようともしたが、相手は千冬なためそう簡単にはいかない

（つか、俺はそんな怒られるようなことしてねえよな？）

遅刻した理由は迷子の転入生を送ってあげたから。これは逆に良いことなのだから怒られることはない筈である

（なら、逆に堂々と行ってやる！！）

そう決意した亮は堂々と千冬の前へと現れた

「おっ？もう一人の遅刻者（バカ）がやってきたな」

「織斑先生、遅刻してすみませんでした」

ガバッと頭を下げる亮

「それで、貴様はこの一夏（バカ）みたいな言い訳があるか？」

「遅刻した理由は、迷子になった女生徒を案内してたんです」

「では、その迷子の生徒の名前を言ってみろ」

「二年三組『倉本智香』。二学期に転入してきた生徒です。織斑先生なら知ってますよね」

「むっ……」

自信満々に答える亮を見て千冬は嘘を吐いていないことを理解する

「……わかった。それならばよしとしよう……」

「ありがとうございます」

心の中でガッツポーズをした亮は列に入っていった

「亮、どうして遅刻なんてしたの？」

隣にいたシャルロットがそう訪ねてくる。亮は素直にあったことを話した

「ふーん……転入生ねえ……」

「ああ、それにシャルロットもあったことがある奴だ。ほら、デパートで」

「あっ！あの財布の人……」

思い出したのか、その瞬間険しい表情に変わる。わからない人は読み返してみよう

「ああ、まさかまた会えるとは思っていなかったが……」

「そう……良かったね……」

にこりと笑うシャルロットだが、その目はまったく笑っていない

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしろ。的はそこの馬鹿者（一夏）で構わん」

「……」

一夏は千冬に呼ばれたシャルロットに視線を送る

そんな酷いことをシャルロットがする筈がない、と一抹の期待を持っていた

にこっ、と極上の笑みが帰ってきた

だが、シャルロットの笑みは慈愛の女神のそれではなく――――

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

無慈悲な天使のそれだった
ふわりと空中へと進み出るシャルロット。その手に光の粒子が集まり、銃器を構成していく

「あ、あの、シャル……ロット、さん？」

「なにかな、織斑くん？」

額に血管マークが見えるシャルロット。一夏は何故シャルロットが怒っているのか理解できなかった

言えることはただひとつ――――

「はじめるよ、リヴァイヴ」

「ま、待っ――――ぎゃあああ！？」

タイミングが悪かった、ただそれだけである

オマケ

「ほら、ここが体育館だ」

「わあっ！ホントだ！」

結局、最後の最後まで案内された亮。遅刻確定したのに慌てていないのは諦めたからである

「財布の事といい、迷惑かけてホントにごめん。この埋め合わせは必ずするからさ」

「んなの気にすんなよ。大したことしてねえし」

「あたしは受けた恩は必ず返す。なんたって――――」

「『情の厚い女だから』か？」

「……おう！」

ニカッと太陽のように笑う女生徒

「そういえば、自己紹介がまだだったね。あたしは二年三組『倉本智香』。よろしくね」

「俺は三崎亮。それじゃあな」

名前だけ言って走り去る亮。そんな亮の後ろ姿を見送る智香

「三崎亮か……ん……？」

名前を復唱したところで智香はあることに気づいた

「三崎亮……三崎亮……まさか！？」

智香は自分の携帯を取り出してアドレス帳を確認した

アドレス帳

……

……

ハセヲ（三崎亮）

……

……

「は、ハセヲ？……いや、まさかね……」

女の勘ってやつなのか、亮＝ハセヲという方程式を当てはめたのだが、さすがにそれはないと自分に言い聞かせ、智香は体育館へと向かうのであった

第１０５話（後書き）

やっと揺光こと倉本智香を出すことができました

何話ぶりかな？

自分でもよくわかりません

さて前書きにも言ってましたがこれを載せます

＞ｉ２９９３１―１９２２＜

どうでしょうか、亮の専用機は？

ぶっちゃけこれが限界です

それにこれからは千草の専用機も考えないといけませんし

わあ・・・・大変だ・・・・・

でもまあ、頑張りますので応援よろしくお願いいたします！！

第１０６話

翌日。ＳＨＲと一限目の半分を使っての全校集会が行われた
内容は、今月中程にある学園祭についてだ

（たくっ……うるさくて寝ることもできねえじゃねえか……）

正直、学園祭なんて女子に任せていればいいと俺は思っているんだが

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

静かに告げたのは生徒会役員の一人の声で、ざわつきがさーっと引き潮のように消えていく

「やあみんな。おはよう」

「！？」

「？」

後ろにいる一夏が驚きの表情を見せる
壇上で挨拶をしている女子。恐らくあいつが原因だろう

（ということは一夏が遅刻した原因はあいつって訳か……）

「ふふっ」

いきなり笑みを浮かべる生徒会長

それと同時に一夏が目をそらす

（何だろうな。あいつには関わっちゃいけない気がする）

そんなことを思いながら生徒会長の言葉に耳を傾ける

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は『更識楯無（さらしきたてなし）』。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと微笑みを浮かべて言う生徒会長。回りから熱っぽいため息が漏れている

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

閉じた扇子を慣れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった

「名付けて、『各部対抗織斑一夏・三崎亮争奪戦』！」

ぱんっ！と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。それに合わせて、ディスプレイには一夏と俺の写真がデカデカと映し出された

「え……」

「「「ええええええええええええええええええええええ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！？」」」

割れんばかりの叫び声に、ホールが揺れた

後ろの一夏はぽかんとしている。俺は頭痛がして頭を押さえているよつか、他の女子の視線が一斉に俺と一夏へと集まってきてかなり怖い

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い――――」

びしっ、と扇子で俺と一夏を指す生徒会長

「織斑一夏を一位、三崎亮を二位の部活動に強制入部させましょう！」

再度、雄叫びが上がる

「うおおおおおっ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる……やぁぁぁってやるわ！」

「今日からすぐに準備はじめるわよ！秋期大会？ほっとけ、あんなん！」

回りの女子がさらにうるさくなっていく

「つか、俺はそんなの了承した覚えがないんだが……」

「俺も……」

俺と一夏が生徒会長に目をやると、

「あはっ♪」

ウインクを返された

「よし……あれはぶっ殺していいってサインだよな、一夏？」

「落ち着いて、亮兄」

指の骨をならす俺を止める一夏

いくら生徒会長だからってこんな横暴を許していいのか？良くないに決まっている

だが――――

「よしよしよしっ、盛り上がってきたぁぁ！」

「今日の放課後から集会するわよ！意見の出し合いで多数決取るから！」

「最高で一位、最低でも二位よ！」

一度火が付いた女子の群は止まらない

かくして初耳&未承諾のまま、一夏と俺の争奪戦が始まったのだった

同日、教室にて放課後の特別ＨＲ。今はクラスごとの出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がっていた

「えーと……」

クラス代表として、意見をまとめる一夏

だが、その顔はかなり引きつっている

（内容が『一夏と亮のホストクラブ』『一夏と亮とツイスター』『

一夏と亮とポッキー遊び』『一夏と亮と王様ゲーム』……くだらねえ……）

「却下」

えええええええー！！と大音量サラウンドでブーイングが響く。まあ、当然の結果だ

「あ、アホか！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏と三崎亮は共有財産である」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

誰が救世主だ。たく、こんなんで客が来るとは思えんが……

一夏がキョロキョロと視線を動かし助けを求めているが千冬さんはいない

「時間がかかりそうだから、私は職員室に戻る。あとで結果報告に来い」

相変わらずの千冬さんだな……

「山田先生、ダメですよね？こういうおかしな企画は」

「えっ！？わ、私に降るんですか！？」

おいおい、困ったときの副担任だろ？

「え、えーと……うーん、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ……？」

やや頬を赤らめながら言う副担任・山田真耶先生。どうやら俺たちに味方はいないようだ。頑張れ一夏。君が最後の希望だ

「って、亮兄はなんで参加しないで寝てるのさ！！」

しまった。寝ていたのがバレた

「頑張れ、代表。お前ならできる」

「くっ、完全に人任せだ……誰か、もっと普通な意見がないか！」

「メイド喫茶はどうだ？」

意外や意外

意見を挙げてきたのはラウラだった

クラスの全員がぽかんとしている

「客受けはいいだろう。それに飲食店は経費の回収が行える確か、招待券制で外部からも入れるのだろう?それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

(なるほど。伊達や酔狂で言った訳ではなくちゃんと狙いがあったわけだな)

「え、えーと……みんなはどう思う?」

「いいんじゃないかな?亮と一夏には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよね」

そう言ったのはシャルロットだった。未だに呆然としていた女子たちにその言葉がヒットする

「織斑君と三崎君、執事!いい!」

「それでそれで!」

「メイド服はどうする!?私、演劇部衣装係だから縫えるけど!」

一気に盛り上がりを見せるクラス女子一同

(亮兄はどう思う?)

(別に良いんじゃねえか?変わった衣装の喫茶店だと思えばよ。ちなみに俺は厨房のみで)

(ちょっと待て!それは面倒事を全部俺に押し付けると!?)

そんな話を一夏と話しているとラウラが再び口を開いた

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

え？　と全員がまた目を丸くする中、ハッと気がついて咳払いをするラウラ

「――――ごほん。シャルロットが、な」

そこでいきなりシャルロットに話を振るラウラ。わずかに顔を赤らめていることから、注目されたのが照れくさかっただろう
逆にいきなり振られたシャルロットは困った顔をするばかりだ

「え、えっと、ラウラ？それって、先月の……？」

「うむ」

「先月……ああ、あのとき――――」

「り、亮、ストップ！？」

つい、口に出てしまった俺を大声で止めてくるシャルロット
そういえば、あのときの話はみんなに内緒にしてほしいと頼まれたっけか

「なになに？あのシャルロットさんが大声で……」

「しかも、先月って夏休みだから……」

「もしかしてそのときにメイド服と執事服を使った――――」

何か怪しい話をしているがスルーしよう。慌てたら逆効果だし

「あ、えっと、その、別に変な意味はなくってその……」

顔を真っ赤にして言い訳を言おうとするが、言葉が出ずそのまま座り込んでしまった

バカだな。これじゃ逆効果なのは目に見えているじゃないか。この後、女子一同から質問責めは確実だな

「亮さん。『先月』にシャルロットさんとラウラさんの三人『だけ』で何をしていらしたか詳しくお話しを聞かせてもらいますわ」

俺は俺で質問責めにあうことになりそうだからお互い様だよな？

第１０６話（後書き）

皆さん、お久しぶりです

就活やらなんやらで更新が遅れてしまいました

すみません

第１０７話

「ふ、はわ～っ……眠い……」

欠伸をしながら寮へと向かう亮

いつもなら一夏かいつものメンバーの誰かがいるのだが、一夏は千冬にクラス会議の報告、他は部活動の作戦会議らしい

（にしても、あの生徒会長は一体何を考えてやがる……）

亮は全校集会のときに生徒会長楯無が宣言していたことを考えていた

（いくら盛り上げるためとはいえ、本人の許可無しに勝手に進めやがって……）

考え始めるとどんどん怒りが込みあがってくる

（でも、まあ、ただ部活動に入れられるだけだし。適当に誤魔化して帰れば何とでもなるか……）

しかし、冷静に対処法を考え、怒りを投げ捨てた亮は足を進める

「いやー、あんたも大変だね、亮」

「倉本……」

「やっ！昨日ぶり、だね」

後ろから話しかけられ振り向くとそこには倉本智香がいた

「それと、アタシのことは智香で良いよ。アタシと亮の仲だからな」

「どんな仲だっつうの……」

「まあまあ。一緒に帰ってもいいかい？」

「ああ」

「へへっ、ありがと」

嬉しそうな顔をして智香は亮の隣へと移動する

「それで俺の何が大変だって？」

「今日の全校集会のことだよ。みんなの賞品扱いじゃん」

「まあな」

「まあな、って他に何か言うこととかないの？」

「ＩＳ学園（ここ）に来たときからそんな似たような（物珍しい）目で見られてたから慣れた」

「そ、そうなんだ……」

遠い目をして言う亮を見て苦労していたんだな、と察する智香

「智香の方はどうなんだよ。クラスに馴染めてんのか？」

「あ、うん！みんな良い人ばっかりだよ。特に楯無さんが良くしてくれてるよ」

「『楯無』……ってまさか……」

「うん、生徒会長だよ。あの人は本当にに面白い人だよね」

その言葉に亮は全く賛同できない亮。その生徒会長のせいで面倒なことになっているのだから当然である

「まあ、いいや。お前は何か部活動に入って争奪戦に参加したりなんてするのか？」

「うん！面白そうだしね！もう何部に入るか決めてあるんだ」

面白そうなことには首を突っ込む性格なのだろうか、行動が早い

「……何部に入るんだ？」

「三国志部だよ」

「……は？」

「三国志部」

「悪いがもう一回言ってくれ……」

「三・国・志・部！！」

「……」

そんな部活動があったのか、一体どんな活動するんだよなど色んな疑問が思い浮かんだが智香の楽しそうな顔を見て言う気も失せた

「実は天文部とどちらにしようかと迷ったんだよね」

「いや、普通にそっちだろ！どんだけ三国志が好きなんだよ！」

今まで溜まっていたツッコミのダムが崩れツッコミを入れてしまう亮

「つか、俺はてっきり運動部だと思ってた」

「あー、それはよく言われたよ。運動神経が良いからうちの部に入らないかって」

「ふーん……」

ガシャーンッ！

「な、なんだ!?」

いきなり割れた音が響きわたり、見てみると何故かガラスが割れていた

「うーん……もしかすると楯無さんかもしれないね」

割れたガラスを見ても動揺せず冷静に状況判断している智香

「楯無?生徒会長がどうしたんだよ?」

「まあ、詳しくは走りながら教えてあげるからあそこに行ってみよう」

「えっ!?あっ、おい!」

窓が割れた場所へと走り出す智香を追いかける亮であった

「楯無さん、頑張ってねー！」

「おー！ありがとう、智香！」

「……」

えーと、現在の状況を説明するとだな。場所は畳道場、その中央で向かい合っているのは袴を着た一夏と生徒会長

なんで、こんなことになっているかと言うと

生徒会長が一夏、そして智香と一緒に来てしまった俺に全校集会の件（争奪戦）について説明

一夏と俺が部活動に入らないことでの苦情が原因らしい

←

その交換条件として、一夏にだけこれから学園祭の間まで生徒会長が特別に指導する、と言い出す生徒会長

俺はこのとき自分が入っていないことにかなり安心した

←

もちろん、一夏は断る。しかし、生徒会長はしつこく言ってくる

←

一夏がなぜそんなにしつこくしてくる理由を問う

←

「キミが弱いからだよ」とさらりと言う生徒会長。明らかな挑発に
一夏は反論

←

「ううん、弱いよ。無茶苦茶弱い。だから、ちょっとでもマシにな
るように私が鍛えてあげようというお話」と生徒会長
俺と智香は平静でそこまで話す生徒会長を見て思わず苦笑してしまう

←

「じゃあ、勝負しましょう。俺が負けたら従います」と一夏
完全に生徒会長の挑発にのってしまいそんな約束を言ってしまった

←

「うん、いいよ」と生徒会長
このときの生徒会長の顔は『罠にかかった』という表情をしていた
逆に一夏の顔は『やってしまった』と後悔した表情をしていた

と、まあこんな感じである
他にもクラスメートの布仏本音とその姉『布仏虚（うつほ）』もいたが生徒会
の仕事があるらしくこの場にはいない
正直、本音が生徒会に所属していたことに驚いた

「さて、勝負の方法だけど、私を床に倒せたらキミの勝ち」

「え？」

「逆にキミが続行不能になったら私の勝ちね。それでいいかな？」

「え、いや、ちょっと、それは……」

あまりの内容に戸惑う一夏に、生徒会長がさらに言葉を追加する

「どうせ私が勝つから大丈夫」

「……」

絶対の自信。それは生徒会長が『生徒会長』であるからだろう

智香から聞いたところ、このＩＳ学園では『生徒会長』という称号はＩＳ学園最強の証だとか

ガラスが割れたのもその称号を奪おうとする者達が襲いかかってきたためだったらしい

（その生徒会長が直々に指導してくれるってのならかなり良い経験になるとは思うが……）

一夏にはいつものメンバー達でコーチをしている。そのメンバーのほとんどが代表候補生。一夏が最初に断ったのもコーチはもう間に合っているからだ

（でもまあ、あそこまでコケにされたら男として黙ってられないか……）

俺ならスルーするがな

「ねえ、亮」

「ん？」

「楯無さんと織斑君どっちが勝つと思う？」

俺の隣に立つ智香がそう聞いてくる。そんなの決まっている

「生徒会長」

「即答だね。アタシも同意見だけど」

そう言って視線を向かい合う二人に戻す智香

どうやら始まるようだ

「行きますよ」

「いつでも」

先制を取ったのは一夏だった。生徒会長の腕を取る――――が

「！？」

一瞬にして返され、そのまま一夏の体は畳にしたたかに投げ落とされた

「やっぱり……」

「さすが楯無さんだね」

見事に一本をとる生徒会長
一夏も油断はあっただろうが、生徒会長の実力は数段上だろう
それを理解したのか、一夏は真剣なものへと変わる

「……」

「ん？来ないの？それじゃあ私から――――行くよ」

どんっ、といきなり一夏の間合いへと急接近する生徒会長
なんだ、今のは？

「あれは古武術の奥義が一つ『無拍子（むびょうし）』だね」

「無拍子？」

「詳しくは省くけど、織斑君の律動の空白を利用したんだよ」

「ふーん……」

正直、よくわからなかったため軽く返事すると二人の勝負を見る

「しまっ――――」

ぽん、ぽん、ぽん、と肘、肩、腹に軽く掌打を打たれる。そして、
一夏の間接が反射的に強ばった一瞬に、両肺へと双掌打が叩き込まれた

「がっ、はっ……！」

「足下ご注意」

ズドンッ！！と、無防備になった一夏を背中から思いっきり畳に倒される

「これで二回。まだやる？」

襟元一つ乱さず、生徒会長は優しい笑みを一夏に向ける

「さすがは生徒会長、って訳か」

「これ以上やっても織斑君の勝ち目は全くないけど」

「そうだね……三崎君も参加して一対二でもいいよ」

にこりと笑みを俺に向ける生徒会長。どうやら二人相手でも勝てる自信があるらしい

「おい、一夏。完全に馬鹿にされてるが、それでいいのか？一夏？」

「よく、ないな……！」

ぐっと力を入れて立ち上がる一夏

「まだまだ、やれますよ……！」

「ん。がんばる男の子って素敵よ」

「それはどうも……」

さっきまで震えた足をなんとか抑えた一夏は深く、二度呼吸する

「お？顔つきが変わった！」

「本気だね」

「……」

一夏は無言の返答。生徒会長もまた無言で応え、互いに必殺を狙った細く鋭い緊張感が張りつめていく

「！」

最初のように仕掛けたのは一夏だった

しかも、今までとは違う早さだ。それにあの動きを昔見たことがある

確か篠ノ之流古武術が裏奥義『零拍子（ぜろびょうし）』

さすがの生徒会長も半歩下がり間合いを取ろうとするが一夏の方が早い

一夏は生徒会長の腕を取って、力任せに投げ飛ばそうとするが――

――

ズドンッ！

「がはっ！」

今度は前のめりに、一夏は胸から畳へと叩き込まれた
しかし、それを気合いで振り切り、一夏は生徒会長の足首を掴んだ

「あら」

「今度こそもらったぁっ！」

足首を力任せに真上へと投げ、空中でひっくり返った生徒会長の胴
を取る

「甘ーい」

「なぁっ！？」

だが、生徒会長は右腕を畳に突き出し、それを軸にくるりと回って
一夏の捕縛を振り切る。同時に、カポエラキックが炸裂

「マーシャルアーツに古武術にカポエラ……多分、他にもいろ
いろとやってんだろうな……」

「そんくらいできないとここの生徒会長は勤まらないらしよ」

「ＩＳ学園（ここ）は、ね」

普通ならそんな武力は必要ないのだが……

「でやあああああっ！」

男の意地か、吹っ飛ばされた一夏は強引に腕と脚で着地し、すぐさま飛び出す

一夏はさらに加速して、そのまま殴りかかるような勢いで先輩に掴みかかった

――――すると

「あっ……」

「「あっ……」」

「きゃん」

一夏は勢い余って、胴着が思いっきり開かれ、ブラジャーに包まれた生徒会長の豊満なバストがまろび出る

あのバカ、なんでそんな事になっちまうんだよ

「どうしたの、亮？見ないの？」

「見れるか！？」

「一夏くんのえっち」

「なぁっ！？」

言い訳できず動揺する一夏はこれ以上ないほどに隙だらけ。生徒会長は特に悲鳴を上げるでもなく素早く一夏の腕を払い落とした

そして、次の瞬間、払い落とされた一夏にゲームみたいな空中コンボが炸裂した

うわぁ……

見てられないほど打ち込まれてるよ。下手したら一夏の外見が変わっちまいそうなくらいに

「おねーさんの下着姿は高いわよ？」

くすっ、と楽しそうな笑い声。なんだかんだで結構怒ってる？

「ふー」

畳にぐしゃっと落ちる一夏。完全に意識を失っているようだ

「さてと、三崎君だったかな」

ぞくりと殺気めいたものを感じた俺は右へと跳んだ

「へえ、なかなか勘がいいんだ」

俺がさっきまでいた場所に生徒会長が拳を突き出していた

「って、いきなり何しやがる！」

「さっきも言ったでしょ?私の下着姿は高いって。見たよね?」

「ぐっ……」

確かに見てしまったが、それで殴られるなんて冗談じゃない

「まあまあ、今のは事故なんだし。それに楯無さん、そこまで怒ってないでしょ?」

「あっ、バレた?」

テヘッと笑う生徒会長

ホントかよ?今の完全に拳を振り抜いてたじゃねえか

「それじゃあ、一夏くんを保健室まで運ぶのを手伝ってくれたら許してあげる」

「ちっ……わーったよ……」

それで事が済むのなら安いものだ

俺は気絶した一夏を担ぎ上げ保健室へと運んだ

気絶した一夏を運ぶ亮の後ろに付いていく智香と楯無

「ねえねえ、楯無さん」

「ん？なに？」

「さっきの拳、結構本気だったでしょ？」

「ありゃ、わかる？」

「まあね」

楯無と智香は亮に視線を向ける

「織斑君のときの無拍子よりも少し早かったからね」

「さすが私に一撃を浴びさせた転校生にして私の親友♪」

にこりと笑う楯無は扇子を開いて言う。その扇子には『あっぱれ』という文字が書かれていた

「すごいなあ。見た感じ学園の訓練しかやっていない体つきなのに」

「多分、智香と同じだと思うよ」

「えっ？」

「確かに動きは完全に素人だけど、あの直感は智香と同じ場所で鍛えられたものだと思うよ」

楯無の言葉に最初は理解できなかったがすぐにそのことがなんのことか理解した
そしてそれは抱いていた考えを解消される

「まさか……」

「そう。なんて言ったっけ？智香がやっていたゲームの名前」

「……Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ……」

「そうそう。彼はそのＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄをプレイする一人なんだよ。そのゲーム、本当に謎だらけだね」

笑いながらそう言うが、その楯無の言葉は智香には届いていなかった

自分のアドレスにはハセヲ（『三崎亮』）という名前

同性同名の目の前にいる偶然出会った男子の名前も『三崎亮』

トドメにはどこで入手した情報かはわからないが自分と同じゲームをしている

これは偶然なのか、そうではないのか、智香は今回のことで確信した

「亮は……ハセヲ……」

智香は一つの真実を知ることとなった

第１０７話（後書き）

書いといてなんなんですけど三国志部はちょっと無理やりすぎたかと反省しています

そして、亮の正体に気づく智香。どうなるか・・・・

まあ、次回はまったく関係ない話になるのですけどね

第１０８話（前書き）

久しぶりの投稿です

それとアンケートに答えてくれた皆様本当にありがとうございます

内容は秘密です。いつできるかはわかりませんのであしからず

そして今回の話はやっちまったとかなり後悔しちゃったりしています

それでも、楽しんでやんでいただければ嬉しいです

第１０８話

「織斑先生」

「ダメだ」

「まだ何も言ってないんだけど……」

現在、一夏を運び終えて、楯無とどこか調子がおかしい智香と別れた亮は偶然寄りかかった千冬を発見し声をかけたのだが、内容を伝える前に断られてしまう

「前にも言った通りスケィスの使用はＡＩＤＡ出現時以外は禁止だと」

「ぐっ……だけど……」

「だけどもくそもない。あれは非常に危険が伴う。それはＡＩＤＡ戦だけではなくもだ」

「う……」

千冬の言う通り、スケィスは喰らったダメージをそのまま操縦者、すなわち亮にフィードバックされる
例え、訓練機の打鉄の太刀型ブレードでも致命傷になりかねないのだ

「だ、大丈夫だって！それにスケィスは授業で使うつもりはない。ただ放課後で特訓するときに少し使うだけだから……」

「それでもしものことがあったらどうする？それに特訓ならばゲームですればいい」

「それは……」

確かにネットスラム『タルタルガ』のブリッジにあるシュミレーションがある
それを使えば特訓にもなる

「でもゲームとリアルではどうしても違いが出てくるんだ。お願いだよ、織斑先生。この通り！！」

両手を合わせてお願いする亮
それに実際、亮が言うことは嘘ではない
反応速度に大鎌を振るときの感覚。それは些細な違いではあるが、それが原因で負けてしまう可能性は大いにありえるのだ

「ダメといったらダメだ……」

「一回だけ何でも言うこと聞くから！」

「……し、しつこいぞ……ダメと言ったらダメだ……」

「……千冬さん……俺、約束したんですよ。俺はどんな相手であろうと無傷で帰ってくるって。あいつらを悲しませるようなことはしないって」

「……」

「一夏たちは俺を信じてくれた。だから千冬さんも俺を信じてくれ」

「……仕方ない……」

千冬はこめかみを押さえながらため息をつく

「それじゃあ……！」

「ただし！使用するのは放課後の特訓時のみ。それ以外でしたら……わかってるな？」

「ああ！ありがとう、千冬さ――――」

バシンと千冬に出席簿で叩かれる亮

「織斑先生だ。馬鹿者」

「はい……ありがとうございます、織斑先生……」

叩かれた所を触りながら再びお礼を言う亮

「それじゃあ、早速特訓してきますんでこれで」

そう言うとアリーナに向かって歩き出すのだが

「待て、三崎」

「はい？」

「お前、さっき『一つだけ何でも言うこと聞く』……と言ったよな？」

さっきの楯無の一夏を挑発に成功した微笑みに似た笑顔を向ける
逆に亮はそのときの一夏みたいにしまったという顔をしていた

「ふふっ。せいぜい楽しみにしておくことだな」

「……」

千冬はそう言い残してその場から立ち去った。亮はそんな千冬をただただ見送ることしか出来なかった
そして、どうしてあんな事を言ってしまったのだろうと後悔したのだった

「おっ！やってるやってる」

千冬さんからスケィスの使用許可をもらってから二日が経ち、俺はスケィスを使った特訓に明け暮れている……訳ではない
だが、俺よりも早く第三アリーナに来て猛特訓しているのは一夏である

「一夏くん、スピードが落ちてるわよ。もっと集中しなさい」

「わ、わかりました」

その一夏と一緒にいるのはこのＩＳ学園最強の生徒会長『更識楯無』
二日前に勝負に負け、無理矢理専属コーチになったんだか。これが予想以上の鬼コーチ
それでいて、かなり分かりやすいらしく一夏は好評ではあった

逆に厳しすぎて辛い、と愚痴っていたが……

「一夏くん。後で校庭十周ね♪」

「なんで！？」

「理由は三崎君に聞いてね」

どうやら口に出していたのか、それとも心を読まれたのか。どちらでも良いか

「亮兄！何を言ったんだよ！？」

「ほらほら、ちゃんと集中する」

邪魔するのもなんだから俺は違うアリーナで特訓するとしよう

という訳で第六アリーナに来た。何故『第六』かと言うと他のアリーナが使われてしまっているからだ
誰も使ってないようでいるのは俺一人――――

「ん？」

「……」

と思ったら隅っこに女子が一人立っていた

「おいで……」

女子が呟くと、ぱぁっと体が光に包まれ、装甲を纏うＩＳが展開された

「あれは……」

打鉄に似ているような気がするな

「行くよ……『打鉄弐式』……」

そう言うと歩行を始める女子。やっぱり、あれは打鉄を元にした機体か
でも何故歩行？

「まだ違和感を感じる……修正しないと……」

女子はディスプレイを呼び出して原因を調べている

その様子はまるで束さんを浮かばせる

「……よし……」

今度は脚部ブースターで飛び上がる

「……」

俺は黙ってそれを見ているが。違和感を感じる

「!?」

いきなりバランスを崩して糸の切れた人形のようにがくっと動かなくなり地面へと落ちていく

「な、何やってやがんだよ、あいつ!?」

結構な高さまで上がっていたから、このまま落ちたら怪我する可能性がある

「スケィス!!」

俺は駆け出すと同時にスケィスを展開して最高速度で落ちていく女子へと向かう

（どうして……？どこが悪いの……？）

いきなりの不測の事態、絶賛落下中にも関わらず原因を確かめるためディスプレイを複数展開している

（おかしい……どこもこんな事態になる要素は……）

普通はそんなことを考えている余裕はないのだが。そんなことよりもＩＳがどうしてこうなったのか知るのが重要のようだ

「……い」

「……」

「聞…て……よ、…い」

「うるさい……静かに……」

「何がうるさいだよ、ボケ」

ビシッ

「あうっ！？」

いきなりおでこに鈍い痛みが襲いかかる

「何する……の……？」

文句を言おうとしたが、言葉は出ず固まってしまう

「たくっ……っておい、どうした？」

「あ、う……」

亮は女子の顔を見て様子がおかしくなった原因を理解する

（ああ……この仮面か……）

前の箒の時もこの仮面を見てあまりの怖さに気絶していた。亮的には悪くないと思っているのだが目の前で脅えているためこの仮面は怖いのだと再認識した

「落ち着け。これでどうだ？」

「！？」

仮面が光の粒子となって亮の顔が露わとなる

こんなことが出来るなら最初から仮面なんてつけない方が良いと思うであろうが、この仮面にはアラームやロックオン機能などが表示される普通のＩＳにはある機能が搭載されている

仮面を付けていない場合はそれらは見ることができないのだ

亮の顔を見た女子は脅えた表情から驚きの表情へと変わる

「あ、う、ううっ……！」

「いたたたっ！？」

女子は露わになった亮の顔を叩き始める
亮は女子を抱えているため抵抗できないでいた

「イテッ、や、止めろ！俺が何したってんだよ！？」

「離して……下ろして……」

どうやら女子は抱えられたこの状況が嫌なようだ

「わかった！わかったからおとなしくしてろ！」

「……」

亮の言葉に素直聞き入れ黙り込む。亮は叩かれた痛みに耐えつつ地面へと降りた

「どうだ？落ち着いたか？」

「……」

安否を確認する亮であるが女子は何も応えず、再びディスプレイを呼び出してまた黙り込んでしまう

「こいつ……ん？」

少し呆れながらも亮は女子が呼び出したディスプレイに目を向ける。正直ＩＳの仕組みは亮はあまり基礎的なことぐらいしか理解出来ていない。それでも亮はあることに気づいた

「なあ？これブラスターの出力の計算が間違えてないか？」

「……！？」

女子はしばらく目を見開いた。どうやら亮の言った通りで計算を誤り出力不足で起きた事故だった

「まあ、自分で一から組み上げたＩＳではよくあるミスだな。なんだかんだで根本的な所で間違えてるもんだ」

「……」

亮の言葉に女子はキッと睨みつける

「なんで、私が組み上げたＩＳだってわかるの……」

「……いや、適当に言っただけなんだが……」

まさか当たるとは思っていなかった亮

「だったらなおさら一人で試運転するのは止めろ。今みたいな事故が起きたら大変だからな」

「……」

返ってきたのは無言の返事

亮の言っていることは間違いではない。しかし、女子は訳ありなのだろう。亮にはそう感じた

「まあ、いい。俺はこのまま続けるけどお前はどうする？」

「私は……この子の調整……するから……」

「そうか。お前の名前は？」

「え？」

「名前だよ。名前。なんて言うんだ？」

「何でそんなこと聞くの？」

女子は少し嫌そうな顔をして聞いてくる

「んだよ。助けたんだから名前くらい教えてくれてもいいだろ？」

「……更…簪……」

「ん？何だって？」

「更識簪……」

「『更識』……あの生徒会長の関係者か？」

「違う……」

簪は小さな声でそう答える

「そうか。まあ、あの生徒会長と関係者だろうがなかろうがどうでも良いけどな」

亮はそう言うとスケィスの仮面を展開する

「じゃあな、簪」

「あ……」

亮は高速で移動し、簪の前から居なくなった

「初対面なのに……呼び捨て……」

不機嫌そうな顔を見せる簪はそう呟くとＩＳを修正するためアリーナから出た

「あ……あの人の名前……聞いてない……」

仮にも自分を助けてくれた人物だ。また会うこともあるだろう

と、考えた簪はそのまま整備室へと足を進めた

助けてくれた人物は完全に男子であったことに気づいたのはその道中であった

第１０８話（後書き）

どうでしたでしょうか？

智香ではなく簪登場！！・・・・・・・・・すみません。なんか無性に出したくなってしまったんです

本当にすみません

第１０９話

「あー……今日も疲れた……」

厳しい特訓を終えた一夏はようやく自室の前へとたどり着く
そして、ガチャ、と自室のドアを開けた

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

――――バタン。ドアを閉じて一秒、状況を整理する

「えーと……」

現在地、一年生寮。自分と亮の部屋の前
表札に織斑と三崎の字を確認。一夏は何も間違えていない
（さっきのは夢か幻だろう。いくらなんでも楯無先輩が裸エプロンで待ってるなんてことが現実にあるわけがない。ははは）
そう思いながら、再度ドアを開ける
「お帰り。私にします？私にします？それともわ・た・し？」
「選択肢がない！」
「あるよ。一択なだけで」
部屋で待ち構えていたのは裸エプロンの楯無だった
一夏は楯無が何を考えているのか全く理解できないでいた
「今日から私、ここに住もうと思ってね」
「は……？」
「いやぁ、みんなに自慢できるなぁ。まだふたりしか女子が住んだことのない、一夏くんのお部屋で寝泊まり。私ってば三人目の女ね」
「いや、あの、……え？ちょっと、ここって一年生寮ですよ？」
問題はそこではないのだが、一夏の頭の中は混乱状態でまともに思考回路が働かないでいた

「生徒会長権限」

「ぐあ……」

あまりの職権乱用にその一言しか出ない一夏

「一夏くんは反応が可愛いねぇ」

そんな一夏の様子を楽しそうに見ながら、ぱんっと扇子を開く楯無。
そこには『諸行無常』と書かれていた

「と、とにかく！服を着てください、服を！」

とんでもない格好の楯無を直視できずに、視線をさまよわせながらそう言う。またおかしそうな笑い声を出して、こともあろうか振り向いた

「じゃーん♪水着でした～」

「……」

「んふ。残念だった？」

「そ、そんなわけないでしょう！」

だったらさっきの沈黙はなんだったのか説明してほしいところである

「そ、それより亮兄は？亮兄はどこにいるんですか？」

一夏の同部屋の亮の姿が見あたらないその代わりに私物が準備万端

にセッティングされているのを見てしまう

「ああ。三崎君は私のためにお引っ越ししてくれたわ♪」

「ええっ!?一体どこに?!」

「そ・れ・は――――」

楯無の言葉に一夏の叫び声が響き渡った

果たして亮はどこに引っ越してしまったのか、確認してみよう

「それで楯無のバカに無理矢理ここに連れて来られた、と……」

「……はい」

「却下だ。とっとと自分の部屋に帰れ」

「そりゃあそうですよね」

「当たり前だ。よりによって一年生寮長にして担任の私の部屋に泊まるなどありえん」

そう亮が引っ越してきた場所は寮長で担任の千冬の部屋であった

やっぱりそうなるよな……

あの生徒会長がどうしてもとお願いしてきたからしぶしぶ了承したが、まさか千冬さんの部屋とは思わなかった

「んじゃ、とりあえず戻ってあのバカな生徒会長を追い出してみますよ」

「そうしろ。だが、あいつは自分の意見を曲げない奴だ。そう簡単にはいかんと思うが……」

確かに生徒会長なだけあるのか自分の主張をがんなに曲げず、押し通してきやがったからな

「そのときはプラン2に移行しますよ」

「『プラン2』？なんだそれは？」

「他の人の部屋に泊めてもらうことです」

そう言った瞬間、何故か回りの空気が凍る音が聞こえた気がした

「……それもあのバカの意見か？」

「え、ええ……まあ……」

「詳しく教えろ」

ヤバい。あの目は本気だ。言わないと殺すという目だ

「えっとですね。『三崎君なら頼めば大丈夫』って……」

「ほう……それで誰の部屋に行くつもりだ……」

「え、あー……」

そういえば考えていなかったな……

まあ、無難に行けば俺と親交が深い奴がベストだ。となるとある程度絞られてくる

箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット……

ん？

確かラウラとシャルロットは同じ部屋だった筈だ。ならばいろいろと助かる

「ラウラとシャルロットの――」

「わかった。私の部屋に泊まれ」

あれ？

「あの、先生の部屋は駄目なんじゃ……」

「他の生徒の部屋に泊まる方が駄目に決まっているだろ。ならば私の部屋しかあるまい」

「いや、でもその前に生徒会長の説得を……」

「なんだ？私の部屋に泊まるのは嫌なのか？」

「そう言う訳では……」

おかしい。さっきまで断っていた筈なのだが……

「ならば決まりだ。荷物はそこにある段ボールで全部か？」

「あ、はい……」

俺と千冬さんは俺の私物が入った段ボールを運んだ

こうして生徒会長の更識楯無のせいで俺は千冬さんの部屋に泊まることになってしまったのだった

「う、ううっ……」

生徒会長のせいで千冬さんの部屋に泊まることになった翌日
俺は持参の布団で寝ることになったが、どうも慣れず早く起きてしまった

時刻でいうと5時30分。早すぎる
二度寝したい所ではあるが妙に目が冴えてしまっている。いつもの部屋ではなく千冬さんの部屋だからかもしれない

「千冬さんがいない……」

立って回りを見てみると千冬さんの姿は見あたらない
仮にも千冬さんは教師だ。この時間にはだいたい起きて授業の支度などをするのだろう

「だからってこの散らかりようはどうにかなんねえのか……」

千冬さんの部屋ははっきり言って汚い
一人暮らしの男性のような散らかりようで衣服や書類などが至る所に置かれている
幸いに下着などはないが、それでももう少しちゃんとするべきだと思う

「掃除でもするか……」

泊まらせてもらっているのだからそれぐらいはやるべきだろ

「その前に顔でも洗うか」
俺は洗面所へと向かったが、それは間違いであったことに気づくことになる

ガチャ

「あっ……」

「……」

そこにはシャワーを浴びていたのか、髪が濡れた千冬さんがそこにいた

「……」

長い沈黙が続く
俺も千冬さんも動かず、目の前にいる人物をただ見つめていた
ちなみに千冬さんはバスタオルを体に巻いていたため、大事な所は見えていない

「えっと……顔を洗いにきたんですけど、使用中だったんですね……」

「ああ……」

「それじゃあ、俺は外に……」

「まあ、待て……」

呼び止められた俺は顔をひきつかせながら振り向いた

「顔を洗いたいなら……これで洗ってろ！！」

ガンッ！！

俺は顔面に水がたっぷり入った桶を喰らい、結局二度寝することとなった

第１０９話（後書き）

ようやく投稿できました

まさかの亮が追い出され、千冬と暮らすことに

自分もこのあとの展開が分かりません

第１１０話

「いてて……」

「亮、まだ痛むの？」

さんざんな朝から放課後。今はシャルロットとラウラと一緒に第三アリーナにいる

「朝見たときは驚いたぞ。顔面が潰れてしまったのかと思った。一体なにが起こったのだ？」

「まあ、いろいろと、な」

正直に話したら大変なことになりそうだから言わないでおこう

「んじゃ、特訓を始めるか」

「そうだね。でもどんな特訓をするの？」

「今日は武器の確認をしたいと思う」

俺は大鎌を取り出して二人から距離をとる

「まずはラウラのカノンの銃弾を俺が攻撃し破壊。慣れてきた所でシャルロットの実弾武器。最後には一対二のランダムで終わりだ」

「ふむ、了解した」

「でもさ。それだと一つ間違えたら亮が怪我しちゃうよ」

「大丈夫。一回でも当たったらそこで特訓は終わりにする。だが……」

俺はニヤリと笑って二人を見る

「お前ら二人ぐらいで俺に銃弾を当てるどころかかすりすらしねーよ」

「ほう？さすがは我が嫁だ。言うことが大きいな」

「そうだね。でも、そんな挑発しなくても僕たちは全力でやるよ！」

ニコッと笑って二人はＩＳを展開する

「よし！来い！」

「「おう！！」」

「おっ？先客がいるね」

「そうですね」

「えっ？あっ！亮兄にシャルロットにラウラ」

少し遅れてアリーナに入ってきたのは一夏と楯無、そして箒の三人だった

昨夜、箒が一夏と亮のために作ったいなり寿司を届けに部屋へと行ったところ楯無が二人の部屋に住み込むことになったことを知るさらに楯無の話術なのか、箒と仲良くなった楯無は箒にもコーチをしてあげることにこのとき、楯無は『人たらし』の称号を一夏から授かっていたりする元々、別々で特訓することにしていたが今回は見学として楯無が許可したのだ

「へえ、あれが噂の……」

「えっ？楯無さん。スケィスを知ってるんですか？」

「まあね。おねーさんの情報網を甘く見ちゃ駄目よ♪」

ウインクをしながら言う楯無

だが、スケィスは一部の人しか知らない機体。どこから得た情報なのか聞きたくなった一夏だが怖くて聞けない

「でも、私はここを使いたいのよね……三崎君には悪いけど退場してもらおうかな」

扇子を開き口を隠しながらそう呟く楯無

「三崎くーん！」

「ん？」

「なんだ、あの女は？」

「あの人は、確か……」

呼びかけられ一時停止する三人

「織斑先生と一夜過ごした感想はー？」

パキッ！と何かが凍りつくような音が聞こえた気がした亮

「……亮……それは本当なの……？」

「いや……」

「そうか……どこか教官の様子がおかしいと思っていたら……」

二人の視線が鋭く亮を突き刺す。背後には黒いオーラを感じ取れた

「ちょっと待て！話をおおおおおっ！？」

亮が説明しようとするがシャルロットのガトリングに火が着いた

「話なら亮を蜂の巣にした後、聞いてあげる……」

「シャルロットの言う通りだ……」

「ぐっ……」

もはや話による説得は不可能と判断した亮はもう一つの選択肢である『戦略的撤退』を試みる

「逃げられると思わないことだ、亮……」

「箒!?」

だがそれは、二人と同じように黒いオーラを纏った箒がＩＳ『紅椿』を装備して現れ、退路を絶った

「ふふふ♪モテる男子は大変ね♪」

「もしかしてこの展開を見越して箒を……」

「さあ?どうだったかしら?」

絶対にそうだ、と思った一夏だが口にして言うのは止めた

「行くよ、亮……」

「覚悟しろ……」

「我が刀の錆となれ……」

「クッソオオオオオオオオオオッ!!」

「はあ……はあ……」

あの生徒会長の罠に嵌められた俺はなんとか逃げ……戦略的撤退に成功した

「あの野郎……いつか痛い目に合わせてやる……ん？」

辺りを見渡すと見覚えのある光景だった

誰もいないアリーナにただ一人。隅っこでＩＳを動かしている女子

「確か、簪……だったな。また一人でやってんのか……」

一人ではやるなよ、と忠告しといたんだが……

「よっ」

「……」

返事がない。嫌われているようだ……

って、嫌われるようなことをした覚えがないんだが……

「……」

まあ、いいや。暇だし、こいつの観察でもしていよう

十分後――――

「……」

「……」

まったく見向きもしない。ただディスプレイと睨めっこしている

さらに十分後――――

「……」

「……」

変化無し。のどが渇いたから飲み物を買いに行こう

さらにさらに十分後――――

「……」

「……」

もう三十分もこのままだ。こいつはある種の天才かもしれないな

でも、そろそろ飽きてきたからこいつを現実に戻してみようかと思う

ピタッ。

「ひゃうっ!?」

俺がさっき買ってきたブドウジュースを簪の頬にくっつけた。まだ冷たいのもあって変な声を上げながらびくっと動いた

「あ、あなたは……」

「よっ」

「一体どこから……」

どうやらこの様子だと俺が三十分前からいたことにすら気づいていなかったようだ

「ほら。頑張ってる、お前に差し入れだ」

「……」

返事がない。しかもこいつの回りから帰れオーラが見えやがる

「お前、また一人で試運転してんのかよ」

「……」

「まあ、悪いとは言わねえが前みたいな事故にはならないように気をつけろよ」

「……」

駄目だ。完全に無視されてしまっている

つうかこうまで見事に無視されると怒りを通り越して関心してしまう

「なあ。俺、お前に恨まれるようなことしたか？」

「……（コクリ）」

今、かすかだが肯きやがった……

「ちょっと待て！俺はこの前あったばかりのお前にそんな恨まれるようなことをした覚えはねえ！」

「……私のＩＳは倉持技研」

「？」

「あなたのＩＳも倉持技研……」

「は？？？」

いや、俺のＩＳは元から言えば束さんが作ったから社名とかないんじゃねえか？

「あなたの……せいで……この子が……！」

ギンッとさっき以上に睨みつけてくる簪

何の話かまったくわからないんだが

「私の『打鉄弐式』は……あなたの『白式』のせいで……」

「……ん？」

『白式』？

こいつ、まさか……

「なあ？俺の名前わかるか？」

「織斑一夏……」

「やっぱり……」

「……？」

何を言っているのかわからないと言った表情をする簪

わからないなら教えてやる

「俺の名前は『三崎亮』。男で二人目のＩＳ操縦者だ」

「……え？」

簪は一瞬の静寂の後に小さな声を絞り出す

彼は『織斑一夏』ではない？、そのことで頭いっぱいになった

「織斑……一夏じゃ……ない……？」

「おう」

簪の質問に亮は普通に答える。嘘はついていないと簪はすぐにわかった

「で、でも……白式は、文字通り白い機体じゃ……」

「まあ、その通りだが……顔とか見ればわかるだろ……」

「顔は……覚えてなかった……」

「一応、テレビや新聞に嫌というほど顔写真が載ってたじゃねえか」

「私……テレビはニュース見ない……新聞も番組表しか見ない……」

さっきまで殺気立っていた簪がどんどん縮こまっていく

「つか、仮面をかぶってるＩＳなんてそうそうないだろ」

「……映像で観た……スケィスだって……仮面をかぶっていなかった……それに機体は……黒だった」

「それは……ん？『映像』？」

「あ……」

簪は急いで口をふさぐが遅かった

スケィスの映像は一部の者にしか、閲覧はもちろん、入手することなどできないはず

「映像をどう手に入れたかはわからねえが……お前がただ者じゃねえことはよくわかった」

「ううっ……」

思わず後ずさる簪

それはそうだ。極秘の映像を、その映像に映る本人の目の前でバレてしまったのだ。口封じに何をされたものかわかったものではない

「その映像はＩＳ学園の関係者以外……それも困るが他の人に

見せたりしたか？」

「ううん……見せてない……」

「うし、ならその映像は今すぐ削除しろ。それで許す」

「……え？」

亮の言葉に唖然とする簪
どこもそうだが自分の機体情報が知られてしまえば、それなりのペナルティを与えられる。それなのに亮はただ映像を消すだけで許すと言うのだから当然である

「ぶっちゃけ、あまり参考にならなかっただろ？」

「……」

亮の言う通り、分析結果、あまりにの能力の高さや解析不能な点が多すぎて参考にはならなかった

「スケィスはあまり知られたくないんだ。頼む」

「……わかった」

簪は素直に亮の頼みを聞き入れ、ディスプレイを開き映像を削除する

「……終わった」

「そうか」

「……あの……」

「ん？」

「ごめん……なさい……私……勘違いして……」

やはり勘違いして罪悪感があるのか俯きながら言う簪

「気にすんな。間違いは誰にもあるもんだ。それに……」

「……？」

「お前が何かを抱え込んでいることはよくわかった」

「……」

「一夏のせいでそのＩＳが未だ未完成。その気持ちはわからなくもないが恨むのは止めておけ。何も知らないあいつがそんな態度されたらめっちゃ戸惑うぞ」

「それは……」

「まあ、元から無愛想な性格っぽいし。無理か？」

「……」

あっけらかんと言う亮を見て簪は目を細める

「それじゃあ俺は帰るわ。お前も無理せず早く帰れよ」

そう言って亮はアリーナから出て行った

「……」

亮が出て行ったドアを見ながら簪は複雑な心境に立たされていた

（私って……そんな無愛想……に見えるのかな……？）

簪は鏡を取り出して自分の顔を確認する。そこで自分が何を考えているかを理解する

（私……何考えてるんだろう……）

少し頬を赤らめた簪はＩＳをしまい、試運転は止めて帰ることにした

亮からもらったジュースを両手に抱えながら

第１１０話（後書き）

やっと更新ができたは良いが、番外編の方が書きあがらない・・・・・

ちくしょう・・・・

テーマがあるのに書くことができないとは・・・・

本当にすみません

頑張りますので温かく見守っていただけたら幸いです

第１１１話

「さて、と……」

部屋に帰ってきた亮はどこか気合いが入った顔つきをしていた

「む？何をしているのだ、亮？」

そこに仕事が終わり帰ってきた千冬

「いえ、せっかく泊めてもらってるのだから掃除でもしようかと思って」

「やらんでいい」

「いや、でも……」

「やらんでいいと言ったらやらんでいい。それに急にどうして掃除など……」

千冬の言葉に亮は黙って指さした

「この惨状を見てよくそんなこと言えますね……」

その指さした先はこれでもかと言うほど散らかったリビングであった

「……」

俺の言葉に千冬さんは返事をせず、目をそらしている
たく、どうしたらこんなに散らかすことが出来るんだ

「後三日すれば清掃の人が掃除してくれるのだから別に良かろう」

何言ってんだよ。清掃の人に余計な仕事を増やすな

「それによく言うだろ？『服装の乱れは心の乱れ』って、部屋も同じだ。汚いままじゃ心も汚くなるぞ」

「む……」

「だから今から掃除をやる。千冬さんも手伝え」

「三崎……さっきから教師に向かってえらく生意気な口を聞くじゃないか……」

「とりあえず、空き缶・燃えるゴミ・燃えないゴミに分けてくれよ。後で分別とかは面倒だからな」

「無視するな！」

「きちんと掃除も出来ない人に何を言われようと何とも思わねえよ。

さっさと掃除始めんぞ」

「むぅ……」

千冬さんは渋々動きだし、掃除を始めた
最近わかったことだが、千冬さんは少し押しに弱いらしくしつこく言えば話を聞いてくれたり、今回みたいにいうことを聞いてくれる

「千冬さんはまず落ちている書類を片づけてください。俺は空き缶や燃えるゴミと燃えないゴミを片づけるんで」

「わかった」

「それと、必要な書類と必要ない書類でちゃんと分けてくださいよ」

「わ、わかっている」

「いやいや。千冬さんはいらないと思ったのは迷いなく捨てちゃうじゃんか。それでこの前、朝の職員会議で必要な書類を捨てちゃったから、朝急いで書類をコピーしてたのはどこのどいつだよ」

「ぐっ……」

恥ずかしいのか頬を赤らめ黙り込む千冬さん
一緒に住み始めてわかったが千冬さんはなんだかんだで抜けている所がある
学園内では職員や生徒から憧れの眼差しを受ける千冬さん
逆に寮で教師という仕事から解放された千冬さんは、どこか抜けていて学園では見られない顔を見せてくれる

「千冬さん。分け終わったらちゃんと再確認しろよ？」

「わかっている！！さっきからグチグチうるさいぞ！お前は姑か何か！？それとも私の夫か！？」

ヤバいな。どんどん機嫌が悪くなっている。しかも意味がわからないことを言い出す始末
何とかしねえと後々面倒だな

「それじゃ千冬さんは俺の嫁か？なんて――――」

「……」

「って、あれ？千冬さん？」

「……」

おかしい。ただ、軽いジョークをかまして場を和ませようとしただけなのに、千冬さんが
『バカなこと言っていないでとっとと始めるぞ』
とかなんとか言って掃除が再開されると思っていたのだが……
まさか、あんな反応をするとは思ってもいなかった

「……ば、バカなこと言っていないで……とっとと……始めるぞ……」

「お、おう……」

俺の想像通りの台詞であったのだが、違う……

（言い方と態度がまったく違う！！）

俺はそう思いながら掃除を開始した

（まったく、あのバカはなんてことを言い出すのだ……）

私は少し頬が熱くなるのを感じながら作業を続けている

（どうして亮はこう恥ずかしい台詞が言えるのだ……）

まさか私の反応を見て楽しんでいるのではないだろうか？

もし、そうだったら叩きのめす

「……」

亮は何事もないように作業をしているように見えるが、よく見たら違った

顔は見えないが耳が真っ赤になっているのがわかる。亮も言って恥ずかしがったのだろう

（ぐっ……これでは無闇に話しかけることができん……）

この重たい空気を取り払うには、この作業を終わらせるか、この空気を吹き飛ばす何かが起こることなのだが……

カササッ。

「ん？今、何かの気配を感じたような――――」

私はこのときその気配を確認しようと手を伸ばしたことに深く後悔することになるとは思いもしなかった

「うしっ。これで三分の二は片づいたかな」

後は千冬さんの書類の整理と散らばった衣服の片づけのみだ
さっきの千冬さんとのいざこざは集中して作業していたおかげである程度は羞恥心は消えていた

「千冬さんの様子はどうかな？」

ガチャ。ガバッ。

「はい？」

千冬さんがいる部屋に入ったのだが、その瞬間、青ざめた千冬さんが俺に抱きついてきた

「ど、どうしたんだよ？」

「で、で、でた……」

「うっ……」

（その涙目＋上目遣いは反則はないでしょうか、千冬さん！？）

俺はそんなことを考えつつも、理性を保ちつつ千冬さんに声をかける

「でた？一体なにが？」

「じ、『G』が……へ、部屋に『G』が出たんだ……！？」

千冬さん……

胸を押しつけながらのそれは一発レッドで退場だと思う、て落ち着け俺！キャラが崩壊し始めているぞ！？

（千冬さんがここまでなる『G』とは一体？）

一体なにを指しているのかまったくわからず、とりあえず俺は千冬さんに抱きつかれながら問題である部屋を見た

カササッ。

元凶発見。それは黒光りした素早く動く生物だった

「なるほど。ゴ――――」

「言うな！？」

めしっ、と聞こえてほしくない音が背骨から聞こえる

命に関わるから呼び名は『G』としよう

「わ、私はあ、あれが苦手なのだ……」

「わかった。わかったからもう少し力を緩めて……身が出る……」

この後、俺は千冬さんに抱きつかれながらも『G』除去に成功した

その方法は禁則事項なのであしからず

「も、もう大丈夫すよ」

「ほ、本当か？」

「本当だ。だから、その……」

「……？　あっ……」

千冬さんは今の状況（絶賛俺に抱きつき中）を理解する

ゆっくりと俺から離れた千冬さんは少し乱れた服を整える

「すまなかったな。少々取り乱してしまったようだ」

（一応、大人の体裁を保とうとしている！）

もうかなり手遅れだけどな

「千冬さんでもゴ……『G』は苦手なんすね。我を忘れてしまうほどに……」

「……小学生ぐらいの頃、夏休みの自由研究で束が『Gの生態観察』などという馬鹿げたことをし始めたのだ。しかも私の家で……」

うわぁ……

束さんらしいと言えばらしいが……

「そして、間違えてなのかわざとなのか。束は『G』を逃がしてしまったのだ。しかも私の部屋に……」

「それはまた……」

「束は全部駆除したと言ってはいたが、私はもしかしたら駆除し損ねたGがいるんじゃないかと……1ヶ月ほどろくに眠れなかった」

それは苦手どころかトラウマになってもおかしくないな……

「それもこれも、千冬さんがこんなに散らかすからいけないんだぞ」

「うっ……」

「ほら。さっさと掃除を終わらせるぞ」

こうして、少しトラブルもあったが掃除はなんとか終わらすことが出来た

「……」

掃除を終わらせた亮と千冬は就寝している

だが、千冬は眠れずにいた。原因はもちろん先ほどの『G』のことだ

『G』を一匹見たら三十匹はいるという話がある

そう。千冬は寝ている時にGが出てこないか不安で眠れないでいたのだ

（くぅ……この歳になってもGに悩まされるとは……）

寝なければならないのに眠れない。このままでは明日の授業に影響が出てしまう

「眠れないのか？」

「……」

隣の布団で寝ている亮が話しかけてきた

「お前はどうして起きている？」

「さっきからベッドの上で寝転がったりそわそわしてっからその音で眠れないんだよ」

「そ、そうか……それはすまなかった」

「いや、別に……」

亮は布団をかぶり眠りにつく

そして数分、千冬はまたそわそわし始める

（駄目だ……眠れない。あのときのことを思い出してしまう……）

Gが千冬に向かって飛んできたときのことを思い出してしまう

「ううっ……。！」

千冬はなんとなく寝返って亮が寝ている方を向く

予想外なことに亮は千冬の方を向いて起きていたのだ

「ね、寝たのではなかったのか？」

「いや……ちょっとな。千冬さんがちゃんと寝られるか気にな

って」

「ぐっ……」

バカにするな、と言いたいところだが実際に眠れないでいるので言い返せない

「ふぅ……どうすれば眠れる？」

「む？」

「だからどうしたら眠れるようになるのかを聞いてんだよ」

眠れぬ千冬をほっとくことが出来ない亮

「何でもいいぞ。俺が出来ることであればだが」

「……」

しばらくして千冬はおそるおそるゆっくりと手を伸ばす

「わ、私が眠るまで手を繋いでいてほしい……」

「……えっと、どの本を朗読すればいいんだ？」

「誰が朗読と言った！？子供じゃあるまいし、恥ずかしいではないか！！？？」

「俺からしたらどっちも恥ずかしいんだが！？」

結局、亮は千冬の手を繋ぐことになった

「ど、どうだ？ちゃんと眠れそうか？」

「う、うむ。なんとか……」

千冬はそう言ってはいるが実際は逆だった

手から感じる亮の温もりが千冬の眠気を一気に醒めてしまったのだ

（何でこのような状況になってしまったのだろう……）

「……」

（そして何故亮は何も言わずにただ見ているだけなのだ……）

千冬は目を開けたり閉じたりと忙しそうである

「……」

「！？」

千冬はびくっと体を震わせる

なぜならば、亮がいきなり空いた方の手を使って千冬の頭を撫で始めたのだ

（な、な、なんだ！？いきなり大た……ん……）

動悸が早くなった千冬であったが、次第に眠気が現れる

亮の温かい手は千冬に安心感を与えていたのだ

（温……かい……なん……だろう……初めての感覚……）

そう考えながら千冬は夢の中へと落ちていったのであった

ちなみに亮はというと――――

「千冬さんが寝てくれたのは良かったんだが……」

亮は千冬の手を離そうとするが――――

（離れない……）

そう。千冬が亮の手をがっしり掴んでいるのだ

無理矢理離そうとしても――――

ギリギリギリギリッ。

（ギャアアアッ!?折れる折れる折れる!?）

と、このように千冬が全力で抵抗する。そのため、亮の手が折れそうになってしまい断念

（ということは、俺は千冬さんが手を離すのを待つか、最悪この態勢のまま寝るしかないのか……）

亮は眠気と時折襲ってくる痛みに苦しめられながらこの夜を過ごすのであった

第１１１話（後書き）

お久しぶりです

ようやく更新することができました

番外編はいまだに書けていませんけど

畜生！！マジでスランプです！！文才が欲しいといつも思います！！

次はいつ更新できるかはわかりませんが長い目で見ていただけたら嬉しいです

５００万ＰＶ突破記念『亮と志乃のお忍びデート？』（前書き）

やっと更新ができました

内容はタイトル通りです

楽しんでいただけたら嬉しいです

５００万ＰＶ突破記念『亮と志乃のお忍びデート？』

時刻は朝の九時半前、場所はＩＳ学園ではなく俺の近くの駅前

「……」

俺は何度も確認している腕時計を何度も見ながらそわそわと体を動かして落ち着きがない

どうしてそんな所にいるのかというと、俺はある人と待ち合わせしているからだ

一体誰と待ち合わせしているのかって？

それは一夏でも、箒でも、セシリアでも、鈴でも、ラウラでも、シャルロットでも、ましてや千冬さんや千草でもない

その人物は――――

「亮」

「！」

「おはよう♪」

俺が振り向いた先には、千冬さんとはまた違う大人の笑みを浮かべる志乃がいた

「お、おう……」

「早いね、亮。待たせちゃったかな？」

「い、いや、俺も今来たところだから」

少し申し訳なさそうに言う志乃に俺はそう答える
実際はさらに三十分前の九時にはすでに到着していたりする

「それじゃ、行こっか。案内よろしくね、亮」

「お、おう」

俺は志乃を連れて歩き始める

どうして、こういうことになっているかと言うと今からちょうど一週間前に遡る

「ふぅ……」

千冬と一緒に暮らすことになってしまってから数日。亮は部屋で一人ため息をついていた

「あの生徒会長のヤロウ……一夏だけならともかく俺まで巻き込みやがって……」

そんなことを呟きながら亮はパソコンを起動させてメールを確認する

「……！」

いつも通り勧誘メールなどを適当に流して見ていると今来たばかりのメールを見て表情を変えた

『
ｆｒｏｍ七尾志乃

授業お疲れ様、亮
突然のメールでごめんね、お願いがあるんだ
実は近々、ＩＳ学園の教育実習生としていくのだけれど、私ＩＳ学園の周辺のことは全くわからないから、案内してもらいたいの
本当は千冬さんにお願いしたんだけど予定が合わなくて……
たがら、よければ亮に案内してほしいな
良かったらメールしてね
無理なら無理で全然構わないから

』

「……」

亮は一瞬固まった
そして、その頭の中ではこうなっていた

（おいおいおい！？まさかの志乃からお願いメールだと？！いやいや、それよりも教育実習生として来るって……それは一体いつなんだ！？それにこれってデート……いやいやいや、それこそねえだろ。学園の女子の何人かは俺に好意を抱いてるくらいにありえねえ。思い上がりも良いところだぜ！！）

この思考は０．３秒ほどで行われている。それに亮の例えで考えるならデートという可能性は非常に高いことになるのだが、残念ながら本人はそれに気づいていない

「ともかくどう返事をしたものか……」

そう呟いているとガチャンと、ドアが開かれる音がする。千冬が帰ってきたようだ

亮は顔を青ざめる。何故かはわからないが見られたら大変なことになると直感したのだ

「ん？どうした？そんなに慌てて」

「い、いや……なんでも」

亮は千冬の質問にそう答える。今の亮は机の上に教科書が置いてあり、端から見れば今日勉強した復習をしているように見える
ちなみにパソコンは電源を消されている

「？　私は今から浴場に行く。復習も良いが早く寝るように」

「は、はい。わかりました……ふぅ」

亮は浴場に行く千冬を見送ってホッと一息する

「危なかった……なんかわからねえけど危なかった……」

なんとかやり過ごすことができて安心するが、まだ問題は残っている

「千冬さんが帰ってこない内に返事をしねえと……」

パソコンの電源を入れ、志乃にメールしようとした亮なのだが

「な……に……？」

なにやら志乃から再びメールが届いていたので確かめてみると亮は驚愕した

『

ｆｒｏｍ七尾志乃

返事ありがとう

少し不安だったけど引き受けてくれて本当に嬉しいよ

日時と場所は追って連絡するからよろしくね

』

「……」

亮は呆然と志乃のメールを見つめている

それも当然。亮は返信メールを出した覚えがないのだ

「一体どうなって…………ん？」

混乱していると一通のメールが届く。その内容はというと

『

ｆｒｏｍ　欅

こんばんは、ハセヲさん

無事、デートが決まって良かったですね♪

代わりにメールを出した甲斐がありました！

さて、ハセヲさんが志乃さんとどのようなデートをするかとても楽しみです！

頑張ってくださいね、ハセヲさん♪

』

「……………………」

どうやら欅の仕業らしくプライベートが筒抜けで一体どこから見ているのだろうか？

亮は無言のまま椅子の背もたれに体重をかけ、おもむろにゴーグルを装着する

「け～～～～や～～～～きぃぃぃ！！！！！！！！！！」

亮はものすごい形相でＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄへとログインし欅を抹殺しに向かうのであった

「結局、見つけ出すことは出来なかったからモンスターやＰＫの奴らを片っ端からぶっ潰して憂さ晴らししてたら千冬さんに怒られるし……散々だったな」

「うん？どうしたの、亮？」

首を横に傾けて訪ねる志乃
おっと、思わず口に出てしまったようだ

「いや、なんでもない」

「そっか。亮、これはデートでもあるんだからしっかりエスコートしてね♪」

「え〝っ！？」

志乃が不意にそんなことを言い出して俺は思わず変な声を出してしまう
そんな感じに慌てていると志乃はくすくすと笑っている。どうやら

からかわれたみたいだ

「……おう。しっかりエスコートさせていただきます」

「ふふっ♪頑張れ、男の子」

どうやら俺は志乃から見たらまだまだ子供らしい。精進しねえとな

俺と志乃の街の案内兼デートが始まった

そして、俺は気づくべきであった
後ろで微かに聞こえたグシャッという音は災難の始まりであったことを

グシャッ。

建物の影からそんな缶が潰れた音が鈍く響きわたる。ちなみにスチール缶

その影は五つ

「みんな、今の……」

とシャルロット

「ええ、聞こえましたわ……」

とセシリア

「それはもうはっきりと、ね……」

と鈴

「ああ、言ったな……」

とラウラ

「言った。あの女は確かにこう言った」

と箒が言った瞬間、五人は口を揃えて言った

「「「「「デートであると!!」」」」」

五人は背後から黒いオーラを纏いつつ物陰で街の案内兼デート中の亮と志乃を見る

「まさかとは思ったけど本当に亮は女の人と密会していたとは……」

「情報は確かでしたわね」

ゴゴゴッと黒いオーラを噴出させながら話す五人

「そういえばこの情報を手に入れたのはラウラだったわよね。一体どこから入手したのよ？」

「うむ。それは――――」

「あっ！亮達がお店に入るよ！！」

ばっと鈴とラウラは視線を亮達へと戻す

「どうやらデパートのようだな」

「皆さん、後を追いますわよ！！」

五人は最低限怒気を抑えつつ二人の後を追うのであった

「ここのデパートは15階まであって、ありとあらゆる国の商品があるんだ」

「理由はIS学園のありとあらゆる国籍の生徒達のため、だね」

「そゆこと。どうする？どこから見ていく？」

「うーん……別に買いたい物はないんだけど……」

チラッと亮の方を見て何か閃いた顔をする志乃

「私、服をみたいな」

志乃も女の子。どのような服が品揃えされているか気になるのだろう

「了解。服があるのは8階だな」

亮と志乃はエレベーターに乗って8階へと向かった

「ターゲットは服を見るため、8階へと移動した偵察部隊各員移動」

「「「了解」」」

もちろん、尾行している五人もすぐさま8階へと向かうのであった

「へぇ、こんな服もあるんだ」

8階の私服コーナーで物色する志乃

これって本当にデートみたいだな。前にも志乃と2人で出かけたことはあったけど今回はいつも以上に緊張しやがる

「ねえねえ、亮」

「ん？」

「これとこれ、どっちが好き？」

志乃がそう言って見せて来たのは二着の服。一つはお淑やかなイメージを感じさせる白のワンピース。もう片方は活発なイメージを感じさせるホットパンツが特徴的な服

「うーんと……ワンピースの方かな……？」

俺的に志乃はそっちの方がイメージに合っている

「ふふふ♪亮ならそっちを選ぶと思ったよ」

「はっ？それはどういう――――」

「とりあえず付いて来て」

俺は少し嫌な予感を感じながら志乃に付いていった

「偵察部隊。ターゲットは見つかったか？」

『こちらシャルロット。ターゲットは見つからないよ』

『私の方もだ』

『わたくしもですわ』

『アタシもよ。もう！何でこんなにも広いのよ、ここは！！』

ここのデパートは一階一階がかなり広い。そのため各自分かれて亮

たちを捜すことにしたのだが未だに見つからない

「亮とあの女は一体どこに行ったんだ……」

イヤホンを耳に付けながらそれに集中するラウラ。それは亮の服に付けられた盗聴器である。一体誰がそんなものを付けたのかはラウラにしかわからない

そんな盗聴器で何をしているのかは理解出来ているが、どこにいるかまではわからないラウラは焦りを感じさせる
そして、それは盗聴器に発せられた次の言葉により促進された

『聞こえるかな？亮のお友達さん』

「！！？？」

その声は完全に盗聴器から通った言葉でラウラは驚愕した

『悪いけどそろそろ退場してもらうね。ここからは大人の時間だから♪』

「なっ！？ま、待て！」

プツンと盗聴器からは何も聞こえなくなった。その瞬間、ラウラはＩＳのプライベート通信を使い、叫んだ

「偵察部隊各員に告ぐ！！我々の尾行がバレた！！！！」

『な、なんですって！？』

『ちょっと！どういうことよ？！』

「説明は後だ。私とシャルロットは一階の入口で待ち伏せする。他の3人は引き続き亮たちを捜索。もうここそこそ捜す必要はない。急いで亮と女を見つけるぞ！」

『『『了解』』』

五人はラウラの号令と同時に動き出した

デパートの入口

「どうだ、シャルロット。いたか？」

「ううん。見あたらないよ」

合流したラウラとシャルロットは入口の近くの物陰で待ち伏せている

「まさか盗聴器まで見破られるなんて志乃さんって本当に何者なんだろう……？」

「わからん。だが、千草は気を付けろと言っていた」

本当ならば千草もこの尾行に参加する筈であったのだが、どうしても外せない用事あるらしく不参加となったのだ

「そうだね。千草の分も僕たちも頑張らないと！」

「うむ！」

気合いを入れ直したラウラとシャルロット。だが、十分以上待ち伏せしても亮たちは現れない

「こちらラウラ。そっちはどうだ？」

『こちらセシリア。亮さんは見つかりませんわ』

『私もだ。もうこの階にはいないのではないのか？』

『そうかもね。アタシたちが尾行しているのがわかってんなら違う階で隠れているんじゃない？』

「では、箒は一階に移動して捜索。鈴は最上階から。セシリアはまた戻ってくる可能性があるから8階で待機だ。私たちはこのまま入口で待ち伏せする」

『わかった』

『了解しましたわ』
『オッケー』

「よし。私たちはこのまま待ち伏せするぞ」

「うん！」

三十分が経過する。しかし、亮たちを見つけることができない

「ぐっ……どうして見つからないのだ……」

「もしかするともうこのデパートにはいない可能性も……」

「そんな筈はない。私たちは迅速な対応した。見逃す筈もない」

「そうだけど……あっ！」

「どうした？見つけたのか？」

「そうじゃないけど、ほら、あの人」

「むっ？」

シャルロットが指さす場所には2人の女性

「右の人は格好良いし、左の人は可愛い服装をしているね。帽子も似合ってる」

「ふむ……私もあんな格好をすれば亮に可愛いと言われるのか？」

「！！　もちろんだよ！絶対に可愛いって言ってくれるよ！」

「そ、そうか……」

亮に可愛いと言われる所を想像したのか少し頬を赤らめるラウラ

「それじゃあ、今度服を買いに行こうよ！亮に可愛い言ってもらえる服をね！」

「あ、ああ……って！今はそういう話をしている場合ではない！集中しろ！」

「うん。でも、服を買いに行くのは約束だからね」

シャルロットの言葉に何も言わないラウラだが、こくりと頷いた

それを見たシャルロットは満足しながら捜索を続けるのであった

「さて、ここまでくればもう大丈夫かな？」

五人が必死になって捜している頃、亮と志乃は公園にいた

「なんか追っ手から逃げてる主人公みたいでドキドキするね」

「……」

この状況を楽しんでいる志乃はさすがと言えるだろう。でも亮は違った

「その服、とても似合っているよ亮」

「……嬉しくないから……」

亮は泣き崩れた。先ほどシャルロットが可愛いと言っていた帽子を地面に落とし、白いワンピースを着た亮が……

何故こうなっているのか、それは少し前に遡る

「さて、亮。今の話、聞いてたよね？」

「あ、ああ……」

ニコッと笑って右手に持っている盗聴器を握り潰す志乃

まさか盗聴器とは、一体いつ付けられたんだ？

「どうすんだ？俺の勘だと最低五人はいるぞ」

「亮のこういう時の勘は悪い意味で当たるからね」

志乃、『悪い意味で』ってどういうことなんだよ

「うーん……それじゃあ変装しよっか」

「変装？」

まあ、追っ手から逃げるのならそれが無難かもしれねえけど

「そんな道具持ってないぞ。買ってる余裕もなさそうだし」

「大丈夫。さっき、買ったから」

そう言って指差したのは俺が持っている紙袋。いや、これは志乃が買った私服が――――

「ま、まさか……」

俺は一つの最悪なことが頭に浮かぶ。志乃の顔を見てみるといつも通りの微笑み――――

「さあ、変装しよっか。女性ものの服で」

――――ではなかった。これは悪魔の微笑みだった

「せ、戦略的てっｔ――――」

「逃がさないよ、亮」

逃げようとした俺の腕を軍人顔負けの腕前で拘束する。だてに、ＩＳ学園を卒業してないってことなのか！？

「う、うわあああああああああああああああああああああっ！！？？」

それで、今に至る訳なのだが……まさか本当に誰にも気づかれないとは思わなかった……

「帽子で顔が見えなかったこともあるけど、亮のスタイルが良かったのもあるだろうね。私のサイズでもぴったりだったし、ちょっと妬いちゃうな」

「悪い、志乃。それはまったく嬉しくない」

俺からしたらとても恥ずかしい

「ふふふ。それじゃあ、次はどこに行こっか？」

「いや、待ってくれ。さすがにこの格好でこれ以上歩き回るのは拙い」

知り合いとかに気づかれたら――――

「あれっ！もしかして志乃ちゃんじゃない？」

いきなり背後から声をかけられて、身体をビクッと震わせてしまう。

志乃の知り合い！？

「……っ！」

俺は急いで帽子を深くかぶり志乃の背中に隠れる

「あら、あなたは香住智成さん」

「はい！覚えていてくれて嬉しいよ！」

（『クーン』！？）

俺は頭の中で思わずＰＣ名を呼んでしまう

この目の前にいる男の名前は『香住智成』。Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは『クーン』という名前だ

何でこんなときに、こいつが出てくんだ

「お友達と一緒にお出かけかな？」

「ええ。あなたは一人なんですか？」

「そうなんだよ！アルバイト休みだったから、しゃけちゃんとリアルで会う予定だったのに来なくて……」

要はすっぽかされたんだろ、可哀相な奴だ。とは言え、これは非常

に拙い事態だ

今は気づかれていなから良いが、もし気づかれたらＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄのみんなに言いふらされてしまうのは確実。それだけはなんとしても死守しねえと

「ここで会えたのも何かの縁だ。一緒にお茶でもどう？そちらのお友達も」

「うーん……どうしよっかな～？」

「……」

ダメだ、志乃。これ以上は勘弁してくれ！本当にバレちまう

「そちらのお友達さん。どうしたの？気分でも悪いのか……？」

ヤバい。注目がこっちに来やがった

「この子凄く人見知りなんです。だから気にしないで」

「へえ、そうなんだ。大丈夫、お兄さんは怖い人じゃないよ」

くっ……じわりじわりと近づいてくんな。逆に怖い

「智成さん止めてあげてください。怖がってます」

「おっと、ごめんごめん。可愛い女の子を見るとつい」

「もう。相変わらずですね」

ははははと笑い会う二人。こいつもどうやら俺が女の子と間違えているようだ。こいつがバカで助かる

「それじゃあ行こうか。あっちに良い店があるからさ」

「はい。行きましょう」

「えっ!?」

クーンの後に付いて行く志乃を見て思わず声を漏らしてしまう。俺は志乃に言いたいことがたくさんあったがクーンがいるから声が出せない

だから俺は仕方なく二人の後を追うのであった

「どうだい?なかなかいい店だろ?」

「そうですね。紅茶も美味しいし、店の雰囲気も良いですね」

「でしょう」

「智成さんがここで何人もの女性と喋っているのが頭に浮かびます」

「あ、あははは……一体何のことやら？」

クーンはここをよくデートする場所らしいな。だが、そんなことはどうでもいい

俺は早くこの場から逃げ去りたい気分だよ！

「そういえばまだお友達に自己紹介していなかったね。俺は香住智成。志乃ちゃんとはネットで知り合ったんだ」

知ってるよ

「君の名前はなんて言うんだい？」

「……」

やっぱり聞いてきたか……

どうする？名前を言わないとさすがに怪しまれる

「わ、私は……」（少し高めの声）

ど、どうしよう？咄嗟のことだから名前が思いつかない

「た、高橋亮子です」

ガチャンッ！！

「あっ、ごめんなさい」

いきなり志乃が手に持っていた紅茶を零してしまう

「だ、大丈夫かい志乃ちゃん？」

「え、ええ大丈夫……」

少し面食らった顔をしているクーン。俺もいきなりのことで驚いた。
志乃があんなミスをするなんて

「ごめんなさい。手を洗ってきます」

「！」

俺は見逃さなかった。志乃の肩が少し震わせていることに

どうやら『高橋亮子』というネーミングに不意を突かれ笑いそうに
なってしまったのだろう
俺のネーミングセンスが悪いことを思い知らされた

「ど、どうしたんだろうね？」

「さ、さあ……」

訳がわからず戸惑うクーンに俺はできる限りの高い声で答える

「まあ、志乃ちゃんのことは置いておくとして。亮子ちゃん」

「は、はい？　……どうして隣に？」

さっきまで志乃が座っていた席に座るクーン。その席は俺の隣だか
らバレちまう可能性が出てきた

「いやね、さっきから店内なのに帽子を取らない君がどうしても気になってね」

「わ、私これがないと緊張して上手く話せないの」

「大丈夫。話さなくても君の素顔が見れれば俺はとても嬉しいよ」

「あっ、や、止めてください……」

「良いじゃないか。恥ずかしがらずに」

帽子を無理矢理取ろうとするクーン。俺は必死に抵抗する

「ねえ、良いじゃん！良いじゃん！」

「……」

クーンが帽子に手を置いた瞬間、堪忍袋の緒が切れた

「止めろって言ってんだろうが！この色ボケスケベ大魔王があああああああああああああああっ！！！！！」

「ぐぼはっ！？」

俺は渾身の右拳をクーンの鳩尾へと入れた。ＩＳ学園で鍛えられた拳に耐えられる訳もなく、クーンはそのまま気を失った

「えっ？なに喧嘩？」

「どうやらあの彼氏が二股していたみたいよ」

「何それ！？」

「最低～！」

今ので回りの客が騒ぎ出す。志乃には悪いがもう限界だ。これ以上この姿を見られる訳には行かない

幸いにも服が置いてある。それをさっそうと持ち出して俺は店を飛び出した

「ごめんなさい、遅れて……あら？」

志乃が戻って目にしたのは倒れている智成と一枚の置き手紙

「『先に帰る。この埋め合わせはまた今度』か……」

亮の置き手紙を見て、ふぅと溜め息を漏らす志乃

「振られっちゃった……なんて――――」

「相席しても構わないか？」

「……ええ、構いませんよ。織斑先生」

ニコッと微笑みを向けたのは千冬だった

「ここは学園ではない。いつも通りで構わん」

「はい・・・・・・・・『どうしてここに？』って聞く必要はありませんね」

「どうしてお前は嘘を言った」

「嘘？ああ、メールのことですね。ダメですよ織斑先生。生徒のメールを勝手に見るだけではなく、盗聴器を仕掛けるなんて」

「ふん。偶然だ。偶然、亮のメールを見てしまい、偶然、亮の服に

盗聴器を入れてしまっただけだ」

「ふふふ。そういうことにしておきましょう」

「それで、質問の答えを聞かせてもらおうか」

千冬の目がいっそう鋭くなる

「深い理由はありませんよ。ただ亮と一緒に居たかった。ただそれだけです」

「……」

「そんなに睨まないでください。本当にそれだけなんです」

志乃は立ち上がると、千冬の前に一つの封筒を置く

「これは？」

「ちょっとしたお詫びです。きっと喜んでもらえると思います」

そう言って志乃は店の外へと足を進める

「そう……これからはそんなことできないのだから……」

「……」

志乃の呟きに千冬はただ黙ってその背中を見つめることしかできなかった

～～～おまけ～～～

「そういえば、あいつは何を渡したんだ……？」

千冬は志乃が置いて行った『喜んでもらえる物』を見ることにした

「写真のようだが、一体何が……！？こ、これは……っ！？」

封筒の中身は写真らしく、写真を見た瞬間、千冬は思わず噴き出してしまう

「これは女装した亮の写真……」

それだけではなく、その亮が着替えている写真もあった

「ま、まあ……今回は多めに見てやろう」

そう言いながら千冬は写真を仕舞い、店を出た

気絶した智成をほっといて

「久しぶりの……出番だったのに……こんな扱いかよ……！！」

智成の叫びはむなしく響き渡った

５００万ＰＶ突破記念『亮と志乃のお忍びデート？』（後書き）

皆さん、いかがでしたでしょうか？

デートシーンが少なすぎたかもしれません

そこは本当に申し訳ありません

志乃のちょっとしたフラグみたいのも立ってしまいましたし、これからさらに頑張らないといけないなと思いました

また、更新が遅れてしまうと思いますが温かい目で見守っていただけたら幸いです

それでは、この辺で。見てくれて本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0783s/

ＩＳ//Ｇ．Ｕ．

2011年11月27日06時41分発行